

幻想奇譚東方蟲師

柊 弥生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三千世界を照らし出す人工の光が埋め尽くす現代。いつからか、闇を畏れなくなった人類の前から、ひっそりと姿をくらましたモノたちがいる。忘れ去られし彼らはどこに行くのか。忘却の果てに、行き着いたのは約束の地。

章ごとに一応完結した内容をお届けしております。続けて読むもよし、章ごとで切ってもよしです。

どうぞお暇なときに、気の向くままに、東方蟲師の世界をお楽しみください。

※注意※

東方蟲師『外譚ノ章』は本編をお読みになったことが前提のお話です。そのままでも読めないことはありませんが、本編をお読みになったからの方が一層楽しめるかと思えます。是非、本編から外譚と読み進めてください。もちろん「外譚を読まなければ面白くない」ような作品の作り方はしておりませんので、興味がない方はスルーしていただいてもなんら不都合はございません。本編を読み終えた空白の時間に、ひっそりとお楽しみください。

目次

序章	1
第一章 骨滲む泉	
第一章 骨滲む泉 壹	6
第一章 骨滲む泉 貳	10
第一章 骨滲む泉 参	14
第一章 骨滲む泉 肆	19
第一章 骨滲む泉 伍	29
第一章 骨滲む泉 陸	35
第一章 骨滲む泉 漆	40
第一章 骨滲む泉 捌	45
第一章 骨滲む泉 玖	52
第一章 骨滲む泉 拾《了》	57
第二章 筍の葉	
第二章 筍の葉 壹	67
第二章 筍の葉 貳	72
第二章 筍の葉 参	80
第二章 筍の葉 肆	85
第二章 筍の葉 伍	91
第二章 筍の葉 陸	101
第二章 筍の葉 漆	107
第二章 筍の葉 捌	114
第二章 筍の葉 玖《了》	122
第三章 偽主になる	

第三章 偽主になる 壹

第三章 偽主になる 貳

第三章 偽主になる 参

第三章 偽主になる 肆

第三章 偽主になる 伍

第三章 偽主になる 陸

第三章 偽主になる 漆《了》

第四章 火の目を掴む

第四章 火の目を掴む 壹

第四章 火の目を掴む 貳

第四章 火の目を掴む 参

第四章 火の目を掴む 肆

第四章 火の目を掴む 伍

第四章 火の目を掴む 陸

第四章 火の目を掴む 漆

第四章 火の目を掴む 捌

第四章 火の目を掴む 玖《了》

第五章 恋し糸愛し夢

第五章 恋し糸愛し夢 壹

第五章 恋し糸愛し夢 貳

第五章 恋し糸愛し夢 参

第五章 恋し糸愛し夢 肆

第五章 恋し糸愛し夢 伍

第五章 恋し糸愛し夢 陸

第五章 恋し糸愛し夢 漆

第五章 恋し糸愛し夢 捌

第五章 恋し糸愛し夢 玖《了》

第六章 雨のたつ巳

第六章 雨のたつ巳 壹

第六章 雨のたつ巳 貳

第六章 雨のたつ巳 参

第六章 雨のたつ巳 肆

第六章 雨のたつ巳 伍

第六章 雨のたつ巳 陸

第六章 雨のたつ巳 漆

第六章 雨のたつ巳 捌

第六章 雨のたつ巳 玖《了》

第七章 迷い繰る日

第七章 迷い繰る日 壹

第七章 迷い繰る日 貳

第七章 迷い繰る日 参

第七章 迷い繰る日 肆

第七章 迷い繰る日 伍

第七章 迷い繰る日 陸

第七章 迷い繰る日 漆

第七章 迷い繰る日 捌

第七章 迷い繰る日 玖

第七章 迷い繰る日 拾

第七章 迷い繰る日 拾壹《了》

第八章 ふきだまる沼

第八章	ふきだまる沼	壱	481
第八章	ふきだまる沼	弐	489
第八章	ふきだまる沼	参	498
第八章	ふきだまる沼	肆	509
第八章	ふきだまる沼	伍	520
第八章	ふきだまる沼	陸	530
第八章	ふきだまる沼	漆	542
第八章	ふきだまる沼	捌	550
第八章	ふきだまる沼	玖	562
第八章	ふきだまる沼	拾	576
《了》			
東方蟲師『外譚ノ章』			
言海の代	(第二章後幕間)		603
魔女の糸	(第一章後幕間)		618
いざよい時雨	(第四章後幕間)		634

序章

現代において、怪奇心霊の一切合財を内包する土地がある。

外界とは隔絶された陸の孤島。石と鉄で出来た人類の支配領域を解脱し、流れ着くのは異形の者たち。超能力者、魔法使いといった人類のはみ出し者に始まり、人ならざる妖怪、霊魂といった怪異、さらには古く、神と呼ばれた神霊をもが混在する場所。極めて稀で、極めて混沌たる世界の最果て。

過去も未来も纏めて絡めて、忘却せしめる時代の極点を、誰が呼んだか故郷よ。

幻想郷。幻想が還り着くその場所を、誰かが初めてそう呼んだ。

ここは幻想郷。現代から忘れ去られた有象無象が辿り着く終着駅。自然と怪奇の流れ島に、大きな大きな森がある。緑が深く、濃厚な命の息吹が根付く樹海とも呼べるそこは、少し前までは当たり前であった原初の風景で、畏敬の念を禁じ得ない自然そのものだ。

その森の中を歩き回る一人の影があった。

「まだくらキノコは、毒まみれ〜」

奇妙な歌詞の旋律を口ずさみながら、白黒の衣装に身を包んだ少女が地面から突き出た木の根の上を飛び跳ねるように移動していた。

地面は起伏が激しく、なおかつ薄らと生えた苔が湿った土と合わさって、ただ立っているだけでも転んでしまうような道無き道を、事もな気に進んで行く。森を歩き慣れているのだろう。少女の足取りは、まるで羽でも生えているように軽快だった。

「おっ？」

唐突な疑問符を浮かべ、少女が立ち止まる。視線の先には木の根元に体を預けて座り、眠っているような様子の男がいた。

「めずらしいな。自殺するのにわざわざここを選ぶなんて」

少女がいるここは幻想郷内でも屈指の危険地帯で、およそ普通の人間が立ち入る場所ではない。男の雰囲気は妙だったが、どうやら人間のようなだった。

少女はつばの広い三角帽子を軽く持ち上げ、その影の奥にある瞳を光らせた。その妖しい光は金色の猫目石のごとく、この少女もまた、普通の人間ではない事を物語っている。

男の前にしやがみ込み、少女は生きているのか死んでいるのかわからないそれに語りかける。

「自殺なら別のところにしとけよ。ここは一思いに殺してくれるやつなんて滅多にいないぞ。飢えて死ぬか、飢えのあまりその辺に生えるもん食べて腹壊して死ぬかだ。かなり辛いぞ。おーい、聞いているのかー？」

少女の声に、男は反応しない。既に死んでいるのか。どうしたものかと少女は首をひねる。

男の容姿は独特だった。月明かりを思わせる白銀の髪に、土色のコートを羽織り、子供一人分くらい入りそうな大きさの木箱を傍らに備えていた。ちょうど少女が背負う籠と同じくらいの大きさだ。

少女は男の傍らにある木箱に興味を移した。自殺を選ぶなら、この所持品は妙だ。そう思い、ちよつとした好奇心から木箱に手を伸ばした。

「……悪いね。それは商売道具だ。触らんでもらえるか」

「おお。生きてたのか」

突然声を発した男に驚いて、少女は手を引っ込めた。どうやら本当に寝ていただけのようだ。

モゾモゾと動き出した男は一つ大きなあくびをして、薄らとその目を開いた。少女と、目が合った。

「……妙な格好のお嬢さんだな。髪の色も普通じゃない」

「そういうあんただって奇天烈な見た目してるくせに。どんだけ苦勞したのか知らないけど、若白髪にもほどがあるぜ」

「たしかに、見た目に關しては人の事を言えた義理じゃないな」

長く降ろされた白い髪は男の左目を隠し、虚ろな右目は森の緑を垂らしたような新緑に染まっている。異質異形の類を見慣れていた少女にとっても、男の見た目はまさしく異様に分類されるものだった。

少女は怪訝な表情を浮かべて男を見やる。興味本位な好奇心で声

をかけたが、いま心にあるのは警戒の色だ。ゆったりとした語り口調だが、どこか芯がある力強さが、その男から感じられる。自殺者とは思えない。

「こんなところで何やってんだ。昼寝するにも、もう少しいい場所があるだろう」

「まあ話すと長くなるんだが……」

「長くなるなら別にいいや。じゃあな」

「おい、ちよつと待ってくれ」

何をしているのかは知らないが、触らぬ神に祟りなし。そういう気持ちで少女がその場を離れようとした時、男は腰を浮かし、少女を呼び止めた。

「なんだよ」

「見た所お嬢さんは、この森を歩き慣れているようだが、近くに住んでいるのか?」

「そうだけど」

「ここがどこなのか教えて欲しい。この森を歩くのは初めてで、土地勘が狂っちゃったんだ」

「ここは幻想郷、魔法の森だ」

「幻想郷? マホウの森……?」

少女が放つ言葉に、男は眉を寄せる。納得がいかないと顔に書いてあった。そしてその様子を見て、少女は合点がいったように警戒を解いた。

「そうだけ。ってか、その様子だとお兄さんは外からの人か」

「外からの人ってのは、どういう意味だい」

男からの問いかけに、少女は頭上を見上げた。つられて男も頭上を見上げる。緑の天井の所々に穴が空いていて、陽光がわずかに降り注いでいた。

「そのままの意味だけ。ここは幻想郷。信じられないかもしれないが、お兄さんは結界で断絶された異世界に迷い込んだってことになる」

「……へえ。そいつは悪い冗談だ」

天を仰ぎながら、男はため息を吐くように呟いた。少女はというと、男の冷静な態度に少し驚いた。

「意外と驚かないんだな」

「仕事柄、慣れてるもんでね」

「ふうん。まあいいや。外からの人なら話が早い。ついてきなよ、元の世界に帰れる場所に連れてってやる」

「ずいぶん手際がいいんだな」

「たまにいるんだよ。お兄さんみたいな人」

少女は両手を肩のあたりで上に向けて、首をすくめるように肩を揺らす。その一動作を挟んだ後、軽快な動きで地面からアーチ状に突き出した木の根の上に飛び乗った。そして身振りだけで、男に立ち上がるよう促した。

少女の言葉に、男は従うようで、地面に安置してあった木箱を背負い、移動の体勢をとった。

男の身長は高い。普通なら、少女は男の顔を見上げる形になっていただろう。

「おお。お兄さんでかいな。こーりんくらいあるんじゃないか」

「そりやどうも。そういえば、自己紹介がまだだったな」

木の根による助けもあって、少女と男の身長は大体同じくらいになっっている。自然と合わさる目線のままに、男は自ら名を名乗った。

「蟲師のギンコという。お嬢さんは？」

「魔理沙。霧雨魔理沙だぜ」

「……日本人なのか？」

「こだわるところか？ それ」

「いや、そうだな」

「じゃあさっさと行こうぜ」

白銀の髪に翡翠の目を持つ男の名はギンコ。幻想郷に突如現れた、蟲師と呼ばれる識者。彼が何者で、何のためにここにきて、そしてこれからなにが起こるのかは、まだ誰も知らない未来の話。

人類繁栄の光は眩しく、三千世界を照らし出すがごとき人工の輝きは、一方で日陰の闇を濃くする側面を持ち合わせている。光の代償に

作り出される闇は、もうすぐそこに、迫っていた。

「あ、そこ滑りやすいぞ」

「なに？ うおっ」

「日陰だし、湿度高いからな。苔が群生してるんだよ」

「……気をつけよう」

陰を蠢く異形の者たち。目には見えない異質なモノたち。

歩く二人の足元には、濃い、闇が広がっている。

「つてかお兄さん。ムシシつてなんだ？」

「ん？ 話すと長くなるが……」

「ならいいや」

「……そうかい」

——およそ遠しとされしモノ。下等で奇怪。見慣れた動植物たちとはまるで違うと思しきモノたち。それら異形の一群を、人は古くから畏れを含み、いつしか総じて、蟲と呼んだ。

第一章 骨滲む泉

第一章 骨滲む泉 壺

魔理沙と連れ立って歩くこと数十分。二人は森を抜け、日差しの元に這い出してきた。

「やれやれ、やっと出たか」

薄暗い森から、一転してまばゆい光の世界へ。手で庇ひさしを作るようにして、ギンコは少し遠くの景色を見た。

太陽は高く昇り、地平では陽炎かげろうが揺らめいている。かなりの気温だ。背負った桐箱きりばこを一旦地面に下ろし、ギンコは土色のコートを脱いだ。

「こつちだぜ、お兄さん」

早くも額に浮かぶ汗を手の甲で拭って、声のした方を見ると、白と黒で着飾った金髪の少女が立っているのが見える。ツバの広い帽子は少女の小さな体に大きな影を落とし、こう日差しの強い日なら便利そうだなと、ギンコは思った。

脱いだコートを小脇に抱えて、桐箱を背負い直す。少し開いた魔理沙との距離を詰めるように、歩幅を大きくとった。

鬱蒼うつそうとした森の道から比べれば、断然歩きやすい道を、魔理沙の後について、ギンコは歩いた。森の中では聞こえなかった、蟬のような声がある。寄せては返すその声に、気を留めないよう黙々と歩を進めた。

ざりざりと、土を踏みしめる。遠くに見える緑と、澄んだ空気の匂い。多く土地を渡り歩いてきたギンコだったが、初めて見る土地だった。

魔理沙の話を鵜呑みにするならば、ここはギンコが元いた世界とは違う世界なのだという。詳しくは聞いていないが、なんでも博麗大結界と呼ばれる不可視の境界で隔絶された陸の孤島だとか。笑えない冗談だ。

しかし、今までも異界と呼べる領域に足を踏み入れたことのあるギ

ンコは、そういう話もないことはないかと自分を納得させた。

とりあえず、元の世界へと戻れる場所を知っているらしい魔理沙に同行することにしたが、そもそもなぜこの土地に至ったのか、ギンコは思い出せなかった。化かされているのか、はたまた、夢でも見ているのか。今はまだ判別が付きそうもない。

「なあお兄さん」

延々と土を踏む音だけがしていた二人の間に、先に言葉を投げ入れたのは魔理沙だった。なんだ、とギンコが言葉を返す。

「お兄さんは、どこから来たんだ？」

「どこからと言われてもな」

そう言われてギンコは、自分がここに至った経緯を思い返した。

ギンコは当てもなく各地を回り、とにかく一つ所に留まらないようにして生きている。東から西へ、北から南へ。一つ意識していることと言えば、冬はあまり北陸方面に近寄らないということであるが、これも夏の時分である今は関係ないことであった。

たまにウ口繭まゆに送られてくる手紙に従って蟲患むしわざらいを治しに行く以外、ギンコの目的地は定まらない。今回も目的地を定めずただ森の中を歩いていると……と、そこまで考えて、ギンコの思考は行き止まる。

思い出せない。なぜここに来たのか。奇妙なことに、思い出せなかったのだ。

気づいたらあの森を歩いていた。違和感を覚えた頃にはどっぴりとこの世界に、体ごと浸かっていたのだ。蟲の影響なのか？ 自分の記憶が曖昧で、霧もやがかかっていることに、ギンコは不信感を持った。

「(どういふことかねえ……)」

「お兄さん？」

声の方を向けば、少し前を歩いていた魔理沙がいつの間にかギンコの隣にいた。帽子のツバを持ち上げて、ギンコを見上げている。

「聞いちゃまずかったか？」

「いや、大丈夫だ」

何うように聞いてきた魔理沙を見て、そこでギンコは一旦思考を打ち切った。改めて、自分がどこから来たのか考える。直前の記憶はな

いが、それより少し前なら思い出すことができた。

「そうだな……強いて言うなら、西からか。夜に追われていてな。東を目指していたんだ」

「夜に追われていた？ 面白い表現だな。暗い所が怖いのか？」

「そういうわけじゃないが……とにかく、夜から逃げていたことしか思い出せない」

夜から逃げていた。夜に追われていた。ギンコが覚えていたのは、それがすべてだった。自分でも、よくわからないことを言っているのは十分理解していた。だが今は、それ以上のことは言えなかった。

前に向き直り、魔理沙が相槌を打つ。記憶喪失自体は、外から紛れ込めば不思議なことじゃない。だが立ち振る舞いと雰囲気から、奇妙な男だと、魔理沙は思っていた。

「夜から逃げる前は何をしていたんだ？」

「俺は、一つ所に留まればよくないものを寄せる体質でね。ずっと旅をしていた。今もそうだな」

「よくないものを寄せるつてのがわからないけど……旅か。いいな。何か話してくれよ」

「ま、かまわんが。何を話そうか……」

歩を止めることなく、ギンコは語り出す。人里へと続く土の道なりで、ギンコの語りが、どこからか聞こえてくる蝉のような声に溶けていく。話そうとして、長話なら結構と断られたことを、ギンコは忘れていなかったが、今度は興味深く耳を傾けてくる猫のような気性の少女に、言っても通じぬだろうと思った。

蝉のような声がする。ギンコの耳元で鳴り響く。魔理沙には、その声が聞こえていないようだった。

「じゃあ……蟲の話しようか」

「むし？ 珍しいのか？」

「ああ、どこにでもいる、普通の隣人たちの話だ」

「なんだそれ」

「ま、そう言うな。そうだな、冬に鳴く蝉の話なんてどうだ」

「なんだそれ！」

辺りに漂う不可視のモノたち。ただの人には、見えぬ聞こえぬ触れられぬ。そんな珍しい、普通の隣人の話を、ギンコは魔理沙に語ってみせた。

第一章 骨滲む泉 弐

しばらく歩くと、畑に引く水路なのか、小さな川に差し掛かった。川に渡されているのは橋と呼ぶには少し頼りない、板きれが一枚あるだけで、踏み抜きはしないだろうか、ギンコは思った。

「なあお兄さん、少し休まないか」
「賛成だ」

魔理沙とギンコは背負っているものを下ろしながら、川の増水を考えて掘り下げられた縁の斜面に近づくと、そこにある緑の絨毯に腰を下ろした。相変わらず日は高く輝いているが、川のそばには涼やかな風が吹き、小川の水音がそれを助長して、束の間の休息を演出している。

一跨ぎで渡れそうな川に限界まで近づいて、魔理沙はいつのまに脱いだのか、白い素足を投げ出した。落ち着きのない子供のように、川の水を両足でかき回している。

「お兄さんもどうだい？」

「いいな。ご一緒にさせてもらおう」

「おうおう」

革靴を脱いで足首の裾をまくりあげ、ギンコも足を川に浸した。冷たい静かな流れだ。足の指の間を、水流が潜って行く度に、妙なこそばゆさを感じる。ギンコがちらりと右を見れば、魔理沙は帽子のなかから水筒を取り出し、川の水を汲み始めたところだった。

「生水は、あまりよくないぞ」

「へーきへーき。お、山椒魚じゃないか」

帽子の中に竹筒をしまい、魔理沙が川の縁に張り付いていた山椒魚をつまみ上げる。指の間でうごうごとと暴れていたそれも、手の甲に下ろしてやれば自然と大人しくなった。

太陽光を反射する照りのある表皮。ぶよぶよとした弾力のある体。赤錆びた色のそいつは、魔理沙に指で小突かれながら、じっとギンコを見つめていた。

相対する両者の目。片や翡翠、片や黒真珠のごとき視線の交錯。ど

ちらにも、異質なモノを感じ取る力がある。そしてどちらとも、異質なモノに相違なかった。

「へえ。珍しいもんだ」

「ん？ 山椒魚見たことないのか？ この辺りになら結構いると思うけど」

「いや、そうじゃなく。その山椒魚、蟲に寄生されているぞ」

「うへえ!？」

「あ」

素つ頓狂な声をあげて、魔理沙は山椒魚を放り出した。細く小さく、水の跳ねる音がして、水面の波紋が消え去る前に、山椒魚はどこかに姿をくらました。

さつきまで山椒魚を乗せて弄んでいた手の甲を川の水で洗いながら、魔理沙はギンコに文句を言った。

「蟲ついてたんなら教えるよーったくもー」

「そいつは悪かったな」

じゃぶじゃぶと芋でも洗うように、魔理沙は川の水をかき回す。その様子を見ながら、ギンコは傍らにおいた土色のコートのポケットから、煙草を取り出した。次いで桐箱の扉を開けて、無数にある引き出しの一つに手をかけて、中から虫眼鏡を取り出した。

「しきりに手を洗っているが、蟲といつても害はないものだぞ」

「あんたがさつき話してた連中だろ？ 不思議で妙な生き物だ。私の手には負えないだろうから、あんまり関わりたくないんだよ」

「殊勝だな。そうだ、あまり積極的に関わるものじゃない」

魔理沙は洗い終わった手ごと上半身を緑の絨毯に投げ出して、また足を川に浸けた。仰向けで寝転んでいる。

蟲たちに畏敬の念を払うことは、とても重要なことだ。その心構えひとつで、彼らとの関係性は大きく変化する。ギンコの話から、魔理沙が少しでもそのことを感じ取ってくれたのだとすれば、ギンコも話した甲斐があったというものだった。

虫眼鏡で光を集めて、煙草に火をつける。集められた光が煙草の先を目映く照らし、細く長い煙が立ち上がる。ふわふわと、生き物のよ

うにいて、空へ昇って消えていく。魔理沙はその様子をちらりと、横目で盗み見していた。

「あんた、煙草吸うのか」

「ああ、こいつは蟲除けの煙草でね。俺には、必要不可欠なものだ」
「へえ、蟲除けね。ちよつと吸わせてくれよ」

煙を吸って吐き出すギンコに、体を起こした魔理沙が四つん這いで近づいていく。

「かまわんが、美味しいものじゃないぞ」

そう言つてギンコは新しい蟲煙草を取り出そうとする。しかしその動きを魔理沙が制した。

「その口に咥えてるのでいいよ。新しいのもつたいないだろ」

「……お前さんがいいなら、構わんが」

「おう。ばつちこい」

ギンコは加えていた煙草を魔理沙に差し出す。ギンコの隣に腰を下ろし、煙草を受け取った魔理沙は、それを咥え、勢いよく煙を吸い込んだ。

「おい、そんなに吸い込んだら……」

ギンコの言葉は、ほんの一瞬遅れた。

「……づえ！ づえほつ、げはつ」

「あ」

盛大にむせる。腹に重い衝撃でもくらったかのように背中を丸め、連続的に咳を繰り返す。そしてあるうことか、手に持っていた煙草も川に落としてしまった。結局一本無駄になったな、と考えながら、咳き込む魔理沙の背中を、ギンコは優しく撫でさすった。

「だから言つたら」

「お、おう。思つたより強烈だったぜ……」

しばらく深呼吸して落ち着いたのか、魔理沙は意図せず目尻に溜まった雫を指で拭うと、すわと立ち上がった。

「ええい、仕切り直しだ！ そろそろ行こうぜ」

「へいへい」

「あ、なにか拭くもの持つてないか？ 足がびちよびちよだ」

「……手ぬぐいならあるが」

「あんがと」

ギンコから手ぬぐいを受け取った魔理沙は自分の両足についた水滴を拭っていく。拭くものも無いのに一番に水の中に足をつけた行動といい、煙草の件といい、おてんばで厄介な少女だと、ギンコは思った。

彼女に道案内を任せていて大丈夫なのだろうか。少し不安になってきたギンコは目的地について尋ねた。

「そういえば、今はどこに向かっているんだ」

「ん？ 人里だぜ。方角は東ってところか。んで、そのさらに東にある博麗神社ってところに行けば、お兄さんは元の世界に帰られるぜ、多分」
語尾に付け足された多分という言葉から一抹の不安を感じたギンコであったが、そこはぐっと飲み込んで、次の疑問を投げかけた。

「博麗神社ね……そこは遠いのか？」

「いいや？ 飛べば数十分で着くから……あれ？ 歩いたらどれくらいかかるんだろう。わからねえや」

魔理沙は歯を見せて笑っている。悪気は無いのだろう。ただ今は、その純真な笑顔が何かの慰めになることはなかった。自分の足を魔理沙から返してもらった手ぬぐいで拭きながら、飛べばってどういうことだ、飛べばって、とギンコは内心思っていた。

靴を履き直し、籠を背負い直した魔理沙は一足先に板の橋へと歩いて行った。

「おーい、はやくしろよー」

「まったく……自由なお嬢さんだ」

魔理沙の声が遠くから聞こえる。ギンコも靴を履き直し、緑の斜面を登って橋の方へと歩いて行った。その後ろ姿を、山椒魚だけが見送っていた。

第一章 骨滲む泉 参

「着いたぜ。ここが里だ」
「ほう」

魔理沙とギンコは人里に足を踏み入れた。土の壁に草の屋根、紙の扉で作られた家屋が立ち並び、いかにも集落然とした場所が、二人を歓迎していた。

道中と変わらない歩調で、家並みの中央に伸びる土の道を歩く。太陽には薄く雲がかかり、幾分か過ごし易くなっていた。ギンコの反応をうかがうように、魔理沙が尋ねる。

「別に目新しいものでも無いか？」
「そうだな。むしろ懐かしさを覚えるくらいだ」

ギンコの変哲もない返答に、魔理沙は自身の記憶を掘り返して、納得のいかない表情を浮かべた。顎あごに手を当てて、むむと唸っている。

「ふーん。外の話は結構聞いてたけど、あれは案外嘘だったのかな」
「なんて聞いてたんだ？」

「えーと、石と鉄で出来た建物がいっぱいあって、離れた相手にも思考が伝わるアイテムとか、光を閉じ込めておいて鑑賞する箱だとか、鉄でできた鳥とか牛が荷物を運ぶため東奔西走する世界だって」

「……そりやすげえな」
「だよなーと魔理沙は両手を広げて、鳥の真似でもするようにギンコの周りを回り歩いた。

魔理沙の語る外の世界の話は、ギンコには到底理解の及ばぬものであった。ギンコの知る世界は、あくまで自然という枠の中に、人間が納まっている世界だ。鉄でできた鳥や牛なんて、出会っただけで卒倒ものである。襲われればひとたまりもないだろう。だがギンコの知識で、なんとか再現できそうなことも幾つかあった。

「離れた相手と意思疎通を図るのは、案外、できることかもしれないぞ」
「え？ ほんとに？」

止められないのいいことに、ギンコの周りを回り続けていた魔理沙はその言葉に反応し、ギンコの前で立ち止まった。魔理沙は瞳を輝

かせて迫り、言外にギンコの話促した。ギンコはそんながつつく姿勢の魔理沙から半歩引いて横を向く。顔を覗き込まれるのは慣れていなかった。

「ああ。舟少かいろぎという蟲がいてな。そいつに寄生されると、宿主は水脈みおを通して、他人に想いを伝えることができるようになる」

「へえー。便利じゃないか」

「そうでもない。舟少を使いすぎると、意識が体から離れて、いつか二度と戻れなくなる。水脈はヒトとヒトとを結ぶ無数の意識の交差点だ。舟少に引つ張られて、意識は水脈を迷いに迷い、元の体を見失う。そして廃人になってしまおう、と言われてるな」

ギンコの語り口調は淡々としていて、独特の抑揚があった。期待に胸を膨らませていた魔理沙は、ギンコの話聞いた途端に苦笑いを浮かべ、若干前のめりにしていた体を戻し、肩を落とした。

「急に怖いこと言うなよ。副作用が怖すぎて使えないだろ」

「すまん。文句なら、舟少に言ってくれ」

それに、蟲は使うものでも、使われるものでもないさと、ギンコは付け足した。

その後も変わらず、二人は並んで里を歩いた。しかし、里の様子はどうも奇妙で、その様子を先におかしいと思ったのは、ギンコの方だった。

「なあ魔理沙さんよ」

「うひゃ。さん付けで呼ばれるところばゆいな。魔理沙でいいよ。なんだ?」

「じゃあ魔理沙。里の様子は、いつもと変わらないか?」

ギンコは唐突にそんなことを訪ねた。

「里の様子? そういえば確かに妙ではあるけれど……人があんまりいないような気がする」

ギンコの唐突な問いに魔理沙は答える。問われて初めて、違和感を持った魔理沙であったようだが、考え始めるより先に、ギンコは動き始めていた。

「人が少ない……か、よし」

「あ、ちよつと」

手近な民家へと歩み寄り、門戸を叩く。後に続いて魔理沙もやってくるが、ギンコがなぜそのような行動に出たのかは、魔理沙にはわからなかった。

再度民家の戸を叩く。どんどん、がたがた。ギンコが叩くに合わせ、敷居と引き戸の小さな隙間で音がなる。

「おい。急にどうしたってんだよ」

「なに、少し、気になることがあってね」

不安げな視線でギンコを見上げる魔理沙が、ギンコの服の裾を引つ張った。魔理沙の方を一瞬だけ振り返ったギンコだったが、すぐに木の引き戸に視線を戻した。

二度戸を叩いてからしばらく。もう一度ギンコが戸を叩こうと手を伸ばすと、控えめな物音が、扉の向こうから聞こえてきた。中に人がいるとわかったギンコは、その物音に言葉を滑り込ませた。

「もし。旅の者だが、ここいらで妙なことは起きてないかね。もし起きているなら、力になれるかもしれん。ぜひ、話を聞かせて欲しいんだが」

「おい。なに言いだすんだよ。私にもわかるように……」

理解の追いつかない魔理沙の言葉を遮るように、木の引き戸が控えめに開かれる。隙間から顔をのぞかせたのは、ギンコと同じくらいの背丈の中年の男だった。目つきは鋭く、ギンコを睨みつけている。暗がりからこちらを見ている目というのはなんとも言い難い恐れを纏っていて、目こそ合わせなかったものの、そばで見えていた魔理沙は身震いした。

暗がりの眼球が動いて、ギンコを観察する。上から下まで一頻り見終わったのか、目の持ち主が口を開いた。

「……旅の者とか言ったな。もしかして、あんたが病やまを持ち込んだんじゃないだろうな」

「病？ どういう意味だ」

「悪いが、何も話すことはない。もし今の里を知りたいなら、寺子屋にも行くといい。そして、二度とこの家に近づくな」

「あ、おい」

ギンコの行動を遮るように、勢いよく引き戸がしまった。その有無を言わずとといった雰囲気に、ギンコと魔理沙は面をくらった。お互い顔を見合わせ、とりあえず、民家から離れることにした。

「……ここを訪れる者には、いつもあんな調子なのか？」

歩き疲れた二人は甘味処かんみどころの軒先のきききに置いてある木の椅子に腰掛け、休憩しつつ今までのことを思い出していた。それぞれの足元には、背負っていた籠かごと桐箱がある。

ギンコが魔理沙に問う。魔理沙も考えているようで、首をひねっては唸りを上げていた。

あれから何軒か家屋を転々と尋ねてみたが、皆一様に戸を閉ざし、話し合いに応じぬ者がほとんどだった。異常なまでの排他的雰囲気。ひとつ気になった情報は、病。里では今、ある病が流行っているらしい。だがにべもなく、その内情までは、誰も話そうとはしなかった。

ギンコの問いに、魔理沙が絞り出すように答えた。

「いや……そんなことはないんだけど」

「……前に、ここを訪れたのは、いつだ」

「十日前くらいかな。正確なところは覚えてないぜ」

「そうか……」

「……一体何が起きているんだぜ」

突き抜ける青を広げた今日の快晴はいつの間にか雲がかかり、曇りとは行かないまでも、里には大きな影がかかっていた。魔理沙は先ほど見た住人の異常な排他的雰囲気を思い出し、やはり納得がいかないと首をひねり、帽子を取って頭をかきむしった。

「あーもうなんで何もしてないのにこんなモヤモヤした気分にならんくちやならないんだぜ！」

「イラついていても仕方がない。とりあえず、寺子屋に行ってみるか」
「おうー」

気合を入れた雄叫びをあげ、魔理沙は椅子から飛び上がった。彼女の苛立ちは、理不尽な怒りや恐れの矛先を自分に向けられたことによ

るものだろう。意味もなく拳や蹴りを放ち、たまったものを発散していた。

魔理沙とは対照的に、ゆっくりとした動作で、ギンコも立ち上がる。だが魔理沙とは違い、ギンコはすでにおおよその見当をつけていた。里で何が起こっているのかも、その原因も。

背負い直した桐箱が音を立てる。ギンコの思いに応えるよう、彼の商売道具も、その出番を待っていた。

第一章 骨滲む泉 肆

少ない情報の中から、寺子屋に行けという情報を頼りに、二人は一路、寺子屋を目指した。

「なぜ寺子屋なんだろうな」

「俺に聞かれても困る」

しばらく歩くと、すぐに目的の場所が見えてきた。質素な門構えをした、学問の場所。門をくぐると、まず一面広く均なされた土の空間に出る。いつも子供たちが走り回っているのか、小さな足跡が見てとれた。

門から奥に進むと、木造平屋の建物に行き当たる。

「寺子屋……ここか」

「ああ」

雲に隠れているとはいえ、未だ日の高く昇る午後時刻だ。この時間なら、子供達の元気な声が建物から漏れていても不思議ではない。だが、そのようなことは一切なく、不気味なまでの静けさが、辺りを包んでいた。

今度はギンコが動くより早く、魔理沙が寺子屋の戸を叩いた。

「けーねー。いるかー?」

がながんと遠慮なく戸を叩く。しばらくして返事がないと、入るぞーと言いながら戸を開け放った。戸はすんなりと開き、中の様子がかげえる。小さな下駄箱には幾つもの靴……全てで十足くらいだろうか……が納められ、それ相応の人数がこの建物内に入ることがわかった。

魔理沙が敷居を跨ぐまたと同時に、奥の方から足音が聞こえてきた。

「……魔理沙か」

「おう。元気にしてたか?」

親しげに挨拶を交わす二人を、ギンコは敷居の外から眺めていた。奥から出てきた女性は割烹着かっぱうぎを着用し、長い髪を頭の高いところまで一つに束ねていた。若い女性のようだ。料理の最中だったのだろうか。それにしても表情が暗い。魔理沙にしてもその様子には気づい

ているようで、けーねと呼んだ彼女を心配した。

「元氣そうでもないな。大丈夫か？」

「あ、ああ心配ないさ。ところで、どうしてお前がここに？」

後ろで見ていたギンコにさえ、嘘だとわかる作り笑いを浮かべて、女は無理をしている。

「ああ、このお兄さんが里で流行っている病が気になるっていうんでさ、連れてきたんだぜ」

魔理沙が親指で背後を指し、ギンコを割烹着の女に紹介した。

どうも、とギンコが軽く会釈する。女の方はというと、ギンコの特異な見た目に目もくれず、魔理沙を押しつけてギンコに詰め寄った。

「！もしかして医者なのか!？」

「うおっ」

「けーね!？」

ギンコを医者と決めつけ、足が土で汚れるのも構わず、さらに言い募る。その様子はあまりにも必死で、目尻に涙すら浮かべた懇願だった。

「頼む！ もう里の医者にも見放されて、永遠亭も頼れない状態なんだ！ 彼らを……彼らを助けてくれ！」

「おい……ちよ、ちよ……ま」

ガクガクと頸椎ごと頭蓋を揺さぶられ、言葉を紡ぐこともままならない。結局、この随分と取り乱した女を魔理沙が取り押さえて大人しくさせるまで、数分の時間を要した。

「取り乱してしまい、申し訳ありません……」

「いや、気にするな」

恥ずかしさからからか首をすくめて、小さく正座をする寺子屋の先生こと上白沢慧音は、ギンコに対して、土下座をしていた。一つにまとめた髪が首の左右でゆるくかき分けられて、白いうなじと生え際が見える見事な土下座だ。

ここは寺子屋のとある一室。寺子屋、と言っても平屋の一般家屋の一部の壁を取り払い、改築しただけのもので、ここは居間に当たる部

屋のようだった。寺子屋という言い方に沿って言うならば、職員室と言ったところか。応接室と言つてもいいかもしれない。とにかく、八畳ほどの空間に濃い茶色のちゃぶ台が一つだけ置かれ、三人分のお茶と、茶請けの煎餅が用意された空間だ。

畳にこれでもかと額を押し付ける慧音に、ギンコは顔を上げるよう促した。魔理沙はと言えば、そんなギンコの隣でバリバリと呑気に煎餅をかじっている。

「おい、顔を上げてくれ。これじゃ話もできん」

「そうだぜ。勘違いした挙句、首を締め上げたことは水に流してやるから、さっさと本題に入れよ」

「うう……」

「おいお前な」

自ら恥じ入るばかりの慧音と、その様子を見て楽しむ魔理沙。ギンコがいくら注意しようと、煎餅をかじる口は止まらない。

やがて魔理沙が慧音をいじることに飽き、ギンコが勘弁してくれと頼み込むと、慧音は静々と頭を上げた。未だに申し訳なさがあるようだが、ギンコは構わず話を進めた。

「蟲師のギンコという。そちらさんは？」

「上白沢慧音と申します。寺子屋の教師をしています」

背筋が伸びた綺麗な姿勢で、軽くお辞儀をする。後頭部から肩口にかけて、鎖骨を隠すように下ろされた髪が揺れ、艶っぽさを演出している。

「それにしても蟲師、ですか……聞きなれない言葉ですが」

「ま、そうかもしれないが。あんたが困っていること、力になれるはずだぜ」

「へえーそうなのか」

関心したような声をあげたのは、最後の煎餅を口に放り込んだ魔理沙だった。自分の分のお茶も飲み干し、ギンコに用意された湯飲みにまで手をつけている。二人の視線にさらされても、その手は止まらないようだ。厚かましいことこの上ない。その様子を見て、慧音は額に手を当て、呆れたため息を漏らした。

「ギンコさん。魔理沙とはどのような関係で？」

「気にせんでくれ。ただの同行者だ。それ以上の関わりはない」

「おいなんだよそれ。魔法の森で死に掛けてたのを助けてやったじゃないか、この恩知らずめ。あんたを元の世界に戻してやろうと、案内してるのも私なのに」

「あら、外の世界から来た方なんですか？」

「ああ。経緯は曖昧だがね。どうやらそうらしい」

「無視すんなよ！」

「魔理沙、少し黙って」

「はい……」

慧音に一喝され、魔理沙はしぼんでしまった。今までのやり取りから、あるいは、二人は生徒と先生の関係だったのかもしれないと、ギンコは思った。

魔理沙が大人しくなったことで、いよいよ話は本題に入る。慧音が真剣に、滔々^{とうとう}と、語り始めた。

「まず現状をお話ししますと、現在里には原因不明の奇病が蔓延^{まんえん}しており、その患者数は十二人に及びます。いずれも症状は体の一部の関節が石のように固まって動かなくなり、無理に動かそうとすれば激痛が走るというものです」

「ふむ。関節の凝固に痛み、ね」

ギンコは顎に手を当てて、じっと話を聞いていた。夏の日差しを避けた部屋。気温だけが少し高い。目の前の慧音を見て、割烹着姿は暑くないのかと一瞬話から意識が逸れる。

「症状を訴えるのは老人から子供まで様々です。里の医者にかかっても原因は分からずじまい。永遠亭の薬師を頼ろうにも、なぜか竹林を抜けられず、八方手詰まりの状態で……」

「その、永遠亭の薬師というのは」

「里から一里ほど歩いた先に見える竹林の中に居を構える薬師のことです。その屋敷を永遠亭と呼び、薬師はそこに住んでいます。元月の住人だそうで、蓬菜^{ほうらい}の薬を作り出せるとか」

「……そりやまた、途方もない話で」

改めて認識するまでもなく、この世界における常識は自分のものと大きく離れている。ギンコは少しだけ俯いて頭を掻き、切り替えるように顔を上げた。

「それで、同じ症状を訴え、なおかつ年齢層を選ばないことから伝染性の流行病だと仮定し、患者は一時この寺子屋に預けられているというわけです。診療所では入りきりませんから」

「それで寺子屋に……一つ質問してもいいか」
「はい、なんでしよう」

ギンコの指が立つ。白くぼんやりと、昼間の暗がりには浮かび上がるそれに、慧音は思わず焦点を合わせた。

「関節が動かなくなるということですが、曲がったまま固まってしまった患者はいませんか」

「はい、います。とにかく固まってしまえば曲げ伸ばしができないよう固定されてしまうようで……」

「なるほど、事情はわかりました」

ギンコは慧音の話を一ときり聞き終わると、傍らの桐箱を手繰り寄せ、中を漁り、一つの巻物を取り出した。

長さにして一尺ほどの、日焼けして古ぼけた紙の巻物。その紐を解き、慧音と自分の間に広げて見せた。慧音は上半身をやや前のめりに倒し、魔理沙は胡座をかくギンコの膝に顎を乗せて、巻物を覗き込んだ。

「おそらくそいつは、骨液という蟲ですな」

「骨液？」

ギンコは巻物に書かれている一つの名前を指差した。指先が指すのは『骨液』という文字。その横には何かの拡大図なのか、立方体が描かれ、さらに他に、池のような絵も描かれている。

これはなんだ、と魔理沙が関係のない絵を指差し、後にしろ、とギンコがそれを窺めた。その様子はなんだか親子のようで微笑ましかったが、笑う暇もなく、ギンコが話し始めた。

「骨液とは、動物の関節、正確には軟骨に寄生する蟲で、小さな結晶状の蟲だ。塩などに紛れ込んで動物の口から体内に入り、軟骨に密集し

て、すり潰されることで仲間を増やし、糞尿に紛れて体外へと出て行く。老人になったとき関節が痛むのは、若い頃からこいつらを何度も関節ですり潰したせいだ」

「へえ……」

二人はギンコの説明に聞き入っていた。初めて聞く蟲というものの生態。真偽も定かではないこの巻物に描かれた墨の形は、なぜか奇妙な説得力を持って二人の耳に入り込んできた。

これはギンコの語りのせいなのか、はたまた生物としての本能か。わかるものはいない。それでも、ギンコの言葉は二人を飲み込み、なおも続いていく。

「本来なら自然に体の内と外を循環するモノではあるが、何かの拍子に、大量に体の中に取り込まれると、今流行っているような症状が出るようになる。こうなってしまうては、自然と体外に出ることはほばないだろう。目詰まりみたいなものだからな」

「なら、どうしたらいいんだ？ 彼らを治す方法は？」

慧音が不安げに問いかける。しかしギンコは落ち着いたもので、指先で静かに池のような絵を指差し、聞いた。

「そうだな……この近くに鉱泉はあるか」

こうせん？ ギンコの問いをとっさに理解できなかつた慧音が疑問符を浮かべる中、問いに答えたのは、膝の上でごろりと寝返りを打った魔理沙だった。ちやうどギンコの胡座の上に上半身を投げ、仰向けになるような形で寝転がっている。ギンコの顎を自分の三つ編みでくすぐりながら、魔理沙は答えた。

「鉱泉って、あの地下から湧く熱い水のことだろ？ それがどうかしたのか」

「ああ、温泉のことか」

魔理沙の一言で合点がいった慧音は手を打った。ギンコも魔理沙の言葉に頷き、自分の顎をくすぐる三つ編みを、そっと押し退けた。

「患者を鉱泉にいれば、蟲は体から離れていく。要するに、温泉に入れば治る」

「そんな簡単なことで治るものなのか？」

「言葉で言うなら簡単だが、患者を鉱泉まで連れて行くのは、並の労力じゃないぞ。たとえ一箇所でも、関節が動かない人間というのはかなりの自由が奪われる。一人で立つこともできん患者もいるだろう。それに、鉱泉は山間部に湧くことが多い。山登りとなると、さらに難しくなるだろうな」

実を言うと、患者の人数を聞いたとき、ギンコは少し焦っていた。方法はこれ以外になく、多くの協力がいるだろう。だがそれは望めないだろうと、ギンコは思っていた。

それは先ほどまで見てきた里の排他的雰囲気からもわかる。流行病の風評は、そう簡単には拭えない。医者でもなく、怪しげな蟲師などという職を名乗る自分がなんと説明しても、里の人間は信用せず、伝染の不安が拭えない以上、我が身大事に動かないと思っていた。

さてどうしたものかとギンコが唸っているそばで、慧音は肩を震わせて俯いていた。どうしたのだろうか。とギンコが様子を見ると、慧音は安堵の表情を浮かべて、絞り出すように声を出した。

「よかった……彼らは治るのか……よかったあ」

慧音は緊張の糸がすべて解けたように、緩んだ表情を見せた。その言葉と表情に、ギンコと魔理沙の目は釘付けになる。親が子供に向けてような、そんな言葉を想起させる親愛の情が、その笑顔から溢れていた。

そして大きく息を吸い、自分の両頬をいきなり両手で叩き、気付けをして立ち上がった。もうその目に不安も喜びもなく、ただやる気だけが満ちている。胸のあたりで拳を握り、今にも走り出しそうな雰囲気だ。

「よし！ そうと決まれば善は急げだ！ 温泉のあるところまで、彼らを運ぼう！」

「いやいや待て待て。患者は十二人だけ？ それをどう運ぶんだ？」

魔理沙が慌てて引き止めるが、慧音はすぐさま答えた。

「うむ。彼らの親族に私が頭を下げてみよう。一人一人背負えばなんとかなる。蟲の話は……」

「……治療のために入らなければならぬと伝えてみたらどうだ。信

じないようなら信じないでも構わんだろう」

すると巻物を巻き直しながら、慧音に目だけで尋ねられたギンコが答える。その口元には笑みが浮かんでいた。確かに寺子屋の先生ともなれば、里における信頼度はギンコと比べるべくもないだろう。これで条件は揃ったと安堵して、巻物を紐でまとめたとき、魔理沙が口を挟んだ。

「でも怨霊はどうするんだ？」

「あ」

魔理沙の発した言葉に、慧音だけが反応して固まった。そうだった、どうしよう、と慧音が崩れ落ちる。ギンコとしては他にどんな問題があるのかと首をかしげるばかりだったが、それを察したのか魔理沙が説明を始めた。

「幻想郷にも温泉はあるが、そこには地下から湧き出した怨霊もわんさかいるんだよ」

「怨霊……」

魔理沙の説明に、崩れ落ちた姿勢を正して座り込んだ慧音が補足する。

「……怨霊は人間に取り憑いて互いに憎み、争わせるように仕向けるんだ。すぐさま命を奪うわけではないが、厄介な存在だよ」

「言葉だけでしか知らんが、そんなものが本当にいるのか？」

「私達からしてみれば蟲なんて存在のほうがよっぽど疑わしいよ。なあ慧音。今更だけどき、お兄さんの話、鵜呑みにしていいのか？」

本当に今更であるが、ちゃぶ台から身を乗り出して魔理沙が尋ねた。確かに出会って間もない、さらに言えば、蟲なんて胡散臭いモノの話をする男の話をよく信じる気になったものだが。

だが。

「ああ、それなら心配いらないよ」

けろっと自然に、慧音は当たり前のこと聞くなと言わんばかりに言葉を返す。

「お前がこんなに懐いているんだ。少なくとも、悪い人じゃない、そうだろう？」

「……何を言っているんだか」

「お前はなんだかんだで真っ直ぐだからな」

やはり二人はよく知った仲であるようだ、ギンコは思った。

口元を押さえて、慧音は笑う。その笑顔を見るのはどうにも居心地が悪いのか、魔理沙はそっぽをむいて黙り込んだ。

しかし黙ればそれが有言の証拠となると気づいた魔理沙は、半ば強引に話を逸らした。

「で！ 怨霊はどうするんだよー！」

「どうするって言われても……」

慧音はギンコを見る。しかしギンコは首を振って否定した。

「……怨霊は専門外だ。俺ができるのは、蟲の対処法までだな」

「私も、私一人ならどうにかなるかもしれないが……大人数だとな」

はん！ どいつもこいつもだらしない！ と大きな声をあげて、ついに慧音の分のお茶まで飲み干し、魔理沙は立ち上がった。二人を見下ろして、どちらともなく指を差し、啖呵を切る。

「霊を払うなら巫女の力と決まってるだろうが。私がなんとかしてやるよ。だから二人は新しいお茶受けでも用意しながら、ここで待つてるんだな！」

おい魔理沙、と呼び止める慧音の言葉も待たずに、魔理沙は寺子屋を出て行ってしまった。去り際に、耳が赤くなっていたのは見間違いだろうと、ギンコは思った。

居間に残されたのは慧音とギンコの二人。だがギンコは、すぐに次の行動に移るべく、桐箱の肩紐に手をかけた。

「ギンコさんもどこかに行くんですか？」

「ああ、ちよいと、蟲の元を探りにね……そうだ。君も来てもらおうか」

ギンコの真意が測りかねるに、疑問符を浮かべていると、桐箱を背負ったギンコが笑みを浮かべた。

「餅は餅屋にってことさ。適材適所で、早いところみんなを楽にしてやろうぜ」

怨霊は巫女に、信頼は先生に、蟲は蟲師に。三様の行動が螺旋につ

ながり、結末へと伸びていく。

「少し用意するもんがある。手伝ってくれるか？」

「は、はいー！」

慧音が先行し、ギンコが後をついていく。畳の上には、濃い茶色のちやぶ台が一脚と、湯飲みが三つに、お茶受けが入っていた盆が残されている。

ぎしぎしと板の床が軋む音が、徐々に遠ざかっていった。

第一章 骨滲む泉 伍

昼間だというのに、日差しがあまり差し込まない仄暗い一室。^{ほのくら}外で鳴く虫の声と、自分の呼吸音が聴覚を通じて全身を支配する。静かなのに騒がしい。物音を立てないよう努めれば、それだけ周りに溢れる自然な音が気になり始める。そんな耳鳴りのごとき静寂に包まれて、ある夫婦が、体を寄せ合つて、不安に顔を曇らせていた。

「ねえあんた。本当にこれでいいのかい？」

「しようがねえだろ。医者もお手上げなんだ。じつとしてる他あるめえよ」

女が不安から声を漏らす。相当気も滅入っているのだろう。土気色の顔で言葉を発するその様は、空気を求める魚のようだ。

何か言いかけて、口を開き、俯いては口を閉じる。何を言つてもどうにもならないのに、何か言わずにはいられない。漠然とした恐怖と焦燥感が襲つてきて、無言の中に、また耳鳴りが響いた。

一方で女をなだめた男は不安からくる苛立ちを募らせつつあった。流行病が里を襲つてほぼ一週間が経とうとしている。事態は未だ収束せず、医者も匙を投げ、これ以上の伝染を防ぐためと自分たちは家に籠^{こも}るしかない。これじゃあまるで罪人だ。ふざけやがって、と男は毒づいた。

男の苛立ちはもつともである。さらに、これから増える家族のことを思えばこそ、無意味に焦り、浮き足立つのは当然とも言えた。

二人には子供がいる。今はまだ、産声をあげる前の、母体に根付く命。不安を紛らわすように、女は大きくなった自分の腹をさすった。手のひらから伝わる、自分の体温とは別の温かい鼓動^{こどう}。その鼓動を感じているだけで、不安が和らぎ、女は母親の顔に戻つていった。自分が焦つていても仕方がない。きつとなんとかなる。そう言外に言えるだけの力を、新しい命から感じた。

ギンコが戸を叩いたのは、そんな夫婦が住む家だった。

どんどんと木製の戸が揺れる。こんな時に誰が訪ねてきたのか。少々警戒しながら、男はのそりと立ち上がり、土間に降りて草履を引

きざると、戸を少しだけ引いた。

「どちらさままで？」

「どうも。蟲師のギンコと申します」

戸の隙間からギンコが挨拶をする。白髪と緑の目の異様な男。どう見たって妖しいギンコの第一印象に、男は警戒心を強くした。扉にかける手に、力がこもる。

「なんのようだ」

「なに。お宅の塩を、少し、調べさせちやもらえんかと思つてね」

「塩だと？ いきなりなんのつもりで……」

「その人の言うとおりにしてくれないか」

隙間からは見えない扉の影。ギンコの隣に立つ慧音が男にそう促した。遮るような女の声に、男は一瞬むっとしたが、戸をさらに開けて慧音の姿を確認すると、その感情もおさまったようだった。

「あんたは寺子屋の……」

「迷惑はかけない。私も立ち会うから、どうか」

そう言つて慧音は頭を下げた。男はギンコへの疑いこそ持ったままだったが、慧音の懇願に折れて、二人を家の中へと招き入れた。

「塩はどこにある」

「釜の上の棚にある壺です」

ほらそこに、と男は釜の上を指差した。そこには両開きの棚が備え付けられており、ギンコは躊躇なく歩み寄つて、扉を開けた。

いきなりやってきて無遠慮に家探しを始めるギンコに、男はもちろん遠巻きに見ていた女も不信感を拭えなかつた。壺を片手に持ち、中の塩をつまんでなにやら観察始めたギンコだが、その行動の意味は測れない。やがてしやがみこみ、壺の底まで覗きこもうと顔を近づけるなど、行動は不審者そのものだ。

「先生、誰なんですかあの男は？ 勝手に人の家に来て塩がどうたらと」

見かねた男が、慧音に問うた。慧音と言えば、神秘的な面持ちでギンコの動きを見つめている。その雰囲気、男は若干気圧されて、文句を言っていた口をつぐんだ。納得がいかない。男の顔にはそう書い

てあった。

胸元に引き寄せた手に力が入る。何が入っているのか、小袋を握りしめ、あくまで目線はギンコから離さずに、慧音は男の問いに答えた。

「……流行病を、治してくださいさるそうだ」

「病を？　治す方法がわかったんですか!？」

慧音の一言に、男が食いついた。慧音はやはりギンコを見つめたまま、ゆっくりと頷いた。

男がその方法はと慧音に聞こうとした時。塩を指にのせ、虫眼鏡を通して観察していたギンコが顔を上げる。

「慧音、米を」

「あ、ああー」

ギンコに指示され、慧音が持っていた小袋の中身を手のひらに出す。ざらつと砂のように転がり出たのは小さな白い楕円形。それを手に持ったまま、慧音はギンコに歩み寄る。

しゃがんでいるギンコに差し出すように、慧音は腰を曲げて手を伸ばした。慧音の白い手のひらの上で小さな山を作っているのは米粒だった。

ギンコは米粒を一つ摘み上げ、壺の中に放り込むと、何を思ったのか壺の蓋を閉めて、勢いよく振り始めた。

いよいよギンコがおかしくなると、先ほどまで男が感じていた不信感が恐怖に変わっていく。夫婦はギンコの奇行を、絶句して見守っていた。

ざらざらと音を立てて、ギンコが壺を振る。事情を知らなければ、この上ない奇行に見えるだろう。しかしギンコは大真面目に、蟲を取り除こうとしていた。

やがて満足したのか、ギンコが壺を下ろす。蓋を開けて、ガタガタと壺を揺らしながら、中にある何かを探しているようだった。一体いつまで塩の壺を漁っているのか。

「おいあんだ。さっきから人ん家の塩使って何してる」

「ん？　ああ、まあちよつと待て。まずは見てもらったほうが早いだろうさ」

お、あつたあつた。とギンコが壺から手を引き抜くとその手には団子ほどの大きさの小さな白い玉が握られていた。

「こいつが、病の正体だ」

得意気に、その白い玉を手のひらで転がして、病の正体と言つてのけるギンコだが、当然、その言葉は信じられるものではなかった。夫婦は訝し気にギンコを見つめ、次に互いの顔を見合わせた。

ギンコが玉を持ち、男に歩み寄る。もういいのかと聞いた慧音が塩の壺を釜の上の戸棚に戻した。

「ほれ、よく見てみるんだな」

よく見ろと言われても。男はギンコが指先でつまんだそれをじつと眺めた。気になったのか、女も近くに寄ってきて、二人して白い玉とにらめっこを始めた。

なんの変哲もない塩の塊。十分にそう見える。だが、ギンコが差し出した白い玉を見ていた男はこうも感じていた。これは塩じゃない。白い何か塩のふりをしている。

なぜそう感じたのかはわからない。男にとって、それは妙な感覚だった。

「これは、骨液という蟲でな。塩に擬態して、動物に喰われようとするんだ」

「蟲？」

「希薄な命のことだ。我々動物や、植物よりも、ずっと生命に近い生きモノだ」

ギンコは淡々と語る。その言葉に、夫婦は知らず引き込まれていた。本来ならば、そんなモノいるわけないと一蹴する荒唐無稽な話。自分たちが今まで見たことも聞いたこともない話。それを語って見せるギンコは、詐欺師の誇りそしを免れぬはずなのだが、なぜだろうか、その言葉には真実味があり、夫婦二人揃って、納得してしまったのだった。

ギンコは白い玉、骨液をガラスの小瓶に移した。男がギンコに尋ねる。

「その白い玉と、病とどういう関係があるんだ？」

ギンコは答える。

「骨液は、動物に喰われると関節部、つまりは軟骨に密集する。関節は曲げ伸ばしをするだろう。そこで骨液は自身をすり潰してもらい、その数を増やすんだ。普通なら、糞尿に混じって自然と出て行くんだが、今回はちと、多く取り込みすぎたみたいだな」

瓶を持つ自身の左手の肘を指差して、曲げたり伸ばしたりと動作を交まじえながら、ギンコは二人に言って聞かせた。

「そんなことが……」

「骨液の多くは塩に擬態する。塩壺を調べたのはそのためだ。炒った生米を加えてやると、骨液は米を中心に密集して、大きな塊になる。お宅からは患者が出ていないようだからこの大きさですんだが、さつき行ってきた患者の家では三寸ほどの玉がでてきたんだぞ」

小瓶を振って、中身を強調する。ギンコの語る蟲の世界に、二人は聞き入っていた。理由もなく、知識もない。臆げだが、同時に確信もする。あるいは、日頃から妖怪というモノに触れている彼らだからこそわかる感覚なのか。とにかく、ギンコの言うことを疑う者はもう、この場にはいなかった。

「そうか……嫌な態度をとってすまなかったな」

「ごめんなさい……」

夫婦は二人揃って頭を下げた。気にするな、とギンコは言う。

「慧音。あと何軒だ？」

「次で最後だ。しかし何度見ても不思議なものだな」

「俺も、そう思うよ」

「じゃあ私たちはこれで失礼する。急に上がり込んで悪かったな」

「いえ、こちらこそ不審者扱いをしてしまつて……」

「いいよ。とギンコは玄関の敷居をまたいだ。

「ああそうだ」

敷居をまたぎながら、ギンコは夫婦を振り返る。

「骨液が体内に入っても、胎児に影響はない。塩分は貴重な栄養だからな。今回のことで変に警戒したりせず、しつかりとって、元気な子を産めよ」

そう言つてギンコは家を立ち去つた。軽く一礼して、慧音もその後
に続く。男はその二人の背中に深く、頭を下げた。

第一章 骨滲む泉 陸

「やれやれ。結構骨が折れたな」

「里の中心部は大方回ったな。このまま他の家も回るのか？」

「いや。後はわざわざ取り除く必要もないだろう。過剰が悪いのであつて、元はそれなりに紛れ込んでいる蟲だからな」

「そうなのか」

寺子屋への道を、二人が並んで歩いていた。日も傾き始め、そろそろ夕刻になるうかという刻。一時かかっていた雲が晴れ、また日が覗いている。まだまだ気温は高い。慧音も手で自分を仰いでいるが、気休めにもなっていないようだった。

あれから方々の家を回り、ギンコは流行病の原因である骨液を塩の壺から取り除いて回った。一軒一軒訪ね、その度にそれなりの重さがある壺を上下左右に激しく振っていたのだから腕も疲れるというものだ。おまけにこの気温だ。ギンコの胸元には、濡れた服が薄く張り付いていた。

骨液の除去法を住人に教えて回るといふこともできたが、そうなるとうとギンコの話を採用してもらうところか始めなければならないだろう。生憎とそんな時間はなく、今回は早い対応が求められていたため、ギンコがその手間を省略したというわけだった。

寺子屋の門をくぐりながら、ギンコは自分で自分の肩を叩いた。そんなギンコに、お疲れ様と慧音が笑顔を向ける。だが一仕事終えて帰ってきた二人を待っていたのは、次の仕事だった。

「あ、遅いぜ！ 二人ともどこ行ってたんだ？」

寺子屋前の運動場。いつもは子供達が元気に走り回っているそこに、里の大人たちが数人集まっていた。それらは慧音とギンコが呼び寄せた人たちだ。病、もとい蟲患いの患者たちを温泉まで運ぶための人手として集まったのだ。骨液を散らすため各家を訪問したついでに、声をかけておいたが、患者からして十分な人数が集まっているようだった。

大人たち、とりわけ体の大きな男たちの中に、小さな女の子が二人

いる。雰囲気から容姿から、周囲より浮き上がる二人。そのうちの一人は、ギンコも良く知る人物だった。魔理沙が振り返り、ギンコに向かって片手を上げた。

「とりあえず、病とやらの原因を摘んできた。これでしばらく、新しい患者が増えることはないだろう」

「へえ、そうかい。手際がいいな」

ギンコの報告に、魔理沙は感嘆の声を漏らした。

「それで。そちらのお嬢さんは？」

ギンコは魔理沙の傍にいる赤い装束の少女に視線を向ける。振り袖のような腕貫うでぬきを装着し、肩のあたりから大胆に服を切り落として、脇を見せる露出度の高い服装をしている。色合いだけ見れば、巫女のように見えなくもない。女性が肌を出す文化に馴染みのないギンコは、とりあえず、頭の高いところで髪を飾っている赤い蝶々に視線を逸らした。

「ああ、紹介するぜ。こいつは博麗霊夢。今回の用心棒だ」

「よろしく。あなたが蟲師さん？」

「ああ。蟲師のギンコという。そういう君は巫女、のようだが……」

「ええ。幻想郷の巫女と言えれば私のことよ。もう一人いるけど、そっちは山の巫女ね。間違えないように」

幣ぬぎでギンコを指し、念を押す。間違えないようにと言われても、ギンコは外からきた人物であり、ほかにも巫女がいるということ自体初耳だった。

怨霊退治に巫女をあてがう。響きとしては当然だが、現実としてこれが正しいのか、ギンコにはわからない。だが長年の経験からか、『そうするのがいい』という感覚が、ギンコには根付いていた。虫の知らせに近い感覚的知覚である。霊夢の協力を経て、ギンコの蟲祓いは佳境に入る。

「魔理沙から話は？」

「聞いてるわ。温泉までの道中、外敵からあなたたちを守ればいいんでしょ？ ま、暇だったし、引き受けてもいいわ。報酬次第でね」

報酬ね。随分となまぐさな巫女さんだな。

霊夢は当然といった表情で労働の対価を要求した。しかしギンコにその当てはない。さてどうしたものかとギンコが首をひねると、隣にいた慧音が一步、踏み出した。

「私が今後一週間、巫女殿の食事の世話をしよう。もちろん一日三食五十品目だ」

「引き受けましょう」

即答だった。力強く言い切った霊夢の口元には涎よだれが伝っていたよ
うな気がするが、気のせいだろうとギンコは目を逸らした。

「で？ 具体的にはどうするのよ」

「そうだな。俺は温泉までの道を知らんからな」

「道ならわかるぞ。起伏の多い獣道にはなるが、妖怪の山を迂回する道がある」

「それなら問題なさそうだな。怨霊に加えて天狗まで相手にしてたら身がもたないぜ」

「決まりね。先頭で道案内は慧音さん。私と魔理沙で上よ。ギンコさんは……」

「……ま、遅れんようについていくさ」

ことこの世界の法則が相手となると、途端にギンコの出る幕は無くなる。道は示され、後は進むだけというなら、ただの人間には、ありのままを受け入れる以外の選択はないのが幻想郷だ。種としての安全は保障されているが、個人の命は驚くほど軽い。ここでは蟲と同等か、それ以上に、人に畏れられる存在が跋扈しているのだろうと、ギンコは思った。

慧音が集まった男達に指示を出し、寺子屋の中に入っていく。霊夢も先駆けとして、慧音の言う道が本当に通れるのかどうか見てくると言い残し、飛んで行ってしまった。もう人が飛ぶくらいで驚いてはいられない。この異世界で、ギンコは順応しつづあつた。

手持ち無沙汰なギンコは木陰に座り込み、日差しから身を隠した。同じくやることのない魔理沙が、雛鳥のようについてくる。

「ほらよ、蟲退治お疲れ様」

「おお、すまんな」

竹筒がギンコの前に差し出される。いつか川で汲んだ水が入っているのだろう。栓を抜いて中身を口に含むと、やはりというか生温い液体が喉を滑り降りていった。

魔理沙はギンコの隣で幹に背中を預けて立つ。座らないのか、とギンコが聞くと、別にいいよ、と魔理沙は返した。

「しかし奇妙なもんだな。突然魔法の森であんと出会って、ここまです案内して来てみれば里で流行ってる病気を治せるって言うんだから。蟲なんて今まで聞いたこともなかったぜ」

魔理沙が言うことも最もだった。誰かに仕組まれたのではというほどの都合の良さ。しかし、旅すがらの奇妙な縁には慣れているギンコにはぴんとこないようで、首をかしげた。

「確かに、あんたらは蟲について知らなかったが、それはむしろ自然なことだろう。皆の知らないこと、対処できないことを埋め合わせるために俺たち、蟲師がいる」

「それだよ。その蟲師っていう存在だ。そんなもの、この世界にはお兄さん以外いないんだよ。少なくとも、私は聞いたことないね」

「俺以外にいない？　じゃあ蟲患いの対処はどうするんだ」

「だから都合がいいと言ったんだぜ。案外、お兄さんは迷い込んだんじゃないくて、連れてこられたのかもな」

ざわつと、風が吹いた。ギンコの髪が風に揺れ、今まで隠されていた孔が、顔を出す。

落ち窪んだ眼窩^{くぼ}。過去に蟲へと差し出した、命の代償。ギンコには思い出せない、ギンコという男が生まれるための対価が、この黒い孔にあった。

思い出せない記憶。幻想郷に至るまでの、記憶。霧^{もや}がかかり、不明瞭で、まるで、誰かに隠されているような、そんな感覚。もやもやと立ち籠める。

やがて心にまで達しようとした霧を、しかしギンコは微笑をもって吹き飛ばした。否、苦笑と共に受け入れた。

蟬のような声が聞こえる。風がおさまり、孔が髪で隠れた時、ギンコは言葉を紡いだ。

「……だとしても、俺は歩いていだけさ。一つ所に留まらず、流れ流れて、どこまでもな」

魔理沙はちらりとギンコを見やる。上から見下して見た彼は、白い髪しか見せてはくれない。窺い知れぬ表情を想像して、魔理沙は納得した。

「そうかい」

川の流れに身をまかせる笹舟の如き生き様。ふよふよと流れ、浮き世に留まらぬ男の業。それに知らず惹かれていたのかもしれない。自由な気質が同調した、奇妙な出会いであった。

男は蟲師。立ち上がり、歩み始めるその先にはいつも、闇がある。

第一章 骨滲む泉 漆

妖怪の山の麓。木々を避け、山に立ち入らず、大きく外回りを迂回する獣道がある。道というにはあまりにもお粗末な、青々とした雑草が生えそろう荒れ野を、静々と進む一群があつた。

「はあ……はあ……」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「頑張れよ。妹さんのためだろ」

「はあ……ああ……言われ、なくても……！」

少女を背負った若い男に、ギンコは励ましの言葉をかけた。緩やかな上り坂は、想像以上に体力を削り取っているようだった。青臭い湿気が鼻をつき、汗で張り付いた衣服が不快感を煽る。日も傾いてきたというのに、気温は高いままだ。背に太陽を背負い、ギンコは道無き道を進んでいく。

ギンコの前には、一人一人を負ぶって歩く男たちが列をなしていた。中には自力で歩いているものもいるが、蟲患いで一部の関節が曲げ伸ばしできない患者を背負い、山間部にある温泉を目指しているのだ。温泉に浸かれば蟲は体から離れ、症状は改善されるとギンコは言う。その言葉を信じ、患者の親族が中心となって、治療のための行軍を続けていた。

列の先頭を歩くのは里の寺子屋に勤める教師、上白沢慧音である。温泉のある山間部を目指す以上、妖怪との遭遇は避けるべきことであり、慧音はその遭遇率を最も低くする道を知る者として、先導を任されていた。

ちらりと慧音が後ろを振り返る。最後方にいるギンコが手を上げて、脱落者がいないことを合図する。その合図で慧音は再び前を向き、歩みを再開した。

「ギンコ。大丈夫か？」

「ああ。大丈夫だ」

上空から、箒に跨った魔理沙がギンコの隣に降りてくる。ふわふわと宙に浮く魔理沙を眺め、不思議なもんだとギンコは呟いた。

霊夢が飛べることは出発前に知っていたが、魔理沙まで飛べるとは予想外だった。飛べるなら、なぜ自分と徒歩で里を目指したのかと聞けば、歩くのは歩くので楽しいから好きなんだと答えが返ってきた。「便利なもんだな。この世界は」

「ん？ 飛べるんのか？ 結構簡単だぜ。ギンコも修行するか？」
「……いや、遠慮しておこう」

魔理沙に持ちかけられた魔法使いへの道を、ギンコはやんわりと断った。過ぎたるものに手を伸ばすのは破滅への一歩だ。得体のしれないものなんて、自分の左目に抱えたものだけで十分だと、ギンコは思った。

草の根を踏み分けて進み続ける。右手の方には緑の大山があり、太陽の光を飲み込む深い緑に覆われている。これが慧音のいう妖怪の山か、とギンコはあたりをつけた。

空を飛んで警戒し、里の人間を守っているのは魔理沙だけではない。ギンコと並走している魔理沙に向かって、もう一人の用心棒が、上空で声を張り上げた。

「ちよつと魔理沙。自分だけ色男とお話ししてサボるんじゃないわよ」

「うるさいな。ちゃんと見てるよ」

どうだかね、と霊夢は辺りを見渡した。

空は青い。今の所人間の害になりそうな輩は確認できない。このまま何事もなく進んでくれれば面倒もなく、自分は一週間の贅沢を確保できると垂涎すいぜんした霊夢だったが、そう上手くはいかないのが世の常であった。

一陣の風が吹く。荒れ野に伸びた草が風の形を描き出し、霊夢は妖気の到来を肌で感じた。

一行の足が止まる。皆、風と共に現れた存在に目を奪われた。太陽に照らされて浮かび上がる。眩しさをこらえて視線を上げると、見えてくるシルエツト。その姿を見て、誰ともなく、ぽつりと言葉を漏らす。

「……天狗様だ」

ギンコも、目の前に現れたものが人ではないことはすぐに理解できた。外見は少女に相違ない。しかしギンコの考える少女には必要ない付属品が、そのものにはついていた。

背中から生える一对のそれ。艶のある黒を呈する、空を翔けるものの象徴。距離があつても良く聞こえる、妙に響きのある可憐な声が、鼓膜を揺らした。

「おやおや。こんなところに人間がぞろぞろと。行脚あんぎゃでも始めたのですか？」

漆黒の翼を広げ、青空に影を作り、現れたのは鴉天狗。八手やつての団扇うちわを持ち、底の高い一本下駄を履くその姿は、なるほど伝承に伝わる特徴は備えているようだった。

ギンコの隣で、魔理沙は苦虫を噛み潰したように眉を寄せて、吐き捨てた。

「出やがったな」

「なんだ、ありや」

「山の天狗。こういう時一番に飛んで来るんだ。実害はないけど、絡まれるとしつこいし面倒臭いんだよ」

顔を上げて空を仰ぎ、上空の影を見つめる。天狗と呼ばれたそれは、浮いているのに羽ばたく素振りは見せない。あの羽は飾りなのかね。ギンコは目を細めた。

「そいつはまた、蟲みたいな気性のやつだな」

羽を持たぬ人間たちは、地上で固まり、口々に不安の声をあげていた。中にはお経らしいものを唱えている者もいる。天狗という存在がそうなのか、あるいは、妖怪全部がそうなのか。人間たちの畏敬の念が、天狗という少女に向けられている。今までも自然に向けて祈りを捧げる人間たちは見てきたが、それと同じものをギンコは感じていた。

空を行く天狗が霊夢と相對する。それを見て、慧音が皆を促した。「みんな。あと少しの辛抱だ。もうちよつとだぞ。頑張れ！」

慧音の声に背を押され、人間たちは恐る恐る歩みを再開した。天狗を伺い見てゆつくりと進んでいくその様を見下ろして、天狗は霊夢に

語りかける。

「で？ あれはなんですか？」

「ちよつとした遠足よ。山に入る気はないから、気にしないでくれるかしら」

天狗は山を支配する妖怪だ。他の妖怪はもとより、人間が山に立ち入る際も厳重な監視の目を緩めることはない。今回も山に近づく人間の存在を感知して、ここに現れたのだろう。気にするな、という霊夢の言葉に対し、天狗の少女はからからと乾いた笑い声をあげた。

「それはそれは。こんな炎天下の中、道ならぬ道を大の大人が一人背負って遠足とは随分スパルタな行程ですね。あ、スパルタと言うのは外の言葉で、”拷問に近い修行”と言う意味ですよ」

「聞いてないし。興味ないわよそんなこと」

嘆息する霊夢に、顔面にぺつたりと作り笑いを貼り付けた天狗が続けて言う。

「こっちは興味津々ですよ。一行の先導は里の半獣。対空監視は博麗の巫女。そして後方支援に魔砲少女。これだけの面子を揃えておいて、まさかただの行楽なんてオチはないでしょう。最近話題の流行病についての諸々ですか？ もしかして、感染源を廃棄するために死体を捨てにきてるとか？」

だとしたらどうなるのか。そこまで考えて、霊夢は目の前の天狗を見据えた。

相も変わらず、飄々とした雰囲気、可愛らしい笑顔を浮かべている天狗。腹の底にはどんな思いが渦巻き、その笑顔の裏にはどんな本性が隠れているのか、今をもって霊夢に知るすべはない。ただ一つ言えることは、もしここで、そうだと答えれば、きつと肝が冷えることになるだろうとは思った。

「私も詳しくは知らないわ。こっちはご飯のために働いてるだけだし。詳細が気になるならほら、その白髪の色男に聞きなさい」

霊夢が顎だけで示したのは列の最後尾。霧雨魔理沙ともう一人。天狗をして見慣れない白髪の男がいた。遠目からでもわかる異質さに、天狗は少々驚いた。

「これはまた。随分と妙な人間がいたものですね。ああいうのが好みなんですか？」

「悪くはないけどね。目を惹くことは確かだわ。それに、なんか”ズレてる”し」

「ははあ。それで色男と。なるほど納得です」

次の瞬間、天狗の姿は霊夢の前から消失する。

「もし、その人間さん」

瞬きもせぬ一瞬のうちに、天狗はギンコのそばに降り立っていた。「うおっ」

驚き、背を反らす。しかしギンコのそれより、妹を背負って前を歩いていた男の方が、大きく短い悲鳴を上げた。ギンコは立ち止まり、天狗の少女に焦点を合わせる。

毛先に少し癖のついた、短い黒髪が風に揺れる。ギンコにとって、妖怪との遭遇はこの世界に来てこれが初めてになる。知識は曖昧だが、しかしギンコは確信していた。

「こんにちは。もうそろそろこんばんはですかね？ とにかく、ちよっとお話よろしいですか？」

この少女は、今までとは一線を画す存在だ、と。

第一章 骨滲む泉 捌

温泉を目指し歩く一行の最後尾で、ギンコは突如現れた天狗と対峙たいじしていた。傍そばを飛んでいた魔理沙は身構えたが、ギンコ自身は落ち着いたもので、特に取り乱す様子はない。自分を見て怯えないとは、余程の無知かあるいは肝の座った大物か。天狗も思うところがあるように、笑みを貼り付けたままギンコに言った。

「ちよつとお話、よろしいですか？」

「俺は構わんが。歩きながらでもいいか？ 行きたいところがあるんでね」

ギンコの気さくな態度に、天狗も応じる。

「ええ、では道すがらに」

天狗と連れ立って、ギンコは再び歩き出した。がさがさと緩やかな斜面を踏みしめて、一步一步と進んでいく。歩みを止めていた分、慧音が先導する一行とは少し距離が開いてしまったため、差を詰めるには歩調を早める必要があったが、ギンコは至ってマイペースだった。それというのも、天狗の少女の履物は歩きにくそうだなと思ひ、氣遣ったためであった。

ほとんど無意識かつ無意味な行動に、それでも天狗は気づいたように、ギンコの顔を覗き込んで表情を綻ばせた。

「ふふっ。あなた、面白いですね」

「そいつはどうも」

ギンコに警戒心がないというわけでもないが、一挙手一投足に目を向けるほど天狗を意識している様子もなかった。ただ、感じていた。蟲とはまた違うが、動物よりもより蟲に近いと思われる原初の形。妖怪という存在が持つ源流の気配。霊夢や魔理沙から言わせれば、それは妖氣と呼べる力の放出だったが、ギンコがそれを知るはずもなく、ギンコはそれを、ただただ濃密な気配と認識していた。

一方で天狗も、ギンコの妙な雰囲気を感じ取ってはいた。説明のしようがないが、あえて言うのなら、霊夢が言った“目を惹く”というのが適切だろうか。単純に見た目が特異という意味ではなく、“惹き

つけられる”。やはり彼女も魔理沙や慧音の判断にもれず、奇妙な男と、ギンコを位置付けていた。

そんな二人だったが、やはりというか唐突に、わざとらしく話を進めたのは天狗であった。

「まずは自己紹介といきましょうか。私は射命丸文と申します。天狗と呼ばれる妖怪なのですが……知っています？」

「……名前だけはな。あと女で、思ったより人間に近い姿をしてるってことぐらいか」

「それ私の第一印象じゃないですか？」

ギンコの返答に、射命丸は苦笑する。

「初めて見るんでね。俺の知る天狗はお前さんだけだ」

「あなた、お名前は？」

「ギンコだ。蟲師をしている」

「むしし？ 聞いたことがないですね……」

「だろいな」

過去の例から、自分が蟲師と名乗っても聞いたことがないと返ってくるのは、ギンコにとっては予想通りだった。だが他に名乗るべきこともない男ゆえ、そう名乗らざるを得ない。悲しくはないが、ほんの少しの徒労感を感じるギンコであった。

蟲師という単語を受けて、射命丸は自分の脳内をぐるぐると探し回った。目を瞑り、人差し指をこめかみに当てて、むむと唸る。しかし結果は変わらず、該当件数はゼロ件だった。

「もしかして外から？」

「どうも、そうらしいね」

いつの間に取り出したのか、書き付けと細い筆を取り出し、射命丸はさらに問うた。

「蟲師というのはどういうものなんですか？」

「蟲を飯の種にしてる連中のことだ。蟲っていうのは、動物や植物よりも、生命そのものに近い存在のことだ」

「ふむふむ」

ギンコの言葉を、射命丸はすらすらと書き付けに書き込んでいく。

こんなことを書き留めて何をするのか。疑問に思ったギンコだったが、特に聞き出そうとはしなかった。

「では蟲師のギンコさん？ この行列は一体なんですか？ なんの目的で、彼らはここを通っているのですか？」

「あの者らは、蟲にやられている。それを治すために、温泉に浸からにやならんだ。だからここを通って、温泉を目指しているのさ」

「ははあ。それで武装勢力込み込みで進軍を」

「寺子屋の先生が言うには、あんたらみたいなのとあまり出会わなくて済む道らしいが、どうなのかね？」

すでに前提は覆されているが、ギンコは試しに聞いてみた。筆の頭を唇に押し付け、わざとらしく考えて見せた射命丸が答える。

「それは確かですよ。ここらは、私たちの領域じゃないです。庭を掃除する庭師も、縁の下までは滅多に見ないでしょう？ この道はそういう場所です」

「へえ。それでお前さんは、縁の下をのぞいてどうするんだ？」

「うーん、ネズミがいれば追い出すんですがね。私にとって、あなたは蛇と言ったところででしょうか。私に福をもたらす者かも」

意味深に、妖しげな視線をギンコに向ける。獲物を見つけたという目。また厄介な奴に興味を持たれたかもしれない。一体どつちが蛇なんだか。ギンコは細く、息を吐いた。

「是非とも取材をさせていただきたいものです。私も同行してよろしいですか？」

「俺は構わんが、他のものは、皆お前さんを怖がっているようだぞ」

「大丈夫ですよ。私は気にしません」

「……それはまた、豪胆な理屈で」

魔理沙といい、この天狗といい、この世界の女子供は皆肝が太いと、ギンコは思った。

「ところで、取材ってどういうことだ？」

「そのままの意味です。対象に関して根掘り葉掘り聞き出して、その情報を無作為にばらまく行為を指します」

「……瓦版、じゃねえのか」

「もつとフレキシブルでセンサーシヨンな情報媒体ですよ。新聞、というものです」

天狗の言うことを、ギンコは全く理解できそうもなかった。

闖入者ちんにゆうしやによる若干の混乱はあったが、その後は特に問題もなく、一行は進み続けた。そしていつしか草木が目減りし、道を縁取るふちとどように岩石が目立ち始めた頃。地熱のせいか、一層気温が高くなり、目的地までもう間もなくというところで、それは現れた。

時刻は夕暮れ。暁を背に立つ影のような存在。それも一つじゃない。群れをなし、地面から湧き出すように現れた。ギンコは目を見張る。これが怨霊か。どうも、蟲に近い印象を受けた。里の人間にもそれは見えているようで、怯えるものが出始めた。

「ギンコ、下がってろよ。こいつらは私らが相手をする」
「ああ」

怨霊という存在が気になったギンコだったが、自分の前に立ち、任せるという魔理沙の言葉に従って、じやり、と靴底で小石を擦った。ギンコに、怨霊に太刀打ちする術はない。この得体の知れない影に対して、魔理沙が任せろというのだから、ギンコは大人しく少女の後ろに下がる他なかった。

人型に近い影はぞろぞろと増え始める。耳障りな呻き声を反響させ、ざわざわと肌を撫でる異界の気配を滲ませる。みられている。影からの視線を、ギンコは感じ取った。そして次の瞬間。

「……………ぐあつ」

低い呻き声をあげて、ギンコがうずくまる。左目に、鋭い激痛が走ったのだ。目を抑えて崩れ落ちるギンコに、魔理沙は一瞬気を取られたが、そこに畳み掛けるようにして、素早く怨霊たちが襲い掛かった。

「霊撃れいげき！」

数枚のお札が空中より飛来し、影を貫いた。お札に込められた神力によって、影は瞬時に霧散する。衝撃は辺りに伝わり、ギンコと魔理沙を取り囲む影の一部を吹き飛ばした。

土埃が舞い上がり、腕で顔を守る魔理沙に、空中から激が飛んでくる。

「ぼさつとしないの。なんのための用心棒よ」

「あ、ああ。悪い」

怨霊を撃退したのは霊夢だった。右手に幣ぬぎを、左手に札を持ち、霊夢は上空から全体像を見下ろしていた。そんな霊夢だからこそ、気づくことがあった。

「(どういうことなの……)」

慧音にはあらかじめ、襲ってくる輩やからは全て撃退するから何が起ころとも構わず進めと話してあった。だから慧音が先導する一行が立ち止まらず前に進んでいるのは問題ない。問題は怨霊たちが、なぜか一行を襲わないところにあった。そして奇妙なことに、怨霊たちは明らかにギンコを目指して集まりつつあったのだ。

なぜ怨霊たちはギンコに執着するような動きを見せるのか。霊夢をして分かりかねることであったが今はとにかく、怨霊に狙われているギンコを守ることが先決と判断した。

「はあっ！」

また数枚の札を投擲とうてきする。怨霊はそのお札に触れた瞬間に、砂の城のように崩れ去り、跡かたもなく消え去った。

霊夢の行動を受けて、魔理沙も行動を開始する。箒を槍のように構えて、弧を描くように振り回すと、穂先から星屑が飛び出して、怨霊たちを貫いた。魔理沙の攻撃は一帯の怨霊を全て払い飛ばしたように、黒い影は消え去り、辺りに満ちていた禍々しい雰囲気も同時に吹き飛ばしたようだった。

怨霊が消えると、目の痛みも嘘のように消えた。ギンコは膝に付いた土を、手で払ってよろめきながら立ち上がる。大丈夫か？ と魔理沙が様子を伺いながら、ギンコに手を貸した。

「(なぜ、トコヤミが暴れたんだ)」

疑問を持ったギンコだが、心配そうに近づいてきた魔理沙を見て笑みを作った。若干無理の残る表情だったが、魔理沙はそれでも安心したようだった。

怨霊は去り、ギンコは歩みを再開する。かなり先に行ってしまった里のみんなには、霊夢が飛んで行って合流するとのことで、ギンコは焦らず急がず、いつもの歩調で、進み始めた。

しかし、その歩みを止める一声が、ギンコの背後から投げかけられる。

「ちよつと待ってください」

制止の声にギンコが振り向くと、そこには鋭い眼差しをギンコに向ける射命丸の姿があった。もはや敵意とまで呼べるほどに研ぎ澄まされたそれを、ギンコは正面から受け止めた。

「あなた、何者なんですか？」

「……自己紹介は、済ませたつもりだったんだがね」

「怨霊たちは明らかにあなたを狙っていました。いいえ。狙っていたというより、引き寄せられるように現れた。危険な資質です。怨霊を使役できるとでも言うのですか」

射命丸は危惧していた。この男がもし怨霊を使役できる存在なのだとなれば、それは全妖怪に対しての脅威となる。幻想郷を成り立たせている畏れという概念の均衡を崩しかねない才能。そんなものが外から入ってきたなど、幻想郷史における大事であった。

「俺にもわからねえよ。あいつらと会うのは、今回が初めてだしな」

ただ。とギンコは付け加える。

「俺は元来、蟲を寄せる体質でね。それが関係しているのかもな」

「怨霊は、あなたの言う蟲に近いものだと？」

「それくらいだろ、考えられるところは」

ギンコの言うところに、判断しかねるといった表情の射命丸が唸る。新聞を作るにしろ、取材は必要不可欠であり、芯の通った情報を手に入れるには、根気よく取材をする必要がある。

今のままでは情報が少なすぎる。この男を計りかねる。軽々に判断することは、射命丸をして嫌うことでもあった。

じつとお互い目を合わせて話さなかった両者だったが、やがて射命丸が折れたように嘆息し、肩をすくめた。

「……あなたって本当、妙な人ですね」

「よく、言われるよ」

桐箱を背負い直し、ギンコは笑って見せた。

第一章 骨滲む泉 玖

やっとの思いで、里の一行は温泉にたどり着いた。人一人背負った行進は流石に堪えたようこたで、湯気の立ち上る大きな池を前に、各々は背負ってきた人を下ろし、疲れに体を預けていた。

日はすっかり傾き、あたりはほとんど薄暗くなっていくばかりだ。だが幸いなことに、今日の天気は晴れである。満月は望みすぎだが、それでも十分に手元足元を、星々や月明かりが照らしてくれることだろう。

一行が到着して間もなく。少し遅れてやってきたギンコと魔理沙、それに射命丸の三人に、慧音が駆け寄って行く。

「温泉に着いたぞ、ギンコ。次は何をすればいい?」

「着いたのなら仔細しさいない。さつきと温泉に浸かって、あつたまればいいよ」

「ああ、わかった!」

張り切って返事をする慧音を見て、まるで丁稚だなどギンコは思った。

温泉までやってくれば、ギンコのすることもなくなる。男と女、どちらから入ると話し合っている彼らを少し遠巻きに眺めながら、ギンコは手近な岩に腰を下ろして座り込んだ。ここまで背負ってきた桐箱が、がちやりと音を立てる。

「ふう。やれやれ、とんだ世界に來ちまったが、やることは変わらなかつたな」

日は落ちた。宵闇よいやみが空を覆っているのが見える。ギンコは、いつも一日の終わりにそうするように、星が見え始めた空を見上げて、今日一日を振り返った。

思えばどこからが今日だったのだろうか。森で魔理沙と出会い、人里に來てみれば蟲患いの患者がいて、いつものようにそれを治した。妖怪と呼ばれる存在と出会い、空を飛ぶ人に出会い、そして怨霊というモノと出会った。その途中で生じた疑問。そして今もなお、ギンコの頭をかすめる意識。自分がこの世界に來た、理由のようなもの。

人が根付き、生きているこの土地。緑は濃く、命という尺度で見れば、豊かと言って差し支えないこの世界。しかし、この世界には、ギンコにとって最も馴染み深い存在が少なかつた。

ギンコはそつと瞼を閉じる。一つ目の瞼のその奥、もう一つの瞼。二つ目のそれを閉じた時、上からすつと、本当の闇が降りてくる。

そして降りてきた闇を突き上げるように、光が下から溢れてくる。地上を流れる光の川。命の源泉。理ことわりが座する、自然の発端。ざわざわと、妖しく蠢うごめく異形のモノたち。

ギンコは目を開けた。考えていても始まらないと、一旦思考を打ち切ったギンコは桐箱を開けて葉巻を取り出し、一本を口に咥えた。火種を得るために火打石を取り出して、毛羽立たせて乾燥させた木の皮を火口ほくちに、がちがちと擦り合わせていると、ギンコの視界の端が、急に明るくなった。

手を止めて光の先を見れば、魔理沙が持っている木の箱から、蟬燭ろうそくの炎ほどの火が立っていた。ギンコがその火を見つめていると、魔理沙はしゃがみこんで、ギンコの咥える葉巻の先へ火を近づけた。

その火はギンコと魔理沙の顔をぼんやりと照らし出している。使うんだろ？ と笑う魔理沙の好意を受け取り、ギンコは葉巻の先を火に差し込んで、薄く煙を吐いた。

「悪いな」

「いいつてことよ」

ギンコの隣に、魔理沙も座り込む。砂利の上だろうとお構い無しと言った様子の魔理沙だが、そこだと尻が痛かろうと、ギンコは桐箱の上に座るよう、魔理沙に勧めた。

「いいのか？」

「いいや。お前さんが乗ったくらいじゃ、壊れはせん」

じゃ、お言葉に甘えて。魔理沙は桐箱に腰を下ろした。煙の匂いが、よく鼻を通る。幻想郷の温泉は、硫黄の匂いが極端に薄かつた。それも、熱源が特殊であることに原因があつたが、なんにせよ、地下から湧き出る鉱泉に変わりはなかつた。

温泉には女が先に入るようだ。患者の男女比に大きな差はないが、

何しろここまで運んできたのは全員男手だ。汗もかいたし、治療を抜きにしても湯に浸かりたいのが人情だろう。数が少ない方が先に入るのは、ある種道理と言って差し支えなかった。

「お前は入らんのか？」

ギンコが魔理沙に聞いた。

「なんだよ。女の湯浴みが見たいなんて、顔に似合わず助兵衛すけべえだな」

そういうこと言ってんじゃねえよ、とギンコが否定すると、楽しそうに魔理沙が笑った。

「なるほど、ギンコさんは顔に似合わず助兵衛と……」

そこ。変なこと書き留めてんじゃねえ、とギンコは射命丸の行動に釘を刺した。全く、変なところで疲れさせてくれる娘たちである。

少し遅れて、魔理沙がギンコの問いに答える。

「私は別にいいよ。裸の付き合いなんて、気の合う奴らだけでやるもんだ」

「そうかい。俺は、男の番になったら、入らせてもらうかね」

「……一緒に入ってやろうか」

微妙な間を開けて、魔理沙が言った。ギンコは深く息を吸って、薄く煙を吐く。細長く蛇行して星空に溶けるそれを見送り、ちらりと魔理沙を見ると、魔理沙は無表情で、どこか遠くを見ていた。

「よせよ。その手の冗談は、もっと年取ってから使うんだな」

「ちえ」

膨れっ面になった魔理沙は、より幼く見える。魔理沙にその気があるのかないのか、それは本人にもわからないことである。だが、ギンコはそうして背伸びをするような仕草を、少なからず可愛らしいと思っただ。

「(化野あだしのが姪っ子を可愛がっていたが、こんな感じなのかね)」

そんなギンコの思考に割り込むように、大きな歓声が上がった。どうやら、ギンコの処置が上手くいったらしい。蟲から解放された彼らの声が、大きく遠く、山の方までこだました。

「本当になんとお礼を言えはいいのか」

「いや、私は知恵を貸しただけです。何もしちやあいませんよ」
辺りはすっかり暗くなり、半月とも満月ともつかぬ歪いびつな月が空に輝いている。

ギンコの前には、蟲患いが完治した里の人間が集まっていた。そしてその代表として、慧音がしきりにギンコへお礼を述べていた。いや、慧音だけではない。今ではここにいる里の人間全てが、ギンコに感謝していた。

「元気になったならそれで良しです。里で家族が待っている人もいるでしょう。ここは、さつさと里に戻りませんか？」

ギンコの提案に、反対する者などいようはずもなかったが、少なからず、夜の道に怯える者がいた。

行きは背負われるだけだった人間たちも、帰りは自分の足がある。ここから里まで、距離こそあるがさほど険しい道というわけでもない。簡単にいくものだとギンコは思っていたが、むしろ帰りの方が気をつけなければならぬと、慧音は言う。

幻想郷の夜は深い。人を食い物にする魑魅魍魎ちみもつりようが跋扈ぼつこして、死が簡単に追いついてくる。夜は蟲が活発になる時間ではあったが、なるほどこの世界でも、夜というのは特別人々に恐れられているらしい。それでも帰るしかあるまいと、皆が歩き出そうとした時、天狗の少女、射命丸が声を上げた。

「ふふふ。皆さんお困りのようですね。ここは私、鴉天狗の射命丸にお任せを」

芝居がかった口調で、射命丸は恭うやうやしく頭こつぺを垂れた。一体何をすりもりなのか。怯えでも警戒心でも、一身に注目を集めた天狗は手に持つ八手の団扇うちわを天高く掲げた。そして次の瞬間。目も開けられないほどの旋風がギンコを含めた里の人間を包み込んだ。

きつく目を閉じる。耳元で暴風が荒れ狂い、何が起こっているのか理解ができないギンコは、身を強張らせた。

やがて風が落ち着いた時。恐る恐る目を開けて、ギンコも、里の皆も、我が目を疑った。

目を開けたそこは、人里の入り口だった。視界に広がるは民家の群

れ。里の人間には見紛^{みまが}うはずもない我が家ばかりが立ち並ぶ。

今の今まで立っていた、砂利と岩石の目立つ景色はそこにはない。月光を背に、鴉天狗は不敵な笑みを浮かべる。

「拠点へ一瞬で戻るには、“つばさ”を使えと、昔から決まっているのですよ」

どこで仕入れた知識なのか、天狗は得意げにそう言った。

第一章 骨滲む泉 拾《了》

ギンコが里の流行病を治して数日の時が経った。その後、ギンコは里の恩人として方々の家で歓迎を受け、快気祝いの宴やら何やらで、あちらこちらに引つ張りだこだった。久しぶりに人の輪の中で、飲み食いを楽しみ、数日を少々放埒ほうちやうに過ごしたギンコは、そろそろ次の目的地を定めるため、魔理沙の案内で、とある神社を訪れていた。

「ここが博麗神社か」

「ああ」

喧騒と出合いの思い出が残る人里より東へ数里。夏の明け方早く、太陽が昇る先へと足を向ける。道中は妖怪が出るかもしれないと聞いていて、心配ではあったが、実際歩いてみればその心配は杞憂きゆうに終わった。

積み上がった石段の隙間からは、雑草がたくましく伸びている。生い茂った雑木林が左右から鳥居に覆いかぶさっており、その鳥居も所々の朱塗しゆぬりが剥げて、なんとなく寂さびれた雰囲気きゆうきの神社だった。それらを前にして、魔理沙は呟いた。

「私の案内はここまでだ。あとは霊夢がうまくやってくれると思うぜ」

「ああ、世話になった」

魔理沙は笑う。思えば短い間だったが、この少女には言葉以上に大きな感謝を、ギンコは感じていた。突然やってきた異世界。知らない場所に飛び込むのは慣れているとはいえ、やはり不安を感じたり、心細いときもあるにはある。しかし魔理沙がいたから、今回の旅でそんな想いは露ほども感じなかった。いつも以上に、楽しく過ごせた。

一期一会の出会ひも、これまで数えていくつになるか。その中でも魔理沙との出会ひは、この世界での旅は、とびきりの異彩と共に、記憶に刻まれることだろう。

魔理沙は石段を数段のぼる。そして振り向き、ギンコと目線を合わせた。最初に出会ったことを思い出す。白と黒の奇天烈な衣装に、三角帽子と箒。金色の髪と同じ色の目を持つ、猫のような気質の少女

を、ギンコは目に焼き付ける。

世話になった。そういうギンコに、魔理沙は答える。

「気にするなよ。私も、結構楽しかったぜ」

「そいつは、なによりだな」

木々のざわめきが聞こえる。黙っていても、世界の音が、二人の間を流れていく。

二人は笑みを交わす。魔理沙は思いついたように片手を差し出して言った。

「ギンコ。煙草、一本くれよ」

「ん？ お前さんには、まだ早いんじゃないか？」

「いいから。記念だよ、記念」

ギンコが啜えている葉巻を見て思いついたのだろう。記念と言って、魔理沙は蟲煙草をギンコにねだった。

ま、構わんが。とギンコは蟲煙草を一本、魔理沙の小さな手の上へのせた。渡されたそれを強く握りしめ、魔理沙は帽子のツバを持ち上げた。

「じゃあ。達者でな！」

ギンコの返事を待たずして、魔理沙は飛び上がる。別れの言葉は短く早く。それが彼女の流儀らしい。

大空高く点となるその姿を見送ってから、ギンコは石段に足をかけた。

「あら、いらつしやい」

「どうも。邪魔するぜ」

あらかじめ魔理沙に言われていた通り、賽銭箱を無視して神社の裏手に回り込むと、神社の巫女と見知らぬ女が縁側で茶を飲んでいたり。時刻は明朝。ここに今日の時間にギンコが訪ねてくることわかっていたかのような態度が、二人からは感じられる。

「魔理沙とはもういいの？」

「ああ。あいつもあいつで、生きる道がある」

どこかで見えていたかのような巫女の言葉に、ギンコは淡々と返し

た。旅の長さに関わらず、人の世はいつも、一期一会。出会いも別れも必然だ。魔理沙が名残惜しまず、煙草一本を持ってすぐに飛んで行ったのも、それを理解しているからだろう。

ギンコはここに、元の世界に戻るために来た。外の世界からやってきた人間が、元の世界へ帰るためには博麗神社を頼るしかない。霊夢もそれは心得ているようだったが、その前に一つ、片付けなければならぬことがあった。

それは一つの謎。ギンコがこの世界に来た理由だった。

蟲の仕業。狐狸に化かされた。はたまた、夢の世界にいる。一体真実はどこにあるのか。ここに至り、ギンコは一つ、思い当たる節があった。いつものように、蟬のような声がする。

見知らぬ女が、ギンコの方を見て口を開いた。

「こんにちは。あなたがギンコさん？」

「ああ。そういうお前さんは」

「紫。八雲紫よ。よろしく」

紫と名乗るその娘は、またぞろ奇天烈な姿の女だった。髪は鮮やかな黄色。鼻梁の整った美しい眉目に、袖口や裾が開いた作務衣のような服。そしてギンコを見る金色の目は、おおよそ人のものではない光を宿していた。

浮世離れた雰囲気の水。口元を隠す扇子が、それを助長しているのかもしれない。先日会った射命丸とかいう天狗とも、どこか離れている印象を受けた。

蟲たちが騒いでいる。思えば、最初から妙ではあった。ギンコがこの世界にやってきたことに通じる、大きな作為のようなもの。曖昧な記憶の理由はわからないが、この世界に来てからずっと聞こえていた蟬のような鳴き声が、この女の前ではより大きく、騒がしくなる。

これは、空蟬の鳴き声だ。空蟬は、蟲の世界への入り口に住まう蟲。曖昧で、揺らぎのあるモノの淵に集まって、やかましく鳴き続けるのだ。

紫の目は笑っている。その微笑みに、ギンコも笑みを返す。

「隣、座っても？」

「ええ、構いませんわ」

上品な口調で、紫はギンコの申し出を聞き入れた。

明けの日差しに照らされた障子の先に、質素な室内が見える。ちゃぶ台だけが置かれた和室に、軒のきが影を作っていた。縁側を支える柱の近くに桐箱を下ろし、太陽と向かい合うように腰を下ろすと、ぎしりと縁側の板が軋きしみをあげた。

お茶、いるでしょ？ と霊夢が立ち上がる。お構いなく、とギンコは答えた。

「霊夢から聞きましたよ。里を救ってくださったようで。私からも、お礼を申し上げますわ」

「礼には及びません。私は、知恵を貸しただけですので」

まるで母が我が子へかけてもらった温情を感謝するように、紫はギンコにお礼を述べた。その言動に違和感を覚えつつ、ギンコも応じた。

「けんそん謙遜を。あなたでなければ、あの病を見抜けなかったでしょう？ 自分にしかできないことがあるというのは、それはそれは偉大なことですわ」

「……おたくは、蟲師、というものをご存知で？」

日に当たる頬や手の甲が、熱を持つのが感じられる。ギンコは自分に向かって伸びている木々の影に視線を落とした。ギンコの静かな問いに、紫は少し大袈裟に、しかし静かな抑揚を持って答えた。

「ええ。よく存じております。この世の闇の深きところ、動物とも植物ともつかぬ下等な生き物たちが住まう領域で、生業なりわいを背負った方々。貴方も、そうなのでしよう？」

「生業を背負う、ですか。なるほど、的確だ」

小鳥のさえずりが聞こえる。それほど辺りは清澄な空気に包まれ、喧騒とは無縁なのだった。

ギンコの啞える煙草の先から、細く長く煙が立つ。燃え尽き、黒くなった灰がぼとりと、地面に落ちた。

「蟲というのも困りものですわよね。あれほど扱いづらい連中もいません。草葉の陰でじっとしていると思えば、突然枕元に立っているよ

うな。こちらの都合などお構い無しなんですもの」

ほとほと困り果てたというように、紫はため息をついた。ギンコは肘を膝の上に置いて前かがみになり、啞えた煙草を口から離し、少少、口の端を釣り上げた。

「面白い例えですな。しかし、自然とは元来、そういうものです。都合など持ち出すのは、人だけですよ」

「それもそうですわね。ですが、それが神からの視点であったなら？」
ギンコは左を少し振り返るようにして、ちらりと、紫を見た。目が合う。ギンコが振り返ることがわかっていたようだ。相変わらず扇子で口元は隠され、目だけが笑っている。もう一度前を向き、ギンコは紫に答える。

「神であっても、同じでしょう。この世に生を受ける限り、彼らを縛ることは、時間にもできません」

「……ええ。まったく、同感ですわ」

蟲煙草が燃え尽きる。短くなったそれを地面に落とし、靴底で踏み躪った。革靴のつま先を、小さな蟻が一匹横切っていく。どこにむかっているのだろう。ギンコには、分かるはずもなかった。

お茶を持って霊夢が戻ってくる。どうぞ、とギンコの右隣に置かれたそれは、湯気を立ち上らせていた。お茶を置いてそのままに、霊夢はギンコの右側に腰を下ろしながら言った。

「紫の話を真面目に聞くのはよしなさい。いいことなんてないわよ」
「まあひどい。私、こんなにも真面目に話してるというのに」

ショックを受けてギンコにしなだれかかる紫だが、ギンコにしても、霊夢の言葉に賛成であった。紫のことなど意に介さず、霊夢は話を進めた。

「間怠まだるつこしいのよ。ギンコさんは元の世界に戻りに来たんでしよう？ だったら早く話を進めなさいよ。いつまでも知らないのは可哀想だし、申し訳ないでしょう」

「ええ、そうね。そう、その通りだわ」

まったく残念だけれど、と紫はゆつくりと体を起こす。霊夢の妙な言い回しに、違和感を覚えたギンコだったが、次に紫が発した言葉の

せいで、その違和感は綺麗に拭い去られた。

「あの、ギンコさん？ 落ち着いて聞いてくださいね？ 実は――」

人里。少し前まで流行病が猛威をふるって、閑古鳥かんこどりが鳴いていた中央通りも、今では活発に人が往来おうらいし、活気を取り戻していた。

そんな通常運行の里のさらに一部、とある民家に、一人物ものう憂いげなため息をついて、ちやぶ台に突っ伏している少女がいた。

「いい加減にしろ。私だって暇じゃないんだぞ。いつまでそうしているつもりだ」

「だってえく……」

だってだなんだとちやぶ台の上でぐだぐだしている少女は魔理沙だった。ギンコと別れた後、仕事が休みの慧音の家に上がり込み、こうしてちやぶ台を占領していた。

ため息については体を起こし、指先でギンコの葉巻を弄もてあそんだと思ったら、またため息をついて突っ伏す。この動作を先ほどから延々と繰り返していた。

机に向かって正座をし、書き物をしてる慧音も、背後でうんうんと聞こえる唸り声とため息に、気をよくするはずもなく、集中力を乱されて、いい加減我慢の限界が来ていたのだった。

「そんなに落ち込むなら引き止めればよかったんだ。未練がましいぞ」

「引き止められるわけないだろ。異世界だぞ？ 伴侶になる覚悟もないくせに、お前とはいい友達でいたいからこの世界に留まってくれなんて言えるかよ」

魔理沙の言い分に、少し考えて慧音も納得する。要するに、魔理沙はギンコが帰ってしまったことを寂しがつていた。一期一会の出会いとは言え、彼の話す蟲の話や、彼の持つ独特な雰囲気は魔理沙の心に強く残っていた。それこそ、別れを引きずり、未練がましく唸り続けるほどに。

それに、ギンコと出会い、楽しい時間を過ごしたというのなら、こ

の先ギンコが出会い、楽しい時を過ごすであろう誰かとの未来を、ちよつと早めに享受できた魔理沙が、その一存で摘み取る権利など、当然ないとも言えた。

再びうーあー、と声を上げて転がる魔理沙を見て、慧音は嘆息する。「よっぽど気に入ったんだな。その態度を見てみると、元家庭教師としても妬けてくるぞ」

「んー。慧音も嫌いじゃないけどな。ギンコはなんというか、別なんだよ」

火の点いていない蟲煙草を口にくわえ、畳の上に仰向けで寝転がる。そんな魔理沙を見て、やれやれ、と慧音は肩をすくめて苦笑した。

ギンコが予想していた通り、慧音と魔理沙の関係は元教師と教え子だった。まだ魔理沙が里で暮らしていた頃。霧雨家に雇われて家庭教師として一般常識を魔理沙に教えていたのは慧音だった。

慧音は筆を置き、体ごと魔理沙に向き直った。

「別ってどういうことだ？」

「んー。わかんないけど、なんか霊夢に似てるっていうか、あの浮いてる感じが軽そうでいいっていうか……あーいや、軽い男ってわけじゃないんだけど、優しいし、責任感もあるし……」

その気持ちの正体を、慧音はなんとなく言葉にできそうな気がしたが、言うべきではないと思い、口をつぐんだ。

魔理沙の口元で、蟲煙草が揺れる。その揺れが、魔理沙の心境をそのまま表しているようだった。

一体いつになったら立ち直るのかと慧音が考えた時、家の戸を叩く音が聞こえた。

「はーい」

魔理沙を放置して、慧音は来客の対応をするために玄関に向かう。どちらさまですか、と言いながら戸を引くと、そこには意外な人物が立っていた。

「あなたは……」

ギンコが去って行った後。慧音が昨日の晩のうちに用意していた朝ごはんを食べてから、霊夢は境内の掃除に取り掛かった。古くなつた竹箒で参道の砂埃を吐き出し、石段の雑草を抜いていく。その一連の作業を上空から見下ろす影があり、霊夢はその影に向かって、雑草抜きで強張った背中を伸ばしつつ言った。

「見てないで手伝ってくれてもいいんじゃない？　ほんと、今回のことといい、性格悪いわね」

「あら、なんのこたかしら。ひどい言われようだけれど、身に覚えがないわね」

白々しい、と霊夢は吐き捨てる。自らの能力で作りに出したスキマに腰掛け、まるで空中に椅子があるかのように振る舞う紫は、恍惚とほけた答えを返した。

「まったく、ギンコさんも災難よね。こんな奴にいいように利用されて、いきなりこっちに引っぱり込まれたなんて」

「いいように利用だなんて人間きの悪い。こっちは命の恩人よ？　あのまま夜に追われていれば、彼は死んでいたと思うのだけど」

「そんなの知らないわよ。結局、今回のことは、あんたがどうにもできないことをギンコさんに押し付けただけじゃない。時代も違うここに呼ばれて、あげく帰れないだなんて。これが災難じゃないならなんなのよ」

「しよがないでしょう。蟲相手では私だってお手あげだもの。生命の最小単位に、これ以上境界を引くことはできないわ」

そもそもよ、と紫は扇子を空にかざす。

「蟲というのは境界の中にいるものよ。外でもなく、内でもなく、中。彼らという存在ほど、区別なんていう言葉が似合わない存在はいないわ。だからこそ、彼らの力を借りて、棲み分ける必要がある」

幻想郷を創りし賢人が一人、大妖怪八雲紫の能力は境界を操る能力。二つに分けられしモノを一つに纏め上げ、一つの混沌としたモノを二つに区別する能力。その効力は絶大で、この世の概念を根底から覆すほどの能力とまで言われる、いわゆる神の力に近いものだった。

しかし、一見無敵に見える能力でも、世界で最も下等な生き物には、

その力を発揮できないようだった。

二は分かつと一になる。一も分かつと五分になる。しかし、零を分けても、それは零のままだ。蟲とはいわば、そういう類いのモノだった。

「現代に光が溢れて久しいこの時、ついに闇そのものが幻想入りを始めたのよ。これからを考えて、対応策は練らなければいけないわ。永遠亭も、何やら取り込み中のようだしね」

「あつそ。なんでもいいけど、あんたにしては大袈裟よね。情けないんじゃないの？」

「やけにつつかかるわね。どうしたのよ」

「別に。蟲がどれほどのモノか知らないけど、関節動かなくさせる程度なら取り乱すこともないじゃないかと思っただけよ」

「もしかして嫉妬してるの？ 自分が当てにされなかったから？」

「……別にいい！」

ほとんど八つ当たり気味に、霊夢は草を引き抜いた。

闇から闇へと這い出して、光の川をそれらは泳ぐ。

深く、深く。世界の底で蠢くモノたち。分かつことも、断つことも叶わぬ、そういうモノたち。

およそ遠しとされしモノ。下等で奇怪。見慣れた動植物とはまるで違うと思しきモノたち。それら異形の一群を、人は古くから恐れを含み、いつしか総じて、蟲と呼んだ。

遙か遠く、人の身では辿り着けぬ最果てに、幻想が根付く土地がある。

三千世界を照らすごとき、現世の光もそこには届かず、ただ忘れられた闇が蔓延るばかり。

引き戸を開いた慧音の前で、男は言う。

「どうも。旅の者だが。今晚ひとまず、泊まれるところを探してる。どこか、いい場所は知らんかね」

幻想郷に、男が一人いる。蟲を識^しり、蟲を視^て、蟲に対^{する}。そう
いう男が、一人いる。
男は蟲師。今日もただ闇に生き、蟲を識^る者。

第二章 筍の薬

第二章 筍の薬 壺

幻想郷のとある山奥。草木も寝静まる夜半刻に、珍しくも焚き火の灯りがともる場所があった。

満月に近い月が、夜の天蓋てんがいに光の穴を開けている。その景色を見るたびに、世界が一つの箱庭で、月から誰かがこちらを覗のぞいているような錯覚をしそうになる。

火にくべられた枝の、はじけるような音が鮮明に浮かび上がる。辺りには虫のさざめきや、草木の擦こすれる音もあるようだが、今この場所においては、煌々こうこうと光る炎が、それら全てを遠ざけていた。

そんな焚き火の前に胡座あぐらをかいて座り込み、煙をふかす男が一人。火の色で染まる白髪の頭に、森の緑を宿す右目。土色のコートを羽織はおり、夏でも多少は冷える夜風をしのいでいる。陰影いんえいが濃く浮き彫りになる光源の近くで、むしろ闇に身を染めているような雰囲気の男は、じつと、揺らぐ炎を眺ながめていた。

どこか胡乱うろんな表情を浮かべる男は、気を張っているわけではないが、寝呆ねだまけているわけでもない。ただひたすら、そこにあるように座っていた。

しかし突然、男は首を右へ動かして、光から遠い虚空こくうを見つめた。それは虫の知らせというか、直感というか、とにかく、男が感じ取れる何かがあるに現れる合図でもあった。

見つめる先。光から少し離れたそこに、一筋の切れ目が入る。ゆつくりと紙を破るような異音を発して、その空間そのものに亀裂が走り、闇の口が開く。

「こんばんは。お元気がしら？」

闇の口から声がする。話しかけてくるのは闇そのものか。否、闇の口から這い出した、少女の形をした人外である。神出鬼没な大妖怪、八雲やくも紫むらさは親しげに男へと声をかけた。

「へえ。お前さん、そんなこともできるのか」

「あらう？　そういえば私の能力を見せるのは初めてだったかしら？」

夜から半分だけ体を出して、紫は少し考えた。斜め上を見上げるようにして、唇に人差し指を当てながらの考える姿勢というのは、どこかわざとらしく見える。その証拠に、すぐにどうでもいいかと思考を切り替え、紫は焚き火にあたる男へ向き直った。窓枠に肘かけるように、紫は空間の裂け目に寄りかかる。

「結構夜更かしさんなのね。そろそろ子の刻よ？　それとも、怖くて眠れないとか」

「生憎だが、闇には慣れてるんでね。今更怖がることもねえよ。しかし、お前さん、この前とはずいぶん雰囲気が違うな」

前はもつと、大人だったような気がしたが、と男は自分の記憶と目の前の少女を照らし合わせた。灯火に染まる金色の瞳は、あの日神社で男に「幻想郷からは出られない。あなたはこの時代の人ですらないのだから」と気軽に告げたものと相違ない。口元に浮かぶ薄ら笑いのせいか。あの時は、終始顔が隠れていたからな、と男は焚き火に視線を戻した。

「それはお互い様でしょう？　でも私、あなたのその気さくな感じは好きよ」

「そいつはどうも。俺は、お前さんのこと、少し苦手かもな」
「まあ」

紫は楽しそうに笑った。ますます、少女じみている。得体のしれない空間の隙間から、上半身だけ出しているにしては、不気味なほど不釣り合いだと、男は思った。

「それで、なんだ。まさかからかうためだけに、来たわけじゃねえだろ」

「あら。月が綺麗な夜に、淑女が殿方の元を訪ねる理由なんて一つでしよう？」

冗談だろうか？　という表情を男が浮かべると、冗談よ？　という表情が返ってくる。やれやれと男はそばに集められた枝を数本掴み取り、焚き火にくべた。

火の勢いは変わらない。しかし燃料を加えた分、ぱちぱちと火の粉

を弾けさせながら、炎は確実に揺らいでいる。男をからかつて満足したのか、紫は話を進めた。

「あなたに一つ、噂を教えて差し上げようと思つて」「噂？」

紫は言う。

「光る竹という噂をご存知？ 人里から南へ数里行つた先にある、迷いの竹林と呼ばれるそこに、光る竹が生えているという」

「いや、聞いたことねえな。が、そりやまた、妙な噂で」

「そうね。たつたそれだけの噂よ」

たつたそれだけ。その話を聞かせて、一体何がしたいのか。男はまず、光る竹と聞いて一つ思い当たるところがあつた。かぐや姫の逸話ではない。男の経験から、掘り出すことのできる話だ。そう言えば竹の子は元気だろうか、と男は思った。

しばらく、言葉が消える。静かな夜のささやきに、焚き火の音色が溶けていく。

男は紫から真意を聞き出すため、言葉を返した。

「それで、俺に調査をしろつてことかい」

「調査しろだなんて。そんな傲慢ごうまんなこと、私は言つたつもりはないのだけれど？」

「それこそ冗談じゃねえよ。腹の探り合いなんて趣味じゃねえんだ。こっちは」

「あらそう。初めてお会いした時は、結構ノリノリで付き合つてくださったのに」

口に啜えた煙草を指に移し、胡座をかいたまま男はうんざりした風に、顎を肘で支えた。初めて紫と会つた時は、それはもう慣れない言葉遊びをしたのを思い出す。元の世界に帰ると思えばこそ、ギンコはあの時応じたのだが、次の瞬間には帰れないときたものだから驚いた。

口では残念そうに言いながら、紫は話題を切り替えた。

「ところであなた、幻想郷の方々ほうぼうを回つてらっしゃるようですが、今はどこまで？」

「人里を出て、魔法の森とその周辺までだな。地図がなくて、不便して
るよ」

測量でも憶えるかね、と男は傍らかたわの大きな桐箱を開けた。どうやら
煙草が切れたらしい。すっかり短くなったそれを焚き火の中に放り
込み、男は桐箱の中に並ぶ無数の引き出しに指をかけた。

「あらそうですの。でしたら、道中の危険は？」

「今のところ、ないな。人と出会うこともない」

幻想郷の人間は旅をするなどとは考えない。自分が無力であると
自覚しているからこそ、群れ、集団を形成し、決してその輪から出る
ことをしない。一度里を離れば、そこは魔境だと理解しているから
だ。

幻想郷の大部分は魑魅魍魎の支配領域である。そこを人間の男が
一人、無防備にも散歩しているなど、鴨ネギどころの話ではない。だ
がそれも、“ただの”人間であったららの話だ。

ギンコの話聞いて、紫は納得する。

「まあそうでしょうね。あなたなら」

「どういう意味だい」

意味深に、深く口元を釣り上げて、紫は言った。男が妖怪に襲われ
ない理由。まるでそれを知っているかのような口ぶりであった。

聞き返しながら、男は桐箱の引き出しにかけていた手を止めて、振
り返った。

紫は扇子を広げて口元を隠す。それはもう、表情を見せないという
意味だけにとどまらず、彼女の腹を隠しているのではないかと、男は
そう思った。

「さてね。あなた自身に聞いてみなさいな。もつとも、あなた自身は
忘れているようだけれど」

ずぶずぶと紫の上半身が隙間に消えていく。彼女の話を真面目に
聞くべきではないといった、博麗の巫女の言葉を思い出した。

「夜も更けたわ。そろそろお暇いただきます」

「おいまて」

闇に飲み込まれるように消えゆく紫は、男の制止を聞こうとはしな

い。紫の姿が完全に闇に沈み込み、裂け目が徐々に閉じていく。
「左目に感謝なさい。水清ければ魚住まぬ、常の闇には怪も生じず、ですわ」

その言葉を残して、ぴつたりと隙間は閉じられた。後には、こちらを覗くような闇が、木々の隙間に広がるばかり。

思わず伸ばしていた手を下ろし、男は仰向けに寝転がった。

夜の天蓋、月の窓。誰かが覗く箱庭に、男は最近やってきた。

「……光る竹、ねえ」

男は蟲師。名をギンコ。今日も一人あてもなく、幻想郷を歩く者。

第二章 筍の薬 弐

紫に教えられた噂をもとに、ギンコは人里から南にあるという竹林を目指していた。一度行ったことがある場所は大まかに記憶しているため、人里を経由、起点として、ギンコは竹林に向かうことにした。人里のわきを通り抜け、一路南へと足を向ける。日差しがちょうどよく雲に隠れ、気温は高いものの、まだ過ごしやすいと言えるだろう。午前の刻。苔が群生し、ただ立っているだけで転びそうになる湿地の森とは比べるべくもなく歩きやすい道を、ギンコはゆったりと進んでいた。

そんな折に、道の向こうから歩いて来る人影を見た。

「おや」

人里以外で、人に会うとは珍しい。人外妖魔じんがいようまの類たぐいかと少々警戒もしたが、近づいてみればなんでもない、ギンコもよく見慣れた、旅の装束に身を包む一人の人間だった。

まるで顔を隠すように頭の傘を目深に被り、草履を擦って歩いている。甚平じんべいのような服に身を包み、背丈はギンコの胸ほどで小柄だが、背負っている木箱はギンコのもと同じくらいで、少々不釣り合いだなと、ギンコは思った。

どうも、と黙礼を交わしてすれ違った後、ギンコは竹林への道を聞いてみるかと思いきり、振り返って旅人を呼び止めた。

「あの、もし」

「はい？」

若い女の声だった。なるほどそれで顔を隠していたのかと、妙なところで得心がいったギンコだったが、呼び止めた理由はそこではないので、気にせず言葉を続けた。

「あんだ、この先から来たんだろう？」

ギンコは南を指差して聞いた。女はギンコの指差す方を、傘を持ち上げて確認し、頷いた。

「ええそうですけど」

「なら、この先に竹林はあるかい？」

「ええ。道をまっすぐ行けば竹林です。竹林にご用ですか？」

そう聞かれてどう答えたもんかと一瞬迷ったギンコだが、素直に答えた。

「ちよいと、妙な噂を耳にしてね。光る竹を探しに行くんだが、お前さん、何か知らないか？」

「光る竹、ですか？ ……わかりませんね。聞いたことあるような気がするんですが」

ギンコの問いに、女は首をかしげて考える素振りを見せた。ギンコもそれ以上は追求せず、そうか、変なことをきいてすまなかったと言って話題を打ち切った。

「ところでお前さんは、これから里に？」

「え？ あ、はい。私は里へ薬を売りに行こうと」

なら、その背中には薬箱か。とギンコは納得した。もしかしたら同業者かもという思いも込めて尋ねたが、希望的観測はどうやら外れてしまったらしい。

なるほど、とギンコが頷くと、女が聞いてきた。

「あの、何かご入用ですか？ 一応、一通りの薬は揃えていますけど」
背負う薬箱を降ろすような仕草をした女を見て、ギンコはその動きを、片手を上げて制した。

「いや、そういうわけじゃない。商売の邪魔して悪かったな」
「はあ」

降ろしかけた荷を背負い直し、じゃあ、と女は会釈をして、再び歩き出す。ギンコも、その薬箱で隠れてしまうほど小さな背中を見送ってから、振り返り、歩き始めた。

しばらく歩くと、鬱蒼と茂る竹林が見えてきた。二丈にとどこるかというほどの立派な竹が乱立し、見事に群生している。青々と壁のごとく並んで直立する竹のてっぺんを、ギンコは見上げた。

「こりゃあ見事な竹林だ」

見上げた先で、平たい竹の葉が風に揺れている。しなやかに風を受け流すそれは幾重にも折り重なっており、空を一部隠すほどだ。見事

だと言ったのは美的感覚からではなく、自然に対しての敬意、つまりは人を意に介さない、その瑞々みずみずしい生命力に対してのものだった。

ギンコは竹林の切れ目に、人一人通れそうな獣道を見つけた。ギンコは目的のものを探すべく、竹林へと足を踏み入れた。

竹の落葉が積もる道をざくり、がざりとかき分けるように進んでいく。時折ひらひらと舞い落ちる葉が顔にかかり、竹の成長に始まる夏の季節を感じた。

獣道を行くと、少し、開けた場所に出た。そこには一軒の家があった。ひっそりと隠れるように建つ、掘つ建て小屋のような小さな民家だ。竹の葉がかかる茅葺かやぶき屋根が、物悲しさを助長している。こんなところに人が住んでいたのか、とギンコは少し驚いて、そろりと一歩、近寄った。

その一歩で、ギンコがやってきたのを察するように、家の中から人が顔を出した。

「誰だ」

それは若い女のように見えた。ように、というのも、声のほどは少女に相違ないのだが、彼女の姿が非常に特異だったというのがある。色素の抜けた白く長い髪。遠目からでもわかるその特徴以外に、ギンコはある既視感を、彼女に感じていた。

それはギンコだから感じることできた微妙な違和感だった。とある村で、一年限りの豊穣をもたらす怪に触れた経験が呼び起こされる。まさかな、とギンコはその感覚を振り払い、家から出てきたその女に挨拶した。

「どうも。蟲師のギンコと申します」

「蟲師？ 蟲師だと？」

女は蟲師という言葉に反応して身構えたようだった。ギンコといえば、この世界に来てから初めて、蟲師という名乗りがすんなり通ったことに新鮮さを感じていた。この女は蟲師を知っている。警戒心らしきものを見せる女に、ギンコは続けて聞いた。

「おや、蟲師をぎ存知で？」

「……ああ。……それで？ 蟲師がこんなところに何の用だ」

女は佇^{たえず}まいを正し、凜^{りん}とした態度でギンコに対峙^{たいし}した。いつまでも離れたところから話しかけるのもどうかと思ひ、ゆっくり近づきながら、ギンコは自身の目的を女に話した。

「いやなに。ここいらで、妙な噂を聞いてきたんです。なんでも、この竹林に光る竹があるとか」

「光る竹だど？ 馬鹿馬鹿しい。おとぎ話でもないんだ。そんなものあるはずないだろう」

「いやいや、これがどうしてなかなか。世にはまだ、珍しいこともあるもんですよ」

「……見たのか。光る竹を」

女まであと十歩というところで、ギンコは足を止めた。それというのも、どこからともなく、赤子の泣き声が聞こえてきたためであった。その泣き声を受けて、会話は中断され、女ははっとした表情で家の中にとって返した。赤子がいるのか。ギンコは家に近づいた。

相変わらず赤ん坊の泣き声が聞こえる。玄関横の格子窓から、ちらと中を覗けば、女が赤ん坊を抱き上げて、あやしているところであった。家の中からギンコに向かって、女の声がかかる。

「見ての通りだ。話がしたいんなら、中に入りなよ」

「じゃあ、そうさせてもらうかね」

入り口に掛かった簾^{すだれ}をくぐり、ギンコは家の中に足を踏み入れた。

家の中はなんとというか、寂れていた。生活感がまるでない。先ほど覗き込んでいた格子窓の下にある釜も錆付いていて、使われている様子はなく、居間の中央にある囲炉裏^{いろり}に、僅^{わず}かながらに灰が積もっているばかりだ。本当に、物置小屋か何かのようだ。ギンコはその感想を胸にしまったまま、土間からの小上がりに腰掛けて赤ん坊をあやす女に問いかけた。

「ここに、一人で住んでいるのか？」

「だったらなんだ？」

「いや……そうだな」

これだけのものを見れば、よほどの唐変木^{とうへんぼく}でもない限りは事情があると察するものだ。ギンコもただ「気の毒だ」と安い同情を向けられ

ることが、どれほどその人自身にとって惨めなものであるか理解しているつもりで、強い語気で返されれば、目を逸らして同調するほかなかった。

ギンコは仕切り直すように女の隣に腰掛ける。さほど広くはない家の中に、ギンコの下した桐箱から、がちやりと音が響いた。女もギンコが座ることを咎めようとはせず、代わりに先ほどの続きを話し始めた。

「あんた、光る竹がどうか言ってたな」

「ああ」

「私の知る限りじゃ、それを見たことはない。竹林は歩き慣れてるつもりだから、今更探し直す意味はないと思うよ」

赤ん坊の前だからか、先ほどより幾分か穏やかな口調で、女は言った。ギンコとしても、光る竹を探しに来たのは紫に言い含められたところが多分にあり、それほど心を傾けるようなことでもなかった。女の言うことを鵜呑みにしてもいいか、という考えがギンコの頭をよぎる。

「(どうすつかねえ)」

出鼻を挫かれた思いで、ギンコが考えていると、女にあやされていた赤ん坊がギンコに反応した。

あぶあぶと言葉にならない声を発し、空中をつかむように手を動かして、ギンコへと視線を向けている。ギンコもその様子に気がつき、赤ん坊を見た後、女に視線を向けると、その視線がはたと交錯した。

女の目は赤かった。稀にある性質で、体中の色素が抜け落ちて生まれ出でる動物がいるという。そういう動物は、血液の色が目に見え、髪や肌が雪のように白くなるそう。女の見た目は、まさにその性質を表していた。

女はその奇異な性質が故に、里から離れてここで一人、赤ん坊を抱えているのだろうか、とギンコは考えた。

赤ん坊の様子を見た女が、ギンコに聞いた。

「……抱いてみるか？」

「ええ……」

ギンコは困った声を出したが、そんな様子が面白かったのか、女は半ば押し付けるように、ギンコへ赤ん坊を差し出した。まさか取り落とすわけにもいかず、ギンコは赤ん坊を抱え上げる。

赤ん坊を抱き上げるなどいつ以来だろう。あるいは記憶にもないその行為に、ギンコは変な緊張を持つて臨んだ。

赤ん坊はギンコを見つめている。曇りのない、蟲とはまた違う輝きを放つ命。腕の中に収まるその命の輝きは眩しく、ギンコは知らず、微笑んだ。

「赤ん坊を抱いたのなんて、初めてかもしれねえな」

「そうなのか？」

女は聞き返す。

「ああ。俺は蟲を寄せる体質でね。一つ所に留まれないのだ。だから旅をしているし、そうなれば必然、子供なんてものとも縁がなくなるってわけだ」

「へえ。じゃあ、ずっと旅を？」

「ま、そうなるな。あちらこちらと彷徨さまよって、気がいたらこんなところまで来ちまった」

そう言つて、ギンコは紫の顔を思い出した。思えば全部あいつのせいだよなあ、と考えると、光る竹の話など心底どうでもよくなった。自分は思ったよりも、気ままに足を向ける旅が好きだったんだなど自覚する。

ギンコの話聞いて、女が静かに同調した。

「……大変、だったな」

「いや、それでもねえさ。昔はどうだったかしらんが、今はそれなりに、楽しんで生きてるよ」

寄る辺がないというところで、女とギンコは共通点があるようだった。女のやけにしんみりした言葉の雰囲気、そう、ギンコは考えた。またぐずり始めた赤ん坊を、少し慌てたギンコがぎこちなくあやす。あー、やっぱ母親がいいのかねえ、と呟くギンコを見て、女は笑いを堪えるように、口元に手を添えた。

いよいよ泣き出しそうという時に、女がギンコから赤ん坊を取り上

げる。途端に泣き止む赤ん坊を見て、ギンコも女も、苦笑した。

「ところでお前さん、蟲師を知ってたようだが、ここで俺以外の蟲師に会ったことが？」

そうギンコに問われ、女は少し考えるようにして答えた。

「あー、いや、ここでは見たことないな」

「じゃあどこで知ったんだ？」

幻想郷は閉じた世界である。そう、概要だけしか理解していないギンコから沸いた疑問だったが、女は少し答えにくそうだった。どうやら掘り下げられたくない部分に触れそうだな、と思ったギンコは、女が答える前に自分の言葉を覆した。

「いや、いい。蟲師を知ってるんなら、蟲についても、知識があるんだろ？」

置いておいた桐箱の肩紐に手をかけて背負い直し、ギンコは背中越しに女に問うた。ごとり、と桐箱の立てる音に重なって、ああ、どんなものかくらいはな、と控えめな返事が聞こえる。それなら結構だ、とギンコは家の入り口にかかった簾を持ち上げた。

「何か変わったことがあったら、知らせてくれ。どうせ、この世界をぐるぐる回らなきゃならん身だ。たまに、様子を見に来るよ」

「ん、そうか」

同情をするつもりはない。ただ、そうあるように生きているものを受け入れることが、ギンコの生き方でもあっただけである。だが女はギンコの言葉に情を見出したようで、微笑みをもって申し出を聞き入れた。

「なあ」

最後に、ギンコは女に聞いた。

「あんた、その子は自分で産んだのか？」

女は一瞬、驚いたような表情を浮かべると、少し目を伏せ、躊躇ためらいがちに答えた。

「……いや、捨て子だよ。竹林のそばでな。拾ったのさ」

「……そうかい」

ギンコは玄関の外を見る。鬱蒼と茂る竹林。全てが地中でつなが

り、仲間はずれは一株もない。そういう繋がりを持った植物の生き様が、女の目にはどう映るのだろうか。

嫌な沈黙を払うように、女が口を開く。

「あんた、蟲師のギンコとか言ったな」

「ああ」

「まだ、私は名乗ってないぞ」

「そういや、そうだな。とギンコは女の方を見る。

「私は妹紅もこう。藤原ふじわらの妹紅もこうだ。よろしくな」

赤ん坊を抱く白髪の女は、人懐っこそうな笑みを浮かべていた。

第二章 筍の薬 参

竹林での調査を一旦打ち切ったギンコは、少なくなった食料を考え、て人里にやってきていた。里はいつかやってきた時とは比べるべくもなく、人で賑わっている。老若男女が往来し、自由奔放に遊ぶ子供たちが笑顔を振りまいていた。

そこには以前のような暗い雰囲気は微塵もない。すれ違い、駆けて行く子供達を横目で見ながら、ギンコは口の端を少し釣り上げた。

「あれ？ ギンコじゃないか。里に戻ってきていたのか？」
「おお。久しぶりだな。つつても、数日ぶりか」

活気があるとはいえ、やはり小さな里である。歩いていけば、知人友人とも顔をあわせるのは必然だ。何時ぞやの流行病の際、それを蟲患いと見抜き、処置をして里を救ったギンコならば、なおのこと、顔は広く知れている。寺子屋の教師、上白沢慧音は、そんな経緯の折に知り合った一人だった。

慧音はギンコを見つけると、少し遠くから声を張り、ざるに乗せた野菜を落とさぬように近づいてきた。

「へえ、夏野菜か。贅沢なざるだな」
「まったくだ。私には勿体ない」

にこやかに語る慧音によれば、農業で生計を立てている家、つまりは読み書きを必ずしも必要としない家庭の子供達も一手に引き受け、教育や保育をしていると、こういった形でお礼をされることが多いそうだ。

役得だな、とギンコが言えば、私が好きでやっていることさ、と返ってくるあたり、慧音は性根しょうねから、教師に向いているのだと思えた。

慧音が抱えるざるには、胡瓜きゅうりと茄子なすと、ギンコは見慣れぬ赤い果実が乗っている。井戸水にでも浸していたのか、野菜の表面には大粒の水滴が幾つか付いていて、時折陽光を反射して、まるで輝いているかのようなだった。

「茄子と胡瓜はわかるが……こりやあなんだ？」

ギンコは見慣れぬ赤い果実を指さして聞いた。

「トマトと言うんだ。知らないのか？」

一つ大きなそれをギンコに差し出して、食べてみると勧めてくる。ギンコはそれを受け取って、しげしげと眺めた。

手に取った重さはなんだかずっしりしている。表面もやけにつるつるしているが、それは茄子とて同じことだろう。完全な球というわけではなく楕円球に近い形状。見た所火は通っていないようだが、生で食べても大丈夫なのか？ と多角的に分析を始めたギンコを見て慧音は苦笑し、毒など入っていないから思い切ってかぶりついてみると言った。

それじゃあ、とギンコも、慧音の言葉通り赤い果実に歯を立てた。ぷつつと薄皮を貫通するような感触が歯に伝わった後、果実の中から赤い水が溢れ出してくる。咄嗟に、歯で削り取った破片と一緒にその冷たい汁を啜ると、爽やかな酸味が舌を刺激し、なんとも言えぬ爽快感がギンコを包んだ。食べたことのない味だったが、悪くない。手や口周りが汚れるのが少々気になるが、それを考慮しても魅力的な果実だと、ギンコは思った。

自然に二口、三口と果実をかじり、一つを丸ごと平らげた後、ギンコは慧音に礼を言った。

「礼が遅れちまったな。初めて食べたが、うまかったぜ、これ。とまと、だったか？」

「ふふ、それは何よりだ。だが食べ方に難ありだな。服に汁が飛んでしまっている」

慧音に指摘されて自分の服を見れば、確かに薄紅色の染みが浮かんでいた。こりやみつともねえな、とギンコが呟くと、慧音がそれなら、と提案してきた。

「良かったら家に来ないか？ 服も洗濯できるし、他の野菜もご馳走するぞ。正直貫いものばかりで一人では食べきれないんだ」

「え？ いや、そこまで世話になるつもりは……」

「いいからいいから！ ギンコさんはもう里の家族みたいなものなんだから、遠慮することはないんだぞ」

「いや、待て。そういうことじゃなくてな……おい！」

半ば強引に、ギンコの手を掴んで、慧音は引きずっていく。この女のどこにそんな力があるのか、その細腕を全く振りほどけないことに、若干驚いたギンコだったが、今はそれよりも気になることがあった。

往来人わうらいにんの中に、ちらちらとこちらを見てくる人がいる。慧音は気づいているのだろうか。否、彼女の世話焼きは性分しょうぶんで、きつと気づいてはいないだろう。

慧音は気づいていない。天下の往来で、年の頃が近そうな男女が談笑し、女が男を自分の家に誘ったという一部始終を見られていたことに。

慧音は一人暮らした。それはギンコも知っているし、里の人間なら言わずもがな。人の口に戸は立てられぬというが、さてどうなることやら。ギンコは、考えるのをやめた。

じゃぶじゃぶと夏にはちようどいい水音を立てながら、自分の服がもみ洗いされていく様子を眺め、ギンコは呟いた。

「あんたは本当に世話焼きだな」

「ん？ そうか？」

嫌な顔一つせず、むしろ爽やかな笑顔を浮かべる慧音に、ギンコは言う。

ありのままに起こったことを話せば、慧音の家に連れ込まれたギンコは居間で染みのついた服を剥ぎ取られ、まず甚平じんべいを着せられた。そうしてギンコが身み着ぎを整えている間に、慧音は夏野菜の漬物を皿に盛り付け、居間に戻ってきた。あれよあれよという間の待遇たいぐうに、ギンコが意見を挟む隙などなく、慧音の行動を止めることをギンコが諦めるのに、さほど時間はかからなかった。

家の裏手の縁側で、軒のきの陰に立ちながらギンコは胡瓜の漬物をかじる。程よい塩気と、胡瓜の瑞々しさが残る、実に美味い一品だ。慧音と言えば、桶に溜めた水にギンコの服を浸けて、もみ洗いをしている。染み抜きには大袈裟なその手つきは、どうせならという慧音のお節介らしい。

「ここままでしてもらっちゃ逆に申し訳ねえよ。なんか、することはねえかい」

「すること？ うーん、そうだな……」

手は休めず、慧音は考える。なんでもいい。なんなら、縁側の雑巾がけでもするか？ とギンコは言う。だが慧音は、ギンコに労働の見返りなど求めていないようで、申し出に返ってきた条件は、服が乾くまで慧音の世間話の相手をするというものだった。

夏の空に、浮雲のような白さをみせて、ギンコの服が揺れている。緩やかに吹く風を受けて、この分なら、夕刻までには乾くだろう、と予想する。

洗濯された服を目の前に、縁側に腰掛けた二人は慧音の望む通り、なんとなく世間話をした。

「そうだ、一つ聞いておきたいんだが」

「なんだ？」

「光る竹、という噂を聞いたことはないか。竹林に光る竹があるとかないとか」

「光る竹？ すまないが私はそういう流行りの噂に疎くてな。聞いたことないぞ。そんなものがあるのか？」

「いや、いいんだ。ただの噂さ」

いよいよ紫にからかわれただけなのかもしれない、とギンコは疑念を強くした。

話題は変わり、慧音の本職の話になる。

「寺子屋の先生つてのは暇なのかい？ 休んでいるところしか見ないが」

「ははっ。この時期はどこの家も家族総出で畑にかかりきりだしな。私が一番忙しくなるのは、むしろ冬の時期だよ」

子供たちが多くてなあ、と苦笑する慧音はしかし嬉しそうだった。何人くらいだ、と気軽に聞けば、四十人くらいか、と返ってくる。そりゃあすごい、とギンコは驚嘆した。

子供たちが元気なのは、里が豊かな証拠である。物が充実した中で、心も健やかに育てられているためだ。慧音は、さぞいい教師なの

だろうと、ギンコでなくとも思うだろう。

先の流行病の件を見ても、寺子屋に隔離された数十人の患者たちの世話を、たった一人で引き受けていたのは彼女だ。心を痛めながら、原因不明の病に苦しむ患者を、感染の危険も顧みずかえりに励まし続けた。

筋金入りなお人好しだな、と思うと同時に、慧音が教師である子供たちは幸せもんだな、とも思うギンコだった。

しばらく慧音の寺子屋談義に花を咲かせていると、家を訪ねてくるものがあつた。ごめんくださいーいと家の表から聞こえる声に慧音が反応し、玄関に向かう。

一人取り残されたギンコは立ち上がり、干されている自分の服へと歩み寄つた。ペたペたと裸足で地面を踏んで近づき、服に手を伸ばす。日差しをよく受け止め、風に吹かれていたそれはもうすっかり乾いているようで、ギンコは甚平を脱ぎ、元の服に着替えた。

縁側に座り、足の裏に付いた土を払う。そして自分が着ていた甚平を縁側で畳んでいると、訪問者の対応に行つたはずの慧音の声で、自分の名前が呼ばれた。何事かと居間を通り抜け、玄関に顔を出してみれば、そこにはいつか見た人がいた。

「お」

「あら、あなたは」

「ん？　なんだ二人とも知り合いだったのか？」

まさしくそうであつた。玄関にいたのは、竹林を目指す道中ですれ違つた薬売りの女だった。傘は被つたままだつたが、近くで見ればその顔立ちがよくわかり、予想通り、若い女であるようだ。

「どうも、あれから光る竹は見つかりましたか？」

「いや、噂はやっぱり噂だったみたいだね。早々に切り上げちまつたよ」

それは残念です。と薬売りの女は笑つた。

第二章 筍の薬 肆

竹林を目指す道中ですれ違った薬売りの女と、なぜか慧音の家で再開したギンコは、あらためてその女に自己紹介した。

「どうも。ギンコと申します」

「ご丁寧にありがとうございます。私は鈴仙・優曇華院・イナバと申します。鈴仙と呼んでくださいね」

女は土間からの小上がりに腰掛けている。こりやまた珍妙な名前だなど、ギンコは思った。

思いがけない縁に忘れそうになったが、そういえば慧音が自分を呼んでいたのだった、とギンコは思い出す。そう言えば、と慧音に聞いた。

「どうした？ 俺を呼んでいたようだが」

「ああ。いやなに、ギンコは旅の身の上だろう？ もしもの時の備えはあるのかと思つてな。かく言う私も、預かっている子供達が怪我をした時なんか塗る軟膏を鈴仙に卸してもらっているから」

「そいつは、お気遣いどうも」

とは言え、蟲師という職業柄、ギンコは傷薬などの簡単な薬の調合はお手の物だった。それゆえ薬売りに頼ることはあまりないし、今回も必要なかったのだが、慧音の心遣いを無下にするのめなという思いもあった。

ギンコはちらりと足元を見て、しゃがみこむ。そして、鈴仙が背負ってきた薬箱に手を伸ばした。一つ引き出しを引くと、中には乾燥させたキノコのようなものが入っており、ギンコは森でキノコを追い求めていた少女を思い出した。

「それは滋養強壮に効きます。煎じて飲めば体の芯から熱を持ち、眠気が飛んで、力が溢れます」

「知つてますよ。とある地方の漁師が、夜しか獲れない獲物を狙う際、冷たい海風と眠気を吹き飛ばすために好んで服用していたことから、漁の夜、イサリヤタケと名がついたものだ」

淡々と語つて見せるギンコに、鈴仙は目を丸くした。

「よく、ご存知ですね。幻想郷には海がないのに」

「まあな。職業柄、各地の草木にも、存外詳しくなるもんでね」

「ギンコは外から来た人なんだよ」

「ああ、どうりで」

妙な雰囲気の人だと思いました、と鈴仙は手を叩いた。

ギンコは他の引き出しも開けて、中を見たが、ギンコが知識を披露できる生薬しょうやくはそれほどあるわけではなく、あとは薬包紙に包まれた粉薬が主だった。

「これらの薬には、どんな効用があるんです？」

「色々ありますよ。頭痛、腰痛、吐き気、二日酔い、胃痛、便秘、不眠に、あとはあまり大きな声では言えませんが、不妊治療薬から媚薬まで」

指折り数えて、鈴仙は薬の効能を挙げ連ねた。

ギンコが薬に理解のある者だとわかっていたからこそ、鈴仙は躊躇わず話したのでろう。実際、後半の薬は大きな誤解を受ける事が多いが、本来は夜の営みを手助けする程度のものであるのが正しく、子宝に恵まれない夫婦にとっては大変ありがたい薬である。

しかし、巷ちまたで同じ謳うたい文句の薬は、人の正気を失わせる悪質なものである事もあり、庶民の感覚として、それらは手を出すべきではないものとされている事が多い。つまり、自身が調合した薬に余程の自信がなければ、色眼鏡で見られることを考慮して、大々的に売り出すことはまずないと言えた。

そしてそれらを正しく調合できるという事は、その薬師の腕の良さの指標ともなるため、薬の内容を聞いたギンコは、そりやすごい、と賞賛の言葉を口にした。

しかし、一つの引き出しに手を伸ばして、ギンコはその手を止めた。馴染みのある気配がする。とても希薄だが、目に見えぬ奴らの匂いがした。ギンコは慎重に、そり、と引き出しを引いた。

「それが不妊治療薬ですよ」

「へえ」

引き出しには、小分けに薬包紙に包まれた薬が入っている。だがも

もちろん、それもギンコに必要なものではなく、ギンコは引き出しを戻して、今回は購入を見送ることを鈴仙に伝えた。そうですか、と鈴仙は薬箱の戸を閉めた。

ギンコは鈴仙に質問する。

「その不妊治療薬だが、あんたが調合したのか？」

「いえ。私の師匠が作ったものです」

「確か、永遠亭だったか」

「そうだ。よく憶えていたな。軽く話しただけなのに」

「実際に使用した者は、憶えているか？」

「？ 購入したお家なら……」

そこまで聞いて、ギンコはすつくと立ち上がった。何事かと慧音、鈴仙の二人が顔を見合わせる中で、ギンコは毅然として言った。

「その不妊治療薬を購入した家に、案内してくれ」

ギンコに頼まれ、鈴仙は治療薬を購入した家へと、ギンコを案内した。目的はわからなかったがとりあえず案内した鈴仙と、彼なりに何か気になることがあるのだろうと察した慧音との三人で、その民家へとやってくると、三人を迎えたのはやんちゃな五人兄弟だった。

「あ！ けーねせんせーだ！」

「ほんとだー！」

「おう、慧音先生だぞー」

早速まとわりつかれている慧音と。

「だれー？」

「しらがー」

「おかーさーん」

「……その、なんだ。服を引っ張らんでくれるか」

意外にも子どもの興味を引くらしいのはギンコだった。

ギンコたちがやってきたことに気づいた子供らの母親が、家の裏手から顔を出す。ギンコの姿を見つけると、小走りで駆け寄ってきた。幼く見える若い女だが、この子らの母親らしい。その様子をとらえ、ギンコが軽く会釈をする。

「どうも」

「あら、あなたは」

どうやらギンコの顔を知っているらしい。流行病が去った後開かれた宴の席で、いつの間にか顔を合わせていたのだろう。もつとも、ギンコは一方的にお礼を言われる立場だったので、いちいち出会った人間の顔は憶えていなかった。

とにかく、話が早いのは助かる、とギンコは本題を切り出した。

「ちよつと、お宅に聞きたいことがありますね。お時間、よろしいですか」

「聞きたいこと、ですか？ 私でよろしければ構いませんが……ちよつと、お前たち静かにおし」

ギンコの言葉に若干惑った様子の女性だったが、しらがーしらがーとギンコの土色のコートを引っ張る兄弟と、慧音に抱っこをねだる女の子をたしなめて、立ち話もなんですから、どうぞ中に、と三人を家へ招き入れた。

「どうぞ、お座りください」

子供達が遊んでいる様子がわかるよう、障子が全開になっている居間に通された二人は、ギンコと女がちやぶ台を挟んで向かい合うように座り、ギンコの少し後ろに慧音が座るような形になった。鈴仙はなぜか家上がることを拒み、外で待つと言って聞かなかったので、今は家の玄関先にいるのだろう。

縁側には先ほどもまで干されていたのであろう洗濯物が山となっている。その向こうに見える小さな庭で、子供達が元気にはしやぎ回っていた。

少し不安な表情を見せる女性に、まず、ギンコは外で遊ぶ子どもたちを眺めて言った。

「元気な、お子さんですね。上の子は何歳ですか？」

「え？ えーと、今年で八つになります、あの、それが何か？」

「いえ、先ほど私の服を引っ張っていた二人は年も近いようですし、

顔も似ていたので、双子なのかなと」

「はい。上の子が双子で、下に妹が二人と、末に弟が」

「大家族ですな。ただでさえ、子育てというのは大変な仕事だ。さぞ苦労もあるでしょう」

「ええ、まあ。ですが、みんな可愛い子達なので……」

女が慈しむように表情を崩す。小柄で幼い印象を受けた女性だったが、この人も母なのだ。彼女は賑やかに聞こえる甲高い子供達の声を聞き、外で遊ぶ彼らに、どこまでも優しい視線を向けていた。

「それで、お話というのは」

「ええ。単刀直入に聞きますが、最近、身の回りで妙なことはありませんか？」

ギンコの問いに、女がぴくりと反応する。妙なこと、とは？ と返す女の視線は明らかに泳いでいる。後ろから見ている慧音も、何か隠していることが分かるくらい、明確な兆候だった。

「妙なこと、とはあなた自身のことですよ、奥さん」

さらに問い詰めるギンコに、ちらりと、泳いでいた視線を合わせ、女が観念したように喋り始める。無理に隠すつもりは、ないようだ。

「……最近、夢を見るんです」

「夢、ですか」

「夢だけではありません。その、頭と体が離れてしまうような……私自身眠っているのです、無意識に奇妙な行動を取ってしまうのです」

「……夢遊病、ですな」

はい……。と頼りなく返事をした女は、ぽつりぽつりと、最近起きる“妙なこと”について語り出した。

曰く。夜、床についた後。どこからともなく赤ん坊の泣き声が出て、はたと目が醒めるのだそうだ。

それだけならば、ただの夢だと納得もできようなものだが、奇妙な事とはその時の状況で、上半身を起こした状態で目を覚ましたり、ひどい時には家の外で立ち尽くしている時もあるという。

いわゆる、夢遊病の症状に、女も最初はこわごわと医者にかかったが、原因は分からず、子育てで気が滅入っているのでしょうと、対症

的な診断をされた。そしてそこへ畳み掛けるように病が流行り始めたのだそうだ。

流行病で村の病に対する意識が過敏になっている今時に、こんな妙な話をすればいたずらに不安を煽るかもと思いつてからは、誰に相談する事もできずに今まで騙し騙しやってきたのだと、女は言う。

「その、隠すつもりはなかったのですが、おかしな事を言い出せば、皆が不安がるかと思って、私……」

「そうでしたか。いや、よく話してくれました」

夢遊病の症状は、白痴の者に多い。自分でも、症状を認めたくなくて、偶然だろうと思いつ込んだり、疲れていると判断したりするのは無理からぬ事であった。ましてや一度、医者にかかっているのなら、その診断を信じようとするだろう。

しかし、ギンコは女の話に、確かな気配を感じ取った。正確には、彼女が飲んでいた薬のことである。ギンコは改めて、女に確認する。

「奥さん。もうひとつお聞きしますが、奥さんは子供を産む前、薬をお飲みになりませんでしたか？」

「え？……あ、はい。確かに飲みました。その、今でこそ五人の娘息子がいますが、当時はその、子を授かりにくかったもので」

ギンコの問いに、少しだけ考えた女が答える。やはりあの薬を飲んでいたか、とギンコは納得し、ここまで聞いているだけだった慧音もさすがに察したようで、ギンコに声をかけた。

「ギンコ、もしかしてあの薬……」

「ああ。まだ確証はないが、おそらく、蟲の類のものだろう」

ギンコが薬を見た時に感じた蟲の気配。何かがある。薬師の作為か、あるいは知らず紛れ込んでいるのか。どちらにせよ、確認してみるほかに、知る術などない。

「永遠亭か……」

媚薬を調べられるほどの薬師。ギンコはまだ見ぬ人物に思いを馳せ、顎をさすった。

第二章 筍の薬 伍

永遠を名乗るその亭あすまやには、住人をして生ける者など存在しなかった。逃げ延び、身を隠すために構えられたくせに、邸宅と呼べるだけの装いであるその家には、穢けがれを嫌う月の民が根付いている。

月では人に囲まれていた自分も、今は竹に囲まれ、土壁に囲まれている。常に囲まれる我が身なれど、それゆえ中心に座する彼女は今、散りゆく竹の葉を見つめて何を思うのか。

どこか歪いびつで、しかし完全な彼女は、縁側に座り込んでもう数時間も動かずにいた。いや、動かないというより、動けないと言ったほうが正しいか。それもこれも、自分の膝の上で寝息を立てる兔に原因があつた。

すやすやと寝息を立てているのは因幡いなばの白兔。ふわふわと癖のついた短い黒髪から、白く長い兔耳を生やし、小さな手足を丸めて眠る様は幼い少女に相違ない。しかしその実態は、遙か長く、気の遠くなるような時間を駆けた命であつた。

一時の午睡。彼女らの時間の尺度で見れば、それこそ瞬きよりも短い時間。だが今この場において、この時こそが大切なのだ、経験から知っている彼女は、壊れ物でも扱うような丁寧な手付きで、兔の髪を梳すいていた。

やがてぴくり、と兔耳が反応し、小さく声を漏らして寝返りを打つた。先ほどまで頬をすり付けるようだったそれも、仰向けになる。その拍子になのか、起きたから仰向けになったのか、とにかく細く目を開けて、身じろぎした兔に、彼女は微笑みかけた。

「おはよう因幡」

「おう……」

まだ寝呆けているのか、半開きの眼は中空を彷徨っている。構わず指先で、前髪をくるくると弄んでやれば、兔はもごもごと口を動かして、ひとつ、大きなあくびをした。

「しまったなあ、すまん姫様。眠ってしまったよ」

「いいのよ。私、動かないことは得意だから」

因幡と呼ばれた妖怪兔は、自分が眠って膝の上を占領してしまったことを、姫様とやりに詫^わびた。そんな因幡の謝罪を笑顔で受け止め、代わりにいい時間を過ごしたわ、と微笑みかける女の名は蓬萊山輝夜。かの御伽草子、竹取物語に端を発する、伝説の人物であり、この邸宅の主人である。

黒く光を吸収する髪は絹糸のようになめらかに広がり、背中から腰、床にかけて黒い川を作っている。桃色と赤で上下の別れた着物に身を包み、淑やかに魅せるその姿は大和撫子そのもので、姫様と呼ばれるだけの品格を備えていた。

「眠いなら、もう少し寝ていてもいいのよ?」

「ううん。もう目がさめちまったよ。だけど、もうちよつと膝は貸してくれるかい?」

「ええ、お好きにどうぞ」

輝夜から許可を得た因幡は、じゃあ遠慮なく、とその魅惑的な御脚に頬を擦り付けた。質のいい生地が頬に擦れ、なんとも心地がいい。むふふ、と満足げな因幡の様子を見て、輝夜も因幡の髪を梳く手の動きを再開する。

二人は縁側から、目の前に広がる邸宅の庭を眺めていた。何本か地面から突き出た竹が風に揺れ、日の光を所々遮り、地面に複雑な模様を描き出している。白い玉砂利が敷き詰められたそこにおちる影は、まるでひとつの水墨画のようだ。

竹の葉が散る。竹の子の成長に合わせて、竹の親株が栄養を与えているのだ。成長という変化。しかしそれも、永遠を冠するこの場には関係のないこと。葉が散る様子が見えるのは、この亭の外、土壁を超えたその先でのみである。

風にさざめくばかりの竹の葉は落ちない。永遠を約束されたその場所に、しかし変化は訪れる。人がやってくる。そう、因幡に伝えたのは、庭に飛び込んできた一匹のウサギだった。

「姫様、鈴仙が人を連れてくるって」

「あらそう。お友達かしら? そんなわけないわよね」

「なんか妙な男だって。夜の匂いがするってさ」

「夜の匂い？ お夕飯のことかしら。もしかして料理人？」

「姫様……お腹空いてるのか？」

「割とね」

呑気な言葉でやりとりする二人は変化に疎い。この場を訪れる人がいても、そこだけは変わらない。それがたとえ、風雲急を告げる使者だとしても、変わらないだろう。

ここには長い時間が溢れている。始まりも、終わりもない。未熟は未熟なままで、完全なものは、やはり完全なままで。

竹の葉は落ちない。それでも影は変化する。この場所において、決まった形に収まらないそれを眺め、二人は長い時間を生きていた。

まず遠目に見て、雅な場所だとギンコは思った。獣道が続くその先に、竹林を押し広げるような存在感を放つ、隠れ家が見えた。

「あれが永遠亭か」

「ええ」

邸宅を囲む白い土壁の上から立派な瓦屋根が顔を出し、ギンコをして豪邸と思わせるその見事な佇まいに、しばし見とれてしまう。いつか都で見た料亭のようだ。驚いた。強烈に、頭に残っていた記憶を手繰り寄せ、ギンコは目の前の現実とそれを重ねた。

鈴仙に続いて門をくぐると、ギンコはまた驚いた。今度はその景観にではなく、目の前を突然横切る何かが現れたためだ。次の一步を引っ込めて、飛び出してきたそれを見てつぶやく。

「……なんだ、兎か」

「いじめちゃダメですよっ」

そんなことしねえよ、と庇の下でこちらを振り返って言った鈴仙に反論した。

「ただいま戻りましたー」

がらり、と扉を開け、鈴仙が帰宅の挨拶をする。草履を脱ぎ去り、ギンコを中へと招き入れる。革靴を脱いだギンコが一步、床を踏むと、ぎい、と大きな音がした。

鈴仙の後に続くギンコは、奥の部屋へと通された。鈴仙が襖ふすまを開け

て、ギンコを中へ促す。

「こちらでお待ちください。今、師匠を呼んで参ります」

「ああ、急にすまんな」

ギンコの訪問は急なものであった。それというのも、鈴仙が人里で販売していたとある薬について、ギンコが疑念を抱いたためだ。

不妊治療薬。効果のほどは確からしいが、それに蟲の気配を感じ取ったギンコは薬師に話をしに来たというわけだ。

通された部屋は十二畳の和室だった。畳の匂いがするそこには、茶色の大きな座卓が一つ、部屋を占領するように置かれているだけである。華美な装飾は見られないが、手入れが行き届いている部屋に一人立ち、とりあえずギンコは、入口近くの座卓の端に、腰を落ち着けた。てつきりこの部屋には自分以外誰もいないと思っていたギンコだが、しかしこの部屋には先客がいた。

「うおっ」

座卓の下から飛び出してきたそいつは、胡座をかけたギンコの上ですつぽりと収まり、我が物顔で居座った。

兎。長い耳が特徴で、ふわふわの体毛で全身を包んだ、雪だるまのようなそいつ。玄関先でも見られたが、この屋敷のいたるところにいるのかもしれない。人に慣れているのか、ギンコの上から動こうとしないそいつを、ギンコは優しく撫でさすった。

「お前さん、飼われてんのか？」

兎は答えない。当然だ。ギンコは耳をつまんで持ち上げ、離す。たらし、と力なく垂れるそれに、人間の言葉は届かない。

愛らしい見た目の彼らである。愛玩用として飼われていても、なんら不思議はない。この家では人に愛でられているのか、妙に太々しい態度の兎に対し、童わらわのようないたずら心が芽生えたギンコは、ぽつりと言った。

「非常食にでもすんのかねえ」

兎鍋というものを思い出したギンコは、そんなつぶやきを漏らした。

非常食。その独り言に反応するように兎の耳が跳ねる。ギンコの

上から飛び出して、開けっ放しだった襖から、廊下へと飛び出してしまった。まさかそんな反応が見られるとは思っていなかったギンコは、その素早い動きに目を丸くした。

そして兎が飛び出して行ってすぐ。廊下に人の気配があった。襖からすいと顔を出したその人は、ギンコを見て、言った。

「あまりうちの子をからかわないでいただけますか？ あれでいて、意外と繊細なんです」

「……そのように」

ギンコがそう答えると、女は微笑んだ。やはり愛をもつて、あの兎は飼われているのだろうか。少し申し訳ないと思ったギンコの隣に、女は静かに座った。ちようど座卓の角を、二人の間に挟むような格好だ。対面では、少し距離が開いてしまい、話すには不都合だと判断したのだろう。

ギンコの方を見て、薬師は名を名乗った。

「初めまして。ここで薬師をやっています、八意永琳やじこう えいりんと申します」

「どうも。蟲師のギンコと申します」

「蟲師、ですか」

聞き慣れないと言ったように復唱した永琳に、ギンコが補足する。

「草木や動物とはまた違う、微小な生き物たちを相手取る生業です。ここでは少し、珍しいようですが」

「ええ。そう名乗る方には初めてお会いします」

すました表情を浮かべる薬師の女は、その佇まいに余裕を感じさせた。そしてここでも、ギンコは既視感を覚えた。女から発せられる雰囲気。妹紅と名乗る竹林の少女と出会ったときにも感じた、経験からの直感。

ギンコは確信する。この薬師も、竹林の少女も、等しく永遠の命を持つ存在だと。ナラズの実を食べたのか。もしそうなら、それは禁忌である。だからこそ、軽々には触れられぬ話題でもあった。

ギンコは少し考える。薬師はそんなギンコを待つように、姿勢を正したまま、薄く閉じた視線を座卓に注いでいた。その見透かすような表情に、ギンコは唾を飲み込んだ。

「……聞かないのですか？ 私たちの素性を」

見透かされているようなその言葉に、ギンコはとつさに返事ができなかつた。

「……今回は、それが目的ではありませんので」

そうですか、と静かにつぶやき、永琳はそれ以上、言葉を口にしなかつた。

しばしの沈黙の後、やがてギンコは口を開く。今回の目的を再確認して、薬師に問う。

「里で、薬を売っているそうですね」

自分の疑念を後回しにして、ギンコは今回、ここを訪ねた目的を話す。薬師を知らぬといったこの薬師の言葉を信じて、言い含めるように尋ねる。

「ええ」

「その薬は、あなたが調合されたものですか？」

「ええそうです。それがどうかいたしましたか？」

永琳は淡々と、ギンコの質問に答えていく。

「その薬の中に、蟲が混ざっています。おそらくは、知らず調合したのでしょうが、これ以上、その薬を広めるわけにはいきません」

「まあ、そうでしたか。それは申し訳ないことをしました」

永琳は素直に、ギンコの言うことを受け入れた。考え方によっては、自分の仕事にいちやもんをつけられているというのに、やはりどこか淡々としている。物の考え方が違うのだろうか。どこか紫と同じ雰囲気を持つ薬師に、ギンコは続けた。

「蟲が混入しているのは不妊治療薬です。実際にそれを使用した女性が、夢遊病を発症しています。原因を調べたいのですが、協力していただけますかな」

「ええ、それはもちろん。何をすればよろしいでしょうか？」

協力的な彼女に、ギンコは仕事場を見せてほしいと頼んだ。鈴仙の持っていた薬はもう調べてある。その結果、薬自体が蟲であるということはなかつた。だとすれば、原料の一つに蟲が紛れ込んでいると、ギンコは考えた。

永琳はギンコの頼みに応じ、それではこちらに、と立ち上がった。永琳について部屋を移動する。やがて一つの襖の前で足を止めた。永琳は、静かにその襖を開けて、中に足を踏み入れた。どうやらここが、彼女の仕事場であるらしい。中を覗いたギンコに、永琳はどうぞ、と言って部屋の中を見せた。

永琳の仕事場はギンコにとって、初めて見る物ばかりだった。特にギンコの目を引いたのは、部屋の壁に接する机一面に広げられた硝子の器具だ。どれもこれも、奇妙な形をしていて、目的も用途も見当がつかない。鞠のような球形から細く長く、管が伸びた形の物。それをしげしげと眺め、ギンコは永琳に聞いた。

「初めて見る物ばかりだ。これらで薬の調合を？」

「調合よりも、精製を行うのに使う器具です。フラスコ、と言います」

「精製……蒸留や分留ですか」

「あら、よくご存知ですね。蟲師というのはそういう知識も必要なのですか？」

「まあ、稀に必要ですね。それで、薬の原料はどこですか？」

「原料はこちらの棚に全て揃っています」

永琳が指した部屋の入り口横にある棚には、大小様々な硝子の瓶が置いてあり、褐色の物や透明な物がずらりと並んでいた。透明な硝子の筒の中には瑠璃色の液体だったり、薄黄色の粉末だったり、乾燥した草木だったり収められている。蟲師をやっている手前、生薬にはそれなりに詳しくなったつもりでギンコだったが、初めて見る物も多数あった。

ギンコは改めて、永琳の薬師としての腕を理解する。慧音から話半分に聞いていた、万能薬を作れるというのも、あながち嘘でもないのかもしれない。

「圧巻ですね。知らない物ばかりだ」

「そうなのですか？ よろしければ全て解説させていただきますが」

「いや、興味は尽きませんが、今はやめておきましょう……おや」

解説をしてもいいという永琳の誘惑を断ち切り、ギンコは棚に目を走らせる。そして一つの硝子の容器に目を止める。手を伸ばし、それ

を持ち上げて、ギンコは確信する。

「これですな、原因は」

「まあ、やっぱりそれでしたか」

「やっぱり、とは？　ギンコが永琳に問いかけると、永琳はギンコが原因だとした液体を手に入れた経緯を話した。

「その瓶の中身はとある不思議な竹から採取した水が入っています」

「不思議な竹、ですか」

「はい。部下が見つけたのですが、周囲の竹より一回り太い、白く光る竹です」

ギンコはやはり、と頷く。それこそが蟲です、と永琳に伝えた。

「おそらくそいつは、まがりだけ間借り竹、という蟲です」

「はあ」

ギンコの語りが、永琳の仕事場に響く。仕事場の雰囲気には圧倒されっぱなしのギンコだったが、ここからは蟲師の領域である。

「群生する竹に成りすまし、その根に寄生する。竹から養分を吸って育つが、その分竹を茂らせる成分を根に戻し、竹林を広げて、自分の子株を増やしていく。そういう、蟲です」

「そうだったのですか……」

「そういえば、あなたはなぜ、この水を薬にしよう？」

ギンコは永琳に聞いてみる。薬や医療に端を発する研究をする職というものは、異常を異常と片付けず、究明していくものだというのは知っている。かく言う自分も、今ある知識を総動員してもわからない現象に直面した時、仮説を立て、実験をすることで対処法を見つけようとする。永琳もその類かと予想したギンコだったが、永琳から返ってきたのは意外な答えだった。

「それを原料に不妊治療薬が作れたからです。いいえ、より詳しく言うなら、作れることを知っていたから、ですか」

「……なんですと？」

それは奇妙な答えだった。額面通りに受け取るなら、間借り竹の水を使って作る薬の製法が、どこかに記されていることになる。そんなことは蟲師をしているギンコをして、聞き及ばぬことであった。

永琳は答える。そして、ギンコはやはり、幻想郷という世界の特異性を思い知ることになる。

「私はあらゆる薬を作ることができます。その製法、原料から薬の効能まで思いの儘ままに描き、生成することができます。その光る竹を見た時も、『この竹の水から不妊治療薬が作れるな』と知っていたから、水を採取し、薬を作ったまでのこと。蟲という存在は分かりかねますので、副作用までは知り得なかったようですね」

「ことも無げに、永琳は言い切った。その意味するところを知り、ギンコは愕然とする。やはり自分の常識など、この世界には通用しない。」

この娘は間違いなく天才だ。ギンコはいつか出会った、描いたものが既存の生命でなくとも、命を持って動き回るといふ、神の左手を持つ少年のことを思い出した。どうしてこうもこの世界には、世界を根底から揺るがすような才能が好き勝手を許され、放逐されているのか。いや、だからこうして、竹林に身を潜めているのか。この世界の行く末に、一抹の不安を持ったギンコであった。

瓶を棚に戻して、ギンコは永琳に言った。

「……とにかく、この水を使って薬を作るのはもうやめてください。夢遊病患者を、これ以上増やすわけにはいきませんからな。それと、この水を採取した竹がある場所に、案内していただけますか」

「心得ました。案内は、私の部下に任せても？」

「(づ)随意に」

「そうですか。では……鈴仙。ちよつといらつしやい」

永琳は決して大きくはない声で、薬を売っていた女の名前を呼んだ。しばらくもせず、廊下を小走りでこちらに近づいてくる音がする。よほど耳がいいのか。そう思ったギンコだが、やってきた女の姿形を見て、なんとなく納得をした。

「師匠。お呼びでしょうか」

「この人を、例の光る竹の場所に案内して差し上げて」

「了解しました。じゃあギンコさん、いきましようか」

地面までとどきそうなくらい、長く淡い紫苑しおんの髪を棚引かせ、頭か

ら兔の耳を垂らした女が、そう言った。

第二章 筍の薬 陸

鈴仙の案内で光る竹を指して歩いていたギンコは、目の前を歩く彼女の一点を見つめていた。

それは短い腰巻から見える肌色の聖域、などではなく、頭の上で力なく立っている兎の耳である。人里で会った時は人間だと思っていた彼女も、見慣れた旅の装束を剥ぎ取ってみればその正体は月の兎だというのだから驚きだ。

「お前さん、月から来たつてのは本当かい」

「ええ。正確には、逃げ出してきたんですけれどね」

情けない話です、と鈴仙は笑った。過去を詮索するつもりはなかったギンコは、そうかい、とだけ呟き、それ以上は聞かずに、鈴仙から視線を外した。

「それにしてもすごいですね、ギンコさんは。蟲師という方は、ああいうものにお詳しいんですか？」

「まあそれが生業だしな。俺はお前さんの師匠の方が、よっぽどすごいと思うよ」

ありやあ天才だな、とギンコは言う。見ただけで原料を判別し、どういった効能の薬が作れるかわかるなんて、天才以外のなんだというのか。過程を省略し、最良の結果を得る。永琳の底知れなさは、ギンコにもわからないことだらけだった。

「でも師匠、蟲のこと知らなかったんですよね？」

「いや、あれはわからないね。もしかしたら、知ってたかもしれないぞ」「え？　じゃあなんで薬を……」

「それこそ、あの薬師にしかわからないことだろう。案外、人間のことなんてどうでもいいんじゃないか」

「あーそれはありそうですね」

「……へえ」

冗談で言ったつもりのことだったが、肯定されてしまえばギンコとしても気の抜けた返事をするしかなかった。

あ。でも、と何かに気づいたように鈴仙が言う。ギンコもそれに反

応し、耳を傾けた。

「師匠は蟲が見えてないみたいですから、本当に知らなかったと思いますよ。目の前を横切っても、目で追いつくすらしません」

「まるで、お前さんは見えているような言い方だな」

「はい」

「……本当に？」

「本当に」

ぼんやりとですけどね。と鈴仙は付け加える。意外だった。自分以外に、この世界で蟲を見る者がいようとは。いや、ない話ではない。むしろ自分だけが見えているという考えが浅はかだったのだ。この世界には空を飛ぶ人間も、鴉天狗も、得体の知れない隙間を操る者もいる。

この世界の深淵を、ギンコはまだ知らない。そう、彼は最近やってきた、いわば新参者なのだ。常識にとらわれてはならない。普段蟲と相対している彼らしくもなく、その事実を再確認する。

そしてその事実を再確認した時、ギンコは蟲師を知る少女のことを思い出した。竹林で一人、赤ん坊を育てている少女。自身が抱える赤ん坊を捨て子だと言っていた、奇異な見た目の女。頭の中で点と点がつながり、一つの推論を導き出す。予感がした。

天才ではないギンコは、自身の中にある直感を、推論以上に高めることはできない。だが今回、降ってわいたそれは、確かなものとなってギンコの頭を占領した。

「あ、見えてきましたよ」

鈴仙が見つめる先に、白く光る竹の細かい物が見える。ある日に、人と蟲の交ざりモノを相手取った記憶が蘇る。それは竹林に住む夫婦が、白い竹との間に子を成した記憶。

なぜ、最初の女は子を孕んだのか？ 聞けば女は、草木と話をするような変わり者だったという。もとより、蟲に魅入られていたのだらうと、ギンコは考えていた。ギンコの中で間借り竹とは、竹林に寄生する、ただそれだけの蟲だったのだから。

それが思い違いだったとしたなら。間借り竹は元より、子株で人の

子を形どつて、人を味方につけようとする蟲だったのなら。

“間借り”と言う言葉の本当の意味を、ギンコは考える。間を借りる。人と蟲の、間を、借りる。

「あれ？ 誰か居ますね」

白い竹の根元に、しやがみこむ人がいた。竹と同じ、白い髪が見える。

常識にとらわれてはならない。蟲のことを完全に知ることなど、できはしない。

ギンコと鈴仙の足音が、竹林が風に靡く音と重なる。がさり。その音に反応して、しやがみこんでいた女が、二人の方に振り向いた。

「……妹紅」

「……ギンコ」

竹は周囲のものより一回りも太く、白くぼんやりと光を放っている。見るからに怪しげな雰囲気放つその根元に、しやがみこんでいる人がいる。その人物に、ギンコは呼びかけた。

竹林に住む少女、藤原妹紅が、竹から水を取っていた。右手には鉈を持ち、竹に一文字の傷をつけ、隙間から溢れる水を竹の筒に満たしている。

ギンコは鈴仙より一步前に出て、妹紅に歩み寄る。観念したように、妹紅は立ち上がった。背中にはいつかギンコも抱いた赤ん坊がいる。なぜ気がつかなかった。ギンコは妹紅に問いかける。

「その赤ん坊。拾ったんだっただ。それは本当か」

「ああ、本当だ。ただちよつと、筍の中に居たってだけさ。いいだろ？ 御伽話の中には、竹から生まれ出でる、一寸の娘もいるくらいだからな」

「確かに。だが、人の心を惑わすなら、それはいつか悲劇に変わる」
「え、え？ あの、ギンコさん、妹紅さんと知り合ってたんですか？
というか、妹紅さんの背負ってる赤ん坊って、え？」

永遠亭への帰り道には、妹紅の家の近くを通ることはない。同じ竹林の中にいようと、妹紅と永遠亭の住人たちの間には特別深い交流は

ないのだろう。状況についていけない鈴仙が、ギンコと妹紅を交互に見やり、あたふたと取り乱している。

落ち着け、とギンコは鈴仙を宥め、状況を説明し始める。それは自分自身で、この悲劇から目を逸らさぬためでもあった。

「妹紅の近くに見える光る竹は、間借り竹という蟲だ。竹林に寄生し、その家族になりすますことで子株を増やす。お前の師匠は、この竹から取った水で、薬を作ったんだ」

「あ、はい。そこまではわかります。この竹を見つけたのは私ですか」

「……」

ギンコの語りに耳を傾けるのは鈴仙だけではない。妹紅もまた、この竹のことを聞いていた。

ギンコは妹紅に視線を向けている。妹紅は、そんなギンコの視線から逃げるように目を伏せていた。

「俺はこの竹について一つの経験がある。それはこの竹と、人の間に生まれる交ざりモノ、俺たち蟲師が、“鬼蟲”と呼ぶモノについての経験だ」

「おにこ、ですか」

「ああ。そのときは、女が筍を身ごもった。赤ん坊は、その筍の中から出てきたんだ。そしてその赤ん坊は、普通の食物は一切口にせず、間借り竹の親株から取れる水だけで、命を保っていた。それ以外は人と変わらず、一人の男と愛し合っただけだった」

ギンコの淡々とした口調が、竹林に溶けていく。妹紅も鈴仙も、その言葉を受け止める。ギンコは妹紅が左手に持つ竹筒を、正確にはその中にある水を指差した。

「その水には、親株からの影響力を伝える性質がある。その水を体内に取り込んだ者は、この親株から離れることがなくなる。鬼蟲と結ばれた男も、その水を飲んだことで竹林から出ることができずにいた。さらに取り込み続けられれば、この竹に敵意を向けることすらできなくなっていたはずだ」

ギンコは語る。それは蟲の話。荒唐無稽で、でも不思議と真実味の

ある話。竹の葉が散り、風が強く吹き抜けていく。

「俺も今まで思い至らなかつたが、これは明らかに人に向けられた性質だ。竹を切り、生活に利用するのは人だけだからな」

「えっと、つまりはどういうことなんでしよう？」

疑問符を浮かべる鈴仙に、ギンコは言う。

「わからんか？ この竹は、俺たち人を味方につけようとしているんだ。竹林のみならず、赤子の形で人の群れに紛れ込み、交配することで自分に逆らえぬ人の子を増やしていく。切り倒されぬために。そういう蟲だつたんだ。現に、里でこの水を原料にした薬を服用した者は、夢遊病を発症している。おそらく、睡眠をとっている無意識が、この竹に影響されていたんだろう」

「へえ、そうだつたんですか？ 面白い性質の生き物もいたもんです」
ギンコの経験から語られる話。竹林で鬼蠱と結ばれた男がいたという話の結末は、鬼蠱の女が自分が竹の水を男に飲ませたせいで男が竹林から出られなくなったと気づき、親株の意思に逆らつて白い竹を切り倒すことで、男は無事に影響力から抜け出して、竹林の外に出ることができるようになったというものだ。

「だつたら、今この蟲を切り倒しちやえばいいんじゃないんですか？
そうすれば里の夢遊病も治るでしょうし、と軽い調子でいった鈴仙は、やはり現状を正しく理解していない。それは仕方がない。理解のためには、後一つの事実が足りないからだ。今それを知り、理解しているのは、ギンコと、妹紅だけだ。」

鈴仙、と名を呼び、ギンコは事実を言つて聞かせる。

「親株が切り倒された後、鬼蠱はどうなつたと思う？」

「え？ んーと、どうなつたんですか？」

「……死んでしまったそうだ。枯れ木のように脆くなり、崩れ去つてな」

「え……じゃ、じゃあ」

鈴仙はここでようやく、頭の中の点と点が繋がった。妹紅の方を、鈴仙は見た。

「じゃあ、里の人たちを治すにはこの竹を切らなきゃならないけど、こ

の竹を切ったら、妹紅さんが背負っている赤ん坊は……」

「……おそらく、死んでしまっただろう」

ギンコは告げる。それがたとえどんなに残酷なことであっても、事実を受け止めなければ、今は前に進まない。妹紅は右手に力を入れ、鉋の柄を、強く握りしめた。

「妹紅」

「……いやだね」

ギンコの呼びかけに、妹紅は反発する。赤ん坊を庇い、妹紅は叫ぶ。「この子に罪はない。たとえ紛い物でも、生まれて、生きている命を、なぜ摘み取る必要がある」

「不妊治療薬を服用したのは一人じゃない。これから、どんな影響あるのか、わからんのだ」

「ダメだ。この子は……殺させない」

赤ん坊が泣き喚く。妹紅が叫ぶ。竹の葉が散る中に、紛い物が二つ。白いそれは、心の隙間に入り込み、群れの家族のふりをする。孤独な少女は、歪に生きる紛い物を愛していた。

第二章 筍の薬 漆

暁を背負い、ギンコは足を引きずっていた。肩は落ち、靴底に鉛でも仕込んでいるのかと思う歩調を見れば、ひどく落ち込んでいるように感じる。だが正しくは、ギンコは落ち込んでいるのではなく、考え事に頭の多くを割いていたのであった。

ギンコをそうさせているのは頭を悩ませる目の前の難問である。里の夢遊病患者を治す術が、一つの命の犠牲の上に立つというのは、ギンコをして面白くもない解決法だ。できれば、そうしたくはない。しかしその感情こそが、ギンコを悩ませている原因になっていた。

もう目の前まで里が迫っている。竹林からここまで、普通に歩けばとうに到着していい時間が経っていた。その間、無言で考え事を続けるギンコの後ろを、一人ついてきていた鈴仙は、たまらずギンコに声をかけた。

「ギンコさん。もう里ですよ。とりあえず慧音さんのところに行きましようよ。考えるのは、それからでもいいじゃないですか」

半分泣き言に近い声色で、鈴仙はそう提案した。正直言って歩き疲れた。陽は沈み、その名残りも徐々に薄れつつある空のせいで、気分まで落ち込んでしまいそうだった。

事の発端を作った責任として、鈴仙は永遠亭を代表し、問題の解決に尽力するようと、師匠から仰せつかってここまで同行していた。要するに永琳の尻拭いである。

同行者の存在をすっかり忘れていたという風に、ギンコは鈴仙を見た。そして前を向き直り、里がもう目の前だと確認すると、鈴仙の提案に乗り、返事をした。

里に戻ったギンコはまず、慧音の元を訪ねた。それというのも、単純な話、他に泊まる当てがなかったからである。夢遊病患者の事も気になる現状では、里の外で野宿という手段も取りづらかった。

夜に突然家を訪ね、戸を叩けば、慧音は嫌な顔一つせず、すぐに中へ二人を招き入れた。ここまで行けば、親切を通り越して無用心に足

がかかりそうである。ギンコと鈴仙は、慧音の好意に甘え、夕飯のみならず風呂まで世話になった。

鈴仙が湯上りの髪を拭いながら、慧音と入れ違いで居間に戻って来れば、あちらこちらに巻物を広げ、古紙の帯に囲まれながら、蠟燭の炎の陰影に紛れて物思いに耽るギンコがいた。片膝を抱えるように背中を丸め、眼光鋭く物を考えるその姿はまるで狩人のようで、誰も寄せ付けないようなその雰囲気、鈴仙も思わず息を飲んだ。

巻物で作られた結界を踏まぬよう、部屋の中に入り、少し遠い位置で改めてギンコを見る。白く、銀に近い髪に、森の緑を垂らしたような右目。惹きつけられるような、妙な雰囲気。第一印象はそんな感じだったのを、鈴仙は思い出す。

「あの、ギンコさん」

「ん？　なんか言ったか」

恐る恐る話しかける。思いつめてはいるようだが、焦りからくる苛立ちなどとは無縁のようで、話しかければ穏やかで重みのある声が返ってきた。

「どうですか、何かいい方法は思いつきましたか？」

いい方法が思いつけばこんな表情は見せないだろうと思いつつ、鈴仙は聞いてみた。鈴仙も、何も考えていないわけではない。彼女も永遠亭を代表して事態の収拾に参じたからには、知恵を絞り、精力的に働くつもりはあった。

しかしいかんせん、鈴仙の持つ情報は少なすぎた。だから無意味と知りつつ、こんな質問をするしかない。怒られるかも、と内心思っていた鈴仙だったが、ギンコは穏やかなものだった。ゆるく息を吐いて、丸めていた背中を伸ばして言った。

「いや、今の所どうしようもねえな」

「そうですか……あの、自然と水が抜けるのを待つというのはどうでしょう」

苦し紛れではあるが、鈴仙も何か力になれるかもと言葉を絞り出す。症状の原因となっているのは、体の中に取り込まれた間借り竹の水だ。体内の水は絶えず循環し、昨日のものが今日のものとは限らな

い。そこから着想を得た鈴仙の提案だったが、だがこれも、ギンコはやんわりと否定する。

「それもなくはねえが、希望的観測が過ぎる。夢遊病が進行し、本来の意識まで食われるようになってしまえばどうしようもない。ま、最終手段だな」

「そ、そうですか」

やっぱりそう簡単にいくわけがない。肩を落とし、耳を垂らす鈴仙を見て、ギンコは片膝を下ろして胡座をかいた。

「お前さんが気に病むことじゃない。これは俺たちの領分だ。師匠に駆り出されたようだが、気負う必要はないぞ」

「い、いえー！　そういうわけにはいきませんー！」

落胆した様子から、逆にギンコに気を遣われてしまった鈴仙は、気を取り直すようにそう言い切った。しかし具体案があるというわけではなく、語調こそ強くしたものの、事態の收拾に、なんら解決法を見出せもしなかった。

少し身が縮む思いの沈黙が流れる。胸の前で握り込んだ手が、力を徐々に失っていく。少し浮いていた腰も定位置に戻り、説教を受ける小僧のように正座し直す鈴仙を見て、ギンコは巻物を一つ手に取った。

「お前さんには、蟲が見えるんだったな」

「えっ？」

突然そんなことを言われ、鈴仙は顔を上げた。ギンコは座りながら散らかった巻物を押しつけて、鈴仙の前まで近寄る。そして鈴仙の目の前で巻物を広げ、一つの絵を指差した。

「こういうものを、見たことがあるか？」

「え、っと……はい、あります。あの、それが何か？」

ギンコの真意が測りかねる鈴仙が、疑問符を浮かべて問いに答える。ギンコが指差したそれは蟲の絵であるようだった。首をかしげる鈴仙に言い聞かせるように、ギンコは巻物を指でつづいた。鈴仙はそれを目で追う。そして耳には、ギンコの重みのある低音の聲が滑り込んでくる。

「こいつは葉脈に寄生して擬態する蟲だな。まれに、葉脈だけが残っている枯葉を見かけるだろう？ あれは、こいつらが取り付いている葉を、虫達が食べたためにできあがるものだ。葉が食べられたことに気づかず、擬態を続けているんだな」

「そうだったんですか!?!」

鈴仙は驚きに顔を上げた。そこで緑色の眼と視線が交錯した。意外なほど近くにあったそれに、心臓が跳ねる。思わずさっと目を逸らし、そこでふと、疑問がわいた。

「あの、それが何か今回のことと関係があるんですか?」

鈴仙が頭を働かせ、ギンコに問いかける。おもむろに蟲の説明を始めたのだ。何か、今回のことについて関係があるに違いない。だがそれがなんなのかまではわからなかったので、鈴仙は素直に問いを口にした。

だが返ってきた言葉はまた意外なもので、ギンコは勿体ぶることもなく当たり前のように答えた。

「ん? いや、全く関係ないが」

はい? と鈴仙は間抜けな声を出した。じゃあなんのためにギンコはこの蟲の話を自分に聞かせたのか。疑問として口にする前に、ギンコは話し始める。

「考えも煮詰まっていたんでな。気分転換に、お前さんに話をしてみたくなっただけだ。蟲が見えるなら、知っておいて損はないし、俺も新しい考えが浮かぶかもと思ってな。楽しい話じゃないかもしれないが、ま、少し付き合ってくれよ」

えーと、次は……と巻物を指でなぞるギンコを見て、鈴仙は肩の荷がすつと降りたような感じがした。自分はきつと今まで、ギンコの前で変に緊張していたのだろう。それがなぜかはわからないが、気が軽くなったことだけは確かだ。気を利かせてくれたのだろうか? だとすればそれを勧ぐる前に、鈴仙がするべきことは他にあった。

鈴仙はギンコが視線でなぞっていた巻物に指を置く。そして嬉々とした声で、尋ねた。

「あのー、この蟲はなんていうんですか?」

「ん？ ああ、これはな……」

鈴仙の緊張はほぐれた。あとは蠟燭の光が揺らめき、照らされぬ夜の領域へと、ギンコの蟲の話が響いて消えていくばかりである。

そしてギンコも、鈴仙に蟲の話を聞かせながら、間借り竹のことについて考えることをやめてはいなかった。

だがギンコとて、万能ではない。蟲について知らぬこともある。いや、むしろ知らないことの方が多いのかもしれない。自分の持つ知識だけでどうにもできないと悟ったときは、ギンコは迷わず他人の力を借りてきた。知り合いの蟲師に連絡を取り、判断を仰ぎ、知恵を借りた。しかし、今はその助力も望めそうにない。ギンコは態度ほど、内心落ち着いているわけではなかった。

蟲の話は転がり、やがて間借り竹についての話に戻っていく。

「間借り竹という蟲は、前にギンコさんも対処したことがあるんですよ。 どういうことがあったんですか？」

「ああ。 とある竹林に、夫婦が住んでいてな。 その夫婦は、女の方が鬼おにこ、つまりは間借り竹と人間の交ざりモノだった。 女はもちろん、その夫婦の子供まで、食事は間借り竹の水のみを口にして生きていた」

ギンコの語りが夜に溶けていく。 慧音はまだ風呂から上がらない。 蠟燭が妖しく揺らぎ、御伽おとぎばなしのような実話が、ギンコの口から語られる。

「男はいたって普通の人間だったが、間借り竹の水を飲んでしまったがために竹林から出られずにいた。 そんなとき俺は、その夫婦と知り合ったんだ」

「ふむふむ」

「男から事情を聞き、俺は蟲の仕業と確信した。 そして調査の末、男が竹林から出られないのは女が幼い頃、母に分け与えてはいけなと言われていた水を、男に分け与えたことが原因だとわかった」

「そうだったんですか」

「女は己の行いを悔いた。 自分のせいで夫を竹林に閉じ込めてしまったとな。 夫の心が未だ里に向いていることも知っていたんだろう。」

そしてとうとう、女はある晩に、鉞まさかりを引きずって間借り竹の親株を切り倒すことを決意した。何度も何度も、繰り返した末だったよ。それと言うのも、女は間借り竹にとつては子株も同然だったからな。女が振りかぶる鉞は、どれも竹にとどくことはなかったんだが、どういふわけか、女が一際大きく鉞を振りかぶった時、竹に深々と、鉞が突き立ったんだ」

「親が子に逆らう……とても難かたい行動だったんですね」

「ああ。俺もそう考えている。難いかたが、できないことはない。男のために涙まで流して、鉞を振りかぶった女の思いが結実したんだろう。……こうして男は無事、竹林を自由に出入りできる身になった。男は喜びから、里へと帰り、親族を訪ねたが、残念なことに、筍から生まれた女と夫婦になった男に、もう居場所はなかった」

「……無理もないですが、なんともやるせない話ですね」

「その後は男も里への未練がすっぱりと断ち切れ、再び竹林に戻り、女と娘、三人で仲良く暮らし始めたという。だが俺が半年後にその場所を訪れると、女と娘は死んでしまっていた。間借り竹の水がなければ、やはり二人は生きられない体だったんだ」

「そして今回、妹紅さんが背負っていた赤ん坊が……」

「ああ。その、間借り竹の子だろう。そして里には、薬という形状ではあるが、間借り竹の水を飲んだ者たちがいる。間借り竹の生態は、人への影響力が根底にある。夢遊病を治す対処としては水を体内から抜ければいいんだが……これがどうしても思いつかん。かと言って手っ取り早く株を切り倒すことは……」

「妹紅さんが許さない、ですね」

「ま、そういうことだ。正直、あの娘も蟲に利用されているにすぎん。だが、彼女はそれを理解した上で、あの赤ん坊を殺すことを許さないだろう。俺も、あまりそういう方法をとりたくはない」

難しい問題ですね、と改めて騒動の全容を把握した鈴仙が呟く。そしてちょうどそのタイミングで、慧音が風呂から上がってきた。あがつたぞー、と髪を拭う慧音は、艶やかに雫を滴らせている。ギンコも鈴仙もその姿を見て、おおー、と感嘆の声を上げた。

「な、なんだお前たち。変な声を上げて」

「いや、ねえ？」

「……俺に伺い立うかがてるんじゃないよ」

手で払う仕草をして、ギンコは鈴仙の視線を受け流した。

ギンコは風呂に入ろうと立ち上がる。鈴仙、慧音と入って、最後がギンコの番だったのだ。散らかった巻物はどうするんだ、と慧音は聞いたが、ギンコも片付けを失念していたようで、あー、と少し考えた後、すまんがそのままにしておいてくれるか、と言った。

ギンコが風呂に入ろうとした時、家を訪ねてくる者があつた。どんだん、と激しく戸を叩く音がする。何事か、と慧音が玄関に向かい、ギンコもそれに続いた。慧音が戸に近づく前に、外から声がした。

先生！ 起きてください！ 先生！

男の声だ。慧音が戸を開けると、呼吸も荒く、肩を上下させる男が立っていた。

「どうしたのですか？」

慧音が問いかける。尋常じゃない雰囲気ふんいきの男は、焦りを隠さずに言った。

「妻が、妻がいないんです！」

ギンコは男の顔に見覚えがあつた。それは昼間のこと。不妊治療薬を購入した家々を回っていた時、その中の一つの家うちにいた男。妻がいないと叫ぶその男は、夢遊病を訴えた女の、夫だった。

第二章 筍の薬 捌

夜の里には行灯あんどんを持った男たちが集まっていた。その理由ははっきりしていて、皆、妻がいなくなったと訴えている。夢遊病を発症し、ふらふらとどこぞかへ歩いて行ってしまった彼女らを探しに、夫やその父親が集合しているのだ。

いたか？ いや、こっちにはいない、そんな情報が飛び交う中で、ギンコには心当たりがあつた。里の中は男たちと慧音に任せて、ギンコは鈴仙を連れて里を飛び出し、里の外を探し回っていた。

ギンコが走る。まだ遠くに行っていない方がいいが。そんな期待をしてみるも、女たちの影も形も見当たらず、周囲にはただ、行灯でも照らし出せぬ闇ふちの淵が広がっている。

「ギンコさん！ 本当に彼女たちは……」

「ああ。竹林に向かっているはずだ」

間借り竹の水を体に取り込んだ彼女たちは蟲の影響を受ける。無意識のうちに呼び寄せられていると踏んでいたが、こうもはつきり症状が出るとは予想外だった。

幻想郷の夜は危険だ。ただでさえ、里の外には人外の魔境が広がっているというのに、夜ともなればこれはもう妖怪がそこから宴会を開いていても不思議ではない。そしてそこに現れる若い娘。妖怪たちは嬉々としてその命を奪い、血肉むきほを貪るだろう。夜の幻想郷を歩き回っていいのは、腕に自信のある奴らか、神様、あるいは、ギンコのような特殊な事情を抱える者のみである。

足元が暗い。行灯だけでは心もとなく、何度かつまづきそうになる。息を切らせて、闇をかき分けるように走った。

そして竹林まで後少しというところで、数人の人影を発見する。これで全員なのか？ ギンコはいなくなった人数をしっかりと把握してこなかった自分を恨んだ。

「おい！ しっかりしろー！」

全員の前に立ちはだかり、肩を大きく揺さぶって呼びかける。虚ろうつろで、どこを見ているのかもわからなかった目に、光が戻る。

「あれ？ 私なんで……赤ちゃんは？」

まだ頭が混乱しているのか、しきりに赤ん坊はどこ、と女たちは聞き返す。赤ん坊を探している？ 一瞬、ある考えが頭をよぎるギンコだったが、今はそれよりも、この女たちを連れ帰ることが先決だ、とギンコは里への帰還を促した。

「細かい話は後だ。とにかく、里に帰るぞ」

「ギンコさん！ 後ろ！」

鈴仙の声に反応する間も無く、ギンコの脹脛ふくらひざに激痛が走る。見れば、黒い狼のような獣の牙が、肉に深々と突き立っていた。痛みの中で、行灯を取り落とす。紙でできたそれが、瞬く間に炎上した。

血が滲にじみ、女どもが悲鳴をあげる。ギンコもその一噛みに苦悶くもんの表情を浮かべ、崩れ落ちた。まずい。倒れば畳み掛けられる、と考えたギンコだったが、体は思ったように動いてはくれない。

やられる。そう思った時突如、噛みついたその獣だけを、正確に射抜く衝撃があった。どうやったのかは不明だが、人差し指をこちらに向けた鈴仙が見えた。

衝撃を受けて、獣が吹き飛ぶ。ギンコから牙も離れたが、血の匂いが獣たちの興奮を煽っているのか、それとも餌となる人間が多数いるからなのか、獣たちは集まり始め、周りをぐるりと囲み始めた。狩りを、始めようとしていた。

倒れ伏したギンコと獣の間に、鈴仙が立ちはだかる。状況は最悪だ。闇の中を動き回る無数の獣の目。妖しく光り、こちらに狙いを定めている。鈴仙一人でどうにかできる数ではない。ずるりずるりと夜が這いずり回っているような緊張感の中、全員食われるのか、とギンコも半ば諦めかけたその時、周囲を煌々と照らす、紅蓮の閃光が迸ほとぼしった。

闇を払い、獣を退ける炎の壁。炎の円陣がギンコと女たちを守るように燃え盛る。しばらく唸り声をあげていた獣たちだったが、炎に恐れをなすと、尻尾を巻いて退散した。一体何が起こったのか。未だ取れぬ緊張感と、脹脛の激痛で頭が回らないギンコの前に、行灯が差し出される。

ぼんやりと辺りを照らし出すそれ。それを差し出した人。ギンコさん！ と鈴仙の声。赤ん坊。様々なものが頭を回り、ついにギンコは痛みに屈し、蹲つまずくまって気を失った。

目が覚めた時に天井が目に入るのは新鮮だ。そう、一番に考えた。ギンコの意識が戻ったのは、夜が明けてすぐ、明朝のことだった。布団に寝かされたギンコを両側から挟むようにして、二人の視線が注がれている。

「ギンコ……！」

「ギンコさん！」

ギンコの名前を読んだのは鈴仙と慧音の二人だった。一晚眠っていたのか、それとも丸一日眠っていたのか。二人に心配されながら、ギンコは上半身を起こそうとする。すると、右の脹脛に焼けるような痛みが走った。思わず唸り声をあげ、ギンコは布団に倒れこむ。そういえば右足を噛まれたんだっただか。失念していた、と天井を見上げたギンコの顔を、慧音が覗き込んでくる。

「よかった、気がついて。おかげで行方不明だった女たちは全員無事だったぞ。お手柄だな」

「なにもしちやあいないがね……ほんとに」

「いやいや、一番に見つけたじゃないか。なあ鈴仙」

「はい。ギンコさんがあと一分、探し出すのが遅れていたら、他の誰かが襲われていましたよ」

へえ、そりやあまあ、とギンコはとりあえず賞賛を受け取り、昨晚のことを思い出した。

夢遊病の女たちがついに竹林の近くまで呼び寄せられた。昨日はたまたま助かったただけだが、今日はどうなるかわからない。早急に手を打つ必要がある。言いにくそうに、慧音は言った。

「……ギンコ。里の者らが不安がっている。もうあまり、時間はないぞ」

「……まあ、そうだろうな」

ギンコは昨晚の女たちの様子から一つの仮説に思い至っていた。

女たちは赤ん坊を探していた。夢遊病の際に、必ず見る夢。赤ん坊の泣き声が聞こえると、女たちは話していた。

ギンコの仮説が真実なら、上手くいけば全員を悲しませることなく済むかもしれない。試してみる価値はある。ギンコは早速行動を起こすべく、再度、上半身を起こしにかかった。

まだ安静にしている、と言う二人を押しとどめ、ギンコは立ち上がろうとする。

「鈴仙」

「は、はい」

「昨日のことで、一つ考えが浮かんだ。今から、妹紅の所に行くぞ」

肩を、貸してくれ、というギンコは、少し笑っていた。

竹林で赤子を背負う女が一人。散る竹の葉が風に乗って吹きすさぶ中、一人立っている。

腰から下げた竹筒が水音を立てる。女が振り返ったためだ。その視線の先には、妙な雰囲気のある男。蟲師を名乗る、白髪の男が立っていた。

「また来たのか。昨日の怪我もあるだろう。出歩いていいのか」

「ああ。今日にも問題を解決しなけりや、今度は死人が出ないとも限らんのでね」

鈴仙に支えられながら、右足を引きずるように、杖をついたギンコが言う。

「何度来たって同じだ。この子は殺させない。あの竹を切らせはしない」

「……竹は切らない。その子も殺さない。だから妹紅。お前に協力して欲しいことがある」

「協力、だど？」

ギンコは頷く。ギンコが思いついた方法。それは昨晚、夢遊病の女たちが赤ん坊を探していたことに注目したものだった。女たちが赤ん坊を探して歩き回るのなら、里の中に赤ん坊を置いてしまえばとりあえずの危険は回避できる。つまり妹紅が背負う赤ん坊を、里に預け

ること。これがギンコの思いついた方法だった。

「確証はないが、蟲の影響力が、女たちの子を思う心に働いているとすれば、これで解決するはずだ」

ギンコは言う。蟲は自分の近くに味方を置きたいようである。ならば蟲の本体と密接に関わる赤ん坊を、味方の近くにおいてしまえばいい。

しかし妹紅は、その意見を真つ向から否定した。そんなことは不可能だ、その方法には致命的な欠陥がある、と。

「赤ん坊を里に預ける？ お前も知っているだろう。この子を連れて、竹林を離れることはできない。それは、お前だって知っているはずだ」

「ああ。赤ん坊でなくとも、その腰に下げた水を持っているだけで、蟲に影響されるな」

妹紅の言う通りだった。赤ん坊はもちろん、間借り竹から採取した水を持っている者は間借り竹から一定の距離以上離れることができない。その影響力があるからこそ、女たちは夢遊病に悩まされているのだ。だったら無理だろう、と言う妹紅の言葉を、しかしギンコは遮った。

「だが、それも鈴仙がいれば可能だ」

「……その兎が？」

妹紅はギンコの隣、杖をつくギンコを支える紫苑しおんの髪を見た。鈴仙は神妙な面持ちで頷いている。ギンコは語る。重く低い、引き込まれるようなその語りが、絡まった悲劇を紐解いていく。

「鈴仙はこの竹林を抜けて、里へ薬を売りに来ていた。それができた。もしかしたら、鈴仙は蟲の影響力を掻かい潜くぐることができるかもしれない」

まさか、と妹紅は思った。だが元に、鈴仙は蟲を見ているなど、その才能の片鱗を感じさせている。

薬売りをしていた鈴仙は、間借り竹の水で作られた薬を持っていても、竹林から抜け出せた。無論、薬になっっている分、影響力が弱まり、そのため竹林から持ち出せたのかもしれない。だから、今からそれを

確かめる。自分の推測が正しいのかどうか、ギンコは確かめようとしていた。

「力を、貸してくれるな」

「……」

ギンコの言葉に、妹紅は頷いた。

鈴仙が赤ん坊を背負い、水筒をぶら下げて竹林を歩くその後ろを、妹紅に支えられながらギンコが歩いていた。痛々しいその姿を見て、妹紅は聞いた。

「……昨日はすまなかったな。助けるのが遅れた」

「……あの炎は、やはりお前さんだったか」

ギンコはおぼろげな記憶を探る。倒れた自分に行灯を持って駆け寄った人物の顔が、今隣にいる人物と重なる。気にするな。あんたがこなけりや、今頃骨になってるよ、とギンコは気楽に言っただけだ。「実を言うとな。私はお前を信用しちやいなかったんだ」

妹紅は独白するように、ギンコに話し始める。最初に光る竹を探しに来たというギンコに、竹林にそんな竹はないと、彼女は嘘をついていた。それはギンコを完全に信用していなかったためであった。

「私を知ってる蟲師って連中は皆、蟲を殺してばかりいたからな。人の味方ってのは当然にしても、蟲を殺さない蟲師なんていないと思っただけだ」

「信用してなかったってことは、今は違うのかい」

「ああ。だってそうだろう？ 自分の足がこんなになっちゃったのに、まだ蟲と共存できる道を探してる。少なくともあんたは、かなりの変人だよ」

そりゃあ、耳が痛い話で。ギンコは苦笑する。しかし、肩を貸す妹紅は、そんな変人を快く思っていたようだった。

「私さ。あの子を見つけたとき、本当に驚いたんだ。筍の中に赤ん坊だぞ？ そんなの一目で普通じゃないってわかるだろ」

「それは……そうだな」

「だけど、とりあえず拾ってみたらさ、これが結構可愛くてさ。でも、

この子は生まれたときからひとりぼっちなんだって思ったら、すごく、悲しい気持ちになつて……昔のことを思い出した」

妹紅は言う。彼女はあの赤ん坊に、自分を重ねていた。妹紅の独白は、次第に自分の過去についてもものになっていく。怪我をしているギンコに合わせて、一步一步踏み出す歩調に合わせて、ゆつくりと、彼女は語る。

「私もあんと同じで、ずっと旅をしてきたんだ。とある体質のせいで、里にはいられない。家族もできない。妖怪を倒して、一時の感謝をもらって、土地から土地へ、流れ流れて生きてきた」

ギンコは少女の話に、黙って耳を傾けている。歩みは止まらない。ゆつくりした歩調で、竹林を進んでいく。がさり。がさり。積もった葉を踏みしめる。

体質のことには触れない。おおよその見当がついているギンコは、口をつぐんでいた。

「寂しかった。旅を始めたばかりの頃は特にな。生きていることが苦痛だった。なんのために生きているのかわからなかった。妖怪退治なんて言つて、死に近づくことでしか、生きている自分を実感できなかったんだ。あの子を、竹林で拾うまではな」

ギンコは知っている。この娘の境遇を知っている。少なからず、ギンコにも似たような気持ち芽生えたことがあった。蟲を寄せる体質が故に各地を回るしかなく、排他的な村で気味の悪い子供と、石を投げられた。

そしてギンコは知っている。この娘が不老不死だということ。永琳や妹紅と対峙したときの雰囲気告げていた。己がうちに光脈を閉じ込める不老不死とはまた違うが、確信している。この娘らは、死なない。

死なない体。人間の心には分不相応な産物。永い時間を、この娘は旅したのでろう。そしてその時間の中で、自分はどうしようもなく独りきりだと、悟ってしまったのだ。それはなんて残酷で、なんて哀しい悟りだろう。どれほどの衝撃だったのだろうか。ギンコは想像する。そして、自分の罪をも噛みしめた。

「生きている実感がなかったんだ。今まで。でもあの赤ん坊を拾って、それがわかった。実感できた。夜泣きで寝てる時に起こされて、理由もなく泣き叫ぶからあやして。すぐ小さくて、簡単に捻り潰せる肉の塊を、自分の手で必死に守っていく。そういう育むって行為を、形だけでも、あの子を通して体感した。人との関わりの中で、自分も生かされているんだ、生きていていいんだと実感する。それが、生きるってことなんだって」

蟲に他意はない。決して、この少女のために赤子を生み出したわけではない。厳密には、人ですらない紛い物。しかし妹紅は、それに命を感じた。臆面もなく、堂々と人の子を演じ、人として生きようとするそれに、生きるということを感じた。

だから妹紅は拒絶した。生きているものを殺したくない。生きることに価値を見出した彼女が、同じくらい死というものを意識して、拒絶した。

妹紅は鈴仙に背負われている赤ん坊を見る。ギンコは思った。俺もだよ、と。

やがて視界から竹林は途切れる。鈴仙の能力が、蟲からの干渉を弾き出す。里に着くまでは、油断はできない。だがこれで、ギンコの処置はほとんど完了したと言ってもいいだろう。

鈴仙が振り向く。やりましたね、と言う彼女に、ああ、とギンコは短く返した。

第二章 筍の薬 玖《了》

「ねえ永琳、良かったの？ あの薬、もう作らないなんて約束して」「いいんですよ。あんな副作用があるんですもの。もう売れないでしょう？」

永遠亭の一室で、お茶を啜りながら、輝夜はなんとなく永琳に尋ねた。薬というのは、不妊治療薬のことである。副作用が知識として人に広まった以上、もう手を出すものが現れることはないだろう。件の蟲師の活躍で、夢遊病はみられなくなったようだが、それを抜きにしても、子が十分に増えた里に、これ以上の需要はなさそうだった。

「知ってるのよ、私。あの副作用、知ってて放置したでしょ」

「あら、さすが姫様。慧眼けいがんでいらつしやいますね」

ふふん、そうでしょ？ と得意げな輝夜を甘やかすように、永琳は輝夜を褒め称たたえた。

八意永琳は天才である。この場合の天才とは、全知という意味を含み、自身が望む結果を、過程を省略して手に入れる才能のことである。今回のことで、永琳は自身が手がける薬を不完全な形で里へ流した。それはある種の意趣返し。「人を増やせ」なんて言う不本意な仕事を押し付けられたことへの、些細な、しかし大きな、天才の抵抗である。

「これで幻想郷に元いる妖怪たちへの義理は果たしました。あとはどうなるかと、私どもが関与する話ではありません」

「でも鈴仙はどうするの？ あの子、なんか見えてるみたいじゃない」
そうなんですよねえ、と永琳は困ったというようにこめかみに指を当てた。蟲師というものが関わってきて、一つだけ生じたイレギュラーが鈴仙の才能だった。

「波長を操る能力。位相の同調で裏側の住人が見えてしまうなんて、知りませんでした」

「悪いことではないんでしょう？」

「ええ。本人が望めば反発できるようですし、放っておいてもいいとは思いますが」

鈴仙の能力は波長を操る能力。位相をずらすことで、彼女の視界は蟲を捉えることができた。そして今回の間借り竹の影響力を弾くことができたのも、彼女の能力によるところであつた。

弟子がとられないか心配なの？ と聞く輝夜に、永琳はそうですねえ、とお茶を飲んだ。存外、どうでもいいのかもしれない。なぜなら彼女は志を受け継がせずとも、探求にかける時間を、十分に所有しているのだから。

ここは永遠亭。時間が止まり、完全が根付く場所。蓬萊人の思惑は、永夜の闇に漂うのみ。

「それでギンコ。足の具合はどうだ？」

「ああ、もう大丈夫だ。心配ない」

木陰で煙草を吹かすギンコに、首から手ぬぐいを下げた妹紅が問う。心配ないという言葉を受けて、そうか、と妹紅は笑顔を見せた。

夢遊病の騒動があつてから数日経つた。結局、竹の子は里に預けられることになり、里の皆で育てていくことが決定したそうだ。特に夢遊病を発症していた女たちからは「他人と思えない」と可愛がられているようで、それを知つた妹紅も安心していた。

獸に食いつかれたギンコの右足もだいぶ良くなり、そろそろ里を立つとうという頃、見舞いだと言つて、妹紅がギンコの元を訪ねてきた。今では彼女も、竹で炭を作り、里にタダ同然で配り歩いているなど、積極的に人と関わり始めたようだ。彼女の作る炭は火持ちも良く、質がいいということと評判となり、だんだんと発注が増えてきているそうだ。お礼の品が多くて困っている、と妹紅は苦笑する。

そんな妹紅と言えば、忙しくなってきた今に嬉しきを感じており、生きるといふことをやってみる、と少しずつ、以前より前向きに、歩き始めたようだった。

「うさぎー！」

「みみー！」

「ぎゃあー!? 引つ張らないでえー！」

子供達にくんずほぐれつ、悲痛な叫びをあげる知り合いの声に、ギ

ンコも妹紅も声の方を見た。ちなみにここは寺子屋の運動場。先ほ
どから子供達のいい遊び相手になっていた鈴仙は、その長い耳を手綱
のように握られて、背中に子供を乗せつつ、馬のように地面に這いつ
くばっていた。

竹の子を里で育てるのはいいが、そのためには間借り竹から水を、
定期的に里へ持ってこなくてはならない。その役目は唯一蟲の影響
を受けずに進める鈴仙が担うことになり、妹紅と一緒に、里をよく訪
れるようになった。

聞けば旅の装束は、自分の姿を隠す意味で着ていたものらしく、彼
女は以外と人見知りらしいことが後々明らかになった。だが今では
ご覧の通り。子供達に大人気な、薬売りのうさぎさんの完成である。
そして竹の子が預けられた先はと言うと。

「かわいいー」

「せんせーのこども?」

「ははっ、違うぞ。炭屋のお姉ちゃんが産んだんだ」

「慧音! 変なこと吹き込むなよ!」

ギンコが背を預ける木の反対側。そこに慧音は座り込み、抱いてい
る赤ん坊の母親を、子供達に教えていた。自分の存在を出された妹紅
は真実を伝えるべく、子供達と慧音の間に割って入る。竹の子はやは
りというか、慧音の元に預けられ、慧音が忙しい時は、里の誰かの家
に預けられることになった。今の所、異常は見られない。竹から離し
てしまうことでなんらかの変化があるかと思っていたギンコだが、
やはり赤ん坊の蟲の気配は、ギンコが感じ取れぬほど微弱なものよ
うで、水さえ切らさなければ普通の人間として育つだろうと、ギンコ
は予想していた。

「別にお前が産んだってことにしてもいいだろ」

すでに見慣れた白髪には興味がないのか、いつかのように子供達が
まわりついていることもない。木の根元に座り込み、煙を吐きなが
ら、軽い調子でギンコが言う。

「じゃあ父親はお前な」

妹紅がズバリと答えを返す。その答えに、慧音は吹き出していた

が、ギンコの方は冷静そのものだった。苦笑いを浮かべて、妹紅にやんわりと反発する。

「なんでそうなるんだ」

「だってこの子の名前に、お前の名前も入ってるんだぞ？ 状況的には、十分父親だろ」

「音だけだろう？ 勘弁してくれ」

「てかお前、子供達の近くでは煙草、やめろよな」

「へいへい」

煙草の先を地面に押し付け、ギンコは煙草をもみ消した。本当の夫婦のようなやりとりだと、慧音は口には出さなかった。

木陰にはギンコと、慧音と慧音の周りを囲む子供達がいる。ねえねえせんせ、この子のなまえはー？ 子供のうちの、誰かがともなくそう聞いた。

竹を母に持ち、ギンコに救われたその娘の名前は、妹紅が名付けたものだった。

「この子はな、筍子というんだ。筍に、子供の子で、じゅんこ、だ」

「……安直だねえ」

「うっさいなー！」

筍のようにすすくと、伸びやかに。たくさんの愛を受けて育って欲しい。そんな願いが、その名前にはこめられているのだという。

人の愛を受け、竹の子がすすくと。笑顔を振りまき、育っていた。

第三章 偽主になる

第三章 偽主になる 壱

空は澄み、秋の気配が見え始めた晩夏のある日。伸びた草を押し倒し、山の土を踏みしめる男がいた。

青々しい命の盛りは徐々に実りの落ち着きを見せ、これから秋に向けて、木々も衣替えが始まろうとしている。山の様相が変化するこの季節を、ここで初めて迎えるギンコは、口に啜えた煙草の煙を、少しの侘^{わび}しさと一緒に吐き出した。

幻想郷においても、四季の移ろいは明確であり、今はもう、額に汗を浮かべる季節は過ぎたと言っていていいだろう。日差しも徐々に和らぎ、山肌をさらりと軽い風が撫でている。春先のように何かと過ごしやすいこの季節に、ギンコは妖怪の山を歩いていた。

妖怪の山。その名の通り妖怪が住まう山。ただの人間がここに足を踏み入れたが最後、自らの軽率な行いを、冥界で悔いることになる。運が良ければ、千里眼を持つ天狗に摘み出されるにとどまるが、それも期待するべきではないだろう。

妖怪と人間の関係は基本的に鹿と草。歯牙にもかけず無視するか、腹が減れば食われる程度のものである。だからこそ、ギンコの行動が異常であることは言うまでもない。

時節に関わらず、妖怪の山を歩き回れる人間は、霊力を備えた巫女二人に、火力が命の魔法使い、そして自分だけの時間を持つ給仕と、ここ最近幻想郷にやってきた彼くらいのものである。

人を飲み込む魔界。だがそれも、山の一側面でしかない。住まうモノは特異でも、自然として観れば、山はどこまでいっても山なのだ。木々は萌え、どこからともなく、鳥の囀^{さえず}りが反響して聞こえてくる。草木の匂いがして、土の中には虫が潜む。

そうなることが決まっている。人が気を揉まずとも、花は実をつけ、種を残す。しかしまれに、そういう摂理が乱れる時がある。

月光で染め直されたような、銀に近い白髪が風に揺れる。左の目に

深淵しんえんを潜ませ、ギンコは一人、妖怪の跋扈ぼっこする山を歩く。

第三章 偽主ぎしゆになる

何故彼がここを歩いているのか。それには明確な目的があつた。実りを控えたこの時期に、山は動く。どこまでも泰然自若たいぜんじじやくと構えているそれが、季節の変わり目に動く。その動きに、若干の変調が見られるのを、ギンコは敏感に感じ取っていた。

ふと、見上げた先。緩やかな斜面の上。木々の隙間の先に、不思議なものを見た。

「なんだ、ありやあ」

思わずつぶやく。ぼんやりと光を帯びた少女。それが木の幹に背を預け、無防備に寝入っている。確かに昼寝にはちようどいい涼しさで、日差しが程よく遮られる木陰ではあるが、何もこんな山深くで眠る必要もないだろう、とギンコは思った。

ここ最近、人外との接触が極端に増えたギンコであつたが、彼女もその一派なのだろうか。声をかけるかどうか迷いながら、しかしギンコはその様子を確かめるために近づいた。

ツバの広い、黒い麦わら帽子のようなものを被り、そこから灰色に近い若草色の髪を下ろす少女。手足を投げ出して、力無く首を前に倒しているその様は、ともすれば行き倒れているようにも見える。体に巻きついている細い蔓つるのようなものと、心臓のあたりつるにある閉じた目玉のようなものは新しい服飾か何かだろうか。ギンコは少女の前でしやがみこんだ。

ギンコが近づいても、その少女はビクともしない。相変わらずぼんやりと光を放つその少女を見て、ギンコは蟲の気配を感じ取った。

蟲。下等で奇怪な、生命そのものに近い日陰のモノたち。ギンコが相手取るそれらの気配が、目の前の少女からはつきりと伝わってきた。本職の範疇はんちゆうならば、放って置く理由はない。ギンコは少女に話

しかける。低く、重みのある声をかける。

「よう。お前さん、こんなところで何してんだ？」

ギンコにかけられた一声で、少女が目を覚ます。首をもたげ、据わりの悪いそれを何度か左右に揺らした後、大きなあくびと一緒に背筋を伸ばすような仕草をした。両手を高く掲げ、背中を伸ばす。たつぷりと時間を使い、今度は急に全身の力を抜くように腕をだらりと下げる。大きく開いた股の間に手を収め、少女は首だけでギンコを見た。

目と目があう。不安を煽るような、透明感のある緑を呈するそれに見つめられる。最初の質問をちゃんと聞いていたのだろうか。ギンコがもう一度口を開こうとした時、一瞬、我が目を疑った。

消えた。目を合わせて、それを見ていたと思ったら、次の瞬間には木の幹が視界に映っていた。ギンコがつい先ほどまで見ていた少女など、影も形も見当たらない。

何が起きたのだろうか。幻をみた？ それにしては少女を目の前にした時に実感がありすぎる、とギンコは分析をしながら、辺りを見渡した。すると。

「……どうなってんのかね。あれは」

右を見た先。正確には、やや後ろを振り向くような方向。そこに再び、木々の隙間から、ふらりと力なく立つそれが見える。ぼんやりと光を放つ少女。輝きとも呼べぬ、翳^{かげ}りとも言うべき光を発しながら、ギンコを誘うように、少女はそこにいた。

「ついて来いってか？」

やれやれだ、とギンコは立ち上がって桐箱を背負い直した。そして少女のいる方へ一步、踏み出す。寄せては返す波のように、現れては消える少女を追って、ギンコは山の奥へと進んでいった。

ギンコが山を訪れたのは必然であった。それは、ギンコの体質が関係している。

彼は一つ所に留まれば、蟲を寄せる体質だった。それは決して、善いこととは言えなかった。蟲は集まりすぎると、よくないことが起きる。そのために、彼は旅をしていた。

目的地も定めず、流れ流れて各地を回り、浮き草のようにとどまることを知らずに生きてきた。それは今回も変わらず、旅の先、足の向いた先にこの山があったというだけの話であった。その、はずだった。

幻想郷に来た当初、ギンコは里に蔓延する流行病の治療のため、妖怪の山の近く、麓を大きく迂回する道を通った。その時は、山に対して何も感じなかった。山は静かに、ただそこにあるばかりだったが、今度訪れてみれば、これがどうしたことか、ギンコは山に異変を感じた。

ところどころに靄がかかり、実りの準備をするために蓄えられるべき精気が山肌のあちこちから漏れ出している。それらの表出した現象から、ギンコは山の異変の水面下で何が起こっているのか大体の予想をつけていたが、あまり大きく変調をきたすようでは大事になりかねない、と判断し、山の様子を探るため、山中を歩き回っていた。そしてその折に、ぼんやりと光を帯びた不思議な少女と出会ったのである。

少女の後を追ひ、ギンコは山を歩く。道無き道を、草木をかき分け進むにつれて、ギンコも次第に体力を消耗してきた。涼しくなってきたとは言え、やはりまだ夏の暑さは残っている。残暑の煽りが追い風になり、ギンコの頬を汗が伝う。

どこまで行けばいいのか、とギンコがとうとう徒労感を感じ始めた時、少女はふっと、今度こそ完全に、ギンコの視界から姿を消した。「おいおい、どこまで引き回しといて、そりやないだろ」

思わず文句の一つでも出るといふものだ。いつの間にか息を切らしていたギンコは、思ったよりも自分が山の精気に当てられていることに気がついた。どうやらギンコが思っている以上に、この山は異変に見舞われているらしい。

精気に当てられると、体の力が抜ける。酔いがまわるように、奇妙な脱力感に襲われる。まさしく、今のギンコの状態そのものだった。疲れた。木の幹に手をついて、息を整える。一旦森を抜きたいが、どちらに向かえばいいのかわからない。これは弱った、とギンコが

思っていると、その耳に届く音があった。

「……水？ 川か」

音のした方を向けば、木の向こうに広がる川を見つけた。これはありがたい、と歩き出したギンコは、もしかしたらあの少女は、自分をここまで案内してくれたのかもしれないと考えた。

森から抜けると、清流に触れた涼やかな風が石の地面を吹き抜けていた。石に沿って流れる川は、結構な広さで、川幅も一丈ほどありそうだった。中心まで行けば腰あたりまで沈みそうなくらい、川は深みのある透明感を放っていた。

川に近づき、ギンコは背負っていた桐箱を下ろす。川の縁ふちに膝をついて、両手で水をすくい上げ、顔を洗った。その冷たさに、一気に気分が晴れる。気持ちいい。

大きく息を吸って、吐く。自然と顔が空を仰ぎ、視界いっぱい青空が広がった。

尻餅をつくように体重を後ろに預け、両手で地面を押して上半身を支える。足も投げ出して力を抜くと、疲れがそのまま川に流れ出てしまうような感じがした。

山の精気が乱れる時、森や池沼ちしやうには人を狂わすモノが籠りこもやすいが、清流や石の河原と言った命から離れているモノ、絶えず流れているモノの周りには正常な気が満ちていることが多い。この場所もそうであるようで、ギンコは助けられた。

しばらく呼吸を整え、ギンコは頭だけを動かした。ここまで山を歩き、見つけたのは奇妙な少女の形をした何かだけであるが、確信を持った。

「……俺も初めて見るな」

ポツリと呟いたのは山の異変に対するもの。文献でしか知り得なかった現象の渦中に、自分はいる。本当なら、今すぐにでも山を降りるべきだった。しかし、だからこそ、あの少女のことが気になった。「ありやあ、どう見ても蟲の気を帯びていたな」

もしあのままの少女をこの山に放置すれば、あちら側に引き込まれてしまうのは時間の問題だろう、とギンコは推測した。そうなる前に

対処して、ともに山を降りなければならぬ。この状態の山に入るのは、人間には危険すぎる。

もちろん、このまま少女を見捨てる手もある。見なかつた事にして、この川を下れば、ギンコは安全に、また旅を続けられるだろう。しかし、それはいかんせん、後味の悪いものだった。

「……あの様子で枕元に立たれちまうとなあ」

ギンコはそう呟き、ぼりぼりと頭を掻いた。そうしてギンコが選択に迫られていると、川の上流から何かが流れてきた。遠目にも大きなその漂流物に、ギンコの視線も集まる。

緑色の球体。どんぶらこ、どんぶらこ、と流れてくる。なんだありや。ギンコの疑問ももつともな、へんてこな物体がぶかぶかと、水に揺られて流れてきた。

近くまで来たそいつを、思わずギンコは掴み取る。布で包まれた何かであるようだった。思ったよりも重量のあるそいつを陸に引き上げると、緑の球体には、人間の形をしたものがくっついていていた。

「うおっ」

ギンコは思わず驚いた。川を流れてきたのは、よく見れば人のようだった。それも、年端のいかない少女。なんだってここにはこういう妙な女子供が多いんだ、と文句を言いたくなつたギンコだったが、とりあえず今は少女の安否を確認するため、少女が背負っていた緑色の球体をひっぺがし、少女を仰向けに寝かせた。

息は、ある。心臓も、動いている。この状況で呼吸も心臓も問題なく機能している事の方に、ギンコは若干不安を感じたが、とりあえずぺちぺちと頬を叩いて、川から流れてきた少女に呼びかけた。

「おい。おい。しっかりしろ」

「う、うくん……」

少女はうなる。まるで寝呆けているようなその態度に、ギンコは拭えぬ違和感を覚えた。

青空を写し取ったような色の装束に、胸元に光る、大きな鍵のようなもの。山で出会った蟲の気を帯びた少女に、畳み掛けるようにやってきた子供の川流れ。これからまた、厄介な事になりそうだと、ギン

コの直感が告げていた。

「いやー、すまんねえ。河童が川に流されるなんて、笑い話にもならないよ」

河原で足の裏を合わせるように座り、ギンコの前で笑ってみせるのは河童と呼ばれる妖怪だった。見た目は少女に相違ないが、濡れた服を乾かすためにギンコが火を起こそうとすると、服なんて濡れていても乾いていても同じ事、とその気遣いを丁重に断る変人である。しかしギンコも、河童である証拠を見せろなんていう論争に持ち込もうとも思わず、とりあえずは元気そうなのこの娘の話信じる事にした。人間にしる妖怪にしる、敵意がなければ事もなし。ギンコの器は大きかった。

二人は向かい合って座っている。石の床に腰を落ち着け、からからと笑いながら、河童は礼を言う。その様子を、煙草を指に挟んで頬杖をつき、ギンコは眺めていた。

「私はにとり。河童にとりっていうんだ。人間さんは？」

「ギンコだ。なあ、お前さん。疑うわけじゃねえが、本当に河童か？」
「ひどいなあ。これでも立派に河童してるんだよ？ 確かに君たちが言う皿も甲羅も、水かきもなく皮膚も緑色じゃないけど、そんな昔の流行を持ち出されても、こっちだって困るんだよ。私たちにはお洒落する資格さえないのかい？」

一応聞いてみたギンコに対し、濡れて肌に張り付いた服を引っ張りながら、眉を下げた困り顔でにとりは言う。さつき濡れていても乾いても一緒とか言っただけか？ ギンコは少しだけ、目を細めて苦笑した。

「別に格好についてはどうこう言うつもりはねえよ。お前さん、泳げてなかったろ」

「いやだから、それは滝壺近くで急に調子が悪くなったんだって。本当だよ？」

「ほう。どんな具合に？」

「うーん。なんかもやもやうってしたのがむわってなってる。それを吸ったらふらつときちやって」

気づいたら人間さんに引き上げられてた。と抽象的な説明を、にとりは身振り手振りを交えてギンコに披露した。第三者から見れば、それは大げさで、まるで出来の悪い演劇を見ているような説明だったが、ギンコの方は伝わるものがあつたようで、ふむ、と頷いて少し沈黙した。

説明の途中でずり落ちた帽子を被り直しながら、にとりはギンコの右目を覗き込んだ。その視線に、ギンコも気づく。

「へえ。人間さん……ギンコさん、だっけ？ 綺麗な瞳だね。川底の翡翠ひすいみたいだ」

「ん、そんな綺麗なもんに例えられたのは初めてだな」

ふうん、にとりは体を乗り出し、ギンコの目を覗き込む。手をつけて、四つん這いになってにじり寄る。品定めするような視線に、ギンコは少し身を引いた。にとりはと言えば、そんなギンコに迫るようにさらに身を乗り出した。

「綺麗だなあ……ちようだい？ だめ？」

「物騒なこと言ってるじゃねえよ」

突然恐ろしいことを言い出すにとりを、ギンコは窘たしなめた。しかし、本当に欲しいのか、にとりも少し食い下がる。

「片方だけでいいからさあ」

「そいつは残念だったな。もう一個しかねえんだ。諦めろ」

「え？ じゃあこつちには何も入ってないの？」

どれどれ、と手を伸ばしてギンコの前髪を掻き分けようとする。川の水したた滴るにとりの手を、ギンコはするりと躲かわした。一度躲されれば、にとりもそれ以上は追おうとせず、体を引いて、ぺたん、と内股になるよう尻餅をついた。どうやら諦めてくれたようだ。

「てかギンコさんはなんでここに？ ここって結構山の奥地だけど、天狗に合わなかったの？」

「天狗？ ああ、あの新聞記者とかいうのか？」

そう言つてギンコは数日しつこく話を聞きに来た天狗を思い出し

た。確か射命丸とか言ったか。しかし、にとりが言うところの天狗は違うもののように、ギンコの言葉を、首を横に振って否定した。

「それもいるけど、違う天狗。杖もみじあたりが放っておかないと思うんだけど」

「なんのことだかわからんが、ここに来るまでに俺が見たのは、蟲だけだぞ」

「あれー？ おつかしいなあ」

首を傾げるにとりはギンコの言葉に納得しかねるようだった。そんなにとりを置き去りに、ギンコは自分自身の言葉で目的を思い出し、立ち上がった。もう十分に休息はとった。蟲の気に当てられた少女。彼女を探さなければ。桐箱に手をかけて、がちやり、と背負い直す。

「おや、もう行くのかい？」

「ああ。こつちも用があるんでね」

「山を降りるの？」

「いや、もう少し登ってみようかと思う。とりあえずはそうだな……」

川沿いに遡さかのぼるか」

「じゃあ私も一緒に行こう。私も川上に戻らなきゃ。ギンコさんは……なんか面白そうだしね」

ギンコに合わせて、にとりも立ち上がる。彼女は上流から流れてきた。ギンコがこれからたどる道を、彼女は下ってきたことになる。となれば、同行するのも必然と言えた。

何が入っているのか、深い緑色の背囊はいのうをギンコがそうしたように背負い、にとりは濡れて張り付いた前髪を左右にかき分けた。空の青を閉じ込めた瞳が、雫と一緒にきらりと光る。

「ま、俺は構わんが。眼はやらんぞ」

「それはもういいよ。さ、行こうか」

眼を欲しがった河童に若干の警戒心を抱きつつ、二人は川に沿って、上流へと歩き始めた。

第三章 偽主になる 弐

川沿いの道。河に揉まれ、角を失った石が敷き詰められていたのはギンコが休んでいた下流だけで、今は雑木林のような薄い森林の中を歩いている。幅が細くなり、流れが急になった川が斜面を駆け下りていた。

川沿いを上流に向かうように歩けば、自然、斜面を登るような格好になり、足も体力も消耗する。それをなるべく抑えるために、ギンコは歩幅を小さく取り、湿った地面を踏みしめていた。時折杖を掴み、腕も使って山を登っていく。

隣を歩くのは下流で拾った川流れの河童。名を河城にとり。上流を目指すギンコに同行すると言って、ここまでついてきている。かなり重そうな緑の丸い背囊はいのうも、足場の悪い斜面も物ともせず、大股でザクザクと進んでいるが、疲れている様子はない。かなりの体力があるようだ。

ただ黙って進むのも退屈なのか、道中でにとりは饒舌じょうぜつだった。

「ギンコさんはどうして山に？ 用があるって言ってたよね」

「ああ。山の様子が気になってな。仕事柄、こういう変化は見過ごせんのですね」

「へえ。仕事は山師か何か？」

「いいや、蟲師という。聞いたことあるか？」

「あー。ここに来る前は結構見たけどねえ。ワタリの連中は、調査のために池に来たら気前よく光酒こうきを振舞ってくれたから、好きだったよ」

懐かしいなあ、と話すにとりは少し嬉しそうだった。ワタリとは、各地の光脈筋を巡ってその土地に異変がないか調査をしつつ、土地を見守る蟲師の集団のことである。情報屋としての側面の方が強いため、ギンコも度々世話になっていたが、ここに来てから、つまりは幻想郷に招かれてからは会ったことはない。

しかしその昔に、ワタリの連中がここを調査のために訪れていたのだとすれば、ここは元光脈筋だということになる。思わぬところで自

分の考えの裏付けを取ることができ、推測を確信に変えたギンコは、にとりに礼を言った。

「お前さんの話のおかげで、推測が確信に変わったよ。礼を言う」

「うん？　ワタリの話？」

「ああ。ワタリがここに立ち寄っていたのなら、ここは元、光脈筋だ。お前さん、上流で霧のようなものを吸って調子が悪くなったと言っていたな」

「うん。もやもやーってしたやつ」

「そいつはおそらく、酒気しゅきという霧状になった光酒だ。新たに光脈筋が出来たり、枯れていた光脈筋が再び息を吹き返す時などに発生する、命の霧だ。吸えばその精気に当てられて、気分も悪くなるもんさ」
「へえ、さすが蟲師だね。そんなことまでわかるんだ。それじゃあここは……」

「ああ。もう一度、光脈筋になろうとしている。原因までは、わからんがね」

目の前に来た細い枝を手でどかし、また一步、足を踏み出す。ギンコが懸念していた山の異変とは、この山が、再び光脈筋になろうとしていることに関係していた。

光脈筋とは、蟲たちの源、光脈が流れる土地のことだ。今回のように、光脈は川の流れのように、一度枯渇した土地に再び流れることもある。そして、ここが光脈筋になろうとしているのなら、光脈筋と切っても切り離せない関係を持つ存在が、この山のどこかにいるはずだった。

大きく段差になった土をまたいで、ギンコは続けた。

「光脈筋には命の流れの統制をとるヌシがいる。それらは土地の変化に合わせて自然と現れるが、今回はどうも、遅れているようだな」

「そうなんだ」

光脈筋に必ず現れるヌシと呼ばれる獣の存在。山の不調はヌシの不調と言われるほど、その関係は密接で、蟲師たちにとっては常識だ。

酒気が出ていいるということは、光脈の統制がとれていない証であり、本来蓄えられ、土地に満たされるはずの精気が漏れ出している

いうことである。この状態の山は不安定であり、できるなら山に立ち入らないほうが身のためだ。漏れ出した精気に当てられて、獣たちは興奮しているし、人間は正気を失うことになる。

だが余程のことがない限り、ヌシは確実に現れるし、光脈筋の異変も自然と収束する。そのため、ギンコは少し様子を見て、すぐに下山しようと考えていたのだが、そこで蟲の氣に当てられたであろう不思議な少女に出会ってしまった。

「見捨てないんだ。優しいね」

にとりは言う。

「枕元に立たれてもかなわんしな。だが、あれはもう蟲かもしれん」

「そうなの？ なら追っても意味ないんじゃない？」

「確認だよ。他にやることもないしな」

出会ってしまったえば見過ごせない。人の形をした蟲など、大体碌ろくなものじゃない。幸いギンコは素人ではないので、引き返せないところまで行く前に、最悪を考えて、なるべくは少女を助けるために動こうとしていた。

遠くから音が聞こえる。地鳴りのような響きが、鼓膜に伝わってくる。その正体は、ギンコにとりがしばらく歩き、急流の元になる開けた場所に出た時に判明する。

そこには大きな大きな滝があつた。大量の水が、露出した岩壁を削りながら上から下へ流れ落ちている。飛沫しぶきを上げて滝壺たきに吸い込まれるそれは、なるほど竜の文字を冠するだけのことはある、とギンコは思った。

「見事なもんだ」

「でしょ。九天の滝って言うんだよ」

「天の最も高い場所から落ちる滝か。なるほど、名前に恥じない迫力だな」

これほど大きな滝も珍しい。肌みに撫でる湿り気を含んだ風が、ここまで歩いてきた体には心地よく感じる。そんな風を受けながら、少し苔が生えた岩に、ギンコは腰を下ろした。さて、ここからどうするか。

少女は見失ってしまったが、道標みちしるべになる川沿いを一応登りはした。

そして残念なことに、この道中で少女を見つけるとはかなわなかった。ギンコとしても、これ以上山に分け入るのは、危険を冒すことになる。そして先の少女は、既に蟲の公算が高かったようにも思う。顎に手を添えて、ギンコは黙考していた。

にとりとは言えば、滝を見つめ、こちらもなにやら難しい顔をしている。そしてぽつり、と唐突につぶやきを漏らした。

「やっぱりおかしいよ」

「なにがだ？」

にとりはギンコの方を振り返る。ギンコもすいつと視線を上げ、にとりと目を合わせた。

「ギンコさんがここに居ること。天狗に会わなかったんでしょ？」

「ああ。途中からはお前さんもいたから、それはわかるだろう？」

「ありえないよ。あの天狗たちがここまでなんの警告も無しに、山に入ろうとする人間を放っておくなんて」

にとりは言う。通常この山は、天狗の支配下に置かれているらしい。そしてその中でも、白狼天狗と呼ばれる種族が、山に入ろうとする人妖の一切を取り締まり、許可なく山に立ち入ろうとするものを追い出す役目を担っているそうだ。その対応はまるで山のヌシを体現するようだ、とギンコは思った。

「天狗ってのは山のヌシなのか？ もしそうなら、ここが光脈筋になろうとしている今、俺なんかに構ってられないってのもわかるが」

「ヌシじゃないよ。彼らは妖怪。ヌシにはなれない」

「じゃあおかしな話だ。山に入った俺など、見えてすらいないさ。ムグラに見られている感じもしないし……もしや千里眼でも持つてんのかい？ 天狗ってのは」

「持つてる奴もいるよ。だから今も見られてると思う」

「そりゃあ……すごいな」

見られていると言われれば、視線の主を探したくなるのが人情である。ギンコも首を回して周囲を見たが、やはり視線など感じることもできない。

だが気配を感じることはできる。特に、妖怪と呼ばれるものは蟲に

近い気配を持つている。ギンコはぴたり、とにとりに視線を向けた。突然自分を見て黙り込むギンコを見て、にとりは少したじろいだ。

ギンコはにとりを見ているわけではない。正確には、その背後。ギンコが見つめるにとりのその後ろで、蛹の背が割れるように、空間に縦の裂け目が生じる。まるでにとりを飲み込まんと口を開けるように、開かれたそれに、にとりも気がついたようで、素早い動きでギンコの後ろに飛び退いた。

裂け目から声がする。無数の目が見つめる闇の底から這い出すように、二人の妖怪が姿を現した。

「見ているのは天狗だけじゃなくってよ。ギンコさん」

「相変わらず気味の悪い裂け目だな。どうなってんだい、その中は」

「あら、私の中に興味がありません？」

手に持つ傘をぐるりと回して、ギンコに含みのある微笑みを向けるのは神出鬼没のスキマ妖怪である。そして今回はもう一人。紫の後ろに控えるように現れたのは、毛先が白い、金毛の尾を九つ備えた女性だった。

紫はギンコを幻想郷に引きずり込んだ張本人であり、先にもある竹の子の騒動にギンコを誘導している。ギンコにとって、誠その名に恥じぬ因縁を持つ紫だが、今回は一体何をしに来たのか。ゆるつとした警戒心をそのままに、ギンコは言葉をかける。

「興味はあるが、聞かないぜ。碌なことにならない気がするんでね」

「あら、賢明ですわね。それで？ あなたはこんなところで何を？」

「見てわからんか？ 滝を見てるんだよ」

「貴様。真面目に答えろ」

強い語調で割り込んできたのは紫の一步後ろにいた、金毛の尾を持つ女性だった。眉を寄せ、ギンコを睨みつけている。若干笑みを含ませた言葉に強く返され、ギンコは思わず真顔になった。やめなさい、と紫に窘められて、女性は顎を引いて目を伏せる。

「ごめんなさいね。こちらも、ちよつと余裕がなくなってるの。許してくださいます？」

「……ああ」

「よかった」

余裕がないと言いつつ、余裕そうな笑みを浮かべるのは最早癖なのだろうか。もしそうなら、難儀なんぎな癖もあったものだ、とギンコは思った。

それで、ちよつとお話よろしいかしら、と紫は場を仕切り直した。

「ギンコさん。貴方、山がおかしいからここにいるのではなくて？」

「直接的に聞いてくるな。山の異変について聞きたいのか？」

「いいえ。貴方に頼みたいのは山の異変を解決すること。それをお願いしに参りました」

いつかギンコへ情報を伝えた時とは大違い。単刀直入に、紫は言った。

紫はギンコへ山の異変を解決して欲しいと頼んだ。しかしそれはできない、とギンコは首を横に振る。

「今の山の異変は自然の理ことわりの範疇はんちゆうだ。今無理に正そうとすれば、後々大きな歪みを生む可能性がある。静観するのが一番いい」

「それでは困りますわ。ギンコさんには、手を打っていただけかなくては」

どういう意味だ。とギンコは聞き返す。滝の音がする。地の底に響くような重低音。重く、深い響きがする。

「詳しい話は省きますわ。今はとにかく、蟲師の貴方を頼るしかありませんの」

「……」

蟲師として。そう言われれば、ギンコに断る理由などありはしない。己の気分や感情を優先しがちなギンコだったが、それは決して、仕事に対して不誠実というわけではない。むしろ仕事に誠実であったがこそ、ここまで蟲のような少女を追ってやってきたのだ。

重い腰をあげて、ギンコは紫に向き直る。少女は見失ってしまったが、今はとにかく、紫の頼みを聞くことにした。

「ったく。はじめからそう言ってくれば、話は早いんだがな」
「感謝いたしますわ」

につこり、と紫は笑みを浮かべた。

「それでは、ご案内いたしますね。少しの間、目を瞑っていてくださる？」

紫の言葉に素直に従い、ギンコは目を瞑る。そして次の瞬間。紫が傘の先端を持ち上げ、すつと横に動かしたと思っただら、その場から人の影は消え失せていた。空から落ちる滝の音だけが、誰もいなくなつた水の淵に、虚しく響いていた。

再び目を開けてみればそこは、正直、どこだかわからなかった。

辺りには霧が立ち込め、視界は悪い。そしてこの霧が普通ではないことを、ギンコは一呼吸で察した。

急ぎ桐箱を下ろし、中から土色のコートを取り出して着込み、襟元で口と鼻を隠す。紫はいつたい自分をどこに連れてきたのか。疑問に答えるように、紫はギンコに近付いて言った。

「ここは天狗の里ですわ。先ほどの場所から、さほど離れてはいませんのよ」

「霧がひどいね……」

「霧に見えるが、これらは全部、酒気だ」

にとりが呟いた通り、そこは深い霧の天蓋てんがいで覆われていた。空を覆う濃霧から滴り落ちるように、薄い霧が降りてきている。ギンコは眉をひそめた。

酒気は光脈筋が、ヌシによる統制がとれていない場合に発生するものである。目に見えない精気と違い、濃度が濃いため、たやすく動物の正気を失わせる。ここには空を覆い、日差しを遮るほどの酒気が満ちていて、ギンコもここに長居すれば、体に変調をきたすのは確実だと思つた。

ここは天狗の里。樹齡が二桁ありそうな木々が乱立し、その太い枝を基礎として木の上に小さな小屋が建てられている。それぞれが天狗の家なのだろうか。視界を薄く遮る霧が出ているうえ、地上にも家々は立ち並んでいたが、やはり木の上にある家が珍しく、ギンコの目を引いた。

人間の里と違い、思い思いの場所に家が建っているため、一見は無

秩序に見える。しかし、まるで効率よく光合成を行うため、互いに影にならぬよう葉をつける樹木のような、そんな全体的に秩序を感じさせる雰囲気、里はまとめられていた。

ギンコはちらりと横をみて、コートにくつついている存在に話しかける。

「と言うか、お前さん付いてきたのか」

自分の着ている土色のコートの裾を引っ張って口元を隠す河童に、ギンコは言う。くぐもった声で、河童の河城にとりは反論した。

「いや、だって八雲のスキマ妖怪が来てびつくりしてあなたの後ろに隠れてたら、いつの間にか私も一緒ここに連れてこられたんだ。文句なら八雲に言っつてよ」

へえそうかい、と別に不都合もないので、自分で聞いておいてだが、ギンコはにとりの反論を受け流した。紫はいえば、自分が連れてきておいて、今気がついたという風であった。私への扱い、ちよつと酷いんじゃないかい？ とにとりは思った。

「あら、思わぬおまけね。帰してあげてもいいけど、どうします？」

「……残る。ここには友人もいるんだ。この様子を見ると、安否を確認しないと不安だよ」

にとりの友人は白狼天狗だ。この集落の様子を見る限り、とても尋常とは思えない。その安否を、友人として確認したい、とにとりは言った。あらそうですか、とこれまた軽く、紫は了承した。

「しかしこの酒気は異常だな。どういうことだ」

「その異常を、貴方に治めて欲しいんですの。手間は惜しみませんわ」
ここにきて、ギンコは自分が連れてこられた意味を察する。ここにはおそらく、酒気にあてられた天狗たちが大勢いるのだろう。それらを治療するため、自分が呼ばれたのだ。

「そういうことか……だが、現状を把握せんことには始まらない。少し、里の中を見て回りたいが、それはいいのか？」

「時間があるのでしたら、どうぞ」

確かに、あまり時間はないかもしれない。ギンコは急ぎ、天狗の里へ足を踏み入れた。

第三章 偽主になる 参

「くっ……いったい、な、にが」

朦朧とする意識を必死につなぎとめ、鴉天狗の射命丸文は現状を把握するため、必死に頭を働かせていた。

天狗の里を突如覆った霧の異常。自分の風を操る能力でも晴らすことのできぬそれは、吸い込んだものを次々昏倒させているようだった。しかも上空に行くにつれて濃度が上がっているようで、飛んで脱出を試みた友人は上空で意識を失い、墜落してしまった。

霧は一呼吸のうちに体から力を奪い、考える力も徐々に失われていく。里のあちらこちらに倒れている仲間を見つけたが、今の自分の状態では助けることもできない。助けを呼ぼうにも、行動することは叶わず、それ以前の問題として、誰を頼ればいいのかもわからなかった。

こんなところで、排他的な天狗社会の構造が立ちはだかり、ついに立っていられなくなった射命丸は、よろめいて近くの木の下に体重を預けた。

「く、そ……」

もうだめだ。際限なく重くなっていく体。朦朧とする意識。そして、三半規管が竜巻に捻り上げられているようなめまいを最後に、射命丸は崩れ落ちた。

その瞬間を、見ていた者がいた。倒れた射命丸に駆け寄り、声をあげて呼びかけ、頬を叩いた。

「おい、しっかりとしろー!」

頬を叩かれた感触で、ぎりぎりですべて保っていた意識が少し呼び戻される。うっすらと目を開けると、そこにはいつぞやの妙な雰囲気のある男がいた。霧を極力吸わないように、ギンコは冬用の首巻きで口元を隠し、射命丸を抱き上げていた。

「あ……、いあ……」

「無理に喋ろうとするな。これの中身を嗅ぐように深呼吸しろ」

そう言つてギンコは射命丸の口を覆うように、袋をあてがった。涼やかで独特の香りがする袋の中の空気を吸い込む。爽やかな匂いだ。

鼻の奥を撫でる清涼感に、射命丸は正気を取り戻す。相変わらず体には力が入らないが、めまいや酩酊状態は脱したようで、射命丸は呼吸を落ち着かせた。

そうして処置をするギンコの隣に、ぬうつと現れた影があった。河童のにとりだ。だが、その身なりははつきり言つて珍妙奇天烈だった。

顔面を覆うのは光沢のない黒い面。目の部分には硝子のはめ込まれ、視界は確保されているようだが、口元は嘴くちばしともつかない特殊な形状をしていた。この世界に来てから、奇天烈なものには多く出会ったと思つていたギンコだが、その中でもとりの覆面はとびきりの異彩を放つていた。

「……おい。なんだ、そりゃ」

思わず聞いてみた。

「ん？ マスクだよ？ この霧を吸い込まないようにつけてるのさ」

こもった声でにとりが言う。あ、一つしかないから、ギンコさんの分はないからね、とにとりは言う。例えあつたとしても、得体の知れないそれを被りたくはない、とギンコは思った。

しかし見た目はどうあれ、効果のほどは良いようで、この霧の中でも、河童は平然としていた。

やがてギンコの腕の中で、頭の中にかかっていた霧が少し晴れた射命丸が口を開いた。

「……なぜ貴方がここに？」

「説明すると長くなるんだが……とりあえずはその妖怪に頼まれてな」

「はあ……」

ギンコが親指で指した方向にはスキマ妖怪とその従者が立っていた。ギンコにはわかるはずもなかったが、この時の八雲紫は傘を差し、その中と外で境界を引いており、霧の影響から逃れていた。

意識を取り戻した射命丸に、にとりが聞く。

「ねえ、文。権もみじは？ 見てないんだけど」

「権は……里にはいないと思います……彼女、たぶん哨戒中ですし」

「そっか……」

椀という天狗の所在がわからなかったからか、にとりは落ち込んだ声を漏らす。

いつまでも抱えられているわけにもいかない、射命丸は体を起こそうと力を入れる。徐々に力も戻りつつあるようで、木の幹を使つてなら立ち上がることができた。無理をするなど体を支えようとするギンコを手で制し、射命丸は礼を言った。

「ありがとうございます……ですがこれ以上、里の中で人の力を借りるわけには」

「強がつてる場合か。今はまだ昏倒だけで済んでいるが、症状が悪化すれば緩やかに死へ近づいていくんだぞ」

少し強い語調で言ったギンコの顔を、悔しげな表情で見上げ、文は頷いた。彼の生業なりわいを知っている射命丸は、彼の対処から今が蟲師はんちゆうの範疇なまわらにあるものなのだろうと間接的な理解をしていた。それなら尚更、自分には何もできない。体の自由がきく以前の問題であった。

そんな射命丸の様子を見ながら、ギンコは違和感を覚えていた。

ただの酒気当たりにしては症状が重すぎる。妖怪と人間で作用が異なるのか？ いくら吸わぬように努めているとはいえ、自分にはそれほど強い症状が表れているわけではない。やはり、人間と妖怪の違いなのか、それにしても紫と藍も平然としている。ギンコは考えた。「それにしても効果てきめん観面てきめんですね。何を嗅がせたんですか？」

ここまでギンコの手際を見ていた紫が言う。その視線はギンコが持つ袋に注がれていた。ん？ これか？ とギンコは袋を掲げて見せた。

「薄荷はっかという、ある植物を乾燥させたものだ。普通に嗅いでも悪い香りじゃない。酒気当たりには、これが一番効くんのだ」

嗅いでみるか？ と袋の口を紫に近づけると、紫は素直に袋から出る匂いを嗅いだ。すーっと鼻を抜ける爽やかな香りがする。

「あら、いい香り。ミントですわね」

「みんと？」

「いえ、こちらの話ですわ」

聞き返したギンコの言葉を、紫は受け流した。

その後も倒れている天狗を見つけては、香り袋を嗅がせ、治療していく。症状が軽くなった天狗たちは、片っ端から紫のスキマが飲み込んでいった。ここに留まれば、再び症状が出始める。それを防ぐため、紫の力で清澄な空気がある滝壺近くに送られていた。

そうして一通りの治療を終えた時、ギンコの体にも変調が出始めた。手足の力が抜け、瞼も重くなっていく。強烈な眠気にも似ためまいが、ギンコを襲う。これまで香り袋を使ってギンコ自身も騙し騙しやってきたが、所詮は気付け程度のもの。ここにいる以上、体調は悪くなる一方だ。

大きくふらりと、ギンコの体が揺れる。普通なら、倒れてしまうその動き。それが倒れることなく未だ立っていられるのは、ギンコの体を支える者がいるからだ。

「しっかりしろ。治療は終わりなのだろう？ お前が倒れてどうする」

「……あ？」

倒れかけたギンコを支えたのは、八雲紫が式、八雲藍だった。黄金色で柔らかそうな毛質の、九つの尾を持つ女性である。朦朧とするギンコを支え、藍は励ましの声をかけた。

最初、彼女はギンコという人物を計りかねていた。人間にしては妙な雰囲気の子だと思っただけ、紫が当てにするという点も、彼女の従者としてはなんだか面白くなかった。

だが、今は認識を改めていた。天狗の里での対処一つとってみても、的確で、早い。この男は、素性は何にしろ、幻想郷に必要な識者である。藍は直感していた。紫様、と藍が声をかける。その言葉を受けて、紫はまた傘の先端を振るう。今度は天狗の里から彼らの姿が消え失せ、里はもぬけの殻となり、次の瞬間には滝壺の近くへ戻ってきていた。

滝壺の縁に戻ってきたギンコは、まず意識の回復に努めた。顔を

洗って大きく息を吸い込み、体内にたまったものを吐き出すように呼吸した。

じゃぶじゃぶと水音を立てて顔を洗うギンコの後ろで、黒い面体を取り、詰まっていた息を吐き出した河童が言う。

「こりやひどいね」

河童の目の前に広がるのは天狗たちの地獄絵図。翼を持ち、山を支配し、幻想郷の空を駆ける彼ららしくらず、すべてが地に伏した光景。誰も彼もが体に力を入れられずに、地面に這いつくばっている。

日頃から彼らの支配下に置かれている河童のにとりをして、同情するほどの惨状。どうしてこうなったのか。それを知る人物は、今にとりの足元にいる。滝壺の縁に跪くその背中を、にとりはちらりと見た。

「これは山の異変と関係あるんだよね、蟲師さん？」

「ん？ ああ。おそらくな」

にとりの言葉を聞き、ギンコが答える。顔についた水滴を袖口で拭い、ギンコは立ち上がる。にとりが見ていた天狗たちの惨状を見て、ギンコも言葉を漏らした。

「俺も、ここまで酷いのは予想外だった」

「そうなのかい？」

「ああ。これが妖怪と人間の差なのかね」

推測の域を出ないが、ギンコはそう言った。

天狗たちの酒気当たり。その対処が今回紫の依頼した内容であったのだろうか。それなら、しばらくこの空気を吸わせていけば処置は完了するだろう。ギンコの仕事は終わったかに思ったが、しかし紫が口を開いた。

「さて。天狗たちはこれでいいのですわよね、ギンコさん？」

「ああ。ここの空気を吸えば、自然と良くなる……はずだ」

天狗たちをちらりと見やり、ギンコは言う。にとりが倒れているものを抱き起こして、木陰に移動させていた。

「原因はあの霧ですか？」

「そうだ。酒気という。この山が光脈筋として復活しようとしている

ために、山の精気が濃く漏れ出しているんだ。それに合わせて、ヌシも現れ、山は次第に統制を取り戻すはずだが、それがどうも、上手く行っていないようだな」

「……やはりそうですか」

紫は今の山の状態を知っているような口ぶりだった。沈痛な面持ちを浮かべるのは藍で、紫は眼光鋭く何かを考えているようだった。

そんな二人の様子を見て、ギンコは補足する。

「そんな深刻に構えることじゃない。最初にも言ったが、これは自然の理の範疇だ。心配せずとも、山はそのうち落ち着くさ」

「……それがそうも言っていられないのですわ」

なんだと？　ギンコは反応する。紫が神妙に、ギンコへ問いを重ねた。

「ギンコさん。山のヌシの出現ですけれど、それはどういった形で現れるんです？」

「……多くは既存の動物に光脈が取り憑くことでヌシとなることが多い。ヌシの世代交代は、今言った通りか、新たに生まれる命がヌシとなっていることもある」

「ヌシになる条件は？」

「正確なところはわからんが、多くは山に馴染んでいる獣が選ばれるらしい。土地と密接に関わるのだから、当然とも言えるな」

「そうですか……」

「なあ。さつきからお前たちは何を思って、揃って深刻な顔をしているんだ」

様子がおかしい二人に、ギンコは問い返す。ここまでの質問で、紫はヌシのことについて、知りたがっているように思えた。何か自分には知らされていない情報がある。ギンコは思った。そしてその情報に関わることこそ、紫が本当にギンコに頼みたい事柄だった。

紫がゆっくりと口を開く。出てきた言葉は、ギンコにとって予想外のものだった。

「ギンコさん。ヌシを、ただの獣に戻す術はありますか？」

「ヌシをただの獣に戻す術だと？」

はい、と紫は頷いた。紫の背後から、藍が一步、隣に歩み出る。

「今回の山の異変。それはヌシの変調が原因。そうですね？」

「ああ」

「そのヌシというのは、おそらく私たち二人がよく知る獣のようなのです」

「そうなのか？」

「ええ。名前は橙。二股の尾を持つ、この山の妖獣です」

ここまで聞いていた藍が口を開く。

「もとは私が式として使役していたのだが、最近様子がおかしいと思ったら、急に式がはがれてな……背に植物を背負った山猫になってしまったんだ」

「それは、典型的だな」

ヌシは全て、背に植物を背負っている。それは限りもなく土地と同化した生命という証であり、ヌシがヌシたる象徴でもあった。藍は歯噛みして、その隙間から声を絞り出すように言った。

「橙は苦しそうだった。私の目の前で、体が何かに引き裂かれそうだと涙目で訴えて、姿を変え、私にわからなくなったのか、牙をむいて襲いかかってきた」

「……」

ギンコは藍の言葉を黙って聞いている。

「橙は苦しんでいるようだった。ギンコさんの言うとおり、それは一過性のことかもしれない。しかし、橙が苦しむ姿をこれ以上見ているのは……」

「……そうか」

藍の言葉が終わり、次を繋ぐように口を開いたのは紫だった。

「それで、ギンコさん？ ヌシをもとの獣に戻す術はありますか？」

答えを急かすような紫の問いに、ギンコは少し考えた。藍の悔しそうな表情を見れば、協力もしてやりたくなる。しかし、ヌシをもとの獣に戻すなど、ギンコをして初めてのことで、蟲師同士の情報でも聞いたこともなかった。それは、試す価値がないというよりも、理に背く行為であるという意味が大きい。

ヌシをもとに戻す。そんな方法は知らない。ギンコはそう答えた。その答えに、藍は落胆の色を隠せないようだった。だが。

「……ヌシをもとには戻せんかもしれんが、苦しみを和らげてやることはできるかもしれん」

「！ じゃ、じゃあ」

ギンコは桐箱を下ろして、中から陶器の小瓶を取り出した。あくまで、ヌシを安定させることが目的だ。できそうなら、というのを忘れてくれ、と前置きし、ギンコは小瓶の中身を地面にまき始めた。ギンコの言葉の、これ以上ない譲歩に、藍は頷いた。

天狗たちの世話も終わったのか、ギンコの行動を見ていたにとりが言った。

「ムグラノリだね。ヌシを探すの？」

「ああ。場所を探らにや、話にならんからな」

ワタリの連中を見てきたからか、にとりはギンコが行おうとしているムグラノリなるものを、疑問符を浮かべる八雲の二人に説明し始めた。

「山限定の千里眼みたいなものだよ。ヌシの場所を突き止めようとしてるんだ」

「蟲師はそんなことまでできるのか」

にとりの言葉に、藍が驚いたような言葉を漏らす。千里眼といえば、幻想郷ではある天狗が持つ固有の力であり、非常に珍しいものであったからだ。

ギンコは土の上に腰を下ろし、手のひらを地面に押し付けた。いつもなら、ここで地面から出てきたムグラが体に取り付くはずだが、どういうわけかいつまでたってもその兆しは見られない。

先の二人よろしく、ギンコが疑問符を浮かべる。ムグラノリができない。それはヌシ側からの干渉があることを示していた。着実に、ヌシは山に馴染んでいる。喜ばしい兆候であるが、この状況には何か作爲的なものを、ギンコは感じ取った。

「(ヌシが山から隠れている？ なりたてなら無理もないか……)」

ヌシとしてある程度の経験を積んだ命ならば、自衛のため山から身

を隠す術を得る。ヌシといえど自然の前には一匹の獣に過ぎず、見境のない捕食者の牙にかかり、唐突に命を落とすこともある。そうなれば山は統制を失い、土地は荒れることになる。そういう危険を冒さぬために、山で身を隠す。

しかしヌシになりたての命は、その辺りの調整がうまくいかず、山のあらゆるものを自分から遠ざける傾向がある。今回もそうなのだろうか。ギンコは推測した。

ギンコが固まって動かないでいると、がさり、と近くの茂みが音を立てた。音と一緒に一つの影が飛び出してきた、突如、ギンコへと襲いかかった。座っているギンコに、上から叩きつけるような一撃が迫る。

当然というか、それはギンコが反応して避けられる速度ではない。目で捉え、認識した時にはすでに、攻撃は完了する。そんな速度だったが、飛び出してきた影とギンコの間には、藍が割り込んで強襲を阻止した。鈍い金属音のような衝撃を大気に響かせて、両者が激突する。

藍に攻撃を弾かれた強襲者は飛び退き、その姿を白日のもとに晒した。

「あれ………権!？」

「………にとりですか?」

それは白毛の尾を持つ少女。より獣らしく頭頂部から犬のような耳まで生えている。

ギンコに襲い掛かったのは、白狼天狗の犬走権だった。

第三章 偽主になる 肆

ムグラノリに失敗したギンコを襲ったのは白狼天狗の犬走権だった。大きな反りのある刀を片手に、山への侵入者たちを睨み据えている。警戒心をむき出しに再びギンコへ斬りかかろうとする権を制するように、河童のにとりが権の正面に飛び出した。

「待った待った！ この人たちは敵じゃないよ！」

「どきなさい！ 里の仲間たちをこんな風にして……そいつら、許せない！」

「だーかーらー！」

この人たちは天狗の里の異常に気付いてそれを収めるために行動してるの！ とにとりに説得され、権はとりあえずといった様子で刀を下ろした。

「……死んだと思ったねえ」

「優秀でしよう？ 私の式は」

まるで自分の手柄であるように語る紫に、そりやもう、とギンコは言った。

尻に付いた土を払うように立ち上がり、藍に礼を言った。フサフサの尾が、礼を受け取るようにゆらりと揺れる。

未だ警戒心を解かない権に、にとりが話しかける。

「てか権は今までどこに？」

「私は山に異変を感じたから見回りしてたのよ。そしたら里にすり鉢をひっくり返したみたいなの霧がかかって、里の様子を確認できなくなったから戻ってみれば……」

貴方たちが仲間をここに運び出しているのが見えたのよ！ と権は紫、藍、ギンコの三人を指差して言った。運び出したことは疑いようのない事実だが、危害を加えていたのかどうかは別の話である。そのあたりを、権は誤解しているようであった。

にとりが事情を権に説明する。自分たちは霧の中で昏倒していた天狗たちを安全なここまで運んできただけである、と。

「え？ じゃあそこで倒れている仲間は……」

「山の異変のせい。さつきも言ったでしょ？　ま、詳しくは蟲師のギンコさんに聞いてね」

紹介されたギンコは、椀の視線を受けて、本日何度目かの説明をする。

「天狗たちは皆酒気という霧状になった光酒を吸って体調を崩している。ここにいれば、とりあえず回復するだろうさ」

「そ、そうなの？」

椀はにとりを見た。にとりは大きく頷いた。

「……すみませんでした」

知らなかったこととは言え、里の恩人に斬りかかってしまった。椀の耳はしゅんと俯き、謝罪の言葉を口にした。誤解が解けたならいいさ、と命を狙われたギンコの態度も軽いものだった。

しかし椀の乱入でうやむやになりかけたが、ギンコがしようとしていたことは失敗に終わっていた。ムグラノリをして山のヌシの居場所を突き止めようとしていたのだが、それができない。こうなったら山全域を一から探さなければならぬが、さてどうしたものかとギンコは首をひねった。

「ヌシの居場所がわからない以上、山を虱潰ししらみつぶに探るしかないな」

「ムグラノリとやらはできなかつたのか？」

藍が問う。ギンコは地面に置いてあつた桐箱を背負い直しながら答えた。

「ああ。ヌシの方からムグラが抑え込まれていた。山が緩く閉じられている」

桐箱を背負つたギンコが、その場にいる一同を前にこれからの方針を話した。それは主に、八雲に関わる内容である。

ヌシになりかけている橙という妖獣を探す。ヌシへの変容を助け、苦しみを和らげる。それを目的に行動することを藍に確認した。

そしてその目的を達成するためにはまず、橙をギンコの前に連れてくるのが前提となる。

「ヌシを元の獣に戻す術は見当もつかない。しかし、ヌシへの変容が苦しみを伴うものだというのならば、それを和らげる方法はあるかも

しれん」

「じゃあ私は橙を捕まえればいいんだな」

「ああ。お前たちでうまくやってくれ」

藍がギンコの言葉に頷いた。しかしそこで、ん？ お前たち？ とギンコの言葉に反応するものがいた。河童のにとりを見て、ギンコは口の端を釣り上げる。

「乗り掛かった船だ。人手が欲しいし、お前も手伝え」

「えー？」

「お前さんも山に住んでいるんだろ。なら住処を守るためだと思うんだな」

「あー……：はいはい。了解しましたよ。じゃ、頑張ろうね、権ー！」

「え!?! 私もですか？」

にとりに肩を叩かれた権が、自分自身を指差して驚きの声を上げる。連鎖的にヌシの探索に巻き込まれた権だったが、彼女の能力は今回のヌシ探索にはうってつけだった。それを理解しているにとりは、当たり前じゃん、と頷いた。

「こういうことには権の能力が必要だよ。ギンコさんを襲った負い目もあるでしょ？ 頼りにしてるからね！」

「う……：わかったよ」

「二人とも、よろしく頼む」

ためらいなく権の罪の意識を利用して、河童は満面の笑みを浮かべた。藍が頼み込むように、二人に頭を下げた。

こうしてヌシの探索へ、八雲藍、河城にとり、犬走権の三人が行動を開始した。

滝壺の縁に取り残されたのはギンコと紫である。ギンコは天狗たち一人一人の様子を見ながら、自分の中に生じた疑念を払拭するために動いていた。

「何をしてらっしゃるんですの？」

一人の天狗の脈をとっているギンコの背中に、日傘を畳んだ紫の声

がかかる。木の葉の影が作る斑模様が、服の上に映し出されている背中
中は、紫へと振り返ることなく答えた。

「いや、こいつらの症状が、酒気当たりにしてはひどすぎると思っ
てな」

「そうなんですか？」

「確証はないが、もしかしたら酒気とは別の山の異変が起きているの
かもしれない。そして、もしそうなら、それはヌシの変調と深く関
わっているだろう。お前の従者が可愛がっているせいも、なんとか
できるかもしれん」

「仕事熱心ですのね。素敵ですわ」

作り笑いを浮かべている紫を、ギンコは見ようとしない。

「お前はどうかなんだ。やることもないなら、ヌシを探すのを手伝って
やろうとは思わんのか？」

「貴方こそ。どうなんですか？」

天狗の少女を診察しながら、ギンコは答えた。

「ここに来るまで、河童と一緒にだった。その時、お前から妖怪の体力の一
端を垣間見た。俺がいない方が、探索も捗るだろう」

それに、とギンコは続けて立ち上がる。暑くなってきたのか、土色
のコートを脱ぎ去った。

「妖怪の体が強靱だとわかっていいるから、この天狗たちの症状がわか
らないってのもある。かなり弱っているように見えるが……」

「確かに、そう見えますわね」

「せめて話を聞くことができればいいんだがな」

「……なにか、お聞きになりたいことがあるのですか」

天狗たちの中の一人。ギンコも知る彼女が、弱った体を木の根元に
預けて口を開いた。

「お前さん、大丈夫なのか」

「……大丈夫に見えますか？ できれば手短かに、お願いします……」

弱った天狗たちの中で、最も妖力の強い射命丸文だけは、少しだけ
体力が残っていたようだった。ギンコの問いに反応して口を開いた
が、その言葉は弱弱しく、今にも消えてしまいそうだ。

ギンコは文の横に腰を下ろした。

「なあ。霧の出始めはどんなだった？」

「……始めは天気が変わったのかと思いましたが」

文がぽつりぽつりと語り出す。

「霧が雲のように集落を覆って、そこから霧が降りてきました」

ギンコは妙だな、と思っていた。酒気は地表から吹き出すもの。空から降りてくることはない。文が見たものはなんなのか。弱々しい声は続いていく。

「霧を吸い込んだ者が倒れました。そして次々と……仲間が倒れていききました」

「そうか……」

天狗たちを見る限り、衰弱しているだけで、命の危険があるようには見えない。ものを考える力がなくなったり、めまいがするのは酒気の症状だ。体力を著しく消耗するというのは、おそらく空から降りてきた霧が関係している。しかし山の現状と照らし合わせた時、その霧状の蟲に、ギンコは心当たりがあった。

「それはおそらく、嫩草、という蟲だ」

「……わかきさ、ですか？」

ギンコは頷く。そしてコートに忍ばせていた蟲煙草を取り出した。

「嫩草は、草木の形をした蟲の中でも、光脈筋に生えるものだ。普段は霧や雲に紛れて空气中を漂っているが、光脈筋にたどり着くとその土地に根を下ろす。外見は苔やシダ植物に相違ないし、特段害のない蟲だが、これらを乾燥させて葉巻きにすると、蟲煙草になるために、俺たち蟲師には馴染み深い蟲だな」

「……では、ギンコさんがいつも啜っていたのは」

「そう、嫩草を乾燥させたものだ」

しかし妙だな。とギンコは言った。

嫩草はギンコの言う通り、特段害のない蟲だ。霧として集合したのも、この土地が光脈筋に戻ろうとしているからであり、根を下ろしにやってきたものたちが集まっただけだろう。

それが体力の低下とどう関係しているのか。ギンコにはそこがわ

からなかった。しかしその疑問を解く鍵は、突然降って沸くことになる。

「うづつ……!」

「! どうした!？」

「はあっ……! せ、背中が……」

話している最中、文が突然苦悶の表情を浮かべた。体がびくりと反応し、背を丸めて痛みを訴えた。背中がどうしたというのか。ギンコの腰が浮く。

「すまんが、服を脱いでくれるか」

「は、はい……」

ゆつくりと、文が服の上着を脱いでいく。痛みが強いのか、震える手で首巻きを解き、上着のボタンを外していく。そして、露わになった背中を見て、ギンコは驚いた。眼前に広がる光景。おもわず、それに手を伸ばす。

「これは……苔だ」

文の背中には苔が生えていた。背骨から肩甲骨周りにかけて、緑色の短い植物が、根を下ろしていた。そして、さらによく見れば、その苔は植物ですらなかった。

うぞうぞと、根元の部分が動いている。まるでナメクジか何かのように、ずるりと緑のモノが白い肌の上を滑り、その領域を、ゆつくりとだが確実に広げていた。ギンコもこの状況は初めて見るが、これはどう見ても嫩草に他ならなかった。

「(体力の消耗は、こいつらが寄生していたからだったのか)」

ギンコは立ち上がり、他の天狗たちの服も脱がして背中を見た。侵食の度合いは違えど、すべての天狗の背中に苔や短いシダ植物のような形状の嫩草が寄生していた。

「(霧を吸った者が寄生されているのか? いや、それなら俺も同じように寄生されるはず……)」

ギンコは思考を巡らす。霧状の嫩草が、吸った者に寄生し、体力を奪って成長する苔を生やすなんて話は聞いたことがない。ましてやこれは嫩草だ。蟲師たちと長く関わり、その性質も生態もほぼ明らか

になっている。

紫、とギンコはここまで我関せずといった態度で奇妙なスキマに腰掛け、あくびをしていた妖怪に声をかけた。はい？ と紫が返事をする。

「お前はなんともないのか？ あの霧を吸っただろ？」

「ああ、あの時は私、自分の能力で霧を吸わないようにしていましたから。藍も同様ですよ」

「なんだと？ そんなことまでできるのか？」

ええ。と紫は当たり前のように答えた。河童もなにやら怪しい覆面で霧を吸わないように気をつけていた。だとすればこの症状は霧状の嫩草を吸ったもの、それも妖怪にのみ出ていることになる。

ここでギンコは一つの考えに至る。それは、ある意味でギンコも予見していた可能性。妖怪と人間の差。大きな仕組み。これらのことは理の範疇という判断。それを裏付けるような仮説が、ギンコの中に立ち上がった。

「まさか……」

考えが点となって浮かび上がる。嫩草という蟲。霧状の光酒。そして、ヌシ。

点と点がつながり、線となる。

何かを悟ったという風のギンコの様子を、紫は感じ取った。

「何かわかったのですか？」

「……ああ。こいつらがなぜ、こうなっているのかはな」

だが確信が持てない、とギンコは言う。そして紫に、ある頼みごとをした。

「紫。俺をまたあの里に連れて行ってくれないか」

「？ 構いませんが、天狗たちはこのまままで？」

「今は何もできない。確信を持ったところで、どうにもできないかもしれないがな」

「？」

ギンコの意味深な台詞に、紫も首をかしげる。だがまあ、最初からこの男を利用するために幻想郷へと招いた紫である。この男が蟲に

関して、協力しろということ断る意味はない。紫は三度日傘みたびを降り、ギンコと共にスキマの中に消えた。

「それで、やってきたはいいですが探せるのって私だけですよね？」

「そうだね。ちやっちゃんとちやっちゃんって」

「投げやりなあ」

「文字通りだな」

緑も深い森の中。妖怪の山の一角で、河童のにとりは白狼天狗の権をこき使おうとしていた。又シ、この場合は橙という妖怪を探そうとしている三人であるが、この広い山の中、隅から隅まで足で探すというのは現実的でない誰かが理解していた。そのため、文句こそ言うものの、権は自分がやるしかないとも思っていた。

権が持つ能力。千里を見通す能力。山のどこかにいるという大味な前提条件でも、探したいものを探すことができる。普段はこの能力を駆使して、山への侵入者をいち早く察するため目を光らせている。

「さて、探すのは妖怪でしたっけ？」

「そうだ。すまんが協力頼む」

藍が頭を下げる。了解しましたよ、と権が返事をする。目を閉じて、すうつと息を吸い込み、それを詰めるように止めると、権は目を見開いた。

途端に意識が野山を翔る。草木を縫って、視点が走る。木々を回り込み、土の上を滑り、空を吹き抜け、千里を見通す。そうして山間をめぐり、彼女の視線は一匹の獣を捉えた。

「いました。ここから真東です。距離もあまり開いてません」

「よし。では行こう」

その藍の一言を合図に、二人の妖怪は姿を消すような速度で駆け出した。その速度は目で追うことを許さないほどには、素早かった。

「ちよつと、置いてかないでよー」

出遅れたのは、河童だった。水の中ではわからないが、陸でのにとりの動きは他の二人に比べるべくもなかった。

走り出しても、とうに姿が消えた二人には追いつけそうもない。しばらくそこで立ち尽くし、考えたにりはガサガサと二人が言った方角とは違う方角へ歩き出した。

先に走り出した二人は、駆け抜ける草木を尻目に、出遅れたとわかってにいるにとりを放っておいた。もつとも、藍は少しだけ後ろを気にしていた。走りながら背後を確認する。

「いいのか?」

「いいんですよ。どうせどこかで追いついてきます。将棋の時もそうですから」

「将棋?」

「こつちの話です……見えましたよ。あれで間違いありませんか?」

「……ああ」

先行する二人の視線の先には苔を背負った化け猫がいる。ずっと遠くからこちらを見ていたようで、二人が発見した時には目が合ってしまった。そのためか、化け猫も二人から逃げ出すように走り出してしまう。

疾駆する三つの影。追いかけても、すでに藍の言葉は橙に届かない。逃げ出す化け猫を追って、追いかけることが始まった。

第三章 偽主になる 伍

式が剥がれた橙を捕えるために行動を開始した三人だったが、思いのほか苦戦を強いられていた。

舞台は山。そして捕縛対象は山猫である。走り、追いかけたところで見失わないのがやっと。草木の合間を縫^ぬってしなやかに走り抜ける移動速度に、人の形をした二人がいつて行けるはずもない。

鳥の囀^{さえず}りが虚^{むな}しく聞こえてくる森の中で、足を止めた藍が考えを巡らせていた。唸^{うな}る藍の側には、どこか遠くを見つめる椀^{わん}がいる。千里眼で橙の様子を見ているのだろう。体は動かさず、口だけで藍に尋ねた。

「さて、どうします？　かれこれ半刻^{はんこく}は追いかけてこしたと思います
が」

「今考えてる。というか河童はどこに行つたんだ」

「さあ？　面倒臭^{めんどくさ}くなって逃げたとか？」

「あいつめ……」

藍が恨み言を呟くと、近くの茂みがかさがさと揺れた。

「酷いこと言うねえ。こっちはこっちで色々頑張つてたのにさ」

やっと合流できた、と河童のにとりが草をかき分けて現れた。背負^{はい}っていた背囊^{はいのう}がなくなっているが、そんなことを指摘している場合ではない。今までどこで何をしていた、と藍が問い詰める。

自分の頭を指差して、口の端を釣り上げたにとりが言う。

「体力使つて頑張つてるお二人さんには悪いけど、こういうのは頭を使つたほうが早く結果が出るってね」

「言うじゃないか。で？　何をしていたんだ？」

「いや、なに。ちよいと罫^かを仕掛けてきたよ。河童印のお手製、特製つてやつをね」

「トラバサミでも仕掛けたんじゃないだろうな。もしそうなら、許さ
んぞ」

睨^{にら}みを利かせた藍の視線を、にとりは諸手を挙げて受け流した。

「大丈夫。無傷で捕獲できるやつだよ」

自信あり気に胸を張る河童に対し、藍は嘆息する。罨だど？ 私の式を務める橙が、そんじやそこらの罨に引つかかるわけがない。そう、言外に言っていた。

藍は肩をすくめて、呆れるように言った。

「どんな罨かは知らんが、橙は頭がいいんだぞ。そんな簡単につかまるわけが……」

「あ、捕まった」

「え」

千里眼で橙を見ていた椀が呟く。河童がうつしやあ！ と拳を高く突き上げ、その後ろでは藍の間抜けな声が漏れていた。

三人が橙の捕獲に成功していた頃。ギンコは再び、天狗の里を訪れていた。天狗たちの背中に生えた嫩草を見て、ギンコはある仮説に思い至ったらしい。それを確かめるべく、ここにやってきていた。

天狗の里の周辺。森に近い外周付近を、がさがさと漁るギンコを見て、その背中に紫が声をかける。

「なにを探してらっしゃるんですの？」

「ん？ いや、探しているというか、ないことを確かめている、ってところか」

なにやら意味深な発言をするギンコだが、その真意は紫にも計れないようである。日傘をくるくると回し、退屈そうだ。

「退屈ですわ。ギンコさん、何かお話ししてくださいさる？」

「お前なあ」

わがままにもそんなことを言い出す紫に、ギンコは呆れたようにため息をついた。その様子を見ても構わずに、紫は世間話を始めた。

「ギンコさんは幻想郷に来てどうです？ 楽しく過ごさせていますか？」

「……特別変わったことはねえな。妖怪やら怨霊やら、蟲とはまた違う意味で妖しい連中と付き合うのも慣れてきた」

「あらそうですか」

「ああ。……そういえば、ここに来る途中も蟲のような子供を見たが、あれも妖怪だったのかね。お前さん、何か知らないか」

手は止めずに、ギンコが紫に問いかける。

「蟲のような妖怪ですか？」

「ああ。ぼんやりと見えて、その、存在感が薄い蟲のような妖怪だ」

紫は一瞬考え、ゆっくりと首を横に振った。

「……存じ上げませんわね」

「そうかい。というか、お前さん蟲がわかるんだろ？」

「はい。わかりますけれど？」

「なら里の中を見て回ってくれ。嫩草わかぐさが根を下ろしていないか確認し

てほしい」

「ええ……」

「嫌そうな顔してんじゃねえよ。ほら、頼むぜ」

ギンコに促され、しゅしゅといった様子で紫は歩き出した。

その後二人は天狗の里の中と外、周辺を見て回り、嫩草が根を下ろしていないかどうか確認した。調査の結果、嫩草は里を中心としたこの辺りには根を下ろしていないということがわかった。

紫からの報告を聞いて、ギンコが考える。紫が差している傘の内側が安全地帯だと学んでいたギンコは、邪魔するよ、と強引に傘の中に体をねじ込んだ。有無を言わさぬ相合い傘に、紫は拒否反応を示す暇もなく、傘をギンコに合わせて高く掲げた。

「嫩草は地面に根を下ろしていない……なら天狗たちに根を下ろした理由は……いや酒気が関わっているのなら……」

「何をブツブツ言ってますの？ 結局、私をこき使っておいて何もわからなかったとでも？」

傘、疲れるから貴方が持っていてくださいます？ と紫はギンコに傘を押し付ける。ギンコは傘を受け取りながら、むくれる紫の責めるような言葉に答えた。

「ん？ 今回の異変の内容はおおよそ掴めたぞ」

「え？ そうなんですの？」

紫は驚いたような声を上げる。ここまで悩ましい表情を浮かべて

いたギンコだ。てつきり異変への展望を持っていないためだと思っていたが、ギンコが言うには、原因はわかったが対処法がわからない状態、だそうで、頭を悩ませていたそうだ。

「原因がわかったなら何が起こっているのかくらい説明してくださいってもいいのではなくて?」

「ああ、失念していた。まあ許せ」

土色の羽織りに忍ばせていた蟲煙草を取り出して、ギンコは紫に説明を始める。

「今回の異変の発端は山の変化だ。元、光脈筋のこの山が、何がきっかけかはわからないが光脈筋として息を吹き返そうとしている。ここまではお前もわかっているな?」

「ええ。その煽りを受けてヌシが誕生し、それが上手くいっていないために山の精気が漏れ出して、ここにある霧のように山のあちこちを曇らせているのでしょうか」

「その通り。俺が文献で得た知識は、そうだった。しかし、現実はそのじゃなかったんだ」

「? どういう意味ですか?」

ギンコは指先で、火の点いていない蟲煙草を弄ぶ。そして蟲煙草を手握り込み、紫の視線を誘導するように上を指差した。

「空を覆う霧は嫩草という蟲だ。ここが光脈筋になる気配を感じ取り、集まってきた」

次にギンコは下を指差す。その先には地面がある。

「地表近くに滞留する霧は上空から降りてきた嫩草と、地表から吹き出した酒気が混ざり合っている。天狗や俺たちは、それを吸い込んでいたというわけだ」

再びギンコは手の中から蟲煙草をつまみ出す。ギンコの指先を目で追う紫。それに合わせて、ギンコの低い音響の語りが進んでいく。「地表付近に降りてきた嫩草は、普通なら地面に根を下ろす。しかし、今は山が緩く閉じられているために、根を下ろすことができない。ムグラノリができなかったのもそのせいだ。これはヌシのせいだと思いついていたが、事実はおそらく、山の精気をこれ以上逃さないため

に働く山自身の統制のせいだろう。言うなれば、ことわり理の力だな」

「はあ。そうなんですか?」

「では、根を下ろせない嫩草はどうなるのか。その答えが、あの背中に生えた苔だ」

ギンコは自分の胸のあたりを指差す。紫はまさか、と呟いた。

「ああ。酒気は霧状になった光酒こうきだ。それと一緒に吸い込まれた嫩草が活性化して、天狗たちの体に根を下ろしたんだろう。そしておそらく、お前の従者が可愛がっていたという妖獣も同じ症状だ」

「ちよ、ちよつと待ってくださいいな。じゃあヌシは? 貴方は背中に植物を背負うことがヌシの証だと……」

「そうだ。そして、俺は自分の知識をさつき否定したが、一部は、間違つちやあいなかつたんだ」

ここからは俺の想像だが、とギンコは前置きして、火の点いていない蟲煙草を口に咥えた。

「この霧はおそらく、ヌシの選定をしているんだ。嫩草を背負い切り、酒気を取り込んで安定した動物が、ヌシになる。この霧は、そのために発生しているのさ」

「え? じゃあ……天狗も橙も、山に選ばれて?」

「そのようだな。人間は、嫩草が根付く前に酒気で昏倒してしまうためにヌシの選定からは除外されているようだ。だが、これではつきりした」

ギンコは霧を見つめて言う。

「これは、やはり理の範疇はんちゆうだ。俺たち蟲師がどうこうできる問題じゃない。お前らの妖獣も、ヌシになってしまえば……それまでかもしれない」

「……そう」

ああ。ギンコは同調する。

山がヌシを選ぼうとしている。それを邪魔するということは、理に背くということになる。それはギンコにもできない。いや、それは一度、自らヌシを殺めてしまった過去もあるギンコだからこそ、できないことであつた。この未来に、対処法はない。

霧がかかる。深い霧が、視界を覆い、未来を覆う。今はまだ、誰が又シかはわからない。

妖怪の山の中腹。九天の滝とは別の大きな水溜りに、深い霧がかかっていた。水溜りと称すれば大きく、池と称すれば小さいそこには、二つの影があった。

一人は池の縁に座り、霧の先を見ている。ゆらゆらと体を前後に揺らし、落ち着きがないように見える。しかし表情は真剣そのもので、その目は何か大きな覚悟を決めたように、据わっていた。

もう一人は、なんだかよくわからない存在だった。背の丈は子供。池の縁に座るものとは対照的に、立ち尽くして微動だにしない。その視線は、どこを見ているのかもわからない。夢現ゆめうつつに、だが木の根のようにしつかりと、立つ。そうして矛盾を孕みはら、ぼんやりと、光を帯びていた。

二人は並び、そこにいる。どちらもつばの広い、帽子を被っていた。「珍しいね。そんな状態で、よくこちら側にとどまっていられるものだ」

「……」

座る影は、一見少女のようだが、その正体は一人の神である。ここ幻想郷に至るまでは、土着の神として人々の信仰を一身に受けていた存在である。

座る神のつぶやきに、立つ影は反応しない。無言の中で、二つの影は霧の中でも妙な存在感を放っている。

立っているモノはあやふやな境界の中にいた。少女のような姿形をしているだけ。蟲と人と妖怪。そのどれでもない存在となり果てて、いつからか野山を徘徊はいかいしていた。

夢を見ているかのよう。意識があるのかわからぬ視線。蟲の気に当てられた者が見せる独特な雰囲気、神は感じ取っていた。

「待っている人がいるのかい?」

「……わからない」

初めて、言葉を発した。この状態になって、初めて。それは立って

いる少女にも驚きのことであった。自分は喋れたのか。

わからない、そう答えた少女に、しかし神は首を振って答えた。

「いいや、きつといるんだよ。じゃなきや君は、もうとうにそこから転げ落ちている」

「……」

そんなことはない。

「君を待っている人がいるはずさ。よく言うだろう？ 夢に出てくる相手は、自分を待っているってさ。あれ？ 想っている、だったっけ？」

知らない。

「まあいいさ。とにかく、いずれ君は出会うべくして、ある人に出会うよ。最近面白い人が幻想郷に来たらしいからね。蟲師なら、今の君を放つては置かないさ」

蟲師って、誰？

「この山にも来ているだろうからね。あったことあるかもしれないよ。君の場合は、どこかであつても記憶していないだろうから、よくわからないだろうけど」

蟲師……。

「懐かしいねえ。ヌシと兼業してた時は、ワタリの連中が挨拶に来たっけ」

ぽつりぽつりと、神は呟く。いつかのように、今度は口に出せぬまま、立っている少女は蜃気楼のように揺らいで消えた。

「ありやりや。もうちよつと話していけばいいのに」

少女が揺らいで消える時、同時に霧が揺らぎ、晴れていった。すると、神の眼前には、世にも美しい光景が広がった。

木漏れ日映える水面に、蓮の花が咲き誇っている。きらびやかに日差しを反射する水面には波紋一つ浮かび上がらず、鏡のようなそれが、蓮華によって縁取られている。

池の縁は鏡の淵。そこに神は腰掛けて、何かを静かに見守っていた。

「頑張れ、頑張れー。乗り越えれば、君がヌシだよー」

その神の声に応えるように、池に一つの波紋ができた。池の縁にそれがとどいた時、一つ、蛙の鳴き声が池に響いた。

河童の計略で捕らわれの身となった橙は、案外大人しいものだった。網に入った化け猫を抱えて、藍は不思議に思っていた。寝息をたてるように、静かに上下する猫背には苔のようなが生えている。

猫の腹に指を這わせ、愛おしく撫でながら、藍は前を歩くにとりに聞いた。

「おい河童。この網、毒でも塗ってあるんじゃないだろうな。橙が妙に大人しいぞ」

「なんだいそれは。人聞きの悪い。網にマタタビを塗り込んであるんだよ。においでわかるでしょ?」

「塗り込みすぎでしょう。藍さんに匂いうつつってますよ」

「なん……だと……」

自分の袖を口元にやり、すんすんと匂いを嗅いでみれば、猫を酔わせる癖のある匂いがした。これは後で洗濯だな……と静かに思った藍であった。

橙の動きを考え、罨を張ったにとりの判断は正しかった。橙と藍が二人がかりで追い込めば、確かに捕まえられはしたろうが、今以上に時間がかかっていただろう。橙をマタタビで誘い出し、捕まえるという罨をあの短時間で作成するのは、さすが河童と言えた。

三人は自分たちの任務を果たし、九天の滝の縁まで戻ってきた。しかし、滝の縁に広がっていたのは、想像だにしない光景だった。

「これは……!」

誰ともなくそう漏らす。目の前に広がるのは、天狗たちが苦しみ喘ぐ姿だった。

この場を去る時には皆衰弱はしていたが、痛みを訴えることはなかったはずだ。一体どうしたというのか。近くにいる天狗の射命丸文に、橙が駆け寄る。

「文さん! しっかりしてください!」

「く……はあ、橙……!」

菌を食いしぼり、文は痛みをこらえているようだった。どうしようもない。ギンコも紫もこの場にはおらず、三人はただ、苦しむ天狗たちを前にあたふたと狼狽うろたえるほかなかった。

「……ねえギンコさん」

「ん？ なんだ？」

この霧がヌシを選定するため、生物に寄生していることはわかった。ならばその後は？ ただ一匹だけがヌシと選ばれるなら、寄生されたその他の生物はどうなるのか。紫はそれが気になった。

「寄生された後、苔が生えた生き物はどうなるんですの？」

「……わからん。だが、苔が生えても、ヌシになれなかった場合は……」

ギンコは天狗たちの様子を思い出す。体力を奪われ、衰弱していたあの姿。妖怪という強靱いのちな生命を吸って生える苔は、彼らをどこに導くのか。

「……最悪の場合、死ぬ、かもな」

ギンコはそう、呟いた。

第三章 偽主になる 陸

ギンコが紫と共に九天の滝へと戻ってきた時、そこには苦しむ天狗たちの姿があった。

皆一様に背中中の痛みを訴え、肩を押さえてうずくまっている。歯を食いしばり、額に玉のような汗を浮かべ、その苦悶くもんの表情は、見ているこちらにも痛みを錯覚させるほどだ。

椀が腕の中に収まる文へ、懸命に呼びかけている。ギンコが駆け寄った。

「何事だ、こりゃ」

「ギ、ギンコさん！ わかりません……戻ってきたら、みんなが……みんなが！」

「お前さんが慌ててどうする。まずは落ち着け」

狼狽うろたえる椀の肩を叩いてなだめつつ、ギンコは落ち着けというその言葉を、自分にも言い聞かせていた。

考えていた最悪の可能性。自分も初めて見る蟲の症状は、宿主の命を奪うかもしれない。どうする。どうしたらいい。文を触診しながら、ギンコは頭を働かせ、深く早く、考えていた。

このまま、静観するしかないのか？ 俺はこの苦しんでいる奴らを見て、見ていることしかできないのか？ ギンコは歯噛みする。

天狗たちは次第に体力を消耗しているように思えた。もしこれがヌシの選定だというのなら、いたずらに命を奪うことはないだろう。しかし、妖怪という存在に根を下ろした嫩草は、ギンコの目で成長していることが追えるほど、活性化を見せている。どうなるかわからない。本来根を下ろさない存在に根を下ろしてしまい、嫩草の方も戸惑っているだろう。

このままいけば、最後の結末はなんなのか。ギンコの背中を見ながら、藍は腕の中の橙ちえんを見た。橙の弱々しい呼吸を、鼓動を感じる中で一抹の不安が拭えない。むしろ、だんだんと大きくなっていくそれに、胸が押しつぶされそうになる。知らず、呼吸が荒くなる藍の肩に、紫が手を置いた。

にとりが椀のそばに寄っていく。いつもは飄々として偉そうな鴉天狗が、椀の腕の中で余裕をなくし、痛みに顔を歪めている。おい、どうした。そんなんじゃないだろう。いつものお前は。そんな言葉も、今は気休めにもなりはしない。

にとりがギンコに迫った。

「なあ、あんた蟲師だろ！ これは蟲が原因なんだろう!? なんとかしてくれよ！」

「……今、考えてる」

「考えてるじゃあ遅いんだよ！ 今！ こいつらを救ってやれよお！」

胸倉を掴みあげ、そう叫ぶ河童と、ギンコは目を合わせられなかった。そう、ギンコは蟲師である。だからこそ、この状況が何を意味するのかも、この場にいる誰よりもよく理解していた。

ギンコはふうと細く息を吐く。そうして腹の底に、感情を落とし込んだ。そしてじろり、とにとりを見据える。

にとりは思わず身を引いた。ギンコの目。いつか川底の翡翠と称したその目が、暗く澱んだ、沼の淵のように据わっている。目が語る。最悪のことも考えておけ、と。

これは理の範疇だ。自然の流れのままに行けば、おそらくこの者たちは衰弱死する。どうする。

ギンコは必死に考える。嫩草わかぐさの生態を考える。霧や雲に紛れて空中を漂い、光脈筋に根を下ろす。小さな蟲。

ギンコは必死に考える。ここに来た時の天狗の様子。ここに來てから、天狗の症状は悪化した。ここに連れて来れば回復すると踏んでいたが、それは酒氣の症状だけで、嫩草にとっては逆なのだとしたら。「(こいつらも戸惑っているんだ。妖怪という存在に根を下ろしてしま、その強靱な生命力を受け更に活性化している。だが決して根付いてはいない。ヌシへの条件は活性ではなく同調だからだ。だとすれば……)」

思いついたように、ギンコはすわと立ち上がる。邪魔になるのか、桐箱を乱暴に背中から下ろし、羽織の内側を弄って火打石と火口ほくちを取

り出した。そして、こんな時にギンコは蟲煙草を吸い始めた。

何をし始めたのか。一同がギンコの動きについていけないでいると、ギンコは椀の腕の中から文を奪い取るように抱きかかえ、うつ伏せにして背中を露出した。うぞうぞと動いている嫩草が見える。やはり、根付いていても定着はしていない。定着しているのなら、こんなに落ち着きのない動きは見せない。

霧と雲の話考えた時、ギンコはある蟲を思い出していた。それは硯すずりの中で化石になり、墨をすることで外に出て、子供達の中に取り憑いた蟲の話。対処法は、本来の住処に近い場所まで連れて行ってやること。雲や霧が発生する、標高の高い場所まで連れて行けば、蟲は仲間に引き寄せられて、自然と体から離れていった。今回もそうだとしたら……。試してみる価値はある。

ギンコは蟲煙草を大きく吸い込み、その煙を、背中に生える嫩草に吹きかけた。蟲煙草の煙は、蟲を感知すると巻きついて離れなくなる。そして、すぐに霧散する。いつもならば、その性質に従って霧散するはずだが、今回は気色が違うようだった。

ギンコの吐いた煙が嫩草にまわりついていく。ぐるぐると煙に囲まれた嫩草は、どういうわけか、自分自身も煙へと変じ、蟲煙草の煙と同化して、大気に解けるように霧散した。そしてそれに伴って、文の表情も落ち着いたものになっていった。どうやら上手くいったようだ、ギンコはため息をついた。

「……なんとかなったか」

「え……え!? ど、どういうこと?」

近くで見ていたにとりが驚愕する。それはそうだ。ギンコが煙を吹きかけたと思ったら、背中の苔が消え、症状が改善したのだから。「嫩草たちは決して定着していたわけじゃない。とある蟲の話から、霧状の仲間が近くにいれば、自然と離れていくのかも思ってた。事実、ここに来た後に天狗たちは症状の悪化を見せた。里にいる間は、体力こそ持っていかれたが、背中に苔はなかったはずだ」

そう言えば、にとりは今気づいた顔をする。ギンコは指先で蟲煙草を取り、煙を細く吐きながら続けた。ギンコもホツとしているのだ

ろう。優しい響きの語りは続いていく。

「それで、蟲煙草の煙を近づければ霧に戻るのかもと思つてな。試してみたが、どうやら上手くいったらしい」

呆氣にとられているのはにとり。落ち着いた表情の文を見て、安堵しているのは椛。そしてよつこらせと立ち上がるギンコを見て、感心していたのは紫と藍であった。

「それじゃあ、全員の嫩草を取り除かなきゃあな」

そうしてギンコは次々と、天狗たちの嫩草を取り除いていった。危機は去った。文の症例と同じように、天狗たちの背中から嫩草が消えていく。煙を吹きかけて対処するたびに、ギンコの肩に手を置いて、すごいすごい！ とにとりがはしゃいでいる。

藍は心底安堵していた。これで橙も助かる。もうこれ以上、苦しむ姿を見ることもない。天狗たちへの対処を終えたギンコがこちらに近づいてくる。

「さて、こいつで最後だな」

「ギンコ……」

煙草をくわえたギンコに、藍が言う。

「ありがとう」

「……おう」

顎を引いて頭を下げた藍の礼の言葉に、ギンコは小さな声で応じた。その口から煙が放たれ、橙の体に巻きついていく。これでやっと、と誰もが思った。しかし。

「ん？」

ギンコが疑問符を浮かべる。様子がおかしい。なぜだ。なぜ、嫩草が霧散しない？

「ど、どういふことだこれは」

藍が取り乱す。ギンコにもいよいよわからなかった。だがすぐに、一つの可能性に思い至る。

「まさか……定着しているのか？」

「定着だと？ なら、橙は……」

ヌシに、なろうとしているのか……？ 橙は妖獣だ。妖怪よりも、

動物に近い存在。嫩草が定着することは、十分に考えられた。そして又シになれば……。

「……橙？」

元の獣には、戻れない。

「橙！」

藍の声が、滝の音にかき消されるようだった。

光る川のそばに一匹の猫がいた。猫は自分が何者かも、なぜここにいるのかも憶えていないようだったが、その光る川のほとりを、ただ静かに歩いていた。

光る川をよく見れば、無数の小さな光の粒が流れているのだとわかった。うようよと蠢く、命の川。神々しいまでに光り輝くそれは、大層に美しかった。

猫はその光る川に見惚れていた。すてきだ。いつか藍様と見た星空に流れる川のように。藍様って、誰だっけ？

猫はじつとその川を眺めていた。光る川の周囲には、闇が広がっている。川の光が強すぎて、周りのものが見えなくなっているのだろうか。猫は考えた。

そうしているといっしか、猫はその川に近づいていった。なんだろう。川の向こうに、人魂のようなものが見える。私を呼んでいる？

猫は一步、川の中に足を踏み出した。すると。

「ダメだよ」

耳を揺らす、確かな音響。猫はびっくりして、思わず足を引っ込めた。何処から聞こえた声だろう。周囲を見渡すと、音源は以外と近くにいた。

左隣。猫を見下ろすように、つばの広い帽子を被った少女が立っている。

「ここに来ちゃダメ。待ってる人がいるんでしょ？」

待っている人？ 猫には何のことかわからなかった。でもどうしてだか、うん、とその言葉に答えていた。その答えを受けて、うん、と言った少女は、猫の横にしゃがみ込んだ。

帽子を被る少女は猫を抱き上げる。不思議なことに、鼻の頭まで濃い闇がかかっており、目が見えなかった。鼻の頭を、キスをするように合わせる。にこやかに笑う口元だけが、少女の表情を作っていた。「君はいいよねえ。待ってる人がいて。私はいないからさ」

にこやかな少女はそう言った。そして光の川と反対方向へ、猫を向けた。しゃがみこんだ少女の膝に足を乗せ、少女に抱かれながら猫はその方向を見る。白い、眩しいくらいの光が、闇に穴を空けていた。「眩しいね。こことは大違い」

そうだね。猫も同意した。

少女は猫をそつと地面に下ろして、白い光の方へと促した。猫は振り返る。あなたはいかないの？ 少女はにこやかに笑う。なぜだか目が見えないその表情。だけどその時だけは、なぜか。苦笑しているのだと、猫にはわかった。

「行けるのは君だけ。私はここにいますよ」

そう、と猫は光の方を見る。そしてもう二度と、少女の方を振り返ることはなかった。

眩い場所へ、猫は帰る。そうか、私は。

猫は全てを思い出した。その瞬間、世界は白に包まれた。

「橙！ 橙！」

藍は必死に、腕の中の橙に呼びかけていた。ギンコの処置がうまくいかず、なぜだか橙からは嫩草が離れていかない。

「ギ、ギンコ……」

ギンコは目を伏せる。指に挟んだ煙草から白煙がゆらりと立ち上る。それは揺れ動くギンコの心を表しているようだった。どうしようもない。ついにギンコをして、打つ手は無くなった。

誰もが口をつぐんでいた。静寂を打ち破るように、口を開いたのはにとりだった。

「で、でもさー。死ぬわけじゃないんでしょ？ だったらそんな暗い顔する必要ないじゃん！」

それもそうだ。にとりが言うように、死ぬわけではない。しかし、

又シとなるということとは孤高になるということ。山と誰よりも密接に関わるゆえに、山に住む誰とも繋がりを持つことはできない。頂点という名の下に、天涯孤独に生を終えるということである。

それはつまり、愛着ある存在との別れを示していた。

「橙……」

小さく、藍がつぶやく。誰もが目をつせていた。なんと声をかければいいのか。精一杯口を開いたにとりも、二言目を紡ぐ元気はない。嫌な沈黙が流れる。

そんな沈黙を破る。橙が動きを見せたのはそんな時だった。

もぞりと藍の腕の中で橙が身じろぎする。橙！ 藍が大きく呼びかけた時、橙は初めて口を開いた。

「藍……き、ま……」

その一言を受けて、どういうことか、背中の嫩草が霧と消えていく。橙の意識の覚醒とともに、症状が消え去ったのだ。そして、ギンコをはじめとする一同が感じ取る。

それは山の異変。それまで不安定だった何かが、かちりと収まったような清澄な雰囲気、山を満たした。ギンコがつぶやいた。

「ヌシが……生まれたんだ」

橙！ 呼びかける藍の言葉に、橙は一度だけ答えると、そのまますつと目を閉じた。

妖怪の山の中腹あたり。ここが光脈筋になってから、色々と見回りながら調査をしていたギンコだったが、そろそろ一度ヌシを拜んでおこうかということ、山の中腹にある大きな池にやってきていた。

木漏れ日を反射する水面は、波紋一つない。それはまるで鏡のようで、池を縁取るように咲く蓮華が、なんとも荘厳で、幻想的な場所だった。

「すげえな、こりゃ」

「そうだろう？」

思わず独り言で賞賛の言葉を漏らしたギンコだったが、それに答える声があった。声のする方を見れば、つばの広い帽子を被った子供が立っていた。どこかで見たような姿だが、別人だった。帽子には目玉のような飾りがあり、どこことなく蛙を思わせる。

ああ、見事だ。とギンコが言うと、くくつ、と喉を鳴らすように、少女は笑った。

「君が蟲師だね」

「そうだが。お嬢さんは」

「諏訪子。洩矢。諏訪子。神様だよ」

「へえ」

そりや、大層なご身分で、とギンコは腰を下ろした。桐箱を傍らに置き、蟲煙草に火をつける。神様だ、と名乗られて、あまり反応を見せないギンコの隣に、少女も座り込んだ。

「ヌシに会いにきたの?」

「ああ。ここにるのはわかってるんだが、どうも池の底から出てきてはくれんようだ」

ま、気長に待つき、とギンコは言う。そんなギンコの横で、足を交互に、ゆっくりとばたつかせながら諏訪子は言った。

「呼んであげようか? 出てきてーって」

「お、さすが神様だな。じゃあ頼むぜ」

「あいよー」

諏訪子は気軽に返事をして、立ち上がった。そしておもむろにケロケロ、とカエルの鳴き声とも聞こえるような言葉を発する。

端から見れば可愛らしく、子供が蛙の鳴き真似をしているようにしか見えない。しかし直後、水面に波紋が沸き立ち、池の中心が盛り上がったと思ったら、一人丸呑みできそうなくらい大きな蛙が姿を現した。池の縁に波がぶつかり、躲す暇もなくギンコが水浸しになる。蟲煙草の火も消えてしまった。

そうして微動だにしないギンコの様子がおかしいのか、自称神様の少女はお腹を抱えて笑っていた。

「はっはっはー!」

「笑いごとじゃねえよ」

「ひー、ひー、あーごめんねえ」

そこまで笑われると、ギンコもなんだか可笑しな気分になってくる。姿を現したヌシの大蝦蟇おおがまも、何処と無く口の端がっぴり上がっているように見えてくるのだから、人の感情とは勝手なものだ。

びしょびしょになったギンコは、そのまま水を滴らせて立ち上がる。桐箱を背負い直して、歩き出そうとする背中に、諏訪子が声をかけた。

「おーい色男。もう行くの？」

「ああ。ヌシを一目見られりゃいいと思ってたからな。ずぶ濡れになるつもりはなかったが」

「くくつ。そうなんだ」

ちらり、とギンコは池の中心に太たく居座る大蝦蟇を見る。背に植物を背負った、荘厳な佇まい。向こうの方が幾分神様らしいな、とギンコは思った。

そうして歩き出す直前、ギンコは一つ、あること思い出した。

「そうだ。神様よ」

「ん？ なんだい？」

振り返ってギンコが聞く。

「帽子をかぶった、蟲のような妖怪を知らねえか。ずっと探してるんだが、どうにも見当たらないんでね」

「蟲のような妖怪……」

諏訪子は少し考える。しばしの黙考の後、諏訪子は口元に笑みを浮かべて、首を横に振った。

「いや、知らないね」

「……そうかい」

それだけ聞くと、ギンコは振り返って茂みの中へ歩み出した。服、乾かさなくていいの？ と諏訪子はその背中に声をかける。これから天狗のところへ行くんだ。そこで乾かしてもらおうよ、とギンコは後手を挙げて答えた。

その背中を、神様と、新たなヌシが、静かに見守っていた。

山に座するは光の川。偽主を生み出し、山は其れを試す。
選ばれしは誉ほまれなり。耐えよ。さすれば後に残るは、偽りのない真まこと
のヌシのみ。

第三章 偽主になる 漆《了》

「……ですから、今申しましたように私の部下である蟲師の手により今回の事変は収束いたしましたので、ご報告までにと」

スキマ妖怪、八雲紫は澄ました顔でそう言った。

「ふん。気に入らん」

山の天狗衆の頂点、天魔てんまの翁おきなは慚然ふぜんとしてそう言った。

ここは妖怪の山のとある屋敷。山の天狗衆でも、上流階級の者が顔を付き合わせる隠れ里にある、天魔の屋敷である。寺院の仏前のような作りの部屋で、大きく空間を無駄に使い二人、膝を突き合わせていた。

なぜ紫がここにいるのかというと、今回の山の異変についての詳細を天魔に報告するためであった。幻想郷の管理者を名乗る以上は、欠かせない仕事である。

今回の山の異変は土地が光脈筋として復活することに端を発する事変である。その過程で、天狗の里が一つ崩壊した。もつとも、天狗たちは蟲師ギンコの手により処置され、全員命に別条はないようであるが。

妖怪の山に点在する形で管理される里が一つ、機能不全を起こしたということ、その原因を探るよう天魔が命令を下す前に、紫は手を回した。そして部下の手により、すでに事変を解決したと、そう報告するために紫はここにいる。

「まるで最初から決められていたことようではないか。のう、八雲の」
「うふふ、嫌ですわ。そこまでの慧眼けいがんの持ち主なら、こんなところまで足を運んだりしませんわよ」

膝を付き合わせるの形だけ。含みのある笑顔に、皮肉をかぶせて八雲は言う。紫の言うことには事実が多分に含まれるが、全てがそうというわけではない。それは天魔とて承知のことで、だからこそ疑いの眼差しを向け、警戒していた。

天魔のところへ天狗の里が一つ崩壊していると情報が入ったのはつい先刻。それも今日の前にいるスキマ妖怪から直接だというのだ

から気に入らない。天魔が急ぎ確認のため、使いを走らせてみればそれが真実だというのだからなお気に入らない。そんなどこもかしくも気に入らない不機嫌の塊みたいな八雲紫を相手に、天魔はしかし、一族の長として頭を下げた。

「今回のこと、まず礼を言う。なるほど、里一つ丸ごと蟲患いとは。久しく忘れておったわ」

「幻想郷が隔絶かくぜつされてしばらく経ちます。無理もありませんわ」

天魔に同調するように、紫はため息をついた。紫自身、蟲は厄介という点は本音から同意できるものであった。

山に異変が起きたのは数日前。天狗衆もその変化には気づいていたが、まさか里丸ごとの天狗が体調を崩すとまでは予想していなかったやうで、今の今まで里が一つ壊滅状態にあることを知らなかったやうだ。ずさんな管理体制だが、元が社会など形成しない妖怪であることを考えれば無理もないのかもしれない。

里の異変は蟲師の手によって収束した。紫はそう、天魔に報告した。ただし、自分の部下であるという一文を添えて。これの意味するところは、幻想郷のパワーバランスを担う天魔に向けたもの。つまりは、恩を売るも同義の物言いである。

「しかし八雲よ。お主、いつの間に蟲師を懐ふところに？」

「そうですねえ、この土地で蟲が確認されてすぐ、でしょうか。ちやうど人里で流行病があった時ですわね。部下として、引き入れましたわ」

「ほう」

嘘だ。紫はギンコを部下として使役できるほど信頼を得ていない。それを見透かしているのかいらないのか、天魔は続けて紫に聞いた。

「して、件の蟲師は今どこに？」

「今は天狗の里と私の住処を往復していますわ。今頃は、その後の診察をして回っているのではないでしょうか」

天狗の目は曇っていない。紫の真意を見抜いている。この女狐は蟲という存在そのもの、ひいては蟲師を利用して、幻想郷のパワーバランスを取ろうと考えている。天魔はそう思った。

相変わらず無然とした態度で、天魔は言った。地鳴りのような響きの声に、妖力という不可視の力が上乘せされ、紫の上へのしかかる。「ふん。手回しの良いことだな。それで先んじたつもりか?」

「あら、なんのことでしょう。それに先んじた、とおっしゃいますなら、そちらも随分大胆なことをなさっているようではありませんか」「……なんのことかな」

白々しくも堂々と言つてのける天魔に、紫は笑う。押し付けられるような妖力を自身の妖力で押し返し、拮抗する。二人の存在感は互いに膨れ上がり、部屋全体を軋ませていた。

嫌ですわ、と紫は笑みを崩さない。

「年老いて精力剤に頼るなんて、まるで品性のないことを始めたのはどこの誰かしら? それを知らば、女の私も覚めるといふもの。当然ではなくて?」

その言葉は、まずかった。

ごぎり、とどこからか耳障りな音がして、紫の座っていた場所が、次の瞬間に虚空と消える。強大な何かが上から下に駆け抜けて、空間ごと床を円形にくり抜いたのだ。紫は消えた。消え失せた。天魔だけが、そこに鎮座している。しかし、鎮座と言うにはあまりにも、逆る妖力が過ぎた。

やがてその妖力が落ち着きを見せた頃。不気味な静寂を破るように、くり抜かれた床に、正確にはその上にある空間に、細い亀裂が走った。例のごとく、自らの能力で逃げ出したスキマ妖怪が再び現れたのである。ああ、びつくりしましたわ、と悠然とした態度で天魔の前へ座り直す姿は、太々しいにもほどがあった。

「まだまだご健在ですね。死ぬかと思いましたが」

「ふん……口には気をつけろよ小娘が」

紫が放つた言葉は、挑発が多分に含まれていたことは否めないが、その真意は相手の核心をついていた。天狗たちが起こした行動。蟲が幻想郷に入り込み、これから幻想郷が動き出すと感じ取ったのは八雲だけではない。八雲が蟲師を用意して、時代に対応するというのなら、山の天狗は自身の力を増大し、八雲に対抗しようとした。

妖怪が力を増す方法は人間の畏れを集めること。そして天狗の畏れとは、山での不運や旅の事故をはじめとし、その中でも最大の畏れを集めるのは人攫いである。人を攫って里の者には畏れられ、人肉を啜ってさらに力を増す。天狗の畏れはそこにあった。

だからこそ、天狗は竹林に住む月の住人に、先の永夜異変で迷惑を被った慰謝料として、人を増やすという約束を取り付けていた。それはまた、月の薬師の思惑と八雲に焚き付けられた蟲師の手により頓挫することになるのだが、それはまた別のお話。

「こういうの、なんて言うのでしたっけ？ お互い様？ どっちもどっち？」

「同じ穴の貉、だろうな」

あらそうでしたわ、と笑う紫に、天魔も口の端を釣り上げる。だがどちらも、目だけは笑っていないかった。

裏も表も絡み合う幻想郷の事情は、闇の住人を中心に回る。誰かの思惑も、今はまだ、闇を拝するばかり。

「ん？ なんか、今言ったか？」

「いいえ？ 誰も何も言っていないが」

気のせいか、と一度文を振り返ったギンコは、再び患者へ向き直った。

天狗の里。此度の異変で天狗たち全員が蟲患いをしたため、ギンコがその後の経過観察のために度々里を訪れていた。その時は決まって文の家が貸し与えられ、ギンコは今回も、文の家を簡易診療所として使用していた。

ここに来る前に濡れてしまった服に代わり、いつもとは違う浴衣姿で、ギンコは天狗の少女を前に脈をとったり問診をしたり、と医者らしいことをしている。文は感心するように、ギンコのその手つきを眺めていた。

「手馴れていますね。蟲関係の仕事がない時は流れて医者？」

「そこまでの知識はねえよ。ただ、人の体調が良か不良か、判断してる

ただだ。それに、大抵は医者がどうにもできんことが回ってくるからな。普段はそういう者たちを相手にして、食いものを恵んでもらったよ」

机の上に広げた新しい巻物に、ギンコは天狗の少女から聞き取った内容を写していた。ギンコがそうするように、文も同じくギンコの話を書付に書き込んでいく。

ギンコが天狗たちの体調のその後を観察するのは、何も親切心からだけではない。今回のことはギンコにとっても初めての体験であったため、教訓としての情報を残すために調査をしているという意味合いも多分に含まれている。そして調査といえは、天狗の射命丸文が黙っているはずもなく、病み上がりの体ながらに天狗の里を訪れるギンコに張り付いて、取材をしている状況が、まさに今の光景を作っていた。

巻物から筆を離し、ギンコはふう、と息をついた。筆を置き、正座をする天狗の少女に向き直る。

「もういいぜ。協力、感謝する」

「あ、はい……」

ん？ どうした？ となぜかギンコの前から動こうとしない天狗の少女を見つめる。はうつ、と変な声を漏らした天狗の少女は、素早い動きで立ち上がり、これまた素早い動きで深々と礼をして、玄関から飛び出して行ってしまった。

ギンコはその様子を見て、自分の前髪を少し摘んだ。

「……そんなに恐ろしく見えるかねえ」

「いやいやいや。冗談ですよね？」

「ん？ 何がだ？」

「いやあ……なんでもありません」

苦笑いした文は手に持った書付に何かを書き込んだ。

取材させてもらう代わりに文の家をギンコが使用する。利害関係の一致であるが、自分が書かれる記事はどのようなものになるのだろうか。少しの期待感と不安感を持ったギンコだった。

「さて、最後はお前さんだな」

「はい」

「じゃあ、大雑把に聞くが、最近になってめまいや頭痛がぶり返したことは？」

「えーっと……」

文に幾つかの質問をし、その内容を書き取る。手首をとって脈を測り、健康状態の良、不良を判断する。何度となく行ってきた行為に、文も慣れてきていた。

上着をはだけて背中を晒す。最初こそ抵抗を覚えた行為だったが、慣れてしまえばただの治療行為の延長だ。肩甲骨が浮き出る文の白い背中を観察し、ギンコはもういいぞ、と声をかけた。

着物を着直しながら、文は背中越しにギンコへ尋ねた。

「そういえばもう一人の患者の様子はどうなんですか？」

「患者？ ああ、八雲のところの式ね。別段変わったことはない。元気にやってるようだ」

ギンコも背中越しに文に答えた。

八雲の式、とは化け猫のこと。この度の異変で主の選定に巻き込まれ、消耗した妖怪猫は、ギンコによって経過を見られながら八雲藍に看病され、静養につとめている。

初めギンコが見ていたのは山猫の姿だったが、蓋を開けてみればやはりというかなんというか、その姿は齡十ほどもない少女が本性であるようで、九尾の狐と二人いるその姿は、仲の良い姉妹か、あるいは親子のようであったと、筆を走らせながら、ギンコは思い出した。

そしてギンコがちょうど筆を置き、巻物の端から内容を確認しようと目を動かしたとき、その家を訪ねてくるものがあった。

「邪魔するわよ……って誰よあんた」

家に入るやいなや、ギンコの背中にそう投げかけたのは長く伸ばした髪を頭の両脇で結び上げている、特徴的な髪型の女だった。紫と黒という高級そうな色合いの格子模様で彩られた短い腰巻から、地面を強く踏みしめて仁王立ちする両足が伸びている。

その少し高い声に振り返り、今さっきの言葉が自分に向けられたものだと理解したギンコは、ジト目で女を見据えた。

「随分なご挨拶だな。そう言うあんたは、なんて名で？」

「はたてじゃありませんか。どうしたんですか？」

「どうしたじゃないわよ。なによこの里の状況。天魔様からの使いが走るまで発覚しなかったのも酷い話だけど、あんたらしからぬ失態じゃない」

「いやあ。面目ない、としか言いようがありませんね」

「俺の話は無視かい、はたてさんよ」

「うっさい。人間風情が気安く私の名前を呼んでんじゃないわよ」

ええ……とギンコは無視された挙句の果ての暴言に、弱いつぶやきを漏らした。そんな常識が欠落し、高飛車のごとく突き抜けたようである少女と、少女に呆気にとられるギンコを互いに紹介するべく、文が手のひらを向ける。

「この子は姫海棠はたて。私と同じ鴉天狗です。はたて、こつちの白髪のお兄さんは蟲師のギンコさんと言います。この度大変お世話になった方ですから、失礼はいけませんよ」

「蟲師？　なんか胡散臭いわね。なによその艶のない白髪。気味悪い」

「けばけばしい髪型のお前に言われたかねえよ」

「なんですって？」

「まあまあ二人とも。落ち着いてくださいよ。ていうかギンコさんも意外と言いますね」

そりゃあ言われれば言い返すさ、とギンコは言う。怒っているわけではないようだ。

「それで、はたては何をしに来たんですか？　取材ですか？」

「身内の恥新聞にしてどうすんのよ。それに、こういうネタは私の新聞には合わないわ」

様子を見に来ただけよ、とはたてはそっぽを向いた。へえ、引きこもりが珍しい。と文の遠慮ない言葉が飛んでいく。そこで何か思い至ったのか、文が手を叩いた。

「そうです。ギンコさんのお話なんて、はたての新聞にぴったりじゃないですか？」

「え？ そうなの？」

「……新聞をよく理解しているわけじゃないが、俺が出来る話なんて蟲の話くらいだぞ？」

「旅の身であるが故の一期一会。四季の移ろいに合わせてその身を北へ南へ、東へ西へと流れてきた人の話です。いいんじゃないでしょうか」

文の提案に、はたては食いついた。

「ちよつとあんた。詳しく話を聞かせなさいよ」

「急に食いついてきたな」

「こういう子なので」

文がにこやかに笑いかける。ギンコは苦笑を返し、目の前でいつかの文のように書き留めを用意するはたてを見ながら、蟲煙草を啜えた。火口ほくちで先端に火をつけ、煙を薄く吐き出す。その様子を見ていた文が、ギンコに言う。

「あ、それ、度々吸ってますよね？ 美味しいんですか」

「うまいもんじゃねえが、もう癖みたいなもんだな」

「一本くださいよ」

お前もか、とギンコは蟲煙草を一本文に差し出した。続けて火打ち石と火口を文に渡し、文も蟲煙草を吸い始めた。いつかの魔法少女は盛大にむせ返っていたが、文はそんなことがある様子もなく、少し眉間にしわを寄せ、煙を吐き出した。

「少し癖がありますね。確かに、美味しいものではないようです」

「だから言ったじゃねえか」

「ちよつと。二人して煙を吹かさないで。髪に匂いがつくでしょ」

まとわりついてくる紫煙を手で払う仕草をするはたては、なんだか滑稽に見えて、文は面白がって煙をはたてに吹きかけ続けた。

そんな様子を片膝を立てて見守っていたギンコの耳に、小さな、しかし遠くまで届く響きを持った美しい音色が聞こえた。ヌシが新たに生まれてしばらく。ついに、光脈筋として完成した山を祝福する音色。それは文とはたてにも聞こえているようで、揃って音のする方を探していた。

それは穏やかな日差しの中、九尾に包まれて静かに寝息を立てる妖怪猫の耳にも届いた。母親の声で目覚める子供のように、薄く目を開けて、小さな耳が音源を探してぴくぴくと動く。

「藍様。この音は？」

「起きたのか橙。そうだなあ……わからないけど、綺麗で静かだな」
「……そうですね」

それは滝の側に突き出た岩場で、盤を挟んで対局している河童と白狼天狗にも届いた。盤から目を離さない白狼天狗は、耳だけでその音を探し、河童は何事かと、辺りを見回した。

「なんだろうね、この音」

「さあ」

「椀に帰ってこい、って合図じゃないの？」

「さあ」

気の無い返事をして、白狼天狗が盤上の銀を動かす。

「王手」

「あ」

すかさず滑り込んだ河童の金が、玉の逃げ道を完全に塞ぐ。詰みだ。山に響く綺麗な音色は、対局の終わりを暗示していたのかもしれない。

「やっと、山が落ち着いたようだな」

「ギンコさん。この音色は？」

遠くから聞こえる鈴の音色。どこからともなく寄せては返す、綺麗な綺麗な綺麗な、鈴の音。

ギンコはここ数日行ってきたことは、天狗の診察、橙の容体の確認、の他にもう一つあった。

それは蟲の数の調査。山を歩き回り、その種類、数を調査して回っ

ていた。そうして得た結果は、ギンコがここに連れてこられた時とは比べるべくもなく、蟲の数が増えているというものだった。

ギンコはいつか博麗神社の縁側で、紫と話したことを思い出す。

『この世界にも蟲が入り込みつつあります。徐々に徐々に。水が紙に染み込むように。そして蟲の世界が完全に重なってしまえば、幻想郷では私が優位を握っていた理も力を取り戻すでしょう』

『境界の中に住まうものたちが増えれば、お前さんの力も落ちる、ということがあるか』

『ええ。境界を維持することはできませんけれど、その分、手をそちらに割くことになる。蟲にかまってはいられないのですわ』

『それで、俺を呼んだってことかい』

『勝手は十分承知ですよ。この世界は私の力で様々な位相の境界が混ざり合っている。それが蟲によって揺らぐことだけは、なんとして避けなければなりませんわ』

『俺に、この世界の守り人をやれと』

『……お願い致しますわ。もつとも、こちらがお願いするまでもなく、あなたはこの世界から出ることが叶わない以上、勝手に蟲と関わってくださると思っておりますが』

『はいっ……』

紫の言っていた、蟲の世界がこの世界と重なる時。それは、今確かに形となってギンコの耳に届いている。

馴染みのある声が聞こえる。小さな小さな、蟲たちの声。その声は、ギンコが吐き出す煙によって遮られる。

『ちようどいい。俺の話を知りたいんだろ。この鈴の音について、一つ話をしてやろう』

『これは自然現象なのですか？』

文が問う。ギンコは答える。

『これは声さ。微小で下等な蟲の声だ。ヌシの生誕を山に生きるものたちに教えてくれている。今回はちと、順序が逆だったようだがね』

『ヌシの誕生……』

『ああ。光脈筋となりつつあった山のヌシが何者かの後押しを受けて

早々にヌシとして自立した。理以外にそんなことができるものがないとは思わんが……もしかしたら、神様の力かもな」

ギンコの語りは重く、妙な響きを持って天狗の少女を惹きつける。知らない世界の知らないモノの話。指に挟んだ煙草から、紫煙が立ち上る。はたてはもう、その煙を気にしていないようだった。

「じゃあ話そうか。聞きたいんだろ？ 蟲の話」

鈴の音色が、誰よりも早く、返事をした。

第四章 火の目を掴む

第四章 火の目を掴む 壺

『蟲師ギンコ殿』

初めまして。初秋の月が綺麗な夜に、湖畔の城で優雅にこのメッセージを書いています。羨ましい？ 羨ましいと思うなら、私の元へいらっしやいな。用件はそれからよ。

高貴なる紅月』

「なんだこりゃ」

「私にもさっぱりです」

夜陰に燃える焚き火色に染まる紙面を目で追うと、そんな意味不明な文章が目に入る。頬をギンコの肩にくっつけて、同じく手紙を覗き込んでいた文もギンコに同調した。

ギンコが文からこの手紙を受け取ったのはつい先刻^{せんこく}。今日も今日とて旅の身の上であるギンコの元へ、手紙を届ける手段は多くない。目的地を定めているわけではないので、それはなおさらのことだろう。文が手紙を届けに来たのは、幻想郷最速を言わずとも、空を歩くことだけで十分適任と言えた。

手紙ともつかぬこの紙片一枚は、月が輝き始める宵の口に、城への新聞配達に行くと、帰るついでに渡してほしいと頼まれたものらしい。

手紙の主はこの時間から行動を開始するようで、文が城を訪ねた際に、寝起きの目を擦りながら渡されたというのだから得体が知れない。

この手紙を書いた人物は自分にいったい何を伝えたかったのだろうか。理解できない行間に、ギンコは首を傾げて唸った。

ああ、と合点のいった文が手を叩く。頬をギンコの肩から離し、手

紙を指差して言った。

「これはもしや招待状では」

「それにしても場所の表記がねえな」

「……」

にべもなく、ギンコが否定する。そしてその一言で、これからの自分の行動が決定づけられた文が眉を下げ、口だけで笑顔を取り繕った。

ギンコが近くに集めておいた小枝を手に取る。それを焚き火に放り込むと、揺らめく炎の先から火の粉が舞い上がった。

「案内頼むぜ、天狗さんよ」

「はい……」

ギンコの隣で、文が膝を抱えた。面倒臭い。顔にそう書いてある。炭が燃え、ぱちぱちと崩れる音が、文を笑っているようだった。

ギンコに手紙を出したのはレミリア・スカーレットだった。彼女は妖怪の山の麓ふもとにある霧の湖の湖畔こはんに居を構え、その大きな西洋の屋敷は、幻想郷の中でもとびきりの異彩を放っている。

先日、その屋敷に招待されたギンコは同行者に天狗の射命丸文を加え、道案内を頼み、屋敷を目指していた。野宿をしていた山の麓から歩き出し、霧が深い湖畔を迂回するように歩けば、豪華な洋館ごうしゃが見えてくる。件くだんの屋敷はもう、目と鼻の先だった。

ガサガサと草を踏み分けていたのも先程までのこと。今足元に見えるのは一本の獣道。草がはげ、足跡が残る程度に柔らかい地面が露出し、そこに二人分の足跡が刻まれていく。

「道中無言なのも飽きました。せっかくなので文ちゃんの情報をギンコさんに提供しましょう」

「ほう」

一本下駄の不安定な靴底を器用に使いながら歩き、文は得意気に語り出した。人差し指を伸ばし、頭の中の内容を諳んじてみせる。

レミリア・スカーレット。眼前に迫る洋館、紅魔館の主にしてヴラド・ツェペシユの末裔まつえいを自称する五百年目の吸血鬼。従者に人間の十

六夜咲夜を連れ、数年前に紅魔館ごと幻想郷に移り住んだ。日光が弱点であり、浴びると消滅してしまうため、太陽を遮る紅い霧で幻想郷を覆い、自分にとって住み良い環境に作り変えようとした前科を持つ。もちろん今の幻想郷を見ればわかる通り、企みは失敗に終わっている。太陽光以外にもんにくや鰯の頭も苦手としており、流れ水を渡れないことも合わせて弱点は多い。

小気味よく語られる内容には、ギンコにはわからない単語も多数あったが、次の一文だけは聞き紛うことなく、ギンコの耳に届いた。「人間を食する頻度は幻想郷で一、二を争い、それは彼女が人間の血肉を摂取しなければ命を保てない種族であることに由来する。それから……」

「……おいちよつと待て」

文が口にした物騒な単語をギンコは聞き逃さなかった。足を止め、口に咥えた蟲煙草を吸う。

「ん？ 何ですか？」

数歩先を行った文が振り返る。ふうーつと吐き出された煙が揺らいで立ち上がり、ギンコは腰に手を当てて頭をかいた。

「あーなんだ。その……お前さんのせいで行きたくなくなっただんだが」

「そんなこと言われましても。行かないほうが後で怖いと思いません？」

「……そうだな」

どうやらあの招待状を受け取った時点で、ギンコの選択肢は一つだったようだ。柔らかな地面がまるで沼地のように感じる足取りで、ギンコはまた歩き出した。時折霧が重なる目の前の洋館が、ことさらに不気味に思えた。

外周を囲む鉄格子までやってくると、屋敷の全体像を見ることができた。正門を中心に左右対称の造りの屋敷は、大きな時計塔だけがその均衡を崩すように立っている。そして何より、紅い。血を連想する紅に塗り固められた壁を見て、これほど気の進まない訪問もないだろう、とギンコは思った。

鉄格子伝いに左へと進んでいくと、やがて正門らしい場所までたどり着いた。すると、そこには奇妙な光景が広がっていた。

一つは門柱にぶら下がっている、いや、吊るされている子供。全体的に青い装束を着ている裸足の子供が、麻縄でぐるぐるの簀巻きにされた状態で吊るされている。だらりと力なく垂れた頭が、最悪の想像を掻き立てた。

そしてもう一つはその横で、鉄格子に背中を預け、立ったまま寝息を立てる女性。器用なものだ。ギンコは思った。

拭えない不安と一緒に、首を文のほうに向ければ、文も少々戸惑っているようで、肩を竦めて首を傾げていた。

再び視線を前に戻す。視界の右側は鉄格子の奥に見える紅い洋館がある。目の前には吊るされた子供。立ったまま眠る女性。これまでの経験則と、今までの直感を頼れば、二人とも人間ではないように感じる。特に子供のほうは、より蟲に近い印象を受けた。

寒気がする。この場だけ、気温が低くなっているようだった。

「……新手の生贄かこりゃ」

蟲煙草を地面に落とし、靴底で踏みにじりながら、ギンコは呟いた。「いやあ……さしずめ吊られた患者でしょうね」

文のほうは大体の察しが付いているようで、そう呟いた。

ギンコと文の言葉に反応して、子供が顔を上げる。こうして吊るされてしばらく経つのか、胡乱な目つきで力なく言葉をかけてきた。

「助けて……」

「……おい、どうしたらいい」

「私に聞かないでくださいよ」

ギンコは旅の中で立ち寄ったある里での風習を思い出していた。大水で川が氾濫し、里にまで被害が及ぼうとした時、水神様の怒りを鎮めるためと言って若い娘を生贄とする。そういう風習は珍しいことじゃない。馬鹿な話だと一蹴できるのは根無し草の自分だけで、その里に生きる者にとっては切実な問題であることは多い。

そういう時、ギンコはどうしてきたか。蟲にも関わりがない以上、ただの余所者が口を挟む余地はない。触らぬ神に祟りなし。里のた

めにも、自分のためにも、関わりを持たぬよう目と耳を塞ぎ、次の土地を目指した。今回もそうするべきか否か。ギンコは少し悩んで、子供のほうへ一歩踏み出した。

「助けるんですか？」

「お前が言わなきやバレやしねえよ。見張りも寝てるしな」

見張り。たつたまま寝ている女性をそう称したギンコは子供に近づいていく。縄へと手を伸ばした時、文がギンコの肩を叩いた。

「その子は氷の妖精です。力は弱まっているようですが、直に触れば凍傷になりますよ」

「なんだそりや。じゃあどうすんだよ」

「だから私に聞かないでくださいよ……まあ見ててください」

乗り掛かった船だ、と文は嘆息たんそくしながら指先を振るった。彼女の能力は風を操ること。空気中の塵芥ちりあくたを風に乗せて加速させ、擬似的な刃やいばを生み出すことが出来た。そうして途端に縄が切り刻まれ、子供が自由になる。どんな手品を使ったのか。ほう、と原理のわからぬギンコは目を見張った。

地面に落つこちた子供があいた、と言葉を漏らす。見張りはまだ寝ている。逃げ出すなら今しかない。

子供と視線を合わせるように、ギンコがしゃがみこむ。

「今度捕まっても、俺が逃がしたって言うなよ。逃がしたのはこの娘だからな」

「ちよつと。ひどくないですか？ せっかく手伝ったのに」

「冗談だよ」

「あ、ありがとう……」

ギンコの冗談には反応せず、文いわく氷の妖精は二人にお礼を言った。そしてそのまま、いずこかへと飛び去ってしまった。その行方が遠く湖の霧にまぎれて消えるまでギンコは妖精を見送り、立ち上がる。

「さて、こっちの方はどうするか」

ギンコは立ったまま寝ているの女性を見て言った。子供がいなくなれば、この女性は門番なのだろうかとも思える。

「とりあえず起こしたらどうです？ 直接触れるのはお勧めしませんけど」

「今度は火傷でもするの？」

「蹴りか拳がとんできて、当たりどころが悪ければ死にます」

「……お前さんが声をかけてくれないか」

「えー」

不承不承といった態度で、ギンコの言葉に文が従う。あのー。普段と変わらないその言葉のトーンで、女性は目を覚ましたように顔を上げた。もしかしたら最初から起きていたのではないだろうか。ギンコは思った。

「……これは新聞屋の。どうしました？ いつもなら私に声などかけないのに」

「今日は人を連れてきました。貴女のご主人様から招待状をいただいたのですが、聞いています？」

人？ と門番はギンコを見た。ギンコは軽く会釈して、懐に忍ばせていた昨日の手紙を出して見せる。門番との距離を詰め、それを手渡した。

門番はそれを開いて確認し、ああ……と残念そうなつぶやきを漏らした。そして目線を手紙からギンコに移す。

「あなたが蟲師ですか」

「ええ。ギンコと申します」

ギンコは改めて挨拶する。門番の女性はその挨拶に会釈で答え、鉄格子の正門を開けた。

ぎぎいと金属の噛み合う音が耳障りに響く。やはりこの女性は最初から起きていたのだろう。その証拠というわけでもないが、子供が逃げ出していることに何も触れないのが奇妙だと、ギンコは思った。

「どうぞ中へ」

人一人分が通れる隙間をくぐり、ギンコは紅魔館の敷地内へと足を踏み入れた。

二人が門を通り、門番が鉄格子を響かせて門を閉じる。そして門番が先導となり、ギンコと文はその後ろについて歩いた。

よく手入れされた庭を通る。左右対称の庭には、花卉の形がはつきりと分かれた、黄色や桃色の色とりどりの花が咲いている。見たことのない花だ。歩きながら、ギンコは門番に尋ねた。

「あの花はなんと言うんです？」

歩みは止めず、門番はギンコの言うところの花を、首だけ動かして確認した。

「この時期は主にコスモスが咲いていますが、それが何か？」

「へえ。いや、鮮やかに咲いているもんで、見惚れてしまったんですよ」

「おや。そう言っていただけだと嬉しいですね」

「この庭はあなたが手入れを？」

「そうです。季節の花は別の方に揃えてもらっていますけど、植えたり雑草を抜いたりとは自分が」

ギンコからは表情を伺えないが、最近雑草がひどくて大変なんですよ、と門番は言っただけに、これだけの広さを一人で？ そりゃあすごい、と手放しに褒めるギンコに、恐縮です、と門番は返した。

やがて洋館の玄関にやってくると、既視感のある動きで扉を開けて、その先に広がる闇へ、門番はギンコを誘った。

玄関から洋館の中に入ると、まず思ったのは暗いということ。闇の中に立ち、自分の影が前方に伸びるのを見ながら、ギンコは後ろで扉が閉まる音を聞いた。扉が閉まると同時に、玄関の先に広がる空間に明かりが灯る。

光源を探して上を見上げれば、豪華な硝子細工に乗せられた蠟燭ろうそくが、天井から明かりを降らせていた。

「よく来たわね。歓迎するわ」

声の主は正面にいた。闇が払われ、幼い姿が浮かび上がる。

紅魔館の主である、レミリア・スカレットは不敵な笑みを浮かべ、ギンコを歓迎した。

第四章 火の目を掴む 弐

ギンコが城を訪れると、主自ら直々に出迎えがあった。腕を組み、仁王立ちで小さな体を精一杯大きく見せようとしているような態度は、手紙の内容と相まって、ああ、そういうことね、とギンコを納得させる何かを訴えてきた。

だがそんな納得を上から塗り潰すように、大きな違和感を発する物体を、少女の背中に見た。

蝙蝠こうもりの羽。黒く艶のある骨組みに、肉色の翼膜が張られている。飛行するというよりも、滑空するために動物が備えた翼は、少女の体にはあまりにも不釣り合いで、ギンコの視線はそこに集中した。彼女の名はレミア・スカーレット。湖畔の城に住む、幻想郷の古く幼い吸血鬼である。ギンコの視線を感じたのか、レミアはくるりとスカートを翻し、背中をギンコに晒した。

「背中の羽が珍しい？」

「ああ。悪いな、変な目で見ちまったようで」

気にしなくてもいいわ、とレミアは羽を動かして見せた。作り物ではないことを証明するようなその行動は、やはり威厳というよりも可愛らしさの残るもので、まるで小動物のようだった。

普段から蟲という存在を見ているギンコをしても、慣れることはない。異形を目の前にした時の好奇の視線。それを許す器量は、主たる彼女に備わっていた。

ギンコの方へ向き直り、レミアがスカートの端を摘み上げて挨拶した。それが彼女らの挨拶の作法なのだろうか。ギンコも軽く会釈する。

「改めまして。私の名はレミア。レミア・スカーレットよ。よろしく」

「どうも。蟲師のギンコと申します。招待状をもらいましたが、用件とはっ」

「まあ話は奥の部屋で。ついてきて。……ブン屋もご苦労様。帰るも残るも、好きにきなさい」

「ではぜひ同席を」

体を半身にして、ギンコを促したレミリアはそのまま歩き出した。背中越しに射命丸の同席の旨を聞き及ぶと、ふん、と小さく鼻を鳴らした。

昼間だというのに日光がほとんど入ってこない紅い廊下を歩く。燭台でぼんやりと照らされたそこは、赤い布地でできた床があり、思わず土足で踏み荒らしているものかと躊躇ってしまふ。

異国情緒溢れる装飾の壁も、ギンコにとっては初めて見るものばかり。当然のごとく、奇異の視線を向けてしまふ。

角つのが大きく丸まった動物を型どった燭台。継ぎ目を感じさせず装飾された木の壁。毛羽立ちの少ない厚みのある布の床。そのどれもが紅く染まっている。そんな廊下を、館の主人と門番が連れ立って進み、ギンコと文が後ろをついていく。

やがて一つの扉の前に着くと、門番が扉を開け、レミリアがこちらを向き、部屋の中へと二人を促した。そうして屋敷の住人たちに見送られながら、ギンコと文は一つの部屋に足を踏み入れる。

そこはどれに腰かければいいのか、困るくらいに多くの椅子が並べられた部屋だった。部屋の中央をロングテーブルが占拠し、それを取り囲むように配置された椅子に、やはり窓の少ない空間を、燭台の明かりがぼんやりと照らしている。薄暗さを蠟燭の炎で塗り替えているようだ。

部屋に入ったギンコが立ち止まっていると、後ろで扉の閉まる音がした。どうぞ奥へ。声に促されるまま、ロングテーブルの長辺側を通り過ぎ、部屋の奥まで歩く。一番奥の席にレミリアが腰掛け、ギンコと文はレミリアとテーブルの角かどを挟むように着席した。

桐箱を下ろし、ギンコが席に着く。レミリアの後ろには門番が控えているが、この際従者と呼び直した方がいいだろう。背もたれのある椅子は、装飾の施された木を骨組みに、柔らかな布団生地で作られていて、腰の収まりがいい、とギンコは思った。

「さて、では改めまして、紅魔館へようこそ。どう？ 異国の文化に触れた感想は」

足を組むように動かし、椅子の肘掛けで頬杖をついて、レミリアがギンコに聞いた。

「いや、そいつはなんとも。物珍しいってのはよく言われるが、言うのはそう無いもんでね」

「ふふっ、そうよね。あなた、なんだか妙なもの」

楽しそうにレミリアが笑う。

「妙な男、とは最近よく言われますな。どうしてそうお思いで？」

ギンコは試しに聞いてみた。するとレミリアは笑みを消し、すっと自分の左目を含む顔半分を手で覆い隠した。

「その白髪の内奥。目の中に、何か飼ってるでしょ。妖怪じゃないけど、動物でもない。そうね。一番近いのは怨霊かしら」

「怨霊……か」

ギンコは自分の左目を意識した。いつからか真っ黒に塗りつぶされ、闇の深淵とつながってしまった自分の左目。後の文献で知ることになった、トコヤミという蟲が巢食っている。

ギンコはレミリアに答えた。

「俺の左目には、蟲が住んでるんですよ。トコヤミ、という蟲なんですよ」

「蟲、ねえ」

蟲って、どういうものなのかしら、とレミリアは聞いた。じろり、とギンコを見据えるのは紅玉を思わせる紅い瞳。小さくも、それは強い威圧感を放っているように見えた。

交錯する紅玉と翡翠。やがていつも通りの調子で、ギンコは口を開く。

「蟲、とは私ら人間や、動植物よりも、生命そのものに近い存在を指す言葉です。目には見えませんが、確かにそこにいるモノ。ただ存在し、影響を及ぼし、またどこかに消え去る。そういう生きモノです」

「生命そのものに近い存在……」

レミリアは神妙に話を聞き入っているようでもなく、話を聞くと同時に何かを考えているようだった。ギンコは構わず続けた。

「そういう連中を相手に、生業をしているのが蟲師、というわけです。」

この辺りでは、あまり聞かないでしょうがね」

「……そうね」

初めて聴けば、突拍子もないことを言っていると思われるも仕方がない。蟲は、見えない者たちと事実として共有することは難しいからだ。しかしレミリアは、それでも蟲師であるギンコを指名してきた。招待状に書いてあった用件の差すところが、レミリアの口から語られる。

「あなたの話、信じた上で一つ、質問してもいいかしら」

「どうぞ」

レミリアは足を左右で組み直し、膝の上で手を組んだ。

「あなたは蟲に対して、何ができるの？」

ギンコは静かに答える。重く、低い響きを持った声が、燭台で浮かび上がる陰影に溶けていく。

「蟲に対しては、何もできませんが、蟲に障りを受けた人になら、それを治す知恵があります」

「……そう」

短くつぶやいて、レミリアは立ち上がった。

「ならその知恵を借りましょう」

別の部屋に案内するわ、と言うレミリアに、ギンコは自分が試されていたのだと知る。ギンコ自身はそんな事は無いが、蟲師の中には蟲が見えないことをいいことに、詐欺まがいの手法で蜜を吸う輩もいる。

事実、レミリアはギンコを試していた。無論、依頼は最初から頼むつもりだったが、信頼して任せていいのかどうかは別の問題である。

ギンコが信頼できる人物かどうか。面を合わせて会話をすれば、レミリアには判断できた。伊達に五百年を積み上げてはいない。そして、ギンコとの面談で下された判断は、可、だった。

ギンコには得体の知れない妙なところがある。先に指摘した左目がそれだ。信頼するには足りないが、そんな得体の知れなさが逆に言動の信憑性を高めているのだから可、というほかない。

短い滞在時間をの部屋を出て、二人はレミリアの先導で次の部屋へと案内された。

季節は秋。晩夏の頃が終わわり、秋と言われるくらいには肌寒さが風に乗って到来し始めた初秋。一人の子供が、ふらふらと外を歩いていた。

ここは紅魔館。敷地の三分の二が庭で占められるそこは、久しく外を経験していない彼女からすれば実に都合のいい遊び場だった。

程よく草木の茂る庭先には、門番を兼任する庭師が季節ごとの花を外注して揃えている。見ても美しく、歩けば香りを楽しめる。この季節はもつぱらコスモスが咲き誇り、裏庭には金木犀きんもくせいの花が咲いている。

何故彼女は外を歩いているのか。それはやはり、単なる遊びである。ほかに言い表しようがない。彼女にとって、それはどこまでいつでも、遊びにほかならない。

「あ、見つけた！」

見つけた。そう言った彼女の視線の先には空中を漂う人魂のようなのがある。まるで夢幻のように、存在感が希薄な、淡い光を放つ炎が、ゆらゆらと移動していた。

その炎に追従するように、彼女もまたふわりと空中に浮かび上がる。彼女には羽があった。七色に輝く宝石を吊るした枯れ枝のような、歪で美しい羽があった。

彼女は空中を揺らめく人魂のようなそれと散歩をする。ふわふわ上下に揺れ、時には周りを回って、戯れるように空を歩く。にこやかに人魂のようなそれと戯れる彼女は、幼さの残る子供らしく、とても無邪気に思える。

彼女はこの空中散歩を純粹に楽しんでいた。先ほどから何度も何度も繰り返し、この不思議な浮遊物を見つけては無邪気な笑顔を浮かべていた。そう、無邪気な笑顔を浮かべていた。

「ふわふわ」

彼女は笑う。浮遊するその隣で、それに手のひらを向ける。

そしてゆるく拳を作り、一気に、握り込んだ。

途端に炎が弾け飛ぶ。それはまるで小さな花火のようで、彼女は先ほどから、この遊びに夢中になっていた。

「あははー・キレーー！」

彼女は知らない。これが蟲と呼ばれる小さな生き物だということ。

しかし彼女は理解していた。自分は今、命を摘み取っていると。自身の能力を遺憾なく発揮し、“目”を握り込んで潰しているその行為が、命を終わらせていることを。

彼女は無邪気に楽しんでいる。それは、子供が道端のアリをなんのためらいもなく踏みつぶしていることと変わらない。

「もういないのかなあ」

小さな花火を見たい。それだけのために、彼女は命を摘み取る。掴み取る。そしてまた、生贄が現れる。

「あ、いたー！」

少女は飛んでいく。ふわふわと揺れる浮遊物めがけて飛んでいく。

また、小さな花火が、紅魔館の庭で花開く。

ギンコはレミリアにとある部屋に案内された。その道中、レミリアは歩きながらギンコに事情を説明し始めた。

日の当たらない、屋敷の奥へと続く廊下を歩きながら、レミリアが口を開く。

「最初はただの風邪だと思ったのよ」

そう前置きしたレミリアは次のように語った。

従者である十六夜咲夜はこの屋敷で給仕を務める人物だ。紅魔館の給仕は他にもいるが、実質彼女が全ての仕事をこなしているらしく、掃除洗濯食事の用意など多忙を極める彼女は、自身の体調管理にも一等気を使っていたが、やはり絶対ということはなく、ある日寒気がすると行って、その日の仕事を早めに切り上げて休んでいたそうだ。

翌日になり、レミリアが起床するといつものように着替えを手伝いに来る従者の姿がみえない。仕方なしに自分で服を着替え、従者の部

屋まで様子を見に行くと、明らかに体調を崩した様子の従者がそこにいたそうだ。

人間の病気ならば薬を飲んで寝ていればなんとかなるだろうと、レミアは永遠亭の医者風の風邪薬を入手し、従者に飲ませて安静にしているようにと、しばらく休暇を与えたという。

「その時はすぐに良くなると思っていたわ。でもここ数日体調は戻らないし、寒気もひどくなって、今では布団から出てくるのも寒くて億劫になるほどらしいのよ」

「それで、私に文を？」

「ええ。もう一度永遠亭を頼った時、一度貴方に診て貰えばいい、と推薦されてね。永遠亭の医者の腕は確かだし、そういうことならとその天狗に文を持たせたのよ」

寝起きで寝ぼけていたから、ちゃんと伝わるか不安だったけれどね、と思わぬところであの意味不明な手紙の種が明らかになった。

「とにかく、一度咲夜を診察してちょうだい。報酬は成功報酬になるけれど、構わないわよね？」

「ええ」

「よかった。……ついたわ。ここよ」

そう言って、レミアは一つの扉の前で足を止めた。

ノックをすると、扉の向こうから小さな声が聞こえてきた。入るわよ、レミアがそう言って扉を開けると、そこにはベッドに横たわり、布団を首までかぶって寝込んでいる女性がいた。

「具合はどう？　咲夜」

「お嬢様。はい、相変わらず……」

「そう」

寝込んでいたのは銀髪で茶色の瞳をした女性だった。端正な顔立ちからは知性を感じられ、目つきや雰囲気はどこことなく永遠亭の医者を想起させる。

あの、そちらの方は、と咲夜が聞いてきたので、レミアが紹介する前にギンコが一步、歩み出た。

「どうも。蟲師の、ギンコと申します」

「蟲師……?」

少しの警戒心をみせる咲夜に、ギンコは口の端を釣り上げて言った。

「あなたの体調不良、もしかしたら協力できるかもしれない、とね」

咲夜はギンコの言うところの意味が瞬時に理解できず、目を丸くしていた。

咲夜の体調不良は蟲の仕業なのか。遠い異国を思わせる調度品に囲まれて、ギンコは普段通り、桐箱を地面に下ろした。

第四章 火の目を掴む 参

「んじや、とりあえず体起こしてくるか。無理そうなら、布団の脇から手を出さだけでいい」

レミリアに案内された部屋で、患者が寝ているのを確認したギンコは背負っていた桐箱を下ろし、その上に座るようにして患者の隣に腰を落ち着けた。

「な、なんですかあなた」

現在体調不良で休暇中の十六夜咲夜は、寝たままの姿勢で、ギンコに警戒心を向けた。首元まで被っていた布団を、さらに引き寄せ、そこに顔を埋めるように隠れてしまう。そんな警戒心を解くように、レミリアが咲夜の枕元に立った。

「大丈夫よ咲夜。この人の言うとおりにしてちょうだい。いいわね？」

「？ はい……」

急に連れてこられたギンコに警戒心を抱くのは当然だろう。そうではなくとも、ギンコの見た目は少々異様で、さらに言えば男性である。咲夜の反応は当然と言えた。

レミリアに諭され、咲夜は少々納得がいかない様子ではあるものの、ギンコの言葉に素直に従った。布団の脇から手を差し出し、じや、ちよつと失礼して、とギンコはその手を取った。

冷たい。まず最初に思ったのはそれだった。人間の体温で、生きていられる最低水準なのではないだろうか。ギンコはさらに触診を続けた。

脈の異常は見られない。咲夜の手は透き通るような白を呈していたが、不健康というわけではない。爪や肌の変色も見られないことから、血行が悪いわけではない。様々なことに当たりをつけ、ギンコの診察は進んでいく。

「お前さん、舌の根が冷えていたりはしないか？」

「舌の根、ですか？」

「ああ。自分で触ってもわかるはずだ。ちよつと、確認してみてください」

ギンコの言うように、咲夜は自分の口に指を差し入れ、舌の根を触ってみた。えずくまで行かずに、ひんやりと冷たい部位に行き当たる。指先で何度確認しても、そこは明らかに冷えていた。

「はい。冷たいところ、ありました」

「ふむ……」

ギンコはこれまでの診察で、とある蟲のことを思い出していた。それは火山岩の中から現れ、近隣の里と山を生活難にまで追い込み、一人の蟲師の命を奪おうところまでいった蟲の話。

だが得心がいかない。その蟲が原因であるなら、もう少し規模が大きく障りが出ている者がいるはずだ。そう思ったギンコは、門番の女性に尋ねた。

「あー……お前さん、えつと」

「紅 美鈴ほん めいりんです。そういうえば名乗っていませんでしたね」

申し訳ない、と美鈴は頬を掻いた。気にする様子もなく、ギンコは「お前さん、庭の手入れをしていたな」

「はい」

「雑草を抜いたとき、その中に青くて丈の長い草がなかったか」

「青くて丈の長い草……あ」

少し考えた後、ありました、と美鈴は答えた。美鈴が増えて困っていると言っていたのは、まさにその特徴を持つ雑草だった。

それがどうかしたの？ とレミリアの言葉がかかるが、ギンコは構わず、美鈴へと質問した。

「その雑草、抜いた後は？」

「えつと、確か……」

「焼却炉で燃やしました」

そう答えたのは咲夜だった。ゴミとして一緒くたに燃やしてしまったという。なら、とギンコは続ける。

「それを燃やした後、屋敷内で奇妙なモノを見なかったか。そうだな、例えるなら、人魂のような炎が飛んでいるところとか」

「ええ、幾つかは……というか、どうしてそこまで知っているんですか

？」

「それが蟲の性質だからだ。そして、もしそうなら、体の不調を訴えるのが一人だけというのはどうにも得心がいなくてな」

蟲の正体は、だいたい掴めたんだが、とギンコは付け加える。次々と屋敷内の事情を暴く蟲師に、咲夜は疑問を持った。それは、この場にいるギンコ以外の全員が同じだったようである。文はギンコの言葉を一言一句聞き逃すまいと筆を走らせていた。

「人魂のようなモノが蟲なの？」

レミリアの言葉に、ギンコは答えた。

「ああ、おそらく」

「それならフランが追い回して遊んでたわよ。てつきり人魂だと思っ
て放っておいたんだけれど」

「……なんだと？」

何の気なしに、レミリアが答える。人魂だと思っ
て放っておいた？

ギンコが久しぶりに、幻想郷の常識を思い知る。

「お前さんらは、妙だと思わなかったのか？」

「確かに妙だと思っただけど、冥界から人魂が流れてくるなんて最近はよくあることだしね。放っ
ておいてもどこかへ消え去ったから、別段気にもとめていなかったのだけだ」

こんなところでもまた、幻想郷の常識がギンコの前に立ち
はだかつた。なんてことだ……ギンコは頭を抱えた。

「ちよつと、ちゃんと事情を説明しなさい。こっちは何が何だかさ
っぱりよ」

「ん？ ああ……」

それじゃあ、と言っ
てギンコは語り出した。

「お前さんらが人魂だと思っ
て放っ
ておいたモノは、ヒダネという蟲だ」

「やっぱり蟲なのね。それで、その蟲がどうしたのよ」

「その前に咲夜。お前さん、この蟲を飲み込んでしまったことはないか？」

その一言に、咲夜は反応する。あんまり思い出し
たくない記憶のよ

うだが、咲夜は素直に白状した。

「……あるかもしれませんが。眠っていたら、突然喉の奥にひんやりとしたモノが流れ込んできて、何か飲み込んでしまったと思っていました。まさかそれが……？」

「ああ。ヒダネを、その時に飲み込んだんだろう」

ギンコの語りは続いていく。

「ヒダネとは、陰火を纏う蟲のことだ。お前さんらが見た人魂は、陰火をまとって飛んでいる成体のヒダネのことだ。幼生は青く丈の長い草の形を取るが、それが熱、つまりは炎などで燃やされると、成体へと変化する」

あの青い草を燃やした時にそれが？ 咲夜の言葉に、ギンコがああ、と答えた。

「こいつらは、火のようであるが、性質は全く異なる。成体となったヒダネは人魂のように空中をさまよった後、火の中や容れ物の中に巣食って、近づいてきた動物たちの体温を奪うことで成長する」

重く低い語り。やはりそれには、妖しい魅力があるようで、四人はその語りに知らず聞き入っていた。

「さて、このヒダネだが、人の体に寄生することもある。そうになると、人の体の中から徐々に体温が奪われていく。寄生されているかどうかの見分けは、舌の根が冷えているかどうかで判断できるそうだ」

「それでさつきは確認を……」

「ああ。そしてヒダネに寄生されたのなら、治す方法も限られてくる」
そこでギンコは立ち上がり、桐箱を開けて一つの引き出しから、細長い針を取り出した。

「ヒダネに寄生されると、体が凍えるように寒くなった後、体内でヒダネの草が芽を出す。そうすると草を吐き始めるが、そこまで至っていないなら早い対処で、苦しみも最小限に済むだろう」

「どうすればいいの？」

急ぐように聞いてくるレミリアに、ギンコは言う。

「陰火を捕まえる。まずは、そうだな。この屋敷の、台所に案内してもらおうか」

ギンコはそう、レミリアに促した。

一人は咲夜についていた方がいいだろうと、その役は美鈴に任せ、レミリアと文はギンコについていくことになった。

台所までの短い道中で、二人がギンコを挟んで質問攻めにする。

「いやーやっぱりすごいですね。あんな少しの情報で原因を特定しちゃうなんて」

「まあそういうものだという事前知識があればこそだな」

「ここまでギンコのいうことを書き留めていた文が感心する。

「それにしても対応が早いよね。本当にあなたの診断であっているの？」

「だから確認したろ？ 陰火が出ている状況証拠は十分だし、あの娘の体調の変化は、ヒダネがもたらすものと推測できる」

ふーん、そういうものなの。とレミリアは一応の納得をみせた。

そんな三人がやってきたのは紅魔館の台所。中央にテーブルが配置されたその部屋の様子は、前にどこかで見たことがあるような雰囲気だった。

入口から遠い壁一面に両開きの木製棚で埋められており、その下には壁掛けになった鉄製の調理器具がある。見たこともない形状だが、台所なのだから料理に使うのだろうと、ギンコは大雑把に予想した。

ギンコはそこで、まずは容れ物という容れ物を物色した。その行動の意味をレミリアが問うと、ギンコは手を止めずに答えた。

「さつき、ヒダネは容れ物に巣食うと言っただろ？ こういう火の気のあるところの容れ物には、特に集まりやすいんだが……」

どうやらないようだな、とギンコはかがんで暖炉を覗き込んでいた背中を伸ばし、立ち上がった。レミリアが嘆息して、そういうことなら早く言いなさいよ、とギンコに言った。

「ヒダネ？ を探してるなら外に何匹かいるはずよ」

「なに？ 本当か」

「ええ。妹のフランが吹き飛ばしてたし。まだ生き残ってればいいけどね」

「なんだそりや。どういうことだ？」

レミリアの不穏な言動に、ギンコは目を細めた。妹が吹き飛ばしていた。そのままの意味よ、とレミリアは片手を振った。

「あの子が久しぶりに楽しそうに遊んでたから放っておいたのよ。今頃ぷちぷち潰して嗤っているんじゃない？」

「そりやまずいぞ。早くやめさせろ！」

ギンコの焦ったような言葉に若干驚きつつ、レミリアは思わず「はいー！」と返事をした。

三人が玄関から外に出ると、そこには一人の少女がいた。

日光を避けるように広げられた日傘の下で、ぼーつと虚空を見つめて立ち尽くしている、ように見えただろう。しかしギンコだけは、少女がなにを見ているのかわかった。

それは空中を漂う火の玉。人魂のようなそれ。陰火だ。ギンコがそう思った時、少女がおもむろに陰火に手をかざした。嫌な予感がする。そういう虫の知らせのような悪寒がギンコを襲う。

「おいー やめろー！」

ギンコが大声で呼びかけても、それはもう遅かった。

ぐつ、と少女がその小さな手を握りこぶしに変えた時、陰火はまるで花火のように弾け飛んだ。しかし声は届いたようで、弾け飛んだ陰火をうつとりと見つめた後に、少女の首がこちらを振り向いた。ぐりん、と急な動きで、少女はこちらを見る。

「あ、お姉さま」

そうつぶやいた少女はこちらに駆け寄ってきた。三人がいる玄関。大きく突き出た庇の中に入ると、日傘をたたんで三人の前に立った。

「……お前さん、陰火を潰していたのか」

「うん？ 虫さんなら潰したけど？」

それがなに？ と少女はギンコを見て首をかしげた。

ギンコは少女の目を見た。光を吸収するような、闇の深い紅玉石が二つ、人形のような顔に嵌め込まれている。見たものの不安を煽るよ

うな、そんな輝きを秘めているようだった。

血相を変えてどうしたのよ、というレミリアの言葉を無視して、ギンコは目の前の妹に問うた。

「陰火を何匹潰した？」

「うん？ 数は憶えてないわ。とつても楽しかったのは憶えてるけど」

あははっ、と少女は太陽のような笑顔を見せた。それと比例するように、ギンコの表情には曇りが見られる。まずいことになった。もしギンコの予想が当たりなら、これは途端に難しくなる問題だ。

「ねえちよつと。さつきからどうしたのよ」

「……お前さんの妹君だが、あまりよくないことをしてくれたかもしれんぞ」

だからなんなのよ。ギンコの態度に煮え切らないような思いのレミリアは、語気を強めた。ギンコは神妙な面持ちで答えた。

「あの咲夜って娘を治すには、陰火が必要だったんだ。それが全てないとなると、あの娘は、助からんかもしれない」

軽々には言えない言葉。助からないかもしれないという事実。だがだからこそ、最悪の状況というのは共通認識としてしっかりと伝えておく必要がある。

妹だけが、まだ状況をつかめず、ずっと首をかしげていた。

第四章 火の目を掴む 肆

「助からないかもしれないってどういうことよ」

紅魔館の主、レミアア・スカーレットは狼狽えたような声を出した。それもたつた今、蟲師の口から出た言葉を真に受け取ったからであり、蟲師の顔が、それに真実味を持たせるような表情を浮かべているからだ。

従者が蟲の障りを受けてしばらく。レミアアが頼った蟲師は従者の不調の原因を早々に特定し、治療のために動き出した。しかしその治療のために必要なモノを、レミアアの妹であるフランドール・スカーレットが滅してしまっていたというのだから間が悪い。

狼狽え、しかし責めるような意味合いの言葉を受けて、ギンコは表情に影を落として答えた。

「そのままの意味だ。あんたの妹さんが、ヒダネを殺し尽くしてしまったのだとすれば、あの娘を助ける方法は、今のところない」

そんな……。レミアアがつぶやき、漏らした声は弱々しい。門外漢である天狗の記者も、事態の急変と深刻さを理解して、口を噤んでい

る。ギンコの言う通り、咲夜の症状がヒダネを原因とするものであるならば、陰火を使って調理した食べ物を食することで、体内で芽を出したヒダネを灼くしかなかった。しかし、陰火という偽の火を用意できなければ、この治療法は使えない。

ギンコの目の前にはその事態を引き起こした張本人が、顔を覗き込むようにして立っている。七色の宝石を吊るした枯れ枝を背中から生やし、見開かれた目には不安を煽るような輝きを放つ紅玉の石が嵌め込まれている。

姉の鋭いような印象とは違う。全体的に、不安定で歪な雰囲気を持つ少女だ。ギンコは自分の左目へと伸びてきた小さな手を、受け入れるように動かずにいた。

「わあ」

ギンコの前髪をかき分けて、黒い闇を落とす眼球を見たフランドール

ルは感嘆の声を漏らした。なぜ、そのような反応になるのか。ギンコには理解ができなかった。

興味のあるものに対して、純粹に驚く。まるで子供だ。いや、見た目は少女に相違ないのだが、例のごとく妖怪から感じられる蟲のような気配のせいで、ギンコはその子供らしさに、特別違和感を覚えていた。

「真っ黒だね。墨汁でも垂らしたの？」

「そうだな。かもしれない」

「あははっ、変なのー」

ギンコの前髪から手を離し、くるりと一回転するようにステップを踏んだフランドールが少しギンコから離れた。後ろ手に日傘を持ち、お辞儀でもするように体を倒した彼女は笑う。

「お兄さん面白いね。変な感じだし。お名前は？」

「蟲師の、ギンコという」

「私フランドール。フランドール・スカーレット。フランって呼んでね」

ああ、とギンコがフランを睨むように視線を送る。ギンコの表情が陰っているのは、何も治療の方法が失われてしまったからだけではない。そんな視線を受け流すように、フランは涼しい顔で再び日傘を広げた。庇の下から出て、再び外に遊びに行こうというのだろう。

「フラン」

そんな妹を制する声があった。ギンコの後ろから聞こえた声は、明らかに怒気を放っていたが、妹にそれは届かない。なあに、お姉さま、とフランドールは振り返る。

「中に入っていないさい」

「えー……」

「いいからー」

渋る妹を怒鳴りつけてから、姉は感情の昂りを隠そうと努めた。家に入っていないさい。再び紡がれるひそやかな響きに、妹は渋々従って、日傘を姉に預け、家の中に入ってしまった。

「……それで、咲夜を助けるにはどうしたらいいの？」

レミリアは諦めていない。無論、ギンコも諦めるつもりなどなかったが、さてどうしたものかと首をひねるほかなかった。そしてギンコは、無難な答えを口にする。

「……とりあえず、残ったヒダネを探してみるしかない。焼却炉のあたりはどこだ？」

「……そう。こつちよ」

「あ、あのー」

なんだ。ギンコが控えめな口調で割り込んできた文に応じる。二人の刺すような視線を受けて、文は首を竦ませながら手を挙げた。

「さ、探しものなら適任の知り合いますので、連れてきても？」

レミリアを伺うように、若干の上目遣いでそう言った。そう、そうね、とレミリアは同調し、お願い出来るかしら、と文に頼んだ。了解しましたと言うや否や、幻想郷最速でその場を離れる。こんなにも空が清々しいのは、きつとここ最近では他にないだろうと、文は思った。

「……あの子はちよつと気が触れているのよ」

焼却炉の鉄の扉を見ながら、レミリアはそう呟いた。妹がそうしていたように、日傘をさしてギンコの隣に立っている。表情が暗い理由は、日差しを避けているからだけではないだろう。

残念なことに、焼却炉の周りにヒダネはいなかった。裏庭やほかの場所を探してみても、見つけることはできなかった。ならばどこを探せばいいのか。それはギンコにもわからなかった。

気が触れている、とはどういう意味だろうか。蟲煙草を吹かしながら、ギンコは少し考えた。

目の前で蟲を潰して楽しそうに笑っていた少女の姿を思い出す。素手で蟲を殺すというのは、並大抵のことではない。いつか出会った神の左手を持つ少年のように、この世から秘匿されるべき力のように思う。

「気が触れているより、俺にはヒダネを殺して見せた、あの手の方が気になるがね」

「あれは手だけの能力じゃないわ。フランは、あらゆるものを破壊することができる能力を備えているのよ」

天賦の才。生物として超越し、神から与えられたとしか思えない性能を備えるものは、稀にいる。生物界を根底から揺るがしかねない、生の才を受けたのが彼の少年なら、あの少女は、死の才を受けたのだろうか。

「冗談だろ？」

ギンコは半笑いで言った。

「本当にね。冗談みたいな力なのよ」

レミリアは真面目に答える。小さな掌を傘の中で、空にかざすように掲げてみせる。

「物体には最も緊張した“目”という部分がある。そこを突けば、たちまち物体はその形を保てずに霧散する。フランはこの“目”を自身の掌に移すことができるの。握り込めば、それだけで物体は破壊される。……これはただの破壊ではないわ。万物流転の終着駅まで、すべての寿命を根こそぎ刈り取るようなものよ」

レミリアは一步踏み出し、空に掲げていた手で焼却炉の鉄の扉を撫でた。

「その性質が故に、フランの周りには死が溢れた。それで正気を保てという方が無理な話よ」

「そいつは……そうだな」

紫煙を吐き出しながら、ギンコは死の才を受けた少女の心境を思った。

自分の掌の中で、ありとあらゆる命が終焉を迎える。握り込む。ただそれだけで、どんなに大切なものも自分の前から消え去る。彼女はなんて儂い世界で、生きているのか。

「だが、今は」

「わかってる。咲夜のこと、よね」

ああ。ギンコは頷いた。

もしフランが不遇の世界で生きていたとしても、今は蟲患いの少女がいる。ヒダネが見つからないと、助からないかもしれない命。ギン

コトレミアは、何としてもヒダネを見つけないならぬ。

少し前。ギンコトレミアがヒダネを探して紅魔館の敷地内を歩き回っていた頃。屋敷内に引込んだフランドールは、楽しくもない散歩を続けていた。

彼女が外の世界に興味を持ち始めたのはつい最近だ。幻想郷に来て、フランドールと遊んでくれる人たちは増えた。握り込めば死に絶えるのは相変わらずだが、フランドールを恐れずに近づいてくるモノは珍しい。既に死に対して達観していた彼女にとって、全ての命は下等で虚しく、意味のないモノだと思っていたが、その考えは変わりつつあった。

命を摘み取る行動に手応えを感じていた。それは相手によるところが大きい。

「あ」

フランドールが声を上げる。廊下の先に見える人影。最近増えたお友達。ぼんやりと光を帯びた、つばの広い帽子をかぶった少女。

「こいしちゃんだ」

少女は紅い廊下の先で、薄く笑みを浮かべている。フランドールが近づいていくと、まるでどこかに案内するような動きで、少女は駆け出した。

「あ、待ってよー！」

駆け出す少女の背を追いかける。日光の刺さない廊下に、二人分の足音が響いていく。追いかけてっここかな？ 次第に楽しくなってきたフランドールの意思とは裏腹に、少女はある部屋の前で立ち止まる。もう終わりなのかな？ そうして思っていれば、こいしちゃんと呼ばれた人影は、跡形もなく消え去った。

「ありや、消えちゃった」

いつもこうだ。ふらりとやってきては、ふらりといなくなる。こいしちゃんとの遊びは楽しいが、いつも不完全燃焼なのはただけでない。

フランドールはこいしちゃんが消えた扉の前に立つ。こいしちゃん

んはどこに行ってしまったんだろう。もしかしたらこの部屋の中かな？ そんな軽い気持ちで、扉のノブに、手をかけた。

部屋の中には人がいた。ベッドに横たわる人と、その傍らで座る人。

「妹様」

部屋に入れば、当然二人は自分に注目する。いつもは門番をしているはずのその人と、いつもは完璧にメイドを務めているはずのその人。メイドは寝込み、門番が看病している。妹様と言ったのはどっちだろう。声の違いなどで、二人を見分けられる自信は、フランドールにはなかった。

「どうしたの？」

聞いてみる。立ち上がった門番の方が、口を開いた。

「ああ、えっと、心配ありませんよ。ちよつと体調を崩してしまっただけで……」

「嘘」

わざとらしく取り繕った門番の言葉など、フランドールは意に介さなかった。見つめる先はメイド。確か人間だったよねと、注がれる視線は、そのメイドから感じられる不穏な“匂い”を見ていた。

全てを破壊することができる能力の副産物で、彼女は生き物が放つ、死の匂いを視る。死期を感じ取ると言ってもいいかもしれない。それがメイドから、濃厚に漂ってきた。

「咲夜、死ぬの？」

「そ、そんなことはありませんよ！」

「あなたには聞いてない」

フランドールは門番の言葉を封殺する。どうなの？ と咲夜に近づきながら、フランドールは聞き返した。咲夜の枕元に立ち、その小さな手で咲夜の額を触った。

冷たい。人の体温を感じない。自分の手がおかしいのだろうか。いつから、自分の手は体温を感じなくなっていたのだろうか。

フランドールはそれでも、何も感じなかった。感じる事ができなくなっていた。目の前に横たわる死の香り。鼻が麻痺して、目も霞ん

で、不感症気味の肌が、全ての感情を殺していく。

そしてフランドールは思い至る。きっとお姉さまはこの人間のために怒ったのだ。さつき自分に向けた怒りは、あの人魂を殺したことでなく、あの人魂を殺したことで不都合があるこの人間のために怒ったのだ。

それは悲しい理解だった。感情の伴わない、理解だけだった。

「妹様……」

頬に触れる手に、咲夜の手が添えられる。やはり、冷たい。生の彼女は、儚く、脆いのだ。

「大丈夫です。いま、お嬢様が恐れ多くも、私のために動いてくれます」

「それは、あの男の人も？」

はい。咲夜は答える。あの男。妙な雰囲気。今思えば、咲夜と同じように仄かに死の香りがしていたように思う。

こいしちゃんを私をここに連れてきて何をしたかったのだろう。何を、言いたかったのだろう。

あの男は怒っていた。なんで、怒っていたのだろう。あの男と咲夜は関係ないはずなのに。

命を摘み取ったから？ あの下等で矮小な命を？ 虫の如く粗雑な、居ても居なくても良いモノのためには？

理解できない。理解できない。いらぬモノなら、亡くなくても良いはずだ。

理解できない。しかし、男の怒りは、きっとお姉さまよりも純粹で、尊いものだと思った。

「泣かないでください、妹様……」

フランドールが知らず流していたのは、涙だった。とめどなく溢れるそれは、病床に伏せる咲夜の言葉をもつてしても、止まることはなかった。

第四章 火の目を掴む 伍

「この近辺にいないとなると、一体どこを探せばいいのかしら」

紅魔館の裏庭、焼却炉の前でレミリアはギンコに尋ねた。ヒダネを探して屋敷の周囲を散策してみたものの、見つけることはかなわず、途方にくれる、とまではいかないが、若干の手詰まり感を匂わせながら、ギンコは考えを巡らせていた。

蟲煙草の先端が赤熱している。煮詰まった思考を表すかのように、赤く明滅する。ギンコは黙考を続け、やがて口を開いた。

「ヒダネは火を恐れずに対応する人間を対象に体温を奪う蟲だ。もしいるとすれば、それは冷え込んだ場所ということになるが……お前さん、どこか心当たりはないか」

未だ幻想郷の地理を完全に把握していないギンコはレミリアに聞いた。レミリアも咄嗟に答えを返すことはできなかつたようで、口元に手をやり、考える素振りを見せた。

季節はまだ残暑が我が物顔を続ける秋の口。羽織り一枚なくとも外を出歩ける程度には暖かい時節であるからして、ヒダネがどこにいるのか、見当がつけづらかつた。

ヒダネは人間から体温を奪うために、人がいて、寒い場所を活動場所に定めている。そこまで考えたところで、ギンコは人里の周辺を思い浮かべたが、それと同時にレミリアは思いついたように顔を上げた。

「ヒダネとか言う蟲の習性は火のふりをして人の体温を奪うのよね」

「ああ」

「なら人里はどうかしら。あそこなら腐る程人がいるし」

「……俺もそこを思い浮かべていた。探してみる価値はあるだろう」

レミリアの物言いは置いておいて、その提案にギンコも同調した。その時、秋風を纏って二人の前に舞い降りる存在があった。何時ぞやの白狼天狗を抱え、黒い羽を羽ばたかせて、天狗の射命丸文が戻ってきたのだ。

「お待ちせしましたー。ご注文の品です」

「ど、どうもお久しぶりです、ギンコさん」

「おう」

文に連れられてやってきたのは白狼天狗の犬走権だった。いつかの山の異変の際に、勘違いとはいえ、ギンコを殺そうとした権は、その引け目も若干感じているのか少し緊張した様子でギンコに頭を下げた。ギンコの方は気にした様子もなく、片手を上げて権に挨拶をした。

「いやー苦勞しましたよ。ギンコさんの名前を出さなかったらこの子、私に噛み付いてたんじゃないでしょうかね」

「いきなり現れて人を物みたいに担ぎ上げた人がそれを言いますか」

「だって貴女、私の話なんて聞かないでしょうに」

「ええ」

「ほらー。だからさっさと運んでしまおうと思っただんですよ」

二人は仲がいいのか悪いのか、よく分からない漫才を繰り広げていた。権は先の山の異変の際にも、苦しむ文を見て心配をしていたので、根っからの関係は悪そうには思えない。

「それで、私は何をすればいいのでしょうか」

文から大体の事情を聞いているのか、早速権はそう聞いてきた。彼女の能力、千里を見通すその力でもってヒダネを探そうとしていたが、ちょうどいい、とギンコは人里の様子を見てくれないか、と権に頼んだ。

「人里の様子、ですか」

「ああ。人里の周りに妙なものが飛んでいないか見て欲しい。あと人の様子だな。何か騒ぎになっていないかも見てくれ」

「了解しました」

いつかそうしたように、権は大雑把に人里の方角に当たりをつける、と、深く息を吸って、目を見開いた。そうして権の視界は千里を駆ける。

ギンコはその能力を聞き及んではいたが、見るのは初めてで、興味深そうにほおー、とつぶやいた。

「便利なもんだな」

「でしょう。なんたつて私の部下ですから」

「文さんが誇ることにじゃないです」

文の言動に口だけを挟み、遠くを見つめる権は続けて言った。

「人里に変わった様子は 아닙니다。近辺にも、妙な物は飛んでいません」

「そうか。人魂のような物なんだが」

「人魂……はい、見られません」

「そうか……」

権の報告にレミリアが口を挟む。

「ちよつと、ちゃんと探してるの?」

「探してますよ」

自分の能力を疑われたからか、権がむつと口を尖らせた。

「そういうな。千里眼つてのは伊達じゃないみたいだぜ。探す手間が省けて、感謝するくらいさ」

疑うなら、屋敷の中の自分の部屋でも覗いて貰えばいい、とギンコが言うと、レミリアはとりあえず納得することにしたようだった。

「しかし人里の周辺に現れないとなると、これはいいよいよどこを探せばいいのかわからなくなったきたな」

冷静に言うギンコだが、自体は思ったよりも深刻だった。陰火が無いこととなるとあの娘をどう治せばいいのか。強力な蟲下しでも効果が無いことは前例で検証済みであるし、まさか腹を切り開くわけにもいかず、開いたところで腑に根をおろすヒダネを易々と引き抜ける保証も無い。

やはりヒダネを見つけるしか無い。そこでギンコは次の可能性を考えた。

「この季節、一番寒いところはどこだ」

「一番寒いところ?」

ギンコに問われたのはレミリアだった。ギンコの質問を繰り返して、レミリアはそれでも疑問符を浮かべた。

ヒダネの目的は人間の体温を奪うこと。そのためには人が近くにいるということのほか、人が暖を取ろうと自分に近づいてくる状況

が必要と考える。ゆえに寒い場所。この残暑厳しい初秋の時節に、暑さを避けているのだとすればどこになるのか。ギンコにはわからないことであった。

「それなら氷妖精の周りじゃないでしょうか。ほら、門の前に吊るさ
れてたあの」

人差し指を立てて、文が提案する。確かに氷妖精の周りは、常に冷気が漂っている。冬の象徴ともとれる妖怪も存在するが、そっちはあくまで冬ありきの存在なので、この場合は妖精ながら比較的大きな力を持つ冷気の源が妥当と言えた。

文に言われ、思い出したようにギンコが声を漏らす。

「あー、あれか」

「そういえば逃げ出してたわね。まったく、美鈴には見張りを頼んだのに……後でお仕置きかしら」

まさか自分が逃がしましたとは言えず、ギンコも文も静かに心の中で、美鈴にお詫びを言った。

何はともあれ、次に探すものは氷妖精である。頼む、というギンコの言葉に、椀が再び、遠くを見つめた。

一方屋敷の中では、地下への入り口に立つ影が二つあった。一つはこの屋敷の門番である紅美鈴。そしてもう一つは、家主の妹、フラン
ドール・スカーレットである。

二人がなぜそこにいるのか。その理由は少しだけ時間を遡ると見えてくる――。

「咲夜を治すにはどうしたらいいの?」

自分が涙を流した理由もわからぬまま、フランドールはそう美鈴に聞いた。美鈴自身、詳しい事情を知っているわけではないが、蟲師という人物が何をしようとしているのかは把握していた。

「それはわかりませんが、蟲師とやらは咲夜さんの病気を治すにはヒ
ダネという蟲が必要と言っていました」

「……きつとあの蟲だわ」

フランドールは姉の大きな声を思い出した。蟲を潰していた自分の行動を咎められたあの時。姉の怒りが咲夜のためだと、直観的な理解をしていたフランドールは、それが治療に必要なものだったのだろうと推察した。

だとすれば、自分がしてしまったことはとても大変なことだ、と理解したフランドールは咲夜に謝罪した。

「こういう時には謝るのよね。ごめんなさい、咲夜。あなたが助かるのに必要な蟲は、全部私が殺しちゃった」

「……そう、でしたか」

静かに、咲夜はフランドールの謝罪を受け入れた。怒るでもなく、悲しむでもない。そんな表情をしている彼女の心を、フランドールは理解できない。

「だからお姉さまが探しているものはきつといない。あなたは助からないわ」

「い、妹様。それはあまりにも……」

でも大丈夫、とフランドールは美鈴の言葉を遮った。

「私もあなたが死なないような方法を探してみる。こういう時には、そうするのが正しいのよね？」

思わず、フランドールの無表情からそんな言葉が聞けたことに、咲夜も美鈴も驚きを隠せなかった。それがたとえ、主人に対してとても失礼な行動にあたるとしてもだ。

フランドールは何も常識が欠如しているわけではない。彼女は気が触れて、喜怒哀楽の意味を忘れてしまっているだけなのだ。いわば病的。自分の命も、他人の命も大切に思えないことからくる、心の磨耗が限界を振り切った状態。心は凍りつき、だから今回のことも、他人の怒りを通じてしか物事を判断していない。それがたまたま、姉の咲夜を思う怒りだったというだけだ。

フランドールは思う。考える。きつとそうすることが正しい。その選択肢を選ぶことは、決して自分の感情が伴うことではない。強いて言うのなら、怒られたから。今回は、ただ、それだけだった。

二人はそんなフランドールの心を理解できない。だから感動する。

親に怒られたから従う子供のようなフランドールの言葉に、感動する。

「とりあえず、パチュリーに話を聞こうと思うの。これから大図書館に行ってくるわ」

「妹様。私も行きます」

美鈴はフランドールの行動に同行の意思を示した。好きにすれば、そう素っ気なく言われても、美鈴は元気な返事をした。

「……かくして二人は大図書館の賢人がいる地下へと赴くことになった。今は地下への入り口で二人は足を止めている。それというもの、地下へ続く道から、何やら不穏な気配を感じていたからだった。それは魔術的な波動。足元を這いずる冷気のように、濃淡を作りながら肌に絡みついてくるような気配。

「……じゃあ行きましょうか」

そんな美鈴の言葉が合図になったのか、少し立ち止まっていたフランドールは再び歩き出した。この先に何があるのか、考える必要はない。何があるのか、気配だけで大体の事情は察したからだ。

なぜそれがあるかなど二の次だ。フランドールの行動に理由はいらない。だからそれを踏んでしまった時も、素早い対応ができた。

フランドールが踏んだ床の魔法陣。隠されていたそれが一瞬光を放ったかと思うと、進行方向の空中に、炎の槍が複数出現する。穂先は全てフランドールに向けられており、弩でも構えているようなその配列は、射出するような挙動で一直線に迫ってきた。

反射的に炎の槍を殴り抜く。フランドールは吸血鬼。その齢は四百と九十五。古の魔法使いを軽く凌駕する神秘性はその肉体にこそ宿り、彼女の才覚は、ただの握りこぶしを対魔法の破壊術式並みの威力をもたせていた。

槍の出現と射出は続く。何本かは美鈴が弾き飛ばすが、そのほとんどはフランドールが破壊した。

やがてその射出が終わると、美鈴はフランドールに話しかけた。

「なぜ迎撃用の罫が作動しているのでしょうかね」

「……」

「妹様？」

美鈴の問いかけに、フレンドールは答えない。うつむいたまま、静かに肩を震わせている。

どうしたのだろうか。美鈴が気になってフレンドールの肩に手を伸ばした時だった。

「あははっ！ ふふ……あはっ！」

大声の笑い声が地下への廊下に響く。フレンドールが破壊したのは迎撃術式の一端だ。それが意味するところは、大図書館の入り口まで今みたいなのが数百は重ねられ、さらに言えばダンジョン化した通路が侵入者を拒むため、それはもう並大抵のことでは図書館にたどり着けないということだった。

だがフレンドールは笑う。その行動を、美鈴は理解できない。分かり合えない。

楽しいから笑うのではない。もっと原初の、感情なんていう知性との混ざりものではない、行動の源流からこみ上げてくる、愉悦。自分の力を抑えなくていいという、ただそれだけの愉悦。

フレンドールは笑い出す。走り抜けるは、数十の罨の嵐。狂った魔法少女が、目的も忘れ、大図書館までの道程を進みだした。

第四章 火の目を掴む 陸

何かとても嫌な予感がしたレミリアは、霧の湖のほとりに生える林の中で我が城を振り返った。いつもは能力で城の管理をしている咲夜が寝込んでいる今、居城の破壊は避けるべき事柄である。具体的には、城の中で弾幕ごっこよろしく魔法の打ち合いなんていうのはもつてのほかであるわけで、どうしてもそんな具体的に嫌な予感がするか、レミリアをして分かりかねることであった。

「どうかしたのか」

「……いえ、なんでもないわ」

足を止めたレミリアを振り返り、ギンコが問いかける。具体的に嫌な予感を振り切るように、レミリアはギンコのいる前を向き直った。

権の先導で、一行が進んでいるのは林の中。霧のかかる湖を横目に、薄く茂る木々の隙間を縫うように進んで行く。

千里眼で氷妖精がいる場所は確認済みだ。わざわざ歩いて近づいているのは、妖精を下手に刺激しない意味もあったし、レミリアが日傘をさした状態では素早く移動できないためであった。もともと、逃げられたところでこちらには幻想郷最速の鴉天狗がいるのだから、前者に関しては無用な心配ではあったが。

「いました。あそこです」

権が指し示す方向。木の隙間から、人の子供くらいの大さきの妖精と、件の氷妖精が何やら楽しげに談笑している様子がうかがえた。

音を殺して近づいてみる。会話の内容までは聞き取れないが、姿形ははつきりと見られる距離まで近づいた。

「ヒダネはいないようだな」

「そうみたいね」

氷妖精の近くに、件の蟲はいない。茂みから様子をうかがっているだけでは、事態は進展しないと云えた。

「ちよつと、あなた行ってきなさいよ」

「俺がかよ」

肘で脇をつつくような仕草のレミリアに、ギンコが自分で自分を指

差した。

「人間の方が警戒心もいくらか和らぐでしょ」

「……へいへい」

レミリアに促されて、ギンコは立ち上がる。ごとごと、がさがさ、と背負った桐箱やら草の根を踏む音やらで、なるべく存在感を出しながら近づく。まるで熊と遭遇しないための知恵だな、とギンコは思った。

「誰だー」

大声で反応したのは氷妖精だった。服についた葉っぱをつまみ、払いながらギンコは努めて陽気に話しかけた。

「よう。また会ったな」

「あ。あの時の人間だ」

指をさすんじゃないやねえよ、とギンコが言うよ、氷妖精は大人しく従い、腕を下げた。

しかし冷気を放っているというのは本当なんだな、とギンコは実感していた。吐く息が若干白んでいる。吐息が凝結し、霧となっているのだ。湖の霧は、案外こいつの仕業なのかもしれない、とギンコは思った。

「あの時は助かったよ。よくわからんことで吊るされてさ」

「あー、なんだ、その辺の事情はもういいんだよ。それより、お前に聞きたいことがあつてきたんだ」

逃亡^{ほうしよ}幫助をバラされる前にギンコは話題を急かした。ん？ なんだ？ と氷妖精が首をかしげる。

「お前、最近妙なものを見なかったか。人魂のような、妙な炎なんだが」

「あー、うん。見たよ」

稚児^{ちじ}のように頷く氷妖精に、ギンコが思わず食いついた。

「本当か!? どこで見た?」

「だいぶ前にこの辺で。遊んでたらまとわりついてきてうるさかったけど、最近は見えてないな」

あれはなんだったんだろうなー、と言う氷妖精の言葉を聞きなが

ら、ギンコは考えを巡らせた。やはり冷気に反応して集まってくる習性があるのか。いや、それなら体温を奪うという目的はどうなる。もしや、温度差に反応して集まってくるのか？ ギンコには一つの妙案が浮かんだ。

「おい、お前……えっと」

「そういうや名乗ってなかったね。チルノだよ。お兄さんは？」

「ギンコ。蟲師のギンコという。早速だがチルノ。かけてやった恩の一つを、返して欲しいと思うんだがどうかね」

「うん？ あんまり難しいことはわからないぞ」

「かまわんよ。お前さんのそばで、ちよいと焚き火がしたいんだ」

おいお前ら。ギンコは後ろの方で事の成り行きを見守っていた三人に声をかけた。がさがさ、と草葉が返事をする。

「その辺の枯れ枝を集めてくれ。火を起こすからな」

「なんでそんな事を？」

文の浮かべた疑問符に、ギンコは答える。

「ヒダネは温度差に集まって来るんじゃないかと思つてな。冷気の漂うこの一角で、俺が暖をとれば……」

「寄つてくるかもしれない、と？」

「ま、そういうことだ」

ギンコは足元にある短い枝を拾いながら、そう言った。

四人もいれば、焚き火の材料が集まるのに時間はかからなかった。煌々と明かりを放つ昼間の焚き火は、白い煙までが鮮明に見える。闇の中で揺らめく不安げな雰囲気は今の焚き火にはない。暑い暑いと言いながら周囲に冷気を満たしている妖精以外は、皆静かに焚き火を囲んでいた。

「ねえ。こんな悠長な事をしていていいの？ 別の方法を考えるとかしくてもいいの？」

少し落ち着かない様子で、レミアアがギンコに問うた。指先が冷えるのか、炎に手をかざし、日傘を首で支えている。

「そうだな。今それを考えておくか」

同じく炎に手をかざしていたギンコが細長い枝を掴み、火の中にく

べた。ぱちり、と火の弾ける音がして、火の粉が舞った。

「あの娘の症状はヒダネによるものだと考えていいだろう。そしてヒダネを使った具体的な治療法だが……腑を多少灼く事になるが、陰火で調理したものを食べる事だ」

沸かした湯なんかが一番手っ取り早いな。ギンコの言葉に、ふうん、とレミリアは頷いた。

「だからヒダネを探して今こんな事をしているわけだが……もしヒダネがないとなると、どうするか」

「そうよ。助かりません、じゃ許さないわ」

「順当に考えれば、代用となる偽の火を用意するか……後は、冷してみるくらいか」

氷を食うとかな、とギンコは言う。

代用となるもの、とギンコは簡単に言ったが、陰火の代用などそんなもの、自然界にあるわけがない。火の形をとる蟲も、他に心当たりはない。

「代用となるもの……」

レミリアは炎を見ながら考えた。しかし、思い当たるところはないようで、椀と文も、ただ静かに炎を見つめているばかりだ。

いつまでそうしていたのだろう。気づけば、結構な時間をそうして過ごしていた。焚き火の火というのは時間を忘れさせる。ぼうつと眺めていても、楽しいというわけではないが、落ち着く。

そんな落ち着いた雰囲気を持ち破るように、氷妖精が堪えきれなくなったのか。あつーい！ と癩癩を起こしたところで、ギンコもついに悟った。

「ヒダネは……やはりいないようだな」

そろそろ望みをかける事が無駄な事だと理解すれば、やはり別の方法であの娘を治すしかない、とギンコは腹を括った。

「もう一度、診察をする。屋敷に戻るぞ」

そう言って立ち上がったギンコに、声をかけるものは誰もいない。ギンコが原点に立ち返り、一から治療法を探そうとする事を、言外に肯定していたのだろう。

付き合わせて悪かったな、とギンコは仰向けになっている妖精に詫
びた。

揺らめく焚き火は、先の展望を照らしてくれはしない。ここから先
は手探りの闇だ。そう決意を固めるように、ギンコは焚き火を崩し始
めた。その時。

「!？」

周囲にいるものたちの誰もが驚いた。地を揺るがす振動。幻想郷
に地震が起きたのか？ そう錯覚させるほどの地鳴り。いや、むしろ
それが正常な思考だ。地震だと思おう方が自然だろう。だがここで、レ
ミリアの具体的に嫌な予感が再燃する。

「ちよつと、もしかして……」

レミリアは自身の居城の方を見る。薄っすらとかかる霧と、木の葉
のせいで城の様子をつぶさに確認する事はできない。しかし、自分の
直感が当たっている事は、ほかならぬレミリア自身が確信していた。
確信を助けるものが見える。それは膨大な魔力の本流。天を衝く
勢いで伸び上がる、魔杖の光。

紅いそれが、居城の方に見えた。

紅魔館。地下の大図書館にへと至る道。普段は露出した石壁が等
間隔の燭台にぼんやりと照らされた一本道であるはずだが、今日はひ
と味もふた味も違うようだった。

この世のものとは思えない光景。魔力やら霊力やらで生成された
矢弾が飛び交い、床や天井にぶつかっては衝撃と共に弾け飛んだ。

嵐か暴風雨とでも呼べるその攻勢の中心には、フランドールと美鈴
が背中合わせで立っていた。正確には、フランドールの暴走する力を
美鈴が補助する形で、矢弾の雨を凌いでいた。

「くう！ これじゃ進めません！」

「あははっ！ ぜえーんぶ吹っ飛んじやえばいいよー！」

フランドールが手に持っているのは黒い、魔の枝。フランドールの
翼の骨組と同じような質感の歪な枝の両端に、ハートマークに二つ穴

を開けたようなものが付いている。そしてフランンドールがそれを振るうたびに、それらの先から、鮮血の如く迸る紅い魔力が、壁や天井ごと魔法陣の罫を薙ぎ払っていった。

地下の大図書館へ行こうとした途端にこれだ。もう随分な時間を、足止めされているように思う。好き勝手暴れるフランンドールに迫る大小の矢弾を、虹を引く徒手空拳で弾きながら、美鈴は少し息を切らしていた。

業を煮やしたのか、はたまた全力を出したくなつたのか、フランンドールは魔杖レーヴァテインを大きく掲げると、天井を貫いて伸びる紅い大剣を生み出した。それを受けて、美鈴はまずい！ と距離を取る。

「消えちやえー！」

一閃。天を貫く紅い大剣の一閃が、魔法によって拡張され、大きくなっていた地下道の壁面一帯を薙いだ。大剣が通る余波で、床の魔法陣も、ガラスが砕けるみたいに消え去っていく。

一掃。文字通りの働きをした魔力流を収めると、フランンドールは魔杖を陽光が降り注ぐ天に掲げた。すると、一つ大きな岩盤がフランンドールの真上から落下してきて、魔杖に突き刺さった。ちょうど大きな日傘になるようなそれを、やはり日傘のようにくるりと回し、フランンドールは満足げな笑みを浮かべた。

「お見事です。妹様」

「ふふっ、ありがとう」

あー、楽しかったあ！ とフランンドールは陽光降り注ぐ天井の穴から移動して、地下の暗がり身を置くと、岩の日傘の“目”を握り込んだ。途端に、傘の部分の岩盤が粉々になる。

「ふあー。動いたら眠くなっちゃた。帰っていい？」

「ええい!? ここに来た目的はどうするんですか!？」

美鈴はあくびをして目尻をぬぐうフランンドールに、美鈴は驚きの声を上げた。

ここに来た目的はこの盛大なアトラクションを楽しむためではない。この屋敷のメイドである十六夜咲夜の体調を戻す術を探して、大

図書館を目指しているのだ。正確には、大図書館にいる人物に会うために。

フランドールは半目になって、冗談よ、と冗談らしくない口調で言った。あくびを伴ったそれを見るに、どうやら眠たいのは本当らしい。そしてどこにしまったのか、手のひらからいつの間にか魔杖は消え去っている。

フランドールは視線を美鈴からすつと横にずらす。そこには大図書館の入り口があった。古びた木製の両開きの扉が石壁にはめ込まれている。大きな瓦礫が進路を塞ぐように点在しているが、開閉に問題はなさそうだ。

さて仕方がない、行くかとフランドールが歩き出そうとした時、穴の開いた天井から大きな声が響いた。

「フ〜ラ〜ン〜！」

「あ、お姉さま」

チツ、面倒臭い時に、とフランドールは舌打ちをする。美鈴は耳聡くもそれを聞きつけていたが、苦笑を浮かべて聞かなかったことにした。

日向から日陰へ、高速で移動してレミリアは瓦礫の残る地下に転がった。

「ぐわあああああ！ あつついいいいい！」

日傘を捨てて、速さを取ったのだろう。日光の下を高速飛行してきたレミリアは、その身を太陽に灼かれていた。

無様極まりなく煙を上げるレミリアだが、たとえわずかな時間でも日光を浴びて無事な吸血鬼の方がすごい。種族としての弱点を克服したとも言えるからだ。

穴が穿たれた天井から地下に降りてきたのはレミリアだけではなかった。漆黒の翼を羽ばたかせて、ギンコを連れた文も地下へとやってきた。

「ゴりゃひでえな」

文の羽ばたきで砂塵が舞い上がり、ギンコは口元を袖で隠した。脇を抱えるように連れられ、そのまま地上へと降り立つ。それと同時に

レミリアもくすぶる体を跳ね上げて、フランドールに詰め寄った。

「ちよつと！ あんた城をこんなにめちゃくちゃにして！ 今は咲夜が寝込んでるんだから壊れても修理できないのよ！」

「私のせいじゃないもん」

「どう見てもあんたのせいでしょ！ 私見たんだからね！」

まあまあお嬢様、妹様のせいでないことも確かですよ、と美鈴がレミリアをなだめた。

レミリアは噛み付くほどの勢いで、口を挟んできた美鈴に向き直る。美鈴はそんなレミリアを笑顔で受け流し、事情を説明した。

フランドールが咲夜のために動こうとしたこと。そのために大図書館に行こうとしたこと。道中が迎撃術式だらけで、後退もままならず、こうするほかなかったこと。つぶさに報告すれば、レミリアも渋々納得したように、怒りを鎮めていった。

「じゃあ何？ これからパチエのところに行こうとしたの？」

「はい。パチユリー様なら何か知恵を貸していただけるのではないかと」

「それもそうね……ねえギンコさん」

「ん？」

少し考えて、レミリアはギンコに聞いた。ギンコが吹かす蟲煙草のような細い煙が、まだ蝙蝠のような羽から上がっている。

「ヒダネを捕まえたいというのは陰火という偽の火を用意したいからなのよね」

「ああ」

「属性の魔法ならパチエの領分だわ。聞いてみるのも悪くないわね」

「そうなのか？」

ええ、とギンコに答え、レミリアはフランドールの行動に一定の利を見出した。大図書館は目と鼻の先。あとは、行動するのみである。

一方大図書館の中では、一人の女性が声にならない魂の叫びを、涙の伴わぬ嗚咽おえつとともに吐き出していた。

「もう無理……みんなここに来る……早く死のう……」
絶望の太い響きを持つて、その声は大図書館の中に消え入る。巨大なその影は、一人、鳴いていた。

第四章 火の目を掴む 漆

紅魔館の大図書館の扉を開けたのはレミリアだった。日光に曝された影響であるのか、体のあちこちが燻っている。生き物の焦げた匂いが鼻に付くのか、ギンコが少し眉を寄せていた。

「お前、大丈夫なのか」

「心配無用。そのうち治るわ」

そうか、と気の無い返事をして、ギンコも大図書館へと足を踏み入れた。

大図書館を見て、ギンコが思い出したのは狩房文庫だった。湿度が低く保たれた紙に優しい空気は、それでもなぜかカビ臭くなるように、立ち込める紙の匂いと一緒に、どこか懐かしい思いをした。

燭台が点々としている大きな大きな部屋はなぜか全体が明るく、日の光が届かない地下とは到底思えない。大図書館と名打つように、その蔵書の数はかなりのものがあるようで、ただでさえ高い天井までうず高く積まれた本棚が圧迫感を放っていた。収められている書も、ギンコが知るようなものではなく、硬い外装の冊子が、背表紙をこちらに向けて並べられている。一番上の書はどうやって取るのだろうか。ギンコは素朴な疑問を持った。

勝手知ったるといった様子で、レミリアはずんずんと図書館の奥へと進んで行く。その後ろに、ギンコとフランドールがついていき、さらにその後ろから美鈴と文がついてくる。五人が大図書館に足を踏み入れれば、扉は自然と閉まった。

そして少しも進まないうちに、レミリアの快調な歩みを止めるものが、本棚の影から現れた。

「レミリアお嬢様」

「小悪魔じゃない。どうしたのよ」

進路を塞ぐように立つ女性。レミリアをお嬢様というその人はレミリアと同じような翼を背中に備えていた。深紅の髪が長く腰まで伸びている、柔らかな雰囲気的女性であった。

「どきなさい。あなたの主人に用があるのよ」

レミリアは歯牙にも掛けないといった様子で、その女性の横を通り過ぎようとした。しかし女性は半歩、体をずらし、再度レミリアの進路を体で塞いだ。

次こそ明確な妨害行為。レミリアは眉間にしわを寄せ、小悪魔と言った女性を睨んだ。

なんのつもり、とレミリアが聞く前に小悪魔は目を伏せて答えた。

「今、パチュリー様にお会いなるのはおやめください」

「なに？ またあいつの引きこもりが出てるの？」

「それはいつも通りです。ああいえ……」

自分の主人に結構な暴言を吐いて、小悪魔は態度を取り繕った。とにかく、と仕切りなおすように咳払いをする。

「パチュリー様は今人と会えるような状態じゃないのです」

「どういうことよ」

「えっと……ちよつと不思議な現象に囚われているといえますか」

少し貫禄が出ているといえますか。小悪魔の説明は何かを隠し、濁すような返答だった。

なによそれ。いいからどきなさい、とレミリアは制止を促す小悪魔を手でどかし、奥へと入っていく。そんなレミリアについて、説得するように小悪魔が声をかけ続けたが、レミリアはそれを無視した。

本棚に挟まれた細い通路を右へ左へ。ちよつとした迷宮攻略気分を味わっていると、すぐに目的の場所に出る。

その一角は、本棚からあふれたのか、大量の本が平積みになされている場所だった。さながら本の海である。いや、淀んだ雰囲気と流れのない本の古びた感じから考えれば、沼といったほうが適切か。

本の沼に身を置く図書館の主人は、レミリアの歩む先にいるようだった。ここまで来てしまえば、小悪魔も口をつぐんで、お会いにならないでくださいと言うことはなかった。

「パチエ。邪魔するわよ。突然だけどあなたに聞きたいこと、が……」

要件を単刀直入に述べようとしていたレミリアの口が固まる。絶句する。一行の足も止まり、その視線の先にあるものを自分も見ても、フランドールが声を発した。

「毛布にくるまってどうしたの？ パチュリー」

「な、なんでもないわ」

なんでもないといっているその後ろ姿はどういうわけなのか、明らかに大きかった。背もたれのある椅子からはみ出すほどの後ろ姿が見える。ギンコは彼女と初対面であるからして、違和感を覚えずに首を傾げていたが、彼女を知る他の二人、美鈴と文もその妙な雰囲気を怪しんでいた。

聞きたいことがあるといったレミリアを、すぐさま否定する声が返ってくる。

「今日は体調が悪いの。後にしてくれるかしら」

「パチエ……あなた、なんか声もおかしくない？」

レミリアが言うように、その大きな毛布の塊みたいな人物の声は、野太いというか、女らしい口調に合わない、太く濁った声だった。

ここまできると、レミリアが事情を察する。これは尋常ではない。何か良くないことが、パチュリーの身に起きていると思った。

「パチエ。あなたの身になにが起きているのかはわからないけど、もしかして急に体が大きくなったりした？」

「……」

レミリアの何うような言葉に観念したパチュリーは、毛布をゆつくりと脱ぎ去りながら皆のほうを振り返りながら、椅子から立ち上がった。

そこにはたくさんの脂肪を蓄えた一人の女性がいた。はち切れそうな服に身を包み、指先までむくみきった女性は、はつきり言って異様なものだった。

絶句する一同の中で、フランドールだけがそんなパチュリーの姿を見て笑い声をあげた。

「あははっ！ なにそれ！ パチュリーってば力士みたいじゃない！」

「……」

「やめなさい！ フラン！」

フランドールの心ない一言に、パチュリーは奥歯を噛みしめる。な

ぜこんなことになったのか、自分でもわからないといった風だ。握り拳が丸い。その姿を見て、状況についていけないギンコが美鈴に話しかけた。

「いまいち話が見えてこない。どういうことだ」

「私もよく分かりませんよ。パチュリー様が、急にその……お太りになったのでは」

「あははははっ!」

「……」

「フラン!」

笑うフランドールの声を黙って受け止めているのはパチュリーだ。そして悔しそうに、絞り出すようにレミリアたちに言葉をかけた。

「……見ての通り自分の身に起きたことの対処で手一杯なの。お願いだから帰ってくれるかしら」「……そうね。そういうことなら仕方ないわ」

咲夜に続き、パチュリーも何かおかしな体調の変化に見舞われるとは。協力を仰ごうとしていたが、これではそれも望めそうもない。

レミリアは振り返り、歩き出そうとした。その時、何か考えている様子のギンコを視界の端で捉えた。

「ギンコさん。何か?」

「ん? いや、最近急にここまでの太り方を見せるっていうのは、どうも異様だと思つてな。ちよいと考えていた」

少し聞きたいことがあるんだが、とギンコはパチュリーに話しかけた。

「蟲師のギンコと申します。その、体がそうなったのは唐突にですか? 例えば、寝て起きたら、とか」

「……そうよ。なぜわかるの?」

「そうですか、とギンコは答える。

「だとすれば、あなたの症例は俺ら蟲師の領分です。その体、見た目ほど重くはないんじゃないですか?」

「そうよ。なに、どうして? なんであなたが事情を知っているの?」

野太い声で、誰にも話していないのに、と顔を上げたパチュリーが

言う。

「俺も初めて見る症状ですが、文献通りなら手持ちの薬だけでも治せるでしょう。とりあえず、座ってお待ちください」

「さすがですね。ギンコさんは」

そうかい？ とギンコは文の賞賛の言葉を受け取り、パチュリーに近づいた。赤い絨毯の上に腰を下ろし、桐箱を開く。そして慣れた手つきで引き出しからすり鉢とその他乾燥させた草のようなものを手に取ると、手を動かしながらパチュリーに聞いた。

「もう一度確認しますが、あんたは最近急に、そうなってしまったように」

「ええ」

「では、空中を漂う泡を見たことは？」

「見たわ……ここまで言い当てられると、この症状もあなたのせいだと思えてくるのだけれど」

「そいつは勘弁を。俺はあんたが見た蟲について少しばかり知っているだけです」

「蟲？」

「ごりごりとすり鉢で何かをすり始めたギンコは、手は止めずに、パチュリーの体の変調はあるとある蟲によるものだ、と説明を始めた。」

「おそらくあんたが見たものは、泡沫、という蟲です」
「うたかた？」

誰に聞かせるでもなく、ギンコの重い語りは周囲の人を惹きつける。

「泡沫は、大きな泡状の蟲で、元は木霊という蟲だ。木霊が宿る木が切り倒され、木材として使用されると、その中で永い永い眠りにつき、周りの水分を徐々に吸い込んでいく。その過程で蟲としての性質が変化する。非常に稀な蟲です」

珍しいと言って語るギンコの口調はどこか嬉しそうだった。

「なぜ、その泡沫がここに？」

「この図書館は、見たところかなりの年月が経っているようだ。本棚に使われていた材木なんて、泡沫が住まうにはうってつけだろう」

パチュリーは自分の本が収められた本棚を見た。そこに得体の知れない何かが内包されていると考えると、少し異様なものに見えてくるのだから不思議なものだ。

「そして泡沫は、十分な水を吸うと大きな泡となって木材から抜け出る。その泡に触れると、眼球に薄く張っている水から体内に入り込み、今回のように体がむくみ、健常な人間が太ってしまったようになるんだ。もちろん、太ると言っても見た目だけだから、重さは変わらない」

ギンコの語る内容を、文がせつせと書き留めていた。

「他にも、特徴として涙が出なくなるという。それを改善してやれば……できたぞ」

ギンコが持つすり鉢の中には、少し灰色をした土のようなものがある。これを焚いてその香を吸えば、体はしぼんでいくのだという。

火は火は、と羽織の内側を探るギンコに、パチュリーの指が差し出される。むくんで丸みを帯びた指。その先から、炎が一つ、立ち上った。

「火が必要なんでしょ？」

「……ああ」

ギンコが差し出したすり鉢に、パチュリーの炎が灯される。ゆらり、と白煙が生じた。

「その煙を鼻から吸えば良くなるはずだ。少し涙が出るが、問題はな
い」

パチュリーは手渡されたすり鉢を、鼻先に持って行き、白煙を吸い込んだ。その強烈なくせに、たちまちむせかえる。すり鉢の中身が、咳と一緒に踊ったが、どうやら中身はこぼれなかったようだ。

そして次の瞬間に、涙が雨のように溢れ出た。ぽろぽろと瞬きの度に落ちるそれと一緒に、風船から空気が抜けるように体がしぼんでいった。

症状の改善は早かった。ギンコ曰く、宿るものの中にある水と一緒に泡沫は流れ出ていくようで、今回の香は、涙を出させる香を調合したのだという。

症状が改善され、パチュリーの体が元に戻る。それを見て、小悪魔がパチュリーに駆け寄った。

「パチュリー様、良かったですね！」

「ええ……ギンコさん、でしたっけ。ありがとうございます」

「礼はいりません。こつちも、あなたの知識が借りたいと思っていたところですから」

「そうだよな、とギンコはレミアアを振り返る。ええ、とレミアアが答え、パチュリーに事情を話し始めた。

「パチエ。あなた、偽物の火を用意できないかしら？」

「偽物の火？ それは一体どういうものなの？」

パチュリーの疑問に、ギンコが答える。

「性質は炎と変わらないが、近づいた動物の体温を奪うというものだ。用意できそうか？」

「……難しいわね。とりあえず、一つ思いついたことがあるけど」

「そう言っつて、パチュリーは指先を振るってみせる。その指先に、青白い炎が浮かんだ。

「これはアイスファイアというものよ。火と、水、土の属性を合わせた混合魔法ね。これが役に立つかどうかはわからないけれど」

レミアアはギンコを見る。ギンコはその青白い炎を見て、頷いた。

「見た目は陰火にそっくりだ。試してみる価値は、あるかもしれん」
ゆらゆら揺らめく炎を見て、ギンコはそう言った。

第四章 火の目を掴む 捌

「それにしても、お前さんは珍しい蟲に憑かれたもんだな」

「そうなの？ 蟲って言われてもいまいちピンとこないのよね。フェアリーってことなのかしら」

パチュリーが提出したアイスファイアなる炎を使用して、湯を沸かそうという段取りになってから、ギンコはパチュリーにそんなことを言った。フェアリーとは、ギンコで言う所の蟲と似たような存在であるらしい。

二人台所で言葉を交わす。ギンコは鉄鍋に、水を張っていた。

「泡沫はその存在の不安定さから、幻の蟲と言われている。空気中を漂っているうちに塵芥や風の影響で弾けてしまうため、それを目にすることは稀だ。元が泡状だから、ひどく脆いんだな。しかし、障りを起こせば症状は顕著であるため、対処法はしっかりと伝わっていると言う点でも、珍しい蟲だ」

「そう。じゃああの図書館にいればまた見られるかもしれないのね」

「かもな。俺もぜひ見みたいもんだ」

暖炉の上部にある金具に、水の入った鉄鍋を吊るし、ギンコはそう言った。

今台所にいるのはパチュリーとギンコの二人だけである。レミリアたちは全員咲夜の様子を見に行くと言って別れたため、今は病室だろう。

準備できたぞ。ギンコが炉の前から立ち退き、パチュリーが炉の下に組まれた薪に青白い炎を灯した。ずいぶん簡単にやってのけているが、パチュリーが行っている魔法というものは、ギンコにとって驚くべきもので、原理原則の全く違う異世界に来たのだと改めて認識させるほどのものだった。

「この炎は普通の炎とどう違うんだ」

湯が沸くまでの時間、ギンコはパチュリーに聞いた。

「アイスファイアは簡単に言えば、触れた相手を凍傷にする炎よ。あなたと言う偽の火とは、ちよつと気色が違うかもしれないわ」

「凍傷にさせる……それは確かにそうかもな」

ギンコが求める偽の火というのは炎のふりをしていいる炎である。このアイスファイアというものは、性質こそ普通の炎とは違うようだが、炎であることに変わりはないように見えた。

炉の中。鉄鍋の下で、青白い炎が揺らめいている。木を燃やし、湯に熱を伝えている。陰火らしいといえば陰火らしい。問題は、これで調理した湯に同様の効能があるかどうかだ。

「今度は私から質問。私もしあのままだったら、どうなっていたの？」

「ん？ 泡沫のことか？」

そうよ、とパチュリーはギンコに聞いた。パチュリーはつい先ほどまで、泡沫という蟲に寄生されていた。まるで計ったかのようにギンコが現れ、あつという間に治療したが、もしギンコが現れなければどうなっていたのか。パチュリーは気になっていた。

そうだな、とギンコは語り出した。

「泡沫に寄生されると、まず身体中の水分が乗っ取られる。それは泡沫自身が、流れ出る水と一緒に体外に出てしまうことを理解しているからだ。体内循環以外に水分の移動がないようにと血液に乗って拡がり、支配する。寄生対象を膨らませるのも、体に傷をつけないようにするためなんだぞ」

傷がつけば、血は流れていくからな、とギンコは言う。

だからその後になくなるのよ、とパチュリーは聞く。

「泡沫に寄生された末路は身体中に水がたまり、死んでしまうそうだが、泡沫のせいで水の排出……つまりは尿や汗といった自然な循環も妨げられてな」

「え、なにそれ。普通ならかなり危ないじゃない」

「そう。だからお前さんは運がいい」

珍しいという意味でもな。ギンコは口の端を釣り上げた。だが、と言葉を続ける。

「お前さんの症状は軽いように見えた。ただの人間のようには見えないし、やはり妖怪なのか？」

「そんなのと一緒にしないでくれる？ 私は生粋の魔法使い」

間違えないで、とパチュリーは言う。

そうしている間に、鉄鍋の湯が沸いた。あとはこれを飲ませるだけだ、とギンコは鉄鍋を暖炉から取り出した。

咲夜の病室ではベッドの上で上半身を起こしている咲夜を、心配そうな面持ちで囲んでいる面々があった。フランドールだけは「眠い」と言って咲夜の膝枕で寝息を立てているが。

「咲夜。もう寒くないの？」

「ええ。もうすっかり。だからもしかしたら、このまま治ってしまうかもしれませんわ」

だといいんだけど、とレミリアは笑顔を向ける従者の体調を気遣った。

咲夜を中心に、美鈴とフランドール、レミリアと小悪魔、とがベッドを挟んでいる。元氣そうな従者を見て、幾分か心の不安も取り覗けた様子であった。

そこへ、湯気の立つ器を持ってギンコとパチュリーがやってくる。部屋の扉が開き、全員の視線がそこに集中した。

「待たせたな。……布団から出てるってことは、もう寒くないのか」「ええ、はい。寒気も収まって、体の不調はほとんどないです」

一見、症状の改善に見えるそれが意味するところを、ギンコは知っていた。ヒダネの寄生段階が一つ進んだのだ。体温を十分に食い、草が芽を出し、毒を吐き始める。こうなると、宿主の体調は一旦回復し、その後じわじわと毒に侵されていくことになる。

しかしそれも、これでなんとかできるかもしれない。そんな淡い期待も込めて、ギンコは咲夜に白湯の入った器を差し出した。

「少し口や胃の中が灼けるかもしれん。ゆっくり、少しだけ飲むんだ」「はい……」

器を受け取った咲夜はちらりと一度だけ、レミリアのほうを見た。レミリアは大きく、神妙に頷くと、咲夜もそれに答えて、白湯に口を

つけた。

普通なら、ここで咲夜は腑の灼ける痛みを折るはずなのだが、それがない。すんなりと、白湯を飲み干していく。そして器の中身が空になったとき。ギンコはやはりか……、とつぶやいた。

「どうなの咲夜？ 何か変化はある？」

「いえ……美味しかったです」

「呑気なこと言ってるんじゃないわよ」

これはどういうこと？ ギンコさん。とレミリアがギンコを見た。ギンコは口元に手をやり、何かを考えている様子。やがて、重々しく口を開いた。

「……治療はおそらく失敗だ。ただの白湯を飲んでも、体内に根付き始めたヒダネは駆除できない」

この治療は、痛みを伴うことが前提だった。それがないとなると、治療は成功したとはいえないだろう。

「そう……」

一同が落胆の色を顔に滲ませたとき、うぐつ、と咲夜が胸元を抑え、手に持っていた器をフランドールのこめかみに落としてしまった。

「いたっ！」

咲夜はそのまま胸元を抑えて苦しげに背を丸める。フランドールは驚いて咲夜の膝の上から体を引き抜いた。

「咲夜！」

レミリアが不安な声を漏らし、咲夜の背中に手を添える。その手を押し返すように、咲夜は二、三度咳をした。するとどうしたことか、咲夜の口からは草葉が吐き出され、緩やかな動きでそれは、咲夜の膝の上に降り積もった。

「草を吐き始めたのか」

ギンコもその様子を見て近づく。こうなってしまうばあまり時間はない。なんとかかしてくれ、とすぐる視線を、ギンコはやんわりと受け止めた。何度も見てきたその視線に、馴れていた。

しかしどうしたらいい。ギンコは必死に考えを巡らせた。体の中で芽を出した火種を駆除する方法……草を灼くのではなく、成長を阻

害することはできないのか？

草は芽を出せば体温を奪うことをやめる。何を栄養にして育っているのか。それが、今回の解決の糸口となっていると、ギンコは思った。

「……今すぐどうするとは言えないが、必ず治療法は見つける。悪いが、少し集中させてくれ」

図書館を借りるぞ、とレミリアに一言言って、ギンコは病室を後にした。

物を考えるときはなるべく邪魔の入らない静かなところがいい。そういう理由で大図書館を選んだが、場所が変わってもいい案は浮かんできそうになかった。

ここに来る途中、フランドールが開けた大穴から覗いていた空は赤みがかかっていた。時刻は夕方を回ったところだろう。草を吐き始めてから、一日二日の猶予があるとは言え、あまりグズグズもしてられない。ギンコは焦る気持ちを抑えながら、必死に資料を読みあさっていた。

ヒダネ。陰火をまとって人の体温を奪い、成長する。成長しきったヒダネは根を下ろし、草の形をとって毒を吐く。草はヒダネの幼生の姿である……だが成長しきったヒダネも草の姿をとる。草としてのヒダネは植物と変わるような性質を持ちはしない。植物そのものだ。だとすれば……

「……くそっ」

「だいぶ行き詰まっているようね」

自分の周囲に乱雑に資料を広げて、ギンコが毒づいたとき、背後から声がかかった。ギンコが座ったまま振り返ると、そこにはパチュリー・ノーレッジと。

「やつほー」

フランドール・スカーレットが、パチュリーの陰から顔を出して立っていた。ああ、とギンコは短く返事をして、すぐに資料に向き直った。おぎなりの対応に、フランドールは頬を膨らませていたが、

パチュリーは、ギンコの方へ歩み寄りながら冷静に話しかけた。

「煮詰まっているのなら、話を聞かせてくれないかしら。急いで仕事を仕損じるとも言うでしょう?」

「……それもそうだな」

隣までやってきたパチュリーに諭され、ギンコはため息をついてパチュリーを見上げた。

「……ヒダネという蟲を除去するには陰火で焼けばいいと考えていた。だがその方法が取れないとなると、また別の観点が必要になってくる」

「そこまでは私も理解しているわ。あなたは、その観点とやらに辿り着いているんじゃないの?」

「思いついている事は一つある。しかし、その方法は取れない」

「なぜ? 話してみよ」

パチュリーはギンコの前、資料を挟んで腰を下ろした。正座をするように足をたたんで、スカートを膨らませた。フランドールも、それにくつつくように座り込む。どうやら暇を持て余しているらしい、とギンコは思った。

新たな観点。パチュリーが言うように、ギンコはそれにたどり着いていた。しかし、その方法はあまりにも突拍子のないもので、無駄だと知りつつも、ギンコは語った。

「ヒダネは今、あの娘の中に根を下ろしている。植物と変わらない状態だ。ゆえに植物と同じように枯らしてしまえばいいと思った」

「と、言うところ?」

ギンコは静かに言う。

「……身体中の血液を抜く」

「なにそれ、無理に決まってるじゃない」

んなこたあわかってるよ、とフランドールの馬鹿にしたような口調に、ギンコは反論した。

人間の体に根を下ろすという事は決して常なる現象ではない。火の光も届かない腑の中で、おそらくヒダネは血液を栄養に育っている

だろう。ならその血液を全て抜いてしまえば栄養源が途絶えたヒダネは枯れ、体から離れるんじゃないか、と考えたのだ。

だがもちろん、そんな事はできはしない。どうすればいいのか、とギンコが考えあぐねていると、思いついたパチュリーが言った。

「泡沫を使うのはどう？」

「なんだと？」

その提案は、ギンコをして目から鱗の視点であった。それは毒を以て毒を制するような発想。なぜパチュリーがその事に気がついたのかはわからない。それが生粋の魔法使いの思考なのか。

試してみる価値はある。だが問題は、泡沫をどうやって捕まえるかだ。そもそも、泡沫はまだいるのか。図書館を見渡してみる。すると、都合のいい事に、空中をふわふわと漂う泡がすぐさま視界に入った。

「おいおい。都合が良すぎるんじゃないのか」

「あれをどうやって捕まえるかよね」

「うーん。ちよつと任せてもらっていいかしら」

そう言ったのはフランドールだった。フランドールは立ち上がると、いつかそうしたように空中を漂う泡沫へ手のひらをかざした。

「おい、潰してどうする」

「黙って見てる。あれはとても脆いのよね。見ててもわかるわ」

でもだからこそ、とフランドールは能力を発動した。

それは彼女の手のひらに対象の“目”を移動させるというもの。その能力がどう作用したのか、泡沫の“目”を移動させたフランドールの手には、泡沫そのものが移動していた。

手のひらから数寸の距離を保ち、泡沫は弾ける事なくフランドールの手のひらに追従している。一体どういう事なのか。困惑するギンコに、フランドールはさも当たり前前の事のように語る。

「これは全部が緊張している“目”のようなものよ。私の能力を使えば、手のひらの上に固定化出来る。ただそれだけのこと」

腰に手を当てて、フランドールはつまらない事のように言った。

第四章 火の目を掴む 玖《了》

ゲホゲホと草を吐き続ける同僚を見て、不安を隠せないのは当然と言えた。

口からこぼれ落ちる暗い青の草。夜の海のような不安を届けるその色は、まるで同僚の命を冥府の淵に引き込んでいきそうまで、長い事直視していられなかった。

「咲夜さん……」

苦しそうな同僚の名を呼び、その背中に手を添える。ゆつくりと撫でさすり、せめて苦しみが和らぐようにと、紅ほん 美鈴めいりんは祈りを込めた。

「咲夜……大丈夫？」

「はあ、はあ……ふふ……大丈夫、ではありませんが。そう簡単に死んだりはしませんよ。そういう意味では……大丈夫です」

咲夜の青ざめた表情が笑みを作る。軽口を叩くその姿は、無理をしているのが明らかだったが、レミリアの方が顔色が悪いのでは、咲夜が無理をして表情を作るのも仕方がないと、美鈴は思った。

そう簡単に死んだりはしない。その言葉にどれほどの説得力があるのか。目の前で弱々しくも笑みを浮かべる命に、そう言ってやりたかったのを、美鈴は抑えた。

妖怪である自分たちだから余計に、美鈴は咲夜の強がりがとても儂いものと感じた。人間は儂く、脆い。それこそ、触れれば消えてしまう泡沫ほうまつがごとき一生は、妖怪たちにとって虫も同じの脆さもろだった。それを思い出させるような今回の事件。現在は蟲師のギンコという人間が、咲夜を治すために動いてくれている。しかし、それはどうやら雲行き怪しく、手詰まりの様相を見せていて、胸中の不安を拭い去るような一手は打たれていなかった。

美鈴はベッドの横に膝をつき、咲夜の手を取る。この部屋に、今は四人しかいない。病人の咲夜に、その様子を見守るレミリアと美鈴。そして少し離れたところで、事の成り行きを見守るように立つ天狗の文の四人だ。件の蟲師は治療法を探るために図書館へ。その後について、パチュリーも同じく知恵をしばるために図書館へ。その際に、

フランドールが付いて行つた。今はここにいない、その三人が何かしらの解決策を見出してくれる事を祈るしかない。美鈴は握つた咲夜の手を、祈るように額へと近づけた。

「代われるものなら代わつて差し上げたい……」

「大げさよ。そんなに心配しなくても……」

「心配します。するに決まつてるじゃないですか」

咲夜の苦笑いに噛みつくように、言葉を重ねた美鈴は瞳を伏せる。心配だ。たった一人の人間が死にかけているというだけで、平静を保てそうにない。それはレミリアとて同じ事で、毅然きぜんと立つてはいるものの、表情からはその動揺がありありと感じられた。

もうどうする事もできないのか。諦める前に、祈る事しかできなくなった二人に、咲夜はやはり笑いかける。

「でも、病氣になつてもみるものね。みんな優しく、ちよつと嬉しいかも」

「……呑気な事言わないでくださいよ、もう」

ふふ、と暗い雰囲気の中に笑いが漏れる。祈ろう。この人のために。美鈴は強く強く、咲夜の手を握つた。

そんな祈りが通じたのか、がちやり、と扉を開ける音がする。それは希望の使者か、死神の来訪か。見た目だけなら、後者のような気がしなくもない。そんな男が、低く、重たい声で言った。

「待たせたな。一つ、試したい事がある」

ギンコは開口一番そう言うと、咲夜に近づいてく。その後が続くようにして、二人の見慣れた顔も部屋の中へと入ってきた。二人のうち一人、フランドールの手のひらにあるそれを見て、美鈴はギンコに問う。

「ギンコさん。試したい事って？」

「ああ、それをまず、説明せにやならんな」

ギンコはフランドールの背中を押すようにして咲夜のそばへと促す。その手には泡。大きな、泡があった。

「これは、泡沫うたかたという蟲だ。パチュリーが寄生されていた様子は、お前たちも見ているな」

「はい。こんな見た目だったんですね」

思わず、美鈴が感心する。その泡を見て、レミリアが続きを急かした。

「それで？ その泡と今回の治療がどう関係しているのよ」

ギンコは語る。それは一つの賭けであった。もしかしたらどうにもならないかもしれない。先の陰火の代用のように、全くの無意味かもしれない。それでも、ギンコは思いついた事はなんでもやるべきだと思っていた。たとえ危険を孕んでいても、新たな治療法を見つけるために。

「泡沫は動物の体内に入ると、まず血液に乗って体中の水分を自らの支配下に置く。それは宿主が水を排出する際に、自分自身が流れ出てしまふのを防ぐためだ。宿主を膨らませるのも、傷による流血を防ぐため、という事になる」

「なるほどね。太い血管までの距離を、少しでも稼ごうってこと」

「そうだ。そして次に、ヒダネだが。こいつはすでに、咲夜の中で芽を出している。体温の低下が収まり、草を吐き始めたのが何よりの証拠だ」

これは賭けだが。とギンコは前置きする。

「このヒダネは、芽を出し、すでに植物となった。この植物が成長するためには、体温ではなく別のものが必要だという事が、体温低下の改善から読み取れる。事実文献を見ても、植物状態のヒダネはヒトの体温を奪うような事はなかった。ただの草木と同じように、土の上で群生したと記録されている。人間の体内という特殊な環境下では、恐らくは血液を栄養にしているんだろう。顔色が悪いのも、じわじわと血を取られているせいだとすれば納得がいく」

「確証はないの？」

「ない。そしてさらに推論を重ねるが、この血液の供給を泡沫によって統制し、止める事ができれば、ヒダネは枯れるのではないか、と思つてな」

ま、推論に推論を重ねた話だ。とギンコは自嘲する。こんな事しか考えられない自分を笑っているのか。美鈴やレミリアをはじめとす

る蟲を知らない者たちからしても、確証がないという一言が一抹の不安を残す。

ギンコは以前、山で起きた霧の異変を思い出し出していた。普通なら動物の背に根付く蟲が、妖怪の背に根付いたとき、強い刺激を与えずとも、蟲のいる環境を少し変化させるだけで蟲は離れて行った。今回もそうならないものか、と考えた。

「泡沫の対処はすぐにできる。もしダメなら、すぐに蟲を取り除く準備はしておこう。そして、体が膨らむという副作用が出るだろうが……それも踏まえた上で、俺の賭けに乗ってくれるか、咲夜」

ギンコは咲夜に問いかける。フランドールの手の中にある泡と、ギンコの顔を交互に見やり、咲夜はさほど時間をかける事もなく、ギンコの問いに応えた。

「もちろんです。そのための蟲師なのでしょう?」

「……肝が据わったお嬢さんだ」

ギンコは口の端をつり上げた。

「それで? 私は何をすれば?」

「泡に触れてくれ。それだけでいい」

はいどーぞ、とフランドールが気軽に泡沫を差し出す。咲夜は恐る、その時折玉虫色に輝く薄い膜の球に手を伸ばした。

指先が泡の膜に触れた瞬間。泡は弾けるといふより、揺らいで空間に溶けるような動きで消え去った。奇妙な動きだった。

「後はどうなるのか、少し様子を見て……」

「っ!」

ギンコがそう言い終わるより早く、変化は訪れた。

咲夜が口を押さえて、目を見開く。早すぎる変化に、ギンコも含めた周囲が狼狽える。なんだ。何が起こっている?

「咲夜!? しっかりして!」

「ギンコさん! これはどういうことですか!」

「俺にもわからん! とにかく、泡沫を抜く香を調べて……」

「(とごと)と、と一気にせわしなくなる室内で、ギンコが桐箱を漁る。その騒ぎの中心で、咲夜はレミリアに背中をさすられながら、えずき

始めた。その行動に、注目が集まる。

何かを吐き出すような仕草。それを何度か続け、三度目の嘔吐で、それは喉の奥から這い出してきた。

暗い青の葉をつける短い蔓。うねうねと咲夜の口の中から這い出してくる姿は、まるで巨大な百足のようで、咲夜の嗚咽と相まって、非常に不気味なものだった。

ぼとり、と布団の上にそれが落ちる。しばらくうねうねと蔓をくねらせていたが、フランドールが「うええ……」と引き気味のつぶやきを漏らすと、その動きを恥じるようにピタリと動かなくなった。

咲夜の荒い呼吸音だけが、呆然と静寂を守る部屋に残る。急転直下の事態だったが、咲夜の中のヒダネは、これで取り除かれた。

「……びっくりしましたね。心臓に悪い治療ですこと」

そんな文のつぶやきに、誰かが納得した。

ギンコが近づき、折良く装着していた手袋をすっかりとはめて、草をつまみ上げる。これほどの拒絶反応があるとは予想外だった。咲夜の血液の質が急激に変化したことで、定着できなくなつて這い出てきたのか？　なんにせよ、これで泡沫を体から取り除けば、咲夜の蟲患いも完治する。問題は、この草だ。

ギンコは迷っていた。この場で草を摘み取ってしまうべきか。迷っていた。

これを野に放てば、根を伸ばして増殖するだろう。そして毒を吐き、健全な草木を枯らす。枯らしてしまう。ならば摘み取るべきなのだろう。だが、これはこの世界で最後の一本なのだ。摘み取ることは絶やすことにつながる。たとえ害だけの存在であろうと、絶やさない理由にはならない。

「その草、どうするの？」

フランドールが無邪気に聞いてくる。ギンコは答えられない。

「病の原因なんですよ。燃やしてばーんってしちゃいなさい」

レミリアが気軽に言う。その言葉を受けて、パチュリーが指先を振るった。

途端にギンコの持つ草に、火がつく。ギンコは思わず手を離れた

が、火は地面に落ちることなくその場で止まり、青白い色に変化していった。これで、いいのだろうか、か。

「みんな、口と鼻をふさげ」

ギンコの言葉を聞き、室内にいる全員がそうする。ただ一人、フランドールだけが「あ！あの時の人魂だ！」と嬉々として能力を発動し、飛び回る前のヒダネを握りつぶした。

先の泡沫よりも泡らしく、ヒダネが弾ける。小さな花火のような最期を、ギンコは静かに見守っていた。

「これで、万事解決ですか？」

「……ああ。大方は、な」

文の問いかけに、ギンコが答えて、部屋には弛緩した空気が流れた。ギンコは考えていた。フランドールの言動。咲夜の容体。これから少し、やることが残っている。よかったわね、と咲夜と喜び合っているレミリアに声をかける。

「喜び合っているところ悪いが、まだ終わったわけじゃない」

「え？まだ何かあるの!？」

そんなに驚くことじゃない、とギンコはレミリアに言った。ギンコは泡沫を抜くための香を準備しながら、続ける。

「今ので完璧にヒダネが抜けたのかどうか、これから数日かけて様子を見る。だからここに滞在させてもらいたい。その間は……」

ギンコはすい、と目線を金髪の少女に合わせる。

「お前さんに蟲との付き合い方も教えにやならんな」

フランドールは私？と首を傾げていた。

「どうぞ」

そう言っただけで差し出された白い陶器には、金の装飾が施され、琥珀色の液体が満たされていた。ここ数日で嗅ぎ慣れた茶葉の香り。種類はたくさんあったが、名前は憶えていない。だが言わずとも、その数種類の中で、ギンコが最も気に入った香りのものが、今回は出てきた。

「どうも」

ここは紅魔館のバルコニー。ヒダネの事変から数日経ち、日常が戻った紅魔館からギンコが発つという時、レミリアが最後のもてなしだと、ギンコのためにお茶会を催した。朝方ではあるが、その心遣いをありがたく頂戴し、ギンコは誘いを受けた。

ギンコに紅茶を淹れたのはここ数日ですっかり元気になったのか、いつかベッドで弱々しく草を吐いていた銀髪の少女だった。十六夜咲夜。藍色を基調とした給仕服は銀髪の彼女によく似合っている、とギンコは思った。

この数日、ギンコは咲夜のその後の体調を気遣いながら、紅魔館に滞在した。異国情緒溢れる屋敷は常にギンコの目を惹きつけ、刺激のある日々を過ごしたと、ギンコは思っていた。

咲夜の体調に、その後の大きな変化はなく、ギンコは主に、レミリアの妹、フランドールの相手をして過ごした。もともと、それはフランドールのある才能のせいでもあった。

「ちよつとフラン、微笑ましいけど、そろそろ離れたら？　ギンコさんも迷惑でしよう？」

「えー。もうちよつといいでしょ？」

「……まあ、俺は構わんが」

「ほら。ね？」

「しょうがないわね……」

レミリアが頭を抱えるのも最もだった。今フランドールは椅子に座るギンコの膝の上を占領している。フランドールに備わっていたある才能のせいで、ギンコと共に多くの時間を過ごしたフランドールはすっかりギンコに懐いていた。

フランドールの才能。それは蟲が見えるということ。物の“目”などという概念的なものを物理の世界にまで引き降ろせる彼女にとって、それは当然の才能だったのかもしれない。ギンコのせいで紅魔館のあらゆる場所に湧いて出た蟲を、ギンコと共に観察し、時に潰し、怒られ、知ることのなかったそれらに触れ、フランドールの心は大きな何かをつかみ始めていた。その結果が、人間に懐くという結果

に表れている。

レミリアはそんな妹の変化を喜びつつ、ギンコに頭が上がらない思いでいた。ギンコさん、と敬称を外さず、レミリアはやんわりとかしこまった。

「改めて、紅魔館の主としてあなたにお礼を言わせてもらおうわ。本当にありがとう。咲夜のこと、フランのこと」

「あと私のこともね」

ついでに、と本に目を落としていたパチュリーが言う。彼女には珍しく、大図書館からバルコニーにまで足を運び、ギンコのお茶会に参加していた。一抱えもありそうな大きな本を閉じ、パチュリーは紅茶に口をつけた。

「あなたの話、興味深いものばかりだったわ。よかったらまた蟲のこど、話しにきて頂戴な」

「そりゃ、こっちの台詞ですとも。あの図書館には興味深い資料が山のようにあった。個人的にも、興味を惹かれるものがね」

それに、雰囲気もいい。とギンコは図書館の大きさとカビ臭い空気を思い出しながら、パチュリーの真似をするように、紅茶を飲んだ。

「そういえば、報酬の話は終ぞしてなかったわね」

「成功報酬だろ？　ここ数日の衣食住、全部世話になったからもう十分だ」

「それとこれとは話が別でしょ？　そうね……」

レミリアは顎に手を当てて考えた。そして側に控える咲夜をちらりとみやり、にやりと口の端を釣り上げて言った。

「咲夜なんてどう？　尽くすわよ」

「ぶっ……！　お、お嬢様！」

思わず吹き出したのは咲夜だ。突拍子もないことを言われ、ギンコも目を丸くしていた。なによ、とレミリアは面白いおもちゃを見つけた子供のように笑いながら、咲夜の方を向いて言った。

「あなた、ギンコさんがいなくなったら死んだのよ？　命と比べたら、貞操なんて安い物じゃない。それに、ギンコさんなかない男だと思おう。あなたもまんざらでもないんじゃない？」

「そ、それは……」

「おい、否定しづらく聞いてんじゃねえよ。本人いるんだぞ」

苦笑いというには微妙に困惑の色が強い表情を浮かべて、ギンコがレミリアに言う。ギンコに出されたはずの紅茶を飲みながら、ギンコの膝の上でフランドールが口を開いた。

「なににー？ ギンコと咲夜結婚するの？」

「子供は絶対色素薄いわね」

「パチュリー様までふざけないでください……」

弱り切った咲夜は、ギンコと目を合わせ、苦笑するほかなかった。

「ほうほう、なんとも微笑ましい限りで。これはいい話を聞きましたね」

バルコニーの屋根の上。そのまた上の上空で、風に乗って届く声に聞き耳を立てていた影があった。それから幻想郷中に「紅魔館給仕、ついに結婚!」という見出しの新聞が出回るのは、もう少し先のお話。

「密着取材も楽じゃない、楽じゃないって」

からからと楽しそうに、天狗も笑っていた。この時、門番が眠っていたのは言うまでもない。

第五章 恋し糸愛し夢 壺

もう何度目かもわからない、幻想郷での夜をギンコは過ごしていた。

さつきまで焚いていた火も、狼煙のろしを上げなくなって久しい。空気が乾燥するこの季節に、長い焚き火は危険を伴う。山火事にでもなってしまうば事だ。そういうわけで、ギンコは早々に野宿の灯りを消し、星空を眺めていた。

ついこの間まで我が物顔で居座っていた残暑も何処かに行ってしまったのか、少し肌寒い秋風が顔を見せはじめ、夜ともなればもう完全に秋の気候である。ギンコは少し早い夜に眠れぬ体を縮こまらせ、乾燥した夜風から逃れるように土色のコートの首元を引き寄せた。「冷えるな。今日は」

上を見れば数限りない星屑が輝いている。夜空を流れる光の川。見飽きるほど眺めたそれを見て、ギンコは静かに目を閉じた。

顎を引き、そつと、それが降りてくるのを待つ。目を閉じた時。一見、視界は闇で覆われたようになるが、その時眼球は瞼の裏を見ていて、本当の闇というものは見ていないのだという。本当の闇を見るためには、二つ目の瞼を閉じなければならぬ。第二の瞼。人工の光を見続けると、閉じ方を忘れてしまうそれを、ギンコは閉じる。

眼球の上の方から、すうつと闇が降りてくる。本当の闇が降りてくる。そうして常の闇を見続けていると、その彼方から光の川が流れてくるのだ。

それは蟲たちの領域。地面の下で蠢く、下等で奇怪な、されど命の源流を司るモノどもの流れる川。蟲師たちはそれを、光脈と呼ぶ。

ギンコはこの光景をよく見る。二つ目の瞼をよく閉じる。不意に孤独に襲われたり、自然の前に旅の厳しさを感じる時に、この賑やかな光の筋を見ていると、心が穏やかになっていくのだ。

いつもは一人、ここで光の川を眺めるギンコだが、今日はどうい

わけか先客がいた。

「あ、いつかのお兄さん」

「お前は……」

光の川の対岸に、立っているその人影。若草色の髪に、ツバの広い帽子をのせた少女の姿は、いつか妖怪の山で見かけた少女のようだった。

「こんなところで奇遇だね。ここには私以外来ないのかと思った。あ、猫ちゃんはきたか」

少女の口元以外は、帽子の陰になっているため表情が読み取れない。はて。以前会った時は蟲の気に当てられて、前後不覚な印象を受けたのに、今回顔を合わせてみれば症状は改善されているようである。饒舌な少女に、ギンコも応じた。

「お前さん、今どこにいるんだ」

「あ、もしかして探してくれてたの?」

まあな、とギンコは答えた。蟲の障りを受けている人を放っておけるほど、ギンコは簡単な性格をしていない。面倒なんだということもあるが、彼女の存在は常に気にかけていた。もつとも、先の依頼の折に千里眼を頼り、目の前の彼女を探したが見つけられず、もはや見えぬところまで進んでしまったと半ば諦めてもいた。

だがこうして見てみれば、まだまだ救いの余地はありそうだ。所在がわかれば、蟲下しの処方もできよう、とギンコは考えていた。しかし、そんな考えに先回りするように、少女は語った。

「うーん、嬉しいけどもう無駄だと思うよ? 私はきつと、もう戻れない」

「そりゃあ、やってみなきゃわからんדרו」

「ううん。わかるよ。こっちの私は、もうすっかり体から離れてしまったもの」

「なんだと?」

少女の口ぶりは妙だった。それではまるで、体だけが無意識に一人歩きをしているようではないか。そんなことがあり得るのか。

「うんあり得るよ」

ギンコが尋ねる前に、まるで心でも読んだかのように少女が答えた。胸元に開いた目がギンコを見つめている。漠然とした不安感が、ギンコを襲った。

少女は光の川の縁をなぞるように歩く。右へ左へ行ったり来たり。胸元で開いている五本の触手がつながった目玉のようなものだけが、ギンコを捉えて動かない。

「覚さぶととしての力を閉じた私はここで二つに分かれてしまったの。地上を歩いているのは、イドの私。光を浴びすぎて、もう別の存在になつてると思う」

「……なんだかややこしいことになってそうだな」

「きっかけはわからないんだけどね。ここに私が来て、私から離れたつてことはそうなのかなって」

少女の言葉を受けてギンコは考えた。つまり、ここにいる少女は少女の中身だけで、外側は蟲として現世をさまよい歩いているということなのか。考えていれば、またその思考に、少女が口を挟んできた。「その蟲むしってというのがよくわからないけれど。妖怪としての私はここにいるの。でも外の私は妖怪としての私がここにいるから、もう別のものになってしまっている。そういうこと」

この会話とも呼べない心の疎通で、ギンコは少女が心を読んでいるのではと思った。

「大当たり。さすがだね」

「こんだけ露骨に先読みされれば嫌でも気付くだろうが」

ギンコは心の声に反応してくる少女に閉口する。文字通りの行動は、それが少女の妖怪としての能力だ、とギンコが理解したことを示していた。

光の満ちる空間で、ギンコは少女と対話する。

「それで？ 結局お前さんはどこにいるんだ」

「まだ諦めてないんだ」

個人的にな、とギンコが思えば、そういうことなら好きにしまよ、と少女が言う。

「私は地底にいるよ。何をしてるのかまではわからないけど」

地底？ もぐらにでもなってるのか？

「別のものって言ってもそこまでじゃないよ。地底は妖怪の山の麓から行ける文字通りの場所。そうだねえ、お姉ちゃんがちょっと怪しい年頃だから、気をつけてくれると嬉しいかな」

思春期なのか。

「傷つきやすいお年頃なの。蟲の私に引つ張られているようだし、助けてあげてね。むしろこっちの方が本題かな。うん。お願いしちゃうお」

適当だな。めんどくせえ。

「ひどいなあ。個人的なことなんでしょ？ なら期待してるからね」

思っていることが尽く暴かれて、ギンコはもう口を動かさず이었다。周囲に満ちる光が強くなる。川幅も幾分か、広くなっているようだった。

もうここにいられる時間も短い。じゃあお願いね、という少女に、ギンコは名前を聞いた。そう、頭の中で思った。

「まだ名乗ってなかったっけ？ 私は――」

ギンコは二つ目の瞼を開けた。冷える夜の闇と、満天の星空が戻ってくる。夜空に流れる光の川。太陽の光を受けて輝く夜の天蓋を見上げて、ギンコは光脈のそばで出会った少女の名前を確認するように、もう一度つぶやいた。

「古明地（こめいじ）いし……か」

その言葉を最後に、ギンコは地面へと寝転がり、夜風に息を溶かしていった。

秋風が吹き、乾燥した空気が落ち葉を舞い広げ、いずこかへ運んでいくのを見送ってから、ギンコは再び歩き始めた。

ここは人里の中央通り。傍に民家が並ぶ、人里の中心軸である。秋口になると農作業も冬ごもりの佳境に入り、貯えをしなければならぬのか、皆家にこもっているようで人通りは少ない。わずかにすれ違

う人も、首をすくめて肌の露出を抑えているなど、巡る四季の到来がよくわかる。

そんな秋なり始めの人里で、ギンコは地底に関しての情報を集めるために、とある家を目指していた。その途中で、見知った顔とぼったり出会った。

「あら、ギンコさん」

ギンコが出会ったのは紅魔館の給仕長、十六夜咲夜だった。銀髪の上に藍色の給仕服を着こなす彼女は、やはり異国風であったが、不思議と違和感はない。珍しいというだけだ。

よう、と片手を上げて挨拶し、世間話がたら、患者のその後をギンコは聞いた。

「どうだ、その後は」

「おかげさまですつかりと。溜まっていたお仕事も消化して、今ちよっと暇になったところですよ」

「それで面白い物に？ よくやるな、お前さんも」

仕事の虫め、と口の端を釣り上げるギンコに、苦笑した咲夜は手に持っていた籠を胸元に掲げる。

「自分の分だけです。そういうギンコさんはこれからどこに？」

「今度は地底を目指してみようかと思っただけ。そのための情報集めとして、稗田家にこれから行くところだ」

「まあ、地底ですか。人間がお一人で足を踏み入れるには、少々危険な場所だと聞き及んでおりますが」

「そうなのか」

もしよろしければうちの門番をお貸ししますよ、と咲夜は言う。

「そりゃ願ったり叶ったりだな。ま、地底がそれほど危険な場所だとわかったら頼むかね」

「では伝えておきますね。失礼いたします」

「おう」

ギンコの傍をすり抜けるように、咲夜は小走りで駆けて行った。そこでギンコは周囲の少ない人影の視線が、こちらを向いていることに気づいた。すぐにギンコは悟る。ああ、天狗の号外のせいか、と。

ギンコは先日、紅魔館の主人であるレミア・スカーレットの依頼で十六夜咲夜の蟲患いを処置した。その成功報酬として、レミアが「咲夜を嫁にどう？」なんて冗談をつぶやいたまさにその瞬間を、嗜好きな鴉天狗が号外記事に仕上げてしまったのだから、二人でいれば衆目が集まるのも道理だった。そのあたりの配慮が、今日のギンコには抜けていた。

咲夜も堂々としていればいいのに、とギンコは軽く考えて、稗田家に足を向けた。

声がする。私を呼ぶ声がする。誰？ 私を呼ぶのは誰？

「お姉ちゃん」

お姉ちゃん？ もしかしてこいしなの？

「そっだよお姉ちゃん」

ああこいし。今までどこに行っていたの？ 心配したのよ。

「ごめんね。心配かけて。でももう大丈夫」

大丈夫？ 一体どういうこと？ それにここはどこ？ 真つ暗な空間で、私、自分の声も聞こえない。

「お姉ちゃんの心は聞こえてるよ。だからもうちょっと待ってね」

え？ こいし、第三の目が開いて？

「もうすぐそっちに私の知り合いが行くわ。追いつけしちゃうよ？ 私もどきの対処をしてくれる人なんだから」

ああ待って、こいし。どうして？ また行ってしまうの？

「光の川が流れてきた。もう帰らなきゃね。川に入っちゃダメだよ？ じゃあまたね、お姉ちゃん」

こいし……。

「んで、結局お前さんの力を借りることになったわけだが」

「任せてください！ 道中の護衛を、完璧に勤めてみせますよ！」

その大きな胸を張り、紅魔館の門番、紅美鈴が言う。

緑茶で染めたような色合いの服には、すらりと伸びた脚線美を惜しげもなく晒すように切れ込みが入っており、龍の一字がはいった星が輝く帽子をかぶっている。

紅色の髪をなびかせて、武術の型なのか、正拳突きを披露する彼女はなかなか様になつていた。とにかく素人目に見ても、突きの風圧で今まさに揺れ落ちる木の葉に孔を穿つのは、冗談にしか思えなかつた。

二人がいるのは人里の外れ。獣道よりかは整地の行き届いた枯れ道の木の下。ギンコが道祖神の隣で蟲煙草を吹かしていたら、紅美鈴がやってきた。

別にここを集合場所にした覚えはないのだが、彼女はギンコの元に行つて護衛をしろと言われてここまでできたのだと主張する。そんなことが果たして可能なのか定かではないが、とにかく彼女はギンコを見つけて、やってきた。

「頼りにしてるぜ。というか、地底に行くの面倒臭くなってきたな……危なそうだし」

「ええ？ じゃあやめます？」

気軽に言ってくれるな。冗談だよ、とギンコは美鈴の提案を断つた。

ギンコには地底を目指す理由があつた。それは光脈の側で見た古明地こいしに会うため。彼女がどういう状況にあるかはわからない。しかしそれで放っておけるほど、ギンコの性格は簡単ではなかつた。

紫煙を空に吐き出して、ギンコは言う。

「とりあえず稗田家で聞いたが、妖怪の山の麓……いつか行つた鉱泉のさらに奥地に地底に降りる穴があるらしい。そこまで歩くぞ」

「おつす！ 了解しました！」

「お前さん、元気だな」

そりやもう！ と美鈴は突然、空中で回し蹴りをすると、無駄かつ高等な武技を披露した。門番というくらいだから、侵入者を許さな
いために荒事を切り抜ける力は確かなのだろう。もしかしたら、彼
女は体がなまっていたのかもしれない、とギンコは考えた。

こめかみをかすつていきそうな美鈴のつま先に「うお、あぶねっ」と
身を引いて、ギンコは驚いた。

道祖神が微笑みを浮かべている。美鈴の武技は時折ギンコをかす
め、その度に呑気だがどこか焦ったような声が響いた。

第五章 恋し糸愛し夢 弐

ここ通るのは二度目だな、とギンコはいつかの流行病の際、ここを通ったことを思い出していた。熱い湯が地下から湧き出す場所を指して歩いた道。緩やかな傾斜と、右手に見える緑の大山が、ギンコの心象風景と重なる。見えた山も、いつか立ち入ったことのある山。妖怪の山。思えば幻想郷にきて、かなりの時間が経っているようだった。

「ギンコさんは疲れていませんか？」

「大丈夫だ。お気遣いどうも」

「いえいえ、と美鈴は答え、ギンコの前に行く。ここまで順調に歩を進めているギンコと美鈴は地底を目指して、妖怪の山の麓を歩いていた。

地底とは、妖怪の山を離れた、つまりは今の幻想郷にうまく馴染めなかつた者たちが旧地獄街という場所を根城に形成した地下領域の総称である。なぜギンコがそんなところを目指しているのかといえば、先日光脈の側で出会った古明地こいしという少女の様子を探るためであり、至極個人的な理由からであった。

美鈴はそんなわけで地底を目指すギンコが一人なのは危険ということもあり、ギンコの護衛をするために同行していた。先の依頼、紅魔館給仕長の十六夜咲夜の蟲患いを治療したことで恩を受けていた紅魔館は、ギンコの目的を聞いて、美鈴を送り出してきた。

美鈴の背中に、ギンコが話しかける。

「お前さんも災難だな。こんなところまで使わされちゃって」

「いいえ、そうでもないんですよ」

ギンコの言葉を、美鈴は否定した。大股で一步踏み出して、肩越しにギンコの方を見る。

「あれから咲夜さんも元気になりましたし、あなたには返したい恩があります。これくらい安い仕事ですよ」

私がここにいるのは、紅魔館に住むみんなの総意ですから、と自慢げに語る美鈴は嬉しそうだ。恩を返すと言われてギンコも嬉し

くないはずはなく、そうかい、と静かに返した。

「そういえばお前さん、地底については知っているのか？」

「いえ、全然」

「……それなのにそんな自信満々に先を歩いてたのかよ」

「ああ、すみません。先、歩かれます？」

「歩くよ。お前さん、遠足気分なんじゃないだろうな」

「あいや、ばれましたか」

てへへ、と美鈴は頭をかいた。聞けば美鈴は紅魔館が幻想郷に来てから門番という宿命か、あまり幻想郷の中を見て回る機会がなかったのだという。こういう機会は新鮮で、楽しいと彼女は語った。

「あ、護衛はちゃんしますから、安心してくださいね」

「頼むぜ。本当に」

無邪気に景色を見渡す美鈴を、今度は振り返りながら、ギンコは念を押した。もつとも、依頼料など払ってはおらず、美鈴の護衛は完全に有志の協力であるため、あまり大きなことを言えないのも事実であつた。

かくして美鈴との遠足をギンコは楽しむことになった。歩けばちゃんといつてくるとはいえ、美鈴はきよろきよろと辺りを見渡して忙しない。まるで子供のお守りをしているようだと、ギンコは思った。

そうしてしばらく歩き、岩場が目立つようになってきたころ。薄い硫黄の匂いが漂ってきて、視界にもはつきりと湯気がかかるようになってきた。いつか浸かった温泉に着いたのだ。

到着するやいなや、美鈴はギンコに先んじて鉱泉の側に近寄った。

「うわー！ これって温泉ですよね！ 入ってもいいですか？」

「おい、遠足じゃねえんだって」

「えー……」

あからさまに残念な表情を浮かべる美鈴に、ギンコが折れる。

「……せめて足湯にしておけ。こんなところで素っ裸になられても、困るのはごっちゃんだよ」

「やった！ じゃあ休憩ですね！」

ギンコさんも一緒に入りましょうよー、と道中も晒していたその足を、早速湯につけながら美鈴が言う。確かに休憩は欲しかったところだ。そして足湯となれば、ギンコにも断る理由はなかった。

美鈴の隣に桐箱を下ろし、それを間に挟むようにギンコも座る。靴を脱ぎ、裾を膝まで捲り上げ、湯に足をつける。暖かい。ここまで歩いてきた疲労が、足から湯に溶けていくようだった。

秋の口。いつかここに来た時は青々としていた妖怪の山も、衣替えを始めているのがちらほらと見える。岩場の目立つここには自然の喧騒も、人の気配も、生き物の息遣いも少ない。たまに動かした足が立てる水音だけが、鮮明に聞こえてくる。

「……………いいですね」

「……………ああ」

幻想郷は自然が豊かだ。特に山が光脈筋になつてからはそれが顕著になったような気がする。こうして生き物から離れた環境にいても、山を見れば、その大きな息遣いが肌に伝わってくるようだった。

しばらくそうして、美鈴と時間を過ごす。ちよつとした休憩のつもりだったが、これがどうにも心地いい。自然と会話も弾んだ。

「ギンコさんは外の人ですよね？ どうですか、こちらに来て」

「そうだな……………戸惑うことは少なくなつたが、まだ慣れないな」

どこぞの新聞記者よりもらしい口調で、美鈴が質問を重ねた。

「こちらに来て大変だったことは？」

「蟲煙草が切れそうになつて焦つたことと……………これは今もだが、光酒が手に入らないことだな」

「こうき？ ってなんですか」

これだよ、と言ってギンコは桐箱の開けて、中から一つの小瓶を取り出した。美鈴が手渡されたその蓋を開けて中を覗くと、ほんのり光を帯びた酒が入っていた。

「なんか綺麗ですね」

「漠然としてんな。すげえもんなんだぜ、これ」

美鈴の手から、小瓶を取り上げ、ギンコが少し振ってみせる。ちやぶ、と水音がして、ギンコ大事そうに、その蓋を閉めた。

「これはただの酒じゃない。だから入手経路も限られているんだが……これが湧き出すほど光脈が表出している土地を見つけたことができる俺にとって、今一番の死活問題となっている」

「それは大変ですね。頑張ってください」

「……どつかにワタリでもいねえもんかね」

ギンコの切実なつぶやきに、美鈴はよくわからないといった様子で事態の深刻さをよく理解していないようだった。その気の無い返事に変わり、美鈴は突然背後を振り返った。

しばらく沈黙が流れる。美鈴の視線の先にはただの岩があるばかり。ギンコが美鈴の意図を測りかねていると、美鈴は弾けるように立ち上がり、視線の先の岩へ飛び蹴りを放った。

「はあー！」

美鈴の裸足が岩にぶつかり、岩の方が木っ端みじんに砕け散る。どんな体をしているのか。ギンコが突然の行動に合わせてそう驚いていると、どこからともなく声が聞こえた。

『酒の匂いがする……』

大気全体が震えるように全方位から響くその声は、声の主の姿を伴っていないかった。美鈴が辺りを見渡して、言う。

「気を散らすのがうまいですね……どこにいるのかわかりません」

「おい、いきなりどうしたってんだ」

状況に少し置いてけぼりをくらったギンコは、美鈴にそう呼びかけた。

「気をつけてください。どこか近くに妖怪がいます」

『そう警戒しないでくれ。今姿を見せる』

美鈴の警戒心を受けて、素直な返答をした声はそう言った。途端に美鈴が蹴り碎いた岩の周囲に湯気が集まり、もやもやとした塊を作っていく。そしてその塊を霧散させて、まるで卵から孵るかのようにその妖怪は姿を現した。

「やあ、君は蟲師だね」

「……そうだが、そういうお前さんは」

ギンコが慣れないというのはまさにこういう状況だった。予兆も

なく、突拍子もなく事態が訪れ、それは大抵、自分にはどうすることもできないことであるということ。見守るほかない。なるべく無難な対応を、ギンコは心がけた。

やっぱり蟲師か、と二つの大きな角を頭から生やし、橙の髪を下ろしている妖怪は蹴り碎かれて座りやすくなった岩の上で、ギンコを見てにつこりと笑った。

「蟲師ってことは光酒持つてるんだろう？　ちよいと分けてくれんかね」

「生憎と、誰かにやれるほど蓄えてるわけじゃないんだ。他を当たってくれ」

「ありや？　そうなのかい」

残念そうにそう言った妖怪は手に提げていた瓢箪を傾けて、中に入っているものを飲んだ。喉を鳴らして中身を飲み干し、息を吹き込むように口を離し、瓢箪の中を覗いて、出した舌の上に残った水滴を垂らしていく。その様は酔っ払いを見ているようで、ギンコは妖怪の気まぐれな行動を見ていた。

「でもさ、あるんだらう？　光酒」

瓢箪の中身が空になったことを若干惜しむような表情を見せた妖怪は、次の獲物を見定めるように、口の端を釣り上げてギンコに聞いた。

そりやあることはあるが……、とギンコは渋るようにつぶやく。こいつはなぜ光酒を求めるのか。そして何より、なぜ光酒の存在を知っているのか。じゃあこうしよう。妖怪が提案する。

「お兄さんは地底に行きたいんだらう？」

「ああ、だがなぜそれを？」

「それは瑣末なときさ。地底に行く具体的な道は知っているかい？」

妖怪は問う。ギンコは地底への道がこの辺りにあるということを知っていたが、その具体的な道順は知らなかった。しらないだらう？

妖怪はギンコの事情を知っているようだった。

「知らないならこうだ。地底への道案内をしてやるから、その見返りとしてお兄さんのなけなしの光酒をいただくということだ」

「なんでこつちがそんな一方的な約束しなきゃならん。光酒はやれんぞ」

「やれやれ、状況が飲み込めない人間だなあ。そつちの妖怪に聞いてみれば？ どうしたらいいってさ」

「……」

岩の上に座る妖怪を見て、美鈴は静かに構えをとっていた。その表情は緊張している。どうしたのか、とギンコが尋ねれば、美鈴は視線だけは動かさずに、ギンコへ進言した。

「悪いことは言いません。あの妖怪がこう言っているうちに、約束してしましましょう」

「なんだ？ そんなに危険な相手なのか？」

美鈴ははい、と答えた。

ギンコの目の前に現れたのは伊吹萃香という鬼だった。鬼。幻想郷最強を論じれば必ずその名前が現れる、名実ともに妖怪らしい妖怪であり、美鈴はそのことを理解していた。

鬼は約束を破らない。その気質も理解していた美鈴は、ギンコに約束をしてしまえ、と促す。

この世界には少女の姿をした危険なものが多すぎやしないか、とギンコは幻想郷を呪った。美鈴の尋常じやない態度を見て、ギンコは対応を変える。

「おい光酒を欲する妖怪さんよ」

「なんだい？」

「光酒はやってもいい。だが道案内の他に、もう一つ条件をつけたい」
「おう。光酒のためならもう一つくらいはいいだろう。なんだい？」

ギンコは人差し指を立てて妖怪に申し付ける。

「道中の護衛を頼みたい。ここの妖怪と一緒に、俺の身を護ってくれ」
「そういうことならお安い御用だ。お兄さんの身を護る。約束しよう。その代わり……」

「ああ、光酒はやろう」

ギンコはその妖怪と約束をした。これで身の安全は保障された。美鈴も肩の力を抜いたように弛緩していた。

約束した妖怪が、岩の上から飛び降りてギンコへと近づいてくる。

「私は伊吹萃香。鬼だ」

「鬼……」

そう自己紹介され、手が差し出される。鬼という知名度と、少女の雰囲気はどうも噛み合わなかった。差し出された手を、ギンコが握り返す。

「蟲師のギンコだ。ついでに聞くが、お前さんはなんで光酒が欲しいんだ？」

興味本位で聞いてみた。すると萃香は先程飲みほして空になった瓢箪を掲げていった。

「最近酒虫の調子が悪くてね。光酒を飲ませれば元気になるかな、とね」

「酒虫？　なんだそりゃ」

「この瓢箪の中に住んでる虫のことさ。鬼の国までわざわざ行って捕まえてきたんだけど、最近はあまりいいお酒を作らなくなってきたのさ」

興味を示したギンコに、萃香は瓢箪について説明する。

曰く、酒虫とは少量の水を大量の酒に変える鬼の一種であるらしい。まるで蟲のような存在であるな、とギンコは思った。

「また新しいのをつかまえないかならんのかと思ってたけど、近くに蟲師が通りがあったのは好都合だと思ってね。ほんのちよつと光酒を分けて欲しいと思ったんだ。この子には思い入れもあるし、まだ頑張って欲しくてね」

瓢箪の中に住む生き物を慈しみ、鬼は表情をほころばせた。ギンコはその様子を見て、桐箱から小瓶を取り出して鬼に差し出した。

「あれ？　いいのかい？　光酒は約束の報酬としてもらうつもりだったんだけど」

「生き物の命が懸かってんだろ？　なら、前払いで構わんよ」

そりゃありがたい、とギンコから小瓶を受け取り、萃香は瓢箪にその中身を注いでいった。

黄金色に輝く光酒。それが瓢箪に吸い込まれていく。その妖しい

光に、美鈴も興味津々といった様子で萃香の作業を見つめていた。やがて小瓶の半分ほどを瓢箪に移した萃香は、小瓶をギンコに返した。

「ありがとう。もう十分だと思うよ」

「おう。元気になるといいな」

なってもらわないと困るねえ、と萃香はにこやかに笑った。

「しかしお兄さんもお人好しだねえ。脅されたんだよう？」

「約束しただろう。だから道案内、よろしく頼むぜ」

「ふふ、応。任された」

鬼の萃香は胸を叩いた。ちやぷ、と瓢箪が水音を立てた。

第五章 恋し糸愛し夢 参

「お姉ちゃん」

ああ、こいし。また会えたのね。

「お姉ちゃんは最近ここに来過ぎだよ。あぶないよ」

こいしだっけいつもここにいるじゃない。大丈夫よ。

「緑の杯を使いすぎると理がやってくる。あの私はお姉ちゃんをここに引きずり込もうとしてるんだよ?」

こいしといられるなら、それも悪くないわね。

「だめだよ。別物だっけ理解してるんでしょ? ちゃんと自分を強く持って。夢の世界に、これ以上入り込んじゃだめ」

こいしはどうなのよ。自分のこと、ないがしろにしちゃだめよ。

「私はここから離れるわけにはいかない。私だからこの蟲を封じておけるの……光の川が流れてきたわ。じゃあね、お姉ちゃん」

こいし……まっけ、こいし!

「地底へはここを降りればいいのか」

「ほおー」

地底への案内人として、鬼の伊吹いぶき 萃香すいかを加えたギンコと美鈴は、鉱泉から歩き、ほどなくして地底への入り口に到着した。

まず見えてきたのは大空洞。地面に穿たれた大穴が、いかにも地獄へと続いていそうな不気味な風鳴りを響かせている。

ギンコと美鈴はお互い、足を滑らせないように縁から下を覗き込んでみた。大穴のずうっと下のほう。小さな米粒ほどの光が見える。底からの光なのだろう。かなり下のほうまで降りなければならぬようだ。その割には梯子のようなものも見当たらず、ギンコには些細なだが重要な疑問が浮かんだ。

「こりやすげえな。どうやって降りりやあいいんだ」

「うん? 飛び降りるんだよ?」

「あ？」

ギンコが言うや否や、体に鎖が巻きついていく。その鎖はギンコの自由を奪うと同時に、大穴のような底知れぬ不安をギンコにもたらしただ。

鎖の先は笑う鬼の手に。鎖で胴体を簀巻きにされたギンコの頬に冷や汗が伝う。そして次の瞬間。

「ぴよーん」

「うおっ！」

鬼の手に引きずり込まれるように、ギンコは自由を奪われた状態で、大空洞へと続く空中に身を躍らせた。上下の感覚が曖昧になる空中。速度もかなりついてきたところで、歯を食いしばり、恐怖に耐えているギンコに、美鈴が気軽な様子で話しかけた。

「すぐ終わりますよ。頑張ってくださいねー」

「……！」

帽子を抑えて呑気に落下する美鈴に絶句する。いや、この状況すべてに絶句する。ギンコは自分がかかなり変わり者だと思っていたが、幻想郷に来てからというものの、その半ば常識と化した認識をことごとく吹き飛ばされている。

入ってきた空は丸く縁どられ、どんどんと遠ざかっていく。そしてギンコは、もうどうにでもなれ、と体の力を抜いて目をつむった。

旧地獄街道はいつも通りだった。閑散かんさんとしていくわけでもなく、賑わっているわけでもない。ただ己に残された悠久の時を、放埒ほうちやうに、しかし刺激的に過ごしたいだけの連中が、いつも通りに喧嘩したり、酒を飲んだりして、荒れているが秩序立っているという奇妙な現状を作り出していた。他者との交流を望まないものたちが身を寄せ合っているのだから、その現状は当然と言えた。

鬼の星熊ほしくま 勇儀ゆうぎは、そんな旧地獄街道で、何か面白いことはないものかと散歩をしていた。

からんころん、と下駄を鳴らして石造りの街道を歩く。隣家ではいつも通りの宴の声が聞こえるが、今はなんだか気乗りがしない。面白

いこと。漠然としたそれを追い求めて、勇儀は街道を歩く。

「ん？」

そんな願いが通じたのか、勇儀の視界の先にはぼんやりと光る人影が見えた。

若草色の髪につばの広い帽子を被った、古明地姉妹の妹の方である。その後ろ姿を見て、勇儀は首をかしげた。

何度か面識のあった勇儀だが、今日はどうやら様子がおかしい。いつも存在が希薄なやつだったが、今日は一段とその傾向が顕著に表れているように感じた。

勇儀が近づいても、その影は動こうとしない。本当に古明地の妹なのか？ ぼうつと突っ立っているその背に、勇儀は話しかけた。

「よう。こんなところで何してんだ？」

話しかけた瞬間。古明地こいしは跡形もなく消え去った。

疑問に思う暇もなく、勇儀の頭の中からはその存在ごと消滅する。それが古明地こいしの能力であるところの、無意識を操る能力であった。

はて、私は何をしようとしていたのか。勇儀が頭のモヤモヤを消化できずにいると、ふと、下げた視線の先に、あるものを見つけた。なんだこりや、と拾い上げる。

「緑の杯？ 質は良さそうだが……」

謎の杯を拾い、勇儀は首をかしげた。面白いこと。それは、もうすぐそこまで来ていそうな気配だった。

「……いい、杯さかずきだな」

勇儀がそう呟いた時、ぞくりとした寒気がした。それは久しく感じていなかった寒気。いつの間には自分は森の中に来たのだろう。モヤがかかる頭が、不明瞭で心地いい。

手に持つ杯には、いつの間にか光る酒が満たされている。光酒だ。一口飲む。うまい。

勇儀の動作一つ一つを、古明地こいしが見つめていた。

「死んだと思っただな」

「ははは、大袈裟だなあ」

「お前らの尺度でものを考えるんじゃないやねえよ」

なんとか五体満足で地底に降り立ったギンコは、鬼の伊吹萃香に文句を言っていた。鎖で簀巻きにされて長い長い空中散歩をするなんて、ギンコの人生経験の中で初めてであり、楽しむなどとは無縁のものであったことは言うまでもない。

まあまあ無事でよかったじゃないですか、とやはりどこかずれた妖怪たちの陽気な態度に、ギンコが不満の矛先をしまうと、地平の付近に行灯のような赤い光が満ちているのが見えた。それが地底の都市だというのは、隣にいる鬼が解説してくれた。

「あれは旧地獄の光さ。地上に馴染めない端くれの奴らが根城にしてる、ね」

「誇るところか、それ」

「いい個性じゃないか。私は好きだよ」

萃香はごろごろと笑顔を見せる。聞けば旧地獄にはそういう妖怪が多いのだという。

地上で忌み嫌われたもの、ただ純粹に今の地上に馴染めぬもの、事情こそ様々であるが、ここにはそういう日陰者が多く集まっているのだそうだ。

「古明地こいしも、なんらかの事情があつてここにいるのかね」

「古明地姉妹は妖怪屈指の嫌われ者さ。なんたってあの覚なんだからね」

「覚？ 心を読む、とかいう？」

「そう。よく知ってるじゃないか」

地底の光が近づいてくる中、伊吹萃香の地底談義は続いていく。

「覚は心を読む妖怪だ。それは能力というより、性質と言つてしまつた方がいいのかもしれない。なんたって本人の意思で扱えないものだからね」

「へえ、じゃあ誰彼構わず心を読むと？」

「そういうことだ。心を読まれて嬉しい奴なんていないだろう？」

「まあ確かにな」

萃香の言葉を聞いていれば、なるほど地底にいることは納得できた。

行灯のような日の光の代用を常に灯しているのも、彼らが日陰者ゆえの事だろう、とギンコは思った。

そうした地底の光を見てみると、ギンコは一つ、気がついた。

「蟲の数が多いな……」

「ん？ そうかい」

「ああ」

ギンコが地底に下りてきたからというわけではないが、地底には蟲が多かった。こういう陰気なところには湧きやすいとも言えるが、それにしても数が多い。光脈が近いのだろうか？ とギンコが少し思考を巡らせたところで、美鈴が遠方に妖怪の気配を感じ取った。

「妖怪が近づいてきます」

「よくわかるな。何にも見えんぞ」

目を凝らしても、都市の光が見えるばかりである。しばらく立ち止まって様子を見れば、確かに小さな人影がフラフラとおぼつかない足取りでこちらに向かって歩いていようだった。

「本当にすごいね。霧状になって、湯気に紛れていた私でさえ勘付かれたし」

それが私の能力ですから、と美鈴は胸を張る。

小さな人影はギンコたちの目の前に来るまでにパタリと崩れ落ちてしまう。慌ててギンコが近づくと、美鈴も萃香もその動きを止めようとはしなかった。危険な妖怪ではないのだろうか。

ギンコが膝をついて、妖怪を抱き起こした。その妖怪は桃色の髪と、どこかで見たような服装をした少女だった。その姿を見て、萃香が言う。

「ああ、こいつだよこいつ。例の覚妖怪。古明地こいしの姉の、古明地さとり」

「こいつが？」

そうだと。ギンコに見られた萃香が答える。

「でもおかしいねえ。なんだってこんなところにいるんだろう。基本的に引きこもりのはずなのに」

萃香は首を傾げていたが、いまいちピンとこないギンコは覺妖怪へと呼びかけた。

「おい、お前。大丈夫か」

「う……うあ……」

ぼうつと酩酊状態のように、焦点の定まらぬ視線を泳がせて、首をカクカクと動かす古明地さとりはどう見ても普通の状態ではなかった。蟲の氣に当てられているのか。ギンコはその指先に結ばれている赤い糸を見て、蟲患いの確信をした。

「とにかくどつかで休ませねえと、話にならん」

「そうは言っても……よくないものが集まり始めたみたいですよ」

さとりを介抱しようとしたギンコが顔を上げる。そこにはいつか見た怨霊たちが集いつつあった。黒い人形に見えなくもない影が、うようよと陽炎のように立ち上っている。それらを相手に、萃香と美鈴が戦闘態勢をとる。

「さとりをしつかり守ってるんだよ！」

「ギンコさんは私が守ります！」

二人は黒い影に突撃した。美鈴の徒手空拳が、萃香の振り回す鎖が、怨霊たちを払い飛ばしていく。これほど安心感のある護衛もあるまい。ギンコはさとりの容態を見ることに集中した。

「(初めて見る蟲だな……これは、なかばいと半糸か)」

さとりの小指に巻き付いた糸状の蟲。文献でしか見たことのないその蟲は、ギンコの手之余るものだった。こいしが言っていたのはこれか、と当たりをつける。

さとりの頬に触れる。閉じた目。目尻から一筋、涙が伝う。次の瞬間、ギンコの左目に激痛が走った。トコヤミが暴れている。

「ぐあ……」

ギンコは美鈴と萃香の露払いを見る。怨霊とトコヤミ。似ているのは見た目だけではあるまい。こいつは何に反応して、俺の目の中で暴れるのか。

「ギンコさん!？」

「だ、だいじょう……ぶだ!」

お前はそつちに集中しろ、とギンコは美鈴に言葉を投げる。やがて戦闘とも呼べぬ二人の露払いが終わる。しかし、怨霊が散つても、ギンコの左目の痛みは幾分か良くなったものの、消えはしなかった。脈動するように、左目の暗闇が疼く。さとりを前にしているからなのか？今はまだ、判断する情報が少ない。

美鈴が心配そうにギンコのもとに駆け寄る。膝をついているギンコの隣に、美鈴はしゃがみこんで肩に手をかける。

「俺は大丈夫だ」

「大丈夫に見えませんか。私はどうしたらいいですか」

「そうだな……とりあえずこいしを探さにやらん。さとりの治療も、こいしが居なければ、おそらくできはしない」

「じゃあ、さとりさんは……」

「お前たちには見えんと思うが、指に糸糸という蟲が結びついている。これは片割れと一緒に治療しなければ均衡が崩れて、どうなるかわからないものだ」

「じゃあ当座の目標は妹の方を探しつつ、だね」

萃香が頭の後ろで手を組んで、総括を述べる。そして地底の都市の方を指差す。

「さとりが根城にしている地霊殿の場所は知っている。とりあえず、そこまで行ってみようじゃないか」

萃香の提案に、ギンコは頷いた。

第五章 恋し糸愛し夢 肆

荒涼とした景色を尻目に、一行は地霊殿を目指していた。道中で遭遇した覚妖怪は美鈴が背負い、赤土の大地を歩いて行く。地底は、地獄という名に恥じぬ様相であった。

大火災でもあったのかと思える荒廃とした荒地が続き、痩せこけた木ともつかぬものが所々に生えている以外は、見渡す限りの赤い土が広げられていた。

その道中で、萃香はギンコに聞いた。

「さどりの様子は蟲師的にどうなんだい？」

「ん？ そうだな……」

ギンコは少し考えてから、足を止めずに答えた。

「とりあえず古明地こいしに言われていた、姉の蟲患いを頼む、という意味は理解できた」

「へえ、じゃあさどりは蟲の障りを受けているのかい？」

「ああ、半糸、なかほいとという蟲でな。深く心を通じ合わせているものたちの間に寄生し、想いを伝えることで宿主に幸福感を与える蟲だ」

「いい蟲じゃないか」

萃香は頭の後ろで手を組んで、軽い調子でいった。

「そうでもない。半糸は、宿主との心の距離が開くと千切れてしまう。そして千切れた後は、想像を絶する喪失感を宿主にもたらす。やがてその喪失感が大きくなると、千切れた糸はお互いを引き合うように、宿主たちをまた引き合わせようとする」

「だからいい蟲じゃないか」

「……その時になって片割れが生きていればな」

「……なるほど」

ギンコの一言に、萃香は納得した。千切れた半糸は、片割れが死んでしまえば、生前の絆を求めて宿主を死に引きずり込むのだ。つまりは、何が何でも縁を結びなおそうとする結果、宿主を同じ場所まで持って行こうとするのが、この蟲の真の性質だった。

「この蟲は珍しいが、文献によれば長年連れ添った夫婦の間に寄生す

ることが多い。さとりにそういう相手がいるのは知っているか？」

「それは多分妹のことだろう。地上で鼻つまみ者だった頃から、二人は一緒だったわけだしな」

「……そうなのか？」

さとりの半糸は千切れていた。妹を探してこの辺りを彷徨っていたのだろうと考えれば、前後不覚の徘徊も納得がいった。

だがギンコはこうも考えていた。だとすればこいしの方もさとりを求めて近くを徘徊しているはず。だがその姿が見えないこと、光脈筋のところで見たいしには半糸が付いていなかったことを考えた。さとりが引き合う相手は、別にいるのではないか？ そんな考えが、頭をよぎる。

そうしてしばらく歩き、旧地獄街道へと至る橋が見えてきた。地下水の川なのか、仄暗い水面に、地底都市の明かりが反射している。

その橋板の上。橋の欄干で立ち飲みをするように、二人の人影が酒盛りをしていた。

「お、萃香じゃないか」

「勇儀。と橋姫か」

「こんにちは。そろそろと御一行様が何の用？」

少々棘のある返答をしたのはこの橋を守る橋姫こと水橋みずはしパルスィであった。座った目でギンコを見る様子は、もう随分と酔いが回っているように思えた。

よう萃香、と片手を上げて挨拶をしたのは鬼の星熊ほしぐま 勇儀ゆうぎである。

「ちよいと地霊殿に迷子のお届けものをね」

「……さとりじゃないか」

こんなところに珍しいな、と勇儀は言った。だがすぐに興味を失ったように、酒の入った杯を傾けた。その姿を見て、ギンコは目を見張った。

「おい。お前、その杯さかずき」

「ん？ ああ、いいだろう」

勇儀は手のひらに収まる程度の小さな緑色の杯を掲げて見せた。ギンコはそれを見て思う。なぜあれがここにあるのか。

「光酒が湧き出してくるんだぜ。まあ、お前に言ったところで価値は分からんだろうけどな」

「わかるぜ。俺は蟲師だ」

「へえ、この世界にも蟲師がいたのか」

勇儀は意外そうに、そう呟いた。ギンコ以外の蟲師はここ幻想郷にいない。勇儀が驚いたのも意外なことではなかった。

緑の杯は蟲の宴で使用される、生物を蟲にするための道具だ。そこから湧き出す光酒はより純度が高い。それを飲んで無事とは思えなかったが、二人の妖怪は楽しそうに酒盛りを続けていた。

「そーいや蟲師さんよ。私は初めて見るんだが、その辺を漂っている光を帯びたものが蟲だって考えていいのかね」

「蟲が見えてんじゃねえか。その酒を飲むのをやめろ」

ギンコは若干目がうつろな勇儀から杯を取り上げた。えー、と不満げな声を漏らす勇儀の隣で、パルスィは欄干に突っ伏していた。

「だーいじょうぶだって。光酒飲ませろよー」

「どう見ても大丈夫じゃねえだろ。大人しくしてろ」

急に酔いが回ったのか、それとも光酒の精気に当てられたのか、勇儀は橋板の上に腰を下ろして、寝息を立て始めた。

「どういうことなの？」

勇儀の隣にしゃがみ込み、彼女の額の上から生える一本角をつつきながら、萃香はギンコに問いかけた。同じ鬼として、勇儀がここまで酔っているのを見るのは久しぶりなのだという。

ギンコは手に持つ緑の杯を掲げて言った。

「こいつらはこの杯を使って光酒を飲んでいたんだ」

「それはわかるよ。その光酒がどこから湧いて出たのかって話さ」

「光酒はこの緑の杯から湧く。これは蟲の宴という現象で現れる特別な杯なんだ。これに注がれた光酒を飲み干すと、生物としての法則を失って、あちら側の、つまりは蟲の住人になる。……最も、これは贋作のようだがな」

ギンコは続ける。その瞳は、杯を手にした瞬間からギンコの目に映り始めたある存在を見据えていた。

「……お前が用意したものなのか。こいし」

「……」

「？」

ギンコが話しかける先。萃香や美鈴には見えない、古明地こいしが立っていた。ぼんやりと光を帯びた彼女は、ある確信をギンコにもたらず。

古明地こいしは妖怪ではない。少なくとも、ここにいるモノは蟲である。緑の杯から光酒を飲んだのであろう勇儀やパルスィは、二人でそれを分け合っていたために蟲にならずに済んだのであろう。だが目の前にいる古明地こいしは、もう完全に蟲になってしまっていた。宴に呼ばれたのか。だとすれば光脈筋で出会ったもう一人の方はどうなる。

ギンコは光脈筋で出会ったこいしの言葉を思い出す。妖怪としての自分は、光脈のそばにいるから、さまよっている無意識の自分は、きっと別のモノになっている。まさに、その通りとなっていた。

こいしはゆらりと揺らぐような動作で腕を上げ、ギンコの持つ杯を指差した。その指には先の途切れた赤い糸が結ばれている。

「古明地の妹がいたのかい？」

「ああ」

萃香は事情を察したように聞いてくる。

「緑の杯がどういう経緯でもたらされたのかはわからんが、これではっきりしたことがある」

ギンコは重い調子で言葉を選ぶ。

「古明地こいしは蟲になった。そして、半糸の片割れである古明地さとりを、緑の杯で蟲にしようとしている」

「蟲に？」

「結果論にすぎんがね。そう考えれば、さとりが前後不覚の徘徊をしていたこともうなずける。やはり、お前さんが言うようにこいしとさとりは半糸で惹かれあっていたんだ。こいしの指にも、同じく千切れた半糸があった」

だがそんなギンコにもわからないことがあった。それは光脈筋で

見た古明地こいしという存在である。彼女は一体あそこで何をしていたのか。無意識に体を預け、蟲になつてしまった体を置いて、妖怪としての彼女は何をしていたのか。

そして緑の杯の存在。これはこいしが用意したモノだ。なぜこんなモノを用意できるのか。その入手経路は、想像がつかなかった。

ギンコはさとりを見る。ここからは蟲の知識だけではことが解決できない。今までの経験上、妖怪としての性質もしっかり理解しなければ、さとの蟲患いを治療することはできないだろう。

さとりは静かに寝息を立てていた。

旧地獄街道の先。怨霊たちを統括する地霊殿の中では、一匹の猫が、人の姿で走り回っていた。

「さとり様……どこいったの？」

彼女は地霊殿の主人である古明地さとのペットの火焰猫かえんびょう 燐りんだ。どこかに行つてしまったご主人様を探して、走り回っていた。

最近ご主人様の様子はおかしかった、と燐は思っていた。独り言が多くなり、よくお酒を飲んでいらつしやつた。不思議な緑の杯を傾けると、妹のこいし様に会えるのだと言っていた。

走りに走つて屋敷の中をくまなく探してみても、さとりはどこにもいない。それほど広くはないはずの屋敷だが、何往復もしているせいで、燐の額には汗が浮かび、肩で息をしていた。

玄関先の大広間。ステンドグラスが十分な光を受け取れず、濁った輝きを見せている。その光景はいつも見慣れているはずなのに、まるで曇天のような不安感を、燐にもたらしていた。

「お燐」

「あ、お空。どう？」

同じくさとりを探していたペットのお空が飛んでくる。

「こっちにもいない。やっぱり外に行ったんじゃないかな」

「外……」

それこそありえない話だ、と燐は思った。さとりはもう何年も人と

会おうとはしなかった。誰かが地霊殿を訪ねてくることはあっても、自分から訪ねることなどないと思っていた。

しかし、探せる場所を探してみてもさとりはいない。やはり自分の意識の外に、さとりはいるのだろうか。まるでこいし様のようだと、燐は思った。

やはり外に行つたのだろうか。屋敷を開け、外に探しに行こうかと燐が迷っている時。屋敷の扉を開けて、遠慮なく屋敷に入り込んでくる者たちがいた。

「たのもーう」

「おい、ひとん家だろ」

「な、なんなんですかあなたたちは」

それは見るからに怪しい奴らだった。道場破りもどきに家の扉を開けたのは鬼で、その後ろから入ってきたのは白髪の男だった。

人間がなんでこんなところに？ それよりも彼らはなんでここに？ 様々な疑問が浮かんで消えるが、最後に入ってきた妖怪に背負われている存在を見て、それらのすべてが吹き飛んだ。

「さとり様！」

思わず駆け寄る。背負われているということは、どこか怪我でもしたのだろうか。心配になり、あたふたと取り乱す燐に、さとりを背負っている美鈴は笑いかけた。

「大丈夫です。ちよつと眠っているだけですよ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ。その男性が、これまでの経緯を知っています」

まずは彼と話してください、と美鈴は白髪の男、ギンコへと話題の矛先を向けた。

「あなたは？」

「蟲師のギンコと申します。さとりについて、少々伺いたいことがありますね。ああ、心配はいりません。その彼女は、おそらく緑の杯で光酒を飲んだせいで、ちよつと気を失っているだけです」

「緑の杯？ あなたがなぜそのことを？」

燐は少しの警戒心を視線に込めた。ギンコはその視線を受けても、

飄々としたものであった。

「古明地こいしについて……古明地さとりについて、話をお伺いできませんかと思ひましてね。おそらく彼女、最近は妙な行動を取っていたんじゃないんですか。例えば、幻覚を見ているような」

「……」

ここでなぜこいし様の話が出てくるのか。男への警戒心は緩めない憐だが、さとりを助けてくれたこと自体は感謝すべきことである。信じ切れはしないが、話くらいは聞いてもいいのではと思った。

「もしそうなら、これは我々蟲師の範疇だ。お話、聞かせてもらえますかね」

ギンコの言葉に、憐は頷いた。

第五章 恋し糸愛し夢 伍

「う……………」

古明地さとりは見慣れた天井を見つめて目を覚ました。ここは自分の寝室だ。天井の赤い色が視界いっぱい広がる。眠る前の記憶は曖昧で、こういう時に不安感を煽る深紅を見るのはいただけない。

ぱちぱちと瞬きをして、右腕で視界を隠す。すうつと視界に闇が降りた時、聞きなれない男の声が聞こえた。

「目が覚めたようだな」

「さとり様……………」

男の声が続いて聞こえてきたのは聞きなれた声。ペットのお燐だ。声のする方に視線を向けて、そつと腕をどかす。

「お燐……………」

「さとり様！」

「さとりさま！」

少し開いた視界の隙間から、お燐とお空の泣きそうな顔が見える。ついに私は、こいしの幻影を追って二人にまで心配をかけてしまったのか。そう思い、記憶を探れば、ぼんやりと自分のしていたことが思い出せる。

そうなれば、男の声も聞き覚えがあった。ふらふらと歩いて行った先で、声をかけられたような気がする。さとりは腕をどかし、お燐やお空とは反対側へ首ごと視界を向けた。

そこには男がいた。妙な雰囲気の子。白髪の子、左目の中に、何かがある。そこからノイズが混ざって、男の心の声がよく読めない。こんな人間は初めてだった。

「あなたは？」

さとりが聞く。それはいつもなら無意味な行動だったが、様式美は尊重されるべきとはさとの考えだ。もつとも、今回に限ってはそうしなければ、さとりにもこの男の名前はわからなかった。

「蟲師の、ギンコという」

蟲師が答える。ギンコは膝の上に肘を置き、背もたれに預けていた

上半身を起こし、前かがみになるように居住まいを変えた。その様子を見て、さとりはもう一度視線を天井に戻す。ギンコを視界から外した。

「その蟲師が、私に何の用かしら」

お燐やお空が首をかしげる。さとりが会話をするなんて、非常に稀なことだ。ギンコはそんな二人の様子に気づかず、言葉が続けた。

「お前さんだって、わかってるんだろう。俺の心が読めるならな」

「……あなたの心は読めないわ。こんなことは初めてよ。その左目。私の能力に妨害を仕掛けてくる」

「へえ。こりやなんとも、思わぬところでトコヤミが役に立ったな」

「トコヤミ?」

「ああ。俺の左目に住む蟲でね……お前さんら妖怪からは、よく、怨霊のようだと言われている」

「そうかもね。そう言われれば、そう思えなくもないわ」

さとりは上半身を起こす。お燐やお空が手を差し伸べるが、それを手で制した。

そうして上半身を起こして、初めて目に入るのは部屋の隅に立っていた二人の妖怪である。さとりはそれらに目だけで礼をして、ギンコへと向き直る。

「さて、蟲師さんが聞きたいことは、もしかしなくてもその緑の杯のこと?」

「ほう。心が読めなくても、会話の先手は取れるのか」

なら話は早い、とギンコは傍に置いてある桐箱の上に乗せておいた手のひらに納まるくらいの緑の杯を手を取った。

「これは、お前さんのものか?」

ギンコが確認する。さとりはじっと緑の杯を見つめて、答えた。

「そうよ。私が妹からもらったの」

「なら、俺の後ろにいる妹も見えているな」

「へえ、あなたには見えるの?」

さとりは意外そうにそう言った。これまでさとりにはしか見えていなかったこいしの姿を、見るものがいた。ギンコは会話を続ける。

「そこにいるお前の妹は、もう蟲になってしまっている。言うなれば、もう妖怪とも呼べぬ存在というわけだ。そこらへんは理解しているのか」

「ええ。そこにいるこいしはもうこいしではない。それは私にもわかるわ」

からっぽなもの、ときとりは眩く。二人が何について話しているのか、ここにいる半数以上の妖怪に理解ができなかった。その多数に埋もれるのが嫌になったのか、はたまた退屈していたのか、伊吹萃香が口を挟んだ。

「ねえギンコ。私らにもわかるように説明してよ」

「ん？ ああ、すまん。じゃあさとりよ。最後に一つ確認する」

「……なにかしら」

人差し指を立てて、念を押すように、ギンコは尋ねた。

「お前さんの妹は、なんて言ってた」

「……蟲を封じている。無意識を操ることができる私だからできる、と」

「……そうか」

全容を把握したギンコが、ついに地底に至るまでの蟲の話 시작했다。低く重い語りが伸びやかに広がっていく。

「まず、俺は光脈筋で古明地こいしと出会った。彼女は俺に、“妖怪としての自分はここにいるから、体は何か別のものになっている”。“姉の蟲患いを治して欲しい”。と二つのことを頼んだ。俺はなぜこいしがそこにいるのかわからなかったが、その言葉を受けて地底を目指した」

「そこで私に護衛を頼んだわけですね」

「ああ。そしてさとりを診察した結果は……正確には一目見た時点でわかってはいたが、半糸、という蟲に寄生されていることがわかった」
「道中に説明してくれたね。両者の絆を深めるが、一度途切れてしまえば宿主の未来を縛る鎖になる、だっけ？」

「そうだ。さとの半糸の先は、これも当然だがこいしに結びついていた。そしてこいしは、蟲になってしまっていた」

「ここからは推察だが、とギンコは語る。

「おそらく蟲を封じる、というのはこいしが蟲の宴に呼ばれたせいだろう。そして理も、こいしにしか出来ない蟲封じを指示したはずだ。その内容まではわからない。こいしに聞いてみないと。しかしこれだけはわかる。その時受けた杯がもう一つ、この贗作とは別に存在するということだ」

「そうだな？」とギンコはさとりに問いかける。さとりは少しの間黙っていたが、やがておもむろに立ち上がるところで待っていて、と言い残し、部屋を出て行った。

「ねえギンコさん」

「なんだ」

話が中断されたからなのか、美鈴がギンコに質問した。

「私には蟲とか色々さっぱりわからないんですけど、要は覺の姉と妹の間には、切っても切れないようなものがあって、それが二人を引き寄せているんですけれど、妹の方がこの世の住人ではなくなってしまうので、今姉の方も引き込まれそうになっている、ってことでいいんですかね？」

「そうだ。あくまで、こいしとさとりの間だけに観点を絞ればな。だがこの話にはもう一つの側面がある。それはこいしが緑の杯を受けて、どんな蟲を封じているのか、どんな蟲封じをしているのかだ。ここが分からなけりや、さとりは治らないし、こいしもそのままだ」

ギンコは言う。そのままってわけにもいかんだろう。そう、元は彼の個人的な意志でここまでやってきたのだ。今更一人救うも二人治すも同じことなのだろう。

「半糸が寄生するくらい仲を深めた姉妹だ。できることなら、こいしの方も元に戻す術がないか探りたい」

ま、それもこの杯が二つあった時に原因ははつきりする。ギンコがそう言った時、部屋の扉を開けてさとりが戻ってきた。その手には小さな杯がある。それは緑の杯。ギンコの言う通り、杯は二つあった。

「……これがこいしからもらった杯よ」

「ご苦労さん。これでこいしが封じている蟲に見当がついた。だがど

うして封じることができているのかわからない。俺が今から説明するから、お前さんから妖怪の知識で考えてみてくれないか」

ギンコは言う。急に言われた一同は顔を見合わせたが、ギンコはさとりを指名した。

「お前さんはその杯を使って、こいしと直接話している。よく、考えてみてくれ」

さとりはギンコの言葉に頷いた。再び、ギンコの低い語りが広がってゆく。

「こいしが封じている蟲は、おそらく夢野間という蟲だ」

「いめののあわい?」

萃香が疑問符を浮かべる。

「こいつは現実と夢の世界をつなぐ蟲で、宿主の夢の中に棲む。数が増えれば時折夢の中からまくらー魂の倉を通じて外に出て、その時宿主の見ていた夢を現世に再現する」

「すごい蟲だな。夢を現実に、か」

「そうだ。しかも寄生されれば最後、それを払う術はない。確かこいしは帽子をかぶっていたな。そこに夢野間が姿を隠しているんだらう」

本来はまくらに姿を隠す蟲も、妖怪が長い年月頭を預けた帽子にもそれと同じものを見出したと考える。ギンコはさとりに聞いた。

「……どうだ。こういう蟲を、こいしならどうやって現世に出さないようにしていると思う」

「……私は蟲師じゃないから、正確かどうかは知らないけれど、こいしの能力が関係しているのは確かだと思うわ」

「能力、とは」

「無意識を操る能力よ。夢の世界を現世に再現すると言っていたけど、要は夢の世界も関係ない無意識の状態を保持し続けられ、そもそも再現する夢を見ないのだから対処できるわ」

「そうか! じゃあこいしは光脈の側でその能力を使い……」

「件の蟲を封じているのでしょね。なぜこいしが二人になったのかはわからないけれど……」

「それはおそらく、蟲の宴によるものだろう。こいしの体を蟲に近づけることで能力を抽出して、光脈の側に置き続ける事で夢野間が大いなる流れに分解されるのを待っているんだ」

「そして能力からも解放されて、真の意味で意識も無意識も無くなつたこいしは……」

「半糸を手繰り、お前さんのところにやってきた。そして、緑の杯を残し、お前さんを蟲に近づけようとしている。その手には本来の蟲の宴で使用された杯と、自らの意思で夢野間を通じて創り出した二つ目の杯を携えてな」

ここまでで、事の全容がやっと把握できたことに、ギンコは膝を打った。だがその雰囲気の水を差すがごとく、さとりが言う。

「さて、蟲師さんの頭のモヤも晴れた事だし、そろそろ皆さんはお帰りになっていただけるかしら」

「なんだって?」

さとりはそっけなく言う。その言葉に驚いたのは、ギンコと美鈴に、萃香だった。

「もう一度言わなければわからない? 帰れと言っているのよ。これは妹と私の問題。これ以上深い入りされたくはないわ」

「……そうか、お前」

そんなさとりの態度を見て、ギンコが立ち上がる。

「今回の事、治すつもりがないな。半糸も、こいしの事も、全部受け入れる気なのか」

「……そうよ」

「よせ。そんな事をして、誰も救われん。お前を慕っているものだって、ここにはいるんだぞ」

「誰も救われなくて? 私が救われるのよ」

さとりは言う。彼女はこいしと長い時間を二人で過ごしてきた。それはそれは、人間には想像もつかないような長い時間。その間、二人はいつも嫌われ者で、たった二人のみで生きてきたのだ。そして、それが最近一人になってしまった。

「孤独だった。こいしがいなくなつてから、私は身を切られるような

孤独感をいつも味わってきたのよ」

「それは半糸のせいでそう思い込んでいただけだ。気をしっかり持て！」

「うるさい！ あなたに何がわかるのよ！ この杯を使えば、私はこいしにいつでも会える。いいえ、あなたの話を聞いて確信したわ。これを使い続ければ、私はこいしとずっと一緒に居られる。あの光の川の向こうに行けば、私は……！」

その時、さとりの持つ杯に、ひと雫の光る酒が湧き出した。それは次第に大きくなり、杯の中を満たす。ギンコは後ろを見た。そこには笑っている、こいしがいた。

「よせー！」

ギンコが叫ぶ。しかし間に合わない。ギンコの手は、さとりには届かない。

さとりは、ゆっくりと、その杯を傾けた。

第五章 恋し糸愛し夢 陸

さとりがいたところには、緑の杯が落ちる。乾いた杯が無情に立てる音色に、ギンコが慌ててその場に駆け寄る。

「くそー！ 飲み干しやがった」

緑の杯は乾いている。たった今満たされていた光酒はもうない。そう量は多くなかったはずだが、今まで同調していた分もあったのだろう。今まさに、これが最後の一押しとなり、さとりは消えてしまった。向こう側に行ってしまったのだ。

「さとり様！ ねえさとり様はどこに!？」

ペットのお燐が慌てた様子で聞いてくる。無理もない。目の前で主人が突然消え去ったのだ。取り乱すのも当然だろう。さとりがいた場所にしゃがみこんで、無駄だと知りつつも、お燐は必死に赤い床を撫でている。ギンコは努めて冷静な口調で言った。

「……お前さんらの主人は、この杯を使って光脈のそばまで降りてきていた。それはとても危険な行為なんだ。第二の瞼を閉じるなんかよりも早く、体に変調をきたす。半糸で引かれていた分も合わせて、もう向こう側に行ってしまったんだろう」

そんな……とお燐が絶句する。さとりは戻ってこない。少なくとも、自分自身の力では、戻って来たくても戻ってこられないところまで入り込んでしまった公算が高い。

だがこのままにするつもりはない、とギンコは乾いた杯を持って立ち上がった。

「おい。この近くに古井戸はあるか」

「古井戸ですか？ ありますけど……」

「そこに案内してくれ。すぐにだ」

はい、とギンコに促されたお燐はギンコを井戸へと案内するべく立ち上がった。

「どうするんだい？」

萃香が問う。

「あいつが向こう岸までいかなければまだ可能性はある。ほら、お前

も来い」

そう言つてギンコが手を引いたのは蟲となつたこいしだった。側から見れば、その行動は何もない虚空を掴んで歩き出すという滑稽なものだった。

こいしの指先からは長く伸びた赤い糸がある。それはさとりが蟲になりそうな今、結び直されようとざわざわ蠢いていた。

「ここです」

お燐の案内で、ギンコは古井戸にやつてきた。そこにはとある妖怪が住み着いていた。

「キスメ。じやまするよ」

お燐がそう挨拶すると、井戸の中から顔を出したのは桶に入った子供だった。

「おおう、何やらお揃いで、何事？」

「悪いが説明している時間はないんだ。ちよつとあなたの寢床、借りるよ」

「え？」

邪魔するよ、とギンコは古井戸を覗き込んだ。桶妖怪はお燐に引きずり出されて、戸惑っているようだったが、余裕がないのはギンコの方だった。

水脈はまだ生きているようだ。その方で、ぱちぱちと光がハジけるような様が見える。

「よし、井星がいるな」

「いせい？」

ギンコは土色の羽織を脱いで、こいしを井戸のそばに引き寄せた。その手にある半糸を井戸の底に差し入れるように手を出させると、ギンコは疑問符を浮かべる萃香に井星とは何か、説明する。

「井星とは光脈のある井戸の底に、稀に見る現象のことだ。光脈が近いことを暗示する、火花みたいなものだな」

「それが今回の事とどう関係しているんだい？」

「これが見えるって事は光脈がそばにあるって事だ。……ここから光

脈のそばまで行ってさとりを連れ戻す」

古井戸には先の途切れた縄がかかっていた。錆び付いた滑車からそれを取り外し、一端を妖怪たちに預ける。

「俺が下まで降りる。支えていてくれ」

「了解しました！」

妖怪一同を代表して、美鈴が返事をする。そしてギンコは朽ちた縄の片側で輪を作り、そこに自分の片足を引っ掛けた。

「お憐」

「は、はい！」

「この杯を持っていてくれ。そして、こいしをなるべく井戸の縁に立たせてくれ」

「え、でも私にこいし様の姿は……」

お憐がそう言った時、ギンコは大丈夫だと言つて緑の杯を手渡した。

「あ……」

「その杯を持っている間だけは、こいしの姿が見えるようになるはずだ。どうだ？」

「はい……はい！ 見えます。こいし様の姿が……！」

「なら、頼んだぞ。さとりを蟲の世界に引き込んだのがそいつなら、こつちの世界に引き戻せるのもそいつなんだ」

ギンコはそう言い残し、井戸の縁に足をかけた。

「下ろしてくれ！」

「はい！ 行きますよお！」

朽ちた縄が軋みをあげる。ギンコは、この朽ちた縄もまだ一人分の体重なら支えて降りる事ができると踏んでいた。ぎしぎしと今にも千切れそうな縄に体重を預けながら、ギンコはお憐とこいしに見送られ、深い井戸の淵にその身を沈みこませる。

井星のいる井戸。ここから光脈に降り、半糸の一端をたぐつて連れ戻す。ギンコがやろうとしている事は、つまりはそういう事だった。

ギンコの視界に闇が降りてくる。陽の光の届かぬ地底の、さらに奥深く流れる光の川を目指して、現世の身は闇に溶ける。

ギンコを支える地上の妖怪たちは、事の成り行きを心配そうに見守っていた。実際、ギンコ一人分の体重を支えるのなら美鈴一人でも全く問題はない。それよりも事態の急変についていけないのは釣瓶落としのキスメであった。

「ねえねえ、いったい何事？」

「わかんない。さとりさまが消えちゃって、あの白髪の人がそれをどうにかしようとしてるって事くらいしか……」

事態の急変についていけないのは何もキスメだけに限った話ではない。ペットのお空ことれいこうじ霊鳥路 空もその一人だ。そんな二人に、鬼の伊吹萃香が慰めるように声をかける。

「その理解でいいんだよ。蟲師の領分は、見えない私らが知る事じゃない。あの人に全部任せる事以外できないのは、今も昔も、変わらないんだよ」

「？」

二人は首をかしげた。懐かしそうに語る萃香に、今度は美鈴が言葉をかけた。

「そう言えば、萃香さんは蟲師についてよく知っていたようですね。どうしてですか？」

「ふふ、ずいぶん昔の話さ。この伊吹瓢いぶきびょうの作成者が、それこそ蟲師だったってだけさね」

萃香は嬉しそうに、瓢ひょうたん箆を振ってみせた。ちやぶちやぶ、と水音がする。

「ご自分で作ったのではないのですか？」

「作ったのは自分さ。でも、酒虫の存在を教えてくれたのは蟲師だ。当時私らは蟲師の光酒が欲しくてねえ。たびたび襲っていたんだけど、それを解決するために、無限に酒が湧き出る瓢箆ひょうはんなんて謳い文句で蟲師の連中がこれの考案をしたのさ」

再現するのには、かなり骨が折れたけどね、と萃香は言う。もしかしたら、そうして時間を稼ぐ事自体が蟲師の狙いだったのかもしれない。作れもしないような難しい言葉だけを並べ、鬼たちを拘束してお

くのが目的だったのかも知れない。しかしこうして酒の湧き出る瓢箪は完成し、萃香の手元にある。

ずいぶん昔の話さ。萃香はそう繰り返した。

「じゃあ萃香さんはこれからギンコさんが何をしようとしているのかもお見通しってわけですか？」

「それはわからないよ。ただ、やろうとしている事はわからなくもない」

それはなんですか？ と美鈴は萃香に問う。萃香は口の端を釣り上げて答えた。

「あいつは諦めが悪い蟲師だ。私があつてきた中でも一等ね。だから奴は、覺妖怪の姉妹を助けるために動いているのさ」

お姉ちゃん……どうしてここにきてしまったの？

光の川を挟んで、二人が向かい合う。一人は古明地こいし。蟲の宴により自身の体と能力、つまりは妖怪の力を乖離させ、第二の瞼を閉じ続けることでその身を夢野間と共に光脈のそばに置き続ける者。唾の広い帽子の下は暗闇になっていて、もう二度と、光を見ることはない。

こいしに……会うためよ。

光の川を挟んで向かい合う。もう一人は古明地さと。蟲の宴により能力が乖離して、自分を求めて彷徨ってきた蟲のこいしを受け入れて、緑の杯を受けた者。その身は蟲に近づき、もう現世の者では連れ戻すことは叶わない。

「……こんなことにはなつて欲しくなかったんだけどなあ」

「何を言うの。私はこれで良かったと思っっているわ。こいしと一緒に、この場所で二人で生きて行く。素晴らしいじゃない」

盲目的に、さとりは語る。すでに盲目の少女は、それは違ふと首を振る。

「違ふ、違ふよ。そんなことは幸福じゃない。どうしてここにきてしまったの？ お姉ちゃんなら、気をしっかり持つてくれると思っ

たのに」

「私は正気よ？　いっだってこいしのことを考えている。あなた、一人じゃ寂しいんじゃないかと思ってるね。現に私のところにやってきたじゃない。恋しがっているのでしょうか？　私、すごく嬉しかったんだから」

「それは蟲の私。本当の私じゃないの。本当の私はここにいる。お姉ちゃんには無事でいて欲しかったっていう私があね」

でも、それももう遅いか、とこいしは呟く。こいし、と言って、さとりは踏み出す。容易には渡りかねる光の川に、一步踏み出す。しかし。

「行かせんよ」

踏み出したさとりの手を掴むのは、ギンコだった。さとりは驚いて振り返る。対岸ではこいしも、驚いたように顔を上げた。

「驚いたわ。こんなところまで付いてくるなんて」

「わかってんならさっさと戻るぞ。光の川に入れば、もう二度と戻っては来れない。半糸が繋がっている今しかないんだ」

そう言っただけでギンコは強引にさとりを引き戻す。さとりは抵抗するが、その足取りは弱く、もろい。蟲に近づいている彼女に、ギンコの力を振りほどく術はなかった。

「いや、帰りたくない！　こいしー！」

「しっかりしろ！　お前さんの帰るべき場所はこっちだ！」

「こいしー！」

「……ありがとう、ギンコさん」

こいしの短いお礼に、さとりの声が重なった瞬間、二人は水の中に投げ出された。

息ができない。水の中にいる。魚でも山椒魚でもない二人は、至極当然に空気を求めて上へと這い出した。

「ぶはあー！」

「げほげほー！」

そこは古井戸の底。ギンコとさとりは光脈の縁から戻り、半糸をたぐって地底へと舞い戻った。ぽっかりと空いた上空の穴から、覗き込んでいたお隣が叫ぶ。

「大丈夫ですかー！」

「お、おう！ 引き上げてくれ！」

「こいし……」

ギンコの腕の中ではさとりが力なくしな垂れかかっている。朽ちた縄では二人分の体重を支えることができない。一人ずつ引き上げようにも、さとりの脱力を想定していなかったギンコは、さてどうしたものかと思いを巡らせた。

そんなギンコの目の前に、小さな手が差し出される。それは井戸の上から伸びてきていて、それはそれは長い腕だった。長い腕はギンコの服の首根つこを手探りで探り当て、掴みかかると、ものすごい力で二人を地上へ引っぱり上げた。

「うおっ」

驚く間も短く、さとりを傷つけぬよう腕の中にしっかりと抱いたまま、ギンコは背中から地面に落ちた。

「二名様ごあんなーいっと」

「はあ……なんとか、なったか」

「さとりさまー！」

ごろり、とギンコの腕の中からさとりが転げ出る。気絶してしまっただようだ。その水死体のごとき挙動に、お空が血相を変えて近寄る。

「さとりさまあー！」

「落ち着け！ ……、気を失ってるだけだ」

ギンコは呼びかけつつも、さとりの表情を見た。顔色は悪いが、呼吸は規則正しく行われている。それよりもギンコは、この娘の心にある固執のようなものの方が気になっていた。

こいしを前にした時の取り乱し。半糸によるつながり、蟲になる事を受け入れようとするその精神状態。

ここから先は、本当に立ち入るべきではないのかもしれない。ほとんど衝動的に引き戻してしまっただが、井戸の水をかぶったこともあつ

てか、ギンコの頭も冷静になってきていた。

ギンコは思い出す。さとりの言葉を。私と妹の問題なのだから、深入りをされたくない。

ギンコは思い出す。自分の言葉を。個人的な理由で、調べているだけさ。

ギンコは思う。このまま首をつっこむのなら、それは覚悟をしなければならぬということ。さとりという少女が持つ闇に触れる、その行為を、ギンコはもう、戻れぬところまで踏み込んでいた。

第五章 恋し糸愛し夢 漆

さとりはまた、見慣れた天井を見て目を覚ました。視界いっぱい
の深紅を見て、ああ、と何かを嘆いた。

ここは自分の寝室。今度は気絶する前の記憶も鮮明で、寝たままの
姿勢で首だけを動かせば、白髪の男を見る。

「……目が覚めたか」

いつかも聞いたその台詞に既視感を覚えつつ、さとりは天井に視線
を戻して、ええ、と素っ気なく言った。

「お前のペットたちには席を外してもらっている。もつとも、部屋の
扉のすぐ近くにはいるだろうがね」

「そう」

「あとお空とかいう鴉天狗みたいなあいつ。服乾かすだけだったのに
俺ごと燃やそうとしてきたぜ。ちゃんと躡っておけよな」

「あら、そうなの。あとでござ褒美ね」

「おい」

ギンコは目の前に太陽でも生まれたのかという先の光景を思い出
し、頭を抱えた。

ギンコがさとりと二人きりになったのは、何も世間話をするため
ではない。嫌がるさとりを現世に引き戻したギンコは、覚悟を決めて聞
いた。その覚悟を、蟲となった古明地こいしが見守っていた。

「目を覚ましたのなら、改めて聞いておく。お前さん、半糸を断ち切る
気はあるのか」

「ないわ」

抑揚のない声で、さとりは断じた。そして上半身をゆっくりと起こ
し、手の小指に巻き付いたそれを愛おしく撫でた。

「これはこいしとの繋がりによ。断ち切るなんて選択肢、あるはずがな
い」

「それが、妹の形をした異なるモノだとしてもか」

「……こいしはこいしよ。他の何物でもないわ」

「お前をそこまで固執させる理由はなんだ。妹を蟲にしてしまった引

け目か。それとも……」

「あなたには関係ない。言ったでしょ？　これは姉妹の問題よ。深入りして欲しくない」

さとりはギンコをにらんで、拒絶する。しかしギンコはその視線を受け流し、据わった目でさとりを見つめた。

「……俺はもう十分深入りしたよ。お前さんを光脈のそばから引きずり戻した時からな。だからこそ、ここで終わるわけにはいかない。お前さんには、絶対に治してもらおう。これは俺の覚悟だ。こいしも、それを望んでいる」

「……皮肉な話ね。覚悟を決めたなんていう人間の言葉を、私たちが覚が信じなければならぬなんて。心が読めないのは、やっぱり不便だわ」

「面倒臭がつてんじやねえよ。伝えるべきことを伝える口なら、誰にでもあるだろ」

ギンコは口の端を釣り上げた。さとりの無言にかぶせるように、ギンコが会話をつなぐ。

「そういやお前には、半糸の特性をしつかりと説明してなかったな」

「半糸って、この指に巻き付いた糸のことでしょう？」

「ああ、それは仲を深めた二者の間に寄生する蟲だ。想いを伝え、心と心をつなぐことで他者との間にある承認欲求を満たし、宿主に強い幸福感をあたえる。そうして満たされた心の隅を、食べて生きる蟲だ」

「まるで覚のような蟲ね。ますます愛着がわいたわ」

さとりは自嘲した。その自嘲に、ギンコは真面目に言葉を返す。

「そう仕向けることが、蟲の特性だとしてもか。それに、心が通じ合うといつても、都合のいいことばかりを伝え合うのがこの蟲だ。お前さんも、そんな都合のいい夢を見させられているんだぞ」

「……」

ギンコの言葉に、さとりは返さない。黙り込む。

さとりの半糸は先の件で緩くこいしと結びついた。ギンコの言うように、強い承認欲求が満たされつつある。こいしが私を慕ってくれ

ている。少し前までは不安定で、おぼろげだった彼女の気持ち、手に取るようにわかる。そういう確信がある。

「覚妖怪がどこまで人の心を読めるのか知らんが、それは清濁併せ持った心の美醜をそのまま受け取ることだと聞く。半糸の見せるものは清流のせせらぎだけだ。淀んだ川の淵を見続けたお前にとって、さぞ美しいものに映るだろうさ」

「そこまで理解していてなぜ私の行動を止めるの？」

「それが幸福ではない、と俺も思うからさ」

ギンコのその言葉は、さとりが光の川の縁でこいしに投げかけられた言葉とよく似ていた。綺麗なものを見て生きることが幸福じゃない？ 醜いものを、ゲテモノを食べて生きるのが真の生だとも言うの？ さとりは問いかける。問いたです。

「幸福なんて、あなたに決められることじゃない。これが私には最良なのよ」

「お前は盲目になろうとしているだけだ。最良かどうか判断する、その物差しをへし折ろうとしてんだよ。見たくないものまで見えちゃうその心を、閉ざしたいとでも思ってたのか」

「あなたに何がわかるのよ！」

さとりは激怒した。

「こいしとのつながりを失ってしまった時の私の気持ち！ あなたにわかるはずがない！ あの時の喪失感を、あなたに理解できるはずがない！ 心を閉ざしたいですって？ ええそうよ！ 私もこいしのように心を閉ざして生きていきたい！ 心の美醜が見えるなんて、もう耐えられないのよ！ あなたにはわからない。心が読めないからって、きれいごとで私を騙そうとしてんじゃないわよ！」

「……」

「つながりが断られたことなんて、蟲以前の問題よ！ こいしは心を閉ざしてしまった！ 私にはもう、あの子の心がわからない！ これしかないのよ、これしか！」

さとりは自分の手につながる赤い糸をギンコの目の前に掲げてみせた。小さな手を目一杯開いて、見せつけるように眼前に晒す。その

手は、震えている。

ギンコはその小さな手に、そつと自分の手を添えた。

「……それがお前の固執か。人の心が移ろいやすく、醜いものだと知っているからこそ、半糸のつながりに固執する。妹が心を閉ざし、覚妖怪として不完全になってしまった不安に、つけ込まれているんだ」

ギンコは薄く繋がった赤い糸の先を見る。そこには、覚りの言葉を聞いていたのかいないのか、虚ろな目で立ち尽くす古明地こいしの姿がある。まるで夢でも見ているかのような佇まいだ。

「……あのこいしは、意識も無意識からも解放された、本当の意味でのこいしの本能だ。経験だけに裏打ちされた、嘘偽りない情報だけが、あの体に残っている」

ギンコは語る。重く、重く。低く、語っていく。

「あそこにあるのはこいしの根だ。これまでを生きてきた経験だ。それが半糸をたぐってお前のところに来たってことは、こいしはたとえ蟲になっても、お前のことだけは忘れていなかったってことなんだよ」

「え……？」

「半糸は強い感情を伴う蟲だが、その大元はやはり、人の心にある。その心がないところのお前の妹が、なんでここまでやってこれたと思う？」

「……」

ギンコはさとりの手を握った。いつか姉妹でこうしてやったことがあっただろう、手をつないだことがあっただろう、とギンコは言う。「覚えてるんだよ。お前と手をつないでいた時のことを。確かに繋がっていた時のことを。その記憶が、幸福感に繋がっているんだ」

それは強烈な記憶。蟲が巢食うほどの感情の本流。姉を思う、妹の気持ち。

「あいつは心を閉ざしても、お前のことを忘れちゃいない。大きな心の繋がりを断たれて、不安に思ったかもしれないが、それだけは、誠の心だ」

だから自暴自棄になるな。半糸なんてなくなつて、お前たちはちゃんと繋がっている。ギンコの言葉はそこで静かに、部屋に溶けていった。

さとりはこいしを見た。それは虚ろな目。意識もはつきりとしな
いその妹が、赤い糸だけを頼りにさとりを訪ねてきた。さとりはその
事実には、静かにそつと、布団を濡らした。

「半糸の治療を、受けるな？」

ギンコの問いかけに、覚はしばらく黙り込んでいた。すすり泣くよ
うな声でうつむき、布団を濡らして長い時間が経った後、ギンコの手
を握り返し、さとりは小さく頷いた。

「ちぎれた半糸の治療は一つだ。ちぎれた一端を、それぞれ別の糸と
して考え、お互いの手に結び直すこと。繋がりが二つになった半糸は
混乱して、二人の間から離れていくはずだ」

ギンコの言葉に、さとりは頷いた。固唾を呑んで見守るのは地霊殿
のペットたちと、ギンコに同行してきた紅美鈴に伊吹萃香である。

ここは地霊殿の中庭。紅魔館のように華やかさはないが、質素に整
えられた箱庭的雰囲気のある場所である。

蟲となったこいしはギンコとさとりの二人以外には見ることがで
きない。さとりのしようとしていることが見えない萃香は、もっぱら
の興味をギンコに向けていた。

「よう色男。どうやってさとりを口説いたんだよ」

「不思議ですよねえ。あんなに頑なだったのに」

「俺じゃねえよ。さとりの固執を解いたのは、あいつさ」

そう言つてギンコはこいしを見る。相変わらず夢でも見ているか
のような佇まいだ。

さとりは自分の指から伸びた半糸を、こいしの指に巻きつける。そ
してこいしの指から伸びた半糸を、自分の指に巻きつける。後者は苦
戦を強いられたが、なんとか結ぶことができた。

さとりはギンコを見る。ギンコはその視線を受けて頷いた。

しばらくもしないうちに、半糸がざわつき始める。糸のようだった儂い姿は膨張してミミズのようになり、二人の間から溶けて消えるように、空中へと霧散した。

「これで、いいのよね……」

「ああ、ぐっ苦勞さん」

吹っ切れた表情のさとりと、ギンコを交互に見つめているのはさとのペットたちだ。もう大丈夫だ、とギンコが言えば、そこには静かな歓声が沸き起こり、お燐とお空も、さとりの元へと駆け寄っていた。

「これで一件落着いてわけですね！」

「いいや、これで半分だ」

小君のいい音を立てて平手を合わせた美鈴に、ギンコはそう呟く。その言葉を、ペットたちにもみくちやにされながら、さとりも聞きつけていた。

「そうね。半分、かしら」

「え？ でもさとりさんのことを引きずり込もうとしている蟲はもういないんですよね？ じゃあ何が残っているんです？」

美鈴の疑問に、答えるような態度を示したのは古明地さとりだった。ペットたちをやんわりと遠ざけ、ギンコへと歩み寄った。

「蟲師のギンコさん。この度は一身上の都合により、多くご迷惑をおかけしました。このお礼は後ほど必ずいたします」

「ああ」

「それで、先ほど半分と申し上げたことなのですけれど……お願いできませんか？」

「かまわんよ。俺は」

少し話についていけないのはギンコとさとりを除いてほか全員だった。

さとりが頭をさげる。そしてギンコに向かって、ある依頼を口にした。

「ではギンコさん。こいしのこと、姉としてよろしくお願い申し上げます」

「承った。妹の方も、なんとかしよう」

まあ、むしろこっちが本命だったんだがな、とギンコは頬を掻いた。二人の周囲も、得心がいったようにざわめき始める。

ギンコときとりが半分といったのは、古明地こいしの存在のためだった。彼女は今も、光脈のそばでとある蟲を封じている。

「で、あてはあるのかい？」

真つ先に聞いたのは萃香だった。腕を頭の後ろで組み、口元には笑みを浮かべている。

「うーむ、正直夢野間を封じているのだとすれば、五分つてところか。緑の杯を使って連れ戻しても、目が見えないのは不便だろうしな……」

ギンコは色々と考えを巡らせているようだった。顎に手を当てて、気だるげともとれる眼光を鋭く何かに向け、考え、唸っている。その様子に、誰かがが見とれていた。

「とりあえず、光脈のそばまで降りて行ってからだな。こいしはいつも光脈の対岸にいるが、井戸を使えば多少は長く話せるだろう」

「さっきの井戸かい？」

「ああ。ただでさえ地底という場所に加え、あの井戸はかなり深く、光脈のそばまで降りている。井星の数も多かった。長くいると引き込まれるが……俺なら大丈夫だろう」

それじゃあ、とギンコは井戸へと足を向けた。その後ろ姿を目で追うものがある。その娘の尻に平手を打ち込み、萃香はニヤリと笑って見せた。

第五章 恋し糸愛し夢 捌

「お、また来たね」

「ああ、今度は、お前さんを助けに来たんだ」

「あはは、お兄さんも好きだねえ」

恋しちゃった？　なんて茶化してくるこいしに、ギンコはバカ言え、と笑って返した。

ここは光脈の縁。流れる光の川を挟んで、二人は向かい合っていた。

光脈のそばで、こいしは夢野間を外に出さぬように封印していた。その方法は、夢野間が取り付いた現世の自分ごと無意識という夢の世界に引きずり込み、夢野間の出口をなくすというもの。

ちように鏡合わせな構造とでも言うのだろうか。夢が覚めても夢の中。無限に続く夢の中。そういう状況を、こいしの能力は作り出していた。

「自分の心を無にして、思うことをやめる。そうすることで無意識を操り、夢野間の出口を隠して煙に巻く。蟲に対してその身一つでここまで抗えるなんて、お前さん、天敵みたいなもんだな」

「褒めてくれてありがとー」

まったく、都合よくできている。あるいは、理がこいしの夢に蟲を誘導したのかもしれない、とギンコは思った。

こいしが作り出すその世界を安定させるのには、この現世と蟲の世界の狭間である光脈のそばが最も適していると言えた。そして出口を失った夢野間は、この堂々巡りの世界で光の川に徐々に引き込まれつつあった。

ギンコはそこまで考えて、こいしの帽子に目をやった。おそろく、帽子を巢にしていた夢野間のほとんどは光の川に分解されて流れ出てしまっているだろう。だが、最後の最後。こいしの頭の奥底に巢食った夢野間だけはどうすることもできない。それはこいしの妖怪としての部分が完全になくなり、夢野間と同じ存在になってしまうことを指すためだ。そうなってしまっはもうどうしようもない。

「まずはお姉ちゃんのこと、お礼しなきゃね。ありがとう、ギンコさん」

「それは前にも聞いたぜ。お前さん、もう長いことここにいるようだが、現世には自分の意思で戻れんのか？」

「どうだろう、わからないや。けどきつと頭の中の蟲も一緒だよ？」

確認の意味で、こいしは首をかしげた。それでいい、とギンコは言った。

現在こいしは純粋な妖怪としての存在がここにいる。現世を歩き回っていたのは、蟲としてのこいし。正確には半糸に引きずられた、夢野間の封印に必要なない、こいしの経験とでも言うのか。それが蟲の気を帯びて、かなり近いところまでいってしまっていた。ギンコが懸念したのは、そんな風に能力を使うため、自分を別れさせたこいしが、元の存在として現世に戻れるのかということだった。

ギンコは懐に忍ばせていた本物の緑の杯を取り出し、それをこいしに放って渡した。

「そいつを光脈に還元すれば、お前の任も解かれるはずだ」

「そんなに簡単なことなの？」

「理に強制力はない。ただ、あるがままをあるがままに取り戻す調和こそが彼らの役割だ。お前が任を離れる意思を示したなら、また別な方法で干渉してくるだろうさ」

そうなる前に、お前さんの中にいる夢野間をどうにかしなきゃな、とギンコは言う。

「何か考えがあるの？」

「ああ、ひとつ、思い浮かんでいる対処法がある。お前の姉にも協力してもらおうやつでな」

……そろそろまずいな、と言ってギンコはこいしに背を向けた。

「俺が戻ったら、姉さんと一緒に待ってるぞ。蟲のお前は、半糸が途切れた今、お前が現世に戻るための依り代となるはずだ。早く帰ってこいよ」

「えー。でもここにいないと頭の蟲が……」

「俺を信じろって。もしダメなら、姉に恨み殺されるのも覚悟でお前

を蟲にしてやるよ」

「あはは、それ本当に殺されそうだね？」

「はは、笑いごとじゃねえな」

そこまで言って、ギンコは真顔になった。こいしを元に戻す方法は、今の所ない。ギンコが考案した対処も、推測による所が大きかった。ダメでもともとではあるが、対処が失敗すれば、時間の許す限り別の方法を模索するつもりでいた。

もう光を見過ぎてしまったせいで両目もなくなったこいしは、耳だけしか聞こえていない。そういえば、とギンコが思い出したように言う。

「お前、いつか俺の心を読んてたよな」

「ふふ、ここは半分私の世界。それくらいなら簡単なことよ」

なるほど、どうりで、とギンコは呟いた。相手は妖怪だ。深くは考えないようにした。

こいしは納得したギンコを見て、うん、と頷いた。

「じゃあギンコさんのこと、信じてみようかな」

こいしも気軽に、そう言った。

おう、とギンコは受けて返し、光の川を離れ、一人闇へと消えて行った。

ギンコが井戸の底から戻ると、またお空が核融合の炎を出して待機していた。服を乾かすだけだというのに、皮膚と髪が焦げそうになる。お空は大丈夫だというが、これがものすごく熱いギンコにはたまったものではなかった。

「だいじょうぶだいじょうぶ」

「大丈夫じゃねえ、あつっ！」

そんな様子を楽しげに眺める姿があった。憑き物が落ちたような表情を浮かべて、こころごと表情に笑みを浮かべるのは古明地さとりである。左手に緑の杯を持ち、右手でこいしの左手をしつかりと握っている。

身体中から蒸気を立ち昇らせるギンコの元へ近づいていき、聞いた。

「それで、ギンコさん。妹はどうでした？」

「ああ、特に問題はなさそうだった。おそらく俺の考えている方法で夢野間を体外に出すことができるだろう」

その、贗作の緑の杯を使ってな、とギンコは言った。

井戸の前には古明地姉妹をはじめとして、ペットたち、伊吹萃香と紅美鈴が集合していた。ギンコが考える蟲封じを見届けるために集まったものたちだった。

「へえ、それを使うんだ」

その言葉に、その場にいた全員が一人の方を振り向いた。そこには古明地こいしが立っていた。

「……早めに戻って来いとは言ったが、早すぎないか？」

「え？　だめだった？」

「いや、そんなことはないが」

「ならいいじゃない。早く始めちゃってよ」

「せかすなよ」

こいしの姿は、今や全員に見えているようだった。妖怪としての力が戻り、存在が濃厚になったためだろう。ギンコは早速、考えていた蟲封じ……この場合は蟲下しであろうか……それを試すことにした。

ギンコを見つめるのは古明地さとりである。ギンコはその視線を受けて、頷いた。

「こいし」

「お姉ちゃん」

「これを飲んで」

さとりがそう言って差し出したのは緑の杯である。これはこいしの経験が作り出した贗作だ。本物の杯はもう、光脈に還元されている。

差し出された杯の底に、ぷつつ、と水滴が生じる。光る酒が湧き出す。杯いっぱい光酒が満たされる。それを、さとりはこいしに勧め

た。

「これを飲めばいいの?」

こいしはさとりに聞く。さとりはこいしの言葉に頷いた。こいしはさとりを見た後、ギンコを見た。

「そいつを飲んで酔いつぶれてくれ」

「そんな簡単に酔えるかなあ」

「それは私が保証するよ。勇儀があんなになっっていたんだもの。お前なら一発さ」

「贗作なら、光酒の純度は低いはずだから蟲にまではならんだろう。お前たち妖怪は蟲に近い雰囲気を持っているが、だからこそ線引きが明確にされている。大丈夫だ」

ギンコはこいしに勧めた。こいしはそんなギンコの言葉を信じ、杯を受ける。

一口、また一口と杯を傾けていく。やがてこいしの頭が大きく振れた頃。ふらつくこいしの体を、さとりが受け止めた。

「ギンコさん」

「よし、そのまま寝かせるぞ」

「でも本当に大丈夫なのかい? 夢野間とやらは夢を現世に媒介するんだろう?」

ギンコはこいしの体を抱きあげながら、萃香の言葉に答えた。

「ああそうだ。普通に眠ったのでは、その夢の世界が再現されることになるだろう。そしてその時、夢野間は夢の世界から現世へと出てくる。その副作用が、夢の再現だ」

「じゃあ危ないんじゃない」

「まあまあ、まずはこいしを寝かしつけてからだ」

そう言っただけでギンコは土色の羽織を地面に敷き、その上でさとりを正座させた。そしてさとりの膝の上に、こいしの頭を預けるように寝転がらせる。ちょうどさとりがこいしに膝枕をするような格好になった。

「夢野間は枕を媒介にして、宿主に寄生する。しかしその影響力は不思議と一人の宿主に絞られる。人から人への感染はできないんだ。

なら、枕が生き物であった場合、夢野間は媒介を失って、完全に体から抜け出るはずだ」

ギンコの語りが不思議な響きを持って周囲に響いていく。

「幸い、こいしがしていた蟲封じのおかげで帽子の中の夢野間は光脈に飲み込まれている。後は少しだけ残った頭の中の蟲だけだが……こればかりはどうしようも無い」

「どうしようも無いってのはどういう意味ですか？」

美鈴がギンコに問う。

「夢野間はおそらく、膝枕に混乱して現世へとでてくるが、今回の一回限りは影響を免れ無いということだ。どんな夢を見るのか知らんが、ま、賭けだな」

「ええ!? 結構危ないじゃ無いですか」

「そう言うな。こいしが良い夢を見てくれるのを願って、俺らも昼寝しようぜ」

果報は寝て待て。よっこいせ、とギンコは地面に腰を下ろした。

飄々とした態度のギンコだったが、実を言えばこの時、相当に体力を消耗していた。生身の体で二度も蟲の世界に足を踏み入っていたのだ。無理もなかった。

さどりの膝の上で眠るこいしを見守る。さどりは慈しむような態度でこいしの前髪を梳いていた。

やがてこいしは夢を見る。ざわり、とあたりの蟲が騒ぎ出す。ギンコはその瞬間を見た。

それは姉と、確かなつながりを持っていた昔の自分の夢。絆が繋がっていた時の夢。

こいしの手から赤い紐が伸びていく。ギンコにしか見えぬその糸は、さどりの手に結び付いたかと思うと、あとはただ、静かにそこにあるばかりだった。

こいしは短い夢を見た。そして目を覚ました時、どこからか雁の鳴き声が聞こえた。

第五章 恋し糸愛し夢 玖《了》

地霊殿の一室で、ギンコは目を覚ました。ふかふかのベッドというものはギンコの経験上紅魔館で過ごした数日だけで、決して日常的なものではなかったが、悪くない、と思っていた。

地底では時間の感覚も曖昧で、今が昼なのか夜なのかもわからない。ただ自分の主観だけを信じるのだとすれば、よく寝た、とそれだけが確信できた。

ギンコは古明地姉妹の治療に成功した。さとりは途切れた半糸に翻弄されることもなく、こいしの方も自らを犠牲にするような蟲封じをする必要もなくなった。

こいしの頭の中に残っていた夢野間は、さとりの膝枕によつて居場所を見失い、こいしの体から離れて行った。その際に少しだけ影響を残して行ったが、その経過観察をするために、ギンコは数日単位でここ、地霊殿に逗留していた。

ギンコは部屋の中を見渡す。蟲が多くなっている。これ以上、ここに留まるのはまずい。幸いにもギンコが懸念していた蟲の影響はさとりにも現れていない。旅立つなら今だろう、とギンコは思った。

ギンコは身を起こし、ベッドに腰掛ける。ぎしり、とベッドが軋みをあげた。

こいしの中に残っていた夢野間は最後の最後に古明地姉妹の間に半糸を復活させていった。今度は途切れていない、完全な状態の半糸は、二人の間に確かな絆となつて残った。

半糸は、完全な状態ならば宿主の両者で想いを伝え、安心感と幸福感をもたらす。途切れさえしなければ、害はないどころか、二人の間に良いものをもたらす蟲だ。だからこそその経過観察。ギンコはその事実を自分の目で確かめるために、ここに残っている。

とんとん、と部屋の扉が控えめに叩かれる音がした。起きてるぞ、とギンコが言うと、がちやり、とノブを回して、古明地さとりが部屋に入ってきた。

「お目覚めでしたか」

「ああ。そろそろ、ここを立とうと思う」

「まあ、それは急ですね」

蟲が多くなってきたている、とギンコが理由を説明すれば、さとりはそうですか、と納得した。

「今まで、世話になったな」

「そんな。お世話になったのは私たちの方です」

「そうそう。お姉ちゃんがしつかりしないからだよ」

「あらこいし。いたの？」

さとの背後から、ひよこつとこいしが顔を出す。すつかりいつも通りに戻ったらしい彼女は神出鬼没だ。夢野間も抜け出た彼女は、無意識を操る能力でもってギンコたちをからかったりと、すつかり妖怪らしさを取り戻していた。

ギンコは二人の間に繋がれた半糸を見る。こいしが見た最後の夢で、姉妹の間に再び繋がった絆の形は、赤い糸状のものだ。それは人間ならば、いつか途切れてしまう儚さもあつたかもしれないが、妖怪二人の間に渡されたものであるなら話は別だ。

「お前たち二人の間に渡された半糸だが、滅多なことでは途切れんだろう。心配はいらないはずだ」

「ええ。わかりました」

「ふふん。お姉ちゃんとの絆は、そう簡単に切れたりしないってことだねえ」

「ふふ。そうね」

背中から抱きつくように頬を擦り寄せてきたこいしに、さとりはまんざらでもない笑顔を浮かべた。本当に、仲のいい姉妹だ。ギンコは桐箱を持って立ち上がった。

「本当にもう立たれてしまうんですか？」

「ああ」

「まだお礼もできてませんのに……なにかできることはありませんか？」

猫のようにじゃれついてくる妹をやんわりと制しながら、さとりはギンコに聞いた。

「お礼と言ってもな……」

そう言われても、とギンコは頬を搔いた。その仕草を見て思いついたのか、妹のこいしがにやりと口の端を釣り上げた。

「じゃあ私からお礼！　ちよつと耳貸して」

「ん？　なんだ」

姉に一步先んずるように、こいしが歩みでる。ギンコは腰を落として、こいしの頭へ耳を近づけた。こいしはちよつと背伸びをするようにその耳元に口を近づける。

「……ありがとうね」

その言葉が聞こえたと同時に、ギンコの頬に柔らかいものが触れた。それがなんなのか、ギンコからは見えなかった。

ギンコが驚きで身を引くと、そこには悪戯が成功した子供のような笑顔を浮かべるこいしと、顔を真っ赤にしたさとりがいた。

「……そりやどうも」

ギンコは無難に、そう返した。

「ほらお姉ちゃんも」

ギンコの背を押すようにして、さとりと距離を近づける。こいしは口だけで笑っていた。

「む、無理よ無理無理！　そんなこと……」

さとりは狼狽し、ギンコを涙目で見上げている。その瞳は、しなきやダメ？　とでも伺い立てているようで、見つめかえせば、途端に俯いて無言になってしまったさとりに対して、ギンコはやれやれ、と肩をすくめた。

「さとり」

「は、はひー」

「……何狼狽えてんだ。別に望んじやいねえよ。妹の思う壺だぜ」

「うふふ。お姉ちゃんは面白いなあ」

「あ……くうっ」

さとりは握りこぶしを胸元につくり、悔しがる。そんな様子を見て、こいしはとても楽しそうに笑っていた。

古明地姉妹の先導で、地霊殿のなかを進んでいく。その間も、姉妹は手をつないで仲のよろしいことだった。先の件で少々の確執は生まれたものの、べたべたと妹が姉にまとわりつけば、その甘い関係に溶かされていくように、確執は消え去った。

玄関を出ると、そこには地霊殿ペットの代表格であるお燐こと火焰猫燐が、紅美鈴の日課に付き合っていた。その不思議な動きに、ギンコも思わず見とれる。

ここ数日、半糸の経過観察をしている間も彼女は「ギンコさんの護衛は、地底から無事に地上まで送り届けて初めて完遂されるのです！」と意気込んでいたので、ギンコと同じように地霊殿で厄介になっていた。

「違いますよ。そこはもつとこう……ゆーつくりと」

「ゆーつくりと……」

「そうですそうです」

彼女らが行っているのは太極拳という武術であるらしい。お燐が美鈴の日課を見て興味を示したのだから、その手ほどきをここ数日続けているそうだ。

ギンコの存在に気づいた美鈴が手を振る。

「あ、ギンコさん。どうです？ 一緒に」

「いや、遠慮しておく。それより、これから立つぞ」

「え？ それまた急ですね。了解しました！」

美鈴が直立の姿勢をとり、敬礼する。大げさな挙動なのは彼女の癖みたいなものだ。

「本当に、行ってしまっうんですね」

名残惜しそうにさとりが言う。なに、また様子を見に来るさ、とギンコは言った。

「じゃあ、世話になったな」

ギンコが桐箱を背負い直す。がた、という無機質な音が、ギンコの抑揚のない声と重なった。

旧地獄街道を抜け、地上への道、つまりは来た道に戻っていく。その道中で、美鈴はギンコに話しかけた。

「結局、護衛とか言っていましたけれどあんまり活躍の場はなかったですね」

「ん？　そうか？　鬼と一緒に怨霊から守ってくれたじゃねえか」

今回の地底への旅で、美鈴はギンコの護衛として同行した。しかし護衛とは名ばかりで、実際にそれらしい働きをしたのは指折一回という有様だった。

だが、美鈴が言いたいのは護衛としての働きの少なさではなく、ギンコの体質についてのことだった。

「ギンコさんが襲われなさすぎなんですよ。妖怪が誰も近寄ってこないってどういうことなんですか」

そもそも地底という場所は妖怪の土地だ。幻想郷の地上はまだまばらに妖怪の勢力が散り、人が歩ける場所も少なからず存在する。人里なんかはその最たる例だろう。しかし地底は違う。そこは魍魎魍魎の巣窟であり、人など歩けば骨まで残らず、文字通り食い物にされてしまうのが通常と言えた。

だが地霊殿までの道中、地底に入ってからこのかた、ギンコを襲おうとする妖怪に出くわしたことはない。それはギンコの左目に関わることであった。

「……俺もそのあたりは気になってな。さとりに聞いてみた」

ギンコはさとりとのお話を思い出す。

『——ギンコさんの左目には怨霊が住み着いています。名前は……トコヤミでしたっけ？』

『ああ』

『私の見る限りではそれは怨霊と同質の存在でしょう』

『トコヤミが、怨霊だと？』

『はい。ですが、あくまで怨霊と同質と言うだけです。正確には、そうでないのかもしれませんが』

『……』

『彼らは私に語りかけてきます。何人も何人も声が重なって、

あなたの心の様子を覆い隠している。文字に文字を重ねて、墨を上塗りし、ただの黒いモノにしてしまうような』

『だからお前には俺の心が読めないのか』

『ええ。そしてその雰囲気があるから、妖怪たちもあなたを襲わない。それは——』

「——不吉なモノが、俺の左目からは感じられるから、だそうだ」

「ああ、確かに。ギンコさんを見てると、なんかぞわぞわします」

「やっぱりそうなのか？」

ギンコは自分の左目に意識を向ける。記憶をなくし、常に月の出ている森を彷徨って、自分をギンコだと思った時には、眼球の代わりにそこに居ついていたモノ。

さどりの言うように、トコヤミは怨霊と同質なモノなのかもしれない。だから怨霊が近づくと、疼くように暴れるのだろうか。ギンコにはまだ、よくわからなかった。

ギンコが黙考していると、美鈴が失言したかと思って、取り繕うように手を叩いた。

「ああでも、ぞわぞわってというのは第一印象ってだけで、こうして話しているとは不快感とかそういうのがあるわけではなくてですね」

「ああいや、気にしてねえから、気にしなくていいぞ」

あ、そうですか？ と美鈴は安堵した。

そうして歩きながら、美鈴は話題を変えるように、笑みを浮かべた。

「しかしギンコさんも隅に置けないですよねえ」

「なにがだ？」

「さどりさんのことですよ。かなりいい雰囲気だったじゃないですか」

「……お前さんがなにを言っているのか、俺にはわからんね」

「またまたあ」

美鈴はギンコの前に回り込み、手を後ろに回して悪戯っぽい笑顔を向けた。

「咲夜さんもギンコさんのこと、気に入ってましたよ？ よつ、色男！」

「やめろ。そんなんじやねえだろう。あいつらは」

「いやいや、咲夜さんはそうかもしれないませんが、さとりさんは絶対そうですって。心が読めない相手なんて、新鮮かつ得難い相手じゃないですか」

「……この話はここまでだ」

「あー逃げましたね。もうー!」

美鈴は楽しそうに笑って、ギンコの肩を叩いた。いて、とギンコがつぶやいた。

なおも追従する美鈴の言葉をぶつりぶつりと切っていくと、いつか通った橋が見えてきた。地上までもう少しというところ。その橋の上で、見知った顔が酒宴を催していた。

「おーギンコじゃないか」

「ん。萃香か。まだ地底にいたんだな」

すでに酔いが回っているのか、萃香は赤ら顔でギンコに手を振った。

「まあね。てか気づいてなかった? 私はずっと地霊殿にも顔出してたんだよ? 霧状だったけど」

「んなもん気づくかよ。薄く広がられたら、お前の気配は蟲と区別がつかねえんだ」

その酒宴には三人の出席者がいた。萃香を入れてあと二人は水橋パルスイと星熊勇儀である。

しかしギンコが目を奪われたのは萃香が傾けている杯だった。右手には緑の杯。三人は光酒を回し飲みしているようだった。

「……おい。お前、俺の荷物の中から勝手に盗ったな」

「んー? 借りてるだけだって。あとで返すつもりだったよ」

「おいすいか。つぎわたしだぞお!」

「一人酔い潰れてんじやねえか。もうやめろよ」

ギンコは萃香から緑の杯を取り上げようとする。しかし萃香は抵抗した。

「あーパルスイ。こいつだよ。さとりには好意向けられてるって話したの」

「ここでもそんなこと着にしてんのか！」

「あー……妬ましいわねえ！」

ぐお、とギンコが組み伏せられる。頬を酒で赤くしたパルスィに押しさえつけられ、ギンコは緑の杯を取り逃がした。

「酔い潰れているの、一人じゃなかつたみたいですね」

「見てねえで手伝え！ 護衛だろ、お前！」

「門番もどうだい？ 一献」

「え、いいんですか？」

「飲んでんじゃねえよ！ おい！」

「ああー！ 妬ましい！」

「やかましい！」

地上を目前に、ギンコは妖怪たちの酒宴に巻き込まれた。地上への道のりはひどく、遠そうだ。

第六章 雨のたつ巳

第六章 雨のたつ巳 壺

幻想郷のとある一角。此岸しがんと彼岸を分ける場所。三途の河と呼ばれるそこには、陰気な雨が降っていた。

此岸のほとりにには苔むした岩が突き出し、薄く深く、濃淡のある霧があたりに立ちこめている。この霧のせいで、彼岸までを見通すことができない。もつとも、それ以外の理由も多分にあるのだが。

とにかく、霧が一層ひどくなり、雨まで降っているのが今の三途の河の現状だった。

風のない雨。しとしとじわじわと、綿から染み出すような、霧雨と五月雨の中間をいくような、不可解な雨。三途の河に霧がかかっているのは平常運転だ。問題はこの雨のほうで、普段ならば三途の河に、雨など降らない。これははつきり言って、異変であった。

「嫌な天気だねえ」

職務の象徴たる大鎌を赤い番傘に持ち替え、雨をしのいでいた死神の小野塚おのつか 小町こまちは呟いた。

彼女は此岸から彼岸までの渡し守りをしている死神だ。たとえ雨が降ろうと、槍が降ろうと、小町の業務は変わらない。今日も彼岸を目指す幽霊たちから渡賃を受け取り、舟を漕いで川を行く。そうしなければならぬ立場だった。

そうして変わらず歯車の如き働きを期待されている小町の元には、やはり幽霊がやってくる。小町は腰掛けるのにちようどいい岩に座り込み、大げさにため息をついて見せた。

「はあく。こんな陰気な空模様だと、やる気も気力も削がれるっもんさね。ましてや相手をするのは陰気の塊みたいな幽霊ばかり。お姉さんはもう少し華のある職務を希望するよ」

「陰気ですみませんね。死神さんは転職を希望してるんですか？」

「絶望しているだけさ。通らない希望なんて、絶たれた望み以外の何物でもないだろう？」

幽霊は小町の言い分に、なるほど、と手を打った。

幽霊はまだ十ほどもいかない子供だった。幽霊であるということ
を差し引いても病的な白さを持つ腕は、力をかければすぐに折れてし
まいそうなくらい華奢で、肩幅も小さくなで肩のくせに、背丈だけは
ひよろりと長い、全体的に不健康そうな若者だった。

「お前具合悪そうだな。大丈夫か？」

「ご心配なく。生前は病に冒されていましたが、死後にその苦しみは
ありません。健康な幽霊ですよ」

「明るいけど陰気なやつだなあ。空模様と一緒に、拍車をかけてくる
んじゃないよまったく」

「そんなこと言われましても。次は僕の番でしたので」

幽霊は小町の理不尽なまでの小言に苦笑いで応えた。自分が陰気
だということは理解しているらしい。そういうところは明るいなあ、
と小町は言った。

幽霊は首から下げた頭陀袋の中から全財産を取り出して、小町へと
差し出した。

「渡し守りの死神さんですよ？ 彼岸までお願いします」

「まあまあそう急ぐんでないよ。私はついさつきも彼岸まで渡してき
て疲れてるんだ。ちよつと休憩」

「はあ」

小町は膝頭に頬杖をついて、差し出された渡賃を無視した。幽霊は
仕方なく、その手を引っ込める。ちやり、と小銭が擦れる音がした。

「お前さんも座つたらどうだい。濡れもしないだろうし、その辺の苔
を座布団にしてさ」

「別にこのままでもいいですけど。生前は寝たきりだったので、立つ
ていられるってのも新鮮なんです」

「そうかい」

しとしとと雨が降りしきる中で、幽霊は立ち尽くす。彼らに肉体は
ない。雨粒も、よく見れば彼らの体を通り抜けているようで、着込ん
だ白装束も濡れている様子はなかった。

死んでから肉体的な自由を手に入れるなんて、文字通り皮肉な話に

もなりはしない。だからなのか幽霊は、話題を変えるように空を見上げた。

「しかし、三途の河にも雨が降るんですね」

「普通は降らないんだよ。なんで降ってるのか、私にもわからない」
え？ そうなんですか？ と幽霊は小町の言葉に疑問符を浮かべる。

「三途の河に天候の変化はないんだ。それは冥界やら天界が一部重なっているせいでもあるんだけど、何より境界として存在するここに、変化は訪れないのが常識つてもんさ」

小町は番傘の柄で、苔むした地面に一本の線を引く。土がえぐれて、半円柱状のくぼみが、畝のように掘り込まれる。小町はその線を見て言った。

「線は線。それ以上でもそれ以下でもない。曲がったり、途切れたりするけれど、何かを流転させる舞台にしては、器が小さすぎる。変化は必ず、線の内か外かで起こるもんさ」

「はあ、なるほど」

いまいちピンときていない幽霊は、曖昧な相槌を打った。

小町が引いた線の底に、雨水がたまっていく。それは今の三途の河を表しているようだった。

「でも雨は降っている。それがどこに行くのかは知らないけれど、今、三途の河の底に溜まっていることは確かだね」

「川底に水が溜まっているんですか？ なんか奇妙な言い方ですね」

「三途の河の水はただの水じゃない。水に見えるけれど、これらは全部、境界としての川っていう概念みたいなもんだからね。本当の水は、ここには一滴もない。じゃなきや、川幅が自由自在に変えられるもんかね」

でも、と小町は前置きして、少し空を見上げた。

「この雨は違う。普通の雨とも言い難いけど、それでもこれは、水だ。物体の域を出ないものなら、三途の河には浮かばない。だからきつと、雨は川底に溜まっている」

「何か良くないことが起きるんでしょうか？」

「私の知ることじゃないよ。こういう異変らしい異変は、お上に任せるのが末端の仕事つてもんさ」

さてと、と小町は立ち上がり、幽霊に向かって手を差し出した。

「休憩終わり。彼岸まで舟を出そう。駄賃は前払いだよ」

「やつとやる気になってくれましたか」

「今日のノルマ達成しないと映姫様にどやされるんだ。しようがなくさ」

幽霊は手に持っていた渡賃を小町に差し出した。小町の手には、しつかりと六文の小銭が握られている。

渡し守りに渡す運賃の額は、生前その人のために使われたお金の量で決まるという。善行を積み、誰かのために尽くしたもののほど、その見返りとして恩義が募っていくのだ。まさに「情けは人の為ならず」のお金。それがきつちり揃っていると言うことは、この幽霊の徳の高さを示していた。

「ふむ。あんた若いのに孝行人だったんだね」

「え？ そんなはずは。病気で床に伏せていただけなんですけれど」

「心の底から、世話焼いてくれる人のために感謝を祈ってただろ？」

それが良かったんじゃないかね」

「そういうものなんですか」

そういうもんさ、と小町は持っていた番傘を幽霊に渡した。実は小町も、番傘を持たずとも雨に濡れたりはしない。気分ですべてに過ぎないのだ。

幽霊は番傘を持って初めて思った。この死神は文句を言いながらも、この雨を楽しんでいるのではないかと。でなければわざわざ番傘をさして、雨粒がそれを叩く音を聞いたりなんかはしないだろう。

立ち上がった小町の背は高く、少年の幽霊は彼女の顔を見上げる形になる。小町は川の岸に少しだけ乗り上げた和船に足をかけて言った。

「さあ早く乗り込みな。あんたの旅は短いよ」

小町は歯を見せて笑い、朗らかな笑顔を幽霊に向けた。

三途の河を、一隻の渡し舟が進んで行く。小野塚小町が船頭を務めるその舟には、瘦身の少年の幽霊が番傘を持って座り込んでいた。

ぎいぎい、と櫂^{かい}が川の水をかいて、放射状に波紋を置き去りにしていく。しかし不思議と水音は立たない。船の上は木の軋む音と、番傘を叩く小さな雨粒の音だけが、二人の間を支配していた。

「そういえばあなた、病気で臥せっていたって言ったけど、死んじまったのはその病気のせいなのかい？」

手を休ませず、小町が聞く。櫂を使つて舟を漕ぎ、死者の霊へと話しかける。

舟の行く先を見ていた幽霊は番傘越しにちらり、と後ろを振り向いた。そしてまた、すいと視線を前に戻した。

目の前には霧がかかっている。濃いわけではないのに、不思議と前が見えない。雨も降っている。幽霊は、訥々と語り出した。

「よく憶えていませんが、雨が降っていたような気がします。その日は長雨が続いていて……それで、僕は、長雨のせいで、体調を崩したような……」

「ふうん。とどめの一押しってわけかい。肺炎でも起こしたのかね」

「かもしれないですね。もともと、体は強くありませんから」

「若いのにまあ、不運な生まれだったな」

そうですね、と少年の幽霊は、素っ気なく肯定した。

「そういえば、これから僕はどうなるんですか？」

「あーそれは向こうに着いてから説明してくれるやつがいるけど、今聞きたいかい？」

「どうせ暇なので」

「あ、そう」

そうさねえ、と小町は雨模様の空を見上げた。少年は番傘の向きを変え、そんな小町を見上げるように顔を上げた。

「まず、あなたはこれから閻魔様のところに行って天界か冥界か地獄か、審判を受ける。そのあとは転生まで、決められた場所でひたすら待つのだ。もっとも、地獄行きになれば輪廻転生の輪から外れて、永

い時間、鬼どもの責め苦に耐えなきやならんけどね」

まああんたが地獄行きってことはないだろうよ、と小町は言った。「審判っていうのはどんなものなんですか?」

「うーん。説教聞く流れ作業って感じかねえ。閻魔様はすべてお見通しだから、あんたの人生をまるっと見直して、問題がなけりや冥界行き、問題がありや地獄行き。んで百点満点のはずなのに、あれ? こいつ百二十点分生きてんな、ってなったら天界行きって具合かね」
「ふーん……」

またも素っ気なく返す少年の言葉に、小町も手を止めたりはしない。ぎっごぎっごこと漕ぎ続けて、小舟は彼岸を目指していく。

そして彼岸へと至り、舟は半分ほど陸に乗り上げた。

「ほい到着。正面の階段をまっすぐ上がっていけば案内がいるから。頑張れよ」

「……転生するまで待つ。この体で」

小町の言葉もそこそこに、少年は自分の体の調子を確かめていた。現世では肉体的なハンデが彼の知見を狭めていた。幽霊となった今、その制約は解き放たれ、彼は自分の霊体に感動していた。

「……冥界行きなら、やりたいこととして、自由に過ごしやいい。もちろん、天界行きなら万々歳だな」

「はい。ありがとうございます」

少年は軽くなった自分の体を使って、長い階段を上っていった。

さてと、これで仕事もひと段落した小町は背筋を伸ばし、息を詰めた。腕をぶらぶらと振り、疲労を逃がす体操をする。

そんなこんなでゆったりと、自分の舟で此岸へと戻ろうとした。その時。

彼岸の川沿いで何人かの死神が作業をしているのを見つけた。思わず声をかける。

「おーい、何してんだい」

「見てわからんかい。ゴミ拾いだよゴミ拾い」

「ゴミ拾い?」

はて三途の河のほとりでゴミ拾いとは一体どんな隠語だろうか。

小町は考えを巡らせる。

「骨でも拾ってんの？」

「当たらずとも遠からず。最近の雨のせいで、三途の河底に沈んでいたものが岸に打ち上げられるんだ。立派な船着場ってわけでもないけど、乗り上げた時に、舟に傷でもついたら面倒だしね。汚くなっちゃう前に、暇なやつらで片付けろってさ」

そう言いながらも手を休めないのは閻魔のそばで罪状を数えたり、地獄行きの手続きを担当したりする事務局員だ。拾ったものが入っている袋を覗いてみると、錆びた包丁やら桶やら傘やらと、なぜ沈んだのかわからないものが出てくる。

そして極め付けは……。

「なんだありや」

「しらん。一説には、外の世界にある全自動洗濯板だとか」

「でかいゴミだなあ」

「浮かんでこないのをいいことに、誰かが不法投棄したんじゃないだろうな全く」

回収作業に従事していた死神は、その白い筐体を蹴り上げて、その硬さに悶絶していた。

つま先の鈍痛を耐え忍び、立ち上がった死神は小町を指差して言った。

「んで、小町？ あんた暇そうだね」

「ご苦労様。じゃあ仕事に戻りまーす」

「あ。おいちよつと」

厄介な仕事を手伝わされる前にこの場から立ち去ってしまえ、小町がさつと片手を上げて駆け出そうとした時、一人の声が小町の足を地面へと縫い付けた。

「小町、どこに行くのです？」

びくり、と身をすくませるその音色は聞き紛うことなき、とある人物の声。小町は自分の視界の外から話しかけてきたその声に、ぎこちない動作で振り向いた。

そこに立っていたのは身長こそ小町の胸元程度しかない少女だっ

た。悔悟の棒を携えて、罪を数える冥府の番人。四季 映姫・ヤマザナドウ。そんな彼女がそこにいた。

映姫に見つめられ、足が動かなくなった小町は、ぎこちなく挨拶をする。

「おはようございます映姫様。こんな雨の中お外にいては、お体に障りますよ?」

「平気です。閻魔ですから。それより小町、あなたさっきの子供の霊、なぜ賽の河原に案内しないのですか。子供の霊は成人となるまであそこで過ぐすと決まっているでしょう」

「あいやーそうでしたかねえ?」

「思い出すまでひっぱたいてあげましようか?」

目元に影を落として、黒い笑いを浮かべる映姫の手には悔悟の棒が握られている。罪の数に応じて霊を叩く棒。この場合は何回になるのだろうか。いやな計算を、小町の頭は拒んだ。

賽の河原。親より先だつて死亡した子供の霊がその親不孝の報いを受ける場である。正直地獄の中でもかなり古臭い施設だし、託児所みたいなところもあるから今回の少年の霊には不向きな場所だと、小町が独断で決めた。

「まったく……どうせまたあなたの気まぐれなんですけど、規則は規則です。守られねばなりませんので、彼には判決ののち、賽の河原で過ぐしてもらいます」

「えー、映姫様ひどい」

「黙りなさい。そもそもあなたという人は渡し守りという仕事も自分の塩梅で裁量しすぎなんですよ。悔恨の幻聴で幽霊に改心を求めたり、恋人が来るまで待つていたいという幽霊を何日も匿ったりして。霊の振り分けはシステム化されてきていて、誰か一人でも列を乱すようなことをすれば、必ずどこかにしわ寄せが行くと、教えましたよね? それなのにあなたは懲りずに何度も……」

「あはは……」

懲りずに何度も説教をする上司の言葉を聞き流し、小町は嵐が過ぎ去るのを待った。

結局その嵐が過ぎ去るのは、それから約半刻ほど経ったときであった。

第六章 雨のたつ巳 弐

子供の霊を彼岸に送り届け、いつもの通り此岸へと戻ろうとする小町を引き止めたのは、彼女の直属の上司であり、閻魔の四季映姫だった。是非曲直庁の内部、四季映姫の部屋へと続く廊下を歩きながら、小町は映姫に尋ねた。

「ねえ、映姫様。私に用事ってなんですか？　もしかして最近降っている雨のことについてですか？」

「黙ってついてきなさい。話は執務室でしますから」

映姫は少し不機嫌だった。先ほどまで小町の越権的独断について説教をしていたのだから無理もない。小町もそれは理解しているようで、黙っていると言われれば、大人しく黙り込んだ。

しかし映姫様直々にお呼びがかかるなんてどんな用事なのだろうか、と小町は考えを巡らせた。普段なら書記官あたりに呼び出させるのが通例である。小町はその辺りが少し気になった。

やがて二人は応接室にたどり着く。来客があつた時の部屋になんの用事だろうか？　小町がそう思っていると、映姫が扉を開け、中に入った。その後ろに続くように、小町が「失礼します」と言つて部屋へと足を踏み入れた。部屋に入るなり、映姫が口を開く。

「お待たせして申し訳ありません。何しろ人員不足なもので」

「いえ、構いませんわ」

部屋には先客がいた。いや、先客というよりは来客か。映姫が口にした謝罪に、その人物は目を閉じて静かに対応した。

部屋の中央には足の短いテーブルがあり、部屋の入り口を挟むように、テーブルの長辺に沿つて二つのソファが並んでいる。その人物はすでに出されている湯飲みをすすりながら、入り口から見て右側のソファに腰掛けていた。

金色の髪を流し、白い手袋をはめ、紫の装束に身を包む妖しい雰囲気的女性。小町にとつても面識がないわけではない。同じく幻想郷に携わるものとして、彼女はあまりにも有名な存在だった。

幻想郷の管理人。神出鬼没の大妖怪。八雲紫がそこにいた。

幻想郷の管理人がこんなところまで何の用だろう、と小町は考えた。そしてすぐに、因果関係は理解できないにしろ、話題の方向性だけは見抜くことができた。恐らくは、最近三途の河に起きている異変。長雨のことについて、彼女はここを訪ねてきたのだろう。

映姫が紫の対面に座り込む。小町が来る前に始まっていた対談が、再開された。

「あなたが、死神の小野塚小町さん、ですわね」

「え？ ああ、はい。そうですが……」

いきなり話を振られたのは小町だった。確認を取るように名を聞かれ、小町はとっさに返事をする。それだけ聞くと満足したのか、紫は映姫に向き直った。

「ではこの者を同行させることを条件に、調査を行ってもよろしいということですか？」

「ええ、そういうことになります……小町」

「あ、はい。なんでしょう」

入り口正面に立っている小町に対して、映姫が話しかける。

「あなたにはここにいる八雲紫さんの監督のもと、最近起きている川の長雨についての調査を行ってもらいます。いいですね？」

「おお、急な話ですわね」

小町は若干面食らって、苦笑した。だがすぐに表情を正すと、わかりました、と二つ返事で頷いた。その勤勉な態度には、先ほど独断で映姫を怒らせてしまった負い目もあったというのは、表面には出さなかった。

しかしそれでも、自分のする仕事に疑問は生まれるようで、小町は映姫に少しばかりの質問を投げかけた。

「でも映姫様。調査っていうのは最近の長雨のことについてでしょうか？　なんで外部の妖怪の力を借りるんです？」

小町の疑問ももつともだった。ここは彼岸。妖怪も人も、平等に侵入を許さない死者たちの園。何事にも領分というものがあり、いくらこちらが人手不足であろうとそれを侵し、侵されることは望ましくないことは明らかだった。

「その辺りも含めて、私から説明いたしますわ」

小町の疑問に答えたのは紫だった。湯飲みをテーブルの上に置き、口を開く。

「今回の長雨事変ですが、私を知るところによれば幻想郷から到る道程でだけ、現象が起きています」

「え？ そうなんですか？ 映姫様」

「ええ事実です。報告にも上がっていますので」

映姫は小町の言葉に頷いた。紫はそんな様子を見て、口元にだけ笑みを浮かべた。

「三途の河に降る雨という異変。幻想郷へと通ずる道だけに起きる異変。楽園の巫女が出動するのに、これ以上の理由は必要ないでしょう？」

「ああ、それでうちに許可を求めに来たわけですか。じゃあ私の任務は調査の同行と……」

「監視、といったところでしょうか。ふふ、察しの良い方は嫌いじゃありませんわ」

紫は口元に手をやる。要は人間が此岸をうろつくための筋を、この妖怪は通しに来たのだ。納得した小町は、なるほど、とつぶやいた。

「異変の原因について、見当はついていてるんですか？」

「いいえ。全く。でもそれは、そちらも同じなのではなくて？」

笑みを崩さずに言う紫は目線だけで小町を誘導する。小町はその目線に従い、映姫を見た。

「その通りです。異変の原因は全く掴めていません。正直、彼岸や此岸に打ち上がったものを処理するので手一杯です」

私の部下は、多くありませんからね、と映姫はため息をついた。

「他の担当官にも協力を要請しましたが、色よい返事はもらえていません。正直、原因の調査に楽園の巫女が動いてくれるのでしたら、私としても好都合なのですが、そこはお役所仕事。自分の担当区域において、人間を好き勝手にさせていると知れば、他所から小言を言われるのが目に見えていますからね」

組織というものは、規則に縛られることによって集団を秩序の手綱

で導くことができるが、ゆえに個人の意思でその方向性を操作することに難がある。

「それで私を呼んだと。なるほど、話が見えてきましたよ」

「紫さんには申し訳ありませんが、こちらの都合ということと、どうぞ一つ、よろしくお願い致します」

「無論、ですわ。ですが一つ条件を。よろしいかしら」

そうやって紫は人差し指を立てた。なんでしょう、と映姫が応じる。

「原因究明の際には、その後の処理をこちらに一任していただきたく存じます」

「……それはつまり、この事態になんらかの悪意が絡んでいた場合でも、ということですね？」

「お話が早くて助かりますわ。約束、していただけます？」

「……」

映姫は考える。今回の事態になんらかの悪意が絡んでいた場合とは長雨を降らせる犯人がいたという場合。その後の対応を一任するということは、異変に対しての責任を持たぬ代わりに、今後一切の口出しをしないということ。映姫としては問題ないのだが、組織としては問題のある行為である。

映姫は考える。そして少しした後、口を開いた。

「……構いません。事後の処理を一任いたします」

「ふふ、ありがとうございます」

紫はテーブルの上の湯呑みを手に取り、すっかり冷えたそれを飲み干す。

「ではお話はここまで。先に此岸でお待ちしておりますわ」

「ええ。よろしくお願い致します」

言うや否や、八雲紫は自身の能力で生み出したスキマへと消え去った。誰もいなくなったその席を見て、小町が映姫に問いかける。

「よかったですか？」

「なにがです？」

「この案件を任せちゃって。実害を被ったのは私たちなのに」

「いいですよ。どうせ異変の原因が生者であるのなら、私たちに裁きは下せません。せいぜいが注意喚起。妖怪にしても同様です。ならばいっそ、責任の所在を八雲に押し付けてしまった方が都合がいい。原因がわからなかった場合の話ですが」

「ですがそれをわざわざ確認したってことは、十中八九原因がどこにあるのかわかってるってことですよ？　なのに……」

「ええ。だからさっきの、異変の原因に心当たりがないというのは彼女のでまかせでしょう。または、確信がないからそう言ったのか……とにかく、あなたは自分の仕事をしてくれればそれでいいです」

さあ、仕事に戻りますよ。と映姫は立ち上がった。

小町が此岸に渡れば、そこにはすでに紅白の巫女服を着た少女がいた。楽園の巫女と幻想郷の管理人が小町の方を見ている。小町は岸に舟をあげ、二人のそばに近寄った。

空は相変わらずの雨模様。霊夢はいつか小町が持っていたのと同じような番傘を持ち、雨を避けていた。

「久しぶりね。小町」

「おう。春の異変以来だね。今日はよろしく」

「よろしく」

気さくに挨拶を交わす二人には面識があった。それは幻想郷のいつかの春に、四季折々の草花が一斉に開花するという異変を経験したからなのだが、それはまた別のお話。

「それで？　小町には異変の心当たりはないの？」

腕を組み、そう聞いてくる霊夢に、小町は嘆息して肩をすくめた。

「あつたらこんな風に手をこまねいているかね。ないよ」

「それもそうね。紫は？」

「残念ながら、ないわ」

「手がかりゼロで探すのね……また面倒な」

傘を持たぬ手で、霊夢は額を押さえた。すでに八方塞がり。三人は等しく頭を抱えた。

「とにかく、此岸を回ってみましょう。もしかしたら異変の原因が昼寝してるかもしれないわね」

「んな都合のいいことあるわけないじゃない」

「まったくだよ。私じゃあるまいし」

「そう？ 案外あっさりで見つかるかもしれないわよ」

紫が艶っぽく笑い、三人は空に飛び上がった。此岸を一通り見て回る。最初の調査は、足を使ったものになった。

そして数刻の後。紫の発言を鼻で笑った二人は、その行為を反省することになる。

「……」

「……」

「いましたわね」

此岸の片隅。苔むした岸边の上で大の字になって眠る一人の妖怪。その姿に、霊夢は見覚えがあった。

水難事故の象徴であり、最近幻想郷にやってきた舟幽霊。小町も、思えば三途の河で水難事故を起こすといえればこいつしかいないと、後になって思った。

「とりあえず捕まえますか」

「そうね」

「ふふ、私の勘も馬鹿にはできないですわね」

こうしてあっさりと、異変の原因らしき妖怪を、三人は確保したのだった。

人里から少し離れた街道沿いに、大量の道祖神に囲まれた寺院がある。最近になってできたそこは、人と妖怪を平等に扱いつつも、多く妖怪を迎え入れることから、妖怪寺と呼ばれていた。

差し込む日の光が障子紙を通り抜け、柔らかなまどろみがまとわりつく早朝に、住職の聖白蓮は目を覚ました。ゆったりとした動作で布団を引き剥がし、寝ぼけ眼をこすりつつも布団をたたんでいく。寝衣を着替え、障子を開け放ち、空を見上げた。

「……いい天気」

そう言つて白蓮は、一つあくびをした。腕を振り上げて背を伸ばし、ぺちり、と頬を叩いた。

縁側を歩いて、台所に向かう。今日の炊事当番は誰だったかしら。そんなことを考えながら、居間を通り抜け、台所に立つ人物に話しかけた。

「おはよう、一輪」

「おはようございます、聖」

台所に立っていたのは、雲居一輪という尼僧だった。髪を隠す紺色の頭巾をかぶり、前掛けをする彼女は、釜に鍋をかけ、味噌汁を作っているようだった。木製のお玉で汁をかき混ぜ、くつくつと火を通している。

後ろから聞こえた挨拶に、一輪は手を止め、白蓮を振り返った。

「もうすぐでできますよ。顔を洗ってきたらいかがです？」

「そうするわ」

「眠そうですね」

「ええ。昨日は……夜更かししたから眠くつて」

白蓮は言葉に重ねるようにあくびをした。

「起きてきたのは私一人？」

「響子はもう起きていますよ。境内の掃除をしています。ナズーリンももう起きていますと思えますが……多分星の方が起きないんじゃないかと」

「いつも通りね」

白蓮は苦笑した。そういえば、と一輪が言う。

「お客人もまだ起きていないようですが、起こしたほうがいいんでしょうか？」

「うーん」

白蓮は腕を抱え、顎に手を当てて少し考えた。

「自然に起きるまで放っておきましょう。話を聞けば、ずっと旅をしてきているそうですし。布団で寝起きできるときぐらい、甘い夢を見てもバチは当たらないでしょう」

「わかりました」

白蓮の甘い判断を、一輪も了承した。そのとき、ひじりさまー、ひじりさまー！ と遠くから白蓮を呼ぶ声が聞こえてきた。どうやら境内の方で響子が呼んでいるらしい。

「あら、どうしたのかしら」

「どうしたんでしょうね」

はーい、と聞こえぬであろう返事をして、白蓮は境内に向かった。

第六章 雨のたつ巳 参

秋晴れの空が青む早朝のこと。台所にいた白蓮は自分を呼ぶ響子の声に応えて、境内へとやってきた。そこで白蓮を出迎えたのは声の主である響子を合わせて四人だった。

白蓮の目の前にいるのは縄で縛られた舟幽霊、村紗水蜜と、その縄の一端を握る博麗霊夢である。腹のところまで簀巻きにされている村紗の方はむつすりと頬を膨らませ、多分に文句がありそうな表情をしていた。縄を握って腕組みをしている霊夢は片目を瞑り、白蓮を静かに見つめていた。

その二人の横。日傘を差して佇むのは、幻想郷の管理人である八雲紫である。

白蓮は自分の寺の門徒が縛られているという事実には眉をひそめ、霊夢を見た。

「……」

「……」

両陣営——この場合は霊夢と紫に対する白蓮という構図——はどちらともなく見つめ合った。その横で、おろおろしているのは村紗と同じく寺の門徒である幽谷響子である。手に箒を持っているのは今朝の掃除の最中に、霊夢が訪ねてきたからであろう。

しばしの間無言が続き、その後に行動を起こしたのは白蓮の方だった。一つため息をつき、丁寧に腰を折って二人に頭を下げた。

「……うちの子がご迷惑をおかけしました」

「あ、認めた」

「おいこら！ ちょっとは私を信じる気はないのかい!？」

出会って数十秒で身内の非を認めた白蓮に、不機嫌な様子だった村紗は突っ込んだ。だが頭を上げた白蓮の目は大変冷ややかなものだった。

「どう考えてもあなたが何かしたんでしょう……この二人が揃ってあなたを監視してるなんてただ事じゃありません」

「ぶっ、あんた信用無いわねえ」

「いえ霊夢。この場合は私たちを警戒しているんですよ？」

「あ、そうなの」

吹き出す霊夢に一言言ってから、紫は白蓮の前で居住まいを正した。

「命蓮寺の住職、聖白蓮さん。早朝に加え、突然の訪問、まずはお詫びいたしますわ。ですがこれもあなたの察する通り、命蓮寺の門徒であるこの舟幽霊が異変の原因であるということをもまずはご理解いただきたいと思います」

「異変の原因、ですか。この子が何か、博麗の巫女にお世話になるようなことをしでかしたのですね」

「はい。もつとも、本人はそのことを認めていないようですけれど」

「だから私のせいじゃないって！むしろ人里に迷惑をかけないように三途の河に居たんだよ！」

「まあ、積もる話がありそうですね」

そう言って白蓮は半身になり、霊夢と紫を寺の僧坊へ促した。

「どうぞこちらに。話の中でしましょう。ああ、その子の縄も、どうか解いてやってくださいませんか？」

「そうですね。お心遣い、感謝いたしますわ。霊夢」

「はいはい」

ほうら、自由だぞー、と罨にかかった獣を野に放つが如き態度で、霊夢は村紗の縄を解いた。

そして白蓮を含めた霊夢、紫、村紗の四人は話をするため、命蓮寺の中、僧坊へと足を踏み入れた。

客間の一室で、四人は改めて横長の座卓を挟み、向き合った。粗茶ですが、とお茶を用意したのは、つい今しがた台所で朝食の用意をしていた雲居一輪である。どうぞごゆっくり、と一礼して、部屋を後にする。

早速湯飲みに手を出し、茶をすすする博麗の巫女は、説明の義務など紫にあると言わんばかりの態度である。そういう態度を感じ取ったわけでもないが、やはり話を切り出したのは八雲紫だった。

「さて、こうして場が改まったところではありませんが、実はもう一人、

「ここに同席していただきたい方がいらっしやいますの」

「あら、そうなんですか？」

「ええ。こちらにお泊りになっている男性がいますでしょう？」

確かにいる。昨日の夜、旅の者だと言って宿を求めてきた、白髪で、緑の目をした妙な雰囲気の男性が。

幻想郷で旅とは珍しいもので、白蓮もその素性に興味を持ち、夜更かしの相手として話をしていた。蟲師と名乗る彼を、この場に同席させたいと紫は言う。

「同席させることは構いませんが、まだ起きていらっしやらないと思いますよ？」

「ああ、それは心配には及びませんわ。もう手は打ってありますので」
はあ、と白蓮が得意気な表情の紫に相槌を打つ。そしてそのタイミングを見計らったように、障子戸が控えめに叩かれた。

「失礼します。聖。昨日の客人が、ここに案内してくれというので連れてきましたか……」

「……何をしたんです？」

「ちよつとモーニングコールを囁いただけですわ」

その声を聞いてか、障子の向こうにいる人物は、白蓮の反応を待たずに戸を引いた。

「おはようございます、ギンコさん」

「……おはようさん。八雲の」

朝の挨拶を返すギンコは、にこやかな紫とは対照的に、少しだけ不機嫌な声色でそう言った。

「……つたく。いきなり人の枕元に、生首みてえに現れんじゃねえよ。腰抜かすぜ」

「まあひどい。私は殿方の寝所に極力足を踏み入れぬようにと、淑女の嗜みから気を遣いましただけに」

ギンコは自分の寝起きに現れた、生首妖怪のことを思い出した。何

が淑女の嗜みだ。ピリツとした妖気に目を覚まされ、寝ながら横を向ければ、そこには女の生首があるなんて、趣向にしては色物が過ぎる。肝の冷える思いをしたギンコはそっぽを向いて苦笑いを浮かべ、そんな様子を見た紫が楽しそうに口元を押さえ笑った。

ともあれ、これでギンコを加え、命蓮寺の客間の一室には五人の妖怪が揃った。場を仕切り直すように、紫が一同を見渡した。

「さて、役者も揃いましたし、そろそろ本題に入りますでしょうか」

「本題……村紗が起こした異変についての諸々ですね」

「だからあ。私は何もしてないんだって。信じてよう」

嫌疑をかけられ、村紗は弱った声を出す。白蓮の服を掴み、さすがのように身を寄せる。

「それはこれから明らかになることです。紫さん。この子は一体何をしたんですか」

「単刀直入に申し上げれば、三途の河で水難事故に成り得る長雨を降らせていたのですわ」

「雨を降らせていた？」

ええ、と紫は頷き、語り出す。三途の河に雨が降り、川底に沈んでいたものが溢れ、渡し守の運航に支障が出ていること。そしてその原因が、この舟幽霊にあるということ。

「三途の河に雨が降る。普通では起き得ないその現象の原因が、彼女……村紗さんにあると私たちは考えます」

「その根拠は？」

「ありませんわ。ですが現に、この子を三途の河から引き離れた途端に雨は上がり、正常な天気が三途の河に戻ったのですから、そう考えるのもやむなしと」

それに関して、そちらにも言い分がありますでしょうか？ と紫は村紗を促した。それを受けて、村紗は重苦しく口を開いた。

「……悪意があるわけじゃないんだ。それだけは信じてほしい」

「では村紗。あなたが雨を降らせていたということは認めるのですかね？」

村紗は問い詰めるような白蓮の言葉に、不承不承と頷いた。その時

だった。

「あら……っ。」

ぱらぱら、と屋根を叩く小さな音が連続して響き、白蓮がそれに気がついて声を漏らす。外で雨が降り始めたのだ。村紗はその音にびくりと身をすくませ、眩いた。

「……まただ。また、雨が追いついてきた」

「村紗？」

村紗は頭を抱え、表情を歪ませる。雨の音に染み入るようなつぶやきが、村紗の口から漏れる。

「最近はずつとこうなんだ。どこに行っても雨が付いてくる」

「これはあなたの能力がそうさせているわけではないの？」

「雨なんて私の能力で操作できるわけないよ」

白蓮の言葉に、村紗は首を横に振った。その様子を見て、紫がギンコへ目配せする。その視線を受けて、ギンコが立ち上がり、障子を開け放った。

空は晴れ。雲も少ないのに、雨が降っている。とても奇妙な光景だった。それを見たギンコが口を開く。

「これは、雨降らし、か」

「……雨降らし？」

ぽつりとつぶやく村紗を振り返り、ああ、とギンコが言う。雨垂れが軒下へ落ち始め、水たまりを作り始めている。ギンコは座り直し、村紗へと向き合った。

「雨降らし、とは普段は水滴のような姿で空気中を漂い、上空で水を集めると地上へ降り、地上で蒸発してまた水を集めるということを繰り返す蟲だ」

「そんな雨みみたいな生き物があるの？」

「こいつは蟲の中でも特殊な部類だ。生きている、ということ以外は自然現象となんら変わらない。俺たち蟲師は、ナガレモノ、と呼んでいる」

しかしギンコは、雨に妙なモノを感じていた。蟲の気配が強い。これは、ただの雨降らしではないのかもしれない。そのもう一つの可能

性を考察する前に、紫の言葉がギンコの思考に割り込んだ。

「ではギンコさん。雨が降る原因は、その蟲にあると?」

「ああ。確証はないが、おそらく。な」

「対処法はあるんですの?」

核心を突く紫の質問に、ギンコはしかし、逡巡せず、しつかりとした口調で答えた。

「ない。ナガレモノに取り憑かれれば、ただ蟲の寿命が尽きるのを待つほかない」

「それでは困りますわ。なんとかありませんの?」

「そうは言ってもな……」

そこでギンコは、背後を振り返り、軒下の向こうに降る雨を見た。視界の左から一輪が走り抜け、雨戸を閉めるために動いていく。

ぽりぽり、とギンコがこめかみを掻き、黙り込んで思考する。

「……人に憑いたナガレモノには対処法はないが、妖怪なら話は別かもしれない。少し、調査してみようと思う」

「それは何より。お願いいたしますわ」

相変わらず感情の読めない笑みを浮かべて、紫はギンコにそう言った。幻想郷に来てからというものの、この妖怪にいいように使われすぎではないのかとも思わないギンコだったが、それ以上に気になることがあつたため、意識的にそれを無視した。

ギンコが気になること。それはこの雨の正体。以前にも、ギンコは雨降らしに取り憑かれた人物を見たことがあつたが、その時に感じていた気配よりも、随分と蟲らしい気配がするとギンコは思っていた。

ギンコは村紗を見る。舟幽霊と呼ばれる妖怪に取り憑いたナガレモノ。蟲師の領分だけでは、この問題は対処ができない。ギンコはまず、妖怪としての彼女を知るために、動き出した。

第六章 雨のたつ巳 肆

八雲紫が席を外した命蓮寺の一室で、ギンコは村紗に向き直っていた。すぐそばでその様子を見守るのは楽園の巫女である博麗霊夢と、命蓮寺の住職、聖白蓮である。

ギンコは三途の河に降る長雨の原因が、本当に村紗にあるのか疑問だった。蟲の気配はする。今外に降る雨が雨降らしであるのも、おそらくは正しい。しかし、普通の蟲患いとはどこか違うような、そんな違和感を、ギンコは抱いていた。

「それじゃあ、幾つかの質問に答えてもらうことになるが、いいかね」「は、はい！」

「……そう硬くなるな。とつて食おうつてわけじゃねえんだからよ」

ギンコは巻物を広げ、胡座をかいている。室内は雨戸を閉めたことにより、陽の光が入らずに薄暗くなり、ぼんやりとした行燈の灯りだけが支配していた。

妖しい雰囲気と言えばそうなのだろう。行燈の陰影に紛れた緑の目の前で正座をする村紗は緊張しているようだった。そわそわと落ち着きなく、視線もどこか泳いでいる。そんな風に落ち着きのない村紗をやりわりと注意するように、白蓮が口を開いた。

「これ村紗。ギンコさんは真面目な話をしようとしているのですよ。失礼じゃありませんか」

「うう、そんなこと言っただって……」

「ああいや、そのままでもいい。かしこまらなきゃならん、つてわけでもねえしな」

もじもじと落ち着かない様子の子の村紗に構わず、ギンコは質問をする。

「まずお前さんのことを聞きたい。舟幽霊ってのは、生きているのか死んでいるのか。妖怪だとは聞いているが、お前さんは他の妖怪とはちよつと違うような気がしてね」

「あ、そういうことを聞きたかったの？」

「ああ」

拍子抜け、といった感じで村紗が背筋を一瞬だけ伸ばす。そしてギンコの質問に答えるために、腕を組んでむむ、と唸った。

その様子を見て霊夢が「何について聞かれると思ったのよ……」と言うと「いや、今まで沈めてきた舟の数を憶えているかとか……」と答えが返ってくる。

異変の原因調査という名目だったために、詰問されると思っていたのだろう。緊張を少し解いた村紗が口を開いた。

「生きてはいないよ、私は。念縛霊って言ってるね。この世に未練を持ち、三途の河を渡れない地縛霊の亜種がこの私……です」

「へえ。じゃあお前さんは幽霊ってことかい」

「本質を突けばそうだね。どっかの編纂者が言うには、妖怪って分類らしいけど、私にはあまり関係ないかな」

「雨降らしが生き物以外に取り憑く……そんなことがあるのか？」

ギンコが広げているのは雨降らしという蟲のことが書かれた巻物だった。巻物に視線を落としながら、村紗の話を聞き、思索に耽る。その様子を興味深く眺め、傍から巻物を盗み見ているのは霊夢だった。

「ねえギンコさん」

「ん？」

「私にはいまいちピンときていないんだけど」

ギンコの黙考に割り込んだ霊夢が、腕を組み、顎をしゃくって村紗を指し示す。

「結局、この舟幽霊が雨の原因ってことでもいいのよね？」

「あー……言っちゃえばそうなんだろうが、そう、簡単なことでもない」

ギンコが巻物に書かれている文字を指差す。雨降らし、と書かれたその文字列を目でなぞり、霊夢は再びギンコの方を見る。そのタイミングで、ギンコは話し始めた。

「今外に降っているのは、十中八九雨降らしだ。蟲の気配もする。その雨降らしが取り憑いているのが、そこにいる村紗であるというのが、俺の予測だ」

「雨降らしって言うのは、きつき説明していた雨みたいな生き物のことよね。それが取り憑いていると、その人の周囲には雨が降るようになる」

「ああ」

「それって確証は持てるの？」

「それがよくわからない。生き物相手になら取り憑いた例を知っているんだが、幽霊相手にと言うのは、俺も初めてでね」

「じれったいわね。とりあえず退治すれば、雨も止まないかしら」

霊夢がどこからともなくお札を取り出す。それは妖怪相手に絶大な効力を誇る道具である。

村紗がひつ、と短い悲鳴をあげる。今にも行動を起こしそうな霊夢の氣勢を制するように、村紗をかばったのは白蓮だった。

「それは聞き捨てなりませんね。とりあえず、という単純な発想で、この子に危害を加えるというのなら、私も黙ってはいませんよ」

「ふん」

一触即発な雰囲気の流れる。しかし、霊夢も本気で行動しようとは思っていないかったようで、その雰囲気は、霊夢がお札をしまったことで弛緩した。

その間にも、ギンコは思考を巡らせていた。幽霊という存在。生きてはいないモノに、雨降らしは取り憑くのかどうか。結果だけ見れば、取り憑いているように見える。だがただ単純に、取り憑いているとは考えづらい。

雨が追いついてくる。村紗はそう言った。

「村紗」

「はいっ。」

霊夢の札に敏感に反応した村紗は、白蓮に身を寄せるように縮こまっていた。そんな村紗に、ギンコが問いかける。

「雨がついてくるようになったのは、いつからだ」

「え？ うーん……ああ」

ギンコの問いが引き金になったのか、村紗が気づいたように声を上げて、勢いよく立ち上がった。

「そういえば！ 私は三途の河の長雨の犯人じゃないって！ そうだよー！」

「な、なによ。いきなりどうしたのよ」

村紗の態度が急変したことに、霊夢が怪訝な声を上げる。

「私が三途の河に行った時にはもう雨が降ってたんだ！ 本当だつて！」

「そうなのか？」

「うん。ああ、思えばそれからだよ。三途の河の雨を見た時から、私は雨が付きまとうようになつたんだ！」

「どういふことなのかしら。ギンコさん？」

「俺にもわからん。だが……」

三途の河、か。そうギンコは呟いた。その時だった。

「ギンコさん」

ギンコの背後、障子戸と雨戸に挟まれた薄暗いその通路から、ギンコに声をかける者がいた。命蓮寺の尼僧、雲居一輪である。ギンコはその声に振り返った。

「ギンコさんにお会いしたいという方が……」

一輪の紹介を待たず、一輪の背後からすらり、と影が飛び出してくる。その影は床にまで届きそうな長い髪を広げ、気安い態度で、ギンコに片手を上げて挨拶した。

「よう、久しぶり」

「お、妹紅か」

「おう。ここにいろつて聞いてね。ちよつくら、頼みたいことがあつて来たんだ」

頼みたいこと？ とギンコが繰り返すと、妹紅は真剣な表情で頷いた。

「急で申し訳ないけど、里が変なんだ。すぐに来てくれないか」
「……何があつた」

ギンコの目が鋭く、妹紅に向けられる。その視線を受けて、妹紅が語り出す。

「雨に当たった子供達の体温が戻らない。本人達は元気そうだけど、

それが逆に不気味だね」

「体温が戻らない、だと？」

「ああ。まるで川底の石だ。冷たい、けど元気そうなんだ」

妹紅が語る内容に、ギンコはある蟲の気配を感じ取った。雨にあたった子供達の体温が低くなる。それはとある蟲がもたらす症状だった。しかし、それが発生する条件は揃っていない。そこだけが、ギンコには気がかりだった。

思えば村紗の症状もそうだ。結果だけ見れば、雨降らしに相違ないが、村紗は雨降らしに憑かれるような行動は一切起こしていない。それどころか、彼女は幽霊であり、生き物ですらない。前提がない状態で、蟲の症状だけが出ている。それはとても奇妙なことだった。

「……症状に心当たりはある」

「本当か」

「ああ。その前に村紗。一つ、いいか？」

ギンコはそう言って村紗を手招きした。その手招きに応えるように、村紗は四つん這いでギンコに近づいていく。そしてギンコの前に座り直し、ギンコは、ちよいと失礼、と言って村紗の手を取った。その手はひんやりと冷たく、幽霊の体温の低さを示していた。

「なあ村紗。幽霊ってのは、みんなこう冷たいのか？」

「え。ああ、うん。大体はそうだよ」

「じゃあ最近になって異常に喉が渴いたことは？」

「……ないけど」

「そうか……」

それだけ確かめると、ギンコは立ち上がって、妹紅に向き直った。

「子供達の様子が気になる。案内してくれ」

「お、おう」

ギンコの行動の意図を計りかねる一同が、首をかしげた。

第六章 雨のたつ巳 伍

雨が降る人里。そこでは雨に乗じて、奇妙な現象が起きていた。

しとしと、と大気からしみ出すような嫌な雨が寺子屋の屋根を叩き、中にいる者の不安感を煽る。曇天から逃げ出すように身を寄せ合った子供達は、皆特殊な事情を抱えていた。

「先生。喉乾いた」

「……すまないな。今沸いたばかりなんだ。冷えるまで待ってくれ」

寺子屋の教師である上白沢慧音は、水をねだり、服の裾を引く子供の頭に手を乗せて、ゆるく微笑んだ。そしてそのままの手つきで子供の頬を撫で、その体温の低さを感じた。こみ上げた不安が、次の瞬間には彼女の表情を、空模様のごとく曇らせた。

慧音は寺子屋の教室に集まった子供たちを眺めて、何時ぞやの流行病を思い出していた。全く同じ光景というわけではない。今回、症状を訴える人数はいつかの半分程度の人数であるし、症状も深刻なものではない。ただ奇妙な点は、子供たちの体温が異常に低くなり、全員が喉の渴きを訴えるということにあった。

原因は不明。なぜこの症状を訴えるのか、誰にもわからない。その症状があること以外、普通の子供と変わらない様子なのが、今は逆に不気味だった。

子供たちの家族も、心配そうな表情を浮かべ、しきりに我が子の体を撫でさすっているのが見える。子供達自身は平気そうだが、体温が低いことが気になっているのだろう。漠然とした不安感に襲われながら、慧音はぼつりと呟いた。

「ギンコ……早く来てくれ」

「慧音ー」

祈るような響きに応えるように、教室の扉が開かれる。慧音が顔を上げると、そこにはギンコを連れ藤原妹紅が立っていた。つかつかと教室に足を踏み入れる二人に、慧音が声を上げる。

「ギンコー……とそちらはっ」

「ちよつと事情があつてな。気にしないでくれ」

失礼します、と若干腰を低くしてギンコの後ろからおずおず教室に入ってきたのは村紗水蜜だ。彼女はギンコの考えがあつて、ここに同行していた。さっさと入りなさいよ、と村紗の尻を蹴り上げて後に続いてきたのは博麗霊夢で、彼女は言つてしまえばおまけのようなものだった。

慧音の言葉にギンコが手短に答えた。

「それより待たせたな。妹紅から大体のことは聞いている。子供達の様子はどうか？」

「わからない……本人達は元気そうなんだが」

ギンコは教室に入るなり、慧音のそばにいた子供のそばにしゃがみこんで、額に手を当てた。

冷たい。まるで日陰に放置した水瓶にでも触れているような温度だ。ギンコは同じく子供の傍にいた慧音に聞いた。

「この症状が出るようになったのはいつだ」

「ついさっきだ。外で遊んでいた子供達が、帰ってくるなり体に体温が戻らなくなつて……」

「なるほどな……」

「これだけで何かわかるのか？」

しゃがみこんだギンコの隣に立ち、妹紅が聞いてくる。妹紅の顔を見上げながら、ギンコが答えた。

「症状だけを見るのなら、これは海巳、という蟲の仕業だ」

「うなみ？」

「ああ。そして、非常に稀な現象でもある」

ギンコが滔々と語り出す。教室にいる、子供達とその家族を含めた全員が、ギンコの言葉に耳を傾けていた。

「海巳とは、雨降らしという蟲と雨蠱という蟲が同化した姿だ」

雨降らしと、うこ？ と慧音が呟く。

「雨降らしとは、普段は空気中を漂う細かな水滴の一群のような姿をとり、空中で水を集めては雨となつて落ちてきて、そしてまた地上で蒸発し、雨となつて降るということを繰り返す雨のような蟲だ。生きているということ以外は、雨となら変わらない。俺たち蟲師はナガ

レモノ、とそう呼んでいる」

「うん、つていうのは？」

「雨蠱とは、肉眼では捉えられないほど小さな蟲だ。雨に紛れて川に流れ込み、やがて海へと到達するとそこで子を成し、また水蒸気に紛れて山河に降り注ぐということを繰り返して生きている。溺れて仮死状態になった人間には、稀に寄生することもある。こいつに寄生されると、体温が低くなり、異様に喉の渴きを訴えるようになる」

「子供達の症状とまるつきり一緒じゃないか。でも子供達は溺れたことなんてないし、仮死状態になったりもしていないぞ」

「そうだな。生きている人間には、雨蠱は寄生することはない。だがその前提を覆すのが、海巳、という蟲であり、現象だ」

ギンコの語りが薄暗い室内に溶けていく。異様な知識。認められるはずもない、現実離れた響き。しかしこの場にいる誰もが、それを疑わず飲み込んでいく。それはギンコのなせることなのか、あるいは誰もが無意識に、蟲を識っているからなのか。

「海巳とは、雨降らしが雨蠱と共生している一形態だ。ナガレモノである雨降らしが雨蠱に取り憑き、雨蠱が雨降らしに寄生しているという状態を指す。見た目は、見ての通り雨そのものだ」

「じゃあ外に降ってる雨つてのは……」

「海巳、ということになるだろう。この状態になった蟲は、生き物に寄生しやすくなり、寄生すれば雨蠱の症状が出るようになる」

しかし一つ、わからないことがある、とギンコ思っていた。それは海巳が発生する環境が、この人里には揃っていないことである。

海巳という現象が起きるのは、雨蠱と雨降らしが合流しやすい海上、または海沿いの陸地である。幻想郷の人里のような、山や森に囲まれた内陸の土地には起きない現象であるはずなのだ。

「対処法はあるのか？」

慧音がギンコにそう聞いてくる。実はギンコも、それについて少し悩んでいた。前提がありきの現象ならば、解決することができる。しかし今回は、その前提がない。それはつまり、既存の対処法が使えないことを示していた。

ギンコは自分が知る限りの、海巳の対処法を口にした。

「……対処法は、患者を海に入らせることだ。そうすれば、寄生した海巳は海に溶け、体から抜け出る」

「え……」

ギンコが語る対処法が実現できないことは、この場にいる誰もが理解していた。だからこそ、誰もが口をつぐみ、視線を下に向けた。

幻想郷には海がない。海がない土地では、当然ギンコの言う対処法は意味をなさなかった。

本来ならば、なんら不都合のない対処法。起きる場所も、解決する場所も、すべては海を中心にしていたはずなのだ。

「じゃ、じゃあどうすればいいんだ？」

「……考えはある」

慧音の言葉に、しかしギンコは答える。この対処法は使えない。海がない幻想郷では起きるはずもなかった現象が起きていることで、この話を聞いた瞬間はギンコも困惑した。

しかしギンコは、そこではたと気がついた。

起きるはずのないこと。三途の河に降る雨。幽霊に取り憑いたナガレモノ。海にしか降らない雨が降る。それらはすべて、起きるはずのないことだ。歪なつながり。前提が崩れ、曖昧になったモノが重なった結果だけが、現世に現れている。ならばその曖昧さを利用して、なんとか解消できないのか。

そして村紗の言葉である「雨が降る三途の河に行った時から雨がついてくるようになった」ということを信じるならば、うまくいくはずであると、ギンコは予想していた。

「村紗。ちょっと来てくれ」

「私？」

「妹紅。一つ、水盤を用意してくれないか」

「お、おう。わかった」

そうしてギンコの指示により、水の張られた木桶が用意された。患者となった子供たちと村紗がその桶を囲んで対面し、これからどうすればいいのかと次なる指示を待っている。

「これからどうするんだ？」

慧音が言う。まあ見ていてくれ、とギンコが答えた。

「一人ひとり、俺がいいというまでこの水に両手を浸けてくれ。村紗も一緒にな」

「私も一緒に？　こうかな」

ギンコの指示で、患者の子供一人と村紗は同じ水桶に両手を浸した。そうしていると、次第に子供の方はもじもじと落ち着かない様子を見せ始める。

「なんかぱちぱちするよ」

「我慢してくれ。今、蟲が抜けているんだ」

そうしてしばらく。教室には沈黙が流れ、子供達の両親も、固唾を呑んで見守る。そんな中、少々目に悪い光景が桶の中に現れた。

「ひっ」

「まだまだ！　手を上げるな！」

怯える村紗の肩を掴み、ギンコが声を張る。村紗だけではなく、子供達や周囲の人間も短い悲鳴をあげていた。

ずるり、と細長い糸状のそれが、子供の指の先から抜け出してくる。水の碧を濃縮したような色合いの蛇とでも言おうか。うねうねと水の中をのたうち回るように蠢くそれを見て、ギンコは子供に手を上げるように指示を出した。

ギンコが思いついた対処法。それは村紗の特性を利用したものであった。

村紗の話を聞けば、彼女は雨降らしや雨蠱に取り憑かれたり寄生されるような行動をなにつ起こしていないことがわかった。そして寄生された時の症状、喉が渴いたり、体温が下がる等も訴えてはいない。

ならば何故、彼女には雨がついてくるのか。答えは一つ。彼女は海巳を寄せる性質なのだ。そう考えれば、海治いでしか発生しない海巳が人里で発生した理由も納得がいく。彼女を中心に、雨降らしと雨蠱が集まり、海巳となって幻想郷に降り注いでいたのだ。

海巳を寄せる性質があると分かれば、後は同じ水の中に体の一部を

浸せば、村紗に引き寄せられて海巳が出てくるかもしれないと、ギンコは予想した。結果は見ての通り。海巳はギンコの予想通り、子供達の体内から這い出してきた。

子供の手を拭きながら、両親の顔に安堵の表情が浮かぶ。体温が戻った。これで子供達は大丈夫だろう。

「あの……まだですか」

うねうねとのたうつ碧い蛇のいる水桶に手を浸けながら、村紗は若干の涙声でギンコを見上げた。しかしギンコはそんな村紗に、残念そうに、しかし冷徹に言葉をかけた。

「治療が終わるまでそのままだ。悪いな。なに、お前さんなら危険はないさ。辛抱してくれ」

「うええ……」

子供たち全員の治療が終わり、桶の中が細い蛇でいっぱいになる頃には、村紗は命蓮寺の修行僧らしく、どこか悟りを開いたような表情になっていた。

教室の隅でいじいじと落ち込む村紗を尻目に、ギンコは桶の中を覗き込んだ。

うねうねと蠢く海巳が桶の中で彷徨っている。細長い糸状だった無数のそれは、今は一本に寄り合って、鰻のような見た目になっていた。

「これが海巳か。なんだか鰻みたいだな」

「捌けば食べられそうね。蒲焼なんて最高かも」

「おい、触るなよ」

桶の中に手を伸ばそうとしていた妹紅と霊夢を、ギンコの言葉が制止した。体外に出たとはいえ、海巳が持つ触れれば取り憑くという性質は変わらない。ギンコの言葉に、二人もピタリと手を止め、忠告に従った。

「で、ギンコさん。これで里の方は一件落着？」

「そうだな。後は雨に当たらないように気をつけていれば問題ないだろう」

「じゃあ今度はこっちの問題ね……」

霊夢が視線を村紗の背中に向ける。そうだ。まだ村紗が雨を降らせているという問題は解決したわけじゃない。しかしそちらにしても、これ以上どうしたものかと手詰まりな状態であった。

「そういえば霊夢。お前さんたちの目的は結局何なんだ？」

「目的？ そんなもの、異変の解決に決まってるでしょ」

そう言っつて霊夢は胸を張った。

楽園の巫女が活動する理由、それは異変の解決に他ならない。そして今回、その異変というのは、三途の河に降る雨という異変だった。

「三途の河に降る雨を止ませるのが目的じゃないのか？」

「そうよ」

「ならお前さんの目的は達成されたということになりやせんのか。向こうの天気は元に戻っているんだろう？」

「あーそうかもしれないわね。けど、乗り掛かった船つてやつよ。原因がわかってるなら、再発防止は当たり前でしょ？ ああでも」

「ん？」

「紫は今回積極的だったし、何か考えがあったのかもね。よくわからないけど」

「そーいや『治らなきや困る』とか言っていたな」

「そーね。でもまあ、私も外に出られないなんてまっぴらだから、やっぱりその子には海巳とやらを寄せないようになってしまうと」

桶を覗き込む体制から、霊夢は立ち上がり、部屋の隅にいる村紗の近くに寄った。どこからともなく取り出した幣の柄でぐいぐいと頬をこねまわし「いつまで落ち込んでんのよ」と囁いている。「蛇がぁー……」というつぶやきは聞こえなかったことにしよう、とギンコは思った。

そんな様子を見ながら、ギンコはこれまでのことを整理するように思考を巡らせた。

舟幽霊、村紗水蜜。彼女は海巳を寄せる体質である。雨がついてくるといふ事実には、雨蠱にとり憑かれたような症状もない点から、彼女は取り憑かれているのではなく、蠱を寄せていると解釈できる。

そしてその海巳が最初に発生した地点は、村紗の「三途の河に行つた時から雨がついてくるようになった」との言葉を信じれば、三途の河ということになる。

「原因調査は必要か……」

その後の対応を慧音と妹紅に任せて、ギンコは三途の河の調査に乗り出した。

第六章 雨のたつ巳 陸

村紗水蜜が去った後の三途の河には、普段の光景が戻っていた。雨は上がり、川は薄く霧に覆われ、いつも通り、水らしきものをたたえている。波紋一つない水面は深く澄んでいて、ぼんやりと空の色を跳ね返しつつも、川底を覗き込めそうであった。

川べりの湿った土の上には短い草が生えている。さながら緑の絨毯であるその上に腰を下ろし、死神、小野塚小町は雨上がりの独特な香りを胸一杯に吸い込み、吐き出した。

「やれやれ、やっと雨が上がったようだね」
「その割には残念そうですね。お手持ちの番傘の出番がなくなったからかしら」

独り言のつもりで呟いた言葉に返事があった。小町が声のした方を振り返ると、微笑をたたえて佇む少女は、明るい色の髪をなびかせてそこにいた。

「これで異変は解決、めでたしめでたしですわね」

「めでたいもんか。川底から浮いてきた物の片付けも大変なんだぞ」

小町は片付けに駆り出されている同僚たちを思って、呑気な彼女に、筋違いとは知りつつも文句を言った。自分に向けられた言葉がないし、八雲紫は平然として言った。

「ああ、それらは後で引き取りに来ると思いますよ」

「え？ あの全自動洗濯板とか、諸々を？」

「ええ。山の技術者たちが嬉々として拾いにくるはずですよ」

「あーなるほどね。つてもしかして、その技術者たちが不法投棄よろしく川に捨てたんじゃないだろうね？」

「さあ？ 私には分かりかねますが、小町さんの想像力には驚かされます、とだけ」

ふふ、と含みのある笑みを浮かべて、紫は川べりに近づいてく。そしてそこから川底を覗き込むように、腰を折った。なにをしているのだろう。

「……問題はないうですわね」

口だけが動く。その声を、小町は聞き流そうかとも思った。それ以上は、聞いた方が面倒くさくなりそうだった。

「なあ、八雲さんよ」

だが小町はあえて口を開いた。この妖怪の思惑を探る、なんて分不相応なことまではしようとは思っていない。ただこの場所を仕事場にしてはいる自分にとって、紫の行動に一言言っておきたかっただけだった。

「あらかしら死神さん」

「あんた何が目的で三途の河に手を出すんだい」

「手を出す？ どういうことでしょう」

「とぼけなくてもいい。楽園の巫女が出動する理由を話して、映姫様に筋を通しに来たことも、あんたにしては丁寧がすぎると思っていたんだよ」

小町は紫が最初に是非曲直庁へやってきたことを思い出していた。あの時紫は、楽園の巫女が動く理由をはつきりさせるとともに、異変の責任の所在を明らかにしていった。

『原因究明の際には、その後の処理をこちらに一任していただきたく存じます』

『……それはつまり、この自体になんらかの悪意が絡んでいた場合でも、ということですね？』

『お話が早くて助かります。約束、していただけます？』

あの時の映姫とのやり取りは、今回の異変解決が巫女ではなく紫主体で行なわれていることを示している。そうでなければいつも通り、巫女が問答無用で異変解決に乗り出していたはずなのだ。

「ああ、なるほど。そこで疑われてしまうのですね」

いつもと変わらぬ態度で、紫が言う。

「あんたは何を知ってるんだい。いや、何をしてるんだい？」

「そうですね……あなたは、蟲というものをご存知？」

「馬鹿にしてるのかい？ そんなの知ってるに決まってるじゃないか」

「夏場に忙しく鳴き叫んだり、人の血を吸いに飛び回ったり、動物の

死骸に卵を産み付けたりするものとは違いましたよ?」

「……じゃあなんだって言うのさ」

自分の思っていたことが外れ、話の方向が見えず、小町が訝しげに表情を歪める。それに構わず、紫は話を続けた。

「生命の源流に近いモノ。見える者と、見えない者がいる、この世の根底から湧き出して、ただ影響を及ぼしていく。そういうモノたちですわ」

「話の要領を得ないね。それがどうだって言うのさ」

「いえね、その蟲というモノは、なかなか曲者でしてね。私の能力の及ばぬところであれこれと悪さを働くんですよ」

「へえ、あんたにも、どうにもできないことはあるもんなのか。で?

答えを急ぐようで悪いけど、それが今回の事とどう関係があるんだい?」

「それは役者が揃ってからののお楽しみ……と言いたいところですが、もう既にいらしていたようですよ」

紫がそう言って言葉を区切ると、中有の道の向こうから、がさり、と草の根を踏み分けて二人の元へとやってくる数人の人影があった。それと同時に、ぽつりぽつりと、また雨が降り始めた。

三途の河への道のりは妖怪の山を迂回するように伸びる道をたどる。死者も生者も、空でも飛べぬ限りは、三途の河へ至るためにその陸路を歩かねばならず、そうして歩く道には、一つ、名前が付けられていた。

中有の道。死者の霊が三途の河を目指すための通り路である。そう聞けば陰鬱な印象を受ける道だが、普段ならばそうでもなく、道沿いには死者向けの出店が立ち並び、まるで縁日のように賑やかなところだ。

しかし今はそんな賑やかさも鳴りを潜め、ポツポツと降り注ぐ雨の中に、店じまいをする人の様子が見えるばかり。幽霊たちも曇天の下には出てきたくはないらしい。どんよりの雨模様は、中有の道

を、いつも以上にそれらしく彩っていた。

湿った土を革靴で踏みしめながら、傘をさして歩くギンコの前には、二人の同行者がいる。一人はこの雨を引き連れて歩く舟幽霊、村紗水蜜。海巳を寄せる彼女は、これ以上里への被害を出さないためにも、ギンコに同行して三途の河を目指していた。

もう一人の同行者は博麗霊夢。妖怪退治の専門家であり、今回の件でも村紗をひっ捕らえて三途の河の異変をとりあえず収束させた人物だ。彼女も、異変解決の巫女として全ての原因があると思われる三途の河への同行を買って出っていた。彼女の言葉を借りるなら、乗り掛かった船と言う事らしい。

「しかしまあ、生きているうちに三途の河を拝む事になるとは思わなかったな」

「そう？　って、そりやそうよね」

ギンコがポツリと呟きを漏らす。それに言葉を返したのは霊夢だった。傘越しに少しだけ、ギンコの方を振り向いて言った。

「どんなところなんだ、三途の河ってのは」

「いいところだよ。舟もいっぱいあるしね」

「あんたの尺度で語るんじゃないわよ……そうね。なんもないところよ。ちよつと大きな川。それだけ」

「そりやあ、また情緒のない事で」

そうは言ったギンコだったが、死者たちの通路となればそれくらいの侘しきであって普通か、と納得をした。

あぜ道のような道も、いつしか膝くらいまでの高さのある草が目立つ荒れ道になっている。ここまでくれば、三途の河は目と鼻の先だそうだ。

「ほかにはなんかないのか？」

「え？　川のこと？　うーんそうね……彼岸と此岸の境界線ってところかしら」

「境界線……」

「あと沈んだものが浮かんでこない、とか」

「沈んだものが浮かんでこない？　それはまた、妙な話だな」

「そういうものだと思っただ方が手っ取り早いわよ。……ほら、見えてきた」

霊夢が指し示す先に、薄く霧がかかった場所が見えてくる。雨を背負った一同が、草を分けて川べりに脚を踏み入れると、そこには幽玄の景色が広がっていた。

あちこちに苔むした岩が突き出ている。ところどころに土の浮かんだ緑の絨毯と合わせて、そこはやはり、この世の風景とはどこか乖離しているように見えた。

川の向こう岸は見渡せない。白く、薄っすらとかかる靄以上霧未満の気が、さながら曇り硝子のごとく視界を遮っている。そしてそんな先の見えない川の岸边には、二人の先客がいた。

「あら紫。と小町」

「ついで見たいにいうんじゃないよ」

霊夢が言葉を交わす後ろで、ギンコは川の異変を感じ取っていた。それは蟲が見えるものならば一目瞭然の変化を示す光景。多い。明らかに、蟲が寄り集まっている。

「大勢でなにしに来たんだい？」

「ちよつと異変について調査をね。ここにいるギンコさんが……」

霊夢の紹介を待たずに、ギンコは前にいる霊夢を押しつけるように川へと近づいていく。「ちよ、ギンコさん？」と霊夢の言葉も無視して、川べりにしゃがみ込んだ。

「どういうことだ。なぜ、光脈が川底に……いや、光脈が川底を流れているわけじゃない。これは……」

「さすがギンコさん。すぐにお気づきになっていただけたようで、私も嬉しいですね」

「……お前の仕業か？」

「いいえ。私は何もしておりませんわ。ですがいつか妖怪の山が光脈筋となった影響で、隣接するこの川に影響が出てしまったようです」

「そういうことか……」

妖怪の山の異変。いつか光脈筋として復活を遂げたが、隣接するこ

の土地にも影響を及ぼしていたのは予想外だった。

話についていけないというように首をかしげるのは霊夢と村紗、そして小町の三人である。

「ちよつとギンコさん。話についていけないんだけど。説明してもらえる?」

「ああ、すまん。だがどこから説明したものか……」

ギンコは少し考えて立ち上がり、気づいたことをまとめるように話し始めた。

「まず村紗。お前に寄せられている海巳だが、発生源はここで間違いない」

「やっぱり! だから言ったじゃん! 私のせいじゃないんだって!」

「でも雨を寄せている原因はあんたでしょうに。それはそうなのよね、ギンコさん」

「ああ……それはそうだな」

「やっぱり退治ね、と霊夢が言えば、ええ……と村紗は消沈した。

「だがそれは対応ができないわけでもない」

「え? そうなの?」

「俺が吸っている蟲煙草があるだろう。それを吸っていれば、とりあえずいいはずだ」

「なんだ簡単じゃない。どうして今まで黙っていたのよ」

「これは対症療法だからだ。原因がはっきりしなきゃ、その場しのぎでしかない」

だがここに来て、原因もはっきりした。とギンコはいう。

「三途の河は蟲を寄せる土地になっている。こればかりは俺にもどうしようもない」

「蟲を寄せる土地になっているって、どういうこと?」

「そうだな……お前さんは、妖怪の山が光脈筋として復活したことは知っているか?」

「知らないわ」

「そこからか……」

ギンコは妖怪の山が光脈筋として復活した経緯を霊夢達に話した。

「光脈筋とは、光脈が流れる土地のことだ。光脈は周囲の生命に著しい活性をもたらす地下水脈のようなものだと考えればいい。まあ単純に、地下を流れているってわけじゃないがね。とにかく、近頃妖怪の山は、その光脈が流れる土地になったわけだが、そのことが、この妖怪の山の裏手に回った三途の河にも影響を及ぼしているようだ」

その影響とやらでここには蟲、とりわけ、水に縁のある蟲が集まっているようだ、とギンコは言う。雨降らしも雨蠱も、ここで集まり、海已となっていたのだ。

「じゃああなたにか？ 雨は誰のせいでもなく、元々この土地を目指して降ってたってことなのかい？」

「そういうことになりませうね。現に、今回の降雨異変は幻想郷からの道程でしか起きていない現象。私はてつきり村紗さんが雨を降らせていたのだと思いましたが……」

「最初から違うって言うてんじゃん！ もう！」

「だが土地の問題となれば、これはどうしようもないぞ。雨を止ませるのは、もう自然に任せるしかない」

正確には海已が降ることを止められはしないということである。人里に降ればその影響が出る以上、この三途の河に降らせておくのが、現状は最適解と言えた。

ギンコにもお手上げならば、この場にそれ以上の対応策を練ることが出来るものはいなかった。そうして一同が頭を悩ませている間にも、雨は降り続いていく。とりあえず、こうするしかない、とギンコは懐から蟲煙草を取り出した。

第六章 雨のたつ巳 漆

三途の河での調査を終えたギンコは、村紗水蜜と共に命蓮寺へと帰ってきた。海巳うなみを寄せないために二人揃って煙草を啜えて、とぼとぼと境内を歩いている。村紗が苦々しい表情を浮かべているのは、何も蟲煙草のせいだけではないだろう。

「ねえギンコさん。私はいつまでこの煙草を吸い続けられればいいんだい？」

「それ一本で十分だ。これからずっと、三途の河に寄り付かないんならな」

「うええ。そりゃ困るなあ。妖怪としての自己尊厳が一つ失われるよ」

「まあなんだ、水場なら他を探すんだな」

ギンコの提案に、村紗は不承不承と頷いた。確かに村紗としても、これ以上雨を寄せて、本当に巫女に退治されるのは望むところではない。不満たらたらではあるが、一応は納得して見せた。

夕暮れを背負う神社の輪郭りんかくは陰影深く厳格にみえて、しかしどこか懐かしい雰囲気まじを纏って二人を迎えている。黄昏時に懐かしさを感じるのは、帰るべき家があつたいつかを思い出すからだろうか。気づけば流れ流れて、浮草をやっていたギンコには、知る由よしもなかった。

「あ、おかえりなさい」

「ただいまー」

だから満面の笑みでそう迎えられた時、ギンコは村紗のように、すぐに返事はできなかった。

ギンコの足が止まる。若干面食らったように固まったギンコを見て、毘沙門天の旗を抱えた響子は小首を傾げる。そしてもう一度、笑顔えんごを振りまいて言った。

「おかえりなさい」

「……ただいま」

蟲煙草を口元から指先に移して、今度は淀みなく、ギンコはそう答えた。

「片付けなら手伝おう」

「え、いいですよ。大した量じゃありませんし……」

「ま、そう言いなさんな」

響子の断りをかいくぐり、ギンコはその小さな腕に抱えられていた旗の一部をゆるやかに掠め取った。取られてしまえば取り返す意欲までは持ち合わせていないようだった響子は、「じゃあ納屋の方にお願ひできますか？」とギンコの手伝いを受け入れた。

少々立て付けの悪い木製の引き戸を、ガタガタと揺らして開け放ち、中に旗を収める。簡単な仕事だ。

手や服に付いた土埃を手で払いながら、ギンコは次なる仕事を求めて口を開いた。

「他にはなんかあるかい。せつかくだから手伝うぜ」

「あ、今のでもう終わりです。ありがとうございました」

あ、そう。とギンコのやる気の矛先が失われ、彷徨さまよっているところに、横槍を入れてくる妖怪がいた。

「やけにやる気だね。急にどうしたのさ」

煙草を唇で挟みながら、器用に話す村紗が言う。頭の後ろで手を組んで、ギンコの手伝いも終始傍観ぼうかんしていた彼女は、この寺の僧であるはずなのにどこか他人事だ。

「いや、なんだ。歓迎の挨拶をされるってのはなかなかないもんでね」
ギンコが正直に白状すると、村紗は一瞬キョトンとした表情になったと思ったら、煙草を指先に移し、ははあ、と何かを察したような表情を作った。

「さつき響子に『おかえり』って言われて、それで嬉しくなつたと。ふふ。なんだ、妙な男だと思つてたけど、可愛いところもあるんじゃないん」

「そりやどうも。そういうお前さんは何も手伝わないのかい」
「そうですよ。村紗はもう少し、ギンコさんの誠実さを身につけるべきです」

からかわれているギンコに助け舟を出すように、本殿の方から白蓮が歩み寄ってくる。

「お疲れ様です。もう用事はいいのですか？」

笑顔を浮かべて白蓮が聞いてくる。用事というのは村紗に関する諸々だろう。結局一日中、村紗を連れ回すことになってしまったが、それももう終わりだ。

「ええ、一通りは。それで今夜の話ですが……」

ギンコは控えめな口調で話を切り出す。ギンコとしては、今晚もう一泊、寺に泊まりたいところだ。白蓮が笑顔を崩さずに対応する。

「もちろん、お泊まりいただいて結構です。私もお話を聞きたいですし」

「そりやそうだ。では、お言葉に甘えて」

今晚のギンコの宿泊に、白蓮も二つ返事で了承した。日はすでに黄昏を過ぎ、影が大きく寺院を覆っている。石畳の境内に規則正しく並べられた灯籠が、ひとりでに、ぼうつと怪しい火を灯した。

「さ、夜が来ますよ。皆さん中へ入りましょう」

「はーい」

白蓮の言葉に、響子と村紗は元気よく返事をした。

食事も終わり、風呂にも入り、時間は過ぎて宵の口。昼間とは打って変わって雲の切れ間が目立つ夜空では、星と月が交互に顔を覗かせ、お互いの姿を探しあうような遊戯を繰り広げていた。

そんな遊び心の感じられる秋の夜空の下で、行燈あんどんの光を背負いながらの座談会よろしく、縁側に座り込んで一献いっけん、また一献と徳利とっくりを傾けているのはギンコと村紗の二人だった。そのそばには白蓮が腰を下ろし、互いに酒を酌み交わす姿を何処か楽しげに見つめていた。

「いけるくちですなあ。ささ、もう一杯」

「おい、酒盛りしに来たわけじゃないぞ。ほどほどにしとけ」

「ふふ、今日一日で随分と仲良くなりましたね」

妖怪と人間が盃を交わす。そんなどこかでいつか当たり前に行われていた光景は、彼女にとっても歓迎すべき光景で、妖怪寺の本懐を示すものであった。

「むふふ。鬱陶しかった雨も、ギンコさんのおかげで降らなくなった

し。今宵の村紗ちゃんは機嫌が良いのです」

猪口を傾けた回数など端から数える気のない村紗は、既に酔いが回っているようで、緩んだ赤ら顔を見せながら、ギンコにしな垂れかかっていた。

同じ量を飲んでいるギンコは、まだまだ酔いが回っているような素振りは見せない。小柄な村紗とは比べるべくもない肩が、瞼が重たくなってきた村紗をしっかりと支えていた。

「あら、そういえば雨が降っていませんね。村紗が雨を降らせてしまう異変は解決したんですか？」

「ええ、まあ」

なし崩しではあるが、今宵の話題に片足を突っ込んだギンコが、ぽつぽつと話し始める。

「結局、村紗は何か悪いことをしていたんですか？」

「いいや、特に何も。こいつは海已に気に入られて、付きまとわれていただけのようです」

「海已ですか……三途の河に棲む蟲でしたっけ？」

「棲む、というよりは、蟲が寄せられているために、三途の河で起きている現象ですな。村紗には、まあ、関係のないことだ」

現在も三途の河では雨が降っていることだろう。そしてそれは、ギンコには関係のないこととも言い難いが、まあ関係のないことであつた。

「博麗の巫女や八雲が解決したがっていたのは、むしろその現象そのものだったようだ」

「解決したんですか？」

「それは俺にもどうしようもない。土地自体が変質している以上、あの土地にはこれからも蟲が集まるでしょうな」

三途の河の変質。妖怪の山が光脈筋として復活した今、周囲の土地に関しても何かしらの影響はあると踏んでいたが、あそこまで顕著に蟲を寄せる土地が生まれていたのは、ギンコをしても予想外のことであつた。

光脈筋の一端が三途の河に重なっている。なぜそんなことになつ

ているのかと言えば、境界としての強い性質が後押しとなつてい
るだろうと、ギンコは予想した。『三途の河は彼岸と此岸の境界線』とい
う、霊夢の言葉を思い出す。蟲はそういう揺らぎに吸い寄せられるの
だ。

又シの統制がない分、光脈筋より質が悪いと言えたが、これも自然
の流れの内となれば、ギンコにできることはなかった。半分ほどに
なった猪口の中身を見つめながら、ギンコは報告じみた雑談を続け
る。

「しかしまあ、不自然な点もいくつかありましてね」

「不自然な点、とは？」

それは、と言葉を区切って、ギンコは猪口の中身を飲み干した。視
界の端にスイツと徳利が滑り込んでくる。いつの間にか村紗の手か
ら白蓮の手に移動したそれが、もう一献と首をもたげていた。どう
も、と猪口で清酒を受け取り、再び満たされたそれを見て、ギンコは
口を開いた。

「三途の河の現状です。光脈筋の話はご存知ですね？」

「ええ。土地の地下に流れる、生命の源流とも言える光脈が浮き出た
土地のことでしょうか？ 地脈、龍脈とも稀に混同される、大地活性の
川。それが今回は三途の河に重なり、蟲を、とりわけ水に縁のあるそ
れを寄せているのですよね？」

「その通り。ですがそれは、ひどく稀なことなのです」

「と、言いますと？」

「本来光脈は移動することはあれ、新たな土地に、それも急激に湧き出
ることはほとんどありません。川の流れが、長い年月をかけてその支
流を増やすように、光脈の広がりもまた、長い年月を必要とするのが
常識です」

「今回はそれが急すぎる、と？」

「ええ。妖怪の山が光脈筋として復活してそう日は経ちません。一度
光脈筋として成った土地ならばまだしも、新たな土地に、こんなにも
早く光脈の支流が形成されることは滅多にないことだと思ひまして」

まあ、考えすぎかもしれないませんがね、とギンコは言葉を区切る。深

く息を吸って、三途の河での会話を思い出した。

『三途の河の変質。光脈の重なりはこの土地に蟲を寄せている。それはギンコさんにもできないことなのはわかりました。ではお聞きいたしますが、蟲師としてこの変質は看過かんかできるものでして?』
『……正直良くないことだとは思う。だがこれも理の内にある変化ならば、俺がとやかく言う道理はない。たまに様子を見に来ようと思うが、静観するしかないだろうな』

『そうですか。では此度の異変はこれにて収束といたしましょう』

『え? 終わり? こんな中途半端なのに?』

『仕方ないでしょう、霊夢。ギンコさんが言うには、これは最早自然現象と同義。それをどうにかするならば、それこそ道理を曲げる必要がありますわ』

『うーん、でもなんか不完全燃焼なんだけど……あ、小町のところはどうかなのよ。このままでいいの?』

『心配はないのではなくて? 被害も収束に向かっているそうですし。そうですわね?』

『まあそうさね。浮いてきた物の片付けさえ済んじまえば、こっちにそれ以上の不都合はない。元は今まで起き得なかった事に異常を感じて調査が始まったんだ。この雨が、雨以上でも以下でもないってんなら、対処する理由も消えるね』

『正確には雨ってわけじゃないんだが……まあ見た限り、霊体には蟲どもも無関心のようにだし、一人を除いて、問題はないだろう』

『その一人も、ギンコさんの対症療法で蟲を寄せることはなくなるそうですし。ほら、これで降雨異変は全て事もなし。村紗さんが海已を人里に招かなければ被害が出る事もないのですから』

『む。嫌な言い方だね』

『事実でしょう? それに雨に降られてしまうと、私の式たちも活動を制限されてしまって面倒なのですわ。だから、お願い致しますね?』

ギンコさん?』

八雲紫の言葉通り、彼女らが異変と呼ぶものの調査はそこで一旦の区切りを見せた。ギンコとしては終始振り回されっぱなしだったが、一連した事件の一応の終わりを実感し、村紗と二人、命蓮寺へと帰ってきた。

懸念はある。元の三途の川の事は詳しく知らないが、現状を知る限り、かの土地は非常に不安定だ。明日にでも様子を見に行く事が賢明だろう。

肺に溜まった空気をゆったりと押し出して、空を仰ぐ。そこでいつの間にか、肩に寄りかかる重みが規則正しい呼吸を刻んでいる事気がついた。

「あら。眠っていますね」

「そのようで」

ギンコの肩に背を預けるようにして座りこむそれは、穏やかな寝顔を月明かりにさらしていた。酒が回り、自然と眠気が出たのだろう。思えば異変の犯人扱いされたり、蟲患いの治療に駆り出されたりと気疲れの多い一日でもあったようだ。

ギンコを挟んで身を乗り出し、ほんのりと赤みが差したその表情を盗み見て、白蓮は小さく微笑みを浮かべた。

「ギンコさんはまだまだ大丈夫そうですね。お酒は強い方なんですか？」

「どうでしょう。深酒はした事がないので、分かりかねます」

寝息を立てる村紗の手から猪口を取り上げる。必然、ギンコの両手は猪口でふさがれる事になるが、するりと横合いから伸びた手が、村紗が持っていた方の猪口をかすめ取っていった。それと入れ替わるようにギンコの目の前に徳利が差し出される。

ギンコの猪口は満たされている。ちらりと横を見れば、にこやかに酒器を掲げる白蓮の姿がある。ギンコは徳利を手を取った。

「よろしいので？」

「ふふ、なにぶん生臭なものですから。付き合いというのも、時には必要になるんです。人生の潤滑油ですね」

「物は言いようですね。まあ、ここには、咎める者もおりませんが」

言い訳じみた説得を聞き入れ、ギンコは猪口に酒を注ぐ。秋の夜空、風の音に溶ける小さな水音。情趣の感じられる仕草で、白蓮は注がれたそれを喉の奥へと落としていく。そんな姿を隠すように、月明かりも雲間に飲まれた。

刻は明朝。一連の騒動に終止符を打ち、一夜明けた命蓮寺の境内には当事者を含めた一同が顔を合わせていた。

ギンコは旅支度を整え、履物の具合を確かめるように石畳の参道を踏みしめる。じやり、と靴底が地面をこする。問題はないようだ。後ろを振り返り、寺の全景を背景に見送りに来た三人を見る。箒を携えた響子、欠伸を浮かべる村紗、そして。

「じゃあ、世話になりました」

「こちらこそ。村紗の嫌疑を晴らしていただいて、感謝しています」

お礼にお礼を返した白蓮が一步、ギンコに向かって歩み出る。手には笹の葉で包まれた握り飯がある。その数三つ。今朝方、台所で村紗、白蓮、一輪がそれぞれ一つずつ握ったものらしい。わざわざ用意されたものを受け取らないのも失礼だと思い、ギンコは喜んで、差し出されたその包みを受け取った。

「ありがたく頂くんだよ」

「これ村紗」

「ああ、もちろん」

白蓮に小突かれながらも、ギンコの答えに満足したのか、村紗は歯を見せて笑った。

歩き出し、石畳の階段を降りる別れの間際、ギンコはちらと再度後ろを振り返り、頭をさげた。

第六章 雨のたつ巳 捌

是非曲直庁の執務室。窓のないこの部屋には普段から不思議な光が満たされている。部屋全体がぼんやりと光を帯びているというのか、とにかく、薄暗いところもなく、はつきりとした基調の空間になっていた。

物の線という線、境という境がはつきりと明確になっている。それだけにとどまらず、光源があるわけではない空間には影も生まれず、その様は部屋の主の性質を表すかのように、どこまでも明瞭だった。

影のない部屋。不自然なまでに自然の黒を排除したそういう“白い”空間で、自分の体には少々不釣り合いな大きさの執務机の前に座りながら、四季映姫・ヤマザナドゥは珍しく真面目に仕事をこなしてきた部下の報告を聞いていた。

「……そういうわけで、今回の降雨異変の原因は、土地の変質に端を発し、その蟲とやらが三途の河を目指して集まってきていたことが原因であるらしく、専門家である蟲師が言うには、これより三途の河の天気の変化は自然に任せるしかない、だそうです」

「……」

幼い顔立ちを愛想なく無表情に固めて話を聞く上司に、死神の小野塚小町はそう言って報告を締めた。執務机を挟んで上司の目の前に立っていた彼女は、伸ばしていた背筋の緊張を解いた。

突如三途の河に訪れた降雨の異変。是非曲直庁では河底に水が溜まり、沈んでいた物が浮き上がってくることで、彼岸と此岸の景観を損なってしまうという被害に見舞われた。本来天候の変化など起こり得ない場所であるからして、その異変は何か大きな異変の予兆なのかもしれないと警戒心を強めていた映姫だったが、調査員として派遣した小町の報告を聞き終われば、陰謀や原因となる犯人らしいものもなく、問題は自然のあるがまま起きた変化だということだから拍子抜けだった。

「拍子抜けですね。あの八雲が主体で動いたことを考えて、もつと大げさな事案かと思いましたが、なんのことはない、雨が降っただけだ」

「というのですか」

「みたいです。これ以上はどうしようもないみたいです。幻想郷の変化に伴って、こちら辺も雨が降るようになってしまっただけの話だそうで」

「蟲の干渉と、妖怪の山の変化ですか……」

蟲の話などいつ以来でしょうか、と映姫はつぶやいた。蟲に関しては詳しくない小町が、蟲師と名乗った男のことを思い出す。

「……蟲師の男、ギンコと名乗っていました。最近幻想郷にやってきたようですが、あの八雲紫が全面的に信頼を置いていたのは奇異でしたね」

「それはそうですね。蟲とは生命の最小単位。常に揺らぎ、希薄な存在のくせに影響だけはしつかりと残していく、境界の中に住まう生きモノです。彼女の能力である境界を操る能力とは相性が最悪。その反則的な能力の、唯一弱点と呼べる蟲との調和を保ってくれる存在が蟲師と呼ばれる彼らです。幻想郷に蟲が入り込むようになった以上、重用するのが当然かと……ですが」

「……何か気になることも？」

不自然に言葉を切った映姫に、小町が伺い立てた。気になること。そう映姫に聞いてみた小町だったが、実は彼女にも、少々気になることがあった。

小町が気になること。それは三途の河での八雲紫の行動だった。

あの時、八雲紫は河底を覗き込んで、何かを確かめていた。彼女は何かを試している。あるいは、今回の異変の根幹に関わる何かを知っている。型通りの報告ではそこまで話をしていなかったが、映姫はそれでも、小町の報告を聞いて、紫に疑いを持った。

小町が思考を巡らせる中で、映姫が口を開いた。

「彼女が自分の幻想郷で、好き勝手に振る舞う存在を看過し続けるとは思えません。蟲師を抱き込んだからといって、不安要素を任せきりにするでしょうか。何か行動を起こしてはいませんか？」

話題に切り込むように、映姫が小町に聞いた。相変わらず鋭い人だ。こうでなくては地獄の閻魔も務まらない。小町は三途の河での

紫の行動を思い出して、報告を付け足すように続けた。

「映姫様がおっしゃるのように、八雲紫は何かを知っているような態度でした。まあ年がら年中腹に一物抱えているような態度ですがね。河底を覗き込んで、意味深に『問題ないようだ』と呟いたり、村紗水蜜という舟幽霊を捕えて異変の原因だと言っておきながら、今回のことが蟲の仕業だと知っていたようでした」

「蟲の仕業だと知っていた？　ならば何故彼女はあんなことを約束して……？」

八雲紫との約束。それは異変が起き始めた折、調査のために此岸や三途の河の周辺を巫女と共に動き回ると事前報告しに来た時のこと。異変の原因にかかわらず、事後の処理を八雲に一任するという内容のもの。

この約束の効力は一体どこで発揮されるのか。八雲の真意を測りかねる二人だったが、小町が唐突に口を開いた。

「案外自分が犯人で、それを隠すために堂々と予防線を張りに来たとか」

頭の後ろで手を組んで、冗談めかして小町が言う。だとすればとんでもない大嘘つきだ。地獄の閻魔の眼の前で、「私がやったけど見逃してね」というようなものである。その言葉に、しかし映姫は眼を丸くして狐につままれたような顔をした。

「……あれ、どうしました映姫様？」

そう考えれば納得がいく。納得してしまう。八雲紫は、堂々と真正面から嘘をついて行ったのだ。紫は確かに、こう言っていた。

『異変の原因について、見当はついているんですか？』

『いいえ、全く』

だがしかし、納得してしまえば映姫は自分の眼の前で嘘をついた妖怪をまんまと逃してしまったことになる。ああ、そういえば。話が終わってからの八雲の態度も、早々にスキマを使って席を立ったことを考えれば、小町の言ったことは的を射ているようだった。

「してやられました。やはりあの妖怪は要注意です」

映姫の苦々しいつぶやきが漏れる。地獄の閻魔の目の前をすり抜

けていった妖怪の不敵な笑みが、目の前に浮かび上がるようだった。

「はあ……散々だった。映姫様の機嫌も急に悪くなるし、なんだってのさ、もう」

昨日の報告を思い出し、ため息と一緒に肩を落とし、一日たった今も少々の憂鬱さが尾を引いて心に影を差すというあまりよろしくない精神状態の小野塚小町は日々の業務を放り出し、サボりを敢行かんこうしていた。苔むした岩に背を預け、座り込んでいる。両手は後頭部で組まれ、仕事道具でもある愛用の鎌は彼女の傍に、無造作に放り出されている。

職務怠慢の象徴とも呼べる光景だが、小町にとってはこれが日常である。もとより彼女には極度のサボりぐせがあるのだ。渡し守の仕事などは、本当にやらねば殺られるほどの火急でもない限り、一日のほとんどを休憩と称して使い切る剛の者である。時には殺られることも覚悟しつつサボるのだからその勤務態度はまさに業。サボるべくしてサボると言わんばかりの振り切れっぷりである。

そんな彼女であるが、最近の仕事はとても真面目にこなしていた。それというのも、三途の河に突如起こった異変が原因である。

本来天気の変化などない三途の河に降る雨。本物の水などない彼岸と此岸に、実体を持った水が降り注いだ。それは小町の心をくすぐる案件であった。

雨音には風情がある。ただただ水がものを叩く音が、どうしてあそこまで心に響く音色となるのか。木々のざわめき。川のせせらぎ。炭の弾ける音。どれもこれもが原初の音色で、自然の息づかいを感じするには十分な材料だ。普段そういった“生きモノ”の存在が希薄な場所に長くいる小町にとって、それらは新鮮な刺激となった。だからこそ滅多に使いもしない番傘を引っ張り出して雨音を楽しんでいたし、雨音に合わせてか權を漕ぐのも楽しむことができた。口では愚痴をこぼしつつも、小町はそれほど、この雨を嫌っているわけではなかった。

そんな風にならぬ彼女につかの間のやる気を与えていた自然現象も、今と

なつては虚しいばかり。上司に若干やつあたり気味の説教をくらったとあつては、小町の消沈も無理からぬことであつた。

あれだけ心穏やかに聞き入っていた雨音も、今となつては鬱陶しさが勝る。心のささくれが目立つと顔にも表れるようで、小町は誰に見せるでもない不満で口を尖らせた。

「それもこれもあのスキマ妖怪のせいだ。くそつたれ」

「あら、それは申し訳ありませんわ」

小町の独り言のようなつぶやきに、どこからともなく返る声が聞こえた。小町がすい、と目線を向けた先。正面の虚空を切り裂いて、スキマ妖怪が姿を現した。

「独り言は慎まれたらどうかしら？ 誰がどこで聞き耳を立てているのかわかりませんかよ？」

「聞かせるつもりだったんだよ。隠そうともしない妖気なんて感じ取れないわけないだろ」

あらそう。と空中のスキマに腰掛ける八雲紫に、小町は敵意をむき出しにしてゆつたりと立ち上がった。手には大鎌を携え、鋭い眼光は目の前にいる紫に向けられていて、じわりと威圧感を纏っていた。

対する紫は余裕の表情。涼しげな笑みを浮かべ、日傘を掲げている。雨をしのぐには小さいそれを使っているにもかかわらず、彼女の周りが見えない壁でもあるように、雨は彼女の体に触れることなく地面に落ちていく。

「で？ 今日は何の用だい。細工は流々、あとは仕上げを御覧じろつてところかい？」

「はあ……あなたたつて真つ直ぐな性格なのね。そのくせ相手の裏を見抜く勘が鋭い。相手をするのが一番楽しくないタイプ……そうね、子供っぽい正義感に似た匂いがありますわ」

「言つてろ。こつちも実害被つてんだから性急にもなるさ。なんだ、喧嘩売りに来たのかい？」

なんなら言い値で買うよ、と小町は大鎌を持つ手に力を込めて、ゆつくりと腰の横で構えた。その行動を受け止め、紫も張り付けていた笑みを消し、目つきの温度を下げていく。

「ドンパチする前に映姫様の名誉のために言っておく、事の真偽を見抜いたのはあの人だ。そして、二度と嘘が通じるなんて思わないことだね」

両者がにらみ合う。立ち位置は上と下。しかし目線だけは対等に、一触即発の気配が辺りに漂う。

ピリピリとした緊張感。小町から放たれる殺気にも似たそれを受け止め、紫は嘆息した。そして次の瞬間、ふっと、力を抜き、感情の見えづらい笑みを再度張り付けた。

「今あなたと敵対する気はありませんわ。それに、異変はもうすぐ収束します。この雨も止むことでしょう」

頃合いですもの。と紫は言う。

「……やっぱりお前が主犯か」

「主犯だなんて陳腐な表現はやめてくださる？ どうせなら主謀者と
言って欲しいですわ」

「どっちでもいいさ。こちとら鬱憤が溜まってんだ。そのいつも薄気味悪い笑顔張り付けてる横つ面を引っ叩かせてもらおうよ」

「あらあら、こちらには敵意はありませんのよ？ それでも向かってくると？」

「まあね」

そう言つて小町は今にも飛び出しそうな姿勢をつくる。やつあたりに近い暴言が飛び足したものの、小町の静かな怒りの理由はそれだけではなかった。

「閻魔の前で嘘をついたんだ。舌引っこ抜かれるよりは安くすむだろ？」

表情を変えず、小町は飛び出した。

第六章 雨のたつ巳 玖《了》

ぼつりぼつりと雨が降り出したのは、やはりというか三途の河を指す道すがらであった。傘を持たぬ一人の男が、肩身を濡らしながら水気を含んだ地面を踏みしめている。命蓮寺を後にしたギンコは頂いたおにぎりを道中にてさつさと平らげ、三途の河への道を歩いていた。

背の高い草に分け入り、霧が漂う彼岸の淵を見る。そこにはギンコの想像だにしない光景が広がっていた。

「……なんだこりゃ」

「焦げた死神ですわ」

思わず漏れたそのまんまの言葉に、そのまんまの答えが返ってくる。

見りやわかる、という言葉を飲み込み、ギンコは衣装の端々から細い煙を上げる変死体に近づいた。頭のそばにしゃがみ込み、後頭部をパシパシと叩く。

「……なにすんのさ」

「おお、生きてる」

「しぶとさがないと勤まりませんもの、死神は」

「あんたが死神を語るな！」

あーもう、と体を起こした小町は仏頂面で紫を見つめた。子供っぽいその仕草からは、つい先ほどまで紫に向けられていた敵意がすっかり抜け落ちている。ここで何があったのか。いまいち状況が掴めないギンコは周囲を見渡した。特に変わっているところは見られない。昨日見た河原そのままだ。非常に静かで、じつとしていれば雨音が染み込んでくるような自然の静寂がその身を包む。一抹の侘しさすら感じさせる彼岸の声は、ギンコをして馴染み深く、居心地の良さを覚えるほどである。

観察だけでは答えが出そうもないと、ギンコは頭上に声をかけた。

「何かあったのか？」

「特に何もありませんわ。ただ決闘を少々」

「決闘？ そりゃあ……また物騒な響きだ。で、どういう理由でそんなことを？」

「そんなことを聞いてどうなさいますの？ それよりも、私は何故あなたがここに来たのか気になりますわ」

質問に答えず、紫はじとり、とギンコを見下ろした。その視線をみただけで受け止め、ギンコはしようがないと言いたげに首をすくめた。「いやなに、ただの経過観察だ。蟲師としてこの土地は大変に興味をそそられるんでね。川の姿をした境界という概念。そこに同調し、支流を作った光脈。ここに何故ここまで早く、光脈の支流が形成されたのか……気になるところではある」

川岸に近づき、水のようなものに手を浸す。沼のような、重厚な存在感が掌から指先を包む。ずるずると、川底へと誘う何かがそこにいるような感覚。ゆっくりと引き上げた手に、水気は一切なかった。

「ではここには興味本位で？」

「興味半分、本業半分ってところだな。俺としては、支流の形成を早める何かがあると踏んでいるんだが、お前さん、心当たりはないか？」

ここで初めて、ギンコは紫の方に体を向けた。立ち上がり、一つ、疑念があるといった表情。

紫はそのあからさまな物言いに、これまた嘆息した。

「本当、勘が鋭い方々ばかりで嫌になりますわ。ギンコさんって、常に冷静で飄々としているかと思えば意外とせっかちですね」

「お、やけにあっさり認めたな。半分以上かまかけだったんだが」

「あらそうでしたの。でももう関係ありませんもの。知ったところであなたには何もできませんわ」

「ま、そうだな。手段はどうあれ、光脈の支流を作り出したことに違いはない。人の範疇から外れた事象だ。ワタリの連中でも手に余るだろうさ」

得意気と呼ぶにはあまりにも余裕のある態度の紫の言葉に、ギンコは特に反論するでもなく、あっさりと肯定の意を示した。

「随分と会話が弾むじゃないか。蟲師だっけ？ あんた」
「ん？」

会話の輪から外れていた小町が口を挟む。ギンコの素性を尋ねるその声に、ギンコが振り返った。それと同時に、小町も立ち上がる。「この妖怪が何をしたのか知っているのかい？　もし知っているなら、詳しいことを聞きたいんだけど。」

「いや、悪いが俺も昨日話したこと以上の情報はない。死神の小野塚小町、だったか？　そういうお前さんこそ、何か知らんか。あいつと一悶着あったみたいだが」

「ふん、あの妖怪の思わせぶりな態度は今に始まったことじゃないけどね、これから何かする素振りがあったよ。なんでも、“頃合い”なんだとき」

「頃合い、ねえ……」

ギンコと小町は揃って訝し気な視線を紫に向ける。紫といえば、未だに空中に座し、優雅に足組みなどをしていた。

三つの目玉に見据えられた紫は、やがて喜劇の前口上でも始めようかという大仰な動作で扇子を開いた。

「ふふ、ではせっかちなお客様お二人のために、計画を最終段階に移行するといたしましょうか」

どうかご笑覧あれ、と紫は言う。事ここに至り、紫の真の目的が遂行されようとしていた。

深い霧の河。水底に沈むは蛇の群れ。溜まり、淀み、海已は大きな一になる。

紫の導くままに、虚空は切り裂かれ、新たに大きく空いた裂け目の奥から、異形を象徴する眼球が水面をじつと捉えていた。

底冷えするような不気味さを持った視線は、不思議な引力を放っているようだった。手招きされているような、そんな不確かな引力。だからその引力は徐々に三途の河の水面を持ち上げ、ずるずると川底の淀んだ一帯を引き摺り上げていった。

奇妙な光景だった。例えるならそう、蛹の羽化を大きくしたような光景。三途の河に満たされている偽りの水面を破り、その奥から群青の帯が現れる。

ギンコも小町も、言葉を失っていた。彼らの周りでは雨が静止し、

次第に姿を現わす群青の帯に吸い寄せられていく。確かに水が蠢き、うねっているというのに、水音の一切がないのは、それらが偽りの水だからだろうか。はたまた、音すら飲み込む裂け目の引力のせいだろうか。二人には判断が付きそうもなかった。

自分の鼓動すら聞こえそうな静寂の中で、天の風穴は海已を飲み込んでいく。引き摺り込んでいく。河一つ飲み込む天穴。巻き込み、捻じ曲げるように折り込むその様は、ある種の雄大きさを秘めていて、さらに暴力的であった。

「驚いた……」

ギンコは驚嘆していた。これが紫の真意。言うなれば、彼女にしかできない蟲払い。

単純な話、集めて捨てる事。紫の能力の詳細について、ギンコが知る事は少ないが、あの裂け目が、幻想郷ではない全く別のどこかに通じている事だけは肌で感じ取れた。

紫は概念としての三途の河の存在の曖昧さにつけ込み、光脈との境界を緩めることで河としての存在を二重化させ、ここに蟲を集めていたのだ。光脈筋ではヌシが統制を取っており、蟲が過剰に集まることはないため、蟲を引き寄せるには唯一無二と言っている手法である。そうして寄ってきた蟲をまとめてスキマ送りにすることで、蟲という存在を幻想郷から締め出した。

やがて海已の全てを飲み込むと同時に、裂け目はぴたりと閉じ、三途の河には平穏が戻ってきた。

「これがお前さんの狙いだっただけか」

「ええ。集まる蟲が水に縁のあるものに限られたり、せつかく集めた蟲が妖怪に引き寄せられて別の場所に行ってしまったりと色々計算外はありましたが、概ね目的は達しましたし、実験的に行った結果としては上々ではありませんこと？」

「雨も上がっちゃったね。もう降らないのかい？」

「おそろくな。今ので蟲の大部分はどこかに飛ばされちゃった。まったく、幻想郷に来てから、こういうことばかりだ」

「だがな、とギンコは前置きする。」

「こんな強引な方法は今回つきりにしとくんだな」

「あらどうしてですか？ 結構画期的な方法だと思ったのですけれど」

「どうしてもあるか。光脈の流れを歪ませるような蟲払いなど認められるわけではないだろう。どこかに必ずしわ寄せが来る。例えば、人の命が失われたりとかかな」

「……」

ギンコと紫の会話の最中、無言で小町は思い出していた。いつか自分が此岸に送り届けた子供。長雨の末、それが後押しとなって死んでしまった子供。摂理を捻じ曲げればどこかに歪みが残る。ギンコの言葉に、重みが増す。

対して紫の態度はいつもと変わらなかつた。ギンコの言葉を素直に受け止め、実行する。

「分かったら光脈を元に戻せ。しっぺ返しが出来ないうちにな」

「はいはい。まあ目的は達しましたし、あとは専門家の意見を優先いたしますわ。しわ寄せがきたら、対応のほどをお願いいたします」

そう最後に言つて紫はスキマの中に消えた。いつかのいつも通りを取り戻した三途の川に取り残されたのはギンコと小町の二人である。

「……静かになつちまつたね」

「ん？」

「雨さ。上がつちまつたねって」

「そうだな。河から光脈の気配も消えた。もう蟲が寄り集まることもないだろう」

「そうか……」

三途の川は静かに水を湛える。偽りの姿。曖昧なもの。けれど確かに息づき、生きていた雨。死して自由を手に入れた少年の体を通り抜けて行つた、誰かの思惑。複雑に入り乱れ、絡み合う。だからわからない。これから先どうなるのか。そう。例えば。

スキマを使つて移動した八雲紫がその内部で水浸しになり、体調を

崩しかけたなんて未来も、今はまだ、誰も知らない。

第七章 迷い繰る日

第七章 迷い繰る日 壺

花の香りがする。どこからともなく。花の香りがする。

不思議な香り。一つ、息を吸うほどに世界は狭まっていく。

もう頭の中は香りで満ち満ちている。暗闇の中、匂い立つ花を探す。

されど手は虚空を滑り、やがて地面の感覚さえ曖昧になっていった。

花は、花はどこ？ 問いかけるも、その問いは己の声なのか。それさえわからぬほどに、意識は香りで満たされた。

そうして闇をたゆたう。自分がわからぬまま、ただ。手を滑らせては惑い、迷った。

何も無い。何も無いのに。蠱惑的こわくな、花の匂いだけを、覚えていた。

変な夢。それが最初に感じた事だった。

微睡みに、しばしの間身を任せ、ぼんやりと天井の梁を見つめる。どんな夢だったのだろうか。それを思い出そうとしても、記憶は曖昧なままで霧散し、後に残ったのはもやもやとした、苛立ちにも似た心境だけであった。

「はあ……」

少々淀んだ心の端を切り落とし、吐息とともに吐き出す。軽くなった胸中。次いで涼やかな朝の空気を吸い込むと、先ほどまでの懸念も眠気も綺麗さっぱり無くなり、すんなりと上半身が起き上がった。

障子戸を通り抜ける陽光が格子状の影をつくる寝室で、彼女は目を覚ました。毎朝決まった時間に目覚める事は、この体が知っている。少々乱れた寝巻きの襟元や腰の結び目を直し、これまた決まった動作で布団をたたむ。そうする頃には体は完全に起きていて、おもむろに開け放った障子戸の向こうに、自らが手がける白玉楼の庭を見た。

「…………おはようございます」

今日もまた変わらぬ一日が始まる。一つ背筋を伸ばすと、それが実感できたような気がした。

着替えを済ませ、庭で剣を振るう。毎朝の日課である。彼女が操るのは大小の二刀。長刀の楼観剣、小太刀の白楼剣。このうち、彼女が今振り、操っているのは長刀の方だった。

楼観剣。とある妖怪が鍛えたとされる刀。詳しい出自やその性質は持ち主である彼女をして不明な点が多いが、一説では一振り幽霊十匹分の殺傷力がある、らしい。確かに刃紋は均一で、鰐の根元から剣先まで刃こぼれ一つなく美しい銀の流線を描くそれは名刀であろうが、その性能とやらはどうにも眉唾だった。

小柄な彼女にして楼観剣は少々大柄な刀である。しかし刀に振られることなく、彼女はその曖昧が鋼となったような名刀を苦もなく操っていく。筋力による強引さはほとんど感じられず、巧みな技が光る、そんな演武。

実戦の機会が少ない型でも、祖父から教わったことは漏らさずに復していく。草書体の如き流線を描く型。鋭角に上から下へ、下から上へと刃を切り返す型。時に体ごと踏み込み、時に切り払いで距離を取る。仮想敵を思い描き、密度高く鍛錬を重ねる。日課とはいえ、手を抜くことは無い。彼女の生真面目さが伺える、そんな朝の一幕。

白刃が風を切り、今朝の鍛錬が終了する。長刀の刃紋に朝日が滑り、納刀の音がぱちり、と締め括った。しかし、彼女の朝はまだ始まったばかりである。

「おはよう、妖夢」

「幽々子様。おはようございます」

かけられた声に振り向き、体の正面を向けて頭をさげる。彼女の主人が家の縁側に立っていた。

西行寺幽々子。幽玄とした佇まい、儂げな存在感を放つ、水色の着物を纏った女性。亡霊という種族をして特殊な出自を持つ彼女であるが、すでに死んでいるという点以外においては意外に生きている人間と大差がない。食事もすれば、眠りもする。もつとも、そのどちら

も彼女にとって必要かと言われればそうでもない。ただ生きていた時の名残りとして、彼女は生活らしきものを送る。

「今朝は早起きですね。いつもなら朝食あさげの匂いにつられて起床なされるのに」

「あら、人を食いしん坊みたいに言わないでくれる？」

「違うんですか？」

「うーん……」

縁側に腰を下ろしながら、幽々子は考える。もしかしたら、考えるふりをしているだけかもしれない。その証拠に、随分と大袈裟な態度で腕など組み始めた。眉間にしわを寄せ、むむむ、と唸る様はいかにも考えているといった風情でわざとらしい。

そうして考えに考え抜いた答えは。

「……ちよつぴりそうかもね」

「左様でございますか」

答えに意味などない。このやり取りにこそ意味がある。なんにせよ、娯楽の少ないここでは、趣向が食に傾倒するのは必然であり、幽々子を責めることはできない。従者の適当な返事に、幽々子はむう、と頬を膨らませる。

「仕方ないじゃない。食べることに以外に、することがないんだから」

「では幽々子様も剣をお振りになつてはいかがです？ 木刀なら都合できますし」

「いやよ。腕が疲れるじゃない」

「そういうものですから……」

心地よい疲労というものはある。ただ、それを感じられるようになるまでは結構な時間を要するわけで。

「疲れることはしたくないわ」

「左様でございますか」

主人のわがままを流して縁側に上がる。これから朝食の用意をしなければならぬ彼女は、必要以上の汗をかくのも憚はばかられる。

台所に向かう途中、自室に寄る。布団と、祖父が残した掛け軸以外は、これといって物が無い空虚な部屋。彼女の私室と呼べる部屋は他

にはなく、これが白玉楼にある彼女の全てである。

後で手入れをしなければ、と思いつながら、床の間に刀を二本、安置した。

「相変わらずのお部屋ね。もう少し物があってもいいんじゃない？」

「不要な物を揃えると雑念が生じ、剣筋が乱れます。武士は食わねど高楊枝。清貧を極めることで求道者たる姿を体現するのが剣の道です」

障子戸の間から顔だけ出すように部屋の中を覗き込んでいた主人に、人差し指を立て、諭すように語る。

「尤もつともらしいこと言ってるけど、それ、誰の言葉なの？」

「私です」

「ふーん……」

じつとりとした視線を向けられて、たじろぐ。

「な、なんですか」

「べつにー。妖忌も似たようなこと言ってたなあって」

その言葉で、少し面食らった表情になる。そして、少し笑って、彼女は部屋を出た。

後ろ手で戸を引き、閉じる。その時にはもう、いつも通りの表情を作って、主人の前を歩いた。

「今日の朝ごはんは何かしら」

「茄子の味噌汁、かぼちやの煮物です」

「……なんだか彩りにかける朝食ね。魚とかお肉は？」

「野菜があるだけでも有難いんですよ。下界は長雨のせいで実りが悪いらしいので」

「栗とか薩摩芋とか松茸は？」

「最後のは高級食材じゃないですか。薩摩芋も今年は実りが悪いそうです。秋神様も里にいらっしやっついてないそうですよ。って昨日一日、下界に降りて帰ってきたあとご説明しましたよね？」

「えー？ そうだったかしら？」

そう。昨日説明したはずだ。それというのも、彼女は主人の言いつけで秋の味覚を食卓に揃えるべく下界に降り、山を一日中歩き回って

散策をしたのだから。帰ってすぐ、報告という形で成果を伝えたのだ。

よく覚えている。里での聞き込みで、秋神の姉妹が里に来ていないことを知ったことも、山で白狼天狗と追走劇を繰り広げたことも、秋の味覚と称して怪しいキノコを売りさばっていた魔法使いに出会ったことも。具ぐに思い出せる。

「もう、幽々子様ってば。体を動かさないでだらだらしてるから健忘が激しくなるんですよ」

「うーん……そうなのかしら。だって昨日は久しぶりに妖夢と将棋を指して、私が三戦三勝だったわよね？ ほら、ちゃんと覚えてるわ」
「それは「昨日のことです。もう、本当に大丈夫ですか？」

「あれー？」

従者は嘆息する。確かにいつもぼんやりしている主人だが、今日はぼんやりが過ぎる。何しろ日にちを一日間違えて記憶しているのだから。

「幽々子様に言われて、昨日は大変だったんですから」

「うーん、やっぱりそんなこと言っていないような……あら？ ねえ妖

夢、あなた」

「はい？」

もう少しで台所、というところで幽々子は足を止める。それに合わせて、前を歩いていた彼女も足を止めて振り返った。

「なんですか？」

じろじろと自分を見定める主人の視線に、若干戸惑いつつ返事をする。そうしてしばし、時が流れ、不意に手を叩いた幽々子は、思いもよらぬ言葉を発した。

「あなた、半霊はどうしたの？」

「半霊？ それならいつも通り……」

彼女は半人半霊である。半人半霊はんじんはんれいとは、読んで字のごとく、半人が人間で、半分が靈魂という特殊な体質のことで、実体を持ち、肉体的な肉体の制約を受けているのが幽々子と向かい合う彼女であり、半霊の部分は、肉体につき従うように宙を彷徨う白玉のような風体の靈魂

として存在している。彼女らは一心同体であり、いついかなる時も離れることはない。はずだった。

「……………あれ？」

いつも通りの定位置。自身の半霊がいる右斜め後ろ。白玉楼の庭師、魂魄妖夢こんぱくようむは振り返り、視線を向けるとそこには。

「……………あれ？」

何も、いなかった。

第七章 迷い繰る日 弐

火急を要する事案が発生したのは今朝方。朝食の準備をしようとして台所に向かっている途中に起きた。いや、起きていた。気づいたのがその時点で、思えば起床の段階で、事案は発生していたのだ。

魂魄妖夢は混乱していた。何しろ自身の半身がいずこかへ消え去ってしまったのだから、これが焦らずに居られるはずもない。その焦りを受けて、今日の味噌汁の味付けを濃いめにしてしまった。

対して呑気に朝食を要求した主人の西行寺幽々子は「今日のお味噌汁しょっぱい」なんて、朝食の出来にしか興味がなく、妖夢はただ一人、いなくなった自身の半身の行方を必死に考えていた。

「（思い出して……昨日、どこまで一緒だったの？）」
そんな風に考えを巡らせても、普段意識しないこと故、鮮明な記憶は望めなかった。

出来事は憶えている。秋神様の情報、白狼天狗との鬼ごっこ、キノコ売人との会話、どれも憶えている。しかしそのどれもで、自分の半霊を意識することなどなかった。

朝食の箸が止まる。かぼちやの煮物に近づいては離れを繰り返し、妖夢は完全に上の空だった。

「妖夢」

「はいっ。」

だからそんな状態の時に滑り込んできた主人の、自分を呼ぶ声に、適当に反応してしまうのも無理はないと言えた。構わず、幽々子は濃いめの味付けのお味噌汁を啜り、続けた。

「そんな上の空でお料理されても美味しくないし、食事も楽しくないわ」

「す、すみません……」

「だから、さっさと半霊を探していらっしゃい。必要があれば下界に降りることも許可します。その間は私の世話や、白玉楼のことは考えなくて結構。自分の用事に注力なさいな」

優しい笑顔を向けられ、妖夢は主人の気遣いになんだか申し訳な

くなつてしまった。理由や原因はさておいて、これは自分の不始末だ。それを解決するために主人に我慢をさせるのは、やはり従者としては失格と言える。そうなるともう、妖夢としては平謝りするしかない、口をつけて謝罪の言葉が漏れた。

「すみません……」

「もう、上の空で言葉も選ばないの？」

「え？」

消沈気味の妖夢を元氣付けてくれる。そんな言葉を、幽々子は選んでいく。

「こういう時は『ありがとう』でしょ？」

「……」

につこりと笑みを浮かべて、幽々子はかぼちちの煮物を頼張った。「うん、まあまあね」と、そんな評価も、今は全てが優しさに思えてくる。いつもはぼんやりと頼りない部分もあるが、やはり自分はこの人に仕えて良かったと、こういう時、妖夢は思い知らされるのだった。

朝食の後片付けを終えて、妖夢は下界へと降り立っていた。なるべく早く半身を見つけ出さなければという使命感のみが強まる一方で、今後の行動方針といえば「半霊を探す」という雑破な内容なのだからどうしようもない。

ともかく、情報も心当たりもない以上、昨日の自分の行動を洗い直すしか方法はないように思われ、妖夢はまず、人里を目指していた。

昨日の自分の行動その一、人里にて秋の味覚を探す。これは単純に街道沿いの店屋を巡り、店頭の商品を見定めただけだ。半霊失踪の手がかりとなるようなことは何もないように思われるが、問題の起点はどこに転がっているのか知れない以上、妖夢も気を抜くわけにはいかなかった。

しかしやはりというか、ここには半霊の行方の手がかりになりそうなことはなかった。道を歩いていたら半霊が突然消え去ったなどという話でもない限り、見失うなどあり得ない。手がかりがないことも当然と言えるが、やはり落胆の色は大きく、妖夢は大きくため息をつ

いた。

歩幅の小さい足取りで街道をゆく。道行く人よりも肩を落として
いるだけで、なんだか世界から浮いた気分になってしまう。このまま
半霊が見つからなかったらどうしよう。そんな考えが頭をよぎり始
めたところで、妖夢はある光景に出くわした。

例年より品の薄い野菜の小売店の前で、何やら店主と話し込む白黒
衣装の金髪の少女。彼女は足元の籠の中身の買い取りを店主に求め
ているようで、少し近づけば、その会話の内容は耳に入ってきた。

「そんな二束三文で買い叩くこともないだろ？ この秋はキノコが品
薄じゃないか。需要はあるはずだ」

「そうは言ってもなあ。お嬢ちゃんの持つてくるキノコは真贋入り乱
れてるから、籠の中身を丸ごと買い取るってのもなあ」

妖夢が見止めたのは自分が収穫、もとい拾ってきたキノコを売りさ
ばこうと奮闘する霧雨魔理沙の姿だった。昨日に懲りず、また店主に
絡んでいるところを見ると、昨日と同じように自分がしゃしゃり出
て、食用キノコを見分けてしまうと、非常に気まずい雰囲気になりそ
うだと思った。

しかしまあよくも食い下がるものだ。話し合いというより、どちら
かが折れるまで要求をぶつけ合っているようである。

見て見ぬ振りをするというのも、案外気を遣うものである。魔理沙
と店主の会話は平行線をたどり、こちらもやや、やきもきし始めたと
ころで、すい、と横合いから、珍妙な介入者が現れた。

少女の足元にある籠に手を突っ込み、幾つかのキノコを手取る白
髪の男。森の緑を垂らしたような深緑をたたえる目で品定めをする。
それだけで目を惹く容姿ではあったが、珍妙な、というのはその男の
纏う雰囲気というものが尋常ではないことから、妖夢はそう思った。
所作の一つ一つが浮き上がって見えるというか、なんとも言えず、こ
の場にそぐわない存在感を放っている。

「おや、お兄さんは確か……」

「げ」

妖夢をして初めて見る男であったが、店主も魔理沙もその男とは顔

見知りのようで、対照的ではあるものの、双方ともに反応をしていた。

男は籠の中身を一通り見聞すると、一つ息を吐いて魔理沙を見た。

「お前なあ、こんなもん、よく売り払えると思っただもんだな」

「おー！ お兄さん、目利きできんのかい？」

「ちよつと待て。おいギンコ。今は私とおっさんの商談中なんだ。話なら後で聞くから……」

若干焦り気味の魔理沙が言い終わるより早く、ギンコ、と呼ばれた男の声が滑り込んで行く。

つまみ上げたキノコを店主の鼻先に持つて行き、魔理沙にとっては邪魔にしかならない情報を語り出す。

「これはウラシマタケ。食えば長く胃腸が弱り、衰弱して死に至ることもある。死んだ奴の見た目がまるで十年は老け込んだように見えることからそう呼ばれるようになった」

「うぐっ」

「ほう……」

男は滔々と語り出す。次々と手に取るキノコの効用、この場合は人体への悪影響を上げ連ねては、分類するように道端に放り投げている。放り投げられたキノコは虚しくも地面を転がり、魔理沙は諦めたように嘆息した。やはり悪事は栄えないのだろう。昨日に引き続き商談、もとい詐欺まがいな邪魔された魔理沙を見て、妖夢はそう思った。

やがてギンコの手によって一通り籠の中身が整理された後。中身の分量は十分の程度まで目減りしていた。

「と、まあ食用にならんこともないやつらは、このくらいだ。どうだい」

「ううむ、これならさっきの半値もないぜ、霧雨の嬢ちゃんよ」

「あーもう、はいはい。いいよそれで」

道に転がる毒キノコを拾い集めながら、魔理沙は厄介者を追い払うように手を振った。

「だとか」

「おう。ありがとうな、兄ちゃん。いやー助かったぜ」

豪快に笑う店主に、ギンコは返す言葉で商談を持ちかけた。

「なんの。で、この見返りと言っちゃあなんだが、ご店主よ。野菜を幾つか譲っちゃあもらえんかね」

「あー！ お前、最初からそれが目的かよー！」

ギンコの言葉に、すわと立ち上がった魔理沙が噛み付く。一連の会話に聞き耳を立てていた妖夢も、これには思わず手を打ちそうになった。汚いぞ、という魔理沙の口撃もするりと躲し、ギンコは涼しげに店主に向き直る。

「さあな。で、どうだい」

「はっはっは！ もちろんいいぜ！ 霧雨の嬢ちゃんも、この兄ちゃんくらい上手にやんねえとな」

「くっそお」

「どうも……ん？」

そのやりとりで感心し、注視していたからか、ギンコと妖夢の視線がはた、と交錯した。わずかな硬直であったが、ギンコが固まれば、彼を中心にしていた二人も自ずと視線の先を目で追って、妖夢の方を見ることになる。

「あれ、妖夢じゃないか。買い物か？」

「庭師の嬢ちゃんじゃないか。いらっしやい」

「ああ、どうも……いえ！ 今日はいい物とかそういうわけじゃなくて……」

店主と魔理沙は妖夢と既知の仲。そしてギンコとは。

「あの」

「初めまして、だな。ギンコという。最近、こっちにやってきた者だ」
「あ、外の方なんですネ。どうりで……」

妙な感じだと思いましたが、そう続けそうになって、妖夢は言葉を区切った。

「えっと、魂魄妖夢と申します。初めまして」

少々のぎこちなさはあったものの、なんとか言葉をつなげて妖夢は頭を下げた。その生真面目な一礼に、ギンコも「ご丁寧に、どうも」と応じた。

「それで？ 買い物じゃないとなんなんだ？ てかお前、いつもくつついてる半霊は？」

「あーそのことなんですけど……」

妖夢が事情を語るより早く、魔理沙が異変に気がついた。隠すことでもない、妖夢は三人から、あわよくば、有益な情報を得られるかもしれないと淡い期待を抱きながら、自身の状況を伝えた。

「なんだそりゃ？ 半身の家出か？」

「冗談でもやめてくださいよ。本当にそうだったらどうするんですか」

「自分の心に聞いてみるとか？ 剣の道でもあるんだろ？ めーきよーしすいって感じの」

「そんなあやふやな明鏡止水があつてたまりますか。とにかくです。何か些細なことでも構いません、情報はありませんか？」

情報つて言ってもなあ、と一様に首をひねる中、一人、物憂げに視線を伏せ、静かに何かを考える男がいた。

「あの、ギンコさん？ なにかご存知なんですか？」

「ん？ ああ、いやすまん。お前さんの求めるような情報は持っていないんだが……いや、いい。こつちの話だ」

「？」
何か言いたげなギンコの態度に、魔理沙が突っ込むように言葉を投げた。

「そんな風に言われたら気になるだろ。なんでもいいから言っちゃえよ」

「ん？ そうか……」

魔理沙の言葉を受けて、ギンコが妖夢を見る。翡翠の視線。キノコを見ていた時とはどこか違うような、翳りのある緑の気配に、妖夢は背筋が伸びる思いで、次の言葉を待った。

「……魂魄妖夢、だったか」

「は、はいー」

おもむろに開かれた口からは自分の名前が出てくる。何を言われるのだろう。身構えていたところに、滑り込んできたのは意外な言葉

だった。

「……お前さん、廻廻という名に、聞き覚えはないか」

「かいろう?」

「ああ、どうだ」

「……いえ、存じ上げませんが……?」

「そうか……いや、魂魄という姓に、こちらは聞き覚えがあつてな。なんでも、俺たち蟲師の間に伝えられる、とある蟲に名をつけた若者として魂魄という若者が現れるんだが……まあ、気にするほどのことでもないだろう」

「はあ……」

ギンコの知る魂魄と、妖夢の姓は何か繋がりがあのだろうか。それよりも、妖夢は一つ、気になることをギンコに尋ねた。

「あの、蟲師、というのは」

蟲師。言葉の流れを汲めば、ギンコが名乗るものである。役職? 生業? 種族? 様々に考えられることがあるが、妙に興味を惹かれるその響き。妖夢の質問に、ギンコ言葉が返ってくる。

「蟲師、というのは俺の生業のことだね。最近ここいらで起こる、奇異な現象、特異な気がかり、それらを解消してまわっている。お前さんも、何か困ることがあったら相談してくれるといい。まあ今回は、あまり力になれず、申し訳ないがね」

「あ、いいえ、とんでもないです」

では、私はこれで、と妖夢はその場を去ろうとする。話し込んでしまったが、自分には半霊を探すという火急の用事があるのを、ギンコの言葉で思い出した。

振り返り、駆け出す。その一瞬、魔理沙の方を振り返り、妖夢はお節介を焼いた。

「魔理沙も、詐欺まがいもほどほどにね。昨日といい今日といい、きつとまた失敗するわよ」

「うるせー。大きなお世話だよ」

じゃあね、と今度こそ妖夢は駆け出した。次はどこに向かおうか。昨日の自分の行動その二。それを追うべく、妖夢はその足を、妖怪の

山に向けた。

「……………ん？」

妖夢が走り去った後、その背中を見送り、魔理沙が思い至る。

「私、昨日は何もしてないぞ……………」

第七章 迷い繰る日 参

実り多き秋の季節。山には紅葉が色づき、どこまでも続きそうに透き通る青空との対比が、見る者の心に秋の到来を感じさせる。斑まだらに塗り分けられた赤の色調は、巡る年並みにも風化することなく、今年も新鮮な雰囲気纏まとっていた。

そんな一枚の絵画のような風景にも実じつはあり、山という土地である以上、住まう生き物たちが根付いているのは当然のこと。彼らは自らが生きる俯瞰風景を見ることはなく、入り組んだ樹木の迷宮に縄張りを張り巡らせている。外から眺める分には泰然自若として動かざる山なれど、一度足を踏み入れればそこは異界。過剰に動的な気配に満ち、まるで生き物の体内にいるかのような錯覚に陥る。そこはいつか、山の神を名乗ることもあった、彼らの支配領域。

妖怪の山。あんまりにもそのまま名が付いているそこには、様々な妖怪たちと、天狗が住まう。

人里を通り抜け、山の麓に差し掛かるまで、魂魄妖夢は一つ、気がかりなことがあった。

それは人里で出会ったギンコという男に言われた一言。かいろう、という名に覚えはないか、という問いについてだった。

妖夢はギンコにそう問われ、ない、と答えた。しかし後になって考えてみれば、どうにもそのことが頭から離れず、自分はその“かいろう”という何かを知っているような気がしてきたのだ。

「うーん……気にしすぎかな」

歩く以外何をするでもない頭が余計なことを考えたのだろう、妖夢はそう結論つけた。

そうこうしているうちに、妖夢は妖怪の山の麓から山道へと足を踏み入れた。

頭上にまばらに突き出した枝葉が秋の日差しを遮る。紅葉に目を奪われ、上ばかりを見ていれば、不意に葉の間から顔を出した太陽に視界を奪われる。わずかに眩んだ目で地上を見下ろせば、そこには流

動する影の川が流れていて、先走って落ちた葉がわずかに地面に張り付いていた。秋の山は、本当に目移りが過ぎるほど活力に溢れている。

そんな山道を、上も下も見ず、ただ黙々と前だけを見て、妖夢は進んだ。まるで景色など興味はないと言わんばかりの歩幅で分け入って行く。

そう、今気を配るべきは木々の枝葉ではない。その向こう、陰。

ここは既に領域なのだ。不可侵の領域。山の神のお膝元。異界。例える言葉は幾通りもあるが、侵入者への対処はただ一つ。

「止まりなさい。これより先は我ら天狗の領域。目的の如何では立ち退いてもらいます」

妖夢の前方。一際強い風が吹いて、目を細めた一瞬に一匹の妖怪が姿を現していた。姿を現すやいなや、警告を発する、盾と剣を携えた少女。紅葉の意匠を凝らし、袴の裾を広げた服を翻し、妖夢の前に立ちふさがった。

「こんにちは。樫さん」

「こんにちは。今日はこういった御用向きですか？」

「今日は少々、昨日とは違う探し物をしていました」

「探し物、ですか」

ええ、と妖夢は三間はある両者の距離を気にせず事情を話し始めた。

「実は私の半身が行方不明でして。早急に見つけ出さねばならないのです。そこで昨日、私が行ったことのある場所を中心に探索をしているのですが……」

「この山にあなたの半身がいるのでは、と？」

「はい……そういえばあなたは千里眼を持っていましたね。どうですか。この山に私の半身はいますか？」

「私が知るところではそのようなものは見かけませんね。立場上、山の全容にはいつも気を配っていますが」

「そうですか……」

妖夢の問いに、白狼天狗の犬走いぬぼしり樫もみじは答えた。彼女の千里を見通す

能力を持ってしても見つからないというのなら、本当にこの山に半霊はいないのだろう。

「あなたを疑うわけではありませんが、少々山を探索しても？ 自分で納得をしたいのです」

「……まあいいでしょう。では監視ついでに私も同行します。よろしいですね」

「ええ。よろしくお願いします」

妖夢は権を連れて山の探索を始めた。

ざくりざくりと山を分け入り、とりあえず歩く。山道を通っている分には、天狗たちは何も言わない。しかし今のようには、道無き道を山の奥へと進めば、必ず警告が飛んでくる。今回は監視という形で、権が妖夢に同行しているため、荒っぽいことにはなりはしないが、普段なら追い返されて終わりだ。もっとも、千里眼を持つのは天狗の中でも権一人なので、彼女が能力を使っていないときは多少の進入は許されたりする。

山を探索すること一刻あまり。やはりあてもなく歩き回るだけでは良い結果など期待できるわけもなく、時間を無駄にしたという苛立ちにも似た焦りだけが募った。

探し回って、歩き回っているだけでは妖夢も気疲れしてくる。気分転換に、権に語りかけた。

「そう言えば、昨日は山に入ることを拒んでいたのに、今日は寛容ですね」

「？ 何を言っているんですか？」

「ほら、昨日は私が」主人に頼まれて秋の実りを分けてもらいに来た“と言って山を散策しようとしていたら追い返そうとしたじゃないですか」

昨日のこと。妖夢は主人の西行寺幽々子の言いつけで秋の味覚を探しに下界に降り立った。人里にて「今年は長雨があったせいで実りが悪い」との情報を受けて、直接山を散策しようと思い、妖怪の山へとやってきたのだが、その時は「山の実りは秋神様が人里に降り立つまで待ちなさい」と言って権は妖夢を追い返そうとしたのだ。

妖夢はそのことを話したつもりだった。しかし、椀は足を止め、妖夢を怪訝な表情で見つめた。

「昨日？ あなた、昨日私と会いましたっけ？」

「何言ってるんですか。会いましたよ。あんなに追い掛け回してきたじゃないですか」

妖夢は昨日のことを思い出す。今は駄目だと言われても、妖夢も主人が望むこと故引き下がらず、探索を強行しようとしたところ、椀も実力行使で応じてきた。結局秋の味覚どころではなくなってしまうので、妖夢は渋々と引き上げたのだが……。

「あなたは何を言っているんですか。私にそんな記憶はありません」「え？ そんなはずは……」

ない、そう言いかけたところで、妖夢は幽かな香りを感じ取った。それは小さな違和感にも似た香り。どこかで嗅いだことのあるような、懐かしいような香り。

ぼうつと、意識が遠のく。妖夢は立ち尽くした。

「妖夢さん？」

昨日のこと。そう、昨日のことだ。私は知っている。この香りを知っている。今朝の夢でも嗅いだこの香り。認識を曖昧に溶かしていくような気がする、香り。

「どうしたんですか」

思えば今朝からすれ違いは起きていた。何か、忘れているようだ。記憶がかき混ぜられていく。思い出せないことがある。そういう不確かな確かさが、妖夢の頭を満たして、最後には香りだけが残った。思い出せない。私があここに来た理由。秋の味覚。主人の言いつけ。昨日の出来事に霧がかかり、霧散していく。その霧を晴らそうと大きく息を吸い込んだ。次の瞬間。

「妖夢さん！」

強い芳香に脳を貫かれ、妖夢は意識を失った。

花の香りがする。どこからともなく。花の香りがする。

不思議な香り。一つ、息を吸うほどに世界は狭まっていく。もう頭の中は香りで満ち満ちている。暗闇の中、匂い立つ花を探す。

されど手は虚空を滑り、やがて地面の感覚さえ曖昧になっていった。

花は、花はどこ？ 問いかけるも、その問いは己の声なのか。それさえわからぬほどに、意識は香りで満たされた。

そうして闇をたゆたう。自分がわからぬまま、ただ。手を滑らせては惑い、迷った。

何も無い。何も無いのに。蠱惑的な、花の匂いだけを、覚えていた。

飛び起きるようにして、妖夢は目を覚ました。息が乱れ、気分は最悪。寝汗も大量にかいているようだ。

嫌な夢を見た気がする。そんな漠然とした不安感にも似た、不確かさで表情を歪める。

「はあ……」

そんな気分を察するように、頭の中身は漠然としたまま、ため息と一緒に霧散した。

障子戸を通り抜ける陽光が格子状の影をつくる寝室で、彼女は目を覚ました。毎朝決まった時間に目覚める事は、この体が知っている。少々乱れた寝巻きの襟元や腰の結び目を直し、これまた決まった動作で布団をたたむ。そうする頃には体は完全に起きていて、おもむろに開け放った障子戸の向こうに、自らが手がける白玉楼の庭を見た。

「……おはようございます」

今日もまた変わらぬ一日が始まる。一つ背筋を伸ばすと、それが実感できたような気がした。

……今日もまた？ その言葉に、どこか違和感を覚えた。

第七章 迷い繰る日 肆

冥界の空青む早朝。白玉楼の庭には、もう何度繰り返したかもわからない日課をこなす妖夢の姿がある。

彼女が操るのは大小の二刀。長刀の楼観剣、小太刀の白楼剣。このうち、彼女が今振り、操っているのは長刀の方だった。

楼観剣。とある妖怪が鍛えたときれる刀。詳しい出自やその性質は持ち主である彼女をして不明な点が多いが、一説では一振り幽霊十匹分の殺傷力がある、らしい。確かに刃紋は均一で、鏢の根元から剣先まで刃こぼれ一つなく美しい銀の流線を描くそれは名刀であろうが、その性能とやらはどうにも眉唾だった。

小柄な彼女にして楼観剣は少々大柄な刀である。しかし刀に振られることなく、彼女はその曖昧が鋼となったような名刀を苦もなく操っていく。筋力による強引さはほとんど感じられず、巧みな技が光る、そんな演武。

実戦の機会が少ない型でも、祖父から教わったことは漏らさずに反復していく。草書体の如き流線を描く型。鋭角に上から下へ、下から上へと刃を切り返す型。時に体ごと踏み込み、時に切り払いで距離を取る。仮想敵を思い描き、密度高く鍛錬を重ねる。日課とはいえ、手を抜くことは無い。彼女の生真面目さが伺える、そんな朝の一幕。

白刃が風を切り、今朝の鍛錬が終了する。長刀の刃紋に朝日が滑り、納刀の音がぱちり、と締め括った。しかし、彼女の今朝はどうにも勝手が違っていた。

「……やっぱりしっくりこない」

「おはよう、妖夢」

「あ、幽々子様。おはようございます」

どうにも手持ち無沙汰な感じが抜けない今朝の日課を終えたところに、白玉楼の主人、西行寺幽々子が声をかける。自分を見て、頭を下げて挨拶する従者を見て、幽々子はとある違和感を指摘した。

「あら、妖夢あなた……」

「……お気づきになりましたか」

幽々子が指摘したのは妖夢の半身、半霊のことだった。いつも彼女の周囲を漂い、追従する人魂のようなそれが、どういうわけか見当たらない。

「え？ どうして？」

「それが原因もわからず……屋敷内を探してはみたのですが今朝からどうも見当たらなくて」

「見当たらなくて……ずいぶん呑気ね。演舞なんてやっている場合？」

「火急ではありますが一身上の都合ですので……」

幽々子様の御許可をいただく前に下界に探しに行くことも叶わず、とりあえずいつも通り朝の日課を消化していました、と妖夢は説明する。そうして説明しつつ、縁側に立つ幽々子へと近づいていった。

「申し訳ありませんが、今日一日お暇を頂きたいと思ひまして。起床をお待ちしておりました。よろしいですか？」

「それは構わないけれど……探すあてはあるの？」

「あるとは言えませんが……とりあえず記憶にあるところを探してみようかと思ひます」

それでは失礼いたします、と妖夢はもう一度主人に頭を下げた。白玉楼を出発した。

妖夢は下界へと降り立っていた。なるべく早く半身を見つけ出さなければという使命感のみが強まる一方で、今後の行動方針といえば「半霊を探す」という雑破な内容なのだからどうしようもない。

ともかく、情報も心当たりもない以上、昨日の自分の行動を洗い直すしか方法はないように思われ、妖夢はまず、人里を目指していた。人里に到着し、情報を集める。しかし、これと違って収穫はない。

落胆が重みを増して、両肩にのしかかった。道行く人よりも肩を落とすだけで、なんだか世界から浮いた気分になってしまう。このまま半霊が見つからなかったらどうしよう。そんな考えが頭をよぎり始めたところで、妖夢はある光景に出くわした。

野菜の小売店の前。道に転がる幾つかのキノコ。それを拾い集め

る白黒の衣装を身にまとった少女に、籠の中身を指差して、店主と会話する白髪の男。その男を見たとき、妖夢は妙な既視感に囚われた。

近づけば会話が聞こえてくる。妖夢はその珍妙な見た目をした男に注意を払いながら、三人に近づいていった。

「ありがたいな、兄ちゃん。いやー助かったぜ」

豪快に笑う店主に、男は返す言葉で商談を持ちかけた。

「なんの。で、この見返りと言っちゃあなんだが、ご店主よ。野菜を幾つか譲っちゃあもらえんかね」

「あ！ お前、最初からそれが目的かよ！」

男の言葉に、すわと立ち上がった少女、霧雨魔理沙が噛み付く。汚いぞ、という魔理沙の口撃もするりと躲し、男は涼しげに店主に向き直る。

「さあな。で、どうだい」

「はっはっは！ もちろんいいぜ！ 霧雨の嬢ちゃんも、この兄ちゃんくらい上手にやんねえとな」

「くっそお」

「どうも……ん？」

男の振る舞いを注視していたからか、男と妖夢の視線がはた、と交錯した。わずかな硬直であったが、男が固まれば、彼を中心にしていた二人も自ずと視線の先を目で追って、妖夢の方を見ることになる。

「あれ、妖夢じゃないか。買い物か？」

「庭師の嬢ちゃんじゃないか。いらっしやい」

「ああ、どうも……いえ！ 今日はいい物とかそういうわけじゃなくて……」

店主と魔理沙は妖夢と既知の仲。そして男とは。

「あの」

「初めまして、だな。ギンコという。最近、こっちにやってきた者だ」
「あ、外の方なんですな。どうりで……」

妙な感じだと思いました、そう続けそうになって、妖夢は言葉を区切った。

「えっと、魂魄妖夢と申します。初めまして」

少々ノギこちなさはあったものの、なんとか言葉をつなげて妖夢は頭を下げた。その生真面目な一札に、ギンコも「ご丁寧に、どうも」と応じた。

「それで？ 買い物じゃないとなんなんだ？ てかお前、いつもくつついてる半霊は？」

「あーそのことなんですが……」

妖夢が事情を語るより早く、魔理沙が異変に気がついた。隠すことでもない、妖夢は三人から、あわよくば、有益な情報を得られるかもしれないと淡い期待を抱きながら、自身の状況を伝えた。

「なんだそりや？ 半身の家出か？」

「冗談でもやめてくださいよ。本当にそうだったらどうするんですか」

「自分の心に聞いてみるとか？ 剣の道でもあるんだろ？ めーきょーしすいって感じの」

「そんなあやふやな明鏡止水があつてたまりますか。とにかくです。何か些細なことでも構いません、情報はありますか？」

情報つて言つてもなあ、と一様に首をひねる中、一人、物憂げに視線を伏せ、静かに何かを考える男がいた。

「あの、ギンコさん？ なにかご存知なんですか？」

「ん？ ああ、いやすまん。お前さんの求めるような情報は持っていないんだが……いや、いい。こつちの話だ」

「？」
何か言いたげなギンコの態度に、魔理沙が突っ込むように言葉を投げた。

「そんな風に言われたら気になるだろ。なんでもいいから言っちゃえよ」

「ん？ そうか……」

魔理沙の言葉を受けて、ギンコが妖夢を見る。翡翠の視線。キノコを見ていた時とはどこか違うような、翳りのある緑の気配に、妖夢は背筋が伸びる思いで、次の言葉を待った。

「……魂魄妖夢、だったか」

「は、はい！」

おもむろに開かれた口からは自分の名前が出てくる。何を言われるのだろうか。身構えていたところに、滑り込んできたのは意外な言葉だった。

「……お前さん、廻廻という名に、聞き覚えはないか」

「かいろう？」

「ああ、どうだ」

「……いえ、存じ上げませんが……？」

「そうか……いや、魂魄という姓に、こちらは聞き覚えがあつてな。なんでも、俺たち蟲師の間に伝えられる、とある蟲に名をつけた若者として魂魄という若者が現れるんだが……まあ、気にするほどのことでもないだろう」

「はあ……」

ギンコの知る魂魄と、妖夢の姓は何か繋がりがあつたのだろうか。それよりも、妖夢は一つ、気になることをギンコに尋ねた。

「あの、かいろう、というのは」

かいろう。回廊、海老、海楼。言葉だけならいくつもあつた。しかし妖夢をして、その言葉にはどこか聞き覚えがあるような気がしていた。さっきの妙な既視感と、何か関係があるのかもしれない。そんな直感めいた感覚から、ギンコに尋ねた。

対してギンコは一呼吸おいて、廻廻について語り始める。細く長く、息を吐き出すようにギンコの口から蟲の話が漏れ出していく。

「廻廻、とは漆黒の筒状の蟲だ。花のような匂いを出し、虫や獣を誘い込み、それら獲物の時間を円環状に歪める、と言われていた。誰にも確かめる術はないが、囚われた者は同じ時間を繰り返し生きることになる、と」

「そんなものが……本当に？ それに蟲つて？」

「蟲、とは小さく、矮小な生きモノのことだ。さつきも言ったが、この廻廻という蟲を最初に見つけたとされるのが魂魄という若者でな。お前さんに縁のある者かもしれん、と思ったわけだ」

「……その」

妖夢はその蟲、とやらにもう一步踏み込む。これはなんとなく、自分とは無関係ではないような気がする。何かを忘れているような気がする。夢を見ていたような、気がする。

「ん？ どうした」

まただ。花の香りがする。この漠然とした不安感の奥底から。まるで自分の肺の中で花開かせるようにじわり、と花の香りが染み出してくる。

「おい、妖夢？」

「嬢ちゃん？ どうした、急に胸を押さえて」

この感覚を知っている。どうして今まで気がつかなかった。夢の中で、なんども、わたしは。

「おいー！」

世界が狭まる。ゆっくりと歪められ、出口はどこか遠く、いや、どこかの最初につながっていく。眩暈のしそうな芳香が、脳を塗りつぶしていく。そうして漆黒がわたしを飲み込んで、また、妖夢は目を閉じた。

花の香りがする。どこからともなく。花の香りがする。

不思議な香り。一つ、息を吸うほどに世界は狭まっていく。

もう頭の中は香りで満ち満ちている。暗闇の中、匂い立つ花を探す。

されど手は虚空を滑り、やがて地面の感覚さえ曖昧になっていった。

花は、花はどこ？ 問いかけるも、その問いは己の声なのか。それさえわからぬほどに、意識は香りで満たされた。

そうして闇をたゆたう。自分がわからぬまま、ただ。手を滑らせては惑い、迷った。

何も無い。何も無いのに。蠱惑的な、花の匂いだけを、覚えていた。

第七章 迷い繰る日 伍

飛び起きるようにして、妖夢は目を覚ました。息が乱れ、気分は最悪。寝汗も大量にかいているようだ。

嫌な夢を見た気がする。そんな漠然とした不安感にも似た、不確かさで表情を歪める。

何か、何か忘れている。額を押さえるようにして頭の靄を振り払おうとする。

思い出さなければ。思い出さなければいけないような、何かがあった。妖夢は必死に、頭を巡らせた。しかし、

「はあ……」

思い出せなかった。何を夢見ていたのだろう。靄は晴れたが、その先を見通すことは叶わなかった。

着替えを済ませ、庭で剣を振るう。毎朝の日課である。

彼女が操るのは大小の二刀。長刀の楼観剣、小太刀の白楼剣。このうち、彼女が今振り、操っているのは長刀の方だった。

楼観剣。とある妖怪が鍛えたときれる刀。詳しい出自やその性質は持ち主である彼女をして不明な点が多いが、一説では一振り幽霊十匹分の殺傷力がある、らしい。確かに刃紋は均一で、鏢の根元から剣先まで刃こぼれ一つなく美しい銀の流線を描くそれは名刀であろうが、その性能とやらはどうにも眉唾だった。

小柄な彼女にして楼観剣は少々大柄な刀である。しかし刀に振られることなく、彼女はその曖昧が鋼となったような名刀を苦もなく操っていく。筋力による強引さはほとんど感じられず、巧みな技が光る、そんな演武。

実戦の機会が少ない型でも、祖父から教わったことは漏らさずに反復していく。草書体の如き流線を描く型。鋭角に上から下へ、下から上へと刃を切り返す型。時に体ごと踏み込み、時に切り払いで距離を取る。仮想敵を思い描き、密度高く鍛錬を重ねる。日課とはいえ、手を抜くことは無い。彼女の生真面目さが伺える、そんな朝的一幕。

白刃が風を切り、今朝の鍛錬が終了する。長刀の刃紋に朝日が滑り、納刀の音がぱちりと締め括った。しかし、彼女の朝はまだ始まったばかりである。

これから朝食の準備をしなければならぬ、そういう折に、妖夢はふと、自分の腰に差さっている大小二本の刀のうち、小の方に気を取られた。白楼剣。魂魄の家に伝わる家宝であり、斬った者の迷いを断ち切ることができる刀。幽霊を斬れば成仏させることができるなど、効果のほどは確かだが、あまり抜くことのない刀ではある。

「……」

しかし、この時妖夢は刀に手をかけ、おもむろに刀身を抜き放った。刃紋の目立たぬ直刀に近い造りの小太刀。見た目こそ華もなく、どこぞの古物商でも曰くをつけるのが精一杯そうな、地味なそれを高く掲げる。そうしているうちに、刀身に日の光が反射して、妖夢が一瞬目を閉じた、その時だった。

「……」

頭の中で水を打ったようにあたりは静まり返り、妖夢はこの一日を以前も見ることがあると思っただ。

夢の内容を思い出す。何が何やらわからない。自分はおそらく、この一日を繰り返している。どの一日を？ 一体いつから？ どれくらい？ 様々な疑問が浮かんでは消えていく思考の濁流。自分の中の常識が混ぜっ返されて、ぐちゃぐちゃになる。

「おはよう、妖夢」

「幽々子様……」

気を抜くと泣き出してしまいそうな声が漏れる。まただ。これも、見たことがある。

「あら、妖夢。あなた……」

半霊はどうしたの？

「半霊はどうしたの？」

何が起こっているのかさっぱりわからない。だが一つ言えることは、この尋常ではない既視感を、まずは確かめなければならない。

「……幽々子様」

「妖夢？」

「昨日は、何をされていたか憶えていますか？」

「昨日？」

妖夢は主人に問いかける。もし本当に一日が繰り返されているのなら、この答えも妖夢が知るものであるはずだ。健忘が過ぎると気にも留めなかった、幽々子の昨日を聞き出す。

幽々子の昨日は妖夢と将棋を指したことが主になる。三戦して妖夢が三敗。そう思い浮かべたところで、幽々子が口を開いた。

「昨日は久しぶりに妖夢と将棋を指して、私が三戦三勝だったわよね？」

愕然とする。決して当たって欲しくはなかった予感。違和感。幽々子の言葉で、妖夢は確信した。

忘れていたこと。思い出したこと。花の香りがする。自分はこれから、半霊を探しに人里へと向かうのだ。そこで一人の男と出会う。花の香りがする。漠然とした不安感を抱えながら、妖夢は走り出す。「半霊を探してきます！」

白玉楼を飛び出し、妖夢は思う。この繰り返しを知っていた男。ギンコと名乗る蟲師から聞いた言葉。かいろう。そのことについて、詳しく話を聞かねばならない。

主人への言葉を放り投げ、妖夢は下界を目指した。

「はあ……はあ……」

息も絶え絶えといった様子で、妖夢は人里に降り立った。もう何度も見た光景。野菜の小売店の前で、三人のやり取りを聞いた。

「と、まあ食用にならないやつらは、このくらいだ。どうだい」

「ううむ、これならさっきの半値もないぜ、霧雨の嬢ちゃんよ」

「あーもう、はいはい。いいよそれで」

「だとき」

「おう。ありがたいな、兄ちゃん。いやー助かったぜ」

「なんの。で、この見返りと言っちゃあなんだが、ご店主よ。野菜を幾

つか譲っちゃあもらえんかね」

「あ！ お前、最初からそれが目的かよ！」

「さあな。で、どうだい」

「はっはっは！ もちろんいいぜ！ 霧雨の嬢ちゃんも、この兄ちゃんくらい上手にやんねえとな」

「くっそお」

「どうも……ん？」

妖夢は迷わず白髪の男、ギンコに大股で近づいていく。その様子に気づいて、ギンコが妖夢を見たとき、妖夢は切り出した。

「あの！ 廻陋かいろろうについて、知っていることを教えてください！」

「うおっ、なんだ急に」

襟首を絞めかねない動きで詰め寄ると、単刀直入に話題をぶつけた。

「あなた、蟲師のギンコさんですよね」

「あ、ああ。まあそうだが……お前さん、どこかであったか」

「ええ、もう何度も。このやり取りは初めてですけれどね」

「……どういう意味だ、そりゃ」

妖夢の射抜くような、切羽詰まった態度を受け止め、ギンコ表情から温度が抜けていく。静かに、冷涼な雰囲気纏い始める。

「おいおい、なんだいきなり。妖夢。お前、ギンコと知り合いだったのか」

「ギンコさん。お話を聞かせてください」

「無視かよ」

妖夢の眼中にない魔理沙がじとり、と目を曇らせた。

なおも詰め寄る妖夢。その様子を見て、ギンコはゆっくりとした動作で妖夢の肩に手を置いた。まずは落ち着け、と目で語りかける。その無言の訴えを受けて、妖夢は自身の心を落ち着けるべく深呼吸し、ギンコから体を離れた。

「……お前さんがどんな状況にあるのか、詳しく聞こう。まずはそれからだ」

場所を移そう、とギンコは持ちかけた。

「どうぞ」

「どうも」

「悪いな……って茶なんて啜ってる場合なのか？」

「客人になんのもてなしもないようでは白玉楼の従者の沽券にかかわりませんから……ってなんで貴方までいるんです？」

白玉楼に招かれたギンコと、それにくっついてきた魔理沙は妖夢のもてなしを受けていた。白玉楼の主人は、体調を崩しているという古き友人の元を訪ねて留守である。

畳の居間に置かれたちゃぶ台を三人で囲むように座る。ちょうどギンコと妖夢が向かい合い、その間に魔理沙が座り込んでいる形になる。

全く話に関係のない魔理沙に対して、冷やかな目線を向ける妖夢。乗り掛かった船という言葉を強引に用いて、興味本位の同席をする魔理沙。まあいいでしょう、と最終的に折れたのは妖夢の方だった。

「それで。早速だが話を聞かせてくれるか」

「あ、はい」

妖夢はギンコに、自身の身に起きた奇妙な出来事を語り始めた。花の香りとともに失われる意識。まるで悪夢から醒めるように目覚めると、全く同じ一日を繰り返しているという袋小路の事実。なぜこんなことになっているのか、どうすればこの繰り返しから抜け出せるのか。光明を求めて、妖夢はギンコにすがるように話を続けた。

「……」

妖夢の話の聞いて、ギンコは考えた。沼の淵をじつと睨めつけるように目線を下げ、口元に手をやって考えている。そんなギンコの様子を、固唾を呑んで見守るのは今まで自分の身に起きた出来事を語っていた妖夢だ。

「……魂魄妖夢、がお前さんの名前だったか」

「は、はい」

「そうか……」

妖夢の名前を確認した後、ギンコは申し出た。

「実は廻陋に関する資料は殆どない。その性質上……既視感などという誰にでも起こりうる症状から、廻陋の仕業であると断定ができないためだ」

「そ、それは」

「記憶とは主観的で、曖昧なモノだ。いくらお前さんに繰り返ししの確信があったとしても、それを確かめる術はない」
「う……」

だが、とギンコは前置きする。

「それが確かでないとは確かめる術もない。お前さんの様子も尋常じゃないし、会ったこともない俺の名前も知っていた。話を信じるには十分。なんとかその繰り返しとやらから抜け出せないか、知恵を貸そう」

「あつ、ありがとうございますー！」

ちやぶ台に額を打ち付けんばかりの勢いで、妖夢はギンコに頭を下げた。ギンコは傍に置いてある自身の薬箱の扉を開き、下段の大きな引き出しから一巻の巻物を取り出した。それをちやぶ台の上に広げる。

「これが廻陋に関する文献だが、俺が語った以上のことは書いていない。だが注目すべき点はある。それは、お前さんの訴える症状と文献にある症状に差異があるということだ」

「症状の違い……」

ああ、とギンコは同調する。若干蚊帳の外になった魔理沙も、話を聞こうと身を乗り出して巻物を覗き込んだ。

「まず、大きな違いはお前さんが繰り返しに気づいているということだ。文献では、廻陋に囚われたものは全く同じ時間を繰り返し生きることになるという。お前さんはすでに、そこから外れたところにいるということだ。現にこうして俺たちと話するのは初めてのことなんだろう?」

「はい。初めてです」

「そこがこの繰り返しから抜け出す鍵となるはずだ。そして第二に、

これは文献通りだが、お前さんの繰り返しにも必ず起点があるということだ」

「起点ですか……あ、花の匂いがして意識が途切れること、ですか」「そうだ。これは文献だと、廻陋に出会った瞬間が起点となるらしいが、なぜお前さんの時間の繰り返しが不定期に起きるのかまではわからない。だが起点がある以上、そこをやり過ぎることができれば……」

「繰り返しは起こらない、と?」

「そう考えるのが妥当だろうな」

そう言いながら、ギンコは薬箱の一つの引き出しから、小さな包みを取り出した。そしてそれを、ちやぶ台の上に置く。

「これは?」

「気付け用の薬だ。木の実だが、意識が朦朧としたらこれを口に入れてろ」

そして気を失いそうになったら、噛み潰すんだ、とギンコは指示した。

包みが開かれて、中から丸薬のような木の実が顔を出す。

「どれどれ」

「あ、おい」

興味本位で魔理沙が一つ、口の中にそれを放り込んで噛み潰した。次の瞬間、魔理沙の表情が青ざめ、勢いよく立ち上がったと思えば、走り出して部屋から出て行ってしまった。

「……ま、あれだけの反応が得られる木の実ってことだ。飛びそうな意識を、繋ぎ止めてくれるはずだ」

「……なるほど」

良い実例だった、とギンコは呆れるように額を押さえた。

第七章 迷い繰る日 陸

白玉楼において、ギンコと妖夢はちやぶ台を挟んで対面する形を続けていた。場所は妖夢の私室と呼べる唯一の空間。開け放たれた障子戸からは妖夢が稽古けいこをする庭先が見え、雲が薄くかかった秋晴れと言える空が広がっている。

降り注ぐ陽光が畳に陰影を刻む。物も少なく、目を向けるべき対象がないこの部屋では、お互いのことを話すのが唯一できることであるようで、妖夢はギンコの話詳しく聞きたかった。

「ギンコさんはこちら……幻想郷に来てどれくらいなんですか」

「そうだな……もう半年ほどになるか。歩き回って、大体の地理は把握できたと思っっている」

「この幻想郷で旅人というのも珍しいですよ。なぜ人里に住まわなんでしょうか？」

「住みたくとも住めない、というのが正直なところだ。どうにも俺は、蟲を寄せる体質でな。一つ所に留まれば、そこを蟲の巣窟にしてしまう。あれらは寄り集まっても、いいことはないからな」

「なるほど……そういえば、廻廻かいろうというモノもそうですけど、蟲ってなんなんですか」

何と言われるとな……。とギンコは一呼吸おいて妖夢の前に左手をかざして見せた。大雑把に言うところだ、と前置きして、ギンコは右手で左手の中指の先をつまんだ。

「手の内、四本の指。人差し指、中指、薬指、小指が動物。親指が植物だとする」

「はあ」

ヒトはそう、中指の先あたりに位置する。心臓から最も遠い場所にいるというわけだ、とギンコは言う。

妖夢はギンコの手を見つつも、自分の左手も確認するようにちらりと見た。

「それらを遡さかのぼり、内側に行くほど下等な生き物になっていく。手首のあたり、血管が一つにまとまる頃には微生物や菌類といった生きモノ

になるわけだ。キノコなんかいい例だな」

「キノコ……」

眩きと共に、妖夢は霧雨魔理沙の顔を思い浮かべた。気付く薬の木の実を興味本位で口にした魔理沙は、その強烈な味に、ギンコに商売を邪魔されたことも相まってか少々気分を害したらしく帰宅を申し出て、もうこの場にはいない。

ギンコは、この辺りになってくると動物と植物の区別をつけるのは難しくなってくる、と言い、自分の左手の手首を右手の人差し指で押さえた。淡々としつつも、深みのある声が、妖夢を説明の中に引き込んでいく。

「しかしだ」

ギンコはまだまだ先にいる生きモノがいると続けながら、右手を肘の方、心臓に近いほうへと動かしていく。まだまだその先にいる生きモノを指指して。

「腕を遡り……肩を通り過ぎた先。心臓に一番近い場所。そこに位置する生きモノが、蟲、と呼ばれるモノだ……わかったか」

「はあ……なんとなくですが」

「矮小わいしょうにして下等。生命の最小単位、みどりもの。呼び方は様々だが、存在が希薄で、曖昧なモノと考えればいい」

妖夢は不思議そうに自分の左手を見つめた。そしてギンコがそうしたことを真似るように、目線だけで腕を遡る。自分の胸を見下ろして、妖夢は眩いた。

「矮小……」

「ただいまー」

妖夢の独り言を遮るように、白玉楼の主人が障子戸の縁ふちから顔を出した。

「あ、おかえりなさい幽々子様」

「あら、妖夢。お客様？」

部屋の中に足を踏み入れる。必然、ギンコとも目が合い、ギンコは軽く会釈をした。

「どうも」

「まあ、殿方を私室に連れ込むなんて。妖夢も隅すみに置けないわね」
「ちよ……違いますから。そんなんじやありませんよ」

幽々子のからかい半分の言葉に、真面目な妖夢は腰を浮かせて反論した。

「そんなのじゃないなら、どういったご関係なのかしら」

「それは……」

妖夢はちらり、とギンコを見た。さて、どう説明したものか。その視線は言外にそう言っていた。説明するとなれば、一からだ。先ほど妖夢にそうしたように、蟲というものは何かから、妖夢が置かれている状況までを、一から。

繰り返しに少々徒労を感じたギンコはやれやれと少し首を回し、幽々子へと視線を向けた。

「そいつは、私の方から説明しましょう」

目をぱちくりと動かした幽々子に、ギンコが静かに申し出た。

「……と、そういうわけで、御宅の従者の置かれている状況を鑑みて、我々蟲師の領分だと判断したわけです」

「なるほど……」

話を聞き終え、神妙な面持ちで幽々子は頷いた。隣に座る妖夢は、その様子をじっと見つめている。いつになく真剣な主人の表情に、その視線は釘付けになった。

「……何か、気になる点でも？」

考え込んでいる様子の幽々子に、ギンコは問う。

「え？ ああ、いえ、大したことではありません」

それよりも、と幽々子は妖夢に向かって体ごと向き直り、どこからともなく取り出した扇子でぴしやり、と軽く妖夢の頭を叩いた。

「あいた」

「もう、そんな大変なことになっているのなら、まずは私に相談してくれても良かったんじゃない？ このこの」

じとり、と半目で妖夢を見つめ、扇子の先で頬をつく。されるがま

まに、妖夢はただ「すいません」と謝罪の言葉を述べた。

しばらく従者をつついて満足したのか、幽々子は再び、ギンコへと向き直った。

「現状はわかりました。妖夢が得体の知れない現象に巻き込まれていること、その現象の解決を、あなたが主導で行おうとしていること……って、それらを理解すればするほど、私にできることはないみたいですね」

幽々子は残念そうにため息をついて、すつくと立ち上がった。

「ギンコさん、でしたね。改めまして、妖夢がお世話になります。問題の解決まで、必要とあらばこの屋敷に滞在していただいて結構ですので、どうぞ宜しくお願い致します」

立ったまま恭しく一礼をした幽々子は、そのままの足で部屋を出て行こうとする。その去り際。少しだけ後ろを振り返り、妖夢とギンコを見据えて言った。

「……後は若いお二人でごゆっくり」

「！　もう！　そんなんじゃないやありませんったらー！」

ふふ、妖夢は硬いのねえ。なんて言葉を残し、今度こそ幽々子は部屋から退散した。

浮いた腰を落ち着けて、妖夢は申し訳なさそうに、ギンコに言う。

「すみません、ああいう人でして」

「ああ、別に気にしちやいない。それよりも、あの陽気な主人の言うとおり、しばらくここで厄介になろうと思うんだが、構わんか」

お前さんは稀有けうな症例だから、調査もしておきたい、とギンコは言う。

「ええ、それはもう。あ、じゃあ客間に案内しますね」

妖夢は立ち上がり、ギンコを部屋の外へと促した。

ギンコを客間に案内した後、妖夢はとりあえず日々の業務に着手した。

ギンコの提示した繰り返しからの脱出方法は、花の香りとともにやってくる意識の喪失をやり過ぎすというものである以上、症状が表

れない限りはどうしようもない。かといって症状が表れるまでぼうつとしていたのも落ち着かない妖夢は、ギンコに了承をとって、いつもと変わらない日常を過ごすことにした。

まずは屋敷の掃除。一人で隅々まで掃除をするには広すぎる白玉楼を効率よく掃除していく。普段使わない部屋はおおまかに、主人のお気に入りである庭の見える縁側は重点的に。部屋の優先度を考え、掃除を進めていく。

そうして掃除に精を出し、縁側を行ったり来たりの拭き掃除に勤しんでいると、今日はその様子を見て、声をかけてくる人がいた。

「よう。なんか手伝えること、あるかい」

縁側の柱に手をつけて、妖夢の前にギンコが立つ。床拭きの姿勢のまま、ギンコを見上げた妖夢はギンコの申し出に、少々面食らった様子で答えた。

「え、そんな、悪いですよ。ギンコさんはお客様なんですから」

「ま、そう言いなさんな。こつちもじつとしてるのは性に合わないんでね」

それに、とギンコは続ける。

「症状がいつ表れるかもわからないんだ。その時に助けられるよう、近くにいたほうがいいだろう」

「……まあ、それもそうですね」

じゃあ申し訳ありませんが……、と控えめな様子の妖夢に、まかせろ、とギンコは腕まくりをした。

二人で屋敷の掃除を進める。作業人数が増えれば、当然作業時間は減る。しかしそこは真面目な白玉楼の従者。空いた時間は有効に使うと、普段は大雑把にしかしない、あまり使われていない部屋の掃除を敢行した。

いくつかある客間の布団を押し入れから引きずり出し、ハタキで埃を落とす。畳の目に沿って、雑巾で乾拭きをする。これが結構な重労働であるが、一度作業を始めてしまえば集中してしまうのか、二人は交わす言葉も少なく掃除を続けた。

そうして屋敷全体を綺麗に仕上げたところで、時刻は夕刻を回り、

宵の口に差し掛かろうとしていた。縁側に座って満足げに背筋を伸ばす妖夢の隣で、ギンコは首を回して息を吐いた。

「いやー。すつきりしました。そろそろ大掛かりな掃除がしたかったので大満足です」

「そうかい。そりゃあ手伝ったかいもあるってもんだ」

そのギンコの言葉に、満足げだった妖夢はハッと我に帰り、申し訳なきように肩をすくめた。

「す、すみません。調子に乗って大掃除に付き合わせてしまつて」

「気にするな。手伝いを申し出たのはこつちだしな」

ギンコの気遣いに、ますます身が縮まる思いの妖夢は口ごもり、もじもじと落ち着かない様子でギンコの様子を伺った。そんな様子を察したのか、ギンコは話題を変えるように妖夢に問いかけた。

「……掃除中、何か気になることはあつたか」

「え?」

「廻陋についてだ。お前さんの話をそのまま借りるのなら、花の香りがして意識が遠のくらしいが、それ以外にも、何か気になることはなかつたか」

そもそもだ、とギンコは話を続ける。

「お前さんが繰り返し返しに気がついたきつかけはなんだ。この掃除中も考えていたんだが、そこがはつきりすればより確実な対策が練れるかもしれない」

「きつかけ、ですか……」

きつかけと言いましても……と妖夢は自分の行動を思い返す。それは今朝の演武のこと。型の確認が終わり、鍛錬を終えたところで急に直感めいた閃きが頭の中を駆け抜けた。それにきつかけも何もあつたものじゃない、と妖夢は思った。しかし。

「もしかしたら……」

思いついて立ち上がる。なにかあるのか、とギンコもそれに続き、二人は再び、妖夢の私室へと足を向けた。

障子戸を開け放ち、妖夢は床の間へ一直線に向かう。そしてそこに安置してある、大小二つの刀のうち、小の方を手を取った。

「その刀に何かあるのか」

「わかりません。だけどこの刀を抜いた時、わたしはこの一日が繰り返されていると確信しました」

そう言っただけで妖夢はおもむろに刀を抜き、刀身を虚空に掲げた。反りの少ない直刀に近い造りの刃物は、日陰でも怪しい光を放っているように見える。その雰囲気を感じ取ったのか、ギンコは妖夢に問いかける。

「何か曰くのある刀なのか」

「銘は白楼剣。切ったものの迷いを断ち切る刀です。霊魂などを切ればその霊魂はたちまち成仏します」

「迷いを断ち切る刀……」

どうやら無関係ではなさそうだと、わかったのはそこまでだった。結局その刀から、有益な推測は導き出せず、妖夢は夕食を作り台所へと向かっていった。

第七章 迷い繰る日 漆

夕食作りのため台所に向かった妖夢の背中を見送って、ギンコは妖夢の私室の前、屋敷の縁側に腰を下ろした。秋の茜が刻々と夜に切り替わる空を見上げ、そこから次第に視線を下げていく。

整えられた庭の草木がうつすらとかかる闇に溶けていく。昼間は穏やかな陽光にその身を預け、微笑むようにたたずんでいたそれらが、まるで観劇の閉幕のように世界から退場していく。そんな光景を見ながら、ギンコもまた抱えた不安感を持って余すように、片膝を立て、それを抱えるように座り直した。

廻廻。実態の知れぬ、文献の中だけに登場する蟲。ギンコをして知らぬ蟲。妖夢の訴える症状が事実だとしてこの時間が本当に繰り返し、世界が輪廻に囚われたが如く回り続けているのなら、ギンコにできることはないように思えた。

一番の問題は妖夢にあるのではなく、ギンコにあると言えた。廻廻によつて繰り返す時間を、ギンコ自身が認識できていないことこそ、この問題の難しいところである。妖夢の感じている尋常ならざる既視感は本当に蟲の影響なのか。ギンコにはそれを確かめる術すらない。今まで幻想郷で蟲患いにまつわる事件に関わってきたギンコであったが、その「関わる」という土俵にすら上がれていないと感じるのは初めてだった。

「さて……どうしたもんかね」

ぼそりとひとりごちる。頭を抱え、蹲るような素ぶりこそ見せないが、内心はそれくらいどうしようもないと思っていた。口について出てくるのはいつになく弱気な言葉ばかり。

「時間が繰り返される……そんなもの一体どうしたらいいんだ」

「お困りのようね」

だから独り言に反応が返ってきた時、ギンコは心底驚いた。妖夢に聞かれたのではと思ったのだ。声に反応して背後を振り返る。しかしそこには誰もいない。障子の壁が喋り出すわけでもあるまいとギンコが訝しむ。

「気のせいか……」

「気のせいじゃないよ」

今度こそはつきりと聞こえた声に、今度は庭の方を見る。そこに果たして、声の主は姿を見せた。

「……なんだこりゃ」

「なんだこりゃとは失礼だなあ。やっと私の姿を見てくれるようになったのに、第一声がそれ？」

声の主が不満を漏らす。それはギンコの顔の前、少し距離を置いた空中に浮いていた。

それは手のひらに収まりそうな大きさの少女の形をしたものだった。鯉のぼりに頭を齧られているような赤く長い布製の帽子を被り、白と黒の色に塗り分けられた一繋がりのお服にこれまた白と黒の布の球体を散りばめた独特な格好をしている。広く開いた服の裾からは二本の素足と、どういうわけか牛の尾にしか見えないものがひよつこりと顔を出していた。

それはその小さな体でギンコを見つめ、頬を膨らませながら空中で仁王立ちをするように腕組みをした。

「やっと私の声が届くようになったんだから、もうちょつと喜びなさい。わーいって」

「誰だい。お前さんは」

おどけた態度には一切の反応を見せず、ギンコは突如現れた少女らしき何か疑問をぶつける。幻想郷に来てから得た知識で考えるならば、それは妖精のように見えた。その割には気配がはつきりしている。ならば妖怪の類か？ とギンコの頭の中で様々な推測が浮かんでいく。それらを解消するためのギンコからの問いを受けて、それは腕組みを解いた。

「性急ね。でもまあ時間もないし、その方がいいか。説明してあげるけど、見てからの方が納得もしやすいでしょ。そろそろだし」

「……お前さんが何を言っているのか、俺にはよくわからんのだが」「すぐにわかるようになるわ。だってほら」

目の前のそれが両手を広げる。空はもう茜の色が沈みきり、夜の訪

れが目に見えている。そして世界が緩やかな、しかし確かな切り替わりを見せたその時。

「もう刻限だもの」

その言葉に共鳴するように、目の前の風景が歪んでいく。少女以外の全ての景色が、まるで一枚の絵におさまるように、立体感を喪失していく。ぐん、と遠く離れていく庭。体が浮き上がるような奇妙な浮遊感。それらがギンコを戸惑わせた直後、ベリベリと、糊で張り付いた紙を剥がすような音を響かせながら、世界が崩れていった。

目の前の光景に言葉を失う。剥がれ落ちた世界の欠片は泡となって消え失せ、その奥からは漆黒としか言い表せない空間が顔をのぞかせている。それらが一箇所だけではなく、同時多発的に発生していった。幻想郷にきてしばらく。ギンコも奇々怪々な現象、能力は多く見えてきたつもりだったが、ここまで理解の追いつかない光景はなかった。悪い夢を見ている。そう形容するほかない。まさにそれは、世界の終わりだった。

「おいおい……こりやあ夢か?」

冷や汗もかかないほどに理解が追いつかない。漠然と、しかし大きな不安感が大きな手のひらのようになって全身を掴んでいるような気がする。ようやく絞り出したギンコの言葉に、それは飄々と答えた。

「夢と言えば夢ね。でも、厳密には違う」

それは一つ言葉を区切り、間を持たせるように続けた。

「ここは繰り返される記憶の世界。地上にある、一つの魂が囚われた時の回廊……本来、貴方とはなんの関係もない泡沫の世界よ」

「記憶……? 時の回廊……?」

「貴方をここに連れてきたのは私。半人半霊の彼女の夢を通じて、貴方の夢の意識をここにつないだわ。大体の事情はそちらが把握している通りよ。だからまずは、私の目的をはっきり伝えておくわね」

世界が終わる。もう景色は、ほとんど漆黒に切り替わっている。夜よりも闇よりも深い、光を巻き込んで離さない冥い色。そんな天も地も剥がれ落ちた空間に、ギンコとそれだけが残される。

ベリベリと音がする。今度はギンコ自身が、世界から剥がれ落ちようとしていた。

そんなことも意に介さず、それは宣言通りに、はっきりと言葉を紡いだ。

「どうかこの世界を終わらせて。彼女の魂の片割れを解放して。それが貴方に頼みたいこと」

終わる世界を終わらせて。そんな意味不明な無理難題を聞かされながら、ギンコはゆっくりと世界から脱落していった。

次にギンコが目を覚ましたのはいつか見た人里の大通りだった。日の傾きから推測して時刻は午前。朝の訪れと共に活動を始めた人々がまばらな、いつもの人里がそこにある。店を開き、暖簾を出す茶屋の看板娘。折りたたみの庇を広げ、その下に商品を並べる小売店の店主。畑作業に向かうのだろう、農耕道具を担いだ青年。住人の様子は色とりどりで、にわかには活気付いている。そんな誰も彼もが目的を持って動いているそこで、ひとりぽつんと何をすることもなく、ギンコは立ち尽くしていた。

自分はなぜここにいるのだろうか。世界が剥がれて消える悪夢はどうなったのか。自分に一日が繰り返していると訴えてきた彼女は。そんな降ってわいた疑問に答える暇もなく、ギンコの意識に滑り込んでくる声があった。

「はいおはよう。無事に世界を移行できたみたいで何より」

木の葉が地面に降り立つように、視界の上からそれは現れた。赤い帽子を被った、牛の尾を持つ少女。ギンコと目線を合わせるように高度を保ち、ふよふよと空中に浮いていた。

「意識はしっかりとっているよね？ 記憶の整合性は取れてる？ 私のこととは覚えてるかな？」

「……この世界はどうなっている。俺は確か、世にも恐ろしい光景を見た気がするんだが」

「おっけおっけ。無事に繰り返しの初期化からは保護できてるみたいね」

ギンコの返答に満足したのか少女は小さな体で大仰に頷いた。そうして語りだす。

「じゃあ自己紹介からね。私はドレミー・スイート。夢の世界の管理人です。貴方は蟲師のギンコね？」

「そうだが……夢の世界の管理人だと？　ここは夢の世界だともいえるのか？」

「そうでもあるけどそうでもない。ここは魂魄妖夢の半霊が囚われている時の回廊。本来なら私も介入できない円環状に閉じた意識の世界なんだけど彼女の半人半霊という性質が効いたのか、肉体の見る夢の世界とここが繋がったのね。だから私がいくらか干渉できるようになったの」

夢の世界。ドレミーと名乗る手乗り少女はこの世界をそう説明した。また突拍子も無いことを言われたギンコであったが、記憶の中にある世界の終焉を思い出せば、ここが現実味のある何処かであるようにも思えなかった。

そう思えば道行く人々やいつか見た景色も、見た目はそれらしいがどこか空々しい。そんな薄氷の上に立っているような思いで、ギンコはドレミーと話を続ける。

「半人半霊？　妖夢のことか。じゃあここは妖夢が見ている夢の世界でもあるということか？」

「あれ？　あの子のことは聞いてないんだ。半人半霊っていうのはそのまま、半分で半分幽霊の存在のことなんだけど」

「それは聞けばわかる。人間の部分が俺に接触してきた妖夢なんだろう？　そして俺の知らない霊体の妖夢がもう一人いて、そいつが時の回廊とやらに閉じ込められている。妖夢は人体と霊体が二つで一つだから、霊体の閉じ込められた意識の世界に人体の見える夢の世界が繋がり、その夢の世界を管理しているお前さんが普段は干渉できない閉じたこの世界にやってくることでできるようになった。そう理解したが」

「おお……気味が悪いくらい理解が早いね。信じてもらおう立場の私が言うのもなんだけど、もうちよつと疑うとかしたほうがいいん

「じゃないの？」

「生憎とこつち、幻想郷に来てから自分の常識の方が信じられなくなってきたいてね。霊だの妖怪だの、そうあるべくしてあるものを受け入れる付き合い方は慣れてきたつもりだ。そもその本職も、そういう立場をとるべきだしな」

ギンコは嘆息して、これまでの自分の苦勞を思い出す。妖怪やら霊体やらと干渉する蟲は、ギンコの経験を超越する現象を起こし続けてきた。これまではなんとか持ち前の蟲の知識と、幻想郷の異形についての知識を組み合わせて解決策を導き出してきたが、毎度毎度心臓に悪いことだと、ギンコは遠い目になった。

「それで。お前さんが俺をここに連れてきた理由は……この世界を創り出しているのが、廻廻という蟲だからなのか」

「ご名答。蟲のことは蟲師に。常識でしょ？」

「常識とか言われてもな……」

今更である。

「あんまり長い夢を見るのは精神的によくないのよね。まあお願いよ。半人半霊のあの子のためにも、貴方のためにもね」

「それはわからんでもないが……ん？ 俺のため？ ちよつとまで、俺も何か蟲の影響を受けてるのか？」

ギンコはドレミーが発した不穏な響きの言葉を聞き逃さなかった。物事があるがままに受け入れつつも、回避すべき危険は敏感に察知しなければならぬ。ドレミーはとぼけるでもなく、当然といった様子でギンコの問いに答えた。

「ここにいてってことは貴方も夢を見てるのよ？ そして簡単に夢から覚めることができるなら、わざわざ貴方の力を借りたりしないと思わない？」

「じゃあ何か。お前さんは入るは易し、出るは難しの世界に無理やり俺を引き摺り込んだってのか。そして廻廻に対して何かしらの対処をし、妖夢の半身を解放しなけりや俺も……」

「この世界に閉じ込められたまま、つてことになるね」

「冗談じゃねえぞ。よくもそう平然と言えたもんだな！」

「さらに言えばこの世界の時間と現実世界の時間は同期してるから、あんまり時間をかけすぎると肉体の方が衰弱して取り返しのつかない事態になるかもね」

「なおさら悪いじゃねえか……」

恐ろしい事実をにこやかに告げてくれるものだ。怒りを通り越して呆れがみえ始めたギンコの態度とは対照的な、ドレミーのあっけらかんとした態度が憎たらしい。恨みを込めて睨みつければ、ドレミーはその視線を受けて身を縮こまらせた。

「怒らないでよ……精一杯明るく教えてあげたのに」

「いらねえよそんな気遣い。お前さん、夢の世界の管理人なんだろう？
どうにかならんのか」

「無理ね。この世界で私の権限はほとんどないし……悪いとは思ってるのよ？ でも私にできることは貴方たちの記憶を繰り返しの初期化から保護することくらいなもの。この世界に直接干渉することはできないの……」

「ごめんなさい……と、いじいじと指を絡ませて小さな体をさらに小さくして、ドレミーは情けない声を出す。そうした態度を取られると、途端に弱いものイジメをしているような気分になってしまう。ドレミーにしてもこの対応は望むところではないようで、ギンコに対する謝意も本物であるように思えた。

「……妖夢の記憶の保護も、お前さんがやってくれたことなのか？」
「……うん」

誰を責めても始まらないと、ギンコは頭を切り替えるように自分の後頭部を二、三度叩いた。

やるべきことは決まっている。妖夢の半霊の救出と、それに伴う廻陋への対処。どうせ現実世界においても遠からず同じような状況になつていたと考えれば、ドレミーの登場で僅かながらも廻陋への対処法の足がかりができた今を歓迎すべきとも言えた。

「妖夢は繰り返しに気付くまで何度かこの一日を体験したと言っていた。俺をしてもそうだ。しかし記憶の保護がされた時期に差があるのはなぜだ。さらに言えば、妖夢は繰り返しに気がついた時、その時

点から過去の記憶を思い出している。俺が思い出せんのは何か理由があるのか」

切り替わったギンコの頭は問題の解決に向けて回り出す。まずは情報。掻き集められるだけ掻き集め、その中から真実に迫る欠片を抜き出していく作業。もう何度と繰り返しそれを着手する。

今まで感情をたたえていた瞳から、すつと温度が抜けていく。見据えるのは目の前の夢の世界の管理人ではない。この世にいる矮小な存在。それらとの共存と調和という事態の収束目掛けて、ギンコの視線は注がれていく。ドレミーもその雰囲気を感じ取ったようで、居ずまいを多少正して、ギンコの疑問に淀みなく答えていく。

「あの子の記憶に多少なりとも連なりが認められるのはたぶんこの世界と密接な繋がりがあるからよ。自分の半身が見ている夢の中にあるようなものだもの。世界自体が記憶の中から生み出されているのだから、崩壊を乗り越えて記憶が持ち越されていても不思議はないわ。対する貴方は私が招いた、所謂外様。この世界との繋がりが薄い貴方の記憶は世界が終わり、再構築される段階で本当に失われてしまっているのよ」

「なるほどな……保護の時期の差は？ お前さんのさじ加減か」

「それについては私も計算外だったんだけど……この世界の主である、かいろう？ っていう存在の支配力が思ったより強くてね。貴方をこの世界に招いた後、私はそれ以上の具体的なアクションを起こせなくなったの。声も姿も届けられず、ただ繰り返しを眺めることだけしかできなかつた」

「今はそうじゃないようだが」

「きっかけがあつたのよ。たぶんあの子……妖夢ちゃんが持つてる東方の霊剣のおかげだと思っただけど」

「霊剣？ 大小の刀のことか？」

「うん。貴方たちがそれぞれあの刀に触れてくれたから支配力に僅かな亀裂が入ってね。こうして姿を見せることができるようになったの」

記憶の保護も同時にできるようになったわ、とドレミーは空中で両

手を広げ、くるりと一回転して見せる。裾の広い服がふわりと広がった。

「やはり魂魄の家系が突破口か……」

「だからこの状況を打破するためには彼女の剣が必要だと思うのだけど」

「それについては俺にも考えが……ん？」

「……ンコさーん！ どこですかあー!？」

遠く伸びてくる声が聞こえた。見れば大通りの向こうから、声を張り上げて走ってくる人影がある。まだ小さいそれは、おそらく妖夢だろう。ギンコと同じ方を見て、ドレミーが言う。

「あの子は自分の自室に戻されるのよ。貴方を頼ってすぐに人里まで降りてきたのね」

「それは手間を取らせたな。どうせすぐ、あいつの家に戻るというのに」

「そうなの？」

「ああ。ちよいと確かめたいことがあるんでね」

じゃあ行くか、とギンコは背中の薬箱を背負い直す。ごとり、と思いきや音がして、それはなんだか大きな歯車が噛み合ったような音だとドレミーは思った。

第七章 迷い繰る日 捌

「はあ……ではこの世界を創り出している蟲をどうにかすれば、繰り返しの一日からは抜け出せると。そういうことなんですね」

「そういうことだ。ついでにお前さんの半霊も戻ってくる……というからお前さん、自分がただの人間じゃないって最初に言えよな」

「ちゃんと話しましたよ！……あ、それは何個か前の繰り返しの時でした」

「ギンコさんはこの一日から記憶の保護をしてるから、以前の記憶はないのよね。ちなみに繰り返しの刻限は日の入りよ。今までは記憶の保護が完全じゃなかったから不定期に繰り返しが起きていたけれど、今度から一日いっぱい活用できるわ。よかったわね」

「よかねえよ。……この一日は現実世界でも一日なんだろう？ あんまり長々と時間はかけられねえことに変わりはないだろうが」

白玉楼に向かう道中、ギンコはドレミーとの会話で判明した繰り返しの原因とその解決法について、人里で合流した妖夢に話をしていた。この一日が廻廻という蟲によって創られていること。廻廻に囚われているのは妖夢の半霊であること。妖夢は半霊が見ている繰り返しの一日に、自身の夢を通じて迷い込んでしまったこと。ギンコはドレミーがこの一日に引つ張り込んだ現実世界の意識そのままだということ。わかつている限りの情報を、妖夢と共有する。

屋敷へと続く長い石段を上がりながら、妖夢はギンコの言葉に耳を傾けている。思わぬところで自身の半身の行方も知れることとなり、足掛かりもつかめていなかったことから比べて、光明が見え始めた現状に表情を和らげた。隣を歩くギンコも、その弛緩した様子の横顔を視界に捉える。

「……と、まあ話しておくことはこれくらいか。他に何か気になることはあるかね」

「いえ、特には。というか話を聞けば聞くほど、私にできることってないような気がしてきますね」

妖夢は何か誤魔化すように笑ってみせる。そんなことはないさ、と

ギンコが答えた。

「おそらくこの場において、廻陋に対処できる可能性があるのは妖夢、お前さんだけだ」

「え、そうなんですか？」

「予想だがね。その予想が確かなものかどうか、それを今から確かめる」

ギンコの立てた予想。それはドレミーが語ったとある “きっかけ” への考察。

淀みなく石段を踏みしめる。一つ一つ石を積み上げて作られたであろうそれは、強固な足掛かりとなって人を目的地へと導いていく。「魂魄妖夢。それがお前さんの本名だったな」

「ええ」

「これは話すことでもないかと黙っていたが、廻陋の文献に興味深い記述がある。それはお前さんの名字に関わることなんだが……」

「あー、確か廻陋という蟲を初めて発見した人が私のご先祖様かもしれないんですね。同じ名字だとかで」

「……そうだが。俺はお前さんにこの話をした覚えがないんだが」

「え？ あー、これも何回か前の話でした」

ぽつぽつと開示される追加情報はギンコの話の腰を折っていく。ギンコから向けられる何とも言えぬ視線にさらされて、妖夢も何かを感じ取ったようで、また何かを誤魔化すように苦笑した。

「……まあ、いいさ。それで話の続きだが、廻陋はその性質上、外からの観察だけでは存在を確認できない蟲だ。だが文献は存在し、その文献を書き記した人物の名は魂魄という。この二つの事実の意味するところが、今抱えている問題を解決する鍵となるはずだ」

「ええと、つまり……」

「半人半霊の貴女のご先祖様が、廻陋の対処法を知っているかもしれないってことでしょうか？ でも文献に対処法までは載っていない。だからギンコさんは白玉楼？ っていう貴女の家に行って、それらしい記録がないか調べるつもりなのよね？」

ギンコの頭頂部に体を預け、うつ伏せに寝転がるような姿勢をとっ

ているドレミーが口を挟む。ふよふよと空中を浮いて移動することもできる彼女だが、どうも収まりがいいようで、先程からそこを陣取っていた。

乗り物扱いされているギンコだが、ドレミーからは重さを感じることはないようで、別段気にした様子もなくされるがままになっていた。

「なるほど、私のご先祖様ですか……」

「文献にあった名前だけが根拠じゃないぞ。お前さんの持っている刀も、どうやら無関係じゃないようなんぞな」

「刀が、ですか？」

そう言われて妖夢は自身の腰と、背に備えている大小の刀を交互に見やった。

大小のうち、小の方。妖夢の腰に差してある、白楼剣という銘の刀。ドレミーの語るところによると、この刀の刀身には廻廻の世界への抑止力のような力が備わっているらしい。事実、廻廻が支配権を持つこの世界でドレミーがギンコと妖夢の記憶を、繰り返し如何に関わらず保持していられるのはこの刀のおかげらしかった。

「白楼剣。迷いを断ち切る刀、だったか。俺には理解の及ばん話だが、そういうった異能の力が蟲を退けた例は、この幻想郷に来てからいくつか見ている」

今回もそうだったら話は簡単なんだがな、とギンコが言う。

そうこう話しているうちに、視界の前方に白玉楼の外観が見えてくる。ここまでくれば一行の足も速く、すぐに屋敷の門にたどり着いた。魂魄の家系についての資料はどこにあるのか、屋敷の敷地内を歩きながらギンコは妖夢に問う。妖夢は自身の記憶を探り、屋敷の裏、庭の片隅にある蔵へとギンコを案内した。

蔵は一般的な土蔵で、小ぢんまりとした佇まいは納屋のようでもある。造りも屋敷の雰囲気合わせた質素な白塗りの壁が印象的で、染みひとつないその様は初雪の積もる雪原を思わせた。そんな土蔵の外観とは対照的に、多くの時を刻んだのであろう古く重厚感のある木製の門を動かし、これまた重そうな両開きの扉をゆつくりと開いてい

く。少しの土埃と耳障りな音を立てて、大きく口を開いた闇と対面した。

蔵の入り口。扉側の壁にかけてあった手持ちの燭台に、妖夢が灯をともし。それを掲げるように少し持ち上げると、土蔵の全体像がぼんやりと浮かび上がった。

中にはいくつかの庭の手入れに必要な道具類、用途のわからない壺や瓶、小分けになった葛籠が整理されて納められていた。庭や屋敷もそうだが、ここも妖夢の手によって定期的に掃除されているのだろう。物置の様相を呈していても、そこにはしっかりと秩序があり、経年による塵や埃の集積も見られなかった。これならすぐに目当てのものは見つかりそうだな、とギンコは思った。

「妖夢。目当ての資料はどこにある？」

「ん、あ、はい。確かそっちの葛籠の中に……」

妖夢の横合いから手を差し伸べ、ギンコが燭台を持ち上げる。それにつられて少し背伸びをした妖夢だったが、すぐにその意図を察し、手を離して燭台をギンコに預け、蔵の奥に進んで行った。妖夢の進む先を手元の明かりで照らしながら、ギンコもついていく。やがて妖夢は一つの葛籠の蓋を開け、中を漁り始めた。

地面にうずくまるような形で葛籠の中身を物色する妖夢の頭上から、ギンコが光を届ける。葛籠の中にはいくつかの巻物や紙の束、赤ん坊をあやす太鼓や綺麗に折りたたまれた背負子などが納められていた。

「……多分、これで全部です」

「ん、そうか」

やがて妖夢はひと抱えの巻物と紙束を持ち上げて立ち上がり、ギンコの方を振り返った。

少ない、ギンコはまずそう思った。廻陋の文献が残された時代を考えると、魂魄の家系も相当な歴史を持った家柄だと踏んでいたが、そういうわけでもないのか、それともやまれぬ事情で資料を紛失してしまったのか。妖夢の抱えるそれは、よくて二代分の記録しか残されていないように思えた。

「少ないのね」

同じ感想を抱いていたのか、ドレミーが声を漏らす。

「……うちの家系はみんな自分のことを残したからないようで。父も母も、おじいちゃんも。残してくれたものは剣の腕と、この体くらいです」

「そう……」

一瞬、重苦しい雰囲気の流れる。うつすらと闇を照らす燭台の日が揺れ、誰かの心境を表しているようだった。

「行きましようか。この中身を精査しないことには、話が始まらないんですよね?」

「……そうだな」

ギンコの横をすりとりすり抜けて行った妖夢の顔に悲壮感はない。ならばこの場で語ることもないと言わんばかりに、ギンコは燭台の明かりを吹き消した。

「……あつたぞ、この記述だ」

妖夢の私室で広げた巻物に目を落としながら、ギンコは呟いた。その一言が合図になって、同じように資料に目を通していた妖夢とドレミーがギンコの近くに寄ってくる。

二人の視線を誘導するように、ギンコは巻物を指差す。それは魂魄の家系の誰かが残したと思われる、日記のようなものだった。妖夢曰く自著の自伝らしいが、この際情報の確度とはやかく言っていられなかった。

「なんて書いてあるのかしら」

もうすっかり定位置としてしまったのか、ドレミーがギンコの頭頂部から興味深く声をかけてくる。一瞬、ギンコはそれに意識を向けるように視線を動かしたが、すぐにそれを戻して続けた。

「記述はこうだ……『雨を斬り、空を裂き、迷いを絶て。幾星霜の修行の果てに汝、極意の顕れ。それ即ち時の廻廻を断ち切ることも也』明確に廻廻の名が出てくるのは興味深い」

「でもこれ自伝ですよ? 眉唾なんじゃ……」

「自伝だろうと真実の記録でないという保証はない。今は情報の確度にこだわっている場合じゃないだろう。それよりも、これは剣術の極意について書かれた一項目だ。お前さん、何か心当たりはないか」

ギンコは隣にいた妖夢に問いかける。妖夢は一瞬考える素振りを見せたが、すぐに思い至る。

「おじいちゃんから聞いた話なんですけど……雨を斬れる様になるまでは三十年、空気を斬れる様になるまでは五十年、時を斬れる様になるまでは二百年、時間が掛かると聞いたことがあります」

「それはまた……途方も無い話だな」

しかし時を斬る、か……とギンコは黙考する。

「お前さんは時を斬れるのか？」

「……お恥ずかしながら力不足で。せいぜいが空気までです」

「それでも十分すごいじゃない。貴女、見かけによらずお年寄りなのね」

空気を斬れる様になるまで五十年。その記述を引用して、ドレミーが妖夢をからかう。半人半霊の妖夢は純粋な人間とは異なるため、寿命が長い。見た目の老化もそれに伴い遅くなっているようで、おばあちゃんとからかわれ、苦笑いを浮かべていた。

一方でギンコは考えを巡らせる。魂魄の家系が残した記述。魂魄の家系に伝わる迷いを断ち切る刀。時を斬る。繰り返し循環する廻陋の世界。囚われた妖夢の半霊。これまで判明した情報、状況をギンコは慎重に積み上げていく。

自分が迷い込んだこの世界。出口のない時の回廊。迷路の如き袋小路を抜け出すには、廻陋をどうにかしなければならぬ。唯一可能性がありそうな思いつきは妖夢が廻陋を斬ることだが、それは無理だと本人に言われてしまった。蟲師としての対処もギンコをして心当たりなどなく、考えれば考えるほど廻陋自体をどうこうするのは殊更不可能である様に思えた。

そこでギンコは考え方を変えた。廻陋と妖夢の夢が作り出したこの袋小路を抜け出すため、もう一つの道を模索する。そしてその道を、ギンコはもう見つけつつあった。

「妖夢。お前さんの持っているその刀。迷いを断ち切ると聞いたが、それは具体的にどういう力なんだ」

「え？ 白楼剣の力ですか？」

ギンコが見出したもう一つの道とは白楼剣を使った半霊の解放である。この世界の繰り返しは廻廻はもちろんそれに囚われている妖夢の半霊の存在がなければ成立しない。廻廻と半霊を斬り離す。それができれば言うことはない。

迷いを断ち切るといふ曰くの刀。空気すら斬り裂ける妖夢の剣術。これらを頼りに、行動を起こしてみても損はない。幻想郷に来てからすっかり慣れた仮説と実証の行動原理を、ギンコは静かに後押しする。

「この世界は妖夢、お前さんの半霊が迷い込んだ袋小路の回廊だ。ということはその迷いを断つことが出来れば……」

「ちよ、ちよつと待つてください。ギンコさんは白楼剣の力を勘違いしています。この刀に、そんな便利な力はありませんよ」

妖夢はギンコのを否定して、自らの傍に安置していた小太刀を胸元に引き寄せた。

「この刀で断ち切れるという『迷い』とは後悔や残念といった精神的な楔を指すのであって、道を見失って彷徨っている状態のことではありません」

「なるほど……」

「彷徨う魂や道を見失っている人。それらの状態が結果的に解消されることは多いですが、今回のことには当てはまらないと思います」

「いいや、そんなことはない。むしろ効果的かもしれないぞ」

「？ どういうことでしょうか」

妖夢が否定したことにより、ギンコは自身の案により強い確信を得たようだった。半霊の迷いを断ち切る。それがどうして問題の解決につながるのだろうか。ギンコの言わんとしていることがわからず、説明を求める妖夢がギンコをまっすぐ見つめた。その視線を誘導する様に、ギンコは自身の人差し指を目の前にかざしてみせる。

「妖夢。お前さんはなぜこの一日が繰り返されているのか、その理由

「がわかるか」

「何か理由があるんですか？」

「ああ、おそろくな」

淀みのないギンコの声。重く、静かなその響き。心に効かせることで、意識にするりと割り込んでいく。

「本来、廻廻に囚われたものは同じ生涯を繰り返して生き続けるのだという。それは人生という長い時間の循環でもあるが、今回は少し事情が違う」

「繰り返されるのは一日だけ……」

「そうだ。それが霊体を捕らえた故の症状なのか、それを判断するのはこの際置いておく。重要なのはなぜこの一日が選ばれたのか。魂魄妖夢という半人半霊がこれまで生きた時間の中で、なぜ今日という一日が繰り返されるのか」

「それは……」

言われてみれば確かに、と思うことであつた。どうしてこの日が繰り返されるのか。そこに意味はないのか、理由はないのか。当然のように受け入れていた事実には、ギンコが改めて切り込んでいく。そうして気付かされた妖夢がその理由を探し始めると、それを後押しする様にギンコが言葉を発する。

「蟲というものはただそうある存在だ。その習性に意思や意味を見出そうとするのは、人の都合だろう。しかし理由はある。廻廻が本来の習性と違う動きを見せたのなら、そうさせた理由がある。そしてそれこそ、現状を解決する最も大きな手がかりになるはずだ」

「理由……」

「廻廻は人だけではなく、虫や獣も自身の獲物として捕らえ、その時間を円環状に歪める。しかし人以外の生き物が、時間などというものを正しく認識しているのか？ 過去を経験として蓄積し、思考を重ねる存在などではないそれらの時間を円環状に歪めるとは一体どういうことだ？ そう、考えた」

「……不自然ね。意味を後付けしているような考え方だわ」

話を聞いて考えを巡らせたのか、ドレミーも呟く。

「俺もそう思う。だから思った。廻廻とは本来、生き物の時間を円環状に歪めるといふ習性などではなかったんじゃないかとな」

「どうということですか？」

「つまり時間を円環状に歪めるといふのは結果的にそうなっているだけで、廻廻の性質という理由は別にあるんじゃないか、ということだ。ちやうど、お前さんの刀が迷いを断ち切ることで結果的に道を見失った人を解放するという具合にな」

「それが今日を繰り返している理由とつながる、と？」

「そういうことだ。そしておそらく廻廻は、自身の中に取り込んだ獲物の意識を乗っ取り、支配することが本来の習性なのだろう。意識を乗っ取ることで獲物の動きを止めるといふ習性の結果、人の主観では記憶の繰り返し、人生の循環という現象が起きている。そう考えた方が自然だ」

「どうしてそういう習性だと思うの？」

「この世界は妖夢の半霊が囚われている廻廻の世界だが、それと同時に妖夢の肉体が見ている夢の世界との繋がりもある。そうだったな」
「ええ。そうね。じゃなきゃ私が介入できないわ」

「つまり廻廻の創る世界は獲物の見ている夢という側面もあるわけだ。そして廻廻の性質によって、獲物は惑わされる。虫や獣と人に共通するもので、かつ人が主観的に認識しているもの。それは意識以外にない。故に意識に影響を与えていると考えた」

「引き込んだ獲物の意識を支配する……それがどう今日を繰り返す理由につながるんでしょう」

「廻廻の獲物を獲る手段は香りによる誘導だ。行き先を誘導する、つまり行動を縛る。進む意思に干渉するのがこいつの習性だ。虫や獣はそのまま、行動を支配し、人を引き込むと、意識への干渉の延長で夢を見せる。これも先ほど話したな。行動的、精神的の二つの状況に象徴される行き先を見失う現象のことを……」

「迷う……獲物を惑わし、迷わせる。自分の中に閉じ込める！ そうか、だから！」

「え、なに？ どういうこと？」

ギンコの説明に得心がいった様子の妖夢と、理解の及ばないドレミー。二人から交互に質問を挟まれたせいで、少し話す順番を間違えたかと思つたギンコは、ドレミーに言い聞かせるように、場を仕切り直すように話をまとめ始める。

「廻廻の本来の習性は獲物の意識を支配することだ。実際に世界の時間を巻き戻しているわけじゃないんだからな。それらの結果として、獲物である虫や獣については行動を縛り、人については精神を縛る。これらを一言で言い表すなら、獲物を自身の中で『迷わせている』と言える」

「ふむふむ、それで？」

ギンコの頭頂部でドレミーが興味深そうに頷く。

「迷わせることが廻廻の実際の行動であり、人は廻廻に囚われると精神的に縛られ、夢の世界にも似た記憶の再生、人生の循環に閉じ込められる。どうして虫や獣と違い、夢の世界を迷わされるのか。それが『迷い』……妖夢の言葉を借りるなら後悔や残念という精神的な楔が、動物たちを誘い込む花の香りに象徴されるように、人を誘導する香りになるからだ。廻廻は人の『迷い』を足がかりに、意識に干渉しているのだろう」

「じゃあ、妖夢ちゃんが繰り返しの度に感じていた花の香りっていうのは……」

「自身の迷い……後悔や残念に象徴されるものだ。これは文献にもあるが廻廻に囚われたものは夜、花の香りを嗅ぐと不安になるという。自身の後悔を想起させるそれらを前に、不安になるのも頷けるな」

「じゃあじゃあ、この一日が繰り返されている理由っていうのは……」
「妖夢が強い残念、または後悔を感じていた日が今日、この一日なんだろう。一日だけ、というのは妖夢の半身だけしか取り込めていないために、干渉の影響が出にくいのかもな」

「じゃあじゃあじゃあ、白楼剣の迷いを断ち切るっていうのも……」
「その力を使って半霊が、つまりは妖夢自身が感じている『迷い』を断ち切ることができれば、廻廻は精神を縛る足がかりをなくし、半霊から離れるんじゃないか、とな」

まあ、情報から立てた仮説に過ぎないがね、とギンコは言う。しかし、廻廻から初めて抜け出した者が魂魄の家系のものである記録や、事実廻廻が妖夢の半霊を精神的に縛っていて、白楼剣の刀身がそれに介入できた点などからも、ギンコの仮説は真実に迫っているように感じられた。

随分と遠回りをしたと、ギンコは思っていた。いつもなら文献を参照すればわかるような事実を、問題の渦中にいながら自分で調査して導き出さねばならなかった今。幻想郷に来てからの経験がなければ辿り着けなかったであろう。そしていつにも増して重労働である。眉間を揉み込むように、ギンコは指を添えた。

一方で妖夢とドレミーは驚嘆していた。断片的な情報をつなぎ合わせて、よくもここまで考えを飛躍させられるものだ。そんな二人の眼差しを受けて、しかしギンコはさらに先を見据えていた。

「対処法の目処は立った。あとはそれをどうやって実行するかだが……」

「ただ剣を振るだけじゃダメなのかしら」

「それだけでいいなら刀を抜いた時に問題は解決している。そうじゃないってことは、まだ考えるべきことがあるんだろう」

白楼剣で半霊の迷いを断ち切る。言葉は簡単だが、具体的にはどうすればいいのか。考えるべきことは、まだあった。

「そう言えばこの世界は妖夢ちゃんの迷いを足がかりに創られているのよね？ 妖夢ちゃんに心当たりはあるの？」

「え、そ、そうですね……」

ドレミーに聞かれて妖夢は考える。心当たり。今日を繰り返す理由。そして思い至る。

「幽々子様……美味しい秋のご飯を用意して差し上げられなかったからですね、たぶん」

「……貴女の残念って、平和ね」

それくらいなら刀なんか頼らずとも、今すぐ割り切ってほしいと思わずにいられないギンコであった。

第七章 迷い繰る日 玖

ざくり、と地面を踏みしめるたびに、一つ遅れて足音が追いかけてくる。山の中腹。淀みなく歩を進めるギンコの後ろを、白玉楼の庭師、魂魄妖夢がついていく。白玉楼にて廻廻の正体がおおよそ掴めた一行は、直接廻廻を見つけ出すために妖怪の山を訪れていた。

魂魄妖夢の半霊が廻廻に囚われたことで、本体も夢を通じて繰り返す世界に囚われてしまった現状を解決するために、夢の世界の管理人であるドレミー・スイートが蟲師のギンコをこの世界に招き入れたのがおよそ一週間前。途中ドレミーの保護を離れ、ギンコも妖夢も廻廻の創る世界に囚われていたこともあったが、魂魄の家系が残した廻廻に関する記述を元に、ギンコが現状を解消する方法を見出した今。手をこまねき、ぐずぐずしている理由もなくなった。

夏の活気は薄れ、くすみ始めた木々の合間を縫うように、冬の訪れを感じさせる乾いた寒風が一行の頬を撫でて緩やかな斜面を下っていく。かさかさとした、冬枯れに近づく野山から、何かは抜け出して立ち去ってしまうような、そんな印象の風だった。

「ここいらで間違いないのか。お前さんが昨日、実りを求めて歩き回ったところは」

「はいおそらく。天狗に追われながらでしたので曖昧ですが」

妖夢の記憶を頼りに、一行がたどり着いたのは山の中でも特に起伏が激しく、木々も鬱蒼と空を覆う場所だった。くすんだ色の葉に日が遮られ、地面の隆起がより深い陰を落とす。一部の地面は盛り上がり、活断層のごとく地肌を見せつけ、根が露出している。そんな斜面の光景は、さながら大きな生き物の断面図のようであり、それを覆い隠すように、薄く落ち葉が張り付いていた。

それは今まで見てきた妖怪の山の様子とは違い、どちらかといえば、魔法の森に近いような雰囲気のところだった。天狗に追われながら身を隠し、山を歩き回ると、自然とそういう場所を選んで通るようになる。山を見守る千里眼に死角はないが、それでも目の届きづらい場所というのはあるものだ。

日も傾き始め、時刻は昼と夕方の間、曖昧な領域に足を踏み入れている。繰り返しの刻限は日の入り。日が山の稜線に隠れ、夜が訪れるとともに世界は剥がれ落ちる。それで全てが終わるわけではないが、妖夢は自室に、ギンコは里の大通りにその身を送り戻される事を思えば、余計な時間をかけている暇はないと言えた。迫るその時を思い、ギンコは意気込んだ。

「よし、じゃあ手分けして探すぞ。廻陋は暗がりには潜む蟲だ。ここらはその条件にもあっている。花の香りが強くなったら俺を呼んでくれ」

「見つけた後はどうするんですか？」

「……正直気は進まんが、刀を突き立ててみようと思う。何が起こるか、わからんがな」

そう言つてギンコは妖夢の腰に下げられた刀を見た。造りの質素などどこにでもありそうな刀。魂魄の家系に伝わる、白楼剣と銘打つそれには、斬つた者の「迷い」を断つ力があるのだという。

ギンコが見出した廻陋の正体。人の後悔に象徴される「迷い」を足掛かりに人の意識を乗っ取ることで、獲物を得る生態がもし正しいのなら、廻陋に囚われた者の「迷い」を白楼剣によって断ち切ることで、廻陋の支配から抜け出せるはず。ギンコはそう考えた。

「とにかく、廻陋に対してその刀がなんらかの作用をすることだけは確かだ。試してみる価値はある」

「そうですね。何もしなければ、ずっとここから出られないんですから」

妖夢は胸元に引き寄せた両手で握りこぶしを作る。非常に前向きな意気込みが伝わってくるそんな仕草。

「そういうことだ。じゃあ始めるぞ」

「はいー」

そうして二人は二手に分かれて廻陋を探し始める。がさがさと茂みをかき分けて陰の中に足を踏み入れていくと、湿った土の香りがふわりと広がった。

枯れかかった茂みを漁り、落ち葉が薄く積もる地面の凹凸を覗き込んで廻陋を探すこと一刻。日が直接差し込むわけでもないここでも汗は、じつとりと肌にまとわりつく不快感がある。そんな汗が額に滲み、手足はもちろん、服の裾まで泥で汚れ始めた頃になっても、廻陋は未だその姿を表すことはなかった。

「ふう……」

妖夢は身を起こし、肩を使って顔を伝う汗を拭う。手ぬぐいの一つでも用意してくればよかつたと思うが、もう遅い。息をつき、薄汚れた自分の姿を一瞥して、また微かな違和感を探す作業に戻っていく。焦っているのだろうか。自問する。しかし、自答するまでもなく、横合いから声がかけられた。

「焦っても仕方ないんじゃない？ 妖夢ちゃん」

「ドレミーさん？」

顔を上げ、声が出た方を見る。ふわりふわりと風に揺蕩う羽毛のように、軽やかな存在感を主張するドレミーがそこにいた。気まぐれなのか、体の上下を反転し、ひっくり返るようにこちらを見ている。

ちやうど自分でも思っていたことを言葉にして告げられ、若干面食らった妖夢は、少し考える様な素ぶりをした後、苦笑して答えた。

「やっぱり焦ってるんですかね……」

「そうよ。ギンコさんとも離れちゃったし」

「え？ あ、ほんとだ」

ドレミーにそう言われ、辺りを見渡すと視界の端の端、山の斜面を降りた先の木々の隙間に、ギンコの白髪がかろうじて確認できた。廻陋を探しているうち、いつの間にか随分と距離が開いてしまったらしい。

「見失う前に一声かけてこいって。はいギンコさんから。手ぬぐい」
「うわっぶ、あ、ありがとうございます」

土汚れが目立ち始めた妖夢の顔を隠す様に、ドレミーは少々乱暴に白い手ぬぐいを妖夢の顔に

自分の体ごと押し付けた。妖夢自身では見つけられないだろう顔面の細かい汚れを落とすために、小さな体を目一杯使ってごしごしと擦り上げる。

急に顔を布で覆われて驚いた妖夢は咄嗟に手ぬぐいへと手を伸ばす。自分の顔から土汚れが移ったそれを手に取った時には、もう眼前にドレミーの姿はない。顔を押しさえつけていたはずの彼女は妖夢の頭の上に移動していた。帽子でも被せられたかのような感覚と同時に、声が聞こえた。

「どこにいるのかしらね、廻廻は」

「……さあ。ギンコさんがいうには花の香りがする暗がりには潜んでいられないですが」

「花の香りねえ……」

そう言われて、妖夢の頭の上で姿勢良く座り込んだドレミーは鼻を鳴らした。ふんふんと辺りを嗅ぎまわり、顔を動かすが、すぐに首をかしげる。

「……湿っぽい匂いしかないわ」

「ですよ……でも……」

どこまでも続いている様に見える茂みと木々の連続は広く口を開けて世界を縁取っている。充満する草木の香りは雑多に個々を覆い隠し、山は一つの生き物のようにそこにいた。

濁った水の中にいる、一匹の魚を手探りするような感覚。徒労感が拭えない作業の向こうから、何かの気配を感じてやまない。妖夢はわかっていて、ここには何かがあること。それが廻廻と呼ばれるものの気配なのかはわからないが、とにかく、ぬらりとした濃密な気配がこの場所に広がっている。

「ドレミーさんは何か感じませんか？」

自身の持つ違和感の共有を求めるように、妖夢はドレミーに質問する。

「……違和感はあるわ。私の世界のテクスチャーじゃない部分があるから」

「て、てくすちやっ」

「うーん、空間の肌触りみたいなものかしら。いつも着ている着物の質感が違うと、おや？　ってなるみたいな」

「あーなるほど」

期待通りというか、ドレミーも少なからずこの場に何かを感じていたようで、妖夢に同意した。ギンコの言うところの花の香りはしなくとも、ここに蟲、と呼ばれる異形のものがあることは間違いないようだった。

「……試しに抜いてみますか」

「抜くって、剣を？」

「ええ」

それはただの思いつきだった。腰に差された小太刀、白楼剣が廻廻という蟲に対するなんらかの作用を起こせるものだとしたら、何か、何か起きるのではないか。そんな程度の考えから、妖夢は刀の柄に手をかけた。

きちり、と小さく金属の擦れる音がして、白刃が閃くように滑り出る。右手で抜き放つ動作のままに刃を寝かせ、一文字に眼前の風景をなぞった。光を受けずとも、妖しい光を返してくる刀身が明瞭な存在感を突きつけてくる。

「……何もありませんね。やっぱり」

柄を胸元に引きつけ、刀身に自分を写すように構えた。何の気なしに起こした行動。焦点を刃に合わせ、写り込む自身を見つめる。それが、引き金だった。

自分はもう少し考えるべきだったのだ。この刀が今まで何をしてきたのか。この世界に対して、どう作用してきたのか。もう少し、もう少しだけ、考えるべきだったのだ。

「……」

気付いた時には遅かった。途端に世界の色が剥がれ落ち、さつきまで確かに感じていた秋の風景は彩を失い、一瞬、全てが静止したように固着した。

「い、いったい何が」

戸惑いを隠せない。辺りを見回す。いつの間にかドレミーも、ギン

この姿も見えなくなっていた。

「ドレミーさん！ ギン「キーン！」

張り上げる声も届かない。いや、響かない。くぐもった声はまるで口元を大きな布で覆われているような響きを残し、自分の耳にすら曖昧に聞こえた。

心臓の音がいやに大きく聞こえる。自分のものとは思えない。何かの胎内にでもいるかのような反響。いつか感じた気配がぬるりと足元を駆け抜け、背後に抜けていく。同時に景色が遠ざかり、世界が縮んでいった。

嫌な気配がする。いや、気配などという曖昧なものではない。これはそう、香り。嫌な気持ち、焦燥、不安の象徴。誰もが抱える、いつかの後悔の念を呼び起こし、増幅する花の香り。

「……」

無言のままに背後を振り返る。いつの間にか世界は引き伸ばされ、平坦に均された山の写真の上を滑るように視線が動いていく。花の香りがする。そうして目に映るもの。それに絶句する。

「え……？ ……わ、わたし……？」

鏡合わせの向こう側。そこに自分自身の姿を捉えた。二人の自分が対立する構図を、なぜか俯瞰的に理解する。白黒の山の風景が平面にされ、円筒状に自分たちを取り囲んでいた。

得体の知れない自分自身の顔には三つの黒い穴が開いていた。縁の澱んだ、泥でも詰まっていそうな穴。それらはどうも、口やら目を模しているようだった。そうとしか思えない。でなければいつたい、その穴から感じる視線の正体はなんだと言うのか。

花の香りがする。意識の混濁が激しく、まともな平衡感覚が保てない。頭がおかしくなりそうだ。花の香りがする。

にちやり、と目の前の自分が笑う。それが合図になって、背後から無数の腕のように伸びてきた陰の塊に、視界も、意識も、すべて飲み込まれた。

「……え？」

ドレミーが異変に気が付いたのは一瞬だった。しかし、それより早く、異変は起こり、そして跡形もなく完了してしまった。

「妖夢ちゃん？ あれ？」

さつきまで側にいた、その名前を呼ぶ。しかしその声に応える者はいない。もうどこにも見当たらない。

「え？ ちよ、ちよつとどういうこと？」

疑問の解消を誰に求めたらいいのか。それすらわからない。とにかく一つ、わかること。それは。

「ぎ、ギンコさーん!!」

魂魄妖夢が、一瞬のうちに影も形もなく目の前から消え去ったという事実だけだった。

「……何があつたんだ」

「わからない……ほんとうよ！ 気がついたら、もう……」

すぐさまギンコと合流したドレミーは事の経緯をギンコに説明する。その説明というのも『気がついたら妖夢が消えた』という言葉以上の情報を与えられるようなものではなく、説明を受けたギンコ以上に説明をした本人のドレミーが困惑しているような有様だった。

悲嘆し、取り乱すような真似こそしないものの、ドレミーはだいぶ動揺しているようで、意味もなくギンコの周りをふわふわと浮遊して、行ったり来たりを繰り返している。ギンコは妖夢が立っていたらしい地面にしゃがみこみ、落ち葉を一枚、手にとって考えを巡らせていた。

かさかさに乾いて、葉脈が浮き出たそれを見つめる。具体的に観察を行っているわけではない。その証拠に、ギンコの視線は葉に注がれていようと、焦点は別のところに結ばれているようだった。

「……きっかけはなかったか。何か、特別な行動を起こしたような何かだ」

目線を動かすことなく、静かに、ギンコはドレミーに尋ねる。せわしくなく宙を彷徨っていたドレミーを捕らえるように、重くにじり寄ってくる響きに、動きを止め、少し考えたドレミーはそっと答えを口にした。

「妖夢ちゃんが剣を抜いてみようしたわ。腰に刺してあった方」

「白楼剣を？」

「うん」

「……やはり白楼剣には廻陋に対するなんらかの作用があるのか」

白楼剣を危険視する廻陋が、妖夢が行動を起こす前にそれを封じるために襲ってきたと考えれば一応の説明はつく。ギンコは目を凝らし、周囲を観察したが、廻陋と思しき蟲の気配を辿ることはできなかった。

「お前さんにも、どこに行ったかわからないのか？　ここは一応、お前さんの管理する夢の世界でもあるんだろう？」

立ち上がり、辺りを見渡しながらギンコは問う。ここは廻陋とドレミーが支配権を争う夢と記憶の世界。ならば妖夢の行方を、ドレミーならば探れそうなものであったが。

「……残念だけどわからないわ」

返ってきた答えは期待に込めるようなものではなく、目を伏せ、ゆっくりと首を横に振りながら、ドレミーは申し訳なきそう呟いた。「そうか……」

蟲の気配もなく、ドレミーにも妖夢の気配は探れない。そうなるともう、ギンコにできることは何もなかった。

悔しき、焦燥感といった感情は不思議と湧いてこなかった。ただ、どうすることもできない無力感だけがしとりしとり、と全身を包んでいる。風に揺られ、ついには枝から脱落する一枚の葉のように、いつまでも青々しく、息をし続けられることもない。いずれは地に還り、解けるように終わる。それは必然で、そこに喜怒哀楽は介在しない。どうにもできないことは、往往にしてあるものだ。例えるなら、そんな気分だった。

見捨てたいわけではない。諦めたいわけでもない。だがどうしよ

うもない。廻陋に対する唯一の手段と考えていた刀も、それを扱える人物も、もういない。手詰まり。冷たい質感の岩石が、行く手を塞ぐ洞のように、試みは八方塞がりの様相を呈していた。

「どうしようか……」

「……今、考えている」

それでもギンコは思考を止めずにいた。それだけが現状できることだった。何か、まだ何かないのか。しかし、空転する。想いがはやり、確かな何かが導かれることもなく、ただ重苦しい沈黙だけが、ギンコとドレミーの周囲を満たしていた。

そんな沈黙を破るように、大きな音が鳴り響く。

硝子を砕くような音、錆びついて立て付けの悪くなった扉をこじ開けるような音。唐突に始まったそれらに、確かな絶望をもって反応したのはドレミーだった。

「まずい！ 世界が崩れ始めた！」

「なんだと？」

「ここは私と蟲の領域に橋渡しされていた灰色の世界よ。妖夢ちゃんという要石が無くなった今、この世界は完全に廻陋によって閉じられるようとしている！」

「閉じられるとどうなる」

「強制退場よ。貴方は眠りから覚め、私は自分の領域に戻される。そしてもう二度と、廻陋の世界に干渉することはできない……」

「！……くそっ！」

ギンコは歯噛みする。世界の崩壊は明確な音の洪水となって、押し寄せてくる。

いつか見た終わりの光景。世界が一枚の写真のように引き延ばされ、破れていく。そうして剥がれ落ちた風景の向こう側から、全てを飲み込む闇が顔を出す。

そうしてギンコの感情が追いつき、やっと悔しさらしきものを感じ始めた時。全ては終わり、世界は外れ、夢の世界は閉じていった。

後には何も残らない。ベリベリと引き剥がされた精神は一瞬、引き延ばされるような不快感を覚えた直後、ろうそくの明かりを吹き消す

ように、呆気なく、舞台から降ろされた。

第七章 迷い繰る日 拾

花の香りがする。どこからともなく。花の香りがする。

不思議な香り。一つ、息を吸うほどに世界は狭まっていく。

もう頭の中は香りで満ち満ちている。暗闇の中、匂い立つ花を探す。

されど手は虚空を滑り、やがて地面の感覚さえ曖昧になっていった。

花は、花はどこ？ 問いかけるも、その問いは己の声なのか。それさえわからぬほどに、意識は香りで満たされた。

そうして闇をたゆたう。自分がわからぬまま、ただ。手を滑らせては惑い、迷った。

何も無い。何も無いのに。蠱惑的な、花の匂いだけを、覚えていた。

それはいつもと変わらぬ、幻想的な夜だった。桜の花びらが、さながら粉雪のごとく降り注ぎ、地面を薄く覆い、薄紅色に化粧している。次いで空を見上げれば、天蓋を満たす青白い月光が、慈悲深くも柔らかく微笑みかけてくる。天も地も、横たわる時間の流れに身を任せ、儚げな一瞬を生きている。行灯の明かりも必要ない。自然と溢れる光が全てを包み、穏やかな光景だけが、ここにある全てだった。

そんな夜を変わず過ごす。屋敷の縁側から見つめている。短い足を垂らして座り込む私の両隣には、いつまでも変わらぬ姿が二つある。この屋敷の主人と、そのお方に仕える、私の祖父。いつでも私に甘く、自分にはもっと甘い幽玄な雰囲気的女性と、私や主人を穏やかに見守りつつ、時に厳しく諫める老年の男性。西行寺幽々子と魂魄妖忌。小さな私の大きな抛り所。その二人が住まう世界に、私は生きている。

目の前に広がる完成された箱庭は、幼い私には大きすぎる世界そのもので、己の未熟さを浮き彫りにする光源のようなものだった。祖父が手入れし、主人が慈しむ。それをいつも側からみているだけ。私に

できることは何もない。しかし悲嘆はなかった。むしろこの完成された世界に、一日でも早く自分の存在を刻み付けたいと思っていた。認められたかった。一人前になりたかった。背伸びでもなんでもいい。早く早く、とこの頃の私はそればかり考えていた。

「妖夢、少し話をしよう」

「はい、おじいさま」

子供らしくない畏まった口調。丸みを帯びた声色に似合わぬ、角ばった言葉。意図的に選んでいた。主人の女性はこの口調が面白くないと少し拗ねる時もあるけれど、祖父は褒めてくれた。

返事をして、祖父の方を見た。祖父は穏やかな表情で庭を見つめていた。ともすればぼんやりとして何も考えていなさそうな、月光に薄く照らされた横顔が多弁に私へ語りかけてくる。幼い私に、その全てを汲み取ることはできない。ただ、祖父の温顔はいつも私に安心感を与えた。

「妖夢は早く大人になりたいようじゃな」

「はい。一日でもはやく、白玉楼の庭師として、従者としてゆゆこさまにみとめられ、おじいさまの後継として身をたてたいです」

「では今の自分は未熟で、後継としてふさわしくないと思っている」と「……はい。いまのわたしはともじゃありませんが、おじいさまの後継は名乗れません」

祖父の問いに正直に答える。横顔から目を背け、自分の膝頭を見てしまったのは単に悔しかったからだ。己の未熟を直視できないくらいには、私は未熟だった。

「確かに、妖夢。今のお前は幼く、弱く、小さな存在じゃな。お前にはできずとも、儂ならできることもあるじゃろう」

己を知ることが成長への第一歩。いつか祖父に教わったことを思い出す。祖父と自分を隔たる年月という厚い壁を越え、近づいたためには一步一步、前に進むしかない。だけどいつか、と奮起することがこの時の私のせめてもの矜持だった。

少し下を向いて祖父の言葉を待っている。風が少し強く吹いて、夜桜の枝がざわめく。じゃあ、と祖父は口を開いた。

「妖夢はどんな自分になれば、儂の後継にふさわしいと、一人前だと、胸を張れる?」

「え?」

そう聞き返した私が、もう一度祖父の顔を見上げてしまう。祖父は相変わらず、ぼんやりと掴み所のない表情で庭を見つめていた。

「一人前とはどんな人物を指すんじゃないだろうな」

「えっと……」

「家事をこなし、屋敷を手入れし、主人に仕え、剣を極める。それが一人前の条件なんじゃないだろうか」

「おじいさまは一人前だと思います」

「ありがとう。しかし、儂は自分が一人前になれたと、思ったことはない」

いつになく弱い言葉を聞かせてくる祖父を見て、その真意を測れず、私はどうしてそんなことを言うのかと、怒りにも似た悲しみを浮かべた。私の目標がそんなことを言わないでほしい。あなたが一人前でなかったのなら、私はなんだと言うのか。言葉にならない想いの塊が表情を歪めていた。

「妖夢、よくお聞き」

祖父の大きな手が私の頭に被さった。撫でるでもなく、添えるでもなく、包み、慈しむような手つき。ゆっくりと、私を宥めるように伸ばされた。

「一人前とは未来の自分を指して言う言葉。それは現状を未熟と自覚し、歩みを止めぬために自らの内に生み出す影法師に過ぎん。本来、人という器に、完成はないのじゃよ」

「? ……どういう意味ですか?」

「修行の道に終わりはなく、なれば人の道にも終わりはない。人は未熟を恥じ、それを過去とするために、未来に理想を見据え、今を歩む。誰も時間を超えることはできません。理想に固執するあまり、今を急いで本末転倒だということよ」

幼い私には少し難しい言葉。直前まで昂ぶっていた感情のせいもあり、理解が追いつかなかった。疑問符を浮かべる私に、なおも言い

聞かせるように祖父の言葉は続く。

「妖夢や。大事なことは今を後悔しないように生きることじゃ。今を蔑ろにすれば、いずれ後悔という重石を一つ抱えることになる。それは当然、お前の歩みを遅めることにつながるじやろう。過去の重石に後ろ髪を引かれ、未来の理想を見失う。そうなればお前は人生に迷うことになる」

「人生に迷う……?」

「左様。そしてそうなってしまうわぬように、己を律する手段として、魂魄の家系は剣術を修めるのじゃ。過去に重石を作らぬように。後悔が己の迷いを生まれぬように。人生に迷わぬように。儂らは代々、剣を伝えておるのじゃ」

そう言いながら祖父は私を見た。皺の刻まれた灰色の肌。月明かりに染まったような白髪。細められたまぶたの奥には、じつとこちらを伺う眼が光る。慈愛を含んだいつもの眼ではない。剣を構えた時の眼。祖父が、私に何かを伝えようとする時の眼だった。

少し身震いする。何がそうさせるのか、正確なところはわからぬ。しかし、あえて言うならば少しの不安と、誇らしさが混在する微妙な境界線にまたがる動揺が、震えとなって私の体を支配しているようだった。

いつか祖父に教わったことを思い出す。幼い私はまだよくわかっていないようだけれど、今の私なら、祖父の言葉を少しは理解できるような気がした。

「ふふつ。妖忌の言うことは難しいわね、妖夢」

「い、いえっ！ そんなことは……」

風に乗って滑り込んできた声に、幼い私は理解が及んでいないと見透かされたような気がして、慌てて取り繕った。そんな私を優しく引き寄せ、頬が触れ合うような温かい距離で、彼女はゆっくりと囁いた。「大丈夫。妖忌は妖夢が自分の後継にふさわしくなんて思っていないわ。むしろ貴女以外に自分の後継はいないと思っっているし、いずれ立派に成長すると信じてるのよ。もちろん、私もね」

「え? ほ、本当ですか? ゆゆこさま」

「ええ。だ・か・ら。今は細かいことを気にしないで、のびのび元気に育ってほしいって言ってるの。妖夢はかわいいから、おじいちゃんも、もっと甘えてほしいのよ」

「……幽々子様、それは些か大雑把にすぎるかと。あと私は別に甘えてほしいわけでは」

「あらそう。じゃあ妖夢。おじいちゃんはもう孫を膝の上に乗せたり、おんぶしてあげたり、手を繋いで一緒にお散歩したりするのは面倒らしいから、甘えちゃダメよ」

「え……」

「な、何もそこまで極端にならずとも……！ 違うぞ、妖夢！ おじいちゃんはそんなこと思っておらんからな！」

それは幻想的な夜だった。月と桜と風の踊る、この世のものではない原風景。清風明月、桜花爛漫の幻想屏風。それが私の世界。いつか見慣れた、美しい世界。だけど私のまぶたに、今も鮮明に焼き付いているのは、少し焦った困り顔のおじいちゃんと、楽しそうに、優しげに笑う幽々子様の姿だった。

ここはどこだろう。まず頭にあるのはそれだけだった。

黒い天蓋に覆われた、見渡す限り黒に染まった平原。すぐそこで途切れているような地平は、しかしどこまでも続いているようで、距離感というものが失われるとこうなるのか、なんてことを思った。

ゆっくりと首を動かす。動作の一つ一つが妙に重たい。粘土質の泥がまとわりついていてような感覚があつて、体を動かすのがとても億劫だ。

私は魂魄妖夢。名前だけは憶えている。しかしなぜ、私はここにいるのだろうか。ここはどこなのだろう。幼子が積み上げる積み木のように、ことりと、と軽い調子で、しかし確実に疑問は湧いて積もっていく。自分も誰も、答えることはできない。必死に頭を働かせようとしても、胸の奥からもやもやとした不安が膨れてきて、すぐに息苦しくなり、全てを覆い隠してしまう。

ついさつきまで、すごく幸せな夢を見ていたような気がする。陽の光をシャボン玉に閉じ込めたような、儂くて、温かな夢を。

もう思い出せない。思い出したくともそれができない。代わりに胸中を支配する強い欲求が、喉の奥から絞り出された。

「花……」

そうだ。花を探さなければ。そう思い立った瞬間、どこからともなく花の香りが匂い立った。そして花の香りに誘われるように、すると足が動き出す。さつきまでの息苦しさや、手足の重さは薄れ、自然と体が前に引っ張られた。それはまるで、香りという名の不可視の糸に、体が操られているような感覚だった。

そうして闇の荒野に行く。自我も薄れ、何かに突き動かされるように花を探す。

花はどこ？ 時折手を突き出して、虚空を掴む。それで何かが変わるわけでもなく、しっとりとした冷たい空気が指の間をすり抜けていった。

「……」

どれだけそうして歩いたのだろう。何度目かもわからない、伸ばした手を下ろす。その時、手首のあたりに何かがぶつかるような違和感を覚えた。

服の中に何かがある。手首に感じた違和感の正体は、衣囊の中にあつた小さな包みだった。指先で探り当てたそれを手のひらに置いてみる。これはなんだろうか。乳白色の、つるりとした質感の紙に包まれたもの。開いて中を見てみれば、そこにはいくつかの丸薬のようなものが入っていた。

「……」

なぜだろうか。自分はこの丸薬のようなものに覚えがある。困った時に使えと、誰かに授けられた気がする。誰に授けられたのか、困った時とはどんな時か、それはわからない。だけどきつと、それはとても重要なことだった気がする。

一つ、小さな粒を摘んでみる。皺が浮き、乾物のような硬さをもったそれ。クルミをギュツと凝縮して、小さくしたような見た目。そん

な木の実のように見えなくもない。

花の香りがする。この粒を見ていると、妙に胸騒ぎがしてならない。花の香りに従っていけば感じずに済んだ胸のもやもやが再浮上してくる。この粒は良くないものなのだろうか。いや、きつとそうなのだろう。これは良くないものだ。そう思い、目を細め、顔を歪ませながら、摘んだそれをいつもの目線の高さまで持ち上げた。

「……う。」

持ち上げた手を目線で追いかけて、手のひらを見つめるように俯いていた私は自然と前を向き、そして目の前に現れたものを自分の手越しに見つめた。

眼前にかざした小さな粒の背景には先ほどまでと変わらない黒い平原が広がっている。距離感の掴めない地平もそのまま、何も変わっていない。しかし、それらの景色から浮き上がるように、妙な雰囲気の人立っていた。

私とその人の間には三間ほどの距離があいていた。駆け寄ろうとは思わなかった。ただ立ち尽くし、じつとその人のことを見ていた。その人は輪郭がぼやけ、特徴が掴みづらかった。唯一わかりそうなことは、その人の髪が白銀に染め抜かれているということくらいだった。

あなたは誰ですか？ そう問いかけても、その人は何も答えなかった。代わりに私がそうしているように、小さな粒をつまむように、手の形を作った。

人差し指と親指で輪を作るような形。次にその人は輪を作っている指先を、そつと自分の口元に寄せた。もしや、この粒を食べると言っているのだろうか。そう解釈できそうな動きだった。

私は自分が摘んでいる小さな粒をもう一度見た。そして突如現れた謎の人を見た。いつの間にか胸中のもやもやが消えている。良くないものだと思っていた粒を、今ならすんなりと受け入れられそうだった。

その人は私を促すように、自らの手を差し出し、手のひらを上に向け、ゆつくりと上下に揺らしてみせた。私は、その人に従うのが良い

気がして、包みから取り出した小さな粒を、ゆつくりと口の中に入れた。ぼんやりとした輪郭の、髪が白いその人は、表情も伺えないのに、なぜかとても満足そうに見えた。

ころころと粒を口の中で転がす。硬い感触が飴玉のようだ。飴玉にしては小さいし、味もしないが、気分が悪くなったりはしなかった。私が口の中に意識を向けていると、その人は次に、いつの間にも持っていたのか、どこに隠していたのか、とにかくどこからか刀を取り出して、それを水平に掲げた。黒塗りの鞘に収まった平凡な見た目の小太刀。自分のものなのだろうか、静かに観察していると、その人は急にその刀をこちらに放ってきた。

放物線を描いてこちらに迫ってくる刀。途中で鞘から抜けたりすることもなく、重さを感じさせない羽毛のような挙動でゆつくりと近づいてくる。私は慌てることなく包みを服の中に戻し、両手でその刀がやってくるのを待ち構えた。

胸元あたりで上に向けた両手のひらに、刀が舞い降りる。衝撃はなく、手のひらに吸い付くように収まったそれを、私は以前から知っているような気がした。白楼剣。刀の銘が脳裏を過る。そうか、これは。

これは、私のものだ。

……もう手放すでないぞ。

その人が初めて口をきいた。私に言葉をかけてきた。白楼剣を授けてくれた、緑の着物の、白髪の人が。誰ですか。あなたは誰ですか。どうしても、思い出せない。

靄のかかった頭の中。花の香りがする。いや、もうそんな曖昧なものではない。知っている。これは私が知っている、香り。

花の香りがした。その人から花の香りがした。私が知っている、私
の世界の香り。芳しく記憶と春を彩る、桜の香り。桜の香りを纏つた、その人を、私は知っている。

言葉を返そうと口に力が入った。それがまずかった。

「!!」

途端に口内に苦汁が広がる。舌の根から喉の奥にかけてべっとり

と墨汁でも流し込まれたような、風味もへったくれもない、純然たる苦味。思わず舌を引き抜いて、丸ごと洗ってしまいたくなるような衝動に駆られる。口を押さえて背を丸め、えずきそうになる一步手前で、醜態を良しとしない女としての理性が働いた。しかし口の中に木の実をとどめておくことはどうにもできず、苦汁に変わった自分の唾液と一緒に、盛大に吐き出してしまった。

「ううえ……ぺっ、ぺっ！ ひどい味……！ 気つけにしたって限度がありますよ！ もう……」

ここにはいない男に向かって文句を言った。それでも少しも気分は晴れず、しばらく地面にうずくまり、悶絶する。魔理沙が気分を悪くしたと、家に帰ってしまった理由がよくわかった妖夢だった。

やがて自身の唾液で口の中が洗浄され、味蕾一つ一つを締め上げるように絡みついてきた苦味が薄れてきた頃、ようやく妖夢は自分の置かれている状況を理解するために頭を動かすことが許された。

袖で口元を拭いながらゆっくりと立ち上がる。視線を周囲に投げれば、そこにあるのは見渡す限りの黒い平原。ここがどこなのかはわからないが、今まで自分がいた場所とは大きく異なる空間であるということくらいはわかる。

直前まで自分がしていたことは思い出せる。自分は蟲師のギンコと、夢の世界の管理人であるドレミー・スイートと一緒に廻廻の世界から脱出するため行動していたはずだ。

「私は妖怪の山で廻廻を探していたはず……それがなんでこんなところ？」

「ここは廻廻の内部ですよ。半身の私」

「え？」

背後からした声に反応し、振り返る。そこには

「やっときましたね。遅いですよ、半身の私」

「……私？」

第七章 迷い繰る日 拾壹《了》

目の前に突然、もう一人の自分が現れたとき、人はどんな行動を取るのだろうか。狼狽える？ 恐怖に足がすくむ？ そのどちらもが去来して、自分を見失い襲いかかる？ どれもありそうな話だ。しかし実際にその場面を体験した魂魄妖夢の行動は、心境こそどうあれ、とにかく立ち尽くし静観するという単純なものだった。警戒する。それが彼女の出した結論だった。

鏡合わせの実像。それは自分の動きに追従する光の反射とはわけが違う。濃密な存在感と、言いようのない違和感を纏った現実だった。音、温度、香り。光には付随しない環境情報が明確に飛び込んでくる。緊張しているのだろうか、唾を飲み込んだ喉が鳴る。受け入れがたい現状に警戒心が反応し、思わず靴の裏で地面を擦った。

一方で妖夢の目の前に現れた妖夢らしきモノは泰然としてそこにいた。髪の色、瞳の動き、姿勢や仕草が浮き上がり、本物に語りかけてくる。いや、この場合はどちらが本物なのか、それは問題ではなかった。

「そう警戒しないでください。危害を加えるために姿を見せたわけではありませんので」

「……あなたは誰ですか」

警戒の色を隠さない自分自身に、妖夢らしきモノは落ち着き払った声で答える。

「私はあなた自身です。いえ、あなたの半身と言った方がわかりやすいですか」

「え……じゃ、じゃあ」

「はい、こうして言葉を交わすのは初めてですね。もつとも、自我を手に入れたのがつい先日のことである私にしてみれば、物事全てが初めてのようなものです」

妖夢らしきモノは微笑をたたえてそう言った。その言葉を聞いて、妖夢は肩の力を抜いた。いつの間にか腰に据えていた刀からも手を離し、背筋を伸ばすようにゆっくりと姿勢を正す。

妖夢の前に現れた妖夢らしきモノ。それは妖夢自身。廻廻に囚われていた半霊だった。

二人は向かい合う。微笑みを浮かべて、余裕を見せる妖夢。眉を下げ、困惑を隠せない様子の妖夢。未だ現状を正しく理解できていなさそうな自分に、半霊の妖夢は優しく言葉をかけた。

「私を探しに来たんですよね？ お疲れ様です。無事見つけていただけて何よりでした」

「……色々と事情を知っていきそうな態度ですね。少し質問しても？」

「ええ。私自身に隠すことなどありませんとも」

なんでもどうぞ、と両手を広げた半霊の妖夢はどこか幼く見える。姿形は半人の妖夢と相違ないが態度、仕草に柔らかさと穏やかさが共存し、半人の妖夢には演出できない少女らしさのような雰囲気がそうさせているようだった。

その雰囲気を半人の妖夢も感じ取れたようで、年相応、あるいは少し幼いくらいのその態度を見て、咳払いを一つ挟んで質問した。

「……ここはどこですか。幻想郷の一部とも思えません」

「ふふ。ここは異空間ですよ。廻廻、と聞いてわかります？」

「知っています。では私は廻廻に囚われたんですね……不覚です」

黒一色の視界を眺めてため息をつき、額を押さえた。祖父が今の私を見たらどう思うだろう。妖夢はふとそんなことを思った。

「囚われたと言うのは適切ではないですね。『迷い込んだ』とするのが正しいでしょう」

「どちらでもいいです。とにかくここを出なければ。ギンコさんもドレミーさんも心配してるでしょうし」

「あなたがここにくるまでの協力者ですか？ お世話になったんですか？」

「ええとでも。廻廻のことも教えていただきました」

「それはそれは。奇特定の識者も居たものですね」

「……さつきからまるで他人事のようにですね。本当に私の半身ですか？」

先程からにこにここと笑顔を崩さない半霊の自分に、妖夢は鋭い視線

を向けた。不意に半人の自分に睨みつけられ、妖夢の表情が固まった。しかしそれも一瞬のうち。すぐに調子を取り戻したように笑顔を作って、妖夢に言った。

「ええ。半身も半身、私はあなたの半霊ですとも。同じ時を生き、同じ人生を歩んできた、ね」

「それにしても幼さが残る成長ですね。私はそんなに落ち着きのない子供のような印象ですか？」

「それはご愛嬌。と言うより、肉体を持たない自意識でしか存在してこなかった私ですから。あなたより成長が遅れるのはやむなしかと」
そんなことが聞きたいんですか？ と半霊の妖夢は言う。肉体のようなものに付随して、自我の芽生えた半霊は今の状況を楽しんでいるのかもしれない。なぜ半霊に肉体が付与されるのか。謎が頭をよぎる。

「……あなたはなんなんですか。廻廻とは獲物の後悔や残念を足がかりに精神を縛り、行動を縛ることで捕食するだけの生き物ではないんですか？」

「概ね間違つてはいませんが少し違いますね。でも本質の輪郭だけは捉えているようで。これは識者様の知力が伺えます」

「茶化さないでください。これ以上の回り道は御免です」

にこやかに、和やかに会話を続けようとする半霊の自分の言葉を断ち切るように、半人の妖夢は一步踏み出した。腰に下げられた白楼剣が揺れる。

「怖いですね。今にも斬りかかってきそう」

「お望みならばそのように」

「性急ですねえ……まあ廻廻に対する認識は間違つていませんよ。それは獲物を食し、数を増やす営みをしています。ですが精神を縛っているわけではありませんし、ましてやこの空間に迷い込んだ動物を直接捕食しているわけではありません」

「？ どう言う意味ですか」

どう言う意味も何も、と半霊の妖夢は半人の妖夢に背を向けて両手を広げ、天を仰いだ。

「ここは生き物というより、そういう現象の中、と解釈した方がしっくりくると言っているだけです」

「現象?」

「はい。一度迷い込んだが最後、後悔や残念を抱えたままでは出口にたどり着けない異空間。それがこの場所です」

自分自身が何を言っているのか、すぐには理解できなかった。半人の妖夢の理解を待たずに、なおも半霊の妖夢の語りは続いていく。

「この空間の呼び名は決まっています。誰もこの空間を認識できず、誰もこの空間から智慧を持ち帰ることができないのですから、当然ですね。ですが私に知識を与えてくれた人曰く、阿頼耶あらいや、とそう呼ぶのが最もらしいそうです」

「あらや……仏教世界における集合無意識のことですか」

「名付けの原因はそこにあるようですが、今回は単純に『蔵』という意味ですよ。意識の源泉。後悔や迷いに代表される衆生の苦しみを生み出す大元……無明が浮き彫りになる空間。仏教的に解釈するとそうなるらしいです。わかりやすく、端的に言えば『過去と向き合い、迷いを断つことを促す精神活動世界』だそうです」

「……途方もない話ですね。荒唐無稽、と言い直した方がいいですか」
「ですよー。私もそう思います」

やはりどこか幼さの残る口調で、半霊の妖夢は楽しげに言った。両手を広げて、足を軸にくるくると回っている。あっちこっちによるよろと落ち着かない様子ので、はじめこそ鏡合わせの自分として警戒心を抱いていた半人の妖夢も、今は全く性格の違う双子の妹を見つめているような心境になっていた。

「とにかく、ここはそういう場所なんです。そして現世とこの場所を繋げる回廊として機能し、この場所の暗闇に潜み、香りで獲物を誘い込んではその精神活動から栄養を得ている存在こそ、廻陋というわけですね」

「ん、じゃあここは……」

「性質や由来を考えなければ『廻陋の住処』ということですよ。ここに迷い込んだ生物は空間そのものの性質によって特殊な精神活動状態に

なる。そういう状態になった生物から栄養をもらおう。廻廻とはそういうモノです。やっっていることは夢魔と大差ありませんね」

「……私たちが特殊な精神活動状態に陥らない理由は？」

「半人半霊という特殊な体質と白楼剣の影響です。普段から白楼剣に触れている私たちは霊体の一部と後悔や迷いを一緒にして、肉体から切り離すことができているようです。常に自分の精神活動を客観視できる才能があるんですって。現世では稀に幽体離脱という現象で一時的な半人半霊を体験する者もいるとか」

半霊の自分が語る新たな事実を、妖夢は徐々に飲み込んでいく。

廻廻の正体はギンコが考えていたようなものではなかった。過去を繰り返すという症状、それ自体は廻廻と関係がない。後悔や迷いの原因となる過去の出来事を繰り返し再生するその症状は異空間の性質に起因し、廻廻とは異空間に潜み、空間内での精神活動を糧としている蟲だった。ギンコが聞けば驚きそうな内容だと、妖夢は思った。もう疑問は解消されましたか？ と笑いかけてくる自分自身を前に、妖夢は最後の疑問をぶつける。

それは妖夢にとつて、あるいは現状の理解以上に重要な疑問であったかもしれない。おぼろげな記憶が言葉を急かす。おおよその見当はついていた。だがしかし、きちんと確認せずにはいられなかった。目の前の半霊、自分の半身に知識を与えた人物のことを。

「……あなたはどのようにしてそんなことまで知っているんですか」

「教えていただいたからですよ。私たちのおじいちゃん……魂魄妖忌に」

その名を聞いた途端に、桜の香りを伴って鮮やかに蘇る記憶があった。

腰に差している白楼剣へと手を伸ばす。いつの間にか無くしてしまっていたこれを再び授けてくれた人。この空間に迷い込んですぐ、妖夢を導いてくれた人。緑の着物の、白髪の老人。ああ、久しく見ていなかった、祖父の温顔。

「……なぜ、祖父はここに？」

「修行だそうです。時を斬ることができるようになったから、今度は

業を斬るため修行を積んでいるとか。呆れますよね」

「……まったくです」

自然と笑みがこぼれる。少しの呆れと一緒に息を吐き、すぐに表情を引き締めた。

「……もう聞きたいことはないんですか?」

「ええ。もうありません。私にも帰る場所がありますので、ここから出ます。どうすればいいのか知っていますか?」

「ええ。わかりますとも」

あっけらかんと言った半霊の妖夢はスツと指をさす。その先を追いかけると、それは半人の妖夢の腰にさしてある刀を示していた。

「白楼剣で私を斬ればいいんですよ。私はあなたの迷いを受け持っていますので。そうすればここから出られます」

「白楼剣であなたを?」

「この空間から出るには過去の後悔、迷いを清算する必要があります。本来は過去の繰り返しを体験し、時間をかけて自ら啓蒙を得る必要がありますが、白楼剣はその過程を省略してくれるので。まあスパッと断ち切っちゃってください」

「そんな簡単なことでもいいんですか?」

「簡単なことと言いますが、これは半人半霊という体質に加え、白楼剣がなければ実行できない超例外的な脱出方法なんですよ? 普通ここに迷い込んだら二度と出られないんですから」

「……なるほど。魂魄の家系がどうして廻陋の記述を後世に伝えられたのか、わかった気がします」

さあひと思いに。と両手を広げて構える半霊の自分に近づきながら、一応刀を抜いて構えた妖夢はなんとも言えない表情を浮かべた。

「……なんか自分を斬るって複雑な心情ですね。大丈夫なんですか?」

「何がですか?」

「いや、ほら。白楼剣で幽霊を斬ると成仏しちゃうので……」

「白楼剣は魂を切り分けられるほどの霊力を持つ刀ではないですよ。」

私はあなたの半身なので、問題なしです」

「はあ……じゃあ」

一呼吸置いて、妖夢が袈裟斬りの構えをとる。肩口からばつさりと対象を切り捨てる上段の構え。そうして構えた時、ふと、ひらめくように思い至ることがあった。

「……そういえばあなたは私の後悔や迷いの一部を持っているんですよ?」

「? ええ、それが何か?」

「私の迷いつてなんですか? 自分では祖父の教え通り日々後悔がないよう努めて生きているつもりなんですが」

「ああ、それは単純ですよ。誰でも持つてるものです」

「単純?」

半霊の妖夢は答える。半人の妖夢よりも幼い仕草、表情、態度で応える。それはいつかありえたかもしれない自分の姿。役目も目標も持たず、ただ桜の樹の下で、大切な人と笑って悠久を過ごしていたらという妄想。

「〃もしも〃を焦がれる思い。今の自分とは違う人生を歩んでいたら、という根源的な望み。誰しも今の自分が、過去現在未来の時間軸全てにおいて、完全完璧だとは思いませんよね? そういう、どうしようもない欲望という名の、廻陋の餌です」

「……そういうことですか」

そういうことです、と笑った自分は、果たして半人半霊のどちらだったのか。刀が振り下ろされ、無明の世界に白刃が煌めいた。

「それで。結局、いいとこなしで終わったと」

「……まあな」

「はあ、情けないですわね。幻想郷唯一の専門家としての矜持はないんですの?」

「へいへい、すいませんね」

小言の発生源から目を逸らし、仰向けの体をひねりながら、小さな

和室の中にありつたけ光を取り込むように開け放たれた障子戸の方を見る。戸に縁取られ、軒に大部分を遮られながらも、奥行きのある自然の光景が目に入る。それらの最奥にちぎれ雲がひとつ、ぽつんと浮かぶ秋晴れの空を見て、心の在り処を見出したような気になった。こんな風に戸を開けつ放しにして外の風景を眺めていられるのもあと少しの間だろう。もう幾日も経たぬ間に、すぐ木枯らしが吹き付け、山嵐が雪を呼んでくる季節になる。流れ流れて土地を行く、旅の身の上には厳しい厳しい冬の時節の到来だ。そう思えば、自分の体を覆う布団の温もりに有り難みを感じずにはいられなかった。

「……あの」

「なんだ」

「寒いのですけれど！　もう戸を閉めてもらってよろしいかしら!？」

「……へいへい」

惜しむようにのそのそと布団を剥ぎ取り、温もりに守られた綿の結界から這い出すと、なるほど室内は冷え切っていた。息も白む、ほどではないにしろ手を擦り合わせて首をすくませる仕草が絵になるくらい肌寒さだった。

客人の要望通り、障子戸を閉める。新たな冷気の侵入はこれで防ぐことができるが、火元のないこの部屋が温まるのはまだ当分先だろう。そそくさと暖を求めて布団に戻ろうと振り返ったところで、ぴたりと動きが止まる。

「……何してんだ」

「はあく。ぬくぬくですわ。本格的にお布団が恋しくなる季節になつてまいりましたわね」

ちよつと目を離れた隙に、楽園への侵略者が現れた。さつきまで自分が収まっていた布団を首まで被り、顔を綻ばせているそいつを見て、幻想郷唯一の専門家、蟲師のギンコはため息をついて、畳に腰を下ろした。冷たい畳に触れた尻が冷え、温もりの離散に拍車をかけた。

ここは白玉楼の一室。冥界の主人、西行寺幽々子がおわす御殿。輪廻転生の順を待つ、靈魂が死後の安念を享受する場所に、幽玄と佇む

お屋敷。本来ならば命あるものが立ち入る機会などない幽世に、なぜ人間の、とりわけ生者であるギンコがいるのかといえば、最近起きたとある事件、蟲に関する諸々のためであった。

片膝を立てて抱き込むように座り、自分の体を少しさすって、ギンコは布団を奪った首魁の顔を恨めしそうに見つめた。

「布団返せよ」

「嫌ですわ」

ギンコの要求をバツサリと切り捨てたのは神出鬼没の大妖怪、八雲紫だ。ちろりと小さく舌を出して、可愛らしい仕草を見せているが、ギンコにはあまり効果がないようでじとりとした視線が緩和されることはなかった。

「そんな怖い顔なさつても譲りませんわよ、私」

「もとよりお前さんのものでもないだろ。どけよ」

「まあなんて言い草。昏睡状態で衰弱していた貴方の体をここまで運び、保護して差し上げたのはどこのどなた様だったかしら」

心底傷ついたとでも言わんばかりに布団に顔を埋め、その隙間からちらりと流し目を向けてくるわざとらしい紫の態度に、半分呆れ混じりの息を吐く。

夢と廻廻の世界が交差する精神世界から帰還したギンコはこの部屋で目を覚ました。一週間以上の昏睡と絶食による衰弱、筋力の低下で体も満足に動かせない覚醒だったが、最低限の命の保証はなされていたようで、健康状態に致命的な問題はなかった。

覚醒の折、側にいたのは他でもない、ふてぶてしく布団を占拠するこの八雲紫とその一派、いつぞやの狐と山猫の式神二人に、屋敷の主人である西行寺幽々子、そして未だ眠り続けていた魂魄妖夢の体だった。

「よく言うな。俺を探して運んできたのも、その後甲斐甲斐しく世話を焼いてくれたのも、狐の姉さんと山猫のお嬢ちゃんだったことはわかってんだぞ」

「従者の徳は主人の徳。だから私に感謝するのは自然なことでは？」

「……左様で」

「ええ。だからどうぞ感謝してくださいな」

さも当然と言うように得意気な紫に、もう何も言うまいとギンコは早々に諦めた。布団を被っている状態での彼女の得意顔はなんとも間抜けな感じがしたので、それでおあいこにしておこうとも思った。「ですが今回は本当に驚きました。幽々子に庭師の子が目を覚まさないかと相談を受けて、永遠亭を頼る前に貴方に所感を求めようと探してみれば、同じく昏睡状態になっているんですもの」

「だろいな。俺も予想外だった」

「かいろう……でしたか？ 今回遭遇した蟲は？」

「ああ……してその廻廻だが、興味深いことがたくさんあってな」

言うが早いのか、ギンコは部屋の片隅、床の間付近に置いてある薬箱に這い寄り、妙に興奮した手つきで、近くに転がしてあった巻物を手に取った。紫から見てもその仕草は普段のギンコとは違うと感じられた。

寝物語でも聞かせるように、ギンコは慣れた手つきで巻物の紐をほどき、手の内ですると広げた。寝転がる紫の目に、巻物のまだ新しい表紙が映る。最近新しく書き記されたのであろうそれには、ギンコの目の色を変える情報が綴られている。

「廻廻の資料は少なかった。花の香りで獲物を引き寄せ、誘い込んだ獲物の時間を円環状に歪める漆黒の筒状の蟲、というのがわかっている全てだった。だが今回のことでその情報は大幅に修正された」

「そうですね。私も対応しなくてはいけないことができましたし」

「廻廻の正体……阿頼耶という異界に巢食い、迷い込んだ獲物の精神活動を糧とすること。その異界と現世を繋ぐ通い路としての役目。知らないことばかりだ」

もつとも、と前置きしながらギンコは残念そうに巻物を畳にそつと下ろす。

「これら廻廻の性質がわかったところで、迷い込んだ者そのものに打開策はないことが問題だがね」

「半人半霊という体質がなければ異空間に迷い込んだことも認識できず、白楼剣がなければ早期の脱出は望めないという二段構えですもの

ね。今回のことは幸運だったということでしょうか」

「そうだな」

そこでギンコは半人半霊の少女のことを思い出す。廻陋に半身を誘われ、夢の世界で過去の繰り返しを体験していた少女。知恵を貸し、問題解決の手段を授け、しかし後一步のところで彼女はギンコの手をすり抜けていった。

「藍の報告ですとその異空間……阿頼耶と思しき空間の入り口をいくつか発見したようですわ。無理に塞いで不特定の箇所にも別の穴が開いても面倒ですし、幸い幻想郷を広く活動する人間はほとんどいませんから、主たる人外妖魔に伝達し、静観することに致します。それではよろしくて？」

「ああ。それがいいだろう」

蟲の営み、引いては理を捻じ曲げようとすればどんな歪みが生じないともわからない。そこだけはギンコと共通の認識を持っていた紫は、幻想郷内において廻陋との共存の道を選んだ。排斥するでもなく、無視するでもなく、共存。隣人となってしまう以上、もう蟲たちは適切な距離を保っていくしかない。

ぎちり、と木の軋む音がする。大きくはないその音が、部屋の外から規則正しく聞こえてくる。徐々に近づいてくるそれはギンコが背を向ける障子の向こう側でぴたりと止まり、次に控えめな女性の声が紙の壁をすり抜けてきた。

「失礼致します。お昼をお持ちしました」

「ん。もうそんな時間か」

どうぞ、とギンコが促せば、するりと衣擦れのような滑らかな音を伴って戸が引かれた。数種の小鉢がのった膳が部屋の中に差し入れられ、次いで水色の着物を纏った女性が腰を低くして部屋の中に入ってくる。目を伏せ、静々と余計な音を立てない仕草の端々には気品がちりばめられ、指先一つ、呼吸一つとってもたおやかで絵になる所作だった。

「どうぞお召し上がりください……って、あら？ どうして紫が布団に？」

配膳をした女性、白玉楼の女主人であるところの西行寺幽々子は布団を被って寝転がる友人に向かって、当然の疑問を投げかけた。

「まあ色々と……そういう貴女こそ、どうして配膳なんて？」

「え？ いや、ね。たまにはいいかなって思っただけよ。いつも同じ人が来るのもつまらないじゃない？」

自分に都合が悪い話題から意識を逸らすため、すぐに返しの疑問を投げかける紫。それとなく布団から這い出しつつある友人から質問され、先ほどまで纏っていた気品をどこぞへとしまい込み、破顔した幽々子は自然な口調で答えた。

ギンコが尻を引きずって膳の前に移動する。その気配を察知して、幽々子も笑いかけていた友人から本来の意味での客人へと意識を戻した。膳を挟み、お互いに軽く会釈を交わす。

「すみませんね。長い事、ご厄介になりました」

「お気になさらず。受けたご恩を思えば当然のもてなしをさせて頂いているだけのこと。どうぞお体の調子が快復いたしますまで、ごゆるりとお過ごしくださいな」

にこやかに、穏やかに、幽々子はギンコに笑いかける。幽々子の言うところの恩とは、彼女の従者である魂魄妖夢が受けた恩のことだった。

ギンコが昏睡状態から目覚めてすぐ、体感で半刻もしないうちに妖夢も同じように目を覚ました。妖夢は廻廻によって夢の世界から阿頼耶に引きずり込まれ、そこで自身の半霊と再会し、白楼剣をもって異界から脱出した経緯を皆に話し、そうして状況を整理して身体の異常はないかと慌ただしくしているうちにひよつこりと半霊も戻ってきて、今回の騒動は終局を迎えた。

終わり方こそあつけないが、事実だけを見れば二度と目覚めないこともありえたのだから、端的に言ってギンコは妖夢の命の恩人である。その事を幽々子も重々承知していて、ギンコが体調を快復するまでの間、白玉楼での滞在を勧め、もてなしをしているというわけだった。

そして今回の騒動の言わばもう一人の被害者である魂魄妖夢はと

いうと。

「幽々子様。すみません、配膳をお願いしてしまつて」

前掛けを手元で畳みながら忙しなく縁側を小走りで駆けてきて、戸の間から顔を出してはそんなことを言った。

昏睡状態からの覚醒時、妖夢ももれなく身体が衰弱していたが、そこは半人半霊の体質が効いたのか、ギンコより随分と早く復調し、こうして元気に日々の仕事に勤しんでいた。もちろん、幽々子が運んできた膳の上を彩る小鉢の料理も、妖夢が自身で手がけたものである。

台所の片付けをして妖夢が部屋にやってくると、幽々子に気にすることはないと言われ、では遠慮なくと手を合わせたギンコがちょうど小鉢に手をつけているところだった。

「あ、ギンコさん。もう召し上がっていたんですね」

「そりやもう有難く。ここ数日で、随分と舌が肥えた気がするよ」

「ふふ。そう言っていただけで何よりです。あ、紫様もお変わりなく」「はいどうも。お元気そうですね。これなら幽々子も一安心かしら」

「おかげさまで。重ね重ね、この度はご迷惑とご心配をおかけいたしました」

深々とお辞儀をする妖夢に、布団の横できちんと正座をしていた紫は軽く手を振って応えた。

「ねえ妖夢。ギンコさんのお昼を見てたら私もお腹空いてきちゃったわ」

「そう仰ると思いましたがいつものお部屋にすでにご用意が。紫様も一緒にされるのでしたら、すぐに用意いたしますが」

「いいえ、私は遠慮いたしますわ。ギンコさんから今回の騒動について一通りの説明していただくという目的は果たせましたし、冬に向けて備えることも多々ありますので」

そう言つて紫はゆっくりと立ち上がり、指先を軽く振つた。途端にぴりぴりと空間に裂け目が生じ、ぞろりと目玉が覗くスキマが口を開く。

それでは皆さま、御機嫌よう。と言葉を残し、八雲紫はずぶずぶと

異空間に消えて行った。

「じゃあ私もお昼食べてくるから。妖夢はこのままギンコさんのお話し相手になつて差し上げたら？」

「え？ ですが……」

「いいからいいから」

「じゃあ、あとはごゆつくりー。と言葉を残し、八雲紫に次いで西行寺幽々子も退室する。何に気を遣われたのかいまいち理解が追いつかない妖夢ではあったが、ここですぐさまギンコ一人を残していくのもなんだか申し訳ない気がして、所在なく、ちよこんとギンコの前に座り込んだ。

幽々子を目線だけで見送り、もりもりと食事を再開するギンコと目が合う。何を誤魔化したいのかわからぬまま、何かを誤魔化そうと笑ってみせた。そんな妖夢の心境を知ってか知らずか、ギンコは表情を変えぬまま口の中のをごくりと飲み込んで、気軽に声をかけた。

「最近は特に冷え込んできたな。そろそろ冬か」

「あ、はい。そうですね……つてそう言えばこの部屋寒くないですか？」

今更気がついたという風に妖夢は少し自分の肩をさすつて部屋を軽く見回した。確かに寒い。それは先ほどまで部屋に晩秋の外気を惜しげもなく取り込んでいたからに他ならないのだが、さらに言えば先ほどよりも少し寒くなっているような気がした。ここまできると流石に暖房が欲しくなってくる。それくらいの寒さだった。

「まあさつきまで外が見たくて戸を全開にしてたからな」

「部屋が冷え込込むまで何してるんですか。これじゃあ温まるまで時間かかりますよ？」

「布団の中は暖かかったから部屋が冷えてるのに気づくのが遅れてな。まあ温まるまで、また布団にくるまって大人しくしとくさ」

「もう……待っててください。火鉢を持ってきますので」

「……なんかすまん」

ギンコの子供のような言い訳に、いいえと満更でもなさそうな微笑

みを浮かべて、妖夢は立ち上がり、火鉢を取りに行くため部屋を後にした。

結局部屋に一人取り残されたギンコは、妖夢の足音が遠ざかっていくのを聞いてから止まっていた箸を再び動かした。小鉢の中身を摘み、次々口に放り込んでいく。もう残り少なかったそれらを食べ終えるのに、そう時間はかからなかった。

そうして腹も満たされ、もう後はくつろぐだけとなったギンコだが、ちようど少し前から気になっていることがあった。そう、ちようど妖夢が火鉢を取りにこの部屋を出ていったあたりから気になっていたことだ。

「……で、お前さんはなんでそこにいるんだ？」

とりあえず声をかけてみる。ギンコの視線の先。そこには妖夢の半霊がふよよと浮かんでいた。

そいつは声をかけても動く気配がなかった。雲のようであり、白磁のようでもあり、白玉のようでもある質感のそれは、時折揺らめいて形を変え、いつまでもギンコの前を動かなかった。

手をかざしたり、見つめてみたりと色々試して反応を伺う。そうしているうちに、わかったことが一つだけあった。

「お前さん、なんかひんやりしてるな」

半霊は冷たかった。周囲にひんやりとした冷気を放っていたのだ。

火鉢が欲しくなるくらいに、室温低下に拍車をかけていたのはお前だったのか。ギンコは思わぬところで思わぬ気づきを得たが、だからと言って寒さが緩和されるわけでもないのです、妖夢が火鉢を持ってくるのを待たずに布団に温もりを求めた。

「この寒さには付き合えん。悪いな」

まだほんのりと温みが残っている布団を被る。もうすぐ冬だ。間に迫る、風雪に泣く季節だ。だから今だけは、もう少しだけは温かい寢床の恩恵に浴することを許してほしい。

夢のような時間をもう少し。誰かに、そう願いをかけながら目を閉じた。

第八章 ふきだまる沼

第八章 ふきだまる沼 壺

冬。言わずと知れた極寒の季節。枯れて葉が落ちた骨組みだけの樹木はその身を寒風に晒し、大地も茶色い地肌を雪化粧で覆い隠す仲の冬。動物たちの鳴き声も、虫たちの賑わいも今はもう聞こえない。みんな眠ってしまったのだ。芽吹きを季節を夢に見ながら。

太陽が厚い雲に隠れ、昼間だというのに若干の薄暗さが覆う地上。誰も彼もが鳴りを潜めて、静寂と冷気だけが闊歩する眠りの時節はどこまでも澄み渡り、清澄な雰囲気になっている。風がないことが唯一の救いだろうか。乱立する冬枯れの山肌との対比が物悲しさを助長するような曇天がのしかかる、そんな日に男が一人、旅をしていた。

ざくり、ぎしりと雪を踏み固めながら一定の歩幅で迷いなく進んでいく。あたりには常緑樹の林が広がり、器用に雪を支える姿が少し愛らしい。わら靴のほとんどが雪中に埋まるほどの雪深いそこには道らしいものもなく、進行方向には足跡一つ見当たらないようだ。そもそもこの土地を旅する物好きなど、この男以外にいるはずもなく、緩やかな傾斜にただ身をまかせるように、男は歩んでいた。

「……そろそろ林道くらいには出て良さそうなんだが」

足を止め、首巻きをずらして大きく息を吐き、ひとりごちる。吐息はふわりと広がり、雪と同じ白に染まった。

ここは幻想郷。忘れ去られし幻想たちが還り着く最果ての地。人外妖魔が往来する、いつかの時代を写した世界。そんな世界を一人歩く識者の名はギンコ。蟲師という生業を背負う、奇妙な男だった。

日が昇り、歩き始めてからどれくらい経っただろうか。時間感覚も曖昧になるような空模様は、相変わらずの鈍色で、今にもギンコの足跡を埋める雪を降らせようとしているようだった。

素肌を衣で包み、寒さから身を守るよう努めても限界がある。ギンコはちらりと自分がやってきた方向を肩越しに振り返り、延々と続いている足跡を確認した。自分以外の生き物が見られぬ寂しい痕跡。

こうしてじつとしていると、雪が音を食う無音と相まって、冬の厳しさが一層強く我が身に吹き付けるようなような気がした。

どさり、と突然音がしてその方向に首を動かす。木に背負われていた雪の一部が落下したようだ。木の下に不自然に盛り上がった雪を見てみると、そこから一つの雪の小玉が生き物のように飛び出し、足を止めているギンコを尻目に、軽快な速さで斜面を転がっていった。

「……行くか」

無音を嫌うように漏らしたつぶやきも、くぐもった響きでよく聞き取れない。足を踏み出せばぎしり、と雪が軋む音がする。少しだけ風も出てきたようだ。背を押し、下りを急かす風をなだめるように、ギンコは首巻きに深く顔を埋めた。

先に転がった雪玉の線を追うように歩を進めっていると、幾分か余計なことを考えずに進むことができた。ざくりざくりと軽快に林を進み、気がつけばギンコは一本の林道に合流するところまで来ていた。

視界が少し開ける。木立に縁取られた一本の道が目の前に現れた。これでかなり歩きやすくなるだろうかと期待を寄せて、ギンコは林を抜け出した。

ゆつくりと左右を見渡す。右から左、あるいは左から右か。一本道が横方向に伸びている。起伏はほとんどない、平坦な一本道。雪の深さも落ち着きを見せ、歩きやすくなっているのがわかる。ここまでは足腰に重さがまとわりついていたが、これならかなり楽になりそうだとギンコはひとつ伸びをした。

さて、右か左か。どちらに向かって進もうかとしばし考えていると、ギンコは足元に、奇妙な痕跡を見つけた。

「ん？」

近くに寄って見てみると、それは足跡のようだった。それも人の足跡。道に沿って歩を進めた痕跡。ギンコも見覚えのある、わら靴で踏み固められた跡が転々と道の中に残されていた。普通に考えれば、誰かがここを通ったのだろうと予想する。しかしその予想を裏切るように、その足跡は、猛烈な違和感を放っていた。

「……なんだこりゃ」

ギンコも思わず零した。その奇妙な足跡は、あるべきものがなかったのだ。片割れがなかった。つまり片足だけの足跡が、転々と続いていたからだ。

こんな雪深い林道を片足だけの誰かが通ったのだろうか。魑魅魍魎の跋扈する、幻想郷の雪道を。そんな人間がいるだろうか。疑問が頭をよぎる。

しかし考え込んでも始まらない。それにギンコの考えすぎなだけで、そんな人間もいるかもしれない。この世界のことを、ギンコは全て知っているわけではないからだ。

「とりあえず、行ってみるかね」

足跡の形状からして、進行方向らしきものを定めたギンコは、その奇妙な足跡に並んで歩き始めた。ギンコの足跡二つと、奇妙な片足だけの足跡が道に残されていく。

季節は冬。活気とは縁遠い、静止と眠りの世界の中で、しかし数奇な縁だけはどこまでも、ギンコのそばを付きまとう。そんな暗示が、雪道に刻まれているようだった。

奇妙な足跡を追いかけてしばらく。雲の向こうに隠れた太陽も傾き始めているのだろうか。そんなことを思わせるように気温が少しずつ下がりはじめているのを、ギンコは肌で感じていた。そんな折に、今まで続いていた林道が開けた場所に出る。木立の縁取りは消え、雪原が広がっている。不自然に木々がない空間だったが、ギンコはすぐに、ここは凍って雪が積もった池沼だと気がついた。

ギンコはその縁で足を止める。片足の足跡はそのまま池沼の凍結面らしい雪原の上を横切るように続いているが、このまま足を踏み入れていいものかと考えているのだ。人がすでに渡っているのなら何の問題もない。ギンコも足跡に続いて渡ってしまえばいい。しかし始めて訪れる土地、そして凍結面が直接見えないことも考慮すれば、ここは当然渡るべきではない。氷が割れ、池に落ちれば命に関わ

る。そんな危険を冒すべきではない。もともと足跡も、目印程度にしか考えずにここまで来たのだ。律儀にたどってやる義理もないだろう。ギンコが考える時間は短かった。

そうしてギンコは今まで追ってきた足跡から目を逸らし、池沼の縁に沿って歩こうとした。しかし、ギンコはまたも奇妙なものを見つけてしまう。

「……あ？」

間拔けな声が漏れる。ギンコが見たもの。それは雪原の真ん中でゆらゆらと揺れている一本の傘だった。よく見ればその傘の周りには不自然に雪が盛り上がり、傘はその小さな小さな雪山に柄の部分が突き刺さって揺れているようだった。奇妙奇天烈この上ない。

さらにギンコの目を引いたのは、その山から突き出ているもう一つのものだった。

「おいおい、何だそりゃ」

ギンコが驚くのも無理はない。雪山から突き出しているものは、よく見れば人間の片足のようだった。傘を持ち、池の真ん中まで歩いて行った誰かが雪に埋まっている。状況的には十分そう読み取れる。もしや自分がたどってきた足跡の主か、とギンコは若干躊躇いつつも、とにかく助けがいるだろうと下が凍った池であると思われる雪原に足を踏み出した。

「いやー助かった。ありがとう人間さん！」

「……そいつはどうも」

少し肝の冷える思いをしたギンコが膝に手をついて息を吐いている。その傍で、浅葱色の洋装に身を包んだ少女が服についた雪を払いながら、元気にお礼を言っていた。

意を決して踏み出した雪原の真ん中で、ギンコは傘一本と、一人の少女を雪山から引っぱり出した。その時、ごきり、と重く分厚い何か擦れるような音が足元から聞こえてきたので、呼びかけても返事をせず、ぐったりしていた少女を小脇に抱えて、ギンコは少し焦りなが

ら大急ぎで結氷したそこを離れ、池の反対側へと避難した。

ギンコは助けた少女の姿を見た。浅葱色があしらわれた洋装。この世界に来て幾度か見た、肌を大胆に露出する腰巻からは健康的な素足が伸びている。そしてその細い足は、小さな体にはやや不釣り合いと思えるわら靴の中に収まっていた。そしてその髪の色も同じく浅葱色を呈し、輪郭を包むように切り揃えられていた。薄着。全体的にとにかく薄着で、雪の中に埋れていたのならかなり寒いだろうとギンコは思った。

膝から手を離し、体を起こしながらギンコは聞いた。

「お前さん、寒くないのか？」

「うん？　まあそんなに？　別に寒くないかな？」

ギンコの当然の疑問に、なぜそんな事を聞くのかとでも言わんばかりのきよとんとした顔で少女は答えた。それだけでギンコは察する。ああ、この娘もそういうものかと。

ギンコが得心する内に、少女はすぐに笑顔になり、傍に置いてあった傘を手を取った。紫色の番傘。広げられたその表面には大きな目玉模様が描かれ、人間の舌のような飾りが垂れ下がっている。少女の体には大柄な、奇抜な意匠の傘だった。

「あはは！　人間さん優しいんだ。……うん？　あれ、人間さん……だよね？」

「ああ。一応な」

ギンコの顔を覗き込んで、少女は難しい顔をする。ギンコの見ただ目。それもまた少女の容姿に引けを取らない異色であったためだ。雪の白で洗ったような白髪に、今は遠い森林の深緑を宿すような隻眼。不思議そうな目でそれらを観察していた少女だったが、すぐに飽きたようで、体を離した。

「ふーん。こんなところに珍しいね」

「そういうお前さんこそ、雪に埋まって何してたんだ？」

「っ！　そうそれ！　聞いてよ人間さん！」

問われた少女は鬱憤を晴らすように話し始めた。

少女は傘の付喪神。気晴らし程度に雪道を散歩していると、不思議

な片足だけの足跡を見つけた。

こんなところに一本だけなら？ 不思議に思った彼女は片足だけでけんけんぽ。足跡を上からなぞるように、やってきたのは池の上。もう疲れて、飽きてきた。そんな時に転がってきた。体がすっぽり半分程度、収まりそうな、大きな雪の団子虫。ごろごろ豪快に雪原を転がってきて、私をめがけて、一直線にやってくる。びっくりしている間にぶつかり、目を回しては雪の中。そうして気づけば人間さんに助けられ、どうもありがとうとお礼を言っている次第。憎つくきあいつは大きな雪玉。ぜったいぜったい許さない！ ……そういう内容の訴えが、あっちこっちに転がりながら、なんとかギンコに伝わってきた。

「そうか。ならお前さんも、片足だけの足跡について何か知っているわけではないんだな」

「うん。全然。人間さんも？」

「ああ。だがまあ、お前さんの体にぶつかってきた雪玉のことは、おそろく知っている」

「それくらい私も知ってるもん。雪でしょ？ 冬に降る雨のこと」

「そういう意味じゃないんだが……まあいいか」

諦めるように息をつくギンコに対して、じゃあどういう意味なのかと食い下がろうとする少女の目の前に、ちらりと冬に降る雨が降ってきた。やってきたその方向を目で追って、少女もギンコも空を見上げた。

「雪だね」

「そうだな」

ちらり、ひらりと雪片が舞い降りてくる。降り出しそうだと思っていたが、とうとう降ったか。あまり強く降られると面倒だな、とギンコが思っていると、そう言えばいいものがあると、少女の方を見た。

「なあ、お前さん散歩に来たんだよな」

「うん」

「どうだ。もう少し俺と散歩しないか」

「え？」

「付喪神なんだろう？ 雪も降ってきたし、傘があるなら欲しい。お前さんがいいと言うなら、この先……そうだな、今日の寝床になりそうな場所が見つかるまでついてきてほしいんだが、どうだ？」

ギンコは軽い気持ちで少女に持ちかけた。彼女が人間ではないことはこれまでの会話で明らかだが、それ以上にこの少女、傘の付喪神には危険性がないと判断できた。害はなく、人懐っこい性格のようであるこの付喪神に同行してもらえるのなら、雪降る道中もいくらか賑やかで、過ごしやすくなるだろう。

少女の返答を待つ間に、ギンコは池の縁から伸びる林道を見る。ギンコがやってきた方向とは池を挟んで反対側。そこには先ほどまで追ってきていた、片足だけの足跡が残されている。

「……いいの？」

「ん？」

降る雪にかき消されそうな付喪神の少女の声に、ギンコが反応する。少女は少し俯いて、傘の柄を強く握りしめているようだった。

「いいの？ 私、紫色で、大きくて、ださい傘だけど……」

「目玉と舌は奇抜だが、ただの飾りだろう？ 雪をしのげれば文句はないさ。それに、色自体は、綺麗な茄子色だと思うがね」

「……そ、そう」

ギンコの申し出に付喪神の少女は従うようで、自分の傘をギンコに差し出した。

「お兄さん背が高いから、傘はお兄さんが持つてよ」

「お、ならついてきてくれんのかい？」

「しようがないからね。いいよ……えへへ」

ギンコが傘を受け取ると、傘の下に入るように少女が身を寄せてくる。大きめの茄子色の傘は、ギンコと少女の二人をしっかりとその下に抱え込んでくれた。

ギンコは知らない。付喪神がどうして生まれるのか。理由もなく、ただなんとなく、人間たちから忘れられた彼女が、道具として自分を求められたのがいつぶりなのか、ギンコは知らない。

傘を差して前を見れば、ちらりちらりと降り始めていた雪も、その

数を増やしているのがわかった。風の吹かない日の雪は、しんしんと静かに降り積もり、雪深い林道に聞こえる声も包み隠していく。

「どこにいくの?」

「とりあえず足跡をたどる。人がいりや、一晚軒を借りられるかもしれんしな」

そうしてギンコは再び歩き出す。傍の少女もそれに続く。

二つの足跡が並んで残されていく。幻想郷を旅する男に、また奇妙な縁が寄り添った。

「そういえばお前さんの名前を聞いてなかったな。傘の付喪神さんよ。名前はあるのかい?」

「私小傘。多々良小傘よ。お兄さんは?」

「ギンコという。蟲師をしているんだが、聞いたことあるか?」

「むしし? ううん、全然」

「そうかい」

「それよりその髪と眼。どうしてそんな色してるの?」

「ん? これはな……」

雪が作る無音の世界に、少しだけだが音が聞こえる。たった二つの生き物の声。賑やかな幾つかの問答に、黙して雪を支えるばかりの常緑樹だけが耳を傾けていた。

第八章 ふきだまる沼 弐

しんしんと雪が降り積もる林道を、片足だけの足跡を追いかけて、蟲師のギンコと付喪神の小傘は静々と歩みを進めていた。乾いた外気が吐息で湿り、白い雲のようなものとなって広がる。そんな白い息を吐き出すのがなんだか不思議なのか、小傘はギンコの傍で遠く息を吐き出しては、霧散していく霞を見つめていた。

「不思議。冬に息が白くなるのはなんでかしら」

「それは吐息に混ざる湿気が、外気で急速に冷却されて水滴が生じるためだ。霧や霽もやなんかと同じ原理だな」

「寒いとどこでもこうなるの？」

「そういうわけでもない。稀に、寒くても息が白くならない時もある」「どうして？」

「白水しらみず、という蟲がいてな。普段は風なんかに分れて空気の中の水分を食って生きている、とても小さな蟲なんだが、空気が冷たく乾燥してくると動物の肌に取り付いて水分を得ようとするんだ。冬場に顔や手足が乾燥するのはこいつらが原因なこともある」

「へえー。……あれ？ 息の話は？」

「あせるな。これから話す。……冬を生きる白水にとって動物の吐息は貴重な水分源だ。吐いた息にこいつらが群がって、一瞬で水分を食っちゃうから息が白くならない、ということだ」

「いっぱい来られると干からびちやいそうだね」

「そうだな。命に関わるほど白水が大量に群がると、目が痛くなつて開けられなくなる。そんな時はゆっくり深呼吸して白水を吸い込んでやればいい。体内で一度に大量の水に触れると、やつらは逆に水に溶けてしまうからな」

ギンコの語りに耳を傾け、小傘はへー、ふーんと相槌を打った。話の内容が新鮮なのか、はたまたギンコと話するのが楽しいだけなのか、道中で小傘は饒舌じょうぜつだった。

やがて林道が途切れ、足跡は緩やかな起伏を見せる山道へと続いていた。そこでギンコは立ち止まり、考える。これ以上の探索を実行す

るか否か、決断を迫られていた。

幻想郷に来て半年を過ごしたギンコだったが、立ち入ったことのない場所はまだまだ多い。魑魅魍魎ちみもうりょうの類たぐいが闊歩かっほする幻想郷で、ギンコはそれらに襲われにくいとされているものの、絶対という保証はどこにもない。事前情報もない見知らぬ土地を歩くのは慎重にならねばならなかった。ましてや季節は冬。厳しい寒さがいつも以上に旅の障害となって立ちほだかる。どうしたものかとギンコが思案していれば、その顔を小傘が覗き込んできた。

「どうしたの？」

「いや、この先に行くかどうか迷っていてな……お前さん、この先に何があるか知ってるか？」

「うーん……わかんない。この辺来たことないもん。でも足跡は人間さんのだと思っよ。変な匂いするけど」

「変な匂い？」

そう言いながら小傘はしゃがみこんで足跡に顔を近づけた。すんと鼻を鳴らして足跡の匂いを嗅いでいるようだ。やっぱり変な匂いする、と小傘が言うのでギンコもしゃがみ、匂いを嗅いでみた。するとどうしたことか、ギンコにもその匂いが嗅ぎとれた。それは夏場を感じるような臭いだった。食物が腐り、発生する腐臭のような、刺すような酸っぱい臭い。微かに漂う、すえた臭いだった。

「(妙だな……。こんな冬場に……。しかも雪の上に残った足跡だぞ?)」

ギンコは小傘を見て問いかける。

「どうしてこれが人間の足跡だと思うんだ？」

「う？。だって妖怪みたいな臭いしないし……たぶん」

明確に問われれば小傘も自信がないようで、少し視線を泳がせて答えた。

雪の上に残る、腐臭のする片足の足跡。ギンコはその腐臭に、心当たりがあるような気がした。記憶の中にあるそれと目の前にある今を照合し、それならばとギンコは足跡を追いかけられることを決めた。

立ち上がり、傘を揺らしてギンコは山道へと足を踏み入れる。取り

残されてはたまらないと小傘もすぐに立ち上がり、ギンコの後を追って傘の下に潜り込んだ。

常緑樹の林から一転して、ギンコが足を踏み入れた山道は冬枯れの樹木が目立つ寂しい光景が続いていた。立っている木々もどこか細く、頼りない印象を受ける。風でも吹けばぽつきりと折れてしまいそうな印象だ。

時折葉を残す草木を見るが、その周りに越冬を目論む動物たちの姿はない。この辺りは生き物の気配が特に希薄な土地であるようだ。た。

ギンコも山の状態を見て、少し違和感を覚えていた。生き物が少ない土地というのはまあある。特に雪が深く、木も細いこんな場所ではそれも仕方ないだろう。しかしギンコが感じた違和感というのは、別のところにあった。

「(蟲が少ないな……)」

蟲。それはギンコの視界に絶えず映り込む、奇妙な隣人たちの総称。土や木の中で冬を越すためにじっとしている小さなものたちとは違う、ふわふわと、ゆらゆらと風に舞い、時に光を透過して関わるものを惑わせる、そんな生命そのものに近いモノたち。彼らの数が、どうも少ないようであるとギンコは思っていた。

常ならざる存在である彼らだが、生命である以上、四季の移ろいには多く影響を受ける。春に芽吹き、夏に活気付き、秋には寂れ、冬には眠る。それは普通の動植物となんら変わりはない。稀に冬に活気付くモノもいるが、しかしこの山には、それらを加味しても蟲の数が少なかった。

首巻きを少し下げて鼻を鳴らす。山道を進むにつれて、自分と、隣を歩いている付喪神の少女以外の足音が浮き彫りになり、降雪の風に乗って、微かな異臭が運ばれてくるようになった。

冷気で鼻の粘膜が引っ張られる。ギンコはこの先に待ち受けるものを想像して、少し顔をしかめた。

しばらく山道を歩いていると、前方に一軒の家が見えてきた。雪が被って白くなつた茅葺き屋根の宝形造りが目に入る。家、というよりは山小屋のような雰囲気のは、見すばらしい印象が拭えなかつたが、しかし問題の足跡はその家に続いているようで、ギンコたちが追いかけてきた人物はそこに住んでいるようだった。

足跡が途切れる玄関の前に立ち、戸を叩いた。小傘は家主を警戒したのか、ギンコの後ろに隠れるように立っている。ギンコの行動に間を置かず、家の中から返ってくる声があった。こもった低い音は男性の声のようだった。ギンコは自らを旅のものと名乗り、家主であろう男の次の言葉を待った。

やがて家の中から物音がし、土間を草履で引きずる音が聞こえて、戸が少し動いた。戸の隙間からは髭を蓄えた白髪混じりの初老の男性が覗いている。男は目線だけでギンコの風体を見分し終わると、じつと目を見てきた。

「……旅のものとは珍しい。こんなところに、何用かな」

ギンコの名乗りを疑わずに、男は低く穏やかな声で尋ねてきた。まだ警戒心はありそうだが、ひとまず話が通じないような相手ではなさそうだと、ギンコも胸をなでおろす。少し尋ねたいことがある、とそう言葉を続けようとした時、ギンコの息は詰まった。

「……！」

それはここにくるまで少しずつ風に乗って漂ってきた腐臭だった。食物を腐らせたようなすえた臭いが明らかに強くなっている。小傘も匂いを嗅いだのか、う、と小さなうめき声をあげて、ギンコの上着を強く掴んだ。

ギンコが過去、嗅いだことのある腐臭の発生源はこの家にありそうだった。ギンコの態度を見て、男は言葉をかける。

「……気になるかね。この匂いが」

「……ああ、この匂いについて、少し話を聞かせてほしい」

「……あなたはどうかやら訳知りのようじゃな。匂いは強くなるが、こ
う寒いと温もりには代えられんじやろう。中に入るとええ」

戸を開いて、男はギンコを家の中に招き入れる。じやまするよ、と

ギンコが傘をたたんで敷居を跨ぐとすると、傘がどこかに引つかかったようにつんのめってしまった。不思議な光景だった。見えな
い何かに阻まれるように傘だけが敷居を跨ぐことができな
いでいた。それを
見て、男はギンコに言った。

「この家に妖怪は入れん。連れは外で待たせるんじやな」

「なに？ そうなのか」

「一身上の都合でな。聞き分けてくれ」

すまん、と男は言葉だけかけて、自分はさっさと土間を上がり、
囲炉裏いろりを中心に据えた板の間が上がっていつてしまった。ギンコは
振り返り、小傘を見る。未だ弱く降り続ける雪の中に小傘が立っ
ていた。

ギンコはどうして妖怪がこの家に入れないのかわからない。だから小傘にどう言葉をかけていいのかもわからなかったが、それを察した小傘の方が苦笑いを浮かべた。

「しよーがないか。あのおじいさん、きっと妖怪嫌いなんだよ」

「……そうなのか」

「うん。ギンコさんみたいな人の方が珍しいと思うよ、わたし」

ギンコから傘を受け取り、小傘は自分の上で広げる。少し名残惜しそうに笑っているのが、ギンコにもわかった。どうやら散歩はこ
こまでらしい。

「じゃあね。お散歩楽しかった。またどこかで会ったら傘に入れたげる」

「ああ」

ばいばいと手を振りながら、小傘は外で待つことをせずに、足早に立ち去っていった。来た道に残る自分たちの足跡を踏みながら小さくな
っていく茄子色の傘を見送って、ギンコは振り返り、後ろ手に戸を閉めた。

土間から板の間に入り、背負っていた薬箱を下ろす。ギンコが踏

み出す一步で乾いた木が軋みを上げる。板の間に敷かれている筵むしろの上に腰を下ろし、囲炉裏を挟んでギンコと男は向かい合った。

外気で冷えた体に、囲炉裏の火は優しくかった。ぱちりと炭が弾ける音がして、熾火おきびの熱が頬を熱くする。鼻や指先といった体の末端がじんわりと痺れたように温まり、身体の熱が均一化されていくのを感じた。

ギンコの前で、男はしばらく黙っていた。火箸を使って炭をいじり、灰を分けながら風通しをよくするために積み直す。見れば男の顔は骨ばっていて、薄暗い室内に囲炉裏の炎で浮かび上がった表情はどこかおどろおどろしく見えた。髭を蓄えた白髪混じりの瘦身の老人が、こんなところで一人暮らしとは。ギンコは理由を想像した。

「……足を、無くされたんですか」

沈黙を破ってギンコが問いかける。ここに至るまでに見た奇妙な足跡の正体が目の前にあった。胡座あぐらをかく老人の左足の位置。そこには着物の上からでもわかる不自然さがあった。あるべきはずの、膝から下の体組織。老人にはそれが欠落しているようだった。

火箸の動きが一瞬止まり、再開される。間を置くように沈黙を守り、老人は火箸を囲炉裏の灰に突き刺して、ギンコの問いに答えた。

「先日、病でな。必要なことじゃった」

「病、ですか」

「ああ……それよりも、お主は一体何者じゃ。尋常ならざる気配。妖憑あやかしつきの類か」

素性を問い詰める老人は眼光鋭くギンコを見据える。

「蟲師のギンコと申します。蟲師という言葉聞いたことは？」

「蟲師……？ いや、知らないな。新手の式神使いか」

「蟲と呼ばれるモノを相手取り、生業とする者です。貴方は、こんな場所ですら一人暮らしを？」

「……儂はただの世捨て人じゃ。道を志し、命の極みを求めて修練を積んだが……今ではそれも無意味。厭世えんせいの念を溜め込むだけの、老害よ。里では儂らのような存在を、仙人と呼ぶものもおるがの」

自嘲するように吐き捨てた老人は無い左足に想いを寄せるように、

膝をさすった。この老人にどのような事情があるのかはわからない。だがその左足に関してだけは、ギンコは口を挟むことができそうだった。

「病、と言いましたが。その病について詳しくお聞かせ願えませんか。俺の見立てでは、この部屋にこもる腐臭と、その病は無関係じゃ無いはずです」

「……不思議な若者じゃ。ええじゃろう、話そう」

ギンコの言葉に老人は応え、ここ数ヶ月の間に起こったことを、囲炉裏の炭が弾ける音に乗せて、静かに語り始めた。

「病が流行りだしたのは晩秋の頃……今より二月ほど前の話じゃ」

「流行りでした？ 足を無くしたのは貴方だけではないと？」

「そうじゃ。儂のような者はこの辺りに多くいる。求道者くどうしやだけではない。人里の水が合わん輩やから……はみ出し者もな。密に手を取り合うほどではないが、都合が合えば助け合いもする。そういう意味では、ここらは幻想郷の吹き溜まりと言うところか……」

「吹き溜まり……」

「各々事情を抱えておる。とにかく、そういう者たちの中である日、足に奇妙なできものができたというものが現れた。今思えばそれが始まりじゃろう」

「……」

ギンコは老人の語りを黙って聞いていた。老人は熾火を見つめ、遠く何処かに意識を飛ばしている。あるいは、記憶の中にある病とやらを反芻はんすうしているのだろうか。

「それは植物の芽のような、浅黒いできものでな。儂らは病に一等気を遣っておったが、そのできものの由来も薬の処方もわからなかった」

老人の目は暗く淀み、沼の底の深い泥を思わせる。囲炉裏が浮き彫りにして映し出す老人の影が、次第に大きくなっていくような錯覚を覚えた。

「そのできものは徐々に成長していった。まるで植物のように芽を出し、蔓つるを伸ばして足を覆うように成長したのじゃ。成長するにつれて

足の自由も効かなくなつての。抜こうにも触れば手にまでその芽を飛ばし、蔓を生やした。これは良くないものじゃと皆が思い始めた頃には、もう手遅れじゃつた……草が全身に広がった者から順に、全身が泥のようになって崩れ、息絶えた」

「……」

「焼こうが煮ようが草は生えてくる。徐々に蔓を伸ばし、いずれ人を泥に変える。なす術なく途方にくれておつた儂らじゃが、ある日儂らの草を絶やす薬を分けてくれる仙人が現れての」

「薬を分ける仙人……？」

「その薬を草に塗り広げると草はたちまち溶け出し、消え去つた。しかし副作用があつての。左右どちらかの足が、無くなつてしまうのじゃ。それでもいづれ全身を泥状に溶かされるよりはマシだと、多くの者はその薬に頼り、草を溶かした。儂もそうして、足を失い、今生きておる」

「……その薬が、この腐臭の原因なのでは？」

「そうじゃ。匂いのきつい生薬だそうでの。誰もいい顔はせんが、命には代えられん」

老人の話を聞いて、ギンコは確信する。病と薬の正体は、間違いなくギンコによく知るモノである。そして同時にわからないこともあつた。それらの疑問は、薬を分け与えた者に聞かねば解消しないだろう。

「……その薬とやらを持つてきた仙人とやらはどんな人物だ。所在、名前、容姿。なんでもいい。知つていることを、話してくれ」

ギンコは低く、重い声で聞き出す。先ほどまでの老人の語りにつけを取らない有無を言わせない重厚さが、ギンコの語りから伝わる。そんなギンコの様子に反応して、老人は囲炉裏から視線を上げ、ギンコの目を見た。

「ああ、そのお方の名は……」

「ここからは私がお話しいたしましょう。蟲師殿」

老人の語りを遮るように声が割り込んできた。ギンコも老人もその声の主を探して視線を向ける。その人物たちは、いつの間にか家の

中に入り込んでいた。玄関の戸を背にして、二人の訪問者が立っている。烏帽子えぼしを被り、目を伏せる一人を従えるように、紫むらさきの外套がいとうを翻ひるがえしてもう一人が歩み出る。声の主は、どうやら外套まを纏まとった方かたのようだ。

「話は全て聞きました。私に聞きたいことがありそうですね」

「……あんたか。仙人とか名乗ってこの人らに、病の処方として薬を渡したのは」

「ええ。そうです……そう言えば、積もる話もあるでしょう。ですがその前に、仙人では締まらない。私の名を名乗らせていただきましようか」

ギンコのじとりとした視線も物ともせず、仙人とやらは控えめに、しかし堂々どうどうを名乗りをあげた。

「私の名は豊聡耳神子とよさとみみみこ。遠く仙界せんがいに住まう、神靈廟しんれいびやうの主人です。どうぞお見知り置きを」

恭しいお辞儀につられて、炭がぱちりと弾けた。

第八章 ふきだまる沼 参

仙人と呼ばれる人間が、幻想郷にはいる。

それらは常人には想像することもできないような厳しい修練の末、寿命を克服した超人であり、妖怪に匹敵する力を有する。妖怪や死神にその命を狙われる存在でありながら、幻想郷の広域にある無法地帯に居を構え、個人の強度でそれらを跳ね除けて生きる存在。見た目は古木のごとき老体なれど、その身に宿すは秘奥ひおうと研鑽けんざんの極致。道を求め、命を極むる者。

「……と、ご大層な言葉を並べてはいますが、要するに俗世を離れ、万物の普遍の理、真理の追求を旨とする修行者を道士、或いは仙人と呼びます。一種の求道者というわけですね」

「さっきのじいさんもそうなのか」

「ええ。もつとも、私からすればまだまだですが。……ここらには道士として修行に励む人間が多くいます。土地が細く、生命が希薄なれば妖魔も近寄りづらく、隠れ住むにはうってつけですので」

「人も住みづらい土地だと思うがね」

「そこはそれ、仙人は普通の人間と違い、食事もほとんど必要としませんから。静かで、邪魔が入らない場所さえあれば良いのです」

「……なるほど、な」

突如現れた仙人、豊聡耳神子の話を聞いて、そういう人間もいるのかと、ギンコはまたひとつ幻想郷の事情に詳しくなった。

突然現れたこの娘に、話す場所を変えようと提案されたのがつい先ほどの話。その提案に従い片足の老人の家を出て、ギンコは再び雪の降る山道を歩いていた。相変わらずの曇天からはさらさらとした粉雪がゆつくりと落ちてきている。

歩を進める隣には仙人を自称する紫の外套を纏った少女と、従者と思われる烏帽子を被った白い着物の少女が一人ずつ。いつかギンコがそうしていたように一つの傘を二人で分けている。ギンコといえば、少女二人がそれぞれ差していたのだらう傘のうち、一本をあてがわれ、使っていた。

「お前さんらも、仙人とやらなのか」

「ええそうです。尸解仙しかいせんというもので、一度死んで肉体を捨て、物体に魂を定着させた存在です。こちらの布都ふとも、私と同じ尸解仙です。仙人と呼ぶにはまだ未熟な点もありますが」

布都、と呼ばれた烏帽子の少女は何も言わず、目線を伏せたまま黙々と歩みを進めている。そんな様子を見て、ギンコは顎をさすつた。

「……途方も無い話だな」

「ええそうです。只人ただびとにとつては」

誇るでもなく、神子は自然にそう言った。言葉こそ不遜ふそんな響きを持つていたが、彼女の口調からは不思議と不快感は伝わってこなかった。清流のせせらぎのような、爽やかな声だった。

「さて、我々の素性は明かしました。次は貴殿きでんのことをお聞きしたいですね。……まあ、噂だけは耳に届いていますよ。蟲師の、ギンコさん」

「……そうかい。なら、もう語ることもないかもな」

「では病についての所感を。おおよその検討はついているのでしょう？」

「……まあな」

会話の先をいく神子の言葉に、ギンコは静かに応じていく。先程会った片足の仙人が患った奇病。足から草が生え、蔓状に成長するそれらがやがて人体を泥状に分解してしまうという病は、ギンコがよく知るモノたちがもたらす症状だった。

神子は前を見ている。ギンコはその横顔を見ながら、病という言葉を使った神子の態度を訝いぶかしんだ。老人の言葉を信じるならばこの娘は、これらがただの病と呼べるものではないことを知っているはずだ。なにせ、放っておけば死に至る蟲患いを治療してみせたのは他ならぬ彼女なのだから。

しかし、構わずギンコは言葉を続けた。いつものように、滔々とうとうと。

「病、と呼ばれるものの正体は、おそらく蟲だろう」

「……」

「骸草、という蟲がいる。動物の死骸に取り付くと芽を出し、成長するにつれてそれを骨まで分解して泥状にし、その泥を踏んだ動物に寄生して、子株を増やしていく」

「なるほど。症状が当てはまりますね」

「だが不可解な点もある。本来、骸草は生き物に芽吹くことはあれど、成長はしないはずなんだ。ましてや死骸と同じように分解を始めるなんてことは、そうないはずだ」

「そうない……つまり例外があるのでは？　そして貴殿はそれをご存知かと思われませんが」

ギンコと神子の間に雑音はない。神子はさくりさくりと雪道に足跡を残すがごとき気軽さで、会話の核心へと切り込んでくる。

「……骸草は生き物の死臭に反応して成長する。生体でも強い死臭をまとっているなら、骸草は反応するんだ。だから……あのじいさんが生き物の死骸を常に扱ったりしているのなら、症状におかしなところはない」

「死臭に……なるほどそれで」

「心当たりがあるのか」

「心当たりというよりは推測ですが……実はあの病、貴殿の言うところの蟲の症状はここに住んでいる仙人だけが発症し、悪化しているのです」

「そうなのか？」

「ええ。そして仙人とは寿命を克服した者たちのことを指します。この寿命を克服したという点が、骸草の誤解を招いているのだと考えます」

「誤解……」

「寿命を克服する手段は少なくありません。我々が行った尸解の法然り。不老不死の靈薬を練り上げ、服用することで目的を達しようとする錬丹術。呼吸や体操を用い、内なる精気を丹として練り上げる内気功。実に様々です」

言いながら神子は手前にかざし、指折り数えていく。不老不死の靈薬を求める思想とは、またなんとも強欲な連中だと思いながらも、

ギンコは黙って、神子の言葉を待っていた。

「ここの山の者たちが用いる手法は鍊丹術。不老不死の靈藥、道教で言うところの金丹きんたんを練り、服用することで生きながらえて連中が彼らです。離れようとする肉と魂を精神で繋ぎ止め、腐りゆく体を藥漬けにして誤魔化している。極端に言えば、魂を使って死体を動かしているようなものです。骸草は、彼らの偽装を見破っていたんでしょう」

「……」

やれやれ、と神子は首をすくめる。ギンコといえば、神子の口から語られる仙人たちの思想に辟易へきえきしていた。彼らの所業は、間違いなく理を歪めている。強い藥物で寿命を誤魔化そうなど、人に許されるのだろうか。間違っても、光酒こうきの存在など知られてはならないだろう。ギンコの目が陰る。これは、少々厄介な問題に首を突っ込んだかもしれない。そう思った。

一行の歩む道は寂しさを増し、辺りには深く濃い緑に染まった針葉樹が目立ち始めた。地面に降り積もるはずの雪は、多くが辺りに敷き詰められた深緑の塔に受け止められている。もう必要ありませんね、と少し目を空中に走らせ、神子が布都に傘を下げさせた。

釣られてギンコも傘を下げる。空を見上げると、確かに雪の勢いは弱まり、緩やかな風に舞う細雪さいせきがまばらに頬を撫でるばかりとなっていた。

ギンコが目線を空へ移している内に、二人の仙人は少し前を歩き始めた。二人の一步後ろを追いかけながら、ギンコは問いかけた。

「……今度はこつちが聞いてもいいか」

「ええ、なんなりと」

「お前さんは骸草に寄生された者たちに藥を処方したそうだが、その藥はどこで手に入れたものだ」

「……どこで手に入れたのか、ですか。私が作ったとは微塵みじんも考えていないのですね。どんな藥か、あの老人から聞きましたか？」

「いや。だが想像はつく。おそらく……腐臭を放つ、赤黒い泥のようなものだろう？」

「……ふふつ、やはり貴殿は慧眼だ」

少し可笑しそうに、神子は肩を揺らした。

「貴殿の想像通りです。あの薬は、今向かっている沼で手に入れたもの。私が作ったものではありません。いや、それ以前に薬と呼べる代物なのか定かではありませんね……或いは、毒かも」

「沼……？」

ギンコが神子の言葉を反芻はんすうした時、今まで静寂を保っていた山に、ごろごろと雷鳴のような低い音がこだました。近くに雷雲でもあるのかとギンコが警戒して足を止めると、木の隙間を縫うようにゆつくりと一人の人影が空から降りてきた。それは一行の前に立ちほだかり、特にギンコを睨み据えていた。

薄い青緑の髪に天鷲絨びろうじの洋服を纏ったその人には足がなかった。正確には広がった服の裾から覗く足らしきものはあるのだが、それはなんだか不定形のよくわからないものであった。一瞬、先の蟲患いの関連を思い浮かべたギンコだったが、すぐに異質なものと結論づけた。

眼光鋭いそいつに神子は特に臆することなく歩み寄り、声をかけた。

「見張りぐ苦勞様です、屠自古とじこ。異常はありませんか？」

「ええ。特には……それより、その男は？」

「彼は蟲師のギンコさんといって、先の病の正体を知る識者です。警戒せずともいいですよ」

「識者？へえ……」

神子に警戒を解くよう指示されたその人は屠自古、というようでの態度を見る限り、先程から同行している烏帽子の布都と同じく、神子の従者のようだった。

神子からの紹介があつたにもかかわらず、屠自古のギンコを見る目つきは鋭いままだった。その眼光からは薄紫の電光が迸っているような気がする。見るからに歓迎はされていないような雰囲気にとりあえずギンコは軽く会釈をした。

「蟲師殿、彼女には沼に近づくものがないか見張ってもらっていた

のです。……問題の沼はすぐそこですよ」

屠自古が合流し、四人となった一行はさらに山の奥へと歩みを進めた。そして、奥に進むにつれて、目に見えて異変が感じ取れるようになってきた。

先程まで視界上方を覆っていた針葉樹の葉が落ちている。木は細くなり、どうやら立ち枯れしているものもあるようだ。林は痩せ、微かに腐臭も漂い始めたところで、ギンコの目に問題の沼とやらが飛び込んできた。

「……なんだこれは」

ギンコの目の前。白い雪に囲まれながら、ぽつかりと地面をくり抜いたように円形の沼がそこにあった。冬季に凍らぬ沼の存在自体は珍しいものでもない。異様なのはその、色だった。

鉄器に沸く赤錆を、これでもかと泥に溶かし込んだような毒々しい赤黒さを呈する粘液が満たされた大穴は果実酒のような腐臭を放ち、瘴気にも似た気配を周囲に撒き散らしていた。沼の縁には立ち枯れてぼろぼろの木が突き出ており、地獄の風景にも描写される針山、血の池地獄を連想させる。

絶句するギンコの隣に立ち、神子が様子を伺い立てる。

「蟲師殿の思っていたものとは違いますか？」

「……思っていたものではある。だがここまでの規模とは思っていなかった」

間違いない、ギンコが対面している沼に満ちているものは腐酒である。

腐酒とは生命の源、真なる闇の底を流れ、光の川を形成する光酒と呼ばれる生きモノが腐れてしまった姿を指す。本来、蟲と成るはずだったものがそう成れず、腐り、淀んでしまった姿。稀に地下水に乗って地表に湧き出すこともあるというが、沼一つ飲み込むほど大量に発生するなどギンコをして聞いたことがなかった。

目の前の沼からはずつと感じていた腐臭に加えて、どこか甘い匂いも混じっている。腐敗の進行がまだ緩やかな、言葉にすればおかしな話だが、新鮮な腐酒が湧き出しているのだろう。光酒の香りが混ざっ

ているのは、そのためだった。

ギンコは神子の方を向き、静かに忠告する。

「これは断じて薬なんかではない。腐酒と言つて、生命の源である光酒の腐れたモノだ。人の体には毒ですらある。お前さんは、これをどうして薬だなんて思ったんだ」

「……」

静かだが、ギンコの言葉には明確に怒気が込められていた。それを神子もわかっているだろう。神子は目の前の沼から目を離さずに、短いため息をついて言葉を返した。

「そうするほかなかったのですよ。彼らを救うためには」

「……」

言い訳になりますが、と前置きしながら、神子はギンコの方を見る。表情を崩さず、あくまで淡々と、神子は言葉を紡いでいく。その様子からは後悔や慚愧ざんきの念は感じ取れない。自分の行動を真摯しんしに受け止めているその視線からは、言い訳をしようなどという思いは微塵もないように感じられた。

「骸草を仙人の体から引き剥がす術はありません。それほどまで、彼らは根強く、自らが寄生したものを死体だと言い張っているのです。ならば殺すしかない。溶かし、殺すことで体から取り除くほかに、どうしろと?」

「こんなものに頼る以外に、何か方法はあるはずだ」

「特定の薬草で練り上げた生薬やら塩で散らそうとでも言うのですか? そんな程度では彼らは引き下がらない。自らの生存をかけているのですから、意地でも抵抗しますよ」

「……何を言っている?」

神子の奇妙な物言いに、ギンコは疑問を抱く。蟲を、まるで意思ある一人の人間のような扱いで語る彼女に、違和感を覚えた。

神子は再びギンコから目を逸らし、不意に中空を眺めた。

「蟲師殿。おそらく貴殿には見えているのでしょう。この世に漂う那由多なゆたの命。下等で微小な存在が」

「……お前さんも見えるのか」

下等で奇怪な異形のモノたち。この世を敷き詰め、数多蔓延^{あまたはびこ}る蟲という存在を、ギンコは見る。そしてそれらを見る性質は、何もギンコだけに与えられた特別なものではない。

ギンコの言葉に、神子は静かに首を振った。

「見えるわけではありません。ですが私には聞こえるのです。彼らの声が。幾千幾万の小さな欲が、声となって聞こえてくる……もちろん、骸草からも」

「蟲の声が聞こえるだど？」

「彼らの声から私は読み取ります。彼らが何を苦手としているか。何を欲して動くのか。それらがわかれば、対処法も見えてくるというもの」

当然のように語る神子の横顔を見て、ギンコは恐怖を覚えた。豊聡耳神子。この仙人と呼ばれる少女はとんでもない性質を秘めていると言えた。蟲の声から欲を読み取り、意思を汲み取るなど、あまりに人智を離れた異能である。それは言うなれば、命がどうして生まれ、どうして生きて、どうして死んでいくのか、その意味を理解しているのに等しい所業であった。

なればこそ、腐酒を骸草に塗り、溶かし殺すという選択が最良ではないことを、彼女は正しく理解している。その上で、淀みなく、神子はギンコを見据え、強い言葉を選んだ。

「骸草は我ら仙人に害なす存在。同志を殺す害虫です。そして私はそれらを駆除する術を知る者。ならばこの智を振りかざすことに、なんの躊躇^{ためら}いもありません」

「……だが腐酒を使えば、副作用で片足を無くす。これからどんな弊害があるともわからないんだぞ」

「放っておけば死にます。死ぬよりマシです。現に多くの者がそう考え、失うものを承知の上で薬を受け入れました。すでに下された裁定と、彼らの決断に文句を言うのは筋違いです」

「……」

そこまで言われてしまえば、ギンコも黙り込むほかなかった。

自分の命を秤^{はか}りにかけた時。それがどれほどの重さとならば釣り

合うのかなど、ギンコに定められるはずもない。ましてや骸草に寄生された仙人たちはあらゆる手段を尽くして寿命を克服せんとする、命に執着する者たちだ。それがどれほど罪深い行いだとしても、実行するだろう。自分の所業を柵とぎに上げ、自らの道を極めるために。

ギンコは彼らの選択の刻ときに間に合わなかったのだ。ならば、文句を言う筋合いはない。

やり場のない思いを抱えたギンコが大きく大きく息を吐く。責められはしない。責めることなどできない。そう、頭では理解していても、ギンコはどうしても、仙人という人種を好きになれそうもなかった。

「……事情はわかった。だが、この沼はどうする」

ギンコは沼を指差して言う。

「腐酒がここまで大量に発生しているのは、はつきり言って異常だ。俺としちゃあ、こつちも見過ぎせない。明らかに周囲の自然を蝕んでいるからな。早急に手を打つ必要がある」

「……我々には腐酒が必要だと言うことを理解した上での言葉ですか？ 今後骸草の寄生が再発しないとも限らないのですよ？」

「そうだ。そして今後は、骸草の治療に腐酒を使うこともやめてもらおう」

「話になりませんね。山にはまだ治療を終えていない者もいるかもしれませんが。彼らに死ねと言うのですか？」

「骸草が正常に活動するほど、肉体の限界を超えて生きながらえるのに、今までどれほどの犠牲を払ってきた？ 誤魔化されねえぞ。偉そうなこと言っつてんじゃねえよ」

今度こそ、ギンコは強く神子を睨み返した。今までのことには、何を言おうと筋違い。だがこれからは違う。彼らの思想が気に入らない、とギンコは真つ向から対立する。

今生きている者がどれだけの犠牲の上にその命を成り立たせているように、生きているのならば軽々に死ねとは言わないし、死んでいいとも思わない。だが、犠牲を厭いとわず、感謝の一つも覚えずに偉そうな態度で、生きていて当然と思っっている輩にも腹がたつ。自らもま

た、多くを生かし、また多くに生かされている存在だと自覚しない者に、ギンコは厳しかった。

その雰囲気を感じ取ったのか、神子を取り巻く二人の従者が歩み出る。だが神子はそんな二人を手だけで宥め、下がらせた。

「……蟲師殿。貴殿は、我ら三人が力づくでその要求を跳ね除けることは容易いと理解しているのでは？」

「……ああ」

「だったらどうしますか？　ここで死にますか？　私は申し上げたはず。我らに害なす存在を振り払うためなら、智慧の行使に躊躇いはないと。それは、力も同じことですよ？」

目の前の神子の存在感が一気に大きくなるのを、ギンコは感じていた。先程までの淡々とした口調は鳴りを潜め、ずしり、とのしかかるような重い声色で神子は忠告してきた。

ギンコはそんな神子の様子も物ともせず、凜とした態度で言葉を返した。

「骸草の件は、俺がなんとかしよう。腐酒に変わる治療法を見つけてやる。それなら文句はないだろう」

骸草による被害を食い止めるため、別の治療法を検討する。それが見つければ、仙人たちも副作用の強い腐酒を必要としなくなり、この沼の正常化を邪魔しようとも思わないだろう。結果として仙人たちを助けることにはなるが、それはそれ。今はこれが最良の選択だろうと、ギンコは思った。

「……その言葉を待っていました」

ギンコの提案を受けて、神子はギンコに近づいた。いつの間にか重苦しい雰囲気は消え失せ、その表情には微笑みすら浮かんでいる。そしてギンコに対し、無防備にも手を差し出してきた。

「貴殿はやはり聡明な方ですね。安心しました」

「……嫌味か」

「まさか。我々もできることならこのようなモノに頼りたくないのです。新たな治療法の検討ということならば喜んで協力いたしましょう」

「……そうかい」

そんな態度に不満がないわけでもないが、差し出された手を、ギンコは一応握り返した。そうしてギンコは思う。もしや最初から、この娘は自分の協力を取り付けることが目的だったのではないのかと。そう考えるとどうにも、もやもやとしたものが胸中に渦巻き始めた。

「……もしかして、私のこと嫌いですか？」

「……さあな」

いよいよ心を読まれそうだと、ギンコは苦笑いを浮かべる少女から目を逸らした。

第八章 ふきだまる沼 肆

時に蟲師殿。今晚の宿はお決まりですか？

いや、当てはねえな。なんならさつき爺さんのところまで戻ろうかと。

それなら我が靈廟へご招待しましょう。いかがですか？

そんな会話の後にギンコが神子に提案され、案内されたのは山間部の岩石の前だった。雪が積もりつつも道らしき体裁が感じられた沼までの道のりとは打って変わって、木の隙間を縫うように道無き道を歩きたどり着いたそこで、一行は立ち止まっていた。

一行の中に布都の姿は見えない。ギンコ達が立ち寄るまで沼の見張りをしていた屠自古とその役目を交代し、今はギンコ、神子、屠自古の三人となっていた。

沼から離れたことで山の木々も自分の色を思い出し、周囲に茂っている。それを差し引いても、季節柄日の入りが早くなったことと、結局一日続いた曇り空のせいで、辺りはすっかり暗くなっていた。だがギンコの手には松明等の明かりは握られていない。もちろん神子の手にも。その必要がないのだ。それというものも。

「……お前さん、その珍妙な体質はなんだ？」

「なんだお前。丸焦げにするぞ」

「あまり屠自古を怒らせない方がいいですよ。布都も事あるごとに黒焦げにされてますから」

にこやかに忠告する神子の口からはなんとも不穏な響きが聞こえてくる。その言葉通りの結末にならないよう用心しながら、眉を潜め、ギンコは屠自古を見た。

薄ぼんやりと発光する彼女はまるで蛍のようだった。体の輪郭を覆うように薄紫の微光を帯びたその姿はギンコによく知るモノに少し似ていた。彼女の放つ光のおかげで、他の明かりは必要なく、月光も雲間に隠れてしまっている今宵にはちょうどいい塩梅だった。

「屠自古は雷を起すことができるのです。明かりになつてくれているのは能力の延長ですよ。その状態で触れると痺れますので、気をつ

けてくださいいね」

「へえ……」

雷を起こせるとは、また物騒な能力もあつたものだどギンコは思った。

「……それで、お前さんの家はどこなんだ？」

「ああ、そうですね。今ご案内します」

神子はギンコに促されると、目の前の岩石に歩み寄った。ギンコの身長すら優に超え、神子の身長の二倍にとどこうかという巨石。山の一部が切り崩れた崖に生えている。例えるなら人間の前歯を一本、何倍にも大きくしたような形だった。

神子は自分の体を覆う紫の袖なし外套の中から腕だけを伸ばし、指先で軽くその巨石に触れた。すると指先を中心にして、見たこともない文字で描かれた八角形の奇妙な模様が巨石の真ん中に浮かび上がった。神子はその内、いくつかの文字に次々と触れていく。やがて指を離し、一步岩から離れると、その岩はまるで意思を持ったかのように一人でに動き出した。ずりずりと大きさの割には静かな音が持続的に響いて、岩が道を譲るように横にずれていく。

おお……とギンコは思わず感嘆の声を漏らす。その様子がおかしかったのか、神子は小さく笑った。

やがて岩の動きが止まり、岩の奥にぽっかりと口を開けた洞が見えた。

「さ、行きましようか」

神子は言葉だけでギンコを促すと、その暗闇の中に迷わず足を踏み入れた。屠自古もそれに続き、少し出遅れたギンコは家つてのは横穴なのかね、と想像を膨らませながら同じ方向へと足を向けた。

その洞の中には不思議な空間だった。土の匂いも感触もせず、上下左右にどこまでも先の見通せない闇が広がっている。ともすれば地面も壁もわからなくなるような闇の中で、どういふことか三人の姿だけが鮮明に浮かび上がっていた。

屠自古の発光もいつの間にか収まり、光源は見当たらない。だと言うのに、自分たちの姿ははつきりと見て取れる。なんとも奇妙な空間

で、ギンコは少し落ち着かない気分だった。

「ここは仙界に通ずる抜け道です。幻想郷のどこからでも開くことができる門、と言えば理解が速いでしょうか」

「……虚穴うろあなとも違う感じだな。なんにせよ、長居はしたくねえ雰囲気だ」

そうですか、と神子は気のない返事をした。

しばらく歩くと前方に赤い門扉のようなものが見えてきた。細かな装飾も施され、見た目こそ違いないのだが、暗闇に扉だけが浮かび上がる様がどうにも拭えない違和感を放っていた。

屠自古が先行し、扉を開ける。隙間から黄昏色の光が差し込んできて、ギンコは少し目を細めた。

「着きましたよ。ここが我らの居城、神霊廟しんれいびやうです」

諸手もろてを広げて高らかに告げる神子の前には、ギンコが息を飲む光景が広がっていた。

橙の瓦屋根が鮮やかな、所々に龍の意匠をほどこした寺院建築。正面の建物を挟むように、塔がそびえ立つ左右対称の城。建物を支える太い柱は全てが朱色に塗り固められ、ギンコが幻想郷に来て、いや、生涯を通して見てきた建造物の中で最も豪華ごうしゃな見た目をしていった。

そしてその建物を彩る自然の風景も異色だった。屏風びやうぶ絵を写すような黄昏の空。黄金の輝きが天空を埋め尽くし、どこまでも広がっている。夜の静けさと、朝の清澄さを足し合わせたような穏やかな空だった。この世のものとは思えない。極楽浄土なんてものがあれば、こんな世界を言うのだろうか。

間抜けにも口を開けて、目の前の光景に見入っていたギンコを見て、神子は満足気に頷いた。

「ふふふ、驚いて声も出ませんか。良き良き。それでこそ建築に気合を入れた甲斐があるというもの」

「それで太子様。この男の部屋はどうするんです？ ここには私たちの部屋しかありませんが。まさか同じ部屋に泊めろというんじゃないですよね」

「おや、いけませんか？」

「こともなげに言った神子に呆れて、屠自古は眉間を押さえた。

「冗談はよしてください。笑えませんよ」

「まあまあ、同じ部屋というのは言い過ぎでしたね。うーん、かと言って蟲師殿を弟子たちと同じ僧坊そうぼうに押し込むわけにも行きませんし……よし。じゃあ部屋の拡張をしますので、屠自古は蟲師殿にこの説明をお願いしますね」

「……わかりました」

面白くなさそうに了承した屠自古と、まだぼんやりしているギンコを門の前に置いて、神子は一足先に建物へと向かって行った。

「おい、いつまでそうしている。いくぞ男」

「ん？ あ、おお」

屠自古に促され、ギンコも歩き始める。神靈廟へと続く石畳を歩いて、向かった先は小さな社やしらのような物の前だった。そこには大きな香炉こうろがあり、そこから石畳は十字に伸びて、四方へと続いている。香炉からは煙が立ち上り、鼻を鳴らせばふわりと甘いような、渋いような香りが鼻腔を刺激した。

「廟びやうは我ら三人の居城だ。ここから向かって正面が太子様、右が布都、左が私の部屋がある建物になっている。お前がどこに部屋をもらえるか知らんが、間違っても左の建物には近づくなよ。命が惜しければな」

「……お前さんは男に恨みでもあるのか？」

「いいや。だが得体の知れない男に簡単に気を許すほど、馬鹿じゃないというだけだ」

「まあ、それもそうか」

思えば屠自古は初対面からギンコを警戒するような視線を向けていた。敵意を向けられていい気がしないのも事実だが、実害がないうちは甘んじて受け入れるほかない。根無し草のギンコは、そういう視線の対応に慣れていた。

社そばのような物の側で、屠自古がギンコに指図する。

「この常香炉じょうかうろで外の匂いを落とせ。案内はそれからだ」

「やっぱ香炉だったか。いい香りだな。知った香りも混ざってるが

……これは路銀草か」

「……知っているのか？」

ギンコが鼻を鳴らし、香炉へと近づいて口にした香料の種類に、屠自古は反応した。

「ああ。どこぞの旅の高僧が、いつか路銀の代わりにと施しを受けた家々に残していったことから人々の間に広まった香草だろう？ 乾燥させたものを熾おこして使えば、少し渋みのある甘い香りが立つ。香料なんてよく使わんが、これは好きやっだな」

「ほう。そうか。お前、なかなかわかる奴だな。これはな、太子様が直々に調合された香料を焚たいているんだ。材料は私たちが調達してくることもあるから、何が入っているのかわかるぞ」

「へえ。例えば？」

「そうだな。例えば……」

香炉の香りを褒められた屠自古は気を良くしたのか、自慢気にその材料を喋り始めた。そのうちのいくつかはギンコも聞き覚えのあるものだったようで、会話が弾む。

「ところで病の件だが。お前、何か当てはあるのか？」

「ん……さしてね」

「さてね、つて……何かあるから太子様に啖たんか呵切かつたんじやないのか？」

「そんなつもりはねえよ。ああ言わなきや納得しなかつただろ。お前ら」

「騙たしたのか!？」

「人聞き悪いこというんじやねえよ」

「おや。私がない間にずいぶん仲良くなつたんですね、屠自古。案内はどうしたんです？」

常香炉の前で言い争う二人を見つけて、廟から出てきた神子は楽しそうに笑う。それで窘たしなめられたと思ったのか、屠自古はハツとしたようにギンコから距離を取り、神子の傍に降り立った。

「聞いてください太子様。こいつさつきは私たちの手前、助かりたいからと出鱈でたらめ目を」

「いらいらい」

「おや、そうなんですか蟲師殿」

からかい混じりの笑みを浮かべる神子と、不審者の正体見たりとほくそ笑む屠自古。仙人の考え方は好きになれないギンコだが、彼女らを見ていると悪気もないように思えてくるのだから困りものだった。

ギンコが割り当てられたのは四畳半の和室だった。手のひらに収まるような程よい広さが心地よく、床の間には表にあつた常香炉と同じ香が焚かれている。連子窓れんじまどから黄昏たそがれに染まる草原が覗き、柔らかな光を取り込んでいて、装飾は少ないが全体的に上品な雰囲気の一部屋となっていた。

お望みなら各所に彫りを刻んで、柱も朱塗りに統一しましょうかという神子のありがたい申し出を丁重に断った後。一人になったギンコは部屋の隅に畳まれた布団の側に薬箱を下ろし、冬着を脱いだ。茶色の外套を雑に丸めて、手袋やら首巻きやらと一緒に薬箱の上に乗せた。暖をとるための家具は部屋に備え付けられていないが、それでも薄着で過ごしやすい環境になっている。冬だというのに、雪の一つも見当たらず、通ってきた道の異様さといい、神霊廟のあるここは、或いは冥界のように幻想郷とはどこか離れた場所にあるのでは、とギンコは予想した。

畳の上に寝転んで天井の板の間を見上げると、ようやく思考をまとめるために落ち着いた状態とうりゆうが作られた。

ギンコが神霊廟に逗留する間に片付けなければならない問題は二つ。一つは仙人に寄生する骸草の安全な除去法の立案。現在取られている治療は腐酒ふきを塗りつけて骸草を溶かすというもの。しかしこれは片足を失う副作用と隣り合わせであり、新たな弊害へいがいが伴う可能性もある危険なものだ。かと言って放置すれば、仙人は骸草に取り殺される。現行の治療に代わる、別の対処法を見つけることは、急務だった。

二つ目は腐酒が湧く沼の調査と対策。仙人たちの治療のために神

子たちが利用している腐酒の沼。これをどうにかしなければならぬ。本来、腐酒は湧き出したところで、後は自身が腐れていくに任せ、珍しくもありふれたモノだ。だが、周囲の自然にすら牙を剥き始めた腐酒の沼を放置することはできない。明らかに異常だ。あれほどまで腐酒が大量に湧く原因の調査と究明。そして浄化を行わなければ、最悪この山一帯が草木の生えぬ不毛の地になりかねない。なんとも頭の痛くなる問題を二つ抱え、ギンコは眉間を揉んだ。

「さて……どうするかね」

上半身を引き起こし、左目にかかった前髪を少し弄んでギンコは考える。まず考えるべきは骸草の対処だ。こいつをどうにかしない限り沼の調査にも移れない。神子が治療に腐酒を用いる以上、あの沼をどうこうするという選択は取らせてもらえそうにないためだ。

連子窓の下に用意された文机ふづくえを見る。そこにはギンコが頼んで用意させた紙の束と、硯すずりと筆が安置されている。ギンコは尻を引きずるように体を動かし、机に向かい合うと筆を取り、墨をすり始めた。滑らかに伸びていく墨に思考を溶かし込むように、ギンコは黙考する。

「(仙人に寄生する骸草……後で実状も見せてもらわにゃいかん)」

神子の話では、未だ薬の副作用に悩み、治療に踏み切れぬ患者が数人いるという。皆一様に骸草に両足を侵され、手を打たねば全身が泥状に分解されて死に至る。いずれ直接診察する必要があると、ギンコは思った。

本来、骸草の治療にはいくつかの生薬しよやくを混ぜ込んだ塗り薬を用いる。それを骸草の芽に塗布とふすれば、芽は肉体から離れていくのだが、例外もある。ギンコの知る中で、その例外とは骸草が死臭に反応して蔓つるを伸ばしてしまった場合だ。その場合は薬も効かず、骸草はあくまで正常な反応を示しているということで、いずれは全身に草が伸びていたはずだ。

はずだ、というのも、ギンコの知るその例となった男は骸草に取り殺される前に、別の原因で死んでしまったからに他ならない。ギンコは男に、体にこびりついた死臭を残さず洗い清めれば、薬も効くよう

になるはずだと言ったが、今となつてはその判断も怪しいものだった。

とにかく、この例からわかることは、蔓を伸ばして成長した骸草には、そのままでは薬が効かないということだけだ。

「聞く限り骸草の症状自体はその時と同じ……薬で肉体を限界まで酷使する仙人らの死臭に寄せられ、草が成長している。骸草が正常に働く。それほどまでに仙人たちの体は生物から遠ざかっているんだ。だとすれば……」

手元にある情報をいくつか箇条書きで紙にまとめていたギンコの筆が止まる。要は仙人たちが死体と間違われるほどに死に近い場所で生きていくから、問題が起きている。ならば、生き物としての力を取り戻してやればいい。薬で無理矢理引き延ばしている枯れかかった命に、生命の水を注いでやればいい。そこまで考えて一つ、解決策を思いついたギンコだったが、その方法は取れないと早々に断定した。

「（それは駄目だ。特に、仙人なんていう連中にはな……）」

道を極めるために、不老不死を目標とする求道者。そんな連中に、教えられるはずもない知識がある。蟲師の間ですら一歩扱いを誤れば禁忌に触れるその思考を打ち切って、ギンコはため息をついて筆を置き、再度仰向けに寝転がった。

「……結局、別の方法を探るしかねえか」

手持ちの情報だけではどうにも手詰まりな様相を見せ始めたところで、部屋の入り口から、引き戸越しに控えめな声が届いた。

「蟲師殿。食事をお持ちした。入っても良いか」

「ああ」

ギンコが返事をすると思を一つ抱えたまま器用に引き戸を開けて、白装束を纏い、烏帽子を被った少女、布都が入ってきた。はて、確か彼女は沼の見張りをしているのではなかったか。ふと、そんな疑問がギンコの頭をよぎる。

「お前さん、帰ってきてたのか」

「ん？ おお、あの後屠自古と交代してな。人里まで蟲師殿の食事の

材料を買い出しに行くのなら、あやつより我われの方が適任ゆえ。ここには只人が食するものなどほとんどないからの」

そう言うことか、と納得したギンコの前に膳が差し出される。蒸した野菜に干し肉が少々。決して贅沢なものではないが、冬の時節にありつける食べ物としては上々だった。

「召し上がると良い」

「んじや遠慮なく」

差し出された食べ物を断る余裕があるほど、ギンコも裕福な暮らしをしているわけではない。ありがたくも両手を合わせ、早速箸をとった。蒸した野菜の水分と自然な甘みが、干し肉の塩分で程よく引き立つ。質素だが味わい深い滋養に、改めてギンコは感謝を口にした。

「すまんな。食事まで世話になって」

「なに、こちらかも知恵を借りるのだ。太子様が頼りにしている人物ならなおのこと、もてなすのは当然であろう」

そう言つて歯を見せて笑う布都は、初対面こそ落ち着いた雰囲気かもくの寡黙な従者という感じだったが、こうしてみればこちらの快活な笑顔が本分であるような気がして、ギンコも肩の力が抜ける思いだった。

「屠自古もそうだったが、あんたらの言う太子様ってのは、神子のことなのか？」

「む。呼び捨てとは恐れ多いな。蟲師殿は客人とはいえ、太子様への礼を欠いてもらつては困る。神子様、豊聡耳様、或いは太子様とお呼びしろ」

「じゃあ……太子様で」

「うむ、よろしい。……ところで蟲師殿の名前は？」

「俺はギンコだ。そう言うお前さんは布都でいいのか？」

「むむ。我のことも呼び捨てとな。……だがまあ、太子様と協力関係を結べるほどの識者ならば仕方あるまい。本来なら物部ものべ氏、布都様と呼ばせるところだが、許す。好きに呼ぶといい。だがこちらもギンコと呼ばせてもらおうぞ」

「そりや構わんさ。どうも」

口調の端々に不遜な態度が見え隠れするも、一々挙動が大きく、表

情もころころと変わっていくためかどこか幼い印象を受ける布都からは嫌味のようなものは感じられない。膳を挟んで膝をつき合わせ、食事をしながら会話を続けられる程度には、気楽さを感じさせる少女だった。

やがてギンコの食事も終わり、膳の上の皿が綺麗になった頃、話題は病の話へと移っていった。

「時にギンコよ。其方、病そなたの治療をかって出たが、他にもああいう不可思議な病に詳しいのか」

「まあな。病、というよりはそれを引き起こしている原因の方に知見があるってくらいだ」

「原因とな」

「ああ。蟲、というモノなんだがね。生命そのものに近い生きモノをそう呼ぶ。普通は目にも見えぬ、一生関わることもない希薄な存在だが、稀にそれらを見る者がいる。俺もその口だ」

「蟲……それが病の原因なのか」

「そうかもしれんし、そうでないかもしれん。原因は、どこにあるかわからんさ」

「……我は生まれ、一度死した後に復活を果たし、今日まで生きてきた。だがあんな恐ろしいモノがこの世にいるとは未だ信じられなんだ。この目で見た後にも関わらず、な」

布都は膝の上で拳を作り、表情を暗くした。確かに、身体中から黒い草を生やした人が泥状に崩れていく様をみればそう思うのも無理はないだろう。布都の胸中を思い、ギンコは続ける。

「確かに、あれらは恐ろしい。だが必要以上に怖がることもない。あれらはただ、そうあるだけのモノだ。毒キノコは、食べて初めて害になる。調和が保たれているうちは、ただの奇妙な隣人でしかない」

「だが現にあの草は人を殺しているぞ。明日は我が身かもしれないと……」

「そうだ。今回のように、調和が崩れればこういうことが起きる。それらを元あるべき状態に戻すため、知恵を貸すのが蟲師だ。……保証はできないが、手は尽くす。だから、あまり恐れるな。これからも、あ

れらとは隣人として生きていくんだからな」

ギンコに静かに諭され、布都は目を伏せ、どこか思いつめたような態度を見せる。重たい沈黙が流れ、やがて少し笑顔を作って口を開いた。

「……太子様もそう仰っていた。それらを責めるな、と。憎むな、と。そんなことをしても、何もいいことなどない」と

「……そうだな。それがいい」

「我にも見えれば良いのだが。修行でどうにかならんのか」

「そういう類の話で、いい話は聞かない。見ようと思っただけでも、いいことはないさ」

そうか、と小さく呟いて、布都は己の力不足を自覚するように肩を落とした。

そう。蟲を見たりする資質は、本来歓迎されるべきではない。異能の多くは人の手に余るもの。それに振り回され、人として生きることでもできずに命を落とした者たちも、ギンコは少なからず見てきている。そういう意味ではもう一人、ギンコも気になる人物がいる。

蟲の声を聞き、蟲患いに治療を施した仙人。彼女の性質もまた人を超えてあるものだ。ギンコは、そんな彼女の実態を、どうにも掴めないうでいた。蟲を害虫だと言い切る時もある。布都にそうしたように、蟲との共存を説いたりもする。人を半ば脅迫してきたかと思えば、にこやかに歓待をしたりもする。

「(一度しっかり話しておいたほうがいいかもな……)」

あの仙人はまだ何かを知っている。そう思わずにいられないギンコだった。

第八章 ふきだまる沼 伍

用意された部屋での食事を終えたギンコは神子と話をするため霊廟の中を歩いていった。仙人に寄生する骸草の治療法を見つけると言ったギンコだったが、伝聞の状況整理だけでは有効な手段を講じることができず、未だ蟲患いに罹^{かか}っている仙人たちを診察できないか神子に尋ねてみようとしていた。

神霊廟の内装は外観ほど派手なわけではないようで、ギンコがたどる廊下も厚めの板材が敷き詰められた、何の変哲も無い作りの廊下である。ぎちぎちと音を立てて歩きながら、土壁にはめ込まれた連子窓から外の景色を見た。見渡す限りの黄昏と草原が広がるそこは、来た時に比べて何の変化も見られない。体感からして、日はすっかり落ち、闇の帳^{とばり}が冬の空をさらなる静寂で包む時間であつてもおかしく無い。黄昏の空が日光に由来するものではないという、これ以上ない証左^{しょうさ}が広がっていた。

布都に言われた通りの道順をたどり、迷わず部屋の扉の前まで来る。簡素な廊下の壁から浮き上がるように、小さな金細工で縁取られた両開きの折戸が立ちふさがる。自らの来訪を知らせるため、少しだけ派手さが見える扉をギンコが叩こうとしたその時。その動きに先んじて部屋の中から不明瞭な声が聞こえてきた。

『どうぞ、蟲師殿。鍵などかかっておりませんので』

声に動きを止められたギンコは、行き場のなくなつた手をそのまま扉にかけ、折戸を開けた。

神子の部屋は閑散としていた、というよりも無駄な空間が多かつた。ともすれば道場のように見えなくもない空間を一望するように、入り口から一番遠い部屋の奥に一段高くなつた場所があり、神子はそこに鎮座していた。

部屋には明かりがあつた。壁の中ほどの高さに燭台が等間隔でいくつか並び、ギンコも慣れ親しんだ灯火^{ともしび}がぼんやりと部屋全体を照らしていた。そしてどういいうわけか、先ほどまで窓の外に広がっていた黄昏は何処かへ消え、代わりに壁の上部にある連子窓から見えるのは

淡い光を放つ星空になっていた。

「……こんな夜更けにいかがなされたので？」

遠くから神子の声が届く。扉の外にいた時よりも、幾分はつきりとした声が聞こえる。ギンコは部屋の奥へとゆっくり進みながら、相手の質問に答えるより先に自分の質問を重ねた。

「さつきまで黄昏空だったつてのに、どうなつてんだ、こりや」

「ああ。ここは特別でしてね。外はいつでも黄昏時ですが、私が眠る部屋はこうしていつでも夜を迎えることができるようにしているのです。夜が怖いのでしたら空を戻しますが？」

「いや、こつちの方が落ち着く。今日は随分と浮世離れたものばつか、見せられたからな」

神子のいる上段の間の手前で立ち止まり、ギンコは神子のからかいにも特に反応したりせず、板の間に座り込んだ。左右の壁から降りかかる朧おぼろげな光に照らされて、ギンコの作り出す濃い陰影が床に伸びる。

上段の間は畳が敷いてあつた。正面には文机。その脇には巻物がいくつつか、小分けの台座に乗せられて安置されている。そして上段の間の四隅に立てられた燭台が、それらを全体的に照らし出している。神子はその中心に座し、ギンコを見据えていた。

「それで、今一度尋ねますが。こんな夜更けにいかがなされましたか？」

「いやなに。お前さんと少し、話がしたくてね」

「……なるほど。少々お待ちを」

ギンコの言葉を受けた神子はおもむろに立ち上がり、さすさすと足袋を鳴らして自身の背後にある背の低い引き戸だけの飾り棚の前に歩み寄り、そこから徳利とくりを大きくしたくらの真つ白な瓶を取り出して掲げてみせた。揺れるに任せて控えめな水音が聞こえてくる。

「夜長の語らいに一献。いかがですか？」

「そりやまあ、よろこんで」

小ぶりだが少し深めの盃を互いに持ち、神子は上段の間の縁ふち、ギンコはそのすぐ下と若干の高低差を挟みながら酒を注いでいく。手を

伸ばせば互いの盃が触れ合う距離だ。

「誰かと飲むのは久しぶりですね」

「二人とは飲まないのか」

「彼女らは従者ですから。それに私たちは嗜好品の類とは縁遠く、頻繁に嗜むわけではありませんので」

月明かりで書を読んでいた方が落ち着きます。と和やかに言った神子は、それでも飲むものは飲むようで、するりと難なく盃の中身を腑に落とし込んでいく。そういえば仙人は数粒の木の实だけで食事を済ませるのだったか、とギンコは思い至った。軽快に酒を呷る神子に釣られてギンコも盃を傾けると、酒はほのかに甘い香りを放ち、ギンコの鼻をくすぐった。

「梅か」

「ええ。漬けて日も浅く、酒も弱いものですが」

一口含めば確かに、腑の入り口を熱くさせるような酒の存在感はほとんどなく、梅の香りが鼻の奥で薫る甘い水のようなようだった。

「……飲みやすいな」

「気に入っていただけましたか？」

「ああ」

「雪見で熱燗なんかになるとまた格別ですよ」

「そりゃいいな」

しばらく二人は取り留めもない短い言葉を会話してつなげていく。今年の梅はどうだとか、秋の長雨は風情があって良いとか、重たい雪と軽い雪の話とか。

だがやがて話題は方向性を持ち、二人にとって共通の事柄へと変わっていく。

「病の方はいかがです？ 治療法の目処は立ちましたか？」

「いいや。情報が少なくてな。どうにも困っている」

「そうですか。では明日、患者のところに行ってみますか？」

「話が早くて助かる。頼むぞ」

「承りました。ですが、言葉以上の情報は得られないでしょう」

酒が回ったのか、神子はどこか気怠げな口調でそう断じる。その様

子の変化をギンコも感じ取ったが、何より自分の行動が無駄に終わると釘を刺されたことに引つ掛かりを覚えた。

「とどうと?」

「膝より下の体に根を下ろす骸草。薬も効かず、抜いても次の草が生えてくる。骸草が生えた足は痺れ、満足に歩くこともできない。という諸症状を確認するだけだと思いますよ。そして……」

一呼吸間をおいて、神子はギンコの目を見て告げる。

「貴殿は実感するのです。『これはどうしようもない。斯くなる上は、この胸に秘めたる最後の手段を講じる他ない』とね」

「……」

口元に笑みを浮かべる神子を前に、ギンコは表情を作らず、押し黙った。

神子が言うところのギンコの最後の手段とは、光酒こうきを使った治療のことだった。仙人が骸草に寄生されている原因は仙人の体が寿命を超えて生きているために、死に近づきすぎているからだと推測すれば、仙人の体を生き物として正常なものに近づけ、骸草の誤解を解けば問題は解決する。生命の源ともいえる光酒を飲ませれば、薬も効くようになるのではとギンコは考えていた。

しかしそれは仙人という人種を考えた時、あまりに危険な行為となる。

蟲師の中でも、こと光酒がらみの事象は理の範疇ことわりはんちゆうを逸脱いつだつする可能性が高いとして、取り扱うにしても細心の注意を払っている。光酒の流れ……光脈を封じ込めた実は体内に取り込めば不老不死となり得るほどの代物だ。もちろん、その実の存在は禁忌である。ましてや寿命を克服し、不死を目指す輩などには、絶対に知られてはならない。仙人に光酒の存在を明かすことはできない。ギンコはそう考えていた。

しかしそんなギンコの反応など意に介さず、神子は続ける。言葉からは丸みがなくなり、鋭く切り込んでくる針のような響きに変わっていた。

「何を隠しているのかは知らないが、貴殿は仙人の思想が気に入らな

いようだな。まあ無理もない。我々は他人に好かれるために生きて
いるわけではないからな」

丁寧な物腰は鳴りを潜め、布都の尊大な物言いと、屠自古の砕けた
口調が合わさったような態度に変わる。言葉の裏を見透かすような
視線。やはり仙人の本質はこう言うものなのか、とギンコは思った。

「……随分と、雰囲気が変わったな。それが本性か」

「口調が変わったぐらいで本性とは人間きの悪い。酒が入れば口も軽
くなる。私の話を聞きにきたのだろうか？ だから包み隠さず話そう
としているのではないか」

「だからこちらも包み隠さず吐き出せてことか？」

「そうは言わない。貴殿は聡明な方だ。そして慈悲深い。必要となれ
ば自ら胸の内を明かすだろう」

それまでは無用な詮索はしない、と盃をギンコの前に置き、神子は
立ち上がる。酒が回ったのかと思っていたギンコだが、そうとは思え
ないしっかりした足取りで神子は文机の前に戻った。ギンコが部屋
を訪れた時にいた場所だ。当然、両者の距離は開く。ギンコは、自分
が神子に感じていた近寄りがない思いを察せられたと感じた。

蟲の声を聞く仙人。その能力のおかげで、彼女は骸草を除去する方
法を知ることができたという。人ならざるモノたちの声からすら意
味と情報を引き出すのだから、人との会話に至ってはその言葉の裏、
真意を読み取れてもおかしくはない。頭ではそう理解できていても、
自分がその能力の対象とされた不快感はいかんせん拭いがたいもの
があった。

「……その能力は生来せいらいのものか」

なるべく表情には出さず、ギンコは聞いた。そんなささやかな努力
すら見透かしているのか、神子は穏やかに言葉を返した。

「そうだ。耳がいいんだ。私は」

「耳がいいですませられるかよ」

「そうだな。確かにそれだけではない。観察眼とか知識とか、その他
の要因も多く絡み合って私の才能を支えていることだろう。だが蟲
の声を聞くことだけなら、耳がいいという説明以外にどうすればいい

のだ？」

そう言つて神子はギンコに向かつて、どこから取り出したのか、ある物を放り投げた。薄明かりの中を放物線を描いて飛んでくるそれを、ギンコは受け止める。

神子が放り投げたものは弓なりになった平たい部分の両端にアケビの外殻そとがらをくつつけたような、なんとも奇妙なつくりをした品だった。金属や軽い陶器のような滑らかな質感の物体で構成されている。

「それは耳あてだ。弓なりの部分を頭に乗せるようにして両端の器具で耳を覆い、音を遮断するために使う。私が常用じょうようしていたものだ」

「これがどうかしたのか」

「最近になつて必要なくなつてな。まあつけてみなさい」

言われるがまま、ギンコは耳あてを装着する。すると外の音がほとんど阻害され、聞こえなくなつた。それを証明するように正面の神子が手を叩いたり、大口を開けて何か言っていたりする。くぐもつた音らしいものは聞き取れるが、言語としての認知はできそうもない。それだけ耳あての遮音性が高いと言えた。

音が遮断された世界で、ギンコは大袈裟な動作を繰り返す神子を見る。かなり間抜けな神子を気の毒そうに見つめると、そんな視線にムツとした神子が立ち上がり、つかつかと歩み寄つてギンコの頭から耳あてを取り上げた。

「これの効果はわかつただろう。もう返しなさい」

「そつちが渡してきたんだらう」

「煩うるさい。気の毒な視線を向けるな。恥ちずかしい」

一言吐き捨て、神子は心外だと言うように腕組みをしてそつぽを向き、頬を膨らませた。行動の端々が妙に子供っぽい。やはり酒の効果は少し、表れているようだった。

「それで？ その耳あてがなんだつてんだい」

何事もなかったかのように先を促すギンコを若干睨み据え、神子はため息をついて耳あてを掲げてみせた。

「……私は耳が良すぎる。これがなければ常にたくさん音が集まつてくるのだ。そのままでも暮らしていけないこともないが、多様な音

が時に煩わしいことも事実。だからこれに頼って生活してきた」

「なるほどな。じゃあ最近は何が悪くなったのか？　それが要らなくなったんだろう？」

「その逆だ。以前にも増して、大きな大きな音の波が、私の頭に流れ込んでくるようになった。貴殿が蟲と呼ぶモノどもの声がね」

「なんだと？　とギンコは驚きの声をあげた。神子の耳の良さは生来のものだが、実際に蟲の音が聞こえるようになったのはごく最近のことだと言う。さらに言えば、生前にもそのような経験は一切なく、神子自身、この音が聞こえるようになってからは少し戸惑いもあったそうだ。

「もう耳あても意味をなさない。昼も夜も見境なく、とめどなく音の洪水が流れてくる」

「……それでも他人の声を聞き取れるものなのか」

「そこはそれ、私の性能の違いだ。生前戯れに十人同時に別の内容の話をさせたが、すべて聞き取れたしな」

「……」

神子の生前の話を聞き流しつつ、ギンコは考えていた。ごく最近聞こえるようになった蟲たちの声。ギンコはそれがとある蟲によってもたらされる症状なのではないかと疑い始めた。

口を閉じ、思考を巡らせるギンコの様子を見て、神子は確信する。

「貴殿のその様子を見るに、やはりこの症状も蟲によるものだったか」

「……かも知れねえな」

「かも、か。他に断定に必要な情報は？」

「……額に角のようなものは生えてないか。皮膚が盛り上がったよう
な」

ギンコにそう言われ、神子は少し躊躇うような素振りを見せたが、自分から促したということもあり、額を覆う前髪を持ち上げてしゃがみこみ、ギンコの目の前に晒した。

「……あまり見られたいものではなかったが」

「……そうか。なら、もいい」

ギンコが言うように、神子の額には角のような皮膚の盛り上がり

あった。いつかギンコが見たことがあるものよりも少し小さかったが、それはとある蟲が体に寄生しているために表れるものと相違なかった。

ギンコの言葉に合わせて前髪を整え、神子はギンコの次なる言葉を促した。

「それで。この蟲はどういうものなのだ」

「お前さんに寄生している蟲は、阿、と言う」

「阿……阿吽、の阿か？」

「そうだ。この蟲は宿主の静寂を食う蟲だ。寄生されると見境なく音を拾うようになる。あらゆる音……つまり蟲の声などもな」

それらが聞こえるようになったのはそのせいだろう、とギンコは言った。

「しかし驚いた。お前さん、相当な音が聞こえてるんじゃないのか。大丈夫なのか」

ギンコの中にある知識では、通常、阿に寄生された人はとめどなく頭に流れ込んでくる音の洪水に精神をすり減らし、衰弱する。そして一年後にはそのまま死んでしまう。音に押し殺されるのだ。

だが目の前の神子に衰弱したような様子は見られない。衰弱するどころか、蟲たちの声を聞き分けてすらいる。仙人とはつくづく超人的な存在だと、ギンコは思い知らされた。

ギンコの心配を軽く受け流し、神子は答える。

「音は聞こえるが、不快というわけでもない。蟲たちのつぶやきは一つ一つが微小で、素朴な鈴の音のようなもの。人の欲にまみれた声などよりはよっぽど聴き心地がいい」

「……じゃあ治すつもりはないのか」

「ないな。この蟲は私の中で飼いつづける。そうすれば他の蟲に対する情報も得られるからな」

ギンコに問われた神子は早々に断定した。

額が不自然に盛り上がる症状を、神子が不思議に思わないわけはない。自分も何かしら蟲の影響を受けているのだろうとわかつてはいたはずだ。だが彼女はそれを語らず、気にせず、そうあるものとして

受け入れた。実益も兼ねてはいるだろうが、その決断はやはり常軌を逸している。

また解決しなければならぬ問題が出てきたのだろうか、とギンコが思案すると、やはりそれを感じ取ったのか、神子の言葉が先回りしてくる。

「私の体のことはどうでもいいのだ、蟲師殿。貴殿が注力すべきは骸草の対処と、あの沼の浄化についてだろうか？ 大事の前の小事。余計な心配をしていては、目的を見失うぞ。手段を選んでいるうちはなおさらだ」

「……」

「貴殿の要求はこうだ。『骸草の新しい安全な治療法を考えてやるから、沼をどうにかするのを見逃せ』と。そして我々は、危険な副作用が解消されるなら協力してもいいだろうと言った。貴殿にそれ以上の働きは求めていないし、求めようとも思わない。我々はただ、互いの目的のために共同歩調をとっているに過ぎないのだ」

あくまでこちらが利用し、安全を保証する間柄。それを強調するよ
うに、神子はギンコに釘を刺す。

余計なことに首を突っ込むな、という露骨な態度は、ギンコの性質と仙人の思想がどうしても相容れないことをわかった上での忠告だった。

「……そう思うなら、ちよいとお喋りが過ぎたんじやないのか」

「私は貴殿に隠し事をするつもりはない。最初に言った通り、私の話を聞きにきた貴殿に、包み隠さず全てを話す心算だ。それに……私は別に、どちらでも構わない」

ギンコに知られようと知られまいと、関係ない。話を聞いたギンコが何をしようとしまいと、関係ない。何かをしようとした結果、ギンコの命がどうなろうと、関係ない。つまりはそういうことだった。

骸草の問題も、腐酒の沼も、自身に寄生する蟲のことも、神子のなかではすでに解決した問題なのだ。ギンコが筋を通し、協力的なら問題なし。しかし足並みを乱して過去の問題をほじくり返し、無用な混乱を招こうと言うのならその時は、どうなるかわからない。神子は暗

に、自分を曲げることはない、そう言っていた。

神子の表情に寒々とした威圧感が宿る。それは彼女なりの優しさなのかもしれない、とギンコは思った。

「……貴殿が心を砕いても、いいことはありません。聡明な貴殿ならば、この意味がわかるでしょう？ さっさと用件を済ませて、旅に戻りなさい」

「……そうした方がよさそうだ」

ギンコは立ち上がり、口調に丁寧さが戻った神子に背を向ける。諭すような言葉をかけた神子の真意はどこにあるのか。今はまだ、ギンコにも計り知れない。

「酒は美味かった。ご馳走さま」

「それは何より」

「……最後に聞いてもいいか」

「なんででしょうか」

ギンコは少しだけ振り返り、神子に聞いた。

「仙人つてのは、なんなんだ？」

神子は答えた。

「……全ては己のために。道を極めるためなら、何をしても構わない。そんな欲深い、利己的な人間ですよ」

淀みない、真剣な表情が印象的な答えだった。

第八章 ふきだまる沼 陸

ギンコが神霊廟に身を寄せて一夜明けた今日。昨日とは打って変わって快晴となった山の天気を眺め、ギンコは細く息を吐いた。気温だけは冬の様相そのまま、白く広がる息が前を行く三人の後頭部に届こうかというところで霧散した。

今日は神子の案内で、ギンコは未だ骸草に寄生されている仙人のもとに向かおうとしていた。新たな治療法を見つけるため、症状を訴える患者を直接診る必要があると感じたためだ。

神霊廟の門は昨日見た大岩のある場所に通じていた。患者のもとに向かう前に、腐酒の沼に寄り、治療に使う腐酒を手に入れるのだと、神子は言う。

「今日向かう患者はもうかなり症状が進んでいます。決断の時は迫っているのです。診察ついでに意志を確認し、望むなら治療を行います。いいですね?」

道中、ギンコの前を歩く神子は声だけでそう確認した。ギンコも無言でこれに応じる。昨日の夜に比べれば丁寧になった口調だが、最初に聞いた時よりもどこか冷たい印象を受けた。

治療を止めたい気持ちは山々だが、未だ具体的な治療法を提示することができていないギンコに口を挟む余地はない。放っておけば骸草は確実に宿主の命を奪う。神子の確認も、ギンコの意思を尊重するものではなく、協力関係である以上、筋を通したに過ぎない。

ややあつて、件の沼に辿り着く。赤黒い泥が渾々こんこんと湧き出している地獄の釜のようなそれを前に、ギンコは改めて事態の深刻さを受け入れた。

腐酒には毒性がある。それは動物に対してのみのものであるはずで、通常地表に湧き出ただけで害になることはまずない。だが今回の場合は違う。それは腐酒の量がそうさせるのか、周囲の自然を侵食してしまっている。木々は立ち枯れ、雪の下に隠れている土もおそらく腐れていることだろう。明らかに異常事態だった。

「……何度見てもひどいな。これは」

「そう思うなら早急に事を成すべきです。わかっているとは思いますが」

現状、骸草の治療には腐酒が必要不可欠である。だからこそ、この沼を浄化して元ある状態に戻そうというギンコの主張を、神子は受け入れられずに、事態は膠着こうちやくしている。

神子の含みのある言葉を受けて、ギンコはその横顔を盗み見た。言われなくてもわかっている。そう言いたかったが、言えなかった。それはギンコが胸に秘めている、とある治療法への心当たりが原因だった。そして神子も、その心の内を見抜いている。今はまだ、誰も言葉に出せないでいた。

そうしてギンコと神子が牽制けんせいしている間に、屠自古が腐酒を汲み上げていた。三人の中で唯一の亡霊であり、明確な肉体を持たない彼女が一番腐酒の毒性を受ける可能性が低いため、腐酒の取り扱い扱いは彼女が担当してようだ。

「では行きましようか」

甘い果実酒のような香りの中に饅すえた匂いがする泥を抱え、一行は患者のもとへ向かった。

患者のもとには早く着いた。ギンコが初めに見つけた老人の家と、ほとんど同じ造りをした山小屋のような家。仙人には静かに研鑽けんざんに励む空間があればいいと神子は言っていたが、ここらの仙人もその言葉通りのようだった。

家の玄関戸に布都が近づき、来訪を知らせる音を鳴らす。

「家主よ。仙人、豊聡耳神子とよさとみみみこ様が貴様の奇病を治療しに参った。入るぞ」

短く来訪の理由だけを告げ、布都は戸を開けた。立て付けの悪い引き戸を思い切り引いたせいかわ、鴨居から戸が外れ、布都の方へと雪崩かかってきた。押しつぶされるようなことはないが、驚き、もたもたしている布都を横目に、神子と屠自古は家の中へ入っていく。当然のように無視された布都は、がたがたと戸をはめ直し、慌てて二人の後を追った。その一部始終を見ていたギンコも、そんなものかと今見ていたものを忘れ、後に続いた。

「おお……豊聡耳様。よくお越しくございました」

家の男はやはり老人で、ギンコが会った老人よりも長く髭を蓄えており、かなり痩せているようだった。老人は神子の姿を見ると、布団から身を起こし、下半身を引きずるような動作でなんとか布団から出ようとしていた。

土間に立ったままの神子が手を向けてその動きを制した。

「無理をするな。もうほとんど足が動かんのだろう？ そのままで良い」

「面目無い……それで、今日はどのようなご用件で」

「そろそろ答えを聞こうかと思つてな。貴殿も、もう自分に残された時間が少ないことは承知のはず。今が決断の時だ」

「……」

神子の淀みない言葉に自分の運命を見たのか、老人は口をつぐんだ。だがその決断に時間はいらなかったらしく、弱々しくもはっきりと、自分の選択を口にした。

「……治療を受けます。どうかこの病を払っていただきたい」

「承った。だがその前に一つ、貴殿に頼みがある」

頼み、ですかと老人が疑問符を浮かべると、神子は半歩身を引いて、後ろにいたギンコを老人に紹介した。

「この男はギンコという。旅の医者でな。後学のためにこの病を調べたいと言うんだ。どうか協力してやってほしい」

「はあ……それはまあ、構いませんが」

神子はギンコの素性を隠すように紹介した。そのことにギンコも口を挟むつもりはない。老人は今、自分の片足を失う覚悟を決めたのだ。その決断に水を差すような希望的観測をチラつかせるのは残酷なことだと、ギンコも理解していた。

腐酒を使った治療には副作用がある。骸草を溶かすことはできるが、代償として片足の膝から下も、一緒に失われてしまうのだ。老人もそれを承知で治療を受け入れた。ならばギンコの素性を正直に伝えたところで何ができるわけでもない。角が立たないように、事実を隠すのは当然かもしれない。角が立たないように、事実を

「すいませんね、大変な時に。協力に、感謝します」

ギンコも神子の言葉に口裏を合わせ、先んじて老人へと近づいた。藁履わらぐつを脱いで板の間に入り、老人の傍かたわらに藁箱を下ろして座る。神子と屠自古は土間からの段差に腰掛けて、老人やギンコの方に背中を向けたままだが、布都だけはギンコの行動が気になるのか、二人に同調しながらもちらちらと背中越しに様子を伺っていた。

「では早速足を見せていただけますかな」

「はい……」

布団を剥ぎ、老人の足を見る。そこには確かに、浅黒い灰色の不気味な草が蔓を伸ばして、表皮を覆い尽くすようにまとわりついていた。その草に手を伸ばし、指先で軽く触れる。例えるならば、中身のない落花生のような、空虚な印象を受ける草だった。

「あまり触れると手に伝染うつりますぞ」

「ええ。ご心配どうも」

「……何か、わかりますかな」

草に目を走らせ、じっくりと見分するギンコの様子に、老人が尋ねる。不安を塗り固めたような表情をしていて気の毒に思ったが、ギンコはありのままの言葉を伝えた。

「……いえ、特には」

「そうですか……」

ギンコも見er限りでは骸草の効果的な除去法を思いつきはしなかった。骸草は文献にはない成長を見せてはいたが、それこそ死体に寄生した骸草としては、いたって正常な働きをしていた。

伸びた草は膝下まで。それより上にはまだ到達していないようだった。

「草はいつ頃生え出したので？」

「え？ ええと……確か雪が降る前、晩秋から初冬にかけての頃かと」
「やはりその時期ですか。流行り出したのは」

「ええ。ですが誰から、というわけでもなく、病はほぼ同時期に発病したようでした……流行りだす、というのはどうにも得心がいかないことも」

「同時期に……」

それも妙な話だとギンコは思った。本来、骸草が死体を分解するのはそう長くかからない。三、四日から長くて七日もあれば大人一人分の死体を全て泥状に分解する。草が芽吹いたのが晩秋というなら優ふたつきに二月は過ぎていてる。そして芽吹きそのものはほぼ同時期に起こっているのだから、その中で全身を侵され死んでしまった者と、こうして生きながらえている者が現れるのは不自然だった。

やはり骸草の成長を促している理由があり、単純に骸草が寄生しているわけではないのだろう。そこに光明がありそうな気がした。

「普段は何をしているのか、教えていただけますか」

「普段は……朝に真言しんごんを唱え、昼は鍊丹れんたんに努め、夜はまた真言を唱える……と修行に明け暮れておりましたが」

「今は？」

聞き返された老人は目を伏せ、自分の足を情けなさそうにさすつた。

「……この足では鍊丹を行おうにも、材料を取りに行くことも炉の前に立つこともできませんのでな。内気功を整え、ひたすら真言を繰り返しております」

「内丹術ないたんじゆつだな。熱心なことだ」

「なんだお前さん。いきなり」

いつの間にかギンコの隣には布都がいた。ギンコが老人に話を聞いている間に移動していたのだろう。ちよこんと正座しながら腕を組み、なにやら納得したようにうんうんと頷いている。

「いやなに。道教の修行や仙術の鍛鍊に関してはギンコも疎いだろうからと、ありがたくも我が解説われしてやろうかと思ってな」

「そりやどうも。で、内丹術ってのは」

にこやかに語りかけてくる彼女はいつも通り尊大な口調で、どうにも憎めないのも相変わらずだった。ギンコに問われた布都は得意気に話し始める。

「うむ。内丹術とは鍊丹術などの外丹術がいたんじゆつと対をなす鍛鍊法でな。外で金丹を鍊り上げるのではなく、呼吸を知り、気を整え、己がうちに

生じる丹を錬り、金丹を生み出すというものなのだ。高度な仙術であるから、誰でも使えるわけではないぞ」

「おい、解説ってんならこつちがわかる言葉で説明してくれ。全然わからんぞ」

「なんだと。蒙昧な奴め」

全くしようがない奴だと言わんばかりにため息をつく布都に少し腹を立てたギンコは、布都の頭の上に乗っている烏帽子を掴んで上に引っ張った。当然落ちないようと顎の下に紐を通して結ばれているそれは、持ち上げられることで彼女の顔の肉も上に締め付けながら引き上げることになる。

なにをする！ と抗議する布都の手を躲し、手を引っ込めると宙に固定されていた烏帽子が重力を思い出し、布都の脳天を直撃した。

「丹、とはこの場合霊薬の元になるもので、金丹とは長寿の霊薬のことだ。それを体の内と外、どちらで錬るのかというところで鍛錬の方法が変わる。その老人は病に冒される前は体の外で、病に伏せてからは体の内、つまり内気を丹として錬り上げ金丹を生み出していたということだ。さらに言えば、錬丹は仙人の修行に欠かせない、体を維持するための重要な修行の一つだ。これを怠れば限界を超えている体がちまちま崩れていく。故に完全な不老不死を得た仙人でもない限り、錬丹を毎日行なっている……と、こんなところでいかがか、医師よ」

「わかりやすいな。助かるぞ」
「さすが太子様！」

布都の体たらくを見かねたのか、神子が口を挟んできた。袖なしの外套を羽織った背中から声が聞こえる。布都はと言えば、ギンコにいじられた烏帽子の位置を正しながら、従者らしく主人のわかりやすい解説に手放して称賛の言葉を送っていた。

どうやら寿命に負けて朽ちゆく体をつなぎとめる錬丹術とやらを行なっていることが、骸草の侵攻を食い止めているようだった。おそらく、それをしていないかで症状に差が見られるのだらう。

「太子様よ。早くに死にしまった人らは、錬丹術つてのをちやんとで

きていたのかい」

「……なるほど。いいや、ほとんどが足を悪くしたことで丹を錬ることが出来なくなった者たちだ。逆を言えば、この老人のように内気でも丹を錬ることが出来る御仁だけが、治療を拒みながらも今を生きている」

ギンコの言わんとしていることが理解できた神子は、それを示すように補足を加えた。そしてその言葉を聞いたギンコは治療法に対する確信を強めた。

やはり骸草は生き物には取り付いても成長せず、自身の本分を忘れないようだ。なればこそ、ギンコが実行をためらっている治療が効果的であることが証明されたようなものだった。

「……ありがとう。もう結構だ」

ギンコは立ち上がり、老人に背を向ける。無表情で寒々しくはあるものの、ギンコの顔には明らかに憂いが見て取れる。土間と板の間の境界に座り込み、藁履を履いていると、後ろから声がかけられた。

「治療は見なくても良いのか、医師よ」

「ああ」

神子にかけられた言葉に短く返事をし、ギンコは家の玄関戸に手をかけた。

「少し外を歩いてくる。一人にしてくれ」

「そうか。我々はこの者の治療が終われば廟に戻るが」

「……」

「……日の入りに沼まで来なさい。迎えを置いておく」

「すまん」

神子の気遣いを背中で受け、ギンコは家の外に出た。

仙人の家から出たギンコは気分を変えるために近くの山中を散歩していた。輝く太陽が生き物の気配少ない雪原に反射して、文字通り銀世界が広がっている。まばらに常緑の木々も突き立つが、彼らも足並み揃えて雪化粧に身を任せており、清涼な調和がなされていた。

そんな爽やかな景色とは裏腹に、ギンコの心は曇り空だった。骸草に寄生された仙人を直接診れば、何か新しい発見があるかもと期待していたが、結果は変わらず。逆に自分の想像通りの対処法が効果的であると確信するに至ってしまった。どうしたものかと、一人ため息をついた。

光酒こうきを使った治療。それがギンコが胸に秘めているものだった。

骸草は寿命を超越し、百数十年生きている仙人の体を死体だと認識している。ならば仙人の体に活力を取り戻し、生き物である事を認識し直させれば、薬が効くようになるかもしれない。曰く、仙人は錬丹術という方法で自分の体が朽ちることを防いでいるという。呼吸をはじめとする体内循環を意識して行う内丹術は、骸草に宿主が生きていると主張することにつながっているのだろう。故にこの治療はまず成功する、とギンコの中で確信があった。

だがそうすれば、光酒というモノの存在を仙人、豊聡耳神子に知られることになる。

寿命を超越した今も、道を極めるために不老不死を求めている輩に、生命の源と同義である光酒の存在が知れば、どんな事態が起きるか想像に難くない。不死を求めて光脈筋は荒らされ、命の垣根が崩れ、理ことわりが乱れることになるだろう。それだけは避けなければならぬ。

だからと言って他に方法があるわけでもなし。放っておけば仙人は死に、骸草への対応策である腐酒の沼の浄化も叶わない。どうにかならないかと気を揉んでも事態は好転せず、ギンコはやりきれない思いを抱えながら放浪する他なかった。

しばらくそうして当てもなく山道を歩き、雪に足跡を残していると、誰かが誰かを呼ぶ声が聞こえた。

「あ、おーい人間さーん！」

「あ？」

思わず声の聞こえた方を見ると、そこにはいつぞやの傘の付喪神、多々良小傘たたらこがさがぶんぶん大きく手を振って木の近くに立っていた。水色の装束に大きな茄子色の傘。少し遠くからでもわかりやすい影

像に、ギンコも手を上げて応えた。

それを見て小傘が駆け寄ってくる。小さい体でずぼずぼと元気よく雪を踏み抜き、ギンコのそばまで来た。

「よう。どうしたい、またこんなところで」

「えへへ。ギンコさんを探してたんだよ？ もういないかもって思ってたけど、ちゃんと見つかってよかった」

「俺を？ なんか用かい」

「用があるのは儂じゃ」

小傘に続いて木陰から顔を出したのは洋装に身を包んだ女性だった。短い栗色の髪に、顔には丸眼鏡をかけ、手には大きく酒と書かれた徳利、腰には上綴じの帳面らしき紙束がぶら下がっている。そしてなんと言っても特徴的なのが、腰の少し下あたりから伸び、女性の背後で存在感を放っている大きな尻尾だった。茶色と焦げ茶のまだら模様のそれは時折左右に揺れ、作り物ではないことをギンコに主張している。そしてよく見れば頭からは獣の耳らしきものも生えていた。頭頂部に乗っている青々しい一枚の葉っぱはなんなのかわからないが、とにかく彼女も、人間ではないと言える容姿をしていた。

その女性はさくさくと地面にほとんど足跡を残さずにギンコへと歩み寄り、眼鏡のつるに手を添えてギンコの体をじろじろと見始めた。

「ほうほう。お主が蟲師と。何ぞ奇天烈な見た目しておるの」

「そういうあんたも人には見えねえな。なんだその尻尾」

「ぬ？ そりやまあ、儂は化け狸じゃし？ 尻尾があるのも当然じゃろ？」

背中を向け、ことさら大きく尻尾を波打たせ、その妖怪はギンコに向き直った。

「なるほど。それで、その化け狸さんが俺に何の用だい」

「いやなに。蟲師なら持つとるじゃろ、光酒。くれ」

ニカツと歯を見せて臆面もなく手を出してきた妖怪に面食らったギンコだが、いつぞや光酒を鬼に要求されたことを思い出し、なるほどそういう輩かと納得した。

もらえて当然のように上機嫌に笑っている妖怪を前に、しかし今は手持ちの光酒を分けるわけにはいかず、ギンコはやんわりと断った。

「悪いが今は手持ちがない。日を改めてもらえんか」

「嘘言っちゃいかんぞ若いの。儂の鼻は誤魔化されん。お主は持つとる。間違いないわ」

ギンコの嘘も呆気なく見破られ、妖怪は再度要求を突きつける。穏やかな態度をしているが、その態度がいつまで続くとも限らない。いつかの鬼は頼んでいるうちに渡せと威圧までしてきたのだ。この手の妖怪たちはその気になればギンコの意味など関係なく光酒を奪っていくだろう。

やっかいなことになった、とギンコは筋違いとは思いつつも、小傘を恨まずにはいられなかった。光酒を奪われてはこれからの治療にも差し支える。ここはどうかにかこの妖怪に引き下がってもらおう他なかった。

「……だめだ。手持ちの光酒はやれん。これから必要になるかもしれないのだ。どうか聞き分けてくれ」

「むむ、どうしてもか?」

「どうしてもだ」

丸眼鏡の奥にある瞳が険しくなる。襲われるか、と身構えたギンコだったが、狸妖怪は意外にもため息をついて、しゃがみこんだ。

「そうかあ……ダメか」

「ああつ、元気出してマミゾウさん」

「ぬうくん……残念じゃのお」

心底残念そうなつぶやきを漏らしながら、狸妖怪は尻尾をしばませた。その側に小傘が寄り添い、ちよつとだけでも、と言うような目で見上げてくるが、ギンコも心を鬼にして気丈にならねばならなかった。

「そんな目してもやれんもんはやれん。期待させちまつてたんなら悪いけどな」

「じゃ、じゃあ! いつなら良い!? どうすれば光酒をくれるんじや!?!」

「うおっ」

意気消沈していたかと思えばすぐに元気を取り戻し、狸妖怪はギンコに食ってかかった。光酒飲みたいんじゃないかと駄々をこねるのが鬱陶しくもあつたが、悪い妖怪ではなさそうだと、ギンコは思った。

「頼むよう……後生じゃあ……」

「ただだけ飲みたいんだよ。ダメだ」

「ワタリの連中も見なくなって久しく、やっと見つけた蟲師には袖にされ……絶望じゃ。よし、死のう」

「ええっ!？」

「待て待て」

「そうか金か。金が欲しいのか」

金ならあるぞと、狸妖怪はどこからともなく手のひらいっぱい砂金の粒を取り出してみせた。淀んだ目をした悪い顔。隣で見えた小傘はたいそう驚いていたし、常人には目も眩むような黄金であるが、あいにくギンコには通じない手だった。

「いらん。だからやれんと……」

「けっ！ なんじゃケチくさいのおー!」

ギンコが再度断れば、狸妖怪は途端に悪態をつき、手のひらの黄金を雪の上に放り投げた。勿体無いことするな、とギンコが思っている、雪の上に散らばった砂金の粒はみるみる内に輝きを失い、細かな砂利に変化してしまった。

「おい、金が石になったぞ」

「元から石じゃ」

「清々しいくらいに堂々としやがって。騙しやがったな」

「取引しとらんのじゃからノーカンじゃろ」

悪びれる様子もなく、狸妖怪は砂利を拾ってもう一度それを金に変えてみせた。どこからどう見ても砂金の粒である。ギンコはその手際に驚き、目を丸くした。

「さすが化け狸、ってか」

「お、儂の能力に興味があるか。そうじゃろ。人を騙すならお手の物。化かし惑わすは狸の本懐じゃからの。詐欺の手伝いなら完璧じゃぞ。

どうじゃー口」

「乗らねえよ……だが」

狸妖怪の能力を見たギンコは一つの妙案を思いついた。それが実行できるかどうか、ギンコに素っ気なくされてぶーたれている目の前の狸妖怪に確認を取る。

「お前さん、別の人に化けることはできるか」

「お？ なんじゃ急に」

「答えてくれ。返答次第なら、協力してもらおう。その見返りに光酒を分けると約束してもいい」

「本当か!？」

喜色満面と言った具合に狸妖怪が顔を綻ばせる。

ギンコは思っていた。この妖怪の協力があれば、上手くことを運べるかもしれない。治療のために光酒を使っても、穩便にすませられるかもしれない。さっきまで厄介この上ないと思っていたが、これは運が向いてきたのではと、今は思っていた。

「俺は蟲師のギンコという。お前さんの名は？」

「俺はニツ岩ふたついわマミゾウ。して、協力とは何を？」

「ああ。ちよいと、人を騙そうかと思ってるね。手伝ってくれるか」

「ほう……」

小傘が疑問符を浮かべる横で、何か通じ合ったように、二人は悪い笑顔で握手を交わした。

第八章 ふきだまる沼 漆

気温が下がる冬の夜は空気も乾燥し、より遠くの光が届くようになる。だからなのか、今日の月はいつも以上に大きく輝いているような気がした。

満月に向けて膨らみ始めた上弦の月が宵闇よいやみの先駆けを伴って西の空に顔を出す。鮮やかな橙色の夕焼けを退けるように広がる夜の領域からは、強く世界の声が響いてくる。それは最近になって聞こえ始めた微小なるモノたちの声。静寂を良しとする冬の御空みそらに鳴り響く、幾重いくえにも重なる鈴鳴りのような声の名前を、私は最近、とある男に教えられた。

「今宵けんせの現世は冷えますな、太子様」

月を見上げて黄昏たそがれる私を心配したのか、従者の布都が話しかけてくる。声ひとつ、表情ひとつで人の有り様を見定めることができるのは今はもう、昼間の私だけだ。夜は月明かりを受けて強くなる蟲の声に意識を割かれ、側で囁く従者の声を聞き取るのが精一杯。聞くことに関して不自由することになるうとは。少し前の私では想像もつかなかったことだろう。

隣を見れば従者の布都が立っている。未だ来ない待ち人に対して苛立ちにも似た感情を持って余しているのだろうか。少し険しい表情を作っているのは、肌を刺すような寒さのせいではないと思えた。

「まったく。日の入りには来いと言い含めたというのに、何をしておるのだギンコは」

「まだ夕日の名残もある時間だぞ。気が早すぎだ」

「知らん。太子様がお待ちなのだから時間を前倒すくらいの気遣いを見せずしてなんとする」

「それこそ向こうは知りもしない状況だろうに。お前はいちいち騒がしいんだ」

布都と屠自古の会話はいつも耳に心地よく響いてくる。

よく知る者たちの声が聞こえてくるのはなんとも心が落ち着く。世界を覆うような声の層にあつてなお、私に安らぎを届けてくれる。

私にとって声とは、多くの情報を持つ決して無視できない存在だ。人の往来する街道で物売りの賑やかしや客引きを、騒がしいとか、やかましいとか、そう思いながら聞き流せるのはとても幸せなことだと思う。聞くことが仕事でもあった私はそのあたり、強く思わずにはいられない。

耳がよすぎるとろくなことがない。誰彼構わず欲望を拾い集め、聞こえてくる言葉の裏が透けてくる。誰もが持つ人間の底知れぬ部分だ、私ならよく理解できてしまうのだ。

一人の男に愛を捧げる女がいるとしよう。女は何故男を愛するのか。男の容姿が好みだから？ その知性に惹かれたがゆえ？ 貴族だから？ 時に命を救われ、優しくしてもらったから？ あるいは、それら数々の要因が複雑に絡み合って、当人も気づかないうちに恋をしていったから？

本来、愛情の理由など求める方がおかしい。それは恐れ多く浅ましい行為であり、さらに答えのない愚問でもある。だが私にはその答えがわかってしまう。絡み合った因果を紐解いて、欲の理由を暴いてしまう。

多くの欲を聞いた。欲のために、金を求める者を聞いた。欲のために、権力を振りかざす者を聞いた。欲のために、人を愛した者を聞いた。欲のために、人を殺した者を聞いた。

欲深く、浅ましい人間の正体。私はそれを知っていた。

二人の従者にしても、それは同じこと。欲があり、それを作る要因があり、感情がある。ちゃんと人間らしい、底知れぬものを持っている。そして私はそれらを全て理解できてしまう。彼女たちの欲が見え透いてしまう。

だがこの二人に対してそれらは気にならない。普段なら私の心を占めて覆ってしまう雑音のごとき情報を、気にせずにいられる理由があった。

「まあ二人ともそう騒がずに。月でも眺めて落ち着きなさい」

やいのやいのと喧しい従者二人をなだめる。毎度よく飽きないなと思える小競り合いをみて苦笑した。

時が過ぎるのを静かに待つ。月が昇り、日が沈み、夜が来る。茜の名残がすっかり消え去る頃に、蟲たちの声が一層強くなった。

音の密度が上がり、思わず頭を抱えた。少しフラついた私の体を、布都が支えてくれる。ありがとう、と言ったつもりだったが、ちゃんと言えたのだろうか。よくわからなかった。

自身が管理する仙界においては、蟲たちの侵入をある程度抑制できる。だが現世ではそうもいかない。遠慮なく私の中に入り込んでくる情報の波に、圧倒されそうになる。蟲師の前では格好つけてみたが、私はこの声にそこまで慣れていてもなかった。

だが倒れるわけにはいかない。この声を失えば我々は蟲に対する情報源を失ってしまう。そうなれば一体どうやって骸草のような恐ろしい性質のモノに対抗すればいいのか。

私は、どうしてもこの声を失うわけにはいかなかった。情報を得て、実践し、確立しなければならぬ。いつか我が身に降りかかるやもしれない災いを見越して、準備しなければならぬ。

そうでなければ、示せないものがあると思った。

「来ましたね……」

木々の隙間に伸びる山道の奥から、ゆらりと影が近づいてくる。俄かに蟲たちがざわめいて、その男が近づいてくることを知らせてくれた。

じわり、と水面に墨をのぼす様に、男の気配は強まっていく。周りに伴う大きな音が、男を中心に解けるように拡散していった。

得体の知れぬ妙な男。蟲師と名乗る、私には無い知識を有する者。調和を良しとし、人と蟲との間を取り持つ識者。

「ん、待たせたか」

「遅いぞギンコ。太子様を寒空の下に待たせるとは何様だ」

「そりゃ悪かったな」

月光で染め上げたような銀を伴う白髪に、深く、碧い目玉。布都に言われ、とりあえずといったように謝罪を述べる。昨日の今日では見慣れない煙草をくわえ、男は煙をふかしていた。

「おい、太子様の前だ。煙草はやめろ」

「そう言われてもな。俺にとっては必要なもんでもあるんだが……」
ふわりとやってきて頭上を漂う屠自古に、男は喫煙を窘められた。
険しい顔をする屠自古に気圧されたのか、しようがないかと地面に煙草を落とそうとした手を、私は止めた。

どういうわけか男の持つ煙草の煙に巻かれていると、蟲たちの声が弱まる。口には出さないが、その煙草は私にとっても都合が良いものだった。

「それで、考え事は終わりましたか？」

少し軽くなった頭で、私は男に聞いた。男はひとつ煙を吐き出してから、すつきりした表情で答えた。

「まあな……ついでに答えも出してきた」

「ほう……それは興味深い」

して、答えとは？ と私が先を促す。その内容は、簡単に予想がついた。

「骸草への新たな対処法を教える。日をまたぐ意味もないから、これから患者のところに行きたい。構わんか」

煙の奥から、自信に満ちた声が聞こえてきた。

神子に案内され、ギンコは患者のもとにやってきた。見慣れた質素な山小屋に、これまた老年の男性が一人住んでいる。病の治療に来たというギンコたちを玄関から出迎えた。杖をついてやつとではあるようだが、まだ歩けるあたり、昼間訪れた別の仙人よりも症状は軽いようだった。

神子はギンコの素性をかいつまんで仙人に話す。皺が刻まれ、たるんだ瞼の奥から鋭く値踏みをするような視線が何度かギンコに向けられたが、ギンコはその視線をいなし、背負っていた薬箱を地面に置いて黙々と治療の準備を進めた。

手元を興味深く布都が覗き込んでくる。ギンコが何をするのか気になっていろいろだろう。そう言えば蟲に関する話も、三人の中で一番興味と恐れを持っていたのはこいつだったなとギンコは思った。

「では蟲師殿。あとはお任せする」

「ああ」

神子に声をかけられた時、ちょうどギンコの準備も終わった。ギンコは栓をした徳利と糊状の生薬が入ったすり鉢を両手に持ち、囲炉裏を背に、居間と土間の段差に座り込む仙人へと近づいた。

足元に跪き、何度も見た骸草の生えた足を軽く見分する。闇の中、火元の明かりにぼんやりと照らし出されて浮かび上がるそれらは、こときさら不気味に見えた。

しかしずれの仙人も症状に差はないように見えた。ならば問題はないと、ギンコはすり鉢を地面に置き、懐から小さな緑の杯を取り出した。

「ほう……」

その場にいた誰が漏らしたのか、感嘆のため息が聞こえてくる。ギンコが取り出した深く、濃い森の緑を抽出し、練り上げたような曇りのない杯はたしかに美しく、見るものを惹きつける妖しい魅力を持っている。

だが、今それは重要なことではない。真に重要なのはその杯に注がれる徳利の中身だ。杯を指に挟み、ギンコは器用に徳利の栓を抜いた。

次の瞬間、今度は真に、その場にいたギンコ以外の全員が息を飲んだ。

とぶとぶと、徳利が空気を飲み込む音が小さく聞こえてくる。杯に注がれるのはこの世のものとは思えない光る酒。淡い月の光にも似た、神秘の光を湛えるモノ。

光酒と呼ばれる、この世の闇の底の底を流れる、生命の源、あるいは生命そのものが、ギンコの持つ緑の杯に満たされた。

「これは……なんじゃ?」

「酒ですよ。あなたにとっては、薬になるもんです。飲んでください」

ギンコが差し出したそれに、仙人の目が釘付けになる。しわがれた両手で杯を受け取り、しばし光る酒に見惚れ、吸い寄せられるようにそれを口に運んだ。

「はああ……なんという」

仙人の口から恍惚こうこつのため息が漏れる。無理もない。偽りなく、今口にしたものはこの世で最も美味しいものだ。感動しないわけがない。

だが感想をいちいち聞いている暇はない。ギンコは仙人の足を見た。するとわずかだが、骸草が風に揺れるようにその身をくねらせていた。仙人の体に光酒が流し込まれたことよって、骸草も自身の誤解を認めたのだろう。今なら薬が効くかもしれない。ギンコはすり鉢すりばちを取り、筆を使って骸草に薬を塗り込んだ。

固唾かたずを飲んで成り行きを見守る。するとしばらくもしないうちにうねうねと骸草がのたうち始め、皮膚から突き出た根本から、ぽろりぽろりと椿つばきが首を落とすように自然と離れ始めた。

「おお……」

どうやらうまくいったようだ。喜びの声を上げる仙人を見て、ギンコも胸をなでおろす。あとは体に生えた骸草全体に薬を塗り込み、体から離れるのを待つのみ。治療の後には、自分の足で立ち上がり、治療を施したギンコへと、しきりに頭を下げる仙人の姿があった。

そんな様子を静かに眺めているのは神子。もうここに用はないと、ギンコと仙人から視線を切り、静かに家を出る。それに気がついたギンコもまた、静かにその背中を見つめていた。

ギンコが仙人の家から出ると、少し離れたところで神子が空を見上げていた。釣られてギンコが視線の先を追えば、そこには月が浮かんでいる。星々の光を覆い隠し、圧倒的な存在感を放つ夜の目。吸い寄せられるように、ギンコが神子に近づいていく。ざくざくと雪を踏みしめ、寒空の下で対峙する。

「驚きました。すっかり綺麗に治りましたね。副作用もなし。見事です」

「まあな。ちょっと反則みたいだが、利用法を誤らなければ問題ない」「あの光る酒ですか。興味深いですね。ぜひお話を聞かせてほしいものです」

神子と少し距離をとって、ギンコは立ち止まる。それと同時に、神子も月から視線をギンコへと移した。

「あの光る酒はなんですか?」

「あれは光酒こうきという。いつもは本当の闇の底を流れ、光る川を形成している。平たくいうなら生命の水。命そのものに最も近いモノだ」

「バカな! そんなものがこの世にあって良いのか!」

「……布都の言う通りです。そんなモノを、貴殿はどうやって手に入れたのですか」

「光脈筋のヌシに口利きできる知り合いがいてな。今回のように必要になることもあるから、ちよいと分けてもらっている。無論、人が欲望のままに取り扱っていい代物じゃないがね」

光酒の存在に対して、予想通りの反応をする面々を見て、ギンコも改めて気を引き締めた。

「……そうですか。では光酒が仙人の体を活性化させたことで骸草も自身の誤解を認め、最後には薬によって離れていったと。つまりはそう言うことですね」

「ご明察」

「そして貴殿がこの治療法を胸に秘めていた理由は、光酒が我々に悪用されるのではないかと危惧したから、ですか」

「そうだ」

「ではどうします? 貴殿の心配は現実のものとなりそうですが」

途端に神子の気配が膨張する。妖怪の持つ妖力や、蟲たちの気配とも違う、強い光を浴びせられているような感覚に、ギンコも一歩後ずさった。

「光酒を悪用するのか」

「悪かどうかは貴殿が決めるといい。ですがそれはこれからの蟲患への対処として大変有用な資源となることは確か。入手法も含め、現物と情報をいただきますよ」

「……嫌だと言ったら?」

「所持品の全てをあつた検めます。貴殿の意思など関係なく」

「まるで山賊だな」

「なんとでも。最初に申し上げたはず。仙人とは利己的な存在だと」

「そうかい。なら光酒はやれんな」

「仕方ありませんね……」

残念です、と神子が紫の袖なしの外套を翻し、気配を一層強く膨らませた時。空気を断ち切り、割って入るように、月下のもとから声が響いた。

「こんなに月が綺麗な夜だというのに。私の同盟者に無粋をはたらく輩はどこのだなたかしら？」

声の主はついさつきギンコたちがいた仙人の屋根の上に立ち、優雅な言葉遣いで眼下を見下ろしていた。

その姿と声を認識した瞬間に、神子の近くに控えていた布都と屠自古が身構える。二人にも感じられたのだろう。悠然と屋根の上に佇むその妖怪が放つ大きな妖気を。そして遮る物のないそこに、月光は惜しみなく降り注ぎ、その妖怪の姿を浮き彫りにする。

金色の髪をなびかせ、異国の修行僧のような、裾の広がった装束に身を包み、存在を印象付ける大きな日傘を差している。幻想郷に住まうものならば、誰しもがその存在を一度は耳にしたことがあるだろう。神子や布都、屠自古にとっても、それは変わらない。

「御機嫌よう、神霊廟の仙人様方。自己紹介は必要かしら」

「……驚きましたね。貴女がなぜここに？」

「虫の知らせ、とでも言いましょうか。私の大切な配下の身に危険が迫っているようでしたので、来ちゃいましたわ」

最大級の警戒心を向けられながら、八雲紫は不敵に笑った。

第八章 ふきだまる沼 捌

「ふむ、こんなもんかの」

異国風の修道服のような、特徴的な装束を翻し、八雲紫に扮した二ツ岩マミゾウが術の出来栄えを確かめる。体を振って手足や背中を一通り見回し、やがて納得がいったように自慢げに腰に手を当てて胸をはった。

「どうじゃ？ と感想を聞かれれば、その様子を見ていたギンコは見事というほかない。

ギンコの頼みを聞いてマミゾウが指を振ると、その全身を煙が覆い、煙が晴れた次の瞬間には変身が完了していたのだ。そうして現れた姿は、細かい所作や口調はさておき、見た目だけならかのスキマ妖怪に相違なかった。

ギンコと同じくそばで見えていた付喪神の小傘も驚き、おみそれしました、と二人は小さく拍手した。称賛の声を受けて、マミゾウもご満悦だった。

「してギンコよ。何故スキマ妖怪の姿が必要なんじゃ？ 化けておいてなんじゃが、此奴の名を騙るとなると儂もそれなりの覚悟を決めねばならんのじゃが……」

喜びを顔から消し、マミゾウは「八雲紫に化けてほしい」と頼んだギンコの目的を問うた。

ギンコが持つ光酒のためなら、多少の頼み事なら二つ返事で引き受けてやろうと意気込んでいたマミゾウだったが、幻想郷において絶大な影響力を持つ八雲紫の姿を騙るといふ悪事の片棒を担ぐとなれば、なおのこと気楽に構えていられるはずもない。

若干雲行きが怪しくなってきたギンコの頼み事が良心的なものであることを願いながら、マミゾウは伺い立てる。そんなマミゾウの心を知ってか知らずか、ギンコは気楽に答えた。

「心配いらんだろ。あいつも俺のことを散々利用してるんだ。名前の一つくらい借りたつてバチは当たらんさ」

「ぬ？ なにやら八雲と懇意にしているような口ぶりじゃが……」

「事実そうだからな。お前さんには、とにかく八雲のフリをしてもらいたい。前提として『蟲師ギンコと八雲紫は友人、または同盟の関係にある』ということにしてな」

「大胆な前提じゃのう。して、儂は八雲のフリをして、誰に合うんじゃ？」

「豊聡耳神子という仙人だが、知っているか？」

「なあー、あやつか。復活の折にぬえが騒いでおったからの。よう知つとるわ。何故奴を騙す？ 一筋縄ではいかんぞ」

「このままだと、お前さんも欲しがる光酒が悪用されるかもしれん。妙な真似はするなと牽制けんせいしなきゃならなくなった。こつちも幻想郷に来てしばらく。八雲の名前が、方々ほうほうで有効なのは知っている。どこまで通用するかはわからんが、打つ手としちや上々だろ」

「なんじゃと?! そりゃあ如何いかんともしがたい。絶対に阻止せんとの! ……じゃがうまくいくかどうか」

豊聡耳神子は仙人であり、それ以前に天賦の才を持った超人である。生前はその類稀なる才能で人々の信奉をあつめ、聖人とまで言われた存在だ。

多くの人を動かし、そうあるべくして人の上に立った人。なれば人を見る目に関して、彼女が非才であることもないだろう。当然のように人の内面を見透かしてきても不思議ではない。

人を化かすこと。月も輝く宵の口においては、自分の妖力も増大する。そこに自信がないわけでもないが、万事うまくいくとも思えなかった。マミゾウは腕を組んで、むむと唸った。

「失敗したらどうするんじゃ。嘘だと見破られたら？」

「勝算がないわけでもない。神子は今、蟲患いにかかっている。本人は平気な顔をしていたが、内心かなり辛いはずだ。本来、人一人を衰弱死させる音響を聞かされ続けているんだからな」

神子は現在、耳に阿、という蟲が寄生している。この蟲の影響で、彼女は最近、蟲たちの声を聞くようになったのだ。

だが、蟲たちの声は想像を絶する大音響となって世界を席卷している。ひとつひとつのつぶやきは小さくとも、数限りない蟲のつぶやき

が束となって、それはやがて大きな音声の層となる。

神子はその声を聞き分けることで、蟲に関する知識を得ている。その作業にどれほどの集中と体力を要するのか、常人のギンコには計り知れない。だがわずかでも確実に衰弱しているだろう。なんとか付け入る隙はありそうだと思っていた。

それに、とギンコは続ける。

「嘘だと思破られても、事実は変わらん。仙人の連中が光酒を求めれば、間違いなく幻想郷は荒れる。そうなることは八雲も望んじやない。八雲の怒りを買う結果になると伝えれば、連中も二の足を踏むだろう」

とにかくだ、とギンコはマミゾウの目を見て言った。

「連中が八雲に化けたお前さんに牽制されてくれればよし。嘘だとバレても警告で時間を稼げればよし、だ」

「ふむ。結構考えておるんじゃないやのう。よかろう、心得た。……それで、相手が私の姿を見ても動じず、さらに正体も見破られ、八雲の名前など知ったことではないと開き直ったらどうなさるんですの？」

ギンコの意味を汲んで、マミゾウは紫になりきるために口調を変えた。たおやかで上品な言葉遣いで、最後の確認をしてくる。全ての思惑が空振りに終わった時はどうするのか。ギンコは少し考えてから、その時は……と、マミゾウの肩に手を置いて、真剣な表情で答えた。

「逃げる。手持ちの光酒全部やるから、助けてくれ」

「……善処しますわ」

堂々と情けないことを言われて、紫は苦笑した。

そうしてギンコはマミゾウに協力を仰ぎ、神子たちを牽制しようと考えた。

高いところから雰囲気たつぷりに登場とは、少しやりすぎな感じも否めないが、存在感を出すには好都合だろう。傘は小傘の持っていた傘を使って化かしているのだろうか？ 打ち合わせ時より増えた小道具を見て、そんな予想を立てる。

なんにせよ、神子たちはマミゾウが化けた紫の姿を見て、一気に緊張した様子になった。これは効果があるかもしれない。貴重な機を逃さぬよう、マミゾウの演出に乗り、ギンコも口裏を合わせた。

「お前さんは本当どこにでも現れるな。まあ、今回は助かったが」
「いつも邪険にされていますものね。たまにはお役に立てて何よりですわ」

ふわりと重さの感じられない跳躍、というより空中を歩くような身軽さで、紫はギンコの隣に降り立った。傘で神子たちからは見えないうように少し目隠しをして、歯を見せて笑っている。本物は見せそうもない表情だった。

「おいギンコー！ 貴様……その化生けしやうとはどういうつながりだ!？」

「おのれ男……やはり信用ならん輩であったか!」

マミゾウを指し、その傍らに立つギンコに向けて、布都と屠自古が声を荒げる。その少し後ろから、神子が射抜くような視線を向けていた。

彼女らの反応を見るに、牽制は成功していると見て間違いないだろう。流石は幻想郷の管理人を名乗る大妖怪の名前である。マミゾウも神子たちの空気を感じ取ったのか、畳み掛けるように言葉を紡いでいく。

「声を荒げないでくださいな。品位が下がりますわよ」

「お前に品位など説かれとうないわ、妖怪！ 何をしに来た!」

「申し上げませんでした？ 私の大切な人を、あなた方のような山賊まがいの手から守るために参りましたの」

「た、大切な人だとお……!？」

妖艶な笑みを浮かべ、ギンコに身を寄せるマミゾウを見て、自分たちが山賊まがいだと罵られたこと以上に、布都が反応を見せる。何やら調子に乗ってあらぬ関係を誤解させそうなマミゾウの頭を小突き、引き剥がしてからギンコも同調した。

「そういうわけだ。事を荒立てても、いいことはないんじゃないかね、太子様」

「……貴殿の心変わりはこの後ろ盾があったが故、ですか」

そうだ、とギンコが言う。と悔しそうに、神子は歯噛みした。

ギンコの策は成功し、神子は顔を伏せ、膨らませていた気配を落ち着けた。事態をどう解釈し、どういう結論を出したのかはわからないが、とりあえず力づく、という選択肢は取らないことにしたのでろう。それを見た従者の二人も顔を見合わせ、構えを解いた。その様子に、ギンコも内心胸を撫で下ろした。

両者の間にわずかに沈黙が流れ、神子が顔を上げて、口を開いた。「……ですが、光酒は諦められません」

一歩歩み出て、神子が凜とした態度でギンコに向かい合う。その目には強い意志が宿り、ギンコもそれを感じ取ったようだった。

「……なぜだ」

「それがあれば、他の蟲患いにも対応できると見ました。試してみなければわかりませんが、錬丹術との組み合わせで、あらゆる蟲患いに対する万能薬のようなものを作り出せるかもしれません」

神子の口から語られた展望は、これからを見据えた大きなものだった。そしてその目は、いつか沼で見せた「我らに仇なす害虫は駆除する」と言った時の目と同じ、強い決意を秘めた目だった。

しかしギンコも譲らない。神子が言っていることは、蟲師として認められなかったからだ。

光酒とはこの世の底に流れる命の水だ。それを人の意のままに利用することは、本来許されることではなく、蟲師も例外ではない。

本当ならこんなものは、人知れず世を潤すため流れ、ただ、そうあるべくしてあるべきものなのだ。

「光酒を利用して薬を作るのはよせ。これは、人が資源として扱っていい代物じゃねえんだ」

「命の領分は人の手に余ると？ 愚かですね。人はそれら未開の智慧ちけいの図版を、実証によって拈ひげてきた。試しおそもせず、畏れのままに盲信を続け、歩みを止めて何になると言うのです？」

「人の手に余るに決まってるだろ。神にでもなったつもりか」

ギンコの目が細められ、鋭く神子を射抜く。しかし神子は引き下がらない。

「貴殿にはわかるまい。不老不死を達成した我々が、再び死に直面した衝撃。病魔も毒素も寿命も死神も捕食者も跳ね除けて、命の臨界に足を踏み入れたにもかかわらず、それを嘲笑うかのように溶かし、食らうモノが現れた。我々には彼らを退ける確実な方法が必要なので
す」

「……確かに、誰だって死ぬのは怖い。不老不死を求める気持ちも、わからないでもねえさ。だがそれは生きる道ではない。死を遠ざけたせいで、お前さんらは生きていても言えない状態になった。だから骸草に寄生されたんだろ。動いている屍体だと思われてな。自業自得だ」

だからこれは、理の裁定なのかもしれないとギンコは思った。生き物としての道理を歪め、自己を通し、生命流転の輪の外に居座り続けた仙人たちへの報いだ。

今まで先送りにしてきた問題のツケを支払う時が来たのだ。そう思っても、口には出さなかった。そんなものは、ギンコの妄想ではない。

悪事を働いた者は報いを受けて当然。そんな態度で説教などしたくもなかったし、するべきでもないと思った。

「貴殿の言い分も理解できません。我々は確かに、褒められた人生を選択しているとは言えないでしょう。しかし事ここに至り、我々は出会ってしまった。己の脅威と。そして、それから逃れる術を持つ者と」

神子はギンコを指差した。

「我々はもう後戻りできないのです。進むしかない。そうしなければそこで終わってしまう。そして貴殿だけが、我々の行く手を遮る壁を取り除く知恵を持っている。もはや貴殿の意思一つで、我々の明日が決まると言っても過言ではない。貴殿は我々を見殺しにするというのですか」

「なんでそうなる。俺はお前さんらを助けただろう。これからだってそうするつもりだ」

「そう思うなら光酒を譲ってください。それで我々は助かります」

「だから……その領域まで踏み込ませるつもりはないって言ってるだろうが」

「……解せませんね。なぜそこまで光酒を欲するのです?」

神子とギンコの会話が平行線を辿っていたからか、紫に扮するマミゾウが口を挟んできた。

「聞けば今回罹患したのは不完全な不老不死を実現した仙人ばかりではありませんか。尸解仙として肉体を捨て去った貴女たちなら、そもそも寄生される肉体もないのですから、そこまで骸草を恐れることもないのではなくて?」

マミゾウの言い分ももつともで、それはギンコも薄々考えていたことだった。

霊体である屠自古は言わずもがな、神子と布都に関しても、仙人となる際に肉体を捨てていることはギンコも知らされていた。人の体らしい見た目と機能を持っていても、彼女たちの肉体は魂の依り代となった物体が変化したものでしかない。そういう意味では、石が喋ったり動いたりしているのと大差はない。

無論そんなものに骸草は寄生しない。それは神子もよくわかっているだろう。彼女は蟲の声を聞く。自分たちの肉体に興味を示さない骸草の声を聞いているはずなのだ。

だとすれば、神子がこれほどまでに光酒を欲する理由はどこにあるのか。それは、ギンコにもわからないことであった。

「……骸草だけではありません。蟲は、骸草だけではないんですよ」

「? 他にも蟲患いになった方がいらつしやいますの?」

神子が光酒を求める理由。それは果てしなく広がる蟲という存在の規模と、見据えた未来にこそあった。

「いません。ええ、現時点ではいませんよ。ですが蟲は数限りなくこの世に湧き出て、広がっている。それらの全てが、いつ我々に牙を剥くとも限らない」

「だから万能薬を欲すると?」

「ええ。そうなってしまった時に、救いの手段を他人に委ねるのは下策です」

「……そんなに俺が信用ならんかね」

ギンコは静かに、手を伸ばすように呟いた。神子はすぐに返事しなかったが、その目が強く語っていた。

彼女は人の意を見抜く才がある。ギンコが嘘を言っていないことも、わかっている。助けると言えば、助けてくれるのだと知っている。「……信用するとか、しないとか、そういう問題ではないのです。これは」

その声を聞いてしまうだけで声を奪うモノ。影から脳に入り込んで際限なく記憶を食らうモノ。意識を連れ去り人を廃人にしてしまうモノ。……魂そのものを捕食してしまうモノ。そういうモノから大切なものを守るためには、剣を手取るしかない。

そうしなければ守れない。例えば、己の命よりも大切なものであるかもしれないそれを。

神子の背後で二人の従者が事の成り行きを見守っている。二人の表情は固く、一度は解いた構えをいつでもとれるように気を張っているように見えた。会話が平行線を抜けられないのなら、一度収めた矛を再び握ることもあるだろうと、わかっているようだった。

一人の主人と二人の従者。三者三様の在り方を見て、ギンコも考えた。

「……そうかい」

ギンコは頭を掻いてため息をついた。ここにきて、ようやく神子の思惑にたどり着く。

威圧的な態度も、いつかの夜に口にした真摯な忠告も、全てが彼女の本質だったのだ。そう言えば、隠し事するつもりはない、と堂々と言っていたか。

それでも明かせぬ胸中というのものもあるのだろう。つくづく不器用で、利己的な優しさを見せる。あるいは、それが彼女の仙人らしさなのかもしれない。

ギンコはゆっくりと神子に歩み寄る。そしておもむろに、懐から見覚えのある徳利を取り出した。何をするのかと警戒を見せる神子の目の前にそれを掲げ、押し付けるように渡す。

「…………え？」

一瞬何が起きたのかわからないという表情を見せる神子。自分の手元に収まったそれとギンコの顔を交互に見て、少し呆然としている。

ギンコは静かに、表情を作らずに言った。

「光酒はやる。ただし条件が二つある」

「ちよっ！」

ギンコの言葉に反応したのは変身していたマミゾウである。もう演技などどこかに行ってしまったのか、大股でギンコに詰め寄り、その肩に手をかけた。

「おいおい約束が違うじゃろ！ 儂の分は!?!」

「また春にな。光酒をやるとは言ったが、いつやるとは言ったつもりはない」

「はあ!?! なにをいけしやあしやあと！ 儂をこき使っておいて、報酬は冬が明けてからじゃと!?! 認められるか！ だいたいなんで此奴らに光酒を渡す？ 此奴らに光酒を渡さんために、儂に協力を求めたんじゃないのか!?!」

紫の姿のまま大口を開けて抗議をするマミゾウには少し申し訳なかったが、光酒を美味しい酒程度に考えている輩にも問題がある。ここは多少理不尽に思われても、ギンコは毅然とした態度を取ることにした。

ギンコの心変わりには神子の真意がはかれたためであった。

光酒を渡せない主張したのは際限なき欲望が理を乱し、歪める可能性があったから。神子が光酒を求める理由が、真に自分のためではないとわかったから、ギンコは光酒を譲る気になったのだ。もとより手持ちの分を譲ったところで光脈筋との関係を漏らさなければ大事にも至らないことは、ギンコにはわかっていた。

「そういう予定だったが、気が変わった」

「気が変わったで済むか!?!」

「落ち着けよ。やらんとは言ってない。どうせ俺もこれで手持ちの光酒は無くなっちゃったから、春になれば一旦光脈筋に立ち寄る必要が

ある。その時まで待て。お前さんから妖怪にとっては、対して長くもない時間だろう?」

「くうう……! ……こいつう!」

「……どうして」

紫の様子がおかしいことには触れずに、神子は詰め寄られているギンコの方を見てつぶやきを漏らした。首元を締め上げられながら、ギンコは答えた。

「……気が変わったと言ったろう。あと条件もな」

「条件……」

「ああ」

ギンコは神子の前に指を立てた。

「一つ。渡す光酒はそれだけだ。後から催促されても二度とやらん。そして二つ。まだいる骸草の患者は治してもらおう。そのためには光酒が必要だからな。その二つの条件を飲んでもらおう」

「そうすればこれを譲ると?」

「そうだ」

駄々をこねるマミゾウを引き剥がし、ギンコは襟元をただした。恨みがましい視線を向けてくるが、一応納得はしたような様子のマミゾウは変化を解き、本当の姿を晒した。差していた日傘の化けの皮も剥がれ、後にはいつか見た、大きな茄子色の奇抜な傘が残った。

「ぬお! スキマ妖怪の正体は化け狸であったのか!」

「バカ。どう見ても我らが騙されそうになっていただけだろう。そうだな?」

「ふん。知らんわ。その蝙蝠野郎にでも聞け」

不機嫌さは隠せないようだが、手は出してこないらしい。最悪の時は神子の背後にでも隠れるかと呑気に考えていたギンコだが、蝙蝠野郎というのはどう意味だろうかと首をひねった。

ギンコは神子を見る。今まで、注意深く言動を探っていたから見えってきたものを確認する。

「これでもういいだろ。それ以上はない。あとは好きにしてくれ」

「……礼を言います」

徳利を握りしめ、神子は絞り出すように答える。

神子は光酒を欲していた。それは蟲患いに対する手段を得るため。突然やってくるそれらに、備えられればなんでもよかったのだ。

ギンコは気づいた。彼女が光酒を欲して、ギンコを説得しようとしていた時。唯の一度も「我々には光酒が必要」という主張を崩さなかつた事実。

「私に」ではなく、「我々に」と頑かたくなに主張し続けた理由など、考えるまでもない。

利己的で、欲深い人間。それが仙人だと彼女は言った。

誰かを救いたい。守りたいという思いもまた利己的なもの。そしてそれら庇護ひごの対象の前で、情けない姿を晒すことを拒むのもまた、利己的な感情だというのならば。彼女は真に、欲深い人間なのだろう。望むものを得ようとする時、懇願という姿勢をとらなかつたことから、彼女の心情がうかがい知れた。

「おい、ギンコ！ 今度こそ約束したぞ！ 春じゃな！ 春にお主に会いに行けば、光酒をよこすんじゃない?」

「ああ」

「逃げてでも無駄じゃぞ。匂い覚えたからな！ 絶対じゃぞ！」
「へいへい。わかりましたよ」

それから方々の家を周り、骸草の治療を完了した。残りの患者を全員治療しても、光酒は十分な量が残るとギンコは踏んでいた。そして予想通り、光酒は神子の手元に残った。

そうしているうち、家を巡る道中で、マミゾウは実に十四回も、ギンコに約束の確認を取っていた。これは春になったら光酒を一升瓶で寄越せとか言われないうかど、ギンコも若干不安になった。

骸草の治療は完了した。残る問題は腐酒が湧き出ている沼の対処である。調査に解決とやることはまだまだ多いが、関門かんもんの一つは消化して、ギンコも幾分か心が軽くなった。

沼の調査が終わるまで、まだ時間はかかるだろう。ギンコは引き続き、神靈廟に当座の宿を求めることになった。その帰路で、隣を歩いていた神子の表情を、ギンコは盗み見た。

先導するのは二人の従者。布都と屠自古の二人である。その後ろ姿を見て、神子は微笑んでいた。

大事そうに光酒を胸元に引き寄せて、それはそれは、優しげな表情を浮かべていた。次の一瞬、あれほど曇りなく輝いていた月が雲間に身を隠し、地上に影を落とした。まるで見てはいけないものを隠すように。

確かに、自分が見ていいものではなかったかもなどギンコは空を見上げた。

ギンコの反省を感じ取ったのか、それを褒めるように、月が再度、優しく微笑んでくれた。

第八章 ふきだまる沼 玖

仙人たちを骸草から解放したギンコは神霊廟で再度歓待を受けていた。

骸草むくろそうの治療をめぐり、思想の違いによるいざこざも多少ありはしたが、世話になった札だと言われれば断る理由もなく、それでなくとも野宿をするには厳しい冬の季節である。これから取り掛かる仕事のことも思えば、むしろこちらから頼み込んで逗留の許可をもらうところ。事情を共有している神霊廟しんれいびやうの面々はその辺りの思惑を汲み取ってくれたようで、自然に廟への帰路を共にしてくれた。

ギンコは神霊廟の主人、豊聡耳神子とよさとみのみこの好意に甘え、常時黄昏を空に写す仙界に再び足を踏み入れていた。

骸草の問題を解決しても、ギンコが着手するべき問題はもう一つ残っている。それは大量の腐酒ふきが湧き出している沼を浄化することだ。

周囲の自然を枯らすほど毒素を振りまいているそれを浄化する手段など、ギンコをして思いつきはしない。唯一思い当たるとすれば、大量の腐酒に対抗して、大量の光酒こうきを流し込んでみるということだが、生憎その方法を試せるほど、手持ちの光酒が潤沢であるはずもなく、また別の方法を探る他ないだろうとギンコは頭を悩ませていた。

「おい。何をしている。さっさとついてこい」

「遅いぞ、ギンコよ」

「……ん」

少し立ち止まり、思考を空へ飛ばしていると、前方から声がかかった。神子の従者である、物部布都ものべふとと蘇我屠自古そがのとじこが振り返り、二人の後ろで立ち止まっていたギンコに呼びかけたのだ。

神霊廟にたどり着いた後、ギンコは自分の歓待の準備を手伝わされることになった。客自らもてなしの準備をするというのはとても斬新な気がしたが、世話になる立場を自覚しているギンコにとっては特に反論するようなことでもなかった。

神子は何か言いたそうにはしていたが、「太子様はお疲れでしょう

から部屋にお戻りになつてゆるりとお待ちください。さあさあ」と背中を押されては、そうですか？ と疑問符を残して先に廟の中へ向かつていった。

今向かっているのは廟の裏手にある蔵だった。ギンコのしばらくの逗留を見越した神子に言付かり、昨日里に行った布都が買い込んでおいた食料と、神子が作った酒がそこに置いてあるらしい。今宵の歓待の席に必要なだろうと、取りに来たのだ。

廟の本殿の横をすり抜け、視界が開けると件の蔵はすぐに見つかった。本殿とは違い、装飾の廃された簡素な小屋というような印象。布都が門を外し、両開きの扉を開け放った。

「さて、まずは料理だな」

「ここですか？」

「ぬ？ 当然であろう？ ここには台所がないからな」

ギンコが聞けば、きよんとした顔で布都が言った。もとより食事らしい食事を必要としない仙人の住処に台所などもあるはずはなく、昨日ギンコが食べたものも蔵の近くで調理したものだという話だった。

「屠自古。蔵の奥にある酒は頼むぞ」

「わかった」

「ギンコは我を手伝え。その鍋と蒸籠、七輪を外に出しておいてくれ。炭はその脇にある箱の中だ。我は水を汲んでくる」

「ああ」

布都に指示されて、ギンコは蔵の入り口近くにまとめて置いてあった鉄鍋等の調理器具を運び出す。水を汲みにいくと言っていた布都は蔵の近くにあった井戸に向かっていった。

「なあ蟲師よ」

「ん？」

酒を取りに行くよう頼まれた屠自古が、その前にギンコに話しかけた。

「その、なんだ……世話になったな」

「なんだ急に」

「うるさい。世話になったんだから世話になったと、礼を言っているだけだろうが」

金属製の箱の中からいくつか木炭を取り出し、七輪の中に積み上げながら、ギンコは屠自古の方を見た。唐突な言葉をかけた屠自古はしかし、そっぽを向いて、そそくさと蔵の中に入って行ってしまった。

「……なんだ、いったい」

ぼそりと呟き、ギンコの手の動きが再開される。いくらか炭の小山が出来上がったところで、桶に水を汲んだ布都が戻ってきた。

「む、用意がいいな。助かるぞ」

「火種はどうする。近くに見当たらないようだが」

「案ずるな。火種なら、ほれ」

そう言つて布都が指先を炭に向け、素早く空中で模様を描くように印を切ると、木炭の内側に火が点いて、細い煙を出し始めた。

「おおー」

「ふふん。土の上に木が積もっているのならその内に火が生ずるのは自明よ。あとは気を整えてやればそれそのように」

「便利なもんだな」

「そうでもないぞ。もとより流れる自然の気を、少々うまく使っているすぎんのだからな。場を整え、気を整え、自然が望むように振る舞つてくださるようにと祈る。驕れば気は意に反し、翻つて害をなす。ここで火を起こせば、あたりは逆に冷え込むようになるのだ。まことに自然はよくできていると感心させられる」

ぱちぱちと弾けるような音がして、次第に火が大きくなっていくそこに手をかざし、暖をとるように布都がしゃがみこんだ。

炙られた木炭に徐々に火が移り、色の変化が見て取れる。そうしているうちに、火の元から離れた周囲が少し冷え込み始め、布都の言っていたことが実感できたギンコも、彼女に倣つて火に手をかざした。

「……思い返して見ると、今回のことは死を越えてなお、我が身は常ならぬものと、教えを受けたような気がしてならぬ」

「……骸草のことか」

「うむ。あのようなモノが、現世には数限りなく蠢いているのだろう

？ そんなこと、今まで知りもしなんだ。物部の秘術を学び、この世の秘奥ひおうの一端を担う者として自負もあつたのだが……」

そう言った布都は眉を寄せ、目を伏せるようにして少し笑っていた。無自覚に大きくなっていた驕りを自嘲しているのだろうか。そんなことを思った。

「知つていようがいまいが、不自由に思うことはない。現に、今までそう不自由なく過ごしてきたんだろう？」

「今までは、そうだな。だがこれからは違うのだろう。太子様を見ていると、そう思わずにはいられない……世話になつたな、ギンコよ」

「……お前さんまでそう言うか」

「ぬ？ どう言う意味だ？」

「さつきもう一人にも同じこと言われてな。俺は二人に何かした覚えはないのに」

「そうか、屠自古も。まあそう言うな。我らは、お前や太子様が直面している蟲という存在を識ることはできぬが、それでもわかることもある」

赤熱した木炭を火ばしで掴み、七輪の中に移動させながら屠自古は微笑んだ。

「世話になつた、とはそういう意味だ。太子様をよく助けてくれたとな。今回のことは、お前がいなければ、どうなつていたのかわからん。我も屠自古も、悔しいがなんの力にもなれなかつた」

「そういうものか」

「そういうものだ」

「……まあ、そうだろうな」

二人の言葉の意味を、真に理解できないというギンコではなかつた。しかしそれでも、礼を言われることはしていないとわざわざ口にしたのは、二人の口から真意を聞き出したかったからかもしれない。神子の思いを知ってしまった以上、二人はその想いに応えることができているのかどうか、気になつてしまったのだ。

我ながら浅ましいことだと内心反省する。その時、七輪の中で熱を放つ炭がぱちりと弾けた。これ以上野暮なことは言うなと、ギンコを

窘めるかのような、少し大きな音だった。

ギンコの歓待の宴は慎ましくも、つつがなく進行した。いくつかの質素な料理と、神子の作った酒が並んでいたが、それらはほとんどがギンコのために用意されたものである。

自分だけが料理に舌鼓を打つという状況は、当初こそ賓客としての扱いに慣れぬギンコにとって、少し面映いような、そわそわとした気まづさがあったが、それもすぐに気にならなくなった。

それというのも、余興にと見せてもらった和琴、笛、神楽鈴の三重奏が見事であったためであった。琴を神子が、笛を屠自古が、鈴と舞を布都がそれぞれ担当していた。ギンコはつい演目などを聞いてみたが、何やら聞き覚えのない言葉を聞かされ、そこは半端な相槌を打つてごまかした。

聞けばこれらの芸事は戸解仙になってから、つまり最近になってから覚えたらしいもので、本人たちは趣味の域を出ないにわか仕込みだと謙遜していたが、食事も忘れて魅入るほどには、ギンコを引きつけた。

生真面目に旋律をまもる笛を、快活な鈴の音が煽り、それらを大きく包み込むように和琴の調べが響いていく。それらの音から三人の性格や関係性が具に伝わってくるようで面白いと思った。

やがて宴も終わり、外界では夜と呼べる時間になると、ギンコはいつかのように神子の自室を訪れていた。神子から話があると呼び出されたためである。

「きたぜ、太子様よ」

自身の来訪を告げると、折戸越しに入室を促す遠い声が聞こえた。がこり、と戸を引いて中に足を踏み入れれば、部屋の外周に立てられた燭台にぼんやりと照らされた、がらんとした空間の奥にある、少し高くなった畳の間に、やはり神子は鎮座していた。姿勢良く文机に對峙し、何か書き物をしているようだった。

目線と静かな手の動きだけで促され、ギンコは神子の前に座り込

む。それを確認した神子は「少々お待ちを」と短く言って、目の前の書に向き直った。しばし沈黙の時間が流れ、やがて神子が筆を置く。そして立ち上がり、いつかそうしたように飾り棚の中から酒瓶を取り出し、ギンコの前までやってきた。

「宴は楽しめましたか？」

座りながら、神子はそんなことから会話を始めた。手にした盃に酒を注ぎ、ギンコにそのまま差し出す。なみなみと注がれたそれを、ギンコは少し腰を浮かして受け取った。ギンコの手の中で波紋が落ちてくまでにはもう一杯の酒が用意され、二人はそつと盃を合わせるように掲げた。

「ああ、そりゃあもう。飯も旨いし、余興もよかった」

「それは何より。芸事にも性格が出ますからね。布都の鈴の音は喧しかったでしょう？」

思い出し笑いも含まれていそうな苦笑を浮かべつつ、神子は盃を空けた。対するギンコはペろりと唇を湿らせる程度に留める。宴でもう十分飲み尽くしたためだ。

もう飲み慣れた甘い酒からは、しつとりと梅の香りが立ち上っている。

「いいや、元気があつてよかつたんじゃないか」

「……そうですね。でも最近は元気がなかつたんですよ？ 蟲に関するあれこれで慌ただしかったですから」

「そうなのか」

「あの子は唐突な環境の変化が苦手です。見た目以上に蟲に怯えていたと思います」

唐突な環境の変化といえば確かにそうなのだろう。たとえば、それが今までもこれからも、変わらず隣人として存在する世界を生きにくいことになるうとも、知っているのと知らないとは大違いだ。

人は認識した後に恐怖する。知らぬものは怖がりようがない。

今日の宴の準備中に、七輪の炭火を眺めながら漏らしていた布都の言葉を思い出す。『死を越えてなお、我が身は常ならぬもの』。死を超越した者の気持ちなど、ギンコには計り知れないが、今思えば、あの

時の彼女の苦笑には、人らしいモノが詰まっていたような気がした。「しかし今日は心置きなく酒を飲むことができる。貴殿のおかげです」

「そうかい」

機嫌が良さそうな神子に相槌を打ちながら、ギンコは懐から煙草を取り出した。少し離れた場所にある燭台を指して、「使っても？」と視線で伺い立てる。神子も手だけで「どうぞ」と促し、ギンコは火を手に入れた。

一筋の煙が浮かび、部屋に溜まる。伸びた煙はのたうつように連なって、ギンコと神子の周りを包んでいく。

「その煙草。外で見た時も気になってはいましたが、どういしろものう代物なのでしょう」

「これか。これは蟲煙草と言つて、まあ蟲除けだ。気になるところとは、やはり症状が抑えられるようだな」

ギンコが吹かす煙草の煙には、蟲を散らす効果がある。蟲を寄せる体質のギンコにとつて、なくてはならない品物だが、今宵はその恩恵を受けるもう一人がいた。

「少しは楽になるかい」

「ええ。やはり専門家はすごいですね。このような物まで用意しているとは」

「これで話がしやすくなるといいがね」

今、神子の耳には阿、という蟲が寄生している。それが神子に、正しく、この世のものとは思えないほどの大音響を届けているのだ。

蟲の世界の眩き。余人には聞き取ることでできない囁き。阿に寄生されると、それらが具に聞き取れるようになってしまう。

蟲の声一つ一つは取るに足らない、衣擦れのような小さな声だとしても、数限りない重なりは暴力的なまでに膨れ上がって世界を満たしている。まるで山中から染み出した数滴の岩清水が、山を下るにつれて合流し、巨大なうねりと共に流れ落ちる瀑布となるように、それは轟いているはずなのだ。

本来なら人一人を衰弱死させるほどの音響だが、それを受け止め、

あまつさえ声を聞き分けるなどという所業をやつてのけているのが、ギンコの目の前にいる仙人だ。その事実を知った時、ギンコは脱帽する他なかった。

だが平気なフリをしていても、やはり手に余るものではあるようで。神子が消耗していることはギンコにもわかつていた。煙草の煙は蟲を遠ざけ、然るに神子の体を苛む轟音も遠ざける。彼女の負担を少しでも軽くしようと燻らせたものだった。

「お気遣いありがとうございます。暫くぶりですよ。こんなに静かな夜は」

「それで、話つてのはなんだい」

ギンコはほとんど中身が減っていない、床に置かれた自分の盃を見た。ゆらり、と燭台の灯りが浮かんでいて、酒自身が光っているようだった。

神子も微笑みを浮かべて自分の盃を見つめている。するりと滑らかな手つきで酒を回し、腑の奥に落とし込む。頬が少し紅く見えるのは、燭台の灯りのせいだろう。ギンコには彼女が酔っているとは思えなかった。

「話というのはこれからのことです。我らは望む物を手に入れ、仙人の体を蝕む奇病も解決。もはや貴殿に用はなく、ここに置いておく義理もありません」

「出て行けつてことかい」

「そうは申しませんが、引き止めは致しません。ここは仙界。只人が長居する場所ではないのです。貴殿と我らでは、時の流れが違う。これ以上付き合っても、良いことはないだろうと」

神子の声色からはギンコを気遣う心が見て取れた。キツパリとした言葉から感じるほど、拒絶の意思はない。厄介払いなどと、考えてもいないような優しい声だった。

「そうは言ってもな。こっちはまだ、やることが残ってる」

「わかっています。あの沼のことでしょう。ですがあれば、貴殿が手を尽くすようなことではないのです」

「……………どうい意味だい」

含みを持たせた神子の真意を、ギンコは問いただした。

「ギンコさんは、私たち仙人が錬丹れんたんを日常としていることを知ったはずです」

「ああ。寿命を伸ばすための霊薬を練る日課だったか。それが？」

「錬丹術、特に外丹術において、具体的に何をするのかは説明しますと、それは正しく薬を作る行為で、おそらくギンコさんに馴染み深いことも多いかと存じます」

「そうなのか」

「はい。しかし決定的に違うのは数百種の薬草、薬品はもちろん、通常は顔料に用いるような物まで使用して薬を作るという点で、数百年を生きる仙人が服する金丹は、ただの人が一度口にすればたちまち死に至るような猛毒となっていることもしばしばです」

「そんなもの飲んでんのか、あのじいさんたちは」

ギンコは改めて、仙人の目的意識の強さ、誤解を恐れずに言えば、生き汚なさに驚嘆した。猛毒に体を馴らして、寿命を得るなどはたからみれば狂気の沙汰である。骸草を払ったギンコだったが、それが正しい行いだったのかどうか、わからなくなりそうだった。

「もちろん、徐々に馴らしているのです。だからこそ、錬丹術は生涯をかける修行であり、仙人の道そのものでもあります」

「ゾツとするね。聞かなきゃよかつたかな」

「その通りです。これ以上は貴殿が関わるべきことではないのです」

「わからんね。あの沼と、今の話が関係あるのかい」

「確証はありませんが、無関係ではないでしょう。……時にギンコさん。古くなつて変質し、思い通りの効能を得られなくなった薬はどうするかご存知ですか？」

「……おいまさか」

ギンコの目が鋭く細められ、神子を捉えた。神子はそんなギンコの目の前で、わざと盃の中身をこぼしてみせた。

神子の足を覆う服の裾に、酒が染み込んでいく。濡れた布は蠟燭の薄明かりのなかで淀みのように鈍色を呈している。じわりと広がった水溜りは繊維を侵して、さながら痣のように広がり、ギンコは外縁

の草木や土壌を侵食し、腐らせていく件の沼を想起した。

「求道者は無駄を嫌います。不要と判断したものは身のそばに置かぬもの。当然、使えなくなつた薬品は投棄します。一人、また一人と捨てに行きました。そうしてやがてあの辺りに住む仙人が全て、示し合させたかのように『不要なものは此処に』と定めた場所があります。沈めば二度と浮き上がることはない、底無しを冠する『そこ』は誰にとつても都合が良かったのでしよう」

「……馬鹿なことを」

「明らかな変質はごく最近のものですが、あそこはそうなる前から、吹き溜まりだったのですよ。生き物が軽々に寄り付かない場所となつていたことは、確かです」

濡れた服を意に返さず、酒を注ぎなおす神子を前に、ギンコは静かに拳を握り固めた。宴の余韻など吹っ飛んで、今はもうただ反吐が出そうな気分であつた。長く旅をして、人間の愚かしさ、浅ましさにはそれなりに直面してきたこともあつたギンコだが、決して慣れることなどない。悪意に触れた心のささくれは、普段寡黙なギンコの表情をわかりやすく濁らせた。

「……沼の起源はご理解いただけただけようですね」

「……ああ」

「どう思われますか。やはり彼らの行いが原因だと?」

「無関係だとは思わん。だが腐酒は、本来自然の流れの一部でもある。死した獣の肉が腐ろうとも、いつかは土に還るように、あれらもその途上にある。沼を満たすほどの広がりには関係しているだろうが……まあ、ほとんど自然の成り行きだろうよ」

そう語つたギンコの言葉に力はない。ギンコも、あの光景が自然のものであつてほしいと願っているのだ。

もしそうでないとすれば。あれが人の手による光景なのだとすれば。それはどれほど悍ましい因果なのかと身震いする。そんな想像は、なるべくしたくなかつた。

「では、貴殿が関わる義理はないということですね」

「……」

ギンコの迷いとも取れる曖昧な物言いは、神子の追及を許した。きつぱりとした口調が後に続く言葉を断ち切る。

自然がそうあれと選択したのなら、ギンコにそれをどうこうする理由はない。どれほど傷ましい光景だろうと、時に自然の意思は、人の思惑を越えていくものだ。人が去り、風化した石造りの跡地にも草木は茂り、花は芽吹く。ここは成り行きに任せることが、最良であるようにも思えた。

そしてもし、あれが人の落とした影だというなら、尚のことギンコが骨を折る義理はなかった。今回の奇病騒ぎは全て、身から出た錆、自業自得という言葉がピッタリと当てはまる。仙人の業は深い。それこそ、底無しの沼のように。

しかしそれでも、ギンコは光を失わなかった。失うはずがなかった。なぜなら本当の光というものは、闇の奥の奥、地の底の底、彼方の淵から悠久の流れを湛えるものであり、ギンコはそれを知っていたからだ。

「……事情はわかった。だが、やることは変わらない」

「……」

ギンコの言葉を予想していたように、神子が静かに耳を傾ける。今は彼女に蟲の声は届かない。彼女の耳は、全てギンコに向けられている。数多、那由多の声を聞き分ける耳が向けられている。当然、心の声ひとつ、聞き漏らすことはない。ギンコは重たく、口を開いた。

「俺には、これしかやることがないもんでね。沼は調べる。……何かわかったら教えよう」

「……」

もともと義理や人情で蟲師をしているわけではない。人のためではない。蟲のためでもない。ましてや、自然の調和を保つなんて、大それたことを言うつもりもない。

ギンコはいつも見届けるだけだ。知る限りを伝え、時に少しの見返りを受け取る。根無草は流れ流れて、清流に浮かぶ笹船のように頼りなく、しかしどこまでも行く。徹頭徹尾、自分のためと言い切れない傲慢さが、欲といえば欲らしく、流されるだけの笹船の進路を

決めているようだった。

床に置いていた盃を手に取り、ギンコは中身を煽った。春を告げる花の香りのする酒。昼夜の区別なく、金色の暁に彩られた仙界とは無縁なれど、外界はまだまだ冬の季節の真つ只中。開花の季節まで、忍耐を強いられる雪の下が思い浮かぶ。

それでもいつものように、変わらず春は来るだろう。ギンコに確信できることはそれだけだ。ここは、まだまだ道の途中なのだ。ギンコは空になった盃を再び床に置いた。

「……なるほど、よくわかりました」

「ああ。世話になったな」

「お礼など。貴方に出会えて本当によかった」

「俺はそうでもないかもな」

「おやおや、手厳しいですね」

ギンコの皮肉っぽい悪態にも、神子は気分を悪くすることなく応じた。

「……これをやるよ」

「え。わっ」

短く言ったギンコが神子に向かって何かを放り投げた。それは束になった蟲煙草だった。突然飛んできたそれをなんとか受け取り、神子は興味深そうにしげしげと眺めた。

「これからはあんたにも必要になるだろう。手持ちは少ないが、春になつたらまた持つてくる」

「良いのですか？ 貴重な物なのは」

「原料があれば自作できないこともない。幸いその場所に心当たりがある。原料がとれる場所も、作り方も、春になったら教える」

「……何から何までありますがどうございます」

神子は束になつたそれから一本を引き抜き、ギンコがそうしたように燭台の使つて火をつけた。啜えた煙草を一息吸い込む。すると見事に、盛大に神子はむせてしまった。

「あんまり肺に入れていいもんじゃねえからな。気をつけろ」

「ごほっ……！ ぐっ、んう……！ さ、先に！ 言つてくださいよ

……」

「コツがあつてな。口の中で煙をゆつくりためて、肺の中の空気ごと吐きだす。そうすりゃ火持ちもいい。馬鹿みたいに吹かさなきゃ、一日中くすぶ燻る代物だ」

涙目になつた神子の視線を躲しながら、ギンコは手本を見せるように煙を細く吐き出した。口を尖らせてその様子を見ていた神子も再度煙草を啜えて、見様見真似でやってみる。今度はうまく煙を吐き出すことができた。

「はあ……不味いですね」

「葉だからな。良薬はなんとやらだ。毒を飲む根性があるなら、軽いもんだろ」

「言いますね……」

煙が薄絹のように棚引いている。その光景を楽しむように、しばらく二人で、無言のままに啜えたものを燻らせた。

「明日からの調査ですが、私も同行します。手が必要なら使ってください」

「そりゃ助かるが。いいのか?」

「ええ。私も後学のために見ておきたいのです」

「熱心だな」

「他人事ではないのですから、熱心にもなります。……思えば、誰かに教えを授かるというのは久しい。よろしく願いますね、先生」

「先生はよせよ」

ギンコは立てた膝に腕をのせ、そつぽを向くように大袈裟な態度で神子の冗談を受け流した。壁の上部、換気用の連子窓の奥には夜の闇が覗く。一瞬、その闇に紛れて影が蠢いたような気がしたが、すぐに気のせいだと思ひ直した。

「では師父と」

「尚更だ。嫌味にしか聞こえねえよ」

自分よりも明らかに優れている人間に畏まられると、嫌味に感じる。ギンコの態度は当然だった。

「む。弟子としての振る舞いは私には似合わない?」

「十分慣れないことだろ」

「それでもありませんよ？ 私にも師事していた人くらいいます」

「書き取りとか算術のか」

「そういうのは別に。一度聞けば憶えましたので。私、聖人ですから」
「あ、そ」

いつの間にか酒を飲み進め、機嫌が良くなったのか神子はお喋りになっ
ていた。

「私が師事していたのは、私に道教を伝え、仙術の手解きをしてくれた
人です。人格に多少問題はありますが、腕は確かですの」

「仙人か」

「ええ」

「仙人は大体碌でもないだろ」

「まあ貴方から見ればそうかもかもしれませんが、私の師匠はそれでもな
お、というか。貴方が光酒の存在を絶対に教えたくないと思う人、と
言えば伝わるでしょうか」

「おい勘弁しろよ。お前、そいつに光酒のこと教える気か」

「いえまさか。ここまでお世話になったのです。貴方の望まないこと
はしませんとも。すでに師弟と気軽に呼べる間柄でもないですしね」

ギンコは浮かせていた腰を落ち着けて、一つため息をついた。蟲患
いへの対抗手段のためとはいえ、ギンコから光酒を強奪することも考
えていた神子が自重をするほど、アクが強い師匠とはどれほどの人物
なのか。少し気になったが、ギンコは努めて想像しようとはしなかつ
た。

煙草の味と、梅の香り。さつきまで甘く、爽やかであったそれらが
少し変わっている。紛れ込んだ違和感は、しかし煙に巻かれ、すぐに、
よくわからなくなった。

第八章 ふきだまる沼 拾《了》

仙界を出ると、夜のうちに冷え込んだ朝の空気が鼻から肺に入り込んできた。山には曇天が覆い被さり、しかし地表には風ひとつなく、まるで洞穴の奥深くのような静謐さを保っている。

ぎしり、と踏み固めた雪が鳴り、吐息の心細さと身を寄せ合っていた。

日差しを遮る鈍色の天蓋からは今にも雪が降りてきそうだ。ギンコは空を仰ぎ、外套がいたうの襟を片手で引き寄せた。

ふと視界の端に滑り込んでくる薄煙うすけむりがある。いつもなら、気にも留めない日常だが今日は違うとギンコは知っている。

昨日の夜、相談の折りに譲り渡した蟲煙草を神子が燻らせていた。唇から少し離れた火種から白煙が流れている。隣で見下ろすギンコからは神子の詳しい表情は伺えない。しかし前髪の端から見える口元で、忌々しく煙草の苦みを嫌っていることは十分にわかった。

「太子様」

「なんですか」

「そんなにまずいんですかそれ」

「ええ……不味いです」

よほどひどい表情だったのか、神子の様子を心配した布都がたまらず声をかけていた。

円滑に会話をするため指先で摘んで口元から離れた、やや緑がかつた土色のそれは今の神子に必要なものだ。片利共生へんりきようせいの蟲を体内に宿し、蟲患いとなつている神子は常に人を狂死させるほどの大音響を聞かされている。

それは幾千幾万、那由多なゆたの小さな声の集積。蟲たちの声。ギンコや、神子の顔を興味あり気に覗き込んでいる布都や、静かに傍そばに控える屠自古には聞き取れないその大音響は、こんなにも静かな世界に満ち満ちて、神子の精神を、肉体を今も苛さいなんでいる。蟲煙草は蟲たちを遠ざけ、声を静め、神子にかかる負担を軽減していた。

ギンコは彼女の抱える蟲患いを治療する知恵がある。当然治療を

打診もした。治療法には確かな実績があり、神子がひとつ頷いて治療を受け入れれば、即座に苦しみから解放されるはずだった。

しかし神子はギンコの申し出を断った。彼女は蟲という存在と向き合うため、声を聞き続ける選択をしたのだ。驚くべきことに神子は生来の才能で、常人にはただの狂騒の濁流としか聴き取れない蟲の声を、意味ある音として聞き分けることができ、そこから知識を得ることができた。

自身が侵されて、蟲という存在に初めて向き合った神子はその異質さや超常性に畏れを抱き、我が身と、そして何より自分に仕える二人を守るために、声を受け止め、知を受け取れることを決めたのだった。「そうですねか……薬とはいえ、お辛いでしょう。おいギンコ。もう少しなんとかならんのか」

「そんなこと言われてもな……」

布都につめられてもギンコにはどうしようもなかった。蟲煙草が不味いのは仕方のないことだし、現状を受け入れることを決めたのは神子自身だ。ならば、もうギンコに何をどうこう言う気はなかった。

だがそれで考えを放棄し、布都の感情の想像を怠るほど、ギンコも鈍感なわけではない。側にある者が苦しみに顔を歪めているとき、例え本人が良しとしたことであっても、なんとかしてその原因を取り除けないものか、あるいは和らげることはできないものかと、思い巡らすのは自然なことだろう。

挑戦に苦心する我が子を見守る親心のように、自然に湧き出ては心を満たす。それがどれほど尊く、ありふれつつも得難い感情であるかは理解する。そして理解するからこそ、神子の決意と現状に口を挟むことはできないし、選択による苦渋も受け入れるべきだと尊重する。

布都の心を満たすものと、全く同じものを神子も抱えている。親愛から湧き出す憂いの実感は彼女たちだけのもの。ギンコは立ち入らない。鈍感なわけではないが、冬の外気のようにカラリとした心の温度を保っていた。

「そうだ。啞えるところだけでも飴に変えてしまうのはどうだ」

「バカか貴様は。煙草というからには管状に空気を通す必要があると

いうのに、飴で固めてどうする」

「むむ、ならば甘露を染み込ませるのはどうだ。歯で挟み込むたびにこう、甘みがだな……」

「なぜ甘くしようとするんだ貴様は」

「良いではないか。甘味。至上の喜びぞ?」

「浅いわたわけめ。太子様にあつてこれから常にお口元にあるものなのだぞ。ここは醜^{だいき}味に迫る味わいを追求すべきだ」

「蘇^そか! むう……お前の名を連想しそうになるのは気に食わんが、あれが美味しいのは認めるところだ……」

やいのやいのと従者二人が議論を交わし始めるのを横目に、ギンコは歩き出した。正直に、関わる言葉を持たなかった。神子もギンコの歩みに合わせて、隣にやってくる。

「早いとこ慣れろよ。あの調子で毎日騒いでたら面倒だぞ」

「ええ、まったたく」

煙草を啜え直した神子が苦笑したのは、苦味だけが理由ではないようだった。

一行は山道を歩いて、件の沼を目指した。腐酒が湧き出ている沼である。仙人たちの体を泥状に溶かしてしまう骸草を駆除するため利用されていたが、ギンコによって骸草の諸問題が一応の解決をみた今、そのままにしておく理由はなくなり、現状を看過することはできないギンコが対処をすべく、本格的に調査を始めようとしていた。

神子がいうには腐酒が発生した時期は定かではないものの、沼は元から仙人たちが投棄した、精製された毒物や薬品によって環境破壊が進んでいたようだ。それが直接的な原因なのか、はたまた全く別の問題が隠れているのか、どちらにせよ、異常であることは確かだった。「骸草の発生もあの沼周辺だったって話だが」

隣を歩く神子にギンコが尋ねる。

「ええ、寄生された仙人たちが、一様に足を運ぶのはここしかありませんから」

「詳しく聞いておきたいとこだな。できれば金輪際、鍊丹術とかでできた代物をそこらに捨てるなって警告せにやならん」

「それは難しいですね。はいそうですかと従うかどうか」

「じゃあ『体が腐って死ぬぞ』って脅せばいいだろ」

「ひどいこといいますね」

「自業自得で死ぬのは事実だからな」

冷酷な物言いだが、事実であるから仕方がない。ギンコのよどみない足取りと口調が重なった。

沼の異変は十中八九のところまで原因を究明できていた。そして原因がこの山に住む仙人たちが日常的に行なっている修行にあるのだとすれば、ギンコが沼の問題を根本から解決することはできないと言えた。蟲と人、その間に生じる摩擦、あるいは肥大化した誤謬^{ごびりゅう}。ギンコの知恵が役立つ時があるとすればそれらを相手どる場合のみだ。

ギンコは蟲に対する知識でもって蟲患いを対症療法的に解消することができる。これは例えば絡まった一對の紐を解く行為に似る。根気良く紐の端をたどり、難く綴じた結び目をほぐして一結一結をといていくこと。どちらの紐が輪を作り、どちらの紐がそれをくぐっているのか。注意深く観察しては緩んだ箇所^{箇所}に指を滑り込ませ、時には強引に力をかけていく。しかしこうしてギンコが解消できるのは絡まった紐を解くことだけなのだ。

それがもう一度絡まることのないように気をつけるのは、ギンコの領分を超えたところにある。両手から離れたものを守り続けることなどでははしない。くれぐれも、と言い含めた言葉を裏切られた経験など、すでに数えきれなかった。

今回の一件。真の解決に必要なのは原因の周知と、啓蒙^{けいもう}だ。仙人にとって日々の修行が大切なものであることはギンコもよくわかつている。突然止める、と言われて今日明日に止めるものでもないだろう。ここ数日で仙人たちの目的意識の高さはよく理解した。先ほどは突き放すように言い切ったギンコだったが、そんな脅しまがいの方法に効果がないことは簡単に想像できた。

「自業自得だと言いつけるなら、沼はそのままでもいいのではないですか？」

「何言ってるんだ。いいわけあるか」

「なぜですか？」

「くどいぞ。その話は昨日したろ」

「ふふ、そうでしたね」

隣を歩く少女は少し楽しげだ。啞え煙草のまま口角を少し吊り上げる神子の笑顔は少し間抜けで、初めて下駄を履き鳴らす童わらわのような無邪気さを感じた。

一行が沼のある場所に近づくとつれて、ちらちらと雪が降り始めた。風は吹いていない。上から下へと流れて、儚く消える。目立ち始めた立ち枯れの樹木を背景に、物悲しさが浮かび上がってくる。

漂うのは腐臭。見えてくるのは、地面から突き出す針のような木々に囲まれた沼の縁ふち。赤黒く変色した汚泥の溜池。近づく命に強い忌避感を与えるそれは、時間が経った血液のように濁り、おどろおどろしい見た目をしている。周囲に降り積もった雪の白と不気味なくらいに對比がなされ、そこだけが深く、落ち窪んでいた。

仙人が持ち寄って廃棄した薬品の影響か、あるいは、厭世えんせいの念を濃縮して吐き捨てるように、溜まった澱よどみそのものか。腐酒は語る口を持たない。それでも雄弁に、人の視線を受け止めていた。

「相変わらずひどい状態だな」

「うむ……ギンコよ。お主はこの沼をどうにか元に戻そうとしているのだったな」

「あてはあるのか」

「うん……まあ、な」

布都と屠自古の言葉に曖昧な相槌を返しながら、沼の縁にしゃがみ込み、ギンコはじつと沼の表面を凝視する。ギンコの肩に、そっと神子の手が伸びる。

「あまり顔は近づけない方がいいですよ。揮発性の薬品が捨てられているかもしれない」

「む、そうか。そうだな」

神子の言葉に、ギンコも危険性に思い至り、少し身を引いた。

「おい屠自古。キハツセイ、とはなんだ」

「間抜けを晒すな。アホめ……通常は液体だが、時間の経過によって温度によらない気体への状態変化が著しい性質のことだ。今太子様は目に見えずとも、ギンコの体に毒になる気体が、沼から出ているかもしれないと警告されたのだ」

「なんと。おいギンコ、沼には近づかぬ方が良いぞ。毒霧が出ているぞうだ」

「だからそれを今、太子様が仰られたばかりだと言っておろうが！」

賑やかな従者二人の言葉を聞き流しつつ、ギンコの隣に神子がしがみ込んだ。腰巻の裾を膝の裏、腿ももと脹脛ふくらはぎの間にしまい込み、しかし袖なしの外套の裾は雪の上に投げ出して、沼の縁の泥に指先を伸ばす。

細く、長い指で泥の一部を掬い取る。そのまま指を鼻先まで持つていき、匂いを嗅ぐと「とりあえず、即時の危険はないようです」と呟いた。仙人の体があればこそその判定法だった。

雪の中に指を突っ込み、汚泥を洗い落とす。濡れた指先は、取り出した薄手の手拭いで拭き取った。

「それで、どうされますか？」

「どう、とは？」

神子の言葉に、ギンコは疑問符を返す。「とぼけても無駄ですよ」と神子はギンコの目を見つめた。

「貴方の思いはよくわかっていますつもりです。しかし、やはりこの沼への対処はおすすめしません」

「……」

「貴方もわかっていないのですか。たとえこの沼の大部分を占めている腐酒というモノをどうにかできたとしても、薬品由来の汚染を、直ちに除去する方法はありません」

神子は淡々と事実を告げる。ギンコにも、その事実はよくよく響いてきた。そしてその事実こそが、やはり一番の問題だった。

ギンコは薬学を専門としているわけではない。しかし薬物の取り扱いについて、多少なりとも心得があった。だからなんとか、自分でできることはないかと探る思いだった。だがどうしようもない。

考えれば考えるほど、手立てがない。

草木や茸、花、果実、球根などから抽出される薬毒はよほどの濃度でもない限り、土に埋めるなどの対処でも問題がないことが多い。草木を枯らして土地に残留するなど、確かに悪影響はあるが、それでも元はいずれ土に還る定めめの命と紐づいた成分であるためだ。分解は早く、無毒化されるに、そう時間はかからない。

一方で取り扱いに注意が必要なのは精錬や製鉄、製紙に用いられる薬品類だ。これらはよく、水のような見た目で無害を思わせるが、その性質は苛烈かれつで劇的だ。蒸発した霧を少し吸い込んだだけでも危険だったり、数滴皮膚に染み込んだだけでも体調を崩したりする。それというのも、目には見えなくても、金属が溶け込んでいることが大きな理由であるらしい。

これらの薬品は望んだ効能を得るために、特に強く、濃く、作られている。そしてその多くは、自然に分解されるわけではない。重ねればただ降り積り、さらに濃く、苛烈な性質を強めていく。

神子の話を聞けば、どうやら仙人の修行に、後者の薬品がよく用いられることも確認が取れた。沼にも相当量が溶け込んでいるだろうことは容易に想像できる。問題は山積みだった。

「ギンコさん。時に、毒に侵された人間への対処法の心得は？」

唐突に、神子がそう聞いてきた。いきなりの質問だったが、思考が煮詰まっていたギンコは良いきっかけになるやもと、神子に応えた。「……詳しくはない。動物由来のものなら毒を抜き出すために瀉血をする、必要なら患部を切除する、毒を口にした場合は直ちに吐き出させる、手元にあるのなら解毒になるものを搦らせる、なければ水を搦らせる……あとは、安静にして様子を見る、くらいか。とにかく素早く対応することが肝要だと聞いている」

「すばらしい。医師でも薬師でもない人間が備える知識としては十分でしょう。では、すでに致死量の毒物に体を侵された人間に対しては、どうすればいいかご存じですか？」

「いいや。どうすればいいんだ」

「ふふ、知らぬことは知らぬと言い切れるのは、貴方の徳ですね」

ギンコの素直な言葉に微笑んだ神子は、視線をギンコから沼に移した。

「この沼は、まさしく毒に汚染された状態。死に体です」

「……そうだな」

「致死量です。どう見ても。であるなら、復活など望めない。もう命はここを離れています」

「死者を蘇らせることはできない、と」

「そうです」

「だが、沼は人ではない。死んでいるかどうか、俺たちにははかれない」

「強情ですね。ではどうします？　これだけ多種多様な薬物毒物に汚染されたモノを浄化する術はありません」

「……少し黙ってくれ。それを考えているんだ。大体、この沼は骸草の発生源にも等しい。お前たち三人はわからんが、山の仙人たちにとっても害がないとは言えんだろう。もうちと知恵を貸せ」

「……それはそうなんですけどね」

結局、堂々巡りの思考は神子も同じだったようだ。ギンコへの問いかけも、自分の思考を反芻する^{はんすう}ように絞り出した彼女なりの抵抗のようだった。

ギンコにとっては降って沸いた無理難題、仙人らにとっては先送りにしてきた山積みの問題。それが、この沼の現在地だ。

風が出てきた。粉雪が横顔に吹きつけ、冷たい。

「あら、太子様？　それと皆様お揃いで」

濡れた手で首元を触られたような感覚があった。無論それは錯覚であったが、そんな感覚を共有したのか、思わず全員が声のした方を見た。雪と一緒に落ちてくる、一人の女性。ふわりふわりと羽衣^{はごろも}をたなびかせ、沼の縁に降り立った。

ギンコたちが沼の子^ねの刻^{こく}の位置にいるならば、女は酉^{とり}の位置にいる。さほど離れてはいない距離だが、目測よりも近い位置にいるような印象を受けた。

あの女は人ではない、そうギンコは直感して立ち上がった。ピリピ

りと張り詰める空気が、その直感を後押しする。力の強い妖怪と対峙した時に、よく似ていた。

ギンコを庇うように、同じく立ち上がった神子が一步、女の方へ歩み出る。

妖しい雰囲気の女だった。青白い肌と、明瞭な青の髪色とを合わせていつか見た氷の妖精に近しい種族なのかと、ギンコは考えた。

「お久しぶりです。奇遇ですね、こんなところで」

「ええ全く。そちらはお変わりないようで」

「うふふ。そうでもありませんよ？ 特にここ最近、幻想郷も新しい住人のおかげで騒がしくなって……ああそうですわね、そちらの御方が特に詳しいのではなくて？」

神子と羽衣を纏った青い女は知己であるようだ。気さく、とまではいかない挨拶が二人の関係を想像させる。話するには遠く、敵対するには近い距離を保っていた。

さらにどうやら女はギンコのことを、蟲師のことを、ひいては蟲の存在を知っているような口ぶりだ。幻想郷の住人で蟲をよく知るものは少ないが、知っていること自体は珍しくもない。だがこの微妙な距離感が合わさると不穏な雰囲気が漂い始める。

神子が警戒を強めているのが、ギンコにもよくわかった。理由まではわからない。ギンコは女をじつと観察した。

周囲の白を固めて明度を下げたような水色の洋装。冬の寒空に身を晒すには心許ない薄着で、手足の肌が露出している。髪型が奇抜なのはこつちにきてもう見慣れたが、それをまとめる大きな簪は目をひいた。

女は笑顔だが、どこか薄ら笑いのような表情でもある。胡散臭さは、どこぞのスキマ妖怪と似通っているがこちらは超然としつつも、人間に向けるある種の関心は強そうだった。ギンコは、自分も観察されていることに気がついた。

「初めまして蟲師のギンコさん。私は霍青娥と申します」

「……どうも」

やはりギンコを知っているようだ。青娥、と女が名乗ったあと、

フツと空気が軽くなった気がした。見れば青娥せいがは、人当たりの良さそうな笑みを浮かべる女性にしか見えなくなっていた。

妖しい雰囲気はどこにいったのだろうか。ギンコは会釈を返した。「ふふ。ここにいらっしやるということは、お噂通り、真面目な方なのですね」

「噂？ 噂になってんのか、俺は」

「ええそれはもう。いつぞや妖怪の山で異変が起きた時にもご尽力なされたとか」

妖怪の山。確かにギンコは以前、妖怪の山が光脈筋こうみやくすじとしての目覚めを迎える折に、その環境の変調に巻き込まれた種々の妖怪たちの手助けをしたことがあった。その時数日山に逗留とくりゆうしたが、鴉天狗からすてんぐの射命丸文しゃめいまるぶんに取材だなんだと付きまとわれたのも憶えていた。

確かシンブンとかいう、薄く、軽い障子紙の束のような情報媒体をばら撒くのが彼女の生業であるというところまで思い出し、噂の出どころは奴かと納得した。

「山でのことは成り行きだ。行きがかりにな」

「あらそうでしたか。新聞にはどこからともなく颯爽さつそうと現れ、為す術なく危機に喘ぐ天狗の里を救ったとありましたが」

「ほう、貴様そんなことを」

「やるではないかギンコよ」

「……大袈裟だ」

布都と屠自古からの賞賛しょうさんの言葉を受けながら、一度あの娘には何か言っておいた方がいいのかもしれないと、ギンコはそう思った。

「それで。貴方はこんなところで何を？」

「ああ、そうそう。忘れるところでした」

神子からの問いかけで、青娥は沼に視線を移した。

「私こちらの沼に用があつて。ほら、ひどい有様でしょう？」

言われてギンコたちも視界の端で沼を見た。よくない状況だ。同意しかなかった。

「まあ、そうですね」

「山で修行されている仙人の方々も、何やらこの沼が原因で苦しんで

いるようですし、なんとかしなければと思ひまして」

「この沼を？ 貴方が？」

「ええ。私にとつても不都合ですし。ほら、芳佳のこととか……」

神子と青娥が話す後ろで、ギンコは隣にいる布都に耳打ちした。背中を丸めて小柄な布都の耳元に口を寄せると、その動きを察した布都の方も少し、片足で背伸びをするように耳を向けた。

「なあ、あの娘はなんだ？」

「ん？ さつき名乗っていたではないか。青娥せいが娘々にやんにやんだ」

「そうだな、名前はいいさ。お前さんらの太子様との間柄は？」

「彼女は太子様のドウキョウノシだ」

「へえ。楽器とか歌詠うたよみのか？ そりや結構。優雅なことで」

「ん？ 楽器？ 歌詠うたよみ？ なんのことだ」

「いや、今言つたら。ドウキョウノシって」

「言つたぞ」

「だから。太子様の趣味って、楽器やったり、梅酒漬けたり、歌詠んだりつてことだと思つたんだが。違ふのか？」

「？ そうだぞ。太子様は雅楽と歌詠うたよみを嗜んでおられるな。が、何か関係あるか？」

「ん？」

「ん？」

ギンコと布都が噛み合わない会話の中で互いに顔を見合わせていると、呆れたように屠自古が会話に割り込んできた。

「……ギンコ。ドウキョウノシ、とは宗教のドウキョウ、つまり我ら仙人の修行でもあるタオの思想を宗むねとする教えのことで、そのシ、とはその師父であるということだ。つまり“道教の師”だ。青娥娘々、彼女は太子様の師匠であり、布都が言つたのは趣味趣向が似通つた仲間を指す言葉ではない」

「あー……なるほど」

「む、なんだ。何か勘違いしていたのかギンコよ」

しょうがないやつめ、と布都は言う。ギンコは“同郷の士”と言えば普通は先にこちらが思いつくだろう、とは反論しなかつた。それよ

りも気になることがあつたためだ。

昨晚の神子との会話を思い出す。彼女の師匠、ギンコが光酒の存在を絶対に教えたくないだろう仙人。それが目の前にいる青娥のことにらしい。神子が警戒する理由がわかつた気がした。

「彼女は能力は高いが、邪仙じやせんと呼ばれるほど行動原理や思想が破綻気味の危険人物だ。警戒しろよ、ギンコ」

「そうか。忠告は聞いておく」

「あらあら、私の話ですか？」

屠自古のギンコへの耳打ちを聞いていたのか、少し間伸びした声で青娥が話かけてくる。にこやかで、友好的に見える。

「ねえ蟲師の貴方。この沼、どうされるおつもりですか？」

「どうつてのは」

忠告は聞いておく、と言つたギンコだが彼としても気になることを青娥は言つていた。無視をするわけにもいかない。

「いやですわ。このままというわけにもいかないのでしょうか。太子様御一行がただの案内役だけでついてきているとは思えませんし。目的は沼への対処、蟲師の貴方なら、私と同じく、この沼への対処法をお持ちなのではなくて？」

「ああ、まあこの沼はどうにかせにやららんがね……ん？ お前さん、今対処法があるつて言つたか」

「ええ、言いましたけど」

軽い調子で告げる驚いたのはギンコだけではない。ギンコの前にいる神子が、どういうことだと振り返る。ギンコはよくわからないと、黙つて首を振つた。

幻想郷において、こと蟲に関しては最も有力な識者であるギンコが、今まさに直面し手をこまねいている問題に対して、手があると断言切つた。それは稀なことだつた。

青娥はにこやかにギンコを見ている。そんな青娥の言葉と態度に、声を上げたのは布都だつた。

「なんと。おいギンコ、よかつたではないか。どうやらこの沼、なんとかできるようだぞ」

「あら〜？　ということとは、そちらはまだ何も思い付いてはいらつしやらなかつたのかしら？」

「うむ。太子様もギンコもどうしたものかと先ほどから困っておいでだ。解決策を教えることを許すぞ、青娥娘々」

無邪気な尊大さを振り撒く布都の後頭部を屠自古が引つ叩いた。

「いた！　何をする！」

「マヌケ！　そう馬鹿正直に彼奴に弱みを見せるな！」

背後から聞こえてくるやりとりに肩を落とすし、神子は苦笑した。その表情は背後にいるギンコからは見えなかつたが、少し小さくなつた背中から、普段の苦労くらいは想像できそうだった。

ギンコは言い合っている従者二人の横をするりと抜け、神子の隣に立つた。ギンコ自身にはもとより重んじるような体面などない。素直に事実を認めた。

「まあそういうわけだ。俺には良い方法が思いつかなくてな。よけりや、参考に聞かせてもらいたい」

「あらあら、そうでしたか。では準備したコレも無駄にならずにすみそうですね」

言いながら青娥はギンコたちに近づいてくる。五、六歩歩み寄つたところで足を止め、ごそごそと取り出したのは小さな巾着袋だ。その中からさらに何かを取り出した。

手のひらにころり、と転がったのは人の親指、その第一関節から上くらいの大きさの何かだ。石ころのようでもあるが、表面の質感からは、何かの種のような印象を受ける。胡桃くるみのような表面だが、形はどんぐりをもつと扁平へんぺいにしたような感じの紡錘形ぼうすいけいだった。

青娥はそれをつまみ上げて、興味深そうに視線を向けるギンコの眼前に晒して見せた。

「それは種、か？」

「ええ、まあ。そのようなもので」

「ギンコさん。おそらくは金丹です」

ギンコの横から神子が答える。金丹。それは確か、仙人が修行の中で常用する薬のようなものだったか、とギンコは過去の記憶を探つ

た。

外丹術によって不老長寿をもたらす、毒物紛いの靈藥。そう聞くと、先ほどまでただの種に見えたそれが急に恐ろしいもののように見えてくるのだから勝手なものだ。

「それで。その金丹をどうするんだ」

「ふふ。こうします」

「あ」

言うが早いのか、青娥はその種のような見た目のそれを、沼に投げ入れた。ぽい、と放られ、沼の中心部くらいに落ちたのだろうか。急な動きだったために、ギンコは種を空中で見失ってしまった。

沼に変化はない。何をしたのか、とギンコは言いかけたが、種を沼に投げ入れただけだと自己完結した。行動の背景はさっぱりわからなかった。

「これでしばらくすれば大丈夫でしょう」

「すまんがお前さんが何をしているのか、どうも俺にはさっぱりでね。今放ったものも含めて、詳しく教えてもらいたい」

「あら、実物を見たことはありません？ さっきの種……『実』と言った方が正しいかしら。アレは蟲師の貴方の方が詳しいと思うのだけれど」

なんだと？ とギンコが返す。その言葉に反応するように、どういうわけか、徐々に沼の表面が泡立ち始めた。その変化は青娥が投げ入れたものを中心に起こっているようで、泡立つ沼からは白い蒸気も立ち上り始めた。その変化に、全員の視線が集まる。

「おお、なんだなんだ」

つい今まで屠自古と言いついていた布都も驚いている。屠自古も同様だ。神子もその変化にどんな理由があるのか、ギンコに尋ねようとして、しかし言葉はかけられずに黙ってしまった。

ギンコの表情は険しかった。強く、敵意のようなものすら含ませて、青娥を睨みつけている。その表情を見て、神子は黙ってしまった。

「ところで太子様、いつからお煙草なんて始められたのですか？」

「え？」

ギンコの視線をよそに、青娥は神子の口元で煙の筋を立てるそれについて言及した。自分に言葉がかけられるとは思わなかった神子が普段らしからぬ声を上げる。

「戸解仙しかいせんに健康など説くのは無意味ですけど、それでもあまり良いことではないのではありませんか？」

「おいあんな。さっきの……実、って言ったか」

ギンコの静かな問いに、人を食ったような態度で神子に話しかけていた青娥の視線が向けられる。ギンコはようやく、彼女のにこやかに作られた表情の意図を汲み取る。これはこの女の仮面なのだ。人当たりの良さそうなのは、無表情と変わらない。屠自古の忠告が思い出された。

ぐつぐつと沼が煮立っている。それに呼応するようにギンコの心も泡立ち始めている。

沼がどういう変化を迎えているのか、ギンコにはよくわかった。だがその変化から導き出せる事実は、到底認められない。だからこそ、青娥への視線であった。

「あら。思い至りました？　じゃあ知識はあったんですね」

「……まあな」

「ならご想像の通りです。普段の金丹づくりとは少々勝手が違ったので時間がかかってしまつて……それだけが反省点ですね」

「ギンコさん……これはどういう」

ギンコは神子の方を見なかった。少しでも視線を伏せて、努めて何処かを見ようとはしなかった。代わりにギンコの口からは、重たく、低い響きが聞こえてくる。

「……さっきの種、あれはおそらく、蟲師の間でも禁忌とされる代物だ。いや、それに近いものだな」

「禁忌……？」

不穏な意味の言葉に、神子も思わず身構えた。青娥は、不敵に口の端を吊り上げる。

「今、沼は浄化されている。腐酒が土地に還り始めているんだ」
「本当ですか」

「ああ。もともと腐酒を消滅させるには、一定量の光酒で中和する手段がある。ご存知の通り、俺には手持ちの分はないし、お前さんらに渡した分でも全く足りないから、解決策としては勘定に入れてなかったんだが……」

「さっきの種で、それが成っている、と？」

沼は蒸気を上げている。ぐつぐつと煮立っている。ぼこりぼこりと水音を立てて、今にも何かが這い出してきそうな錯覚をする。

「ナラズの実、というものがある。とある蟲師が、光脈を封じ込めたという実でな。埋め込んだ土地に豊穰をもたらし、その恩恵に預かった生命体をひとつ奪っていくというものだ。無論、光酒の塊のようなそれだ。性質はおいておいても、大量の腐酒を浄化する手段として、理屈は叶う」

「ではさっきの種が」

「いや、ナラズの実は普通人には見えないものだ。見えるのは、蟲を視る性質の者だけだ。さっきの種は、お前さんにも見えただろう？」「はい。珍しい形ではありましたが強い力を感じて……彼女が持ち出したものですし、それで金丹だと直感的にあたりをつけたのですが」「なら、おそらくはそうなんだろう。ただ、腐酒が浄化されているのを見るに、お前さんらのよく知るそれとは少し違って、蟲師の間に伝わるものとの混ざりモノ、と言ったところか……」

ギンコの語りを区切るように、ぱちぱちと乾いた音が鳴る。青娥が無遠慮に手を叩いた。

「ご明察ですわ。流石です」

「青娥。では貴方はすでに、光酒の存在を」

「ええ、ええ。存じています。妖怪の山が光脈筋として目覚めたことも」

「なんだと」

ギンコの表情に一層の警戒が浮かぶ。今や青娥の印象は邪悪のそれだ。仙人が光酒の存在を知る。考えられるいくつもの未来が、赤黒く腐れていくような気がした。

「お怒りですか？」

「愉快そうに見えんのかい」

「あら怖い」

「青娥」

「太子様もらしくありませんね。こんなに繊細な方と親しくされるなんて。光酒のお話を聞けば、喜んでくださると思っただのに」

「それは……」

神子はギンコを見る。確かに、神子はギンコから力づくでも光酒を手に入れようとした。それは、決して利己的とは言いい切れない事情があつたのかもしれない。それでも事実は事実であり、過去とするには新しすぎる昨日である。

光酒は救いだ。良い資源だ。うまく使えば、多くの利を生み出すだろう。それは変わらず、神子の胸中に渦巻いている価値観だ。指摘されれば、その通りだと認めるしかない。仙人とは利己的なものだ、それでも。

「青娥、人は恥を知ります。光酒は救いですが、欲にかまけて身を滅ぼすのなら、その行いは獣の所業。私は、恥を知らぬ獣にはなりません」
毅然とした態度で突き放す。それはギンコは知る由もない、いつかの為政者の矜持きやうぢだつたのだろう。多く人の間を渡り、欲を見届けてきた彼女の矜持。煙が音を遮り、暗い道を照らす標しるべが隣にあるのなら。もう迷えなかつた。

「そうですか……」

青娥は心底残念と言った態度で神子を一瞥し、次の瞬間にはくるりと背中を向けた。立ち去ろうとする青娥に、ギンコが声をかける。

「おい待て」

「私、ここにもう用はありませんわ。なんだかきな臭くなつてまいりましたし」

「太子様！」

布都が声を上げる。ギンコは気が付かなかつたが、いつの間にかギンコらと沼を取り囲むように多く雪を踏み均ならす足音があつた。風雲急を告げる、軍靴ぐんかの響き。いや、そんな物々しく、明瞭な敵意ではない。

ずるずると引き摺り、はい寄る、蛇行のようにまとわりつく視線があった。敵意として開花する直前の、粘着ねばっくような悪意、恨み。ぼこりぼこりと泡を立てる赤黒い血の池地獄の音に誘われ、亡者の群れが近づいてくる。沼を取り囲みつつあるのは、山に住む、仙人や世捨て人に相違なかった。

風が吹く。沼の蒸気が流されて、ギンコの前髪を洗うところまできた時、ギンコの目と鼻に激痛が走った。

「ぐふっ……！」

「ギンコさん!!」

何が起こったのか、ギンコにはすぐ理解できた。反射的に息を止めて顔を外套の裾で覆い、体を丸め、沼の近くから飛び退いた。激痛は一瞬だったがそれでも涙で視界はぼやけ、頭痛がしてくる。

うずくまるギンコの側に駆け寄る神子も、何が起こったのか直感的に察する。

「あらまあお可哀想に。いえ、お気の毒……かしら？」

「沼の蒸気……！ 毒性の霧になっているのか！ 布都！ 手を貸しなさい！ ギンコさんを沼から離します！」

「は、はいー！」

神子と布都に支えられながら、ギンコは立ち上がり、沼から少し離れた。その様子を見届けることなく、青娥は来た時と同様に、するりと粉雪の向こうに消え去った。

立ち枯れて頼りない樹木は、それでもギンコを支えることにいささかの問題もないようだ。体重を預けるようにして座り込み、新鮮な空気を二度三度大きく肺に取り込めば、頭痛も引いて気分が楽になってくる。

「大丈夫ですか」

「ああ……助かったぜ」

「お礼など。それより、もっと早く思い至るべきでした。光酒による腐酒の浄化は薬品のあれこれには作用しない。青娥の対処で沼から腐酒は消え去り、骸草の発生源としては一応の解決をみるでしょうが

……沼は汚染されたまま、なのですね」

神子の言葉に、ギンコは頷いた。自分も青娥の存在に気を取られていなければ、すぐに思い至っただろうに。ギンコは少し後悔していた。

「あいつは……あの娘は？」

「青娥は、もう何処かへと……」

「……そうか」

ギンコは息を整えながら、思考を巡らす。しかし、うまく考えがまとまらなかった。だからぼつりと、ただ感じたことを口からこぼした。

「痛快だったぜ、太子様よ」

「え？」

『人は恥を知る』。全く、その通りだ。そんな当たり前を、もつというんな人間がわかってくれりや俺も楽なのかもしれないねえ……」

ギンコの皮肉に一瞬きよとんとした表情を浮かべ、次に、神子は吹き出して少し苦笑した。

沼から離れても、災難の気配は去らない。ずるりと沼を取り囲むように集まっていた人影は、今や中心点をギンコらに移している。もとよりこちらに用があったのだろう。座り込むギンコに、寄り添うようにしやがみ込む神子とそこを守るように二人の従者が立つ。

ぬ、と人影が一つ歩み出る。その人物は、ギンコも見知った顔だった。

「あんた……あの時のじいさんか」

「若者よ。儂らの同胞が世話になったようじゃな」

ギンコがこの辺りの山に入った時、初めて出会った山小屋の老人だった。ギンコが出会った時には既に、近頃の蟲患い、骸草の影響を受けて、治癒の代償に片足を失っていた。

老人の後ろに続く人影も、見ればほとんど片足を失っている。事情は皆同じ。共通項がわかりやすい集団だった。不穏な雰囲気を感じたギンコが起きあがろうとする。それを神子がやんわりと制した。

老人はギンコを一瞥し、次にその傍らにいる神子に視線を向けたあ

とその視線を伏せ、恭しく礼をした。

「豊聡耳様。此度は死を運ぶ奇病のふちより、我らをお救いくださいつたこと、深く感謝申し上げます」

「世辞はよい。用向きを申せ」

神子はギンコや布都らに見せるような柔らかな態度を引つ込めて、威厳を感じさせる伶俐れいりな口調になった。剣呑な態度だったが、それも仕方のないことだった。

「……では恐れながら」

老人が伏した視線を上げる。その目は深く、濁りを湛たえる沼のよう。

神子は先ほど、ギンコを助け起こす際に蟲煙草を落としてしまっていた。だから彼女の耳には、今ざわざわと蟲のさざめきが近づき始めている。人を発狂させ、死に至らしめる大音響の走り。しかしそれらの音に負けないほど、目の前の者たちから強い声がする。馴染みのある、欲の腐れた声がする。

「豊聡耳様。なんでも此度の奇病、治癒した者のうちには足を失うことなくすんだ者もいるとか」

「そうだ。それがどうかしたか」

「聞けばその者らは、儂らが受けた治療法とは別のものを試されたそう」

「そうだ。それがどうかしたか」

一を聞けば十を知る神子にとって、その問答は既に無意味であった。

「……豊聡耳様。お答えいただきたい。何故儂らは片足を失う必要があったのか」

「それは治療のためだ。放っておけば死に至る病を治すため、副作用のある薬を使ったために、お前たちは片足を失くした」

「しかし片足を失わずに治癒した者もおります」

「その点はこちらにおられる識者のギンコ殿に礼を言うが良い。新たな治療法は全て、彼の智慧ちえによってもたらされたものだ」

神子が淡々と老人に答えるたび、ぼそぼそとつぶやきがこだます

る。後悔の念を含ませたつぶやきが訥々と耳に届く。煩わしい。

「なるほど。では豊聡耳様が考案なされた治療法では片足を失くし、そちらの識者が考えられた治療法ではなんの代償もなく病を治せると、そう仰るのですかね？」

「貴様……弁えろ！^{わきま} 太子様への無礼は……」

神子は立ち上がり、激昂しそうになる屠自古の肩を叩いて一歩前に出た。ギンコもその背中を見守る。

「いかにも。私の治療法は片足を失う。しかしギンコ殿の治療法ならなんの代償もなく病は治る」

「……ならば、なぜ」

「くどいぞ。凡骨^{ほんこつ}」

神子が強く言い切ると、それに呼応するように足元の雪が少し舞い上がった。神気か、妖気か、霊力か。蟲を視るギンコをして目に見えない、圧力のようなもの。濃密な気配。それでも言い表すのなら、この時は、怒りが一番近かった。

神子の耳に、ごうごうと音が轟き始める。煩わしい。

神子は蟲煙草を取り出す。東の中から一本摘んで、口に啜えた。啜えたその先端がバシリ、と爆ぜるように火がつく。雷光のような一瞬の明滅だった。

「貴様らは不満に思っている。なぜ自分達だけが、代償を払う羽目になったのかと。貴様らは不平を唱えている。なぜ後の者だけが、よりよく救われたのかと。貴様らは疑念を抱いている。救われるばかりの我が身が、もたらされた不幸が、実は全てまやかしだったのではないかと」

細く棚引く白煙は雪の白さにも溶け込むことはなく、妙に神子の周りにまとわりついて、輪郭をぼかしている。蟲の声を遮り、神子の耳を、心を守っていた。

ギンコにも、全容は掴めない。彼らはなぜここにきたのか。これから何が起きるのか。不平、不満、疑念が渦巻く空気は粉雪のように軽くはない。どこまでも重苦しく、冷気のように下に留まり続ける。

例えば、ギンコがもつと早くにこの山にやってきていたのなら。例

えば、神子が完全な知識をもって治療法を探していたのなら。例えば、仙人たちにも蟲の姿が、声が、届いていたのなら。あるいはこうはならなかったのかもしれない。

最初こそ神子を追及するような言葉を並べていた老人だが、神子の言葉には思うところがあつたのだろう。口ごもる。

「儂らはただ……」

「光る酒が欲しいのか」

その言葉に、ギンコは息を呑んだ。何かを言いかけた老人も、続く言葉を失った。全てを聞き分ける神子だけが、淀みなく言葉を紡いでいく。

「……皮肉な話だ。一度は私も、貴様らと同じように探し求めたものだが、今はこうしてそれを守る立場にあるとは」

「やはりその若者が、光る酒について知っているのですな。豊聡耳様！」

老人が語気を強めた。それに同調するように、周囲の人影からもお、お、お、と声上がる。そいつを寄越せ、どこにある、そう叫ぶ声がする。

じりじりと人垣が迫ってくる。気がつけば、足がない者ばかりではない。ギンコの治療で光酒を口にした者もいた。光酒の性質に触れたことで、何かを察したのだろうか。巧妙に言い繕うばかりではない。神子の言うところの人の獣性が、ギンコの前で口を開ける。

ギンコにもわかる形で、欲望が肥大化している。異様な執着心と熱気を孕んだ視線は、暴徒の一步手前まで膨らみ、きつと今すぐにでも、泡が弾けるように走り出すのだろう。

ギンコも流石に身の危険を感じて立ち上がる。まだ目は霞むが、体の動きに支障はない。

そして彼らはきつと、ギンコを帰すつもりはない。それが容易に想像できた。

「一応忠告をしておこう。やめておぐがいい。あれは、貴様らの手に負える代物ではない」

「ではその若者にも、扱えるものか？ ならばその若者と話をさせ

ていただきたい。その光る酒とは如何なるものなのか」

「やれやれ。誰に唆そされたのかは……まあ大体見当はつくが……浅ましいことだな」

「浅ましい？ 失礼ながら、それは御身おんみも同じことでしょうに」

老人の言葉に神子は自嘲して、口の端を吊り上げた。

「そうだな。その通りだ。ならば察しの悪い貴様らには、はつきりと告げてやらねばなるまい」

蟲。仙人たちは、その存在を明確には知らずとも、その価値は明確に理解する。片足を失い、修行も満足にこなせるかわからない。これまで失ったものを補填するために、これから価値あるものを求めるのはある種必然だ。

ひととき強い風が吹く。神子の外套が翻る。

「ならぬ。あの光る酒も、そしてこの男も、全て私のものだ。貴様らに渡すものなどない」

決定的な断絶だった。まだどうかにか、人の体裁を保っていた者たちが退路を断たれる。ならば、仕方がない。そんな言葉が集団の足元からじわりと染み出してくるような気がした。

たとえ浅ましかろうと。知ったことかと、求め、這い上がろうとする。光ある場所を求め、蜘蛛の糸をたぐる。そこに倫理も道徳もありはしない。押し退けてでも、掴もうとする。彼らは失ってしまったのだ。もう引き返せない。

「布都。屠自古」

「はい」

従者二人の返事が重なる。

「ギンコ殿を今すぐ山から下ろしなさい。ここは、私一人で抑えます」
「なあ、あんた……」

「ギンコさん」

ギンコにはもう、言葉がない。膨れ上がった欲望は、ギンコが背を向けた瞬間に飛びかかってくるのだろう。

自分は考えが浅かったのかもしれない。そんな絞り出すような、後悔を滲ませた言葉は、しかし神子に遮られた。

「今度は春にお会いしましょう。新しい梅を摘んで待っています」
「……ああ」

短くギンコが答えると、有無を言わさぬ勢いで布都と屠自古が両脇からギンコを抱えて飛び上がった。速度を上げて小さくなる彼を見送る視線はない。その代わりに神子は、口に啜えたそれを摘んで、薄く煙を吐いた。

「さて……戯れじゃ。聞かせてみる。貴様らの欲を」

「ギンコよ。我らはここまでだ」

「ああ」

神子を一人山中に置いて、飛んできたここは山の麓だ。木々が開け、平坦な道が伸びている。わかりやすく人が通るための道だ。進めばどこかしか、人の気配のする場所に出るだろう。足跡が全くないことが、少しだけ心細い。

天気は相変わらず、曇天から粉雪が舞い、寒さが横たわっている。道の一方を指差して布都が言う。

「こつちに進めば人がいる。少し距離があるが、お主の足なら日の入りまでには着くはずだ」

「わかった……世話になったな」
「何を言う。こちらこそ、お主には感謝している。まあ、こんな別れにはなってしまったが……」

布都は残念そうにつぶやく。さっきの光景を思い出しているのだろう。ギンコもその気持ちはよくわかった。

この山に、自分が来たことは間違いだったのではないか、とギンコは思った。骸草におかされている仙人を治したことは、結果として光酒の存在を含め、ただ悪戯に混乱を招いただけのような気がしていた。

沼のこともそうだ。ギンコは沼が人の手によって汚染されている現状をどうにかしようとしていた。それは、今思えば、余計なことだったと言えなくもない。

あの沼に近づく者は、仙人ばかりだ。彼らにとって、廃棄する薬毒は直ちに体に影響を与えない。腐れ、侵されるは自然ばかり。それは彼らにとって関心の浅いこと。だからこそ真に彼らの目的に沿うならば、腐酒さえ、蟲さえ、どうにかできればよかったのだ。そういう意味で、青娥は実にうまく問題に対処したと言えた。

沼にはまた、誰かが捨てにいくのだろう。そしてまた、いつか確かな破綻を迎える時まで、沈黙を保ち続けるのだろう。

思えば神子の考え方もそうだった。共存など端から考えていなかった。いや、仙人らにとつてそれは、第一義ではなかったのだ。ただそれだけのことが、大きな隔^{へだ}たりだった。

それでも、神子は最後には、ギンコの思いを汲んでくれた。あるいはそれは、そうした方が都合がいいと判断しただけなのかも知れない。ただ、また会おうと言った別れの言葉を信じただけなのかも知れない。そんな疑念を抱えつつも、記憶の中の梅の香りだけが、優しい約束であるような気がした。

人は恥を知り、後悔を抱える。あまりいい気分ではなかった。それを察したのか、布都が明るく振る舞おうとする。

「心配するなギンコ。太子様はお強い。あの程度は者の数ではないわ」

「そうだな。まったく……恩知らずどもめ。今頃は太子様にキツイお灸を据えられているに違いないわ」

屠自古も同調し、パリパリと帯電している。ささくれ立った感情を表すようなそれは、わかりやすい共感にもなった。

だが気分は晴れない。ギンコは二人に、曖昧な返事をした。

「落ち込むなギンコよ。お主のせいではないぞ」

「ああ……」

「太子様も仰っていたらう。次に会うのは春だ。餅は好きか？ 雑煮は？ 美味しいものも楽しいことも、春にはたくさん待っている」

「……ああ」

「花見もあるな。陽気に包まれ、花を愛でながら飲む酒は格別ぞ。酒飲みは塩気を好むようだが、我はもっぱら甘味と合わせるのが好き

だ。それから……」

「布都。もう良い。そろそろ戻るぞ」

布都の言葉を、屠自古が遮った。

「屠自古……しかしな」

「……いや、すまん。心配をかけた。こつちは、もういい」

「そら、ギンコもこう言っている。この男は太子様と対等に付き合える賢者だ。そうそうヤケは起こさん。それよりも、我らは太子様をお守りせねば」

屠自古はそう言うと、布都の返事を待たずに空中へと浮かび上がった。

「先に行く。達者でな蟲師殿。また会おう」

短い別れの挨拶を残して、もう屠自古は振り返らなかつた。布都はそんな屠自古とギンコを交互に見やり、しばらく黙っていた。だがそれも長くはなかつた。

「……屠自古の言う通りだな、ギンコよ」

「ああ」

「我也行く。者の数ではないにせよ、やはり太子様が心配だ」

布都が中空に印をきる。その奇妙な指の動きは旋風を呼び起こし、それは次第に強くなっていく。

「さらばだギンコよ！ 道中達者でな！ また会おうぞ！」

風と共に布都が飛び上がる。わずかに足下に積もっていた細雪を巻き上げて、旋風が山向こうに消えていく。突風に目を細め、舞い上がった雪が視界を塞ぐ。晴れて目を開ければ、残されたのはギンコ一人。あとにはもう静寂が寄り添うばかりだった。

言葉もない。落胆もない。ただ今は、孤独が慰めのような気がする。ギンコは歩き出した。ぎしりと雪を踏み締める。何か重いものを背負っているような音だった。

遠くで風が鳴いている。粉雪はいつの間にか勢いを増し、密度濃く降り始めた。肩も頭も、白で覆われる。どのくらい歩いたのだろうか。道はまだ続いている。

山から離れる。それが少し後ろめたくて、ギンコはここまで振り返

らなかった。どうしようもなかったのだろう。ギンコはギンコで、やれることをやったはずだ。それがどこか言い訳じみていたとしても、人の身では春を待つことしかできなかった。足が止まっている。ギンコは振り返った。

山があつた。大きな輪郭。空に引かれた稜線が見える。あそこには人がいる。それもここからでは確認できない。さっきまでの全てが、もう山の一部だった。

不意に影が差した。雲を透かした陽光を、さらに遮る何かギンコの頭上にかざされる。それは大きな茄子色の傘だった。振り返ると、大きな傘の小さな持ち主がギンコを見上げていた。

「人間さん寒そうだね。傘、使う？」

「……ああ、そうだな」

ギンコは歩き出す。冬はまだまだ終わらない。それでも春の訪れを胸に秘め、耐え忍ぶ。

山で風が鳴いている。嘲るように、鳴いている。その身を隠すように、ギンコは少し、深く傘を差した。

東方蟲師 『外譚ノ章』

言海の代（第二章後幕間）

————— 『言海げんかいの代よ』 —————

足の傷が塞がりかけている今、ギンコのすることはほとんどない。暇そうに、とある家の縁側で蟲煙草を吹かしながら、ギンコは足の具合を確かめていた。

そろそろ歩けそうな具合だ。包帯を巻いた片足を立て、ちよいと力をかけてみる。鈍い痛みが走るが、力が入らないというわけではない。縁側から立ち上がり、庭先へと足を踏み出した。

足を少し引きずるような格好になったが、問題なく歩ける。ふと空を見上げれば、そこには陽気な晴れ間が覗いている。だがしかし、よくないものも一緒に、視界の端に映った。

それは庭に生える一本の木。夏の盛りも最高潮の今に青々と葉を茂らせるそれに、絡みつくように小さな存在がだまになっていた。

ギンコは蟲煙草の煙を、そのだまになっている存在に吹きかけた。ぼんやりと光を放つそれらは、煙にまとわりつかれた後、豆腐を握り込んだみたいにだまが潰れて、ひとつひとつに分かれて散っていった。

「お、杖なしで歩けるようになったのか」

そんな風に蟲を散らしていると、ギンコの背中に声がかかった。この家の家主である、寺子屋教師の上白沢慧音だった。家の中から、障子の敷居越しに、ギンコに話しかけたようである。

「ああ。そろそろ、こころも立とうと思う」

「そうか？ 少し気が早いんじゃないか？」

そう言いながら縁側に出てきた慧音の背には一人の赤ん坊が背負われている。蟲の子でありながら、人の子と変わらぬモノ。竹林に住む炭屋の少女に、筍の子供、筍子と名付けられたその赤ん坊は、今日は彼女に預けられているようだった。

気が早いこともないさ、とギンコは慧音に言う。

「むしろ長居が過ぎるほどだ。ここらは蟲が少ないからどうにかなるかとも思っていたが、いよいよ集まり始めたようだな」

「そうなのか？ 私は見えないからよくわからないが」

よしよし、と慧音は赤ん坊をあやしている。

ギンコはとある特殊な体質を持っていた。それは蟲を寄せるといふ体質。一つ所に留まれば、そこを蟲の巣窟にしてしまうという奇異なもの。それがああるから、ギンコは根無し草として流れ流れている。

幻想郷にはどういいうわけか蟲が少ないので、ギンコでも長居できる場所があり、人里はまさにその土地だったが、さすがに長居が過ぎたようで、最近をよく、家の周りで蟲を見るようになった。

ひよこひよここと少し足を引きずるように歩いて、ギンコが縁側に腰を下ろす。そして蟲煙草を地面に落とし、健常な足の方でそれを踏みにじった。どうも最近の子供の近くにいと、煙草を消す癖がついているらしい。最初から口うるさく注意していた炭屋の少女を思い出した。

「そうだ、ギンコ。頼みたいことがあるんだが、いいか」

「なんだ、改まって」

日頃、というかここ最近世話になりっぱなしの慧音の頼みならば、よほどのことでない限りは聞き入れよう、とギンコは構えた。

「足が治ったなら、ちよつと届け物をしてほしいんだ」

「届け物？」

そうだ、と慧音は頷いた。その動きを、ギンコは座ったまま首だけで見上げる。

「私が書き留めた歴史の書物を、稗田家まで届けてほしい。頼めるか？」

「あー……」

ギンコはその頼みで、慧音が満月時に見せた姿を思い出していた。陶器のような白さを持つ二本一對の長い角を頭から生やし、若草の汁で薄く染め上げたような色の尻尾を波打たせていた異形の姿。

彼女いわく、満月の夜にその姿となって幻想郷の忘れられた歴史を紙に記すのだそうだ。一月にたまった仕事をまとめて片付けている

らしく、気が立っているのであまり近づくなど言われたのは、満月の夜が終わった今日の前にいる慧音にである。事前情報が少なかったギンコは、その姿に驚き、気が立っていた彼女に撞木の如き頭突きを食らって昏倒してしまった。それはそれは、なんとも苦い経験だった。

「なんだ。満月の時は悪かったよ」

それを察したのか、慧音は少し照れくさそうに謝罪した。

「いや、根に持ってるわけじゃねえよ」

ギンコは慧音の謝罪に対し、少し口の端を釣り上げた。

筆を手取る、というのには、もう彼女に対して使う言葉ではないのかもしれない。それほどまでに、筆という存在は彼女にとって、自然な存在となりつつあった。

珍しくも筆を置き、固まった背筋を伸ばす。今朝から硯に向かい続けて、もう昼過ぎだ。食事もとらずに、ここ最近では編纂ばかりしている気がする。こうして使命に没頭している間は、余計なことを考えずに済むからだろうか。彼女はとにかく、没頭することで何かを考えないようになっていた。

鳥の囀りが聞こえる。メジロだろうか。中庭の木に、番の鳥がやってきた。

立ち上がり、和室を出て、文字の海から逃げ出すように、日の光を仰いだ。手で作った庇の向こうには、雲がまばらに広がる青空が広がっている。陽光に照らされ、熱を持つ頬が心地よく、なんとなく、中庭に出てみようという気になった。

縁側に座り、足袋を脱ぐ。汚してしまつては申し訳ない。そう思えるくらいの、輝かしい白。何度も履いているはずなのに、一向にすり減らない白い足袋は、ただ履いて脱いでを繰り返しているだけで、私の生き方を象徴しているようだ、彼女は思った。

玉砂利の敷き詰められたそこは、少女の素足には少し熱いくらいの熱があった。思わず裸足で降り立ったことに後悔しながら、それでも

彼女は、後ろではなく前に進んだ。

薄く、苔のような草が生える土の地面に足を乗せる。熱を持った足の裏が、ひんやりとした土をつかんだ。目の前には、剪定されて整えられた松の木がある。切りそろえられた針葉樹は、人間には美しくとも、自然とはどこか離れているようで、鳥たちは落ち着かないように、枝から枝へと忙しなく移動していた。

松の根に腰を下ろす。ごつごつした幹に触れる。私は何をしているのだろうか。こんなことをしても何の意味もない。それはわかっているのだ。

編纂を続けなければ。そう思っても、今日はなんだか気怠げな思いが胸中を占めていた。

「……か……」

表札に書かれている稗田の文字を読み、ギンコは目的の場所にやってきたことを確認した。

稗田家は里の中心近くにあった。

慧音に頼まれた歴史書は風呂敷に包んで左手に持ち、右手では杖をついている。門戸をたたくため、杖を左手で持ち直し、ギンコは立て付けのいい木の戸を右手で揺らした。

しばらくして、はーいただいま、と戸の向こうから声が聞こえた。がたごと、と裏側で門を外す音がして、戸の隙間から若い女が顔を出す。

「どちらさまでしよう」

「ギンコと申します。上白沢さんから、届け物を頼まれましたな。こちらを」

そう言つてギンコは左手に持っていた風呂敷を少し持ち上げて見せた。深い緑色の包みに視線を落とし、ギンコの顔を見る。しばらく、その奇異な見た目を品定めするように、見つめた。

「……もしかして、蟲師のギンコさんというのはあなたのことですか？」

そして唐突にそんなことを聞いてきた。そうですが、とギンコが答えれば、木の戸は素早く開け放たれた。

「そうでしたか。あなたのお噂は何っております。あの、宜しければぜひお上りください」

「いや、こっちは届け物しに来ただけだし」

「そう言わず。ぜひお願いいたします」

頭を下げつつ、頼み込む侍女らしき女性の姿に折れたのか、ギンコは二度、断ることはしなかった。

「んじゃ、お言葉に甘えて」

そう言つて、ギンコは稗田家の敷居をまたいだ。

「少々お待ちください。今世話役を呼んで参ります」

風呂敷を傍らにおき、ギンコは座卓の一端に腰を下ろした。

通された和室は、床の間に飾られた書といい、壺といい、部屋全体の基調が抑えられつつも気品を感じさせる空間作りがなされていた。慧音の家とは違う雰囲気。とても格式高いと言えはいいのだろうか。不思議と落ち着くようだ、とギンコは思った。

湯飲みを手に取り、ふと左を見る。開け放たれた障子戸の向こう側には、手入れされた松の木がある中庭が見えていた。

素朴な庭。この部屋と同じように、丁寧だが派手さがない。そんな中庭を眺めていると、ギンコは松の木の根元に背を預けて丸まる、子供らしき人影を見た。ギンコの口元に近づけられた湯飲みが止まる。

何をしているのだろう。日差しが穏やかな、過ごしやすい夏の午後、午睡でも楽しんでいるのだろうか。じつとその様子を眺めていると、失礼します、と男の声が聞こえた。声のほうを振り向くと、襖を開けて、一人の男性がギンコの方へ頭を垂れていた。

「ようこそお出でくださいました、蟲師のギンコ様」

いきなり様扱いとは、仰々しい歓迎だとギンコは思ったが、とりあえず不快な思いはなかった。湯飲みを置いて男性に向き直った。その間に、男性は敷居をまたいで襖を閉じた。

その人は初老の男性だった。白髪の混ざり始めた頭髪は綺麗に整えられ、深く掘り返したような土の色の着物を丁寧に着こなした身なりのいい男は、頭を上げると皺の目立つ朗らかな笑顔を浮かべてい

た。

「里をお救いいただいたこと、里の者ら、また一族を代表して、改めて御礼申し上げます」

「いや、そんなかしこまるほどの事でも。俺はできる事をやっただけですよ」

「それでも、あなたのしたことは偉大です。里の医者も匙を投げた病を治したのですから」

そう手放しに称賛を送られれば、なんだかむず痒い思いがする。ギンコは首を撫でて、へえ、と答えた。

「申し遅れました。私はこの稗田家で世話役を任されており、志辻しつじと申します。どうぞ、お見知り置きを」

「んじゃあ、ご存知かとは思いますが、俺も一応」

すでに歓迎された後だったが、ギンコは改めて名乗った。

「蟲師のギンコと申します。あの、稗田家っていうのは里の顔役かなんかで？」

ギンコは初老の男性に尋ねた。周囲の民家とは一線を画す雰囲気に、つい尋ねてみたくなつたのだ。しかし、志辻はギンコの言葉を否定した。

「顔役など、そんな大層なものではありません。うちは代々、幻想郷の歴史を編纂しておりますだけのこと」

「へえ」

歴史の編纂。慧音に持たされた資料も、彼女が書き留めた隠された歴史だと言っていたな、とギンコは思い出していた。

歴史。ギンコには最も縁遠くも、身近な言葉かもしれない。それは過去として積み重ねられた記録のこと。自分の過去すら曖昧なギンコにとって、蟲師としての知識がそれに当たる。

過去の人物たちの経験。ギンコはそれを知っているだけだ。自分の経験は、ある一時を境に綴られ続けているものの、そこから向こうは忘却という闇の中にある。

「歴史ってのは、この場合何を指してらっしゃるんで？」

ギンコにとっての歴史が蟲師としての知識だとするなら、例えば上

白沢慧音の歴史は寺子屋の教師としての経験だろう。歴史は受け止める側によつて、その姿を変える。ギンコは稗田家が一体どんな歴史を記録しているのか聞いた。

「そうですね……幻想郷そのものの記憶とでもいいでしょうか。ありとあらゆる記録、特に魑魅魍魎に関する勢力を調査したものが主です」

「へえ。妖怪とか、そう言ったものを？」

「ええ。人里において、危険区域の注意喚起を行うためには、必要不可欠なので」

「おお。じゃあここには幻想郷の地図が？」

ギンコは地図が欲しい。これから幻想郷を旅して回る身の上なら、絶対に必要になる。ここでそれが手に入るなら、言うことはない。身乗り出したギンコに、しかし志辻は首を横に振った。

「地図はありません。あくまで人里を中心と考え、どの方向に何があるか程度のもんです。ご期待に添えず、申し訳ない」

「そうですか。いや、こつちこそ厚かましいことを言いました」

ギンコの期待は空回りだったが、もともと手に入るとは思っていなかったものだ。厚かましいというのもその通りで、ギンコの謝罪で、この件はお互い様となった。

「そういえば、今日は上白沢様の代理でお届けものをしていただいたとか」

思い出したように、志辻が言う。様付けの呼称は、この家では平常運転のようだ。

「ああ。なんでも歴史を書き留めたものだ」と

渡されたときこそ首をかしげたギンコだったが、今思い返せば風呂敷の中身は幻想郷についての資料ということになるのだろう。風呂敷を持ち、ギンコは志辻の前にそれを置いた。志辻はそれを受け取り、少し風呂敷を広げて中身を確認して、再びギンコに頭を下げた。

「ありがとうございます。確かに受け取りました。上白沢様にも、よろしくお伝えください」

「ええ。承りました」

それとついでと言ってはなんですが、と風呂敷を縛り直しながら志辻は続けた。

「お時間よろしければ、これから会って頂きたい方がおります。よろしいですか？」

「ええ、構いませんよ」

ここまですれば一人会うのも二人会うのもかわりはしない。ギンコは二つ返事で、志辻の申し入れを承った。

どうぞこちらに、と志辻は座卓をまたいで向こう側、ギンコからすれば座卓の左側、中庭の見える通路へとギンコを促した。その途中、またギンコは中庭の松の木を見た。手入れされた根元にはもう、童の姿はなく、小さな足跡が付いているだけだった。

中庭をぐるっと回るようにして、客間と真向かいの部屋を指す。その途中で、志辻はギンコに言った。

「これからお会いいただくのは我が稗田家のご当主です。いつもは編纂に勤しんでおられますが、今日はどうも筆が乗らぬ様子でして、ギンコ様のお話をお聞かせ願えればと……」

「俺の話？ あいにくと、こっちは語るべき過去も持ち合わせちゃありませんが」

「ご謙遜を。蟲というものに対しての知識や理解は抜群でありましょう。そうでなくとも、ここまでの物腰を思いまして、知識人であるというのは明瞭です」

「へえ、じゃあ俺は、ご当主様の暇つぶしの相手をすればいいと」

「有体に申し上げるならばそういうこともなきにしもあらず、でしやうか。しかしギンコ様なら、ご当主様にお会いしていただければ私どもの意図を察していただけると思っております」

つきました。と志辻は一つの障子戸の前で足を止めた。歴史書の編纂に勤しむ家系の当主。いったいどんな人物なのだろうか。ギンコは知らずのうちに深く呼吸をして、その障子が開け放たれるのを見送った。

ハツとして、私は目を覚ました。どうやら少し眠ってしまったらしい。かくり、と重力に負けた首が地面に引っ張られ、少々驚きの目覚めだった。

眠っていたのはほんの少しだろう。家の者にばれていないのが証拠だ。固まった背筋を伸ばし、きよろきよろと辺りを見渡す。誰もいない。よし、ばれていない。そうして静かに立ち上がり、ふと後ろを振り返った。

中庭の向こう。障子戸の先にいる来客に視線を向ける。誰だろうか。遠目からでもわかる、白髪の男。志辻さんよりも年上なのだろうか。妙な雰囲気のある男であるとは思った。

そろそろ戻らなければ。玉砂利を踏んで、足の裏に少しついていて土を落とす。白いそれに、茶色いものが点々と残った。

足袋を持って敷居をまたぎ、後手に障子戸を閉める。少女を待っているのは硯と筆と、書物の海。言の葉の海。

硯に向かって座り、足袋を履き直す。思わず、ため息が出た。

私は自分の仕事を、辛いと思ったことはあるが、嫌いになったことはない。幻想郷においての歴史の編纂者。歴史を体現する生き様を、嫌いだと思ったことはない。

転生についても同様だ。辛いと思ったことはあった。転生までの数百年間で、人間関係は必ずリセットされ、顔なじみは死に、新しい顔ぶれが、変わらず私を愛で慈しむ。短い寿命と、それだけが辛く、不気味なことだった。

だが今日はなんだか、自分の仕事が嫌いになりそうだった。なぜかはわからない。筆を持っていると妙にそわそわし、じつとしていられない。変化のない毎日に飽きてしまったのか。もしそうならとつくの昔に飽きがきているはずだと考え直す。

やる気が出ない。やる気など必要としなくなっていた作業ができない。言うなれば、この言葉の海に、新しい風が欲しかった。波風を立てる風、あるいは、波紋を起こす小石の一つ。そう望んでいた折だった。

「阿求様。お客人がお見えます。入りますよ」

はて、今日は客人の対応など予定に入っていないなかつた気がするが。いったい誰だろう。そこまで考えて、私は先ほどの来客の顔を思い出していた。

障子がゆっくり開いていく。人一人通れる隙間に、ん？ 入ってもいいのか？ と男が言う。

白髪の男。妙な雰囲気のもの。言の葉の海に、一石が投げられたように感じた。

ギンコが通されたのはとある一室。そこには硯に向かう、一人の少女がいた。長く伸びた巻物に何かを書き連ねている。あの時、松の根元で見た少女に相違ないように思った。

ギンコは自分が持ってきた風呂敷を志辻から受け取り、敷居をまたいで室内に足を踏み入れた。

「どうも、蟲師のギンコと申します」

「ああ、あなたが蟲師でしたか。いつぞや里をお救いになられたという」

「救ったとか、そういうことじゃねえんだけど……まあいいか」

邪魔するよ、とギンコは文机を挟んで腰を下ろす。目の前にいるのは齢にして十もいかぬほどの少女。短い髪と、重ねられた着物が着せ替え人形のように、服に着られてしまっている印象を受けた。

「さつき松の木の根元で寝てただろ。見てたぜ」

「あらお恥ずかしい」

見られていたのか、と阿求は思った。目を伏せて、少し崩していた足を正す。

「ご挨拶が遅れましたね。稗田家九代目当主の稗田ひえだの阿求あきゆうです。蟲師のギンコさん、でしたか。今日はこういった御用向きで？」

「上白沢さんの代理で、資料を届けにきた。ついでに、歴史の編纂するのは何をしているのか気になってな」

これ、資料な、とギンコは風呂敷を文机の横に置いた。阿求はそれ

を引き寄せ、結びの口を解く。中には数本の巻物。それを膝の上で広げて、右から左へと視線を動かし、流し読みしていく。

「ギンコさんは、歴史の編纂にご興味がおありで？」

「ああ。これから幻想郷を歩き回るには、必要な知識かと思つてな」

「幻想郷を歩き回る、ですか。危険だどご理解いただけいています？」

「俺はどうも、妖怪に襲われにくい質のようですね。心配はいらないと、八雲に太鼓判を押されている」

「八雲に？ それはすごいですね」

会話の最中も巻物に目を通し、八雲という単語が出てくる頃には一巻読み終えたようで、阿求は巻物をまとめ始める。その速さに、ギンコは目を丸くした。

「もう読み終わったのか」

「はい。一度目を通せば、私は絶対にその内容を忘れませんから」

絶対に忘れない。その話を聞いて、ギンコはん？ と違和感を覚えた。

「……その話、詳しくお聞かせ願えるかな」

「？ ええ、構いませんが」

一瞬、ギンコの眼光が鋭くなったのを感じた阿求だったが、ギンコが何故そうなったのかはわからなかった。巻物を風呂敷の上に戻し、少し考えてから阿求は続ける。

「どこから話したものでしょうか。稗田家の役割からですか？」

「いや、あくまでお前さんの話だけで構わんよ。記憶を保持し続けるというのは、どういう意味なのか、な」

「そのままの意味ですよ。私は見聞きしたものを、絶対に忘れることがない。元は阿礼という私の先祖が持っていた力なのですが……その能力は転生した私にも受け継がれている、ということですね」

「転生？ 生まれ変わりだということのか」

「はい、と阿求はこともなげに答えた。

「我々稗田家では代々に渡り幻想郷の歴史を編纂しています。初代阿一に始まり、二代目、三代目とその役目は記憶と絶対記憶能力と共に転生という形で受け継がれています。そして私が九代目。稗田阿求

というわけです」

ギンコは阿求の言葉を聞いて考えていた。ここに自分が呼ばれた理由。察していただけると言った志辻の言葉を受けるなら、このことかとも思っていたが、どうやらギンコの見当は外れたようだった。

「……そうか、なら、問題はないか」

「何か？」

「いや、お前さんの記憶能力が、蟲によるものではないかと疑っただけだ」

疑って悪かったな、と言うギンコに、蟲？ と阿求は疑問符を浮かべた。それに答えるため、ギンコが口を開く。

「ああ。千馬^{せんば}という蟲がいてだな。人間の脳には記憶を司る海馬のような形をした器官があつて、そこに寄生する蟲なんだ」

「脳に寄生する蟲、ですか」

阿求は興味深そうに耳を傾けた。ギンコの重く低い語りが聴こえてくる。

「千馬に寄生されると、宿主はどんなに些細なことでも忘れることができなくなるといふ。そして記憶が溜まりに溜まり、夜毎夢^{よみごと}を見るようになる。それは並大抵の情報量ではないらしく、そのうち生きているのと区別ないほどの体感時間を夢の中で過ごすようになる。そうしてどんどんと精神をすり減らしてしまう蟲だ」

「……恐ろしい蟲ですね」

「ああ。だから、お前さんもその蟲に取り憑かれているのではと思つてな。だが、全く違う事情らしくて安心したよ」

安心した、というギンコに、阿求はどうしようもなく興味を惹かれた。蟲。自分の知らない話。ギンコが語る内容には、得体の知れない不気味さと、この気だるさを打ち払う何かがあると、阿求は思った。

「あの、蟲ってどういうものなんですか」

阿求は聞いた。ギンコが答える。

「蟲とは、生命の本懐、すべての元の形と言える、微小で下等な生きモノのことだ。その辺に、結構いるぞ」

「え？ 本当にですか？」

阿求は思わず辺りを見渡した。しかし、見えぬ者には、見えんがね、とギンコが言うと、少し頬を膨らませて阿求は言った。

「からかつてるんですか？」

「からかつちやいねえよ。見えない奴には見えないし、見えるやつには見える。つまりは、見えても見えなくても、さほど変わらないし、気にすることもないってことだな」

「もういいです。見えないなら、他に蟲の話が聞きたいです」

「何かないんですか？」と話を急かす阿求に、ギンコはああ、このために呼ばれたのか、と得心した。それは幻想郷に来る前の記憶。紛れもない、ギンコが出会った筆の海での記憶。そういえばあいつも、初めて会ってから随分と俺に蟲の話をせがんだっけな。

ギンコは笑った。その笑顔を見て、阿求はどうかしたのですかと聞く。

「いや、なんでもない。蟲の話だったな。じゃあ次は、記憶を食う蟲の話をしてやろう」

目の前で目を輝かせる子どもを、いつかの知り合いと重ねる。墨色の痣を持つ女性。彼女も、子どもの頃はこんな風に誰かに話をせがんだのだろうか。

「記憶を食う蟲？」

「ああ。影魂かげたまと言つてな。ちようど中庭にあるような古い木の影に潜んでいる蟲で、その影の中で動物が眠りにつくと、耳から体内に入り込み、宿主の記憶を食って成長する。そうして体内で十分に成長すると分裂し、体外に出て、また、古木の影で動物が来るのをじっと待つんだ」

「記憶を食べられるとどうなるんですか？」

「単純に、忘れる。影魂は宿主が死んでは困るから、生活に必要な知識には手をつけないが、それ以外の記憶、例えば親戚の顔と名前だったり、くしゃみという存在そのものだったり、と日頃思い出すようにしていない記憶から食われていくんだ」

「私もとりつかれれば記憶を失うのでしょうか……」

「さてね。だが、試してみようと思わんほうがいいだろう。だから、松

の木の下で昼寝をするのは、もうよしたほうがいいな
「もう」

ギンコにからかわれたのだと知り、阿求は苦笑した。

その後も、ギンコは阿求に様々な蟲の話を聞かせた。使命を帯びて、転生を繰り返す少女。一日中硯に向かい、編纂を続ける彼女にとって、ギンコの話は新鮮で、これ以上ないほどに刺激的なものだった。

気づけば夕刻まで話し込んでいた。二人は時間も忘れて語り合った、というよりはギンコが一方的に聞かせていたのだが、そろそろ終わりの時間が近づいていた。

障子の向こうから男の声がする。ここまで案内してくれた、志辻という男の声だろう。時間を聞かされると、阿求は驚いたようにつぶやきを漏らした。

「もうそんな時間でしたか……」

「いやあ、結構しゃべったな」

「す、すみませんでした。長く拘束してしまっただようで」

途端に自分のしていたことの子供っぽさに恥を感じたのか、阿求は頬を赤らめて謝罪の言葉を口にした。そんな謝罪の言葉をやんわりと受け止め、ギンコは応じた。

「気にするな。俺も、ここに来る前のことを少し思い出して楽しかった」

「そういえばギンコさんは外からいらしたんですね。やはり恋しくなるものですか？」

「どうだろうな。恋しいとはまた違うんじゃないかね。ただ……」

ギンコは思う。それは一つの約束。これから先、決して守られることとは無くなってしまうた約束のこと。

『お前と……旅がしたいな』

自分の歴史。積み重ねられ、結ばれたはずの自分自身の過去。とある女性と結んだ、その言葉だけが、今も少しだけ、気がかりだった。

阿求は黙っている。少し寂しそうな表情を浮かべたギンコに、まずいことを聞いたかもしれないと口をつぐんでいた。だがギンコは、決

して寂しかったわけではない。ただ、少し申し訳なかったのだ。約束を、破ることになってしまったことに。

「……いや、なんでもない」

「……そうですか」

かくして、今日の座談会はお開きとなった。そろそろお暇するよ、と立ち上がるギンコに、阿求もついていく。

そして玄関までついていき、履物を履くギンコの後ろで、阿求は聞いた。

「……その、またお話に来てくれますか？」

伺うように聞いてくるその姿を振り返り、ギンコはまた、こう答えた。

「喜んで」

約束は結ばれる。ギンコの歴史を聞きたいと、少女は話を急かす。

約束は繰り返される。ギンコと共に旅がしたいと言った、彼女の面影を重ねる。

約束は果たされる。それはまた、もう少し先のお話。

魔女の糸（第一章後幕間）

山の向こうに大きな入道雲が浮かぶ夏の景色。ぎらぎらと照りつける太陽から逃げるように、森の一端の日陰に身を隠したギンコは、額に浮かぶ汗を手拭いで拭いながら、蟲煙草をふかしていた。

腰掛けるのにちょうどいい石があったのは僥倖だ。日陰でひんやりとしていたそれは、夏の時節には、氷など望めるべくもない旅の身に小さな幸せを届けてくれる。体にこもった熱を尻から石へと逃がし、ギンコは薄く煙を吐いた。

「ふう。今日は、特に暑いな」

里を出てはや数日。地図も土地勘もない土地を歩くのは神経を使うということもあり、最近の猛暑も相まって、ギンコの体力はかなり目減りしていた。夜毎に疲労が蓄積し、抜けていかないのだ。

そして暑さよりなにより、人に会わない。その方がかなり辛かった。歩けど歩けど行商人の一人も見えなければ、同じ旅の身なども望めるべくもない。旅の蓄えは減っていく一方だ。このままでは、旅を続けられない。

一旦人里に戻ることも考えたが、戻ったところで誰を頼ればいいのか。いや、頼ればいい人物は思い浮かぶ。ただ、数日で出戻りがごとく女の家を訪ねるのは、ギンコとしてもなんだか釈然とせず、できれば避けたいことであった。

「さて、どうつすかね」

ギンコは考える。とは言え、この暑さのせいで頭も満足に働かない。悩むだけ悩んで、あとはどうでもいいかと、日陰に体を投げ出した。

草の絨毯がひんやりと気持ちいい。懐かしくも浜辺を想起させる草の擦れる音がして、ここらで昼寝でもするかという気になる。それも悪くない。魔法の森の端っこで、ギンコは目を瞑った。

目が塞がれば、途端にいろいろな音が聞こえてくる。草の擦れる音、風鳴り。自分の呼吸音と、誰かの足音。……足音？ ギンコは目を開けた。

「おつすギンコ。こんなところで何してんだ？」

反転した視界に映ったのは白黒の洋服を着たいつかの魔法使いだった。もつとも、それは自称であり、ギンコからしてみれば空飛ぶキノコ収集家と言ったほうがイメージとしては正しい。

白黒の魔法使い、霧雨魔理沙は、また籠を背負ってギンコの前に現れた。何をしているのか、と問われたギンコが答える。

「みりやわからんか？ 休憩だよ」

「そいつはいい。私も休憩しようつと」

ギンコの頭近くに籠を下ろし、魔理沙はギンコの腕を飛び越えると、帽子を脱ぎ去り、ギンコの腹の上に頭を乗せるような格好で仰向けになった。魔理沙は大きな三角帽子で風を起こすように自分を扇ぎ始めた。

「いやー今日も暑いなあ」

「そうしてると余計に暑くなると思わんか」

ギンコは自分の腹の上に小さい頭を乗せる猫のような少女に聞く。

「知らないのか？ 暑い時こそ暑いものを、っていうの」

「逆説的にすりやなんでも健康法になると思ったら大間違いだ。暑かったら冷やせ。常識だ」

「態度は冷やややかじゃん。問題ないな」

「お前なあ……」

問答無用、と魔理沙は自分がかぶっていた帽子をギンコの顔にかぶせた。一瞬、花のような香りがした。顔に覆いかぶさったそれを、ギンコは剥ぎ取り、魔理沙の顔にかぶせた。

しばらくを無言で過ごす。日向ぼっこならぬ、日陰ぼっこで時間を潰す。

二度三度、風で前髪が揺らされた後、魔理沙が口を開いた。

「旅は順調かい？」

「正直、行き詰まってる。旅の蓄えがなくなりそうだな」

「まあ行商人とかもないしな」

幻想郷で旅なんてしてるのはギンコくらいのものだ、と魔理沙は言う。だからと言って、ギンコも浮き草をやめるわけにはいかない。生

来の体質なのか、ギンコは蟲を寄せる。寄せ続ければ、良くないことを引き起こしかねない。一つ所に止まるわけにはいかないのだ。

じゃあ、と言って魔理沙は頭を上げる。

「私が行商人役やってやるよ。へいお兄さん！ 今日はいいの入ってるよー！」

思いついたように体を起こし、魔理沙は籠を引き寄せる。その拍子に、ギンコの顔に籠の肩紐がぶつかった。いて。ギンコは体を起こした。

「そうそう顔を合わせねえから行商なんだろう。今日はずってなんだ今日はって」

「今日のオススメはこれ！ 疲労回復に効きそうな毒キノコ！」

魔理沙の手にはおどろおどろしい彩色が施されたキノコが握られている。いや、そもそもキノコなのか？ そう疑問に思わざるを得ない、名状しがたい何かが、禍々しいオーラを放っている。

「毒キノコじゃねえか」

ギンコはとりあえずそう言った。

「じゃあ解脱法間違いなし！ マジックマツシユルム！」

「解脱法とか肩書きが怪しすぎる。いらん」

「へいへい！ わがままでなあお客さん！」

膝を打ち、鼻の頭をこすりながら魔理沙が言う。威勢だけはい行商人に、ギンコも嘆息した。

「ひでえ行商人もいたもんだ……もうちよいまともなもん売れよ」

「とは言ってもなあ。これしかないや」

「お前さんは誰かを毒殺するのが仕事なのか？ まったく……」

休憩は終わりと言わんばかりにギンコが立ち上がる。ああ待った待った。桐箱を背負い直すギンコに、座ったまま手を伸ばした魔理沙が声をかける。

「ちよいと寄り道していかないか？ どうせ急ぐ旅じゃないんだろ？」

「そりやそうだが……寄り道ってなんだ？」

「私にかけられた疑いを晴らして欲しい。本当はそれが目的で声をか

けたんだ」

そしてそんな誘い文句で、魔理沙はギンコに声をかけた。確かに急ぐ旅じゃない。寄り道も、この旅自体が目的地も定めのないものである以上、行きづまり感のある今の道を逸れるのもいいか、とギンコは思った。なにより、疑いを晴らして欲しいということとは自分の力を必要としている少女に手を貸すのは、ギンコとしてもやぶさかではなかった。

魔理沙は握手を求めるように手を伸ばしている。どう？ と伺い立ててくる金色の猫目石。ギンコは少し口の端を釣り上げ、差し出された小さな依頼を握り返した。

思えばそれは唐突なものだった。

穏やかな朝の日差しに身を委ね、ふわふわの布団から染み出してくるようなまどろみから抜け出そうと、アリスがやんわり抵抗を続けていると、衣擦れの音だけが支配していた部屋に突如として闖入者が現れ「私への疑いを晴らしてやる！ 首を洗って待ってるんだな！」と言いつ放ち、嵐のごとく去っていった。

その闖入者は、白黒の衣装に身を包んだ少女、霧雨魔理沙だった。アリスが魔理沙に持つ疑いというのは、最近の妙な失せ物騒動の犯人なのではないかというものである。

それは戸棚を開ければそこにあっただははずの食材や人形の材料なんかが忽然と消え去り、もぬけの殻になっているというアリスの家の異変であるが、その原因が、魔理沙の手癖の悪さにあるのではないかとアリスは思っていた。

もちろん、アリスにそれらを消費した憶えはない。だからと言って真っ先に魔理沙を疑うのもどうかとは思いますが、彼女の手癖の悪さは幻想郷随一であることから、疑いを持つのは無理からぬことであつた。

しかし証拠があるというわけでもない。そんなわけで、最近は妙に物が無くなるという悶々とした日々を、アリスは過ごしていた。

魔理沙が疑いを晴らす、と言ったのは、自分は犯人ではない、と言っているということだが、どのようにして疑いを晴らすというのか。アリスにはそれがわからなかった。首を洗って待っていると言われたが、何をしていけばいいのかもわからない。

だからとりあえず、アリスは外出を避け、自分が昨日から続けている作業を再開していた。

「ふう……」

アリスは一息つこうと動かしていた手を止め、背筋を伸ばした。

アリスがしていた作業というのは、自分の操る人形の服を作成することだった。魔法で染色された絹糸を小さな洋服へと縫い上げていく。それは何度も繰り返し返された動作であることを象徴するように、見事な出来栄えであった。

アリスが休んでいる間も、人形は紅茶を淹れるために動いていた。アリスの肘から先程度の全長がある西洋の人形。木を削り、球体関節を器用に動かし、数人がかりで紅茶を入れるために奮闘している。その様子を、子供を見つめる親のような視線で、アリスは眺めていた。アリス・マーガトロイドは魔法使いである。そして、魔力で伸ばした見えない糸を使って、人形をまるで生きているように操ることが彼女の魔法であった。

人形たちが紅茶を淹れ終わる。一体の人形が差し出すカップを受け取り、アリスはありがとう、とお礼を言った。

「……ん、おいし」

アリスの感想を聞き、人形たちは手に手を取り合って喜んでいる。本当に生きているようなその仕草は、人形を彼女が操っているのだということを、見るものに忘れさせる。

「さて、あ……」

しまった、とアリスは思った。縫製に使う糸が切れかかっていたのだ。洋服を縫う作業を続けるには、新たに糸を紡がなければならぬ。

アリスの紡ぐ糸は蚕からとれる生糸である。必要な繭は、昨日のうちに採ってきているのを見れば、自分の用意の良さに感心する。

窓際の糸車の横にある鍋を、火にかける。繭もそのそばに置いてあつた。

糸を繕るべく窓際の椅子に腰掛けると、そこで家の扉を叩く音がした。

火をそのままに、玄関へと向かう。十中八九見知った顔であろう訪問者に、警戒心もなく扉を開けた。

「いらつしやい……あら？」

変化は唐突に訪れた。それは目に見えた変化。景色が一変し、自分の部屋が消え去り、辺り一面に闇が塗りたくられている。何が起こったのか。思わず後ろを振り返り、次に右と左をくまなく見渡してみても、ここがどこだかわからないのは変わらなかった。

明かりをつける。魔法で灯したそれに、浮かび上がるのは驚愕の光景だった。

そこはどこかの洞窟だった。息を呑むような大空洞である。ごつごつとした岩場が縦横無尽に這い回り、深い闇を誘う洞の先へと、大口を開けてアリスを待っていた。

「何が、どうなっているの……？」

漏らしたつぶやきは、広く、広い空洞に、静かにこだました。

「ん？ アリス？」

魔理沙は奇妙な思いだった。確かに今、自分の友人が扉を開けたと思つたのに、力なく開いていくそこには誰に姿も見られない。

「どうした？」

魔理沙のおかしな様子に、ギンコが声をかける。ん、いや……、と魔理沙も歯切れの悪い返事をする。正直何が起こっているのかわからなかったのだ。

魔理沙の誘いで、ギンコはアリスの家にやってきていた。急ぐ旅でもなし、寄り道感覚でお茶会とやらに参加しないかと誘われたのだ。だが魔理沙の様子がおかしい。ギンコも、目の前で揺れ動く半開きの扉を前にして、何か嫌な予感がしていた。

魔理沙が扉に手をかけてゆつくりと開く。

「アリス？」

呼びかけに応じる声はない。魔理沙は玄関で靴の泥を少し落とし、そのまま土足で家の中に足を踏み入れる。家の中には人がいない。

「家主がいないぜ」

「出かけてるんじゃないのか」

「じゃあ今中から扉を開けたのは誰なんだ？」

「それは……わからんが」

二人は首をひねった。

そうしても始まらないと、ギンコも家の中に足を踏み入れた。後手に扉を閉め、部屋の中を見回した。

先の出来事がなくとも、そこは奇妙な部屋だった。部屋のいたるところに、乱雑に人形が置いてある、はつきり言って威圧感のある部屋だ。威圧感というのは人形からの視線に他ならない。人形には魂が宿るといふ迷信もあるが、部屋にある人形はどれも精巧に作られているが故に、その迷信に信憑性を付与して、ギンコの心に入り込んできた。

部屋の中央には、ギンコには馴染みのない紅茶と焼き菓子が白いテーブルに置いてあった。食事でもとっていたのだろうと、ギンコは解釈した。

「おいギンコ」

「ん？」

魔理沙がギンコに話しかける。ギンコが部屋の中心から魔理沙のいる窓際へ視線を移せば、魔理沙は火にかけている鉄鍋を見ている。見た。

「鍋が火にかけてある。さつきまでここにアリスがいたんだ」

「それは？」

「繭を湯がく鍋だろうな。近くに繭も置いてあるし、何より糸車がある」

「なんだと？」

それを聞き、ギンコは顔色を変えた。そんなギンコの様子に気がつ

いたのか、振り返った魔理沙はギンコに聞いた。

「何か心当たりがあるのか？」

「……もし俺が考えていることが本当なら、これはまずいことになったぞ」

とりあえず、そこらの扉を不用意に開けるな、とギンコは言う。そして魔理沙に事情を説明するため、滔々と語り出す。

「お前さんの友人は、虚穴にのまれたのかもしれない」

「うろあな？」

「ああ。ウロ、という蟲がいてな。こいつらは、密室を見つけては、虚穴という世の風穴のような異界への道を作る。もつとも、密室の外には長くいられん蟲だ。特定の場所で出会わなければ、別段害もない、が……」

ギンコは語る。重く、語る。魔理沙はその語りを聞き、ゴクリと喉を鳴らした。

「もし、密室の中でウロと出くわしてしまつたら、その密室が開かれる瞬間に、逃げ出すウロと一緒にその虚穴に引きずり込まれる」

「じゃ、じゃあアリスは……」

「おそらく、玄関を開けた拍子に逃げ出すウロと一緒に……引きずり込まれたんだろう」

「どうしたら戻ってこれるんだ？ いや、そもそも戻ってこれるのか？」

なあ、ギンコ、と不安げに聞いてくる魔理沙に、ギンコは冷酷に伝えた。

「虚穴に飲まれた後、その人物が戻ってくる可能性はひどく低い。虚穴とはこの世にあるすべての密室へと通じている大空洞だ。もし虚穴を出られたとしても、そこは中から開けることのできない密室へ通じているだけだ」

魔理沙は絶句した。ギンコも口をつぐみ、嫌な沈黙が、家主のいなくなつた部屋に流れる。ぐつぐつと沸き立つ鍋の音だけが、アリスの痕跡を主張していた。

どうしたものか、ギンコは考えた。もし虚穴に飲み込まれたのなら

ら、自力で戻ることなど不可能と言っていい。こちららも虚穴に潜り、探すという手も考えられるが、虫こぶを探すところから始めなければならぬのは、現実的とは言えない方法だった。

「そうだ！ ギンコー！」

同じようにアリスを連れ戻す方法を考えていたのか、魔理沙が何か思いついたように顔を上げた。なんだ、とギンコが返事をする。

「アリスは異界に飲み込まれたんだよな？ ならスキマ妖怪に力を借りればいいんじゃないか？」「スキマ妖怪って言えば……八雲紫だったか」

ギンコは自分がこの世界、幻想郷に来るきっかけとなった人物のことを思い出した。確かに彼女の能力を使えば、虚穴への侵入も容易になるだろう。ギンコは魔理沙の提案に頷いた。

「いい案だ。だが俺は彼女がどこにいるのか知らんぞ」

「私も知らん」

「……おい」

ダメじゃねえか、とギンコが呆れると、魔理沙は大丈夫だ、と言い返した。

「博麗神社に行けばなんとか遭遇できるかも。とにかく行ってみようぜ」

そう言つて家の玄関に手をかけた魔理沙を、ギンコが制した。

「おいちよつと待て、この部屋も今は密室だ。俺たちはお前の友人の二の舞になるかもしれないぞ」

「え？ じゃあどうすんだよ」

「こうするんだ」

ギンコは蟲煙草を咥え、鍋の下で燃える火に近づいていく。そしていつものように先端に火を灯したその茶色い葉巻を吸い上げると、部屋の中に紫煙をまぶすように、薄く吐き出した。

「こいつが反応すれば、近くにウロがいるって事になる」

「へえ。便利なもんだな」

「……どうやらないようだな。扉を開けていいぞ」

「お、おう」

言われた魔理沙が恐る恐る扉を開ける。そこには魔法の森の緑が、消える事なく目の前にあった。

「よし、じゃあ博麗神社に行かないとな」

「ここから歩くとなると、かなり距離があるんじゃないのか？」

「あ、それもそうだな。うーん、今は箒もないし……じゃあギンコはここで待っていてくれよ」

そう言い残し、魔理沙は空中に浮き上がる。箒がないと飛べないわけではないようだ。一人残されたギンコはとりあえず、桐箱を下ろした。

「火でも落とすか……」

鍋にかけている火を思い出し、ギンコはそう呟いた。家の中にとって返し、玄関は開けたままで火にかけてられている鍋を見た。

「これはどういう仕組みなんだ……？」

ギンコはそこで困惑した。アリスが用いていた火元は魔法による焔炉だった。煌々と灯る炎らしきものに熱は感じられても、それを消す方法はわからない。

うーむ、とギンコが考えていると、部屋の中にある人形が動き出し、ギンコの目の前にやってきた。

「な、なんだ？」

人形が動いたことにも困惑したギンコだったが、人形がふわりと浮き上がって、焔炉へと近づいていくのにも驚いた。人形がその小さな手を火にかざすと、火はたちまち消え失せた。どういう原理かはわからないが、滑らかに動く人形を見て、ギンコは顎を撫でた。

「絡繰りでも使ってるのか？」

ギンコはますます困惑するとともに、人形に興味を惹かれていった。その時だった。

ごとごと、と両開きの扉が据え付けられたクローゼットが、ギンコの背後で揺れた。扉には金具が取り付けられてあり、外から固定されている。つまりは、中からは開けられない仕様になっていた。まさか……とギンコは疑いつつも、金具をいじり、扉を開けた。

「はー、やっと出られた……あら？」

「よう、邪魔してるぜ。てかお前さん、魔理沙が言ってたアリス、という娘でいいのか?」

「そうですね、あなたは?」

「……こりやたまげた。どうやって虚穴から戻ってきたんだ」

ギンコは名乗りも忘れて、心底驚いた。アリスはそんなギンコの様子を訝しげに見つめ、首をかしげた。

「うろあな? なんのこと言っているのかわからないけれど、人に名前を聞いておいて、自分は名乗らないのはどうかと思うわ」

「こりや失礼。蟲師のギンコという。初めましてだな」

「はい、初めまして。アリス・マーガトロイドよ。でもむしし? のぎんごさん? がなんで私の家にいるのよ。もしかして泥棒?」

「いや、状況的にはそうかもしれないが……こつちも混乱してるんだ。ちよつと話をする時間をくれないか」

「いいけど……」

アリスの許しを得て、ギンコは空き巣の汚名を返上するべく、言葉を交わした。

「……ふーんなるほど。私が飛ばされた場所は、そんなに危険な場所だったの」

「ああ。迷い込んで、早々帰ってこられるところじゃない。俺がわからんのは、お前さんがどうやってここの部屋の密室まで帰ってきたのかってことだ」

ギンコは部屋の中にある白い椅子に腰掛け、テーブルを挟んでアリスと向き合っていた。

アリスが鍵付きのクローゼットの中に現れたのは数分前。ギンコはアリスに、アリスが迷い込んでいた場所の詳細を話していた。

アリスが淹れた紅茶を啜り、ギンコはアリスに疑問を投げかける。どうやって彼女は、自力で虚穴から抜け出してきたのか。アリスは少し考えた後、一つの答えをギンコに聞かせた。

「それは私が魔法使いだからでしょう」

「魔法使い……」

「そ、魔法使い」

そう言つてアリスは紅茶を飲む。白い陶器がかちやり、と音を立て、ゆっくりと口元へ運ばれる。

ギンコはぽつりと呟く。魔理沙も名乗っていた魔法使いという職業。ギンコにはわからぬ、未知なる領域で己の知識を振るうものたち。その智恵で、今回のことも解決してしまつたというのなら、この娘は魔理沙よりも高度な知識を持つているということになる。

ギンコはアリスの次の言葉を待っていた。目を瞑り、優雅に紅茶を飲むアリスを見る。そうしているギンコの頭の上に、ぽふり、と何かが覆いかぶさる感触があつた。

ギンコは思わず頭の上に手を伸ばす。頭の上にあつたのは人形だつた。原理はわからないが、自立して動くそれ。

ギンコは人形を手に、じつと見つめる。魔法使い。未知なる知識。もしや、とギンコは思った。

「……この人形、お前さんが動かしているのか」

「あら、察しがいいんですね。そうです。私が目に見えない魔力の糸で操っている糸人形です」

「糸……そうか」

ギンコは人形を手放す。ふわりと浮き上がったそれは、もう一度ギンコの頭の上に陣取つた。ギンコはもう一度それをどかさうとはせず、アリスに言葉をかける。

「その糸をたどつてきたんだな。焔炉の火を消した人形の糸を」

「そうです。結構大変だつたんですから。虚穴つて広いですね」

「……そんな簡単なことじゃねえんだがな」

あつけらかんと言ひ放つアリスに、ギンコは呆れて嘆息した。

「そういえばギンコさん？ 虚穴どうのこうのはわかつたけど、あなたがここにいる理由をまだ聞いてませんでしたね」

「ん、そうだったな」

アリスにそう尋ねられて、ギンコは自分がここに来た理由を思い返した。疑いを晴らして欲しい。そう、魔理沙に頼まれてやってきたのだつた。

「魔理沙に誘われてきたんですね？　魔理沙は何か言っていました？」

「ああ。私の疑いを晴らして欲しい、とかなんとか」

「なるほどね。じゃあ本人はいないけれど、もう疑いは晴れたつてことで」

「そうなのか？」

アリスはこれまた簡単に言った。

アリスが魔理沙にかけて疑いというのは、窃盗の容疑。アリスの家の戸棚の中身が、忽然と消え失せるという異変の犯人が、魔理沙なのではないかというものだった。だがアリスは、自身が巻き込まれた不思議な体験と、ギンコがした蟲の話から、その疑いを晴らしていた。「はい、ウロの話聞いたなら納得がいきました。戸棚の中身がなくなつてたのは、魔理沙のせいじゃなかったみたいですね」

「そんな疑いをかけられていたのか。あいつは」

ギンコは、ここにはいない白黒の魔法使いに向かって嘆息した。

「でもギンコさん。そのウロという蟲に、これ以上振り回されるのも面倒なのですけれど、何か対処法はご存知なの？」

「ん？　ああ、そうか。そういうことは、お前さんにもわからないんだつたな」

ギンコはやつと自分の本領になつたかと、重い腰をあげるように語り出した。頭頂部から後頭部にかけてしがみついている人形が鬱陶しかつたが、なるべく意に介さぬように、ギンコはアリスへと話しかける。

「お前さんは繭から採糸をしているようだが、その時、空になつた玉繭を拾ってきたことはないか？」

「ええ。変だなとは思いましたが、蚕が中にいないのなら殺してしまうこともないし、便利だと思つて持つて帰つてきました。それが何か？」

「ウロつてのは、そういう繭に住んでいる。空の玉繭をとらんようによすれば、これ以上ウロがわくこともないだろう」

「へえ。そうだったんですか。知りませんでした」

「普通の繭を取っている分には問題はない。気をつけてみてくれ」
「わかりました。これからはそうすることにします」

アリスはギンコの話聞き、指示を受け入れた。

「しかしこれで解決となると……魔理沙は無駄足ってことになるな」
「そういうええ彼女、今どこに行っているんです?」

「博麗神社だ。お前さんが虚穴に取り込まれたと教えたら、スキマ妖怪に助力を求めようと言い出してな」

「まあ、そうでしたか。ふふ、ちよつと嬉しいわね」

そう話していると、噂をすればというタイミングで、魔理沙がアリスの家に帰ってきた。半開きだった玄関の扉を開けて、魔理沙が飛び込んでくる。

「すまんギンコ。スキマ妖怪はどこにいるか分からなかつ……てアリス!」

「あら、魔理沙。ご苦労様」

ギンコと白いテーブルを囲んでいるアリスを指差して、魔理沙は言う。

「お前! なんかわけわからん穴に取り込まれたんじゃないのか!」

魔理沙は驚きを隠せないといった様子で、ギンコとアリスを交互に見る。ギンコはそんな様子の魔理沙を見て、肩をすくめた。

「人形についた糸を手繰って戻ってきたのよ。ついでに、今はあなたが連れてきたギンコさんとも話し終わって、あなたへの疑いも晴れたところ」

「……はあく。なんだよそりゃ。私は文字通り、とんだ無駄足じゃないか」

魔理沙はその場にしゃがみ込んだ。ギンコの頭から離れた人形が、魔理沙の所まで飛んでいき、その沈む肩を叩いた。

「ええ。だから、ご苦労様」

口元を押さえて、くすくす、とアリスは笑っていた。

「いいのか? こんなにもたせてもらって」

「ええ。異常の原因を教えてもらって、対処法も教えてもらったんで

すから」

ギンコはアリスの家の前で、缶詰に入った焼き菓子を受け取っていた。ウロによる被害を知らせてくれたお礼だという。ちょうど日持ちする旅の糧食を求めていたギンコにとって、これは嬉しい報酬だった。

そんなギンコの隣で、頬を膨らませているものがある。

「ちえ、なんだいギンコだけ。私には何も無いのかよ」

「あんたはさつき食べるように食べたでしょう。口元の食べカスをなんとかしなさいよ」

「うえ、まじか」

アリスに指摘され、魔理沙は右手の指先で唇を拭う。そのあと、小さな舌を出して、指先をペロペロと舐めていた。いちいち仕草が猫っぽいやつだ、とギンコは思った。

「ギンコさん、改めて、ありがとうございます」

「いやあ、あんまり礼を言われるようなことはしてないと思うがね」
そう言つてアリスは丁寧にお辞儀をした。ギンコはその礼を受け取り、頬を少し搔いた。

まさしく、今回ギンコは何もしていない。蟲に関わったアリスへと、少しばかり助言をただけだ。ああ、ほかにもあったか、とギンコは自分の功績を思い出し、アリスへと別れの挨拶をする。

「そんじゃ、まあ。くれぐれも、空の玉繭にだけは気をつけてくれ。今度は金具を開けてやれんからな」

「ふふ、ええ。心得ました」

笑顔のアリスに見送られて、ギンコは再び歩き出した。

魔法の森を抜けるまでの間、魔理沙はギンコについてきていた。アリスの家から、魔法の森を抜けるまでは、ギンコが魔理沙と出会った場所よりは比較的薄く茂る森を通ることになる。木々の切れ目から夕暮れへと傾き始めた空が見える。

「しかしあれだな。ギンコはさすがだな。私が説明する前に、私の疑いを晴らしてくれたんだから」

「それは偶然だろ。おい、あまり食うなよ」

魔理沙はぽりぽりと焼き菓子をかじっている。それはギンコがアリスに貰ったものであり、ついさつき魔理沙に掠め取られたものだ。「ギンコはこれからどうすんだ？」

「とりあえず野宿できる場所を探す。まあどこでも変わらんけどな」

「ふうん。じゃあうち来るか？ 反対側だけど」

「お。いいのか？」

いいぜ、と魔理沙はギンコに缶詰を返す。その中にはもう、焼き菓子が入っていなかった。

「……お前、全部食ったな」

「あはは、うまかったぜ」

「このやろう……」

さすがに申し訳なさそうな表情を浮かべる魔理沙を見て、手癖が悪いと言っていたアリスの心情を思う。確かに、真っ先に疑われる要素は備えているように、ギンコは思った。

じゃあうちに行くか、と踵を返した魔理沙に続くように、ギンコも足の向く先を翻す。

「夕食は用意してくれよ、頼むから」

「任せろ。きのこ汁作ってやるよ。……当たり前はあるかもしれないけど」

「勘弁してくれ……」

後に続くギンコは、その一言でいきなり足取りが重くなった。

日は落ちる。夜が近づく。雨風が凌げるだけでも僥倖だと思うしかない。

調理には自分も立ち会おう。そう、ギンコは決意した。

いざよい時雨（第四章後幕間）

紅魔館こうまかんのメイド長、十六夜咲夜いざよいさくやは荷物を抱え直して息をついた。

急に降り出した秋雨の勢いは強く、外にいれば数分の早足でもその影響まぬがを免れない。農道の脇にある物置小屋の軒下のきしたに駆け込んだのは咄嗟とつさの判断だったが、それでも服が濡れて肌まに張り付く程度には降られてしまった。銀の髪に水滴がまとわりつき、少ない光を受けて輝いている。

前髪から滴る水を気にしながら空を見上げる。薄く広がった雲の切れ端から青空がのぞいていた。雲の流れが速い。通り雨だろうとあたりをつけた。

「少し雨宿りしていきましようか」

「そうだな」

咲夜さくやの後に続いて軒下のきしたに入ってきた妙な雰囲気ふんいきの男、蟲師のギンコは咲夜の提案ていあんに頷いた。咲夜のそれよりも色素が薄い、白煙で染め抜いたような白髪しろがの隙間から深い緑色の視線が小屋に向けられる。

雨宿り先としては心許こころもとない軒下の空間を頼りにして小屋の壁伝いに農道からみて裏手側へと回り込むと、小屋の壁は取り払われており、屋根の下に積み上げられ藁わらを被せられた獣除け用の柵さく杭かだとか、農作業の出番を待つ農具なんかが置いてあるのが見えた。とりあえず、軒下の壁際よりは懐なつかが深そうだった。

ギンコは肩がけにした荷物を下ろし、頭を振って水滴を雑ざつに振り落とす。その拍子うたに後ろからついて来ていた咲夜の顔に水が飛んだ。咲夜は少し顔を背けるだけで、文句は言わない。口を動かす代わりに手を動かして、ギンコがそうしたように抱えていた荷物を下ろし、ポケットの中なかにいつも入れているハンカチを取り出した。まだなんとか濡れていないそれで自身の顔を拭う。

「ギンコさん。ちよつと」

「ん？」

背中に声をかけると、ギンコが振り向く。咲夜はハンカチを広げて、手を伸ばし、それをギンコの頭の上に被せた。

「どうぞお使いください」

「ん、悪いな」

薄手で手触りのいいそれを掴み、ギンコは顔を拭いた。一瞬視界に暗幕がかかる。少し花の香りがして視界が晴れると、咲夜が横向きに手だけを差し出していた。意図を汲み取ったギンコがハンカチを咲夜の手に戻す。咲夜は無言で受け取った。

今、二人は人里での買い物の帰り道だった。ギンコが紅魔館に逗留^{とまりゆう}してしばらく。不足してきた日用品や食料の買い足しの必要が出てきたための行動だ。普段、館で過ごす人間は従者の彼女一人であるため、人間用の備蓄は少なかったのだ。

先の病の騒動からすっかり回復した従者の十六夜咲夜は、こうして日常業務へと戻っている。今朝も早くから館の掃除やら主人の世話やらと忙しくしていたのを、ギンコは見ている。とは言え、病み上がりであることには違いない。

咲夜の容体を経過観察していた立場のギンコからすれば、まだ安静にしていたほうがいいと意見するが、当の本人はこれ以上ベッドでじっとしていると今度は心のほうが病んでしまうと言うのだから、まあ仕方ない。

そして『心配ならついて行ってあげなさいな』とは館の主人の一言で、ギンコは動くことになった。もとは自分が逗留しているために必要になったこと。動機は十分に用意されていたとも言える。

ギンコが買い物についていくと言った時、咲夜はその申し出を断った。ただでさえ自分の命の恩人であるのに、主人の客人でもあるギンコにそんなことはさせられないと恐縮していた。だがその主人に『ギンコさんをつれていきなさい』と言い含められれば素直に従うほかないのも彼女だった。

「すみませんでした。ついてきていただいたばかりに」

「お前さんが謝ることじゃないだろう」

「でも、ギンコさんは賓客^{ひんきやく}ですから。今は妹様のご教育もしていただいていますし……ご不便はありませんか？」

「不便ということはないな。まあ、油断ならないとは思ってるが……」

ギンコが紅魔館に逗留する理由は二つある。一つは蟲患いから回復した十六夜咲夜の経過観察、そしてもう一つはその蟲患いを治療する過程で蟲を見る才能があると判明したフランドール・スカーレットへの教育だ。フランドールはレミリアの妹で、関係者曰く狂気を抱えているために半ば軟禁する形で館の地下に住まわせているそうだ。そんな彼女は無闇矢鱈むやみやたらに自身の能力を使って目に写る蟲のことごとくを塵殺おうちくつするという困った遊びを覚えてしまっていたので、ギンコがその矯正をしているわけだった。

「まあ大丈夫だろう。おたくの門番もよくよく目を光らせてくれているし」

「そうですか。それは何よりです」

一応フランドールと会う時は二人きりということにはならないよう、普段紅魔館の門番を勤めている紅美鈴ほんめいりんという妖怪が付き添うことになっている。その実力を垣間見たことはないが、門番というくらいなのだからある程度は武闘派なのだろう。いざという時は頼りになるはずだった。

ここ数日対話を重ね、ギンコもフランドールの人となり(?)をわかってきたつもりだったが、正直いつ牙を剥くかもわからない狼か熊と触れ合っているような気分だった。そのことを思えば、自分と同じ人間である従者の彼女と話すことは断然気の休まることである。買い物について行ったのは、正しく息抜きの意味もあったのかもしれないかった。

片流れの屋根に叩きつけられた雨粒が強い雨音を立てている。足元を見れば、ところどころ錆の浮いた雨樋あまどいの出口から、水がちよろちよろと流れ出し、小さな川ができていた。

大きく口を開けた物置の薄闇を背負いながら、ギンコは積まれ、藁をかぶせてある何かに腰を下ろした。咲夜は特にどうするというわけでもなく、ただ静かに姿勢良く立っている。自然の喧騒けんそうに囲まれながら、妙な沈黙が二人の間に横たわっていた。

「……あの」

「うん?」

ギンコに背を向けながら、咲夜はつぶやいた。

「いえ、その」

「なんだ」

「……なんでもありません」

「……なんなんだ」

その姿勢の良さ、直立した堅実さには不釣り合いな歯切れの悪い言葉、ギンコは訝しんだ。表情が見えない分、その違和感強い。

十六夜咲夜は躊躇った。何を躊躇ったのかまではわからない。何か言いたいことがあるのだろう。だがギンコは無理に聞き出すこともないだろうとも思った。

再び沈黙が訪れる。咲夜は手持ち無沙汰なのか、懐中時計を持ち出して俯きがちに時間を確認した。

「なあ気になっていたんだが」

「はいー」

ギンコが声を投げると、咲夜は跳ねるように振り向いた。ギンコは特にその様子に触れることもなく、視線だけを咲夜に向ける。見つめるのは、咲夜の手元にある懐中時計だ。白く輝く銀の光沢が胸元に寄せられた細い指の隙間から覗いている。

「お前さんが仕事中にもよく見ているそれ、一体なんなんだ」

「え？ ああ、これはただの時計ですが」

「時計……時を刻む絡線からくりだったか。俺が知っているのは、もっと大きなこれくらいの箱なんだが」

ギンコの身振り手振りを見ながら、咲夜は言わんとしている物を想像する。お骨入れくらいの大きさの箱だろうか。知識としての時計を思い浮かべ、古いその質感を想像する。なんとなく、ギンコの私物である薬箱が妥当であるような気がした。

「よかつたらご覧になります？」

興味ありげなギンコを見て、咲夜は提案する。

「いいのか？」

「はい」

ギンコが咲夜から懐中時計を受け取る。見た目からさぞ高価な物

なのだろうと思っていたギンコは、すんなり手に収まったそれを繁々しげしげと眺めてみた。

磨き上げられた銀の光沢を放つ表面。厚みのある真円に整えられた外観。縁取りの細かな装飾。美しい工芸品だった。咲夜の行動を思い返せば、これは二枚貝のように開く作りになっているはずだとギンコは思ったが、どうにもその方法がわからない。爪やら薄い板でも隙間に滑り込ませて開くのかと縁に爪を立てていると、その行動が子供っぽくて少しおかしかったのか、咲夜は笑った。

「ここを押すんですよ」

前屈みに、そつと指を伸ばしてきた咲夜が、懐中時計の縁にある装飾の一部に触れると蓋が開く。おお、とギンコが声をもらす。その様子もまたどこか子供っぽく、咲夜は笑顔で身を起こした。

薄く、透明なガラスで覆われた奇妙な文字盤が顔を出す。線が連なったような記号が円形に並んで、中心から伸びた平たい針のようなものが長いもの、短いものについている。一際細い針がもう一本あり、それは一定の速さで右回りに滑らかに動いている。ほとんど音も立てずに、自動的に動き続けているそれが精緻せいじちな絡繰であることは一目でわかった。

「すげえな」

「そう驚かれるのはなんだか新鮮ですね」

「時計なんてものは、庶民の暮らしにや必要ないもんだ。大きな市があるような都に居を構え、それこそお前さんのような使用人を何人も抱えるような屋敷に一つあったりなかったりが、俺の知るところなんだがね」

「確かに。あまり時間を気にしているような人は、幻想郷でも珍しいかもしれない」

「お天道様が顔を出せば動き、隠れりや眠る。みんなだいたい、そうやって生きている」

「ギンコさんも?」

「ああ、一応な。お前さんとこの主人は、その逆のようだが」

「そこはほら、吸血鬼ですから」

「面妖だねえ、なんとも」

「私からすれば、ギンコさんも相当特殊な事情をお持ちの方です。ちやうど我が身で思い知りましたし」

「まあ、それもそうか」

「あの……」

「ん？」

「……私も、気になっていたことがあるんです」

咲夜はそう切り出した。あるいは、先ほど言いかけたことはこれだったのかもしれない。

雨はまだ勢い衰えることなく降り続けている。通り雨かと思いつつも、しばらくはここを動けなさそうだ。咲夜は腰の高さくらいまで積まれた獣除け用の柵杭に、体重を預けた。

高さは違えど、ギンコと咲夜は隣り合うように腰を落ち着けた。

「蟲、でしたか？　今回、私が罹かかった病の原因は」

「ああ」

「どういったものなんですか？　ぬたぬたと動き回る、蔓草つるくせのような見た目をしていましたが」

自分が直面した不可思議な病の正体について咲夜が、聞いてくる。そういえば経過観察はしつつも、蟲についての詳細な説明は聞かせたことはなかったなと、ギンコは思った。

「あれは、蟲の一形態にすぎない。植物や魚も、さまざまな姿を持つだろう。それと同じだ」

「蟲、というのは総称だと」

「そうだ。古くは『みどりもの』とも呼ばれる。普段は目に見えない、微小で下等な生き物だ」

「微小で下等……菌類などに近いということですか？」

「よく知ってるな。しかし、それらよりもっと、命の源に近い性質を持っている。実体が曖昧なんだ。見えんものには見えんし、触れることもかなわない」

「幽霊のようない？」

「あるいは、それらの正体は蟲だと言う者もいる。ヒトの姿をとる蟲

もいるからだ」

「それはまた……なんとも」

咲夜が口ごもる。そう怖がるものでもない、ギンコは付け足した。別に怖がつているわけではありませんが、と咲夜も付け足した。

「命の源、というのとは？」

「そうだな……あえて挙げるのなら、光酒こうしゅというものがある。普段は真なる闇の底を泳ぎ回り、巨大な光脈こうみやくを形作っている生きモノだ。光る酒のような見た目をしていてな。これがある土地には命芽吹き、草青み、豊かな実りが約束される」

「その影響力の割には随分と、抽象的なお話ですね」

「そういうもんだ。蟲なんてのは。蟲師つてのも、知らぬ者にとっては詐欺師なんだと言われるくらいだ」

「ふふ、詐欺師ですか」

何笑つてんだよ、とギンコが声だけで咲夜を窘めると、すみません失笑でした、と咲夜が軽く受け流した。言うだけ言ってみたが、ギンコをしても特に悪い気がするわけでもない。自分の胡散臭さは、自分が一番よくわかっていた。

「しかし本当、聞けば聞くほど、よくわからなくなります。微小で下等な生き物かと思えば、この世の根底を形作るような振る舞いを見せたり。奇妙な姿で人に寄生したかと思えば、幽霊のように実体なく現れ
ては消えたり」

「俺にしてみりゃ、こっちにきて出会った妖怪やら妖精やらの方が、
俄にわかには信じ難い存在だけだな」

「その割には、随分と馴染んでいらつしやるように思えますよ。妹様
のこととか」

「言葉が通じる分、蟲よりは気楽なのかもな。そういうお前さんほど
うななんだい」

「私、ですか？」

咲夜は意外、と言った様子で自分を指差し、ギンコを見た。ギンコは手に持っていた懐中時計を自身の目の前にかざしてみせる。咲夜の視線も時計に誘導される。

秒針は変わらず、滑らかに時を刻み続けている。鎖の擦れる小さな音がした。

「生き物には、それぞれ生きる時間がある。蟲には蟲の、人には人の、そしておそらく、妖怪には妖怪の生きる時間がある。そうだな？」

「ええ」

「お前の主人は夜の闇に生きる種族だという。人の血を糧として、永い永い夜を生きる。姿形こそ人に近いものがあるようだが、その在り方は遠く離れている」

「そうですね」

「不躰な質問かもしれんが……」

ギンコは断り、ぱちりと懐中時計の蓋を閉めた。一呼吸置いてから続ける。

「お前さんは、その差をどう思ってるのかな」

思わぬ切り込み方をしてきたギンコに、咲夜は一瞬戸惑ったが、すぐに思考は巡りだした。人間と妖怪の差。それを自分はどう考えているのか。普段考えることはないそれだが、咲夜の中で、答えのようなものはもう出ている間이었다。

咲夜は少しだけ間を置いてから、淀みなく答えた。

「差というものは、当然、そこにあるものとして受け止めていますね」
「あるがままのこと、か？ 悲しいとか、報われなとか、そういう感傷はないのか？」

「ええ。そんなものは特に。なぜそんなことを？」

「いや、ただ……な」

十六夜咲夜の主人、レミリア・スカーレットは吸血鬼である。本人曰く、由緒正しい妖怪であり、知名度からしてもその脅威と畏れは人々の間に広く流布されていると言えるだろう。

吸血鬼とは伝承曰く、闇夜に紛れて人を襲い、その生き血を啜ることで永遠に近い時を生きる妖怪である。人智を超えた身体能力を有することはもちろん、霧となって存在を拡散させてはあらゆる場所に侵入したり、時に動物や人の姿に化けては人心を誑かす一面もある。不老不死の存在としても知られ、いつまでも若く、強靱な生命力を象

徴する妖怪とも言えるだろう。

そしてギンコは知らぬことだが、吸血鬼の特性には、血を啜すすつた者を己の眷属けんぞくとして吸血鬼化できるといふものがある。これは当然、吸血鬼であるレミアア・スカーレットに備わっている特性で、従者である咲夜も知っていることだ。

そんな特性を有する主人のもとで、咲夜は未だ人間として存在を保っている。それがどういうことなのかは、咲夜とレミアアの間だけで図れることだった。しかし少なくとも、咲夜はその事実を悲しいことだとは思っていない。自分が人間であることに、負い目は感じていなかった。

だからギンコが、感傷と口にした時、咲夜の頭にはさまざまなことがよぎった。そして何より、なぜギンコがそんなことを聞いてくるのかに不思議に思えた。

咲夜の視線を受けながら、ギンコは静かに語りだす。

「俺は少なからず、蟲と人の関わりつてやつをみてきた。深く関わったばかりに身を滅ぼしたやつらが多い。あれらは本来、ただただそうあるべきモノで、深入りしていいことは少ない」

「……そうですか」

「お前さんのところの妹御と話しているとつくづくそう思うが、やはり妖怪も人の常識とはかけ離れている存在だ。この事実を、大きいと俺は思う」

「……」

「生きる時間が違うモノ同士、寄り添い、連れ立って歩くことはできるだろう。しかしこのどうしたつてある差を忘れた時、良くないことが起きる。不幸が起きる」

「では人と妖怪は離れて暮らすべきだと?」

「そこまで極端になるつもりはない。ただ、忘れねえようにしないと。言葉は通じるが、生きる時間の違うモノと寄り添って生きるってのは、どんなもんなのかとな」

「それは……ギンコさん自身のことも、ですか?」

「そうかな。そうかもしれない」

「感傷ですか？」

「ないわけじゃない。俺にとっては、やつらは時に人よりもずっと身近にあるモノだからな」

ギンコは旅をしている。蟲と呼ばれる不可思議な、生き物とも現象ともとれるモノを相手にしながら、その身を風に任せている。蟲と深く関わったばかりに身を滅ぼした人を見てきた、と語るギンコの道程を、咲夜は想像した。

思い浮かぶのは、無常。意志や思惑を超えて、悠然と頭上を通り過ぎていく巨大な何か。掌からこぼれ落ちて、染みになった雫。きつと助かるはずだった命が、身を傾げて谷底へと落ちるさま。

彼は自分を責めたのだろうか。そこからは咲夜の想像の埒外だった。代わりに咲夜は自分の話をした。

「ギンコさんは刹那、という言葉を知っていますか？」

「刹那？ 時間の単位だったか？」

「そうです。弾指の十分の一。極めて短い時間を指す言葉です。時計の秒針が動くこともないほどの短い時間」

咲夜は指を伸ばしてギンコの持っている懐中時計に触れる。蓋が開く。秒針の滑らかな動きが、刹那を超えて動き続けている。

「秒針の動きに淀みはありません。連続して、時間は流れているように見えるでしょう？」

「ああ」

「ですが実際は違います。視点を細かく区切ったなら、秒が加算され、その秒もまた瞬間が積み重なり、瞬間ですらも刹那以下の累積に他なりません。小さな点を隙間なく打ち続けると、その連続は線に見えるということですよ。このことは多くのことに通じる概念であると言えます。例えば、山が膨大な一握りの土でできているように」

「ふむ、確かに。なるほどな」

咲夜の説明に、ギンコは納得顔で頷いた。蟲と光脈の関係を思い浮かべたためだ。巨大な流れを作っている光脈もその実は、小さな蟲の集合である。咲夜は続ける。

「つまり絶えず広がりを見せる事象、時の流れでさえも、刹那の連なり

であり、私たちはその連なりを普段意識することなく過ごしていると
言えます。ちょうどギンコさんらが、日の出と日の入りのみを見て、
その間にある長針の動きに注意を払わないように」

「ふむ」

「ではギンコさん。もしここに刹那を自覚する存在がいたとして、刹
那の時間の中で生まれて死ぬ存在がいたとして、その存在から、私た
ちはどう見えると思いますか？」

「どうって……」

ギンコは目線を時計から上に向けた。視界の端に、背中と首を緩や
かに丸めてこちらを覗き込んでいる咲夜の顔が映る。三つ編みのお
さげ髪がふらりと垂れ下がって、彼女の鼻の頭を掠めていた。

ギンコらが雨宿りをしている物置小屋の前には、休耕中の畑があつ
た。程よく荒み、雑草の背は低く、密度もない。管理をしている人間
の真面目さが伺える。さらに視線を遠くに投げると、降雨の垂れ幕の
向こうに手入れのされていない雑木林が見える。仄暗い林間に生き
物の気配はない。ギンコは林を凝視した。

人の背丈の三倍以上はある木々が林立している。枝葉に切り揃え
られた形跡はなく、示し合わせたように重なり、空間の隙間を埋めて
広がっているのが見える。いつから林は、そこにそうしてあるのだろ
う。人が触れることのない自然の領域。人が拓く前の、原初の風景。
耕作の跡が残る景色との対比が、余計にその場所に積み重なった時を
感じさせる。

春に萌え、夏に盛り、秋に寂れ、冬に眠る。季節の巡りに合わせて
多くの植物は生まれて消えるを繰り返す。そんな中でいくつかの命
は滅びずに形を残して次の季節を迎える。植物の中では、樹。獣も、
人もそうだ。特に樹は、長い。樹齢数百年と言える大樹を、ギンコも
旅の中で見てきた。せいぜい数十という季節を巡れば目覚めぬ眠り
についてしまう人と比べて、それは圧倒的に、永い。

物言わぬ大樹。彼らを見上げる時、自分は何を思っていただろう
か。彼らがもし口を聞けるのなら、厳しい樹皮に触れ、寄り添う小さ
な命をどう思ったのだろうか。そこまで思考を飛ばして、物思いに沈

みかけていたところ、ぱちりと乾いた音がギンコの意識を寸断した。

「はい、時間切れです」

「あ?」

「気の抜けた返事ですね。真面目に考えていたから黙っていたんじゃないんですか?」

「あー、ころころ考えが転がっちゃまってな」

「ふふ。こんなのはただの連想ですよ? 刹那を一生とする命にとって、数十年、数百年の時の流れの渦中かちゆうはどう映るのかと。言い換えるなら、私たち人間がある時、数千年の命を与えられたとしてもいいでしょうか」

「そりや、まあ、長いだろうな。途方もなく」

「そう。長い長い時の中。刹那に動ける命にとって、数十年を基準に動く命の時間は長すぎる。隙だらけなんですよね」

そう言って咲夜は掌から懐中時計を垂らした。鎖の擦れる小さな音がして、ねじれと振り子の動きに倣う銀色の円がギンコの目の前で揺れる。ギンコは自分の手を見ると、さつきまで持っていたはずの懐中時計がなくなっていることに気がついた。いつの間に、咲夜は自分の手からそれを取り上げたのだろうか。

自分と咲夜の手元を交互に見やるギンコを見て、咲夜は満足そうに懐中時計をギンコへと差し出した。

ギンコが時計を受け取る。そしてそれをもう一度観察しようとして、次の刹那には手元から時計は消え、戸惑い顔を上げると、咲夜が微笑みながら時計を揺らしているのだった。

「……なんだそりや」

「ちよつとした手品です。私の特技ですな」

咲夜は少し得意気に時計の鎖を弄もてあそんだ。ちやりちやりと軽い金属音がする。

「私にとって、ギンコさんはいつも止まっているも同然なんです」

「ほう。目で追えないほどに早く動いて掠め取ったってことか。とんでもなくスリがうまいんだな」

「事実は相違ないですが、そう悪い解釈をされると落ち着きませんね」

「今度から失せ物は真つ先にお前さんを疑うとしよう」

意趣返しのようにギンコが揶揄からかうと、咲夜は小さく鼻を鳴らした。

「それで。刹那に動けるお前さんは、何が言いたいんだ？」

「……つまりですね。時間の流れなんてその程度の話というわけですよ」

「その程度？」

「今見せたでしょう？　時間はそれほど絶対的な基準でもないということですよ」

「……すまん、まだ話が見えん。続けてくれ」

咲夜は語る。時間は、曰く相対的なものだとする解釈があるという。動きに合わせて、伸び縮みする時間。速く動くものにとっては、時間はだんだんと遅くなっていくのだという。ギンコにとってはすぐに、ピンとはこない解釈だった。

似たような話で、違う生物種であっても鼓動、心臓の脈打つ回数は生涯で同じであるという話をギンコは思い出した。脈が早く、体内時間の密度が高い生き物ほど短命であり、逆なら長命だという話だ。

体内時間の密度によって寿命が伸び縮みする。だとすれば、吸血鬼の鼓動は遅く、体温も低いのだろうか。そんなことをギンコは考えた。

「人は行動によってある程度時間を操れるのです。私が早く動けば、それだけ周りの時間は遅くなる。私の時間にあなたたちは追いつけない」

「ああ」

「すごいでしょう。ギンコさんが一步目のうちに、私は百歩を終える。只人がひとつ種を蒔く間に、私は種を蒔き終える。こういうのを人里では、仕事ができると言うそうです」

「優秀だな」

「そうですね。でも考えてみてください。どんなに蒔くのが早かろうが、種が芽をだし、花をつけるまでの時間は変わりません。どれだけ時間をかけようと、百歩で歩ける距離は百歩までなのです。なら私の時間に、一体どれほどの意味があるのでしょうかね」

咲夜の言わんとしていることが、なんとなくギンコにも見えてきた。

今降っている雨を考える。この雨がいつ止むのかわからずに、ギンコと咲夜はここで時間を潰している。その事実を前に、咲夜がいくら速く動けようとも関係がないことは明らかだ。無論、雲が切れる土地まで素早く移動することができれば、直ちに雨の下からは抜け出せるだろう。しかしそれで雨が止むわけではない。咲夜のいないところで、雨は降り続けるのだ。

人の身で蟲の時間を生きた者の言葉を、ギンコは聞いたことがあった。その者はとある孤島にて生き神と崇められていた少女だった。

生き神は宵の口に合わせて体が急に老い始め、ついには呼吸も止まる。そして翌る日には、何事もなかったように復活を果たす。人々の信仰を集めるそんな奇跡の正体は、蟲だった。少女は蟲に寄生され、蟲の寿命である一日に同調し、自身も生と死を繰り返していたのだ。

蟲の寄生から回復した少女はこう言っていた。『目の前のあてどない、膨大な時間に足がすくむ……。』。一日で生と死を繰り返してきた少女は、ただ茫漠ぼうぼくな時間の海に怯えていた。

太陽がいつも変わらずに昇り、冬に枯れた草木が春には芽吹くように、自然の理にも生きる時間がある。それは想像するほどに巨大で、悠然とそこに横たわっている。地の果て水の果てまで満ち満ちて、矮わいしょう小な人一人の命に逃げ場などない。それは、どこか恐ろしいことのように思えるのかもしれない。

どれだけ力を尽くそうとも、人の思惑を超えていくものはある。どうにもならないことがある。ギンコもよくよく理解して、しかしわずかな感傷を抱かずにはいられない事実だった。

「人の身にはどうにもならないことはあります。妖怪とは生きる時間が違うことも、仕方がないことです。彼の存在にとつて、私たちは刹那の生き物。太陽が昇り、沈むまでに何周もする秒針の動きに他ならない。人から妖怪は見えていても、本質的に、妖怪から人は見えていないんです。そんなことは当たり前のことなんです。だから、私は私の時間を生きるしかない」

膨大な時間を生きる命に、刹那の時間は見切れない。ただその儚さを、消えた後に嘆くのみだ。刹那に生きる命にとって、膨大な時間はただそこにあるだけで不安なことだ。その不安を、共感するのは難しい。どちらともが、どうにもならないことを抱えている。

妖怪も人も蟲も、似たような関係性を持つている。寄り添えば起きる摩擦のように、ただそこにある。人の身にはどうすることもできない。個々が抱える時間は本質的に孤独であり、鼓動だけがその真実を語る。寿命を刻み、いつか止まるその時を待っている。人が大樹の声を聞き取れないのは、大樹からは人が見えていないからなのかと、ギンコは思った。

「私は仕事ができます。そして忙しい。それこそ、時間を止めなければやっていられないほどに。どうにもならないことに拘かかざらっている暇はありません」

あるいは暇がない分、感傷に浸る時間も惜しんでいるのかも、と咲夜は苦笑した。ギンコは咲夜が思考停止するために忙殺ぼうざつされることを望んでいるのかと想像し、病み上がりの体で仕事に打ち込んでいる事実とを合わせて、さもありませんと言葉を濁した。だが言葉の裏にある、やれることをやるしかないということは、ギンコにもよく理解できた。

「自分の時間を縮めて縮めて、お前さんは人より速く生きているわけだ」

「そういうことになりますね」

「なら、人より速く老けていくんじゃないのか？」

「かもしれない……あんまり嬉しくありませんけどね」

ギンコの指摘に、咲夜はため息をついた。生き急ぐなとは言うまいが。

「病み上がりくらい、じつとしてろよな」

「そこに話に戻るんですか？ いいんですよ。ずっと寝ている方が体に悪いです。……まあ、その分ギンコさんにこうしてご迷惑をおかけしているのは事実ですが」

「……負い目を感じても譲れないことってのはあるんだろう。わかっ

てるよ」

「助かります」

「気にすんな。元はあの嬢ちゃんについていけと言われたことがきっかけだしな。……そういやあの嬢ちゃんは何歳なんだ。吸血鬼ってのは当然、見た目通りの歳じゃねえんだろう」

「私の主人は遙か長い時を生きています。すでに五〇〇年」

「あの嬢ちゃんそんな歳なのか」

「ええ。ちなみに妹様は四九五年です」

「混乱しそうになるな。見た目でどうこう、常識を語るような癖はないつもりだったが」

「彼女らの生きる時間の尺度からすれば、数百年の成長すらまだ幼さを残す段階なのかもしれないね」

「そりやなんとも、ぼんやりとした話だ」

ふと屋根を叩く雨音が弱まったように感じた。雲間から光芒こうぼうが落ち、空を見上げずとも太陽が顔をのぞかせているのがわかる。雨はもうすぐ上がりそうだ。

「……なるほど、だからお前さんは時計を見るのか」

「え？」

人には人の、妖怪には妖怪の生きる時間がある。生きるモノの動きに合わせて、時間は伸び縮みする。だというのなら、一定の間隔で時を刻む機械は何のために存在するのだろう。そんな単純な疑問が頭に思い浮かび、すぐに氷解した。

ギンコが巡る季節に従い、間隔の変化する昼夜に沿って行動すると同じように、咲夜もそうしている。ただし咲夜が従うのは、手のひらに収まる機械である。可視化され、客観的に見つめられる時間がそこにある。

「時計を見て、自分の時間を確認してるんだ」

「どういう意味です？」

「伸び縮みしない時間を物差しにしているのさ。その時計に従っている間は、従っているもの全てが同じ時間で生きることになる。伸び縮みする自分の時間が矯正されるんだ」

「ああそういう。確かに、それはそうですね」

「そう思えば便利なもんだ。人がもつともつと増えると、そいつが必要な奴らが増えるんだろうな。……だから小さく、手持ちがしやすいようになってるのか？」

「面白いですね。時計は生き物の寿命を均す道具、というわけですか」
「……いや、そうじゃない」

体内時間の密度が寿命の長さと同関しているというのなら、まさに咲夜の持つ時計は寿命を均す機械仕掛けの神器であろう。だが実際には寿命は伸びぬし、縮まらない。時計はただそこにあつて、時を刻むのみだ。大層なことをするわけではない。

「刹那の話をしたな。感じ取れぬほど小さな時間が連なって、大きな時間が流れていると。その動きは、時計の中でよく見てとれたな」

「はい」

「そして長い時間を生きる命からは、刹那に生きる命は見えないとも話したな」

「ええ」

それらを踏まえた上で、とギンコは続けた。

「俺が知っている話で、蟲の時間を生きた少女の話がある。一日で生と死を繰り返して体験したその娘が語るには、蟲の時間で見た世界は何もかもが新鮮で彩りに溢れ、宵の訪れと共に眠りにつく時、とても満たされた気分でいられたという。代わりに人の時間を思い出した時、目の前に広がるあてどない膨大な時間に足がすくむとも」

「……大きいことは、それだけで不安を煽ると言うことですか？」

「目を逸らしたくなる人間がいるというのは確かだ。俺はその少女を蟲患いから治したが、結局元通り、娘は蟲の時間で生きることを選んじまったからな」

「それはなんとも……不条理なことですね」

「ああ。だが否定もできん。共感できることだけがこの世の全てじゃない。だからその時計が役に立つ」

「話が飛躍しましたね。どうしてそうなるんです？」

「その機械は鼓動に縛られず、永い時を刻むものだろう。体内時間の

密度の違いで、伸びたり縮んだりもしない。泰然たいぜんじやく自若に繰り返し、膨大な時間を内包するものだ。一方で刹那のような短い時間も内包している。極めて細い針がそれだな。そしてそれらが一目でよく見えるようになっていいる」

「ええ。それが？」

「わからんか？ どちらも見えるということは、どっちを見てもいいということだ。刹那も、数百年も、どちらもだ」

「あ……」

「伸びたり縮んだり、密度が変わったりと忙しない時間に振り回されそうになった時、時計を見る。そうするとそこには刹那と無限が同時に見て取れる。自分が見つめるべき時間がわかる。お前さん、さっき時計を確認した時、雨がいつ止むのか気になっていたんじゃないのか？」

ギンコに言われて咲夜もハツとする。なんとなく手持ち無沙汰で目を落とした懐中時計。今は何時だろうかという問いには、あとどれくらいの時間があるのだろうか、あとどれくらいの時間こうしてればいいのだろうかという期限を想像する気持ちが明らかに付随している。

目の前に広がる、あてどない時間に足がすくむ。自分が見つめるべき時間がわからなくなつて不安になる。そういう時に、人は時計を見るのかもしれない。自分は自分の時間を生きるしかないと豪語したあとで、なんとなくそれは認めづらいことではあったが、咲夜はギンコの言葉に頷いた。

「そう、かもしれません」

「人が刹那を思い、見つめる。膨大な時間を目にした時、消え入りそうな自分を確かめる。いい導しるべだな、それは」

「でも、そうなら時計を持つ人たちはどこか弱々しく思われませんか？ なんだかそれは、納得できないんですけれど」

咲夜はそれが精一杯の抵抗であるように少し剥むくれた。確かにこれでは幻想郷でも珍しく時間を気にして時計を持ち歩いている咲夜の立場がない。しかしそんなことで自分に抗議されてもなと、ギンコは

一瞬考える。

「……必要ないんだろうさ」

「ですからそれですと……」

「他の奴らのそばには、人がいる。自分とほとんど変わらない時間を生きている人がな。それが時計の代わりなんだろう。共感があれば、物差しは必要ないからな」

「む」

ギンコがあながち的外れでもなさそうな詭弁きべんを付け足すと、咲夜は静かになった。無論人が人をそばに置くという行為が、時計を持つ行為と同義であるわけではないが、妖怪たちに囲まれて人として生きる咲夜にとってはよく納得できる言葉だった。

「そもそも、弱々しいということもないだろう。俺が知る普通の人間に、お前さんの在り方が易々と真似できるとは思えん。それに見た目やら持ち物やらで相手を侮ることができるなら、俺はお前さんの主人に食い殺されてるだろうよ」

「お気遣いどうもありがとうございます。ギンコさんはできそうですけどね。私の真似」

「スリか？ 無理無理」

「もう、そうじゃなくて！」

「お。雨止んだな」

雲が通り過ぎたのか、軒と空の境界に晴れ間がのぞいている。しつとりと水気を帯びた空気と青草の香りだけを残して、雨はどこかへ過ぎ去った。わざとらしく会話を切り上げて、ギンコは腰を浮かす。荷物もひよいと持ち上げて、肩がけに背負った。

草についた露つゆで靴を濡らしながら農道へと出ると、生ぬるい風が肌を舐めていく。匂い立つ土と草の香りに、鼻を鳴らした。

ぞりぞりと靴底で土を るように進めば、少し遅れて咲夜が隣にやってくる。

「雨が上がった途端に歩き始めましたね」

「そりゃ雨で足止めくってたんだから、止んだら歩くだろう」

「いえ、それだけでもなく。……さっきの話の続きですけど、ギンコさ

んにとつての時計はなんなのかと思ひまして」

「ん？」

「ギンコさんは一人で旅をしている。蟲なんていうモノに寄り添つて、生きている。でも時計は持たない。ならあなたはどうかやって自分の時間を確認しているのでしょうかと」

「あーそりや確かに。だが、お天道様が基準な気はするな」

「でも夜だつて動き回るでしょう？ 貴方からは、なんだか夜の雰囲気も感じます。蟲とやらも、日向より日陰を好むのではないですか？」

咲夜の言うことももつともだった。ギンコは蟲に寄り添つて生きている。彼らを身近なものとして生きている。長大な時間の中で生きるモノ、時に儂く刹那に消えゆくモノ。どちらもが蟲の姿に相違ない。

貴方の時間はどこにあるのですか、と問われればギンコはどこにあるのだろう、と考へてしまった。咲夜がそうであると割り切つたほどに、ギンコは特に明確な答へを持つてゐるわけではなかつた。

蟲師のギンコ。名前ばかりに存在の核を見出す自分は、どこに向かつて歩いているのだろう。

ギンコが黙つたのを見て、咲夜も時間を止めた。

「ん？」

ギンコの手首に冷たい感触があつた。右手を持ち上げると、銀色の懐中時計の鎖が手首に巻き付いている。そのまま視線を右隣に移すと、途中で一步先に咲夜が歩み出て、ギンコはその後ろ姿を目で追つた。

「おいなんだこれ」

「差し上げます」

「あ？ なんでだ」

「思えばちゃんとしたお礼はしていませんでしたし、そういうことで」「いや、別に必要な……」

「いいんです。もう一つありますし。それにギンコさんは隙だらけなんですから、たまにはそれを見て、ご自分が生きるべき時間を確認さ

れるとよろしいかと」

断る言葉に被せるようにして、咲夜は時計ごと、それをギンコに押し付けた。人には人の、妖怪には妖怪の、蟲には蟲の、生きる時間がある。それを忘れた時に、不幸が起きる。それをよくよく理解しつつも、放っておけば闇に消え入りそうな生き様を晒すギンコの手首に、鎖付きの導を預けて咲夜は先を歩いていった。

「なあ」

「なんですか」

「いや……もらうのは構わんが、俺はこの時計の読み方を知らんのだが」

「……ほんと、隙だらけですね」

知らんことには仕方ないだろう、とギンコは独りごちる。語り出せば滔々とうとうと響く低い声色も、今は間伸びして頼りなく聞こえた。

足を止めた咲夜に追いつき、ギンコが時計の読み方を教わる。咲夜が常識としている定時法とギンコが思っている不定時法の時間については大きな齟齬そごがあるのだが、今はまだ、二人ともその事実を知らずにいる。

雨は上がったというのに、紅魔館までの道のりはまだ縮まらない。立ち止まってあれやこれやと交わした言葉の点が、会話という線になつて後ろに流れていく。歩きながらもできる会話だろうにと二人が気がつくまで、もう少しの時間がかかりそうだった。